

放送大学審査学位論文（博士）

ポストコロニアル的視座より見た遠藤周作文学の研究…村松剛・辻邦生との  
比較において明らかにされた、異文化受容と対決の諸相

放送大学大学院文化科学研究科文化科学専攻  
博士後期課程人文学プログラム  
二〇一四年度入学

神谷光信

二〇一七年九月 授与

## 目次

### 緒論

第一章 問題の所在	7
-----------	---

第一節 遠藤周作が生きた時代——現代史の視点から	
第二節 脱植民地化と冷戦——「有色の帝国」から「下請けの帝国」へ	
第三節 研究の目的	

第二章 先行研究の検証	12
-------------	----

第一節 日本における研究	
第二節 アメリカ合衆国、英国、フランス共和国における研究	
第三節 大韓民国、台湾、中華人民共和国における研究	
第四節 パースペクティブ転換の必要性	

第三章 研究の方法と構成	25
--------------	----

第一節 学際的研究	
第二節 村松剛・辻邦生との比較	
第三節 研究の構成	

### 本論

第一章 背景と前史 日本人のフランス留学——戦争・性差・人種・階級	37
-----------------------------------	----

第一節 第二次世界大戦下のフランス留学 ——片岡美智・加藤美雄・湯浅年子を中心に	
第二節 第二次世界大戦後のフランス留学——須賀敦子を中心に	
第三節 遠藤周作と辻邦生のフランス留学	

第二章 文学観——「真実」の開示空間としての小説	74
--------------------------	----

第一節 遠藤周作の小説認識	
第二節 辻邦生の小説理論	

第三章	アフリカ——黒人の表象	85
第一節	「アフリカの體臭」「アデンまで」——近代西洋植民地支配への反撥	
第二節	《ポーラン・シリーズ》——黒人表象の変容	
第三節	『黒ん坊』——もう一つの黒人表象	
第四章	ヨーロッパ——白人の表象	112
第一節	「月光のドミナ」——日本人男性と白人女性（1）	
第二節	「ジプシーの呪」——日本人男性と白人女性（2）	
第三節	「変な外人たち」——白人表象の変容	
第四節	「ワルシヤワの日本人」「カプリンスキー氏」 ——見つめ返される日本人	
第五章	アジア——中国人・日本人・インド人の表象	136
第一節	「夏の光」——満州における中国人	
第二節	「地なり」——関東大震災の日本人	
第三節	『深い河』——表象のインディラ・ガンディー	
第六章	大日本帝国と「大東亜戦争」の記憶	151
第一節	『一、二、三！』——国家・戦争・皇族	
第二節	『どっこいショ』——戦時中の徴兵忌避と一九六〇年代の自衛隊	
第三節	遠藤周作「鉛色の空」と辻邦生「影」	
第七章	大日本帝国海軍と『蝶々夫人』の幻影	169
第一節	遠藤正介と古山高麗雄——遠藤における「兄なるもの」	
第二節	樹座版『蝶々夫人』の政治的イロニー	
第三節	村松剛の戦後日本認識——「保護領国家」論	
第八章	ポストコロニアル時代の植民地主義	191
第一節	『死海のほとり』（1）——シオニズム国家とパレスチナ	
第二節	村松剛のシオニズム史観	
第三節	『砂の城』——島原の乱とパレスチナ解放闘争	
第四節	『侍』——占領者への同化と抵抗	

第九章 キリスト教的階層秩序と近代西洋植民地主義

——神・天使・人間・動物 …………… 226

第一節 遠藤周作と満州犬クロ——純血、忠誠、勇敢への反発

第二節 「男と猿と」——動揺する西洋的階層秩序

第三節 『彼の生きかた』——非キリスト教的動物観の提示

第四節 『死海のほとり』(2)——新約聖書学の衝撃から独自のイエス像へ

第十章 「帝国医療」との関わり …………… 252

第一節 「ジュールダン病院」「雑木林の病棟」——伝染病・人体実験・西洋医学

第二節 「心あたたかな医療」キャンペーン

——植民地主義・近代西洋医学・キリスト教宣教

第三節 非白人化された「神」と神格化された「白人」

——「同伴者イエス」と表象のシュヴァイツァー

結論

遠藤周作と近代西洋植民地主義

——人種主義と「他者」の文学的想像 …………… 276

参考文献

初出一覧

謝辞

## 凡例

- 一、遠藤周作のテキストからの引用は、原則として新版『遠藤周作文学全集』全一五卷（新潮社、一九九一―二〇〇〇年）に拠ったが、新版全集未収録のテキストについては、旧版『遠藤周作文学全集』全一卷（新潮社、一九七五年）、単行本、文庫本、初出誌に拠った場合がある。新版『遠藤周作文学全集』はSEZ、旧版『遠藤周作文学全集』はKEZと略記した。
- 一、引用に際して、歴史的仮名遣いはそのままとし、漢字は現在通行の字体に概ね改めた。
- 一、引用に際して、外国語の元の発音を示す片仮名のルビを、（ ）に入れて該当語の下に示した箇所がある。また、漢詩文の引用に際しては、訓点を略した箇所がある。
- 一、引用文中の途中省略は「……」で、また引用者による補足は「」で記した。
- 一、邦語文献については、著作、雑誌は『』で、作品、論文などは「」で囲んだ。
- 一、諸外国の人名、地名については、概ね人文系書物の表記慣習に従った。
- 一、歴史的な人名にのみ、必要に応じて初出時に生没年を（ ）で記した。年齢は満年齢で記した。
- 一、年号は全て西暦を用い、本文の理解にとって有用と思われる場合には（ ）で和暦を併記した。
- 一、註は全て各節ごとの後註とした。
- 一、今日の人権感覚に照らして不適当な語句（『黒ん坊』『ニグロ』『土人』等）については、引用箇所を除き「」で囲んだ。

緒

論

# 第一章 問題の所在

## 第一節 遠藤周作が生きた時代——現代史の視点から

本研究は、これまで主にキリスト教作家という独自性に焦点を当てて研究されてきた遠藤周作を、ポストコロナアル的視座から再文脈化し、再解釈しようとするものである。

偉大な作家は、複数の主題群を自身の文学世界に抱え込む結果、ある種の迷宮性を備えている。文学の深淵がそこには潜んでいるのであり、ある視点から捉えた作家像を以て、それを唯一の肖像として提示することはできない。キリスト教作家遠藤周作もまた例外ではない。本研究は、これまで本格的には行われてこなかったポストコロナアルのパスpekテイヴに遠藤を置き直すことで、これまで明確には見えていなかった遠藤文学のいくつかの側面を、多角的に明らかにしようとする。換言すれば、それは、キリスト教的視点という、遠藤研究の暗黙の前提そのものを問い直し、慣れ親しんだ思考の枠組みから意識的に距離をとり、遠藤の文学世界に新しい照明を投げかけるということである。

もつとも、ポストコロナリズムは一つの体系的な方法論ではない。研究者によって、その手法も対象も多様である。本研究の場合、それは例えば次のような具体的方法と結びつくことになる。遠藤はこれまで、一神教の西洋対多神教の日本という二項対立の構図内で研究されてきたが、そこで死角となっていたのは、第二次世界大戦終結まで西洋の植民地であったアフリカ・中東・アジア諸地域である。本研究では、それらを視野に入れて、知的な三角測量を行うのである。

以上を要約すると、本研究の独自性は、大きなパスpekテイヴに無自覚なまま細部に注目する実証的研究ではなく、新しいパスpekテイヴに作家を置くことで、遠藤研究の新方向を見出そうとする開拓的研究ということになる。

いかなる芸術家も、自らが生きた時代から超越することはできない。そして時代の渦中にある者は、その時代を客観的に把握することができない。芸術家が生み出した作品を全て作者に還元することは、今日では留保を必要とする研究態度ではあるが、テクストを作者と切り離し、時代からも切り離す立場を私は採らない。ある時代のなかに作者が生きたのであり、作品を製作したのは作者にはかならないからである。トーマス・マンがいうように、作品というものは、作者が捨えるというよりは、それ自身が完成しようとするというのは真理であろう。だが、そこに作者であるトーマス・マンその人が、自身では自覚できぬ無意識的領域も含めて介在していることは、動かしがたい事実なのである。

また、芸術作品は——ここでは小説をさすわけであるが——それを鑑賞する受け手、つまり読者がいて初めて成立する。作品は、作者の同時代人にのみ読まれるとは限らない。後の時代の読者によって、すなわち異なる時代のコンテクストにおいて読まれる場合がある。その際、作者が思ってもみなかった読まれ方をすることもある。作者自身が気付かなかった作品の意味を、読者が発見することもあるだろう。研究もまた同じである。遠藤が生きた二〇世紀が終わり、すでに一六年が過ぎ去った。時代は大きく変わった。時代の渦中においては見えなかつた遠藤文学の側面が、ようやく見えてく

る時代になったといつてよいのではないか。新しいまなざしで遠藤を読み直し、語り直すことが必要なのではないか。このような問題意識から、この論文は書かれている。

遠藤が生きたのは、いかなる時代であったのか。一九二三年（大正一二年）に生まれ、一九九六年（平成八年）に死んだ遠藤の人生は、二〇世紀という時代にすっぽりと収まっている。すでに半世紀以上昔の一九六四年に、ジェフリー・バラグラフは『現代史序説』（中村英勝・中村妙子訳、岩波書店、一九七一年）を著し、二〇世紀の素描を行った。日本語版序文において、バラグラフは二〇世紀の特質として、ヨーロッパ列強の世界支配が、二度の世界大戦を経て、ソヴィエト連邦とアメリカ合衆国という二つの超大国に移り、世界の焦点がヨーロッパからアジア・アフリカへと変化したとの認識を示し、これを説明するためにこの本を著したと述べている。そして執筆後の重要な発展として、アジア・アフリカの反植民地主義運動の拡大と、それが国内に限定されない人種戦争にそれが結びついたことを挙げている。

二〇世紀の人類が直面した最も大きな問題として、彼は「貧困・後進性・過剰人口」を挙げているが、アジア・アフリカの解放が、低開発世界の現実の前に次々に敗れた現実も併せて指摘している。「今日大きく浮かびあがっているのは、全世界的規模の国際的階級闘争であって、それは階級闘争であるとともに一種の人種闘争でもある」と彼は述べる。このようにバラグラフが記すのは、アジア・アフリカ解放の思想的支柱となったのが共産主義理論だったからである。

『現代史序説』は今日では古典的な著作となっているが、わざわざこの書物を取り上げたのは、この書物が、初版刊行後三年目にペリカン文庫に入り、日本でも読まれたその時代が、まさに遠藤が活動していた時代であったからにほかならない。アジア・アフリカの反植民地運動について、バラグラフは一章を割いて詳述しているが、その根底にあるのは、二〇世紀の問題が、人種問題、すなわち白人と有色人種との権力関係の問題であるとの認識である。ヨーロッパがアジア・アフリカに与えた衝撃とそれへの叛逆とは表裏一体である。バラグラフは英国人だが、訳者があとがきで記すように、彼の「世界史観は完全に地球規模な立場に立っている」。

バラグラフはポストコロニアルという言葉を用いていないが、彼の時代認識を今日の言葉に置き換えれば、この言葉になるだろう。バラグラフが『現代史序説』を著した二五年後の一九八九年、ベルリンの壁は崩壊し、昭和は終わり、その二年後にソヴィエト連邦が崩壊して冷戦は終わった。バラグラフの慧眼は、二〇世紀という時代の本質を鋭く見抜いていたと言えるが、それから半世紀を過ぎた時点に立つわれわれは、バラグラフが生きた時代からも遠く隔たった地点に立っている。バラグラフは渦中にありながら同時代を洞察していたのだが、二一世紀の一〇年代の現時点から、改めて二〇世紀を振り返ることで見えてくることは何か。そしてほかならぬ日本の二〇世紀とはどのような時代だったのであろうか（1）。

ヴィジヤイ・プラシャドの『褐色の世界史——第三世界とは何か』（粟飯原文子訳、水声社、二〇一三年）は、脱植民地化の時代の一大プロジェクトとしての第三世界論である。タミム・アンサーリの『イスラームから見た「世界史」』（小沢千重子訳、紀伊國屋書店、二〇一一年）は、一般書であるが、イスラム世界から記述した世界史の試みである。ポストコロニアル時代の歴史認識は一通りではなく、複数のまなざしと複数の真実が絡まり合っている。

（1）バラグラフは第七章「イデオロギーにもとづく挑戦——共産主義理論の衝撃とソヴェト連邦の実例」で共産主義理論とソ連について詳細な検討を加えているが、その全体主義的性格と組織的犯罪行為に関する言及の欠如は遺憾ともしがたい。現実の共産主義国家体制を持った暗黒面については、ソ連崩壊後の公開史料に基づいて書かれたステファヌ・クロトワ他『共産主義黒書（ソ連篇）』（外川継男訳、ちくま学芸文庫、二〇一六年）、『共産主義黒書（アジア篇）』（高橋武智訳、ちくま学芸文庫、二〇一六年）参照。



## 第二節 脱植民地化と冷戦

### ——「有色の帝国」から「下請けの帝国」へ——

二〇世紀の日本を概観すると、一九〇四年（明治三十七年）に日露戦争、一九一四年（大正三年）に第一次世界大戦、一九三七年（昭和十二年）に日中戦争、一九四一年（昭和十六年）に太平洋戦争が起る。一九四五年（昭和二十年）に敗北し、聯合軍占領下の時代が七年間続いた。一九五一年（昭和二十六年）にサンフランシスコ平和条約が調印され、翌年に日本は主権を回復する。一九五六年（昭和三十一年）、日本は国際連合に加盟して国際社会へ復帰する。その後は高度経済成長が続き、一九七〇年代に二度のオイル・ショックを経て高度経済成長は頭打ちとはなるものの、平成に改元（一九八九年）されてからも経済大国としての地位を保ち続けた。そして一九九二年（平成四年）にバブル経済が崩壊して不況が起きる。

これはしかし、日本という視点から眺めた世界であつて、世界史年表を重ね合わせて「全地球規模」で眺めれば、日本史年表だけを眺めていては見えてこない同時代の特質が自ずと見えてくる。特に第二次世界大戦後、インドシナ戦争、アルジェリア戦争といったフランス旧植民地の独立戦争が起きているし、ヴェトナム戦争は日本人にも身近であつた。これらは西洋植民地主義への抵抗独立運動だったわけだが、アフリカではアンゴラやモザンビークといった旧ポルトガル植民地の解放闘争が、一九七五年まで続いていた。中東の目を向ければ、イスラエルの成立と数次にわたる中東戦争があつた。そしてイスラエル／パレスチナ問題の本質もまた、ポストコロニアルの時代におけるコロニアリズムであるとの板垣雄三の主張も、本論で詳述するところではあるが、ここで指摘しておきたい。

帝国主義時代の西洋列強をモデルとした大日本帝国が、立憲君主制に基づく植民地帝国であつたことは周知の歴史的事実だが、小熊英二は帝国日本が日本人<sup>II</sup>有色人種の国家であつたことから、これを「有色の帝国」（1）と概念規定している。日本がアジアのなかの一国であるにもかかわらず、「日本とアジア」というように、自らをアジアから除外して思考する傾向があるのは、日本が西洋に属すると無意識のうちに考えているからに他ならない。しかしそこには白人世界に対する屈折した感情が潜んでいた。アメリカ合衆国が、かつての宗主国英国（ヨーロッパ）に対して自らの非ヨーロッパ性を主張しつつも、非西洋に対しては自らを西洋の一員とする「両価的な自己同定」（2）と似た構図がここにはあるが、アメリカ合衆国は、自らも、またヨーロッパをも、白人世界として認識している点が、日本とは異なる点である。

第二次世界大戦の後、世界は脱植民地化<sup>II</sup>ポストコロニアルの時代に移行する。これは英国やフランスだけの問題ではなく、日本の問題でもあつた。日本は敗戦により、満州、台湾、朝鮮、インドシナなどの植民地を全て喪失したからである。植民地の宗主国であつた地位から、日本人は占領者<sup>II</sup>アメリカ合衆国の「植民地」へと、正反対の地位に転落した。すなわち、日本がアメリカ合衆国の「満州」になつたのである（3）。その後、冷戦が始まると、アメリカ反共産主義政策のアジアにおける前衛として安全保障政策に組み込まれ、酒井直樹の言葉を借りると、パックス・アメリカーナ（アメリカ合衆国による平和）という世界支配のための「下請けの帝国」となるのである（4）。アジアにおける宗主国の地位を剥奪されたにもかかわらず、アジアの優等生として、先進国の一員として、日本人が東南アジアの人々に対して帝国意識（コロニアル・メンタリティー）を持ち続けたことは注目すべき事実である。宗主国と植民地との非対称的な関係をわかりやすく説明するために、酒井はそれぞれが相手に対して抱く関心の多寡を挙げている。つまり、宗主国は植民地にほとんど関心を払わないが、植民地側は、宗主国に対して強い関心を抱くというのである。日米両国民の相手国への興味の

持ち方は、日韓のそれと同様、非対称であると酒井は指摘する。

もつとも、アメリカ合衆国と日本は、形式的には独立した主権国家なので、両者の準植民地関係は見えにくくなっている。とはいえ、日本国内にはアメリカ軍基地が歴然として存在することが如実に示すように、日本の従属的立場はこれを否定することが困難である。つまり、東南アジア植民地の宗主国たる「有色の帝国」から、アメリカ合衆国の植民地たる「下請けの帝国」への移行が、第二次世界大戦を境目として、二〇世紀後半の日本が置かれた国際政治上の地位であったというのが、ポストコロニアリズムの視座から遠藤周作を再検討する際の基本認識になる(6)。戦前の日本と満州(台湾・朝鮮)との関係、及び戦後のアメリカ合衆国と日本との関係という構図は、本研究における基本的な補助線として確認しておく必要がある。遠藤、村松、辻という三人の文学者が、これらの国際政治における植民地的権力関係を、どの程度明確に認識していたかを探求することが重要である。

鵜飼哲は、ヨーロッパにおけるユダヤとアラブに相当するものが、日本における朝鮮と中国ではないかと述べている(5)。ヨーロッパの文化的起源には、ギリシャ、ローマ、ユダヤ、そしてアラブがあり、前二者はすでに消滅しているもので、自らがその相続者であると名乗ることができるものの、後の二者は現在でも存在しているので、文化的に抹殺したい対象である。それと同様に、近代日本における朝鮮と中国もまた、自らの文化的起源であるがゆえに、文化的に抹殺したいという衝動が隠されているというのである。鵜飼は敢えて図式化して述べているのだが、この図式は、本研究で遠藤文学を考察していく上で、多くの示唆を与えるものと私は考えている。

(1) 小熊英二『日本人の境界——沖繩・アイヌ・台湾・朝鮮 植民地支配から復帰運動まで』新曜社、一九九八年、六六一—六六七頁。

(2) 酒井直樹『死産する日本語・日本人——「日本」の歴史—地政的配置』新曜社、一九九六年、V頁。

(3) 酒井直樹「レイシズム・スタディーズへの視座」鵜飼哲他『レイシズム・スタディーズ序説』以文社、二〇一二年、五二頁。

(4) 酒井直樹「ポスト・コロニアルな条件と日本研究の将来——「失われた二十年」と帝国の喪失——」『日本研究』五三号、国際日本文化研究センター、二〇一六年、一六頁。

(5) 鵜飼哲「共和主義とレイシズム」前掲『レイシズム・スタディーズ序説』一五五頁。

(6) パックス・アメリカーナが、二一世紀の今日では終焉を迎えつつあるという認識を私が持っていないわけではない。

### 第三節 研究の目的

「有色の帝国」の時代に東京で生まれた遠藤周作は、植民地大連で少年期を過ごした。キリスト教信徒として戦時中に迫害された彼は、一九五〇年、インドシナ戦争中の植民地共和国フランスへ留学する。帰国後は、アメリカ合衆国の「下請けの帝国」となった日本でカトリック作家として活動し、一九六〇年代以降は国際的な著者として英仏など海外でも読者を獲得した。

人間は裏切りを行う弱さとそれに打ち克つ強さも持っていると考えていた彼は、地上の不正義、不公正、人権抑圧などに鋭いまなざしを向けている。信仰者として、「神」の問題が遠藤の文学的テーマの中核にあったことは確かだが、彼が注目した諸問題は、特定の信仰とは関係なく、地上の誰にとっても重要な普遍性を持っている。ポストコロニアルという歴史的状况において、アジア・アフリカの解放闘争や、植民地主義に伴う人種主義、性主義、民族主義等による差別は、彼のなかでどのような認識されていたのだろうか。これらを、具体的な作品の分析と、村松剛、辻邦生という同時代の文学者との比較を通して明らかにすることが、この論文の究極の問いである。それは、遠藤の倫理的感性を探ることであり、政治的次元での倫理に関する文学者としての思索を解明することである。

私の見るところでは、アジアを征服し支配する抑圧者であるとともに、西洋からの被抑圧者でもあるという近代日本人の両義的なアイデンティティを描き出すことで、骨がらみになっているコロニアル・メンタリティーからの解放を果たそうとした文学者のように見える。彼はおそらく、単にキリスト教作家ということだけで重要な国際的著者なのではない。

遠藤が多くの作品でモチーフとしたさまざまな差別や抑圧は、そのまま世界各地で現在進行形である。歴史は重層的であり、おそらく単線的に「進歩」するものではない。現在のなかに過去が包み込まれているのである。本研究は狭義の日本文学研究ではなく、広義の文化史研究だが、差別なき世界を建設するために過去を検証するという問題意識に支えられている。文学テクストは、常に価値中立的な領域にあるわけではなく、むしろ歴史的現実と密着した政治的戦場となることがある。冷戦が終結して以後、唯一の超大国アメリカ合衆国による一極支配とグローバル化が進行してきた今日、冷戦期における日本文学のテクストに現れた政治性を確認することは、意義あることといわねばならない。

とはいえ、過去の真実を直視することは、必ずしも容易なことではない。だが、ほかならぬ遠藤自身は、それを実践した作家であった。小説という文学形式は、虚構世界において、特定の状況における人格的な主体の実践行為を描き出す。そこが評論と大きく異なることである。暴力、裏切り、怒り。共感、慰め、祝福。熟考、決断、断念。それらはことごとく、批評の対象ではなく、実践の問題である。批評家として出発した遠藤が、フランス留学を経て小説家として再出発したとき、その転換への決意は、そのまま政治的次元での実践的な倫理と直結するものであったように思われる。

もともと、早くから国際的な著者として自己認識していた彼には、韜晦の癖があり、直接的な政治的発言を行うことはなかった。詳細は本論で考察するが、例えば、現代の植民国家イスラエルが置かれた国際政治的状况については、あたかも全く関心がないかのよう「変装」している。しかし、『死海のほとり』や『砂の城』を詳細に分析すれば、パレスチナ問題に関して、遠藤がどのような捉え方をしていたのかを明らかにすることができるのである。

遠藤の重要な国際的貢献として、独自の「同伴者」イエスを描き出したことは衆目の一致するところである。このイエス像については、宗教的視点から数多くの論文が書かれている。しかし、遠藤自身は一体誰の同伴者だったのだろうか。彼のテクストの政治性を解読することによってこそ、われわれはそれを理解することができるのである。

## 第二章 先行研究の検証

### 第一節 日本における研究

遠藤周作は、現在でも読者に恵まれた小説家である。二〇一七年一月には、新刊書籍が出版され(1)、文庫本化された多くの作品は書店で入手可能である(2)。これは日本国内に限られた状況ではない。遠藤は多くの外国語に翻訳された国際的な著者であるが、英語圏に限定しても、絶版とはならず、近年では電子書籍としても販売されている。

日本における学術的研究の蓄積も厚く、二〇〇六年には遠藤周作学会が発足した。年一回発行の機関誌『遠藤周作研究』(3)には、参考文献目録と研究展望が掲載されるなど、日本近代文学研究上、重要な作家として揺るぎない地位を確立しているといつてよい。日本キリスト教文学会の機関誌『キリスト教文学研究』にも、遠藤に関する論文は毎年のように掲載されており、博士論文も、二〇一七年五月現在で、一二篇を数えることができる(4)。批評家として出発した遠藤が、フランス留学後に作家として再出発した一九五〇年代半ばから、同時代の批評家による評論がさかんに行われた。単行本として刊行された作家論も、はじめは文芸評論家によるものが多かったのである。彼らの多くは遠藤と面識があり、人間的距離が近かった。カトリックよりはプロテスタントが多かったが、キリスト教の信仰を持つ者も少なくなかった(5)。大学で教鞭をとっていた評論家たちも多かった。やがて学術的な研究論文が書かれるようになり、今日に至っている。

遠藤には非キリスト教国である日本に登場したキリスト教作家という独自性があり、問題意識もまた他の作家と違っていたところから、戦後の日本文学において異彩を放っていた。また、シリアスな「純文学」のみならず、戯文めいた軽妙なエッセイや娯楽的な小説を大量に書いたこともあって、大衆的な人気を博した作家でもあったため、日本文学研究の世界でも、一定の存在感を常に持ち続けていたといつてよい。

先行研究の量は膨大であるが、三つの点をここでは指摘したい。

一つは、西洋と日本、一神教と多神教といった、二項対立的な図式で遠藤を論じることが、これまでの研究の「基本形」となっていることである。これはある意味で当然なことではあるが、現在では、こうした分析枠組それ自体を再検討する必要がある。もちろん、こうした問題意識は近年の博士論文では著者の共通認識となっている。そのため、朴賢玉は遠藤の作品が日本社会にどのように受容されてきたかという新視点から研究に取り組み、菅原とよ子は、遠藤のテクストの引用典拠となった新約聖書学者の諸文献を確定するという実証研究に進んだ。李英和はジェンダー理論から遠藤文学にアプローチし、ナラシマン・ランジャナは、ヒンズー教の教理から『深い河』を読み解くことを試みるなど、各人各様に、従来の研究枠組を打破しようとしている。

二点目は、論じられる作品が特定のものに集中していることである。『海と毒菓』(一九五七年)『沈黙』(一九六六年)『侍』(一九七七年)『深い河』(一九九三年)といった、『遠藤周作文学全集』(新潮社、一九九九―二〇〇〇年)に収録された純文学系列の代表作については、数多くの論文が書かれ

ている。それに対して、全集から排除され、まったく学術的観点から取り上げられることがない作品も、中間小説を中心として数多く存在しているのである。要するに、遠藤文学研究の世界的拠点である日本での研究は、中間小説のほとんどを排除しているという意味で、きわめて「貴族的」である。そしてこれは、第一の問題点とも深く関わっていると考えられる。研究の視点を転換することで、これまで省みられなかった作品の価値が見えてくるはずである。カトリック作家としてのみ長年遠藤を見てきたわれわれは、その見方から離れて別の見方をするには意識的な努力が必要である。目下のところ、この問題意識から、遠藤のおびただしい中間小説に着目している研究者は、小嶋洋輔である(6)。

三点目は、海外の研究がほとんど参照されていないことである。遠藤は国際的な著者なので、英語圏に限っても論評が行われている。しかるに、日本で書かれる論文は、こうした海外の論に言及することがほとんどない。先行する博士論文を見ても、参考文献は、日本語論文ばかりである。要するにこれは、「われわれ日本人」が想定された読者<sup>11</sup>研究者であることを証しているのである。次節で詳述するが、英語圏における博士論文の学術的水準はきわめて高い。

初期の文芸評論家による批評は、当然のことながら、「われわれ日本人」読者に向けて書かれたものであった。それゆえ、緻密な議論を丁寧に行う努力が払われない場合もなくはなかった。日本人同士であれば、外国人になれば説明しなければならぬ事柄も省略することができるからである。学術論文となれば、批評が持つ即興性や飛躍した議論は避けなければならないが、それでも、外国人研究者を読者として想定していなかったとすれば、知的緊張度は低下するのではないだろうか。また、そうした研究は、わざわざ説明しなくとも、全てに暗黙の共通理解を持つ国民的共同体のなかに閉じてしまうのではないだろうか。

もつとも、遠藤文学研究を国際的なものとして行っていくと努力は行われている。国際的なシンポジウムが開催され、その記録が公刊されている(7)。今後の学術的進展は、このような方向で行われていくに違いないが、現時点では、まだまだ不十分といわねばならない。

これまで行われてきている一神教と多神教といった宗教的な視点からする比較文化論的研究は、人種・民族・国民といった、曖昧で流動的な概念から遠藤文学を考察することを難しくする。それ自体が強固な認識枠組であるゆえ、描かれる差別も全て宗教的次元で分析されてしまうからである。芥川賞を受賞した「白い人」も、白人の人種主義を扱った作品であるにもかかわらず、そうした視点からの分析は本格的にはなされていない。ポストコロニアリズムは、人種主義や性主義を前景化するので、これまで見えにくかった遠藤文学の側面に、新たな光を当てることが期待される。

これまでに、ポストコロニアルの視点を意識して書かれた論文がないわけではない。遠藤研究で二つの博士論文を執筆した李英和の「遠藤周作の文学とキリスト教——インカルチュレーションと預言者性」(筑波大学、二〇〇八年)がそれである。この論文はポストコロニアル時代の遠藤研究として特筆に価するもので、遠藤研究のこの領域におけるフロントラインを形成している。著者はかつて日本の植民地であった大韓民国釜山の出身で、軍部独裁の朴正熙政権の第三共和国時代に少女時代を送った人である。日本語で書かれているといえ、李によってこのような研究の地平が開かれたことは、おそらく偶然ではないであろう。最初の博士論文においても、李は文学理論に鋭敏な研究者であったが、ジェンダー理論からポストコロニアリズムへの移行は、自身の内的必然性を強く感じさせる。要するに、性主義から人種主義へと問題意識が深化したことがうかがわれるのである。李の遠藤研究には、社会的現実への強い問題意識がうかがわれる。細部においては批判すべき箇所もあると私は考えているが、彼女の学問的政治性(社会的現実に対する闘争性)には深く共感しないではいられない。とはいえ、彼女の研究においては、ポストコロニアリズムは補助的な理論であって、あくまで「預言者性」をキーワードとしたインカルチュレーションが主題であり、その意味では、私の目的とする主題とは異なっているといわねばならない。

眞嶋亜有『「肌色」の憂鬱——近代日本の人種体験』(中央公論社、二〇一四年)第六章「永遠の差異——遠藤周作と戦後」は、遠藤周作を人種主義の視点から本格的に分析した優れた論考だが、人

種主義というきわめて限定された視点から遠藤を捉えているため、人種主義と絡み合う植民地主義という、ポストコロニアリズムが持つ、より広い視野から見えてくるはずの領域を捨象してしまっている。それゆえ、眞嶋の洞察は遠藤文学の一部を鋭く照射する洞察を示している反面、その一部を遠藤文学の全体として主張しようとしているように私には思われる。

最後に、先行研究では、遠藤文学における黒人の表象分析が不充分であるばかりか、何よりも、小説家遠藤の出発点で重要な役割を果たしたと考えられるフランツ・ファノンの名前を見出すことが皆無であることを指摘しておきたい。

- (1) 遠藤周作『人生の踏絵』新潮社、二〇一七年。なお、二〇一六年にも『沈黙』をめぐる短篇集』（加藤宗哉編、慶應義塾大学出版会）が刊行されている。
- (2) 遠藤周作の著書は、二〇一六年七月現在、新潮文庫、角川文庫、講談社文庫、中公文庫、集英社文庫、文春文庫、朝日文庫、光文社文庫、青春文庫などに収められている。
- (3) 『遠藤周作研究』は、二〇一六年七月現在、八号まで刊行されている。
- (4) 遠藤に関する博士論文を、年代順に掲げる。
  - 李平春「遠藤周作文学の〈神〉像——〈父なる神〉から〈愛の神〉へ」（白百合女子大学、二〇〇二年）
  - 小嶋洋輔「遠藤周作」論——文学と救いの位置」（千葉大学、二〇〇五年）
  - 李英和「日本文化における「母なるもの」と女性表象——遠藤周作の文学を中心に」（城西国際大学、二〇〇六年）
  - 田中葵「遠藤周作文学作品論——その文学的特質について」（関西大学、二〇〇七年）
  - 朴賢玉「遠藤周作文学研究——受容から照射される遠藤文学」（名古屋大学、二〇〇八年）
  - 山田都与「キリスト者遠藤周作における文学技法」（金城学院大学、二〇〇八年）
  - 辛承姫「遠藤周作論——母なるイエス」（専修大学、二〇〇八年）
  - ナラシマン・ランジヤナ「遠藤周作の『深い河』に見られる日本人の死生観の多角的研究」（大阪大学、二〇〇八年）
  - 李英和「遠藤周作の文学とキリスト教——インカルチュレーションと預言者性」（筑波大学、二〇〇八年）
  - 菅原とよ子「遠藤周作論——『アデンまで』から『イエスの生涯』までにおける「同伴者イエス」追究の過程」（九州大学、二〇一二年）
  - 古浦（住友）修子「遠藤周作文芸の成立と展開——根源と普遍への探求」（関西学院大学、二〇一四年）
  - 北田雄一「遠藤周作における留学——批評家から小説家へ」（関西学院大学、二〇一六年）
  - (5) 佐藤泰正、佐古純一郎、武田友寿、上総英郎などがいる。
  - (6) 小嶋洋輔「遠藤周作「中間小説」論——かき分けを行う作家」『千葉大学人文研究』三六号、二〇〇七年、二九—五二頁、参照。
  - (7) ヴァン・C・ゲッセル他著『遠藤周作とShusaku Endo—アメリカ「沈黙と声」遠藤文学研究会報告』（春秋社、一九九四年）は、一九九一年にアメリカ合衆国のジョン・キャロル大学で行われた国際学会の記録を邦訳したものである。また、二〇一六年八月一九日には『沈黙』刊行五〇年記念大会」が遠藤周作文学館で開催され、同月二〇日には国際シンポジウムが長崎ブリックホール国際会議場で開催された。その全記録は『遠藤周作と「沈黙」を語る』（長崎文献社、二〇一七年）として公刊された。

## 第二節 アメリカ合衆国、英国、フランス共和国に おける研究

大江健三郎がノーベル文学賞を受賞したとき、西洋の批評家は、なぜ遠藤ではなかったのかと感じたという(1)。英国の『インディペンデント』紙は、遠藤を予想していたと報道し、アメリカの『ニューヨーク・タイムズ』紙は、遠藤を予想した人物として挙げていた(2)。それだけ国際的作家としての知名度が高かったということである。

遠藤については、海外でも多くの批評が行われている。欧米においては、キリスト教世界に登場した日本のキリスト作家という独自性が彼らの強い関心を引くからである。

全般的な問題として指摘したいことは、限られた作品を中心として論じていることの限界を指摘しなければならぬ。英仏語圏にどのように遠藤作品が翻訳紹介されてきたのかが、そのまま研究水準と連動しているのである。

遠藤作品の海外翻訳状況については、国際交流基金ホームページの日本文学翻訳書誌検索で最新状況が検索可能なので、ここで詳細を記述する煩を避けるが、そこにかがわれる傾向については指摘しておきたい。遠藤の出世作は、芥川龍之介賞を受賞した「白い人」(一九五五年)だが、この作品を含む『白い人・黄色い人』が英訳されたのは、作者の没後一二年経った二〇〇八年のことである。最初に翻訳されたのは『海と毒薬』で、『沈黙』がこれに続く。『侍』『スキヤンダル』『深い河』も翻訳されている。『死海のほとり』は現在でも韓国語以外には翻訳されていない。これは何を意味しているのだろうか。「白い人」は、ヴィシー時代のリヨンを舞台に、サディストの対独協力青年を主人公にした作品である。この主題がフランスにおいて長年タブーであったことは周知の事実である。聯合軍は解放者として扱われているが、原題は「ユーロツペアン」とルビが振られている。つまり、白い人＝ユーロツペアの謂であり、レジスタンス神話に彩られ輝いていた栄光のフランスの虚構を剥ぎ、醜悪な西洋人表象を描き出す作品であった。それゆえ、重要な作品であるにもかかわらず、英語圏に翻訳されることがなかったのである。フランス語訳は現時点でも存在していない。これに対して『海と毒薬』は、第二次世界大戦中に九州帝国大学医学部で行われた米軍捕虜の人体実験をモチーフにした作品であり、西洋人が受け入れやすい内容であった。また、『死海のほとり』が日本国内では代表作の一つと数えられながら、大韓民国以外の諸国——特に英語をはじめとする西洋諸語に翻訳されていないのは何故だろうか。第八章で詳述するが、反ユダヤ主義のレッテルをシオニストから貼られる危険性を孕んだ作品であるからではないかと私は考えている。重要な点は、海外への翻訳は非常に注意深く作品選定がなされていたということである。第二次世界大戦後の日本文学を、西洋人に認めてもらいたいというわれわれ日本人の欲望が、ここでは作動していたのではないかと思われる。

遠藤は日本の作家であり、彼が生産したテクストは龐大であるから、それらに容易にアクセス可能な日本の研究者はその意味では有利な立場にある。その意味では、海外の研究者は周縁的な立場にある。しかし、遠藤はキリスト作家であったので、キリスト教信徒が圧倒的に多い英語圏の研究者は有利な立場にあるし、英語で論文を発表することは、日本語にアクセスできない海外の多くの批評家や研究者と問題意識を共有することが容易であるという点で、日本の研究者よりも有利である。このように、遠藤研究においては、日本の研究者と英語圏の研究者の置かれた立場は、一概にどちらが優位にあるとはいえないところがある。

英語圏への遠藤紹介の功績者はアメリカ合衆国のヴァン・C・ゲッセルである(3)。彼はコロンビア大学でドナルド・キーンの教えを受けた人で、『侍』など七作を英訳している。彼自身もクリス

チャン（モルモン教）であり、西洋対日本という構図でカトリック作家遠藤を捉えている。もともと、彼には遠藤に関する著書は現在のところない。著書があるのは、英国のマーク・B・ウィリアムズである。オクスフォード大学で日本学を専攻し、カリフォルニア大学バークレー校で日本文学の博士号を取得した人である。彼の博士論文は、遠藤周作、高橋たか子、椎名麟三、島尾敏雄を取り上げたものであった（3）。遠藤に関する彼の著書については後ほど触れる。ゲッセルもウィリアムズも、生前の遠藤と親しかった世代である。

英語圏研究者の論は、日本人研究者に参照されることが多いとはいえない。そもそも、当然のことながら、欧米研究者の主たる想定読者は、「われわれ西洋人」なのである。前項でも触れたように、二〇一六年八月には長崎で国際シンポジウムが開催され、ゲッセルが基調講演を行ったが、国際作家遠藤周作について、英語圏と日本語圏では、これまではそれぞれ独自に研究が行われていて、協同して研究する機会に乏しかったのである。

酒井直樹は、日本文化研究が、アメリカ合衆国の地域研究と、日本国内の国史国文学と別々に行われてきた事実を「二階建てバス構造」と名付けている（4）。これと似た構造が、遠藤の国内外の研究においては行われてきたといつては言い過ぎであろうか。英語圏の研究者は英語圏読者に対して語り、日本語圏の研究者との学術的対決を想定していないように思われる。日本人研究者もまた、現在のところ、英語圏の研究者と積極的に議論を戦わせようとしているとはいえない状況にある。

酒井はまた、西洋対東洋、白人対黄色人、ヨーロッパ対アジアといった二項対立が、全て西洋中心的な構図であると指摘し、ヨーロッパと非ヨーロッパという認識それ自体が近代的植民地主義に他ならないと指摘している。この指摘は、西洋対日本というコンテクストで遠藤文学を研究してきたわれわれを驚かせるとともに、真剣な方法的反省を促さずにはおかない（5）。

以下、著書として刊行された先行研究について、時系列に沿って述べるが、その際、一般書にも触れることとする。

先ほど名前を挙げた Mark B. Williams の *Endoe Shuesaku: A Literature of Reconciliation* (Nissan Institute/Routledge Japanese Studies, 1999) は、英語で書かれた遠藤研究として基本文献となるべき書物である。著者は、「白い人、黄色い人」『海と毒薬』「おバカさん」「私が・棄てた・女」『沈黙』『侍』『スキャンダル』『深い河』を取り上げて論じているほか、年譜、取り上げた作品全ての梗概が巻末に付されている。著者が参考とした日本語文献の幅広さは、優れた日本人研究者の水準と同等である。また、索引が付いているところは、日本語で書かれた研究書よりも優れている。関口安義がいうように、「索引のない本は、研究界のネットワークから落ちこぼれる。逆に索引に配慮した書物は、他の同系統の書物と呼応し、その往還関係の中で新たな研究の磁界を形成する」からである（6）。

Emi Mase-hasegawa (長谷川「間瀬」恵美) の *Christ in Japanese Culture: Theological Themes in Shusaku Endo's Literary Works* (Brill's Japanese Studies Library, 2008) は、スウェーデンのルンド大学に提出した神学博士論文である。この書は、クリスチャニティの視座からする国際的遠藤研究の、現時点における最高水準を示すものと思われる。日本におけるキリスト教受容の歴史的経緯、そして神道と仏教という日本における宗教的文脈を懇切丁寧に説明した上で、遠藤のキリスト教理解とイエスマイメージの変容について論じている。巻末には、年譜と著作一覧、翻訳一覧、英日の参考文献（著書、論文、新聞記事、書簡、インタビュー等）と人名索引が付されている。ウィリアムズの著書とともに、遠藤研究の基本文献となる書物である。

Ascenso Ascenso の *Transcultural Theology in the Fiction of Shusaku Endo* (Tesi Gregoriana: Teologia, 2009) は、邦訳がある（アシエンソ・アデリノ『遠藤周作——その文学と神学の世界』川鍋襄・田村脩訳、教友社、二〇一三年）。教皇庁立グレゴリアン大学に提出した博士論文であり、長谷川と同じく神学の視座からする研究である。私は神学研究者ではないので、この書に対する阿部仲麻呂の評を引いておくが、「遠藤という特異な一人物の生の軌跡をとおして、特に東アジア地域の人間がキリスト教信仰をいかにして納得したかたちで受容していくのかという普遍的道筋を欧米圏域の人々にも理解可能なかたちで示すことに成功した」と阿部は評している（7）。



Johnny Toma の *A Study of the Catholic Priest in Shusaku Endo's Novels: A Rare Glimpse into History of Japan and Christianity* (LAMBERT Academic Publishing, 2011) は、遠藤が名誉博士号を授与されたジョージタウン大学に提出された修士論文である。「火山」「沈黙』『侍』『深い河』を取り上げている。著者は遠藤作品を全て英訳に依拠しているほか、ウィリアムズの著書のほかは、主に英語圏の新聞雑誌記事を参照して論文を書いている。ウイキメディア財団が運営するインターネット・エンサイクロペディアも利用している。アメリカ合衆国における日本文学の修士論文の水準を示している書物である。英語圏の一般読者はともかくとして、日本人研究者が啓発されるところはない。

Mark W. Dennis と Darren J. N. Middleton の編になる *Approaching Silence: New Perspectives on Shusaku Endo's Classic Novel* (BLOOMSBURY, 2015) は、五部構成、総勢一六名の論者が『沈黙』に関わる論考を寄せた大部の書籍である。大御所であるゲッセルやウィリアムズの名前ももちろんあるが、准教授クラスの著者も多く、マーチン・スコセッシ監督の映画『サイレンス』の全米公開(二〇一六年)という好機が幸いしたとはいえ、『沈黙』一作に関してこのような大部な論集が編まれたことに、驚きを禁じ得ない(8)。巻末の英語論文リストも貴重である。この書物については、推薦文を寄せた長谷川(間瀬)恵美による日本語の紹介がある(9)。

Justyna Weronika Kasza の *Hermeneutics of Evil in the Works of Endo Shusaku: Between Reading and Writing* (PETERLANG, 2016) は、ポーランド出身の著者が、英国のリーズ大学に提出した博士論文である。「Evil」という切り口で、ポール・リクルの解釈学などを援用しながら、哲学的視座から遠藤文学に徹底した考察を加えたものである。ウィリアムズや長谷川の研究を踏まえた上で、彼女が渉猟した日本語文献は実に幅広い。巻末には「悪」のイメージに関するグロースアリーがあるが、ここで日本語と英語で抜き出された文節を見るにつけ、日本人研究者には見落としかねない細部の表現への注目がなされていることに驚かされる。ユスチナ・カシヤが切り拓いた地平は、キリスト教の視座からする遠藤研究が、まだ深い奥行きを持つものであることを教える。なお、「悪」に関連する遠藤のいくつかのエッセイの英訳が巻末に収録されている。一義的には英語圏研究者のためであるが、日本人研究者にも啓発されるものがある。彼女は遠藤の『作家の日記』を註釈付で翻訳する計画を持っており、日本の日記文学の系譜にこれを位置づけようとしている(10)。

Patrick T Reardon の *Faith Stripped to Its Essence: A Discordant Pilgrimage Through Shusaku Endo's Silence* (ACTA Publications, 2016) は、研究書ではないが、映画『サイレンス』の公開に合わせて出版された、グループ読書とディスカッション用のガイドである。このような書物は、日本では出版されておらず、注目に値する。*Approaching Silence: New Perspectives on Shusaku Endo's Classic Novel* の Part Four *Teaching Silence* に収録された John Kalmer の *Silence in the Classroom* を読むと、合衆国の大学において、教授者が学生に対して自身の人間的主題として読み込ませようとする姿勢を知ることができるが、このようなディスカッション用のガイド本が存在するのである。同じ英語圏であっても、英国とアメリカ合衆国の違いがこのようなところからもうかがわれるように思われる。

ニコラ・モラルに拠れば、フランスにおける日本近代文学研究は、博士課程学生を指導できる四人の教授が牽引しているという(11)。谷崎潤一郎、川端康成、大江健三郎、大岡昇平、円地文子、開高健らの翻訳があるアンヌ・バヤール(坂井(フランス国立東洋言語文化研究所)、森鷗外研究のエマニュエル・ロズラン(同)、セシル・坂井(パリ第七大学)、与謝野晶子、樋口一葉、田村俊子らの翻訳があるクレール・ドダーヌ(リヨン第三大学)である。彼らの指導を受けた若手研究者によって、芥川龍之介から村上春樹まで、個別の作家研究が深められている。倉智恒夫に拠れば、国立東洋言語文化大学、CEJ(日本研究センター)で行われている日本文学研究の水準は、日本のそれと差がないほど高度であり、「とりわけ古代中世近世の文献学的精緻さは鮮やかである」という(12)。

Pierre Dunoyer の *Shusaku Endo 1923-1996* (Les Editions du Cerf, 2014) は、フランス語で唯一の遠藤文学に関する単行著書である。著者は *Histoire du catholicisme au Japon* (Collection Petits Cerf Histoire, 2011) という書もある人で、遠藤の生涯と代表作『海と毒菓』『火山』『私が棄てた・女』『沈黙』『侍』

「スキヤンダル」『深い河』について、ウィリアムズや長谷川の先行研究も踏まえて書いている。巻末にはグローサリーがあり、観音菩薩、部落民、神道、切腹などの語彙について簡潔な説明をしている。フランス語圏の一般読者向けの書籍である。参照した仏語文献の乏しさを見ても、フランス人研究者による遠藤研究の進展はこれからと思われる。

以上、英仏語圏の研究を概観したが、いずれの著書も、基本的にキリスト教という視座による研究であることは共通している。長谷川、アシエンソ、ユスチナなど、神学及び哲学の立場からの研究が特に目につく。日本での博士論文が文学領域に限られることと対照的である。

しかし、フランツ・ファノンの名前は本文にも脚注にも登場せず、ポストコロニアル的視座がないことは、日本における遠藤研究と共通している。次章で詳述するが、アメリカ合衆国でポストコロニアルの立場からの遠藤研究を提唱しているのは、ミシガン大学の准教授クリストファー・L・ヒルだけなのである。

- (1) Francis J. Bosha, "The Fiction of Endo Shusaku in Recent English Translation", *Journal of Kawamura Gakuen Woman's Univ.*, Vol.7, No.1, p.1, 1996.
- (2) 山根道公作成年譜に拠る。山根道公『遠藤周作 その人生と『沈黙』の真実』朝文社、二〇〇五年、四八八頁。
- (3) ヴァン・C・ゲッセルはカリフォルニア州に生まれ、ユタ州ソルトレーク・シティーで育った。一九六八年モルモン教に改宗。一九七〇年から一年間、日本で伝道。一九七九年、日本文学で博士号取得(コロンビア大学)。コロンビア大学、ノートルダム大学、カリフォルニア大学バークレー校を経て、ブリガム・ヤング大学教授。マレーティン・スコセッシ監督の映画「沈黙—サイレンス—」(二〇一七年日本公開)では、文学コンサルタントを務めた。生い立ちについては、以下のサイトに掲載された日本語の自伝的文章を参照。  
<http://mormonscholarstestify.org/2959/van-c-gessel-japanese> (二〇一七年二月一九日確認)。
- (4) スティーヴン・ドッド「英国の日本文学研究の概観」『日本文学』九二集、二〇一五年、一七六頁。
- (5) 酒井直樹「ポストコロニアルな条件と日本研究——「失われた二十年」と帝国の喪失」『日本研究』五三巻、二〇一六年、一六頁。
- (6) 二〇一六年八月二〇日、「遠藤周作没後20年『沈黙』刊行50年記念国際シンポジウム」が、長崎ブリックホール国際会議場で開催された。遠藤周作長男龍之介の特別講演、ヴァン・C・ゲッセルの基調講演、加藤宗哉司会により、青来有一(作家)、松田美緒(歌手)、ポーランド人ユスチナ・カシヤ(セントラル・ランカシャー大学講師)のパネルディスカッションが行われた。私自身も、二〇一六年一月一九・二〇日に国文学研究資料館で開催された第四〇回国際日本文学研究会で、「遠藤周作とフランツ・ファノン」と題して発表を行い、ストックホルム、ミラノ、台湾などの研究者と意見を交換した。
- (7) 関口安義「作家研究」『日本近代文学』九一集、二〇一四年、二〇九頁。
- (8) 阿部仲麻呂「書評 アシエンソ・アデリノ著(川鍋襄訳、田村脩監訳)『遠藤周作—その文学と神学の世界』」『清泉女子大学キリスト教文化研究所年報』二二号、二〇一四年、一三〇頁。なお、同書には兼子盾夫による書評もある(兼子盾夫「アシエンソ・アデリノ著『遠藤周作—その文学と神学の世界』」『遠藤周作研究』第七号、二〇一四年、一八一—二二頁)。
- (9) 日本においては、すでに類似した研究書が刊行されている。石内徹編『遠藤周作『沈黙』作品論集(近代文学作品論集成20)』二〇〇二年、クレス出版、二〇〇二年。
- (10) 長谷川(間瀬)恵美「遠藤文学研究書の紹介及び韓国キリスト教の体験談」『遠藤周作研究』第八号、二〇一五年、一一三頁。
- (11) スティーヴン・ドッド「英国の日本文学研究の概観」『日本文学』九二集、二〇一五年、一八一頁。
- (12) ニコラ・モラール「フランスにおける日本近代文学研究をめぐる一考察」『日本文学』九二集、二〇一五年、二〇一頁。
- (13) 倉智恒夫「フランスにおける日本文学」日本比較文学会編『越境する言の葉——世界と出会う日本文学』彩流社、二〇一一年、七一頁。

### 第三節 大韓民国、台湾、中華人民共和国における研究

韓国教育芸術情報院の学位検索によれば、遠藤周作研究論文は七一編を数え、興隆を窮めている状況がうかがわれる。(二〇一七年五月現在。以下、台湾、中華人民共和国についても同様)。

大韓民国における日本文学の翻訳状況については、伊相仁の研究があるため、ここで詳細を述べることはしない(1)。しかし、ノーベル文学賞を受賞した川端康成と、キリスト教作家三浦綾子が突出して多く、ノーベル文学賞を受賞した大江健三郎の翻訳も急増していることは注目に値する(2)。遠藤作品の翻訳について述べると、一九六〇年代に五作、七〇年代に二作、八〇年代に一三作、九〇年代に五作、二〇〇〇年から二〇〇九年までに六作、合計三二作ある(3)。興味をそそられるのは、二〇〇九年まで英訳されなかった「白い人」が、一九六〇年にすでに訳されていたことと、現在でも英訳されていない『死海のほとり』が一九八八年、一九九二年、一九九五年と三回訳されていることである。

長濱拓磨によれば、日本文学研究が本格的に始まったのは、軍部独裁政権が終わった一九八〇年代のことである(4)。大韓民国における日本の作家に関する個別研究書が珍しいなかで、遠藤研究書は三冊ある。神学者金承哲の『遠藤周作の文学と基督教——母なる神を探して』(新地書院、一九九八年)、宗教哲学者ファン・ピルホの『遠藤周作の宗教小説読解』(神亜出版社、二〇〇二年)、日本文学者朴勝平の『遠藤周作研究』(ポゴサ、二〇〇二年)である。さまざまな分野の研究者が遠藤研究に従事しており、その学際性が大韓民国における遠藤研究の特徴であると長濱は指摘している(5)。研究論文の特徴は、「ほとんどがキリスト教の観点から研究されたものであり、遠藤独自の聖書観や神学を作品の中から解明している」というものが大半を占める(5)という。

以上、大韓民国における遠藤研究状況について述べたが、二〇一四年一月五日、六日には、大韓民国の仁川大学において「遠藤周作国際シンポジウム(韓国日本基督教文学会・遠藤周作学会共同学術発表大会)」が開催されている。兼子盾夫の報告に拠れば、日本から一五人、大韓民国から二〇人、英国から一人、総計三六人の参加があった(7)。講演、発表、司会、討論、質疑応答は全て日本語で行われたという(8)。

次に、台湾と中華人民共和国における遠藤研究について述べる。

台湾博碩論文知識加値系統の検索に拠れば、台湾では、楊警綺(釋大愚)の「遠藤周作宗教文學之研究——由原罪意識走向神聖會遇之詮釋」(輔仁大学博士論文、二〇〇八年)のほか、郭育憲「遠藤周作的文學——以罪意識為中心」(輔仁大学修士論文、一九九七年)、黃婷儀「論日本人的罪意識——以遠藤周作文學為主」(輔仁大学修士論文、二〇〇〇年)、劉懿慧「文學的宗教敘事——遠藤周作論「罪」與「惡」」(中原大学修士論文、二〇〇四年)など、一四の修士論文(碩士論文)がある。南華大学、中國文化大学、國立高雄第一科技大學などもあるが、圧倒的に輔仁大学のものが多い。同大学が、台湾における遠藤研究の拠点となっていることがわかる。

また、中国国家図書館の学位検索に拠れば、中華人民共和国では、叶継宗「是誰摧殘了骨肉之情?——读远藤周作的短篇《妈妈》」(『外国文学研究』一九八〇年)、路邈「文学与神学之间——略论远藤周作的《沉默》和《深深的河》」(『日语学习与研究』二〇〇四年)、于荣胜「远藤周作的《海与毒药》与日本人」(『日本研究论集』二〇〇六年)、史军「对基督教信仰的独特阐释——许地山和远藤周作的宗教观之比较——以《缀网劳蛛》和“わたしが弃てた女”为中心」(『日语学习与研究』二〇〇八年)、史军「文学与信仰——远藤周作的宗教观」(『日语学习与研究』二〇〇八年)、陈华「《沉

默》在近代日本基督教文学中的地位」（『长江大学学报：社会科学版』二〇〇八年）、崔莹「対小説《沉默》中的“沉默”议题的思考」（『学理论』二〇一二年）などの研究がある。

中華人民共和国及び台湾における遠藤研究については、楊愛麗「普遍的な「愛」——『深い河』論」（『上海外国語大学修士論文、二〇一四年）が、『深い河』を中心にしてはいるが、参考になるので、同論文に依拠しつつ、個別の研究者に関する情報は、必要に応じて補いつつ紹介する（9）。

台湾の輔仁大学で一九八六年に「文学と宗教」をテーマとした国際シンポジウムが開催されたときに、遠藤は講演者として招待された。このときに遠藤は、名誉博士号を授与されている。台湾の遠藤研究の第一人者は林水福である。林はカトリック信徒であり、東北大学で博士学位を取得した人である。『海と毒薬』『私が棄てた・女』『沈黙』『侍』『深い河』などの中国語訳がある。アメリカ合衆国におけるヴァン・C・ゲッセルのような役割を果たした人といっても誤りではないだろう。輔仁大学は教皇庁直属のカトリック系私立大学である。一九二七年に創立されたが、一九六一年に台湾で再興された。林は同大で、日本文学研究所所長、日本文学部長を務めた。また、台湾文学協会理事長の任も果たした。現在は南臺科技大学教授である。

中華人民共和国の日本文学研究の概況について最初に述べると、東北師範大学、北京大学、北京外国語大学、南開大学、復旦大学には日本文学専攻の博士課程があり、毎年十数名から数十名の学生が研究者になっているという。だが、問題がないわけではなく、翻訳には誤訳、略訳が多く、研究についても「方法的に従来の作家論、作品論を踏襲し、いささかも創見のない論述をいつまでも反復する研究者が存在する一方、留学中に学んだ日本の「国文学」を死守し、狭い問題意識の中で些細な「発見」に嬉々とする日本帰りも少なくない」という（10）。郭勇に拠れば、一九八〇年代までは、共産主義の観点から、日本のプロレタリア文学に強い関心が示されていたという（11）。

楊愛麗に拠れば、中華人民共和国では、「第三の新人」の一人としての言及は多いものの、個別研究は、台湾ほどには盛んではない。路逸「遠藤周作——日本基督宗教文学的先駆」（宗教文化出版社、二〇〇七年）は単行本である。「遠藤周作の基督教思想に重点を置いて、作品別で主に『沈黙』や『深い河』について考察し、遠藤の「母なる神」や晩年の宗教多元主義思想を論じた」という。史軍「衝突、和解、融合——遠藤周作の文学与宗教（史軍「衝突、和解、融合——遠藤周作論」）」（上海外国語大学博士論文、二〇〇九年）は作家研究である。「遠藤周作の作品と宗教信仰との結びつきを考察して、時間順で遠藤の実生活と作品を研究しながら、遠藤の基督教に対する理解について論じている」という。

その他の研究として、楊は以下に言及している。高謹「浅析遠藤周作『深河』中的神学宗教思想」（『教育教学論壇』二〇一二年）、許静華「试析遠藤周作『深河』的複調特徵」（『文学界（理論版）』二〇一二年）、王君・王吉祥「从女性主義視角探尋『深河』中美津子成長歷程」（『浙江万里学院学报』二〇一二年）、陳雲輝「从『沈黙』到『深河』——遠藤周作多元化宗教思想探索」（『西華大学学报（哲学社会科学版）』二〇一三年）、高玉霞「探討『深河』中的東方主義思想」（『文学教育』二〇一三年）。陳の研究は宗教多元論の視座からするもの、許の研究はバフチンのポリフォニー理論、王君・王吉祥の研究はフェミニズム理論、そして高の研究はエドワード・サイードのオリエンタリズム理論をそれぞれ用いたものという。以上のように、中華人民共和国及び台湾でも、遠藤文学に関する論文は、さまざまな文学理論を援用しながら、毎年書かれていることがわかる。

現時点での私の語学的限界から、本研究においては、一部を除いてこれら大韓民国及び中華人民共和国・台湾の先行研究を参照していないことを遺憾とするが、次節で述べるポストコロナ的視座からする遠藤研究においては、大韓民国及び中華人民共和国・台湾の研究者との協同が不可欠と私は考えている。改めていうまでもなく、両国ともに、帝国日本の植民地であった歴史を持つからにはかならない。

- 日本文学』彩流社、二〇一一年、三七―四七頁。
- (2) 長濱拓磨「韓国における遠藤周作——翻訳・研究論文の現在」『無差』一一号、二〇〇四年、二〇頁。
- (3) 伊相仁・朴利鎮・韓程善・姜宇源庸・李漢正『韓国における日本文学翻訳の64年』館野哲・蔡星慧訳、出版ニュース者、二〇一二年、三三五頁。
- (4) 長濱前掲論文、『無差』一一号、一三三頁。
- (5) 長濱拓磨「韓国における遠藤周作の読まれ方——『沈黙』を中心として」『基督教文藝』二三号、二〇〇七年、八〇―八二頁。
- (6) 長濱拓磨「韓国における遠藤周作——翻訳・研究論文の現在」『無差』一一号、二〇〇四年、二五頁。
- (7) 兼子盾夫「〔報告〕二〇一四年度「遠藤周作国際シンポジウム」(韓国日本基督教文学会&遠藤周作学会共同学術発表大会)」に参加して」『遠藤周作研究』第八号、二〇一五年、一一六―一九頁。
- (8) 長谷川(間瀬) 恵美「遠藤文学研究書の紹介及び韓国キリスト教の体験談」『遠藤周作研究』第八号、二〇一五年、(三)頁。
- (9) 楊愛麗「普遍的な「愛」——『深い河』論」(上海外国語大学修士論文、二〇一四年)。  
[http://202.121.96.136:8800/openfile?dbid=72&objid=57\\_49\\_50\\_49\\_51&flag=free](http://202.121.96.136:8800/openfile?dbid=72&objid=57_49_50_49_51&flag=free) (二〇一七年五月三日確認)
- (10) 劉健輝「中国における日本文学」日本比較文学会編『越境する言の葉——世界と出会う日本文学』彩流社、二〇一一年、三三頁、三五頁。
- (11) 郭勇「中国における日本文学近況」『日本近代文学』九二集、二〇一五年、一八二―一八三頁。

## 第四節 パースペクティブ轉換の必要性

私はこれまでに国内外で蓄積されてきた遠藤研究の意義に、いささかの疑念も差し挟む者ではない。しかし、従来の研究方法によつて、あるいは既存の研究枠組を今後も踏襲していくことによつてのみ、遠藤周作文学の全貌が明らかになるとも考えない。さまざまな試みがなされてしかるべきであろう。問題は、時代状況が変化してきたにもかかわらず、日本国内を中心とする個別的文脈のなかで研究を続けていくことを一度疑つてみる必要があるということなのだ。脱植民地化という二〇世紀後半の国際政治的文脈に作家を置き直して再検討を加えることで、新しく見えてくることがあるに違いない。それは研究の次の段階としてごく自然なことと思われる。それは、先にも触れたように、フランス植民地であったアフリカ、中東、アジア諸地域を視野に入れて論じることでもある。くり返しになるが、従来の遠藤研究は、フランスと日本、西洋キリスト教文化圏と非キリスト教文化圏といった二項対立による比較文化的な視野で論じられてきた。その暗黙の理論枠組からの解放を私は試みるのである。小泉八雲をラフカディオ・ハーンとして「世界大の視野の中で捉え直そう」とした平川祐弘は、「ポスト・コロニアリズムの視点に立つと研究はおのずと巨視的になる。しかし文学鑑賞に徹視的な考察は不可欠である」と述べたことがある(1)。遠藤周作と小泉八雲は文学者という点を除外すればおよそ比較の対象にはならないが、平川の指摘には首肯すべきところがある。この論文もまた、具体的な作品の分析を通して考察を進めていく。

さて、ポストコロニアリズムは、文学研究の領域に政治的視点を持ち込む。小説に限らず、映画や演劇など、文化現象に秘められた政治性を発見しようとする。芸術作品のみならず、研究それ自体の価値中立性にも疑問を投げかける。

遠藤周作は、いわゆる政治的な作家ではなかった。信仰者であったから、マルクス主義に対する否定的評価は改めていうまでもないが、彼は護教的な作家でもなかったから、ヴァチカンに忠実というわけではなかった。宗教作家をポストコロニアリズムの視点から扱うとはどういうことであろうか。それはたとえば、ヴァチカンを宗教的コンテクストから世俗的コンテクストに置き換え、国際政治学的な視点から見るということである。ヴァチカンはソヴィエト連邦に対抗する政治的国家であったし、二〇世紀の歴史のなかで大きな影響力を持っていた。過去の遠藤研究において、モスクワという単語が登場することはおそらく皆無であったが、冷戦時代のソヴィエト連邦に対する西側知識層の恐怖は、これを無視することはできない。他方でアメリカ合衆国に対するフランスの独自路線というものがあつた。そのような国際政治のなかに遠藤周作という文学者を置くことは試みる価値があるだろう。

遠藤が『沈黙』で描いた転落司祭という主題も、脱宗教化して捉え直せば、コラボレーター、すなわち「白い人」で描いたところの敵対協力者への転向という、政治的主題に変貌する。また、『侍』で描かれた大航海時代のスペイン政府とカトリック教会の植民地主義への批判は、一九七五年までアングラやモザンビークの植民地を手放そうとしなかったポストガル軍事独裁政権とその協力者カトリック教会への批判の暗喩として読みうる可能性を秘めているのである。

もつとも、文学テクストに埋め込まれた政治性は、そのような直接的な政治性だけではない。小説が言語芸術であるがゆえの、言語を利用した政治性も考察の対象となる。例えば、辻の小説に登場するヒロインたちが、現実にはありえないほど完璧な「女ことば」を駆使することは、彼女たちの美貌の詳細な描写とともに、異性愛イデオロギーの強調という側面から捉えることができる。

中村桃子は、一九五六年に邦訳されたドストエフスキー『罪と罰』(米川正夫訳)と、一九五七年に邦訳されたマガレット・ミッチェル『風と共に去りぬ』(大久保康雄・竹内道之助訳)を取り上げ

て、白人の登場人物が標準語で、非白人や農民が地域語（方言）で訳し分けられていることの意味を分析している（2）。二冊は単なる例に過ぎず、近代西洋文学に登場する「黒人」「インディアン」そして周縁的素内である「ジプシー」などの非白人は、長らく「疑似方言」で訳されてきたのである。

教育ある中産階級が使う「正しい標準語」と教育のない階級が使う「劣った方言」という区別を通して、「中流白人」と「非白人」の区別を表現しようとしたからだろう。日本にはない集団間の区別は、国内の区別によって表現するしかないとも言える。

しかし、これは恐ろしい偏見を再生産している。ここでは、「優れた標準語」と「劣った方言」を白人と非白人に区別して使い分けることで、日本国内にも「優れた白人」と「劣った白人」という誤った偏見をつくり出してしまっているだけでなく、この偏見にもとづいて、さらに、「優れた標準語」と「劣った方言」の区別を再生産しているのである。（3）

中村はさらに、「このような翻訳では、〈教育ある東京人〉が、〈白人性〉によって補強されている。〈白人性〉に特徴づけられる日本人」という矛盾したアイデンティティ。あたかも、日本の〈中流性〉〈東京性〉を〈白人性〉という人種に結びつけることにより正当化するような操作。翻訳では、日本人のアイデンティティを国外のアイデンティティによって特徴づけるという操作を行うことが可能なのである」と指摘している。「翻訳は、言語資源に与えられた差別関係がグローバルに補強される場なのである」（4）。

ここで指摘されていることは、何も翻訳小説に限らない。外国文学の影響を受けた日本人作家である遠藤や辻が生産した文学テキストにも、そのまま当てはまる。

例えば、遠藤周作の「アデンまで」（一九五四年）には、白人女性と黒人女性が登場するが、白人女性は、大学生という設定もあるのが「いいことよ。すぐ、そこにあたしの幼友達の家があるわ。そこに行きましょうよ」というように、「標準語」「女ことば」で書かれ、黒人女性は「このままでいいだ。黒人はみな、このままでいいだ」というように、地域語で書かれている。遠藤もまた、一九五〇年代半ばの西洋文学の翻訳に見られるような言語イデオロギーに無自覚だったということであろうか。おそらくそうではない。「アデンまで」は、近代西洋植民地主義に組み込まれた人種差別を指弾する意図が根底にあるので、そのような言語操作は意識的なものであったと考えられるからである。

事実、遠藤が黒人を描くときに地域語を用いたのは、この作品だけである。第三章で考察するが、黒人男性ポランが登場するシリーズでは、彼の発言はすべて標準語で書かれている。ポランが大学教育を受けているという設定も理由の一つではある。だが、ポランがいささか乱暴な言葉遣いをするときにも、それは彼の「黒人性」を強調するためではなく、白人世界から彼が被った不条理な差別を暗示するための効果が周到に計算されているのである。

一九九〇年代後半の日本においても、オリンピック関連の新聞記事において、カール・ルイスの談話だけが「私」と書かれ、ほかの黒人選手は「おれ」と書かれて「黒人性」が強調されていた（5）。根強い偏見が翻訳に現れた一例だが、そのような無自覚なところは、遠藤にはなかった。その意味では、エジプト、シリア、マリ共和国、タヒチなど、英仏旧植民地を舞台とした辻の作品に登場する非白人の描き方には興味をそえられるものがある（6）。

（1）平川祐弘『ラフカディオ・ハーン——植民地化・キリスト教化・文明開化』ミネルヴァ書房、二〇〇四年、三二六頁。

（2）中村桃子『〈性〉と日本語——ことばがつくる女と男』日本放送出版協会、二〇〇九年、第二章。

（3）同右、五七―五八頁。

（4）同右、五九頁。

（5）同右、七九頁。

（6）辻邦生の新聞小説『時の扉』（毎日新聞社、一九七七年）はシリア、『雲の宴』（朝日新聞社、一九八七年）は

マリ共和国を思わせるアフリカの新興国、『光の大地』（毎日新聞社、一九九六年）はタヒチとエジプトを、それぞれ重要な舞台にしている。これらの作品では、非白人の台詞のみならず、表象のされ方にも特徴がある。『時の扉』に登場するアラブ人は、基本的に固有名を持たない。「前歯の欠けた、人のいい笑顔を見せ」る人夫頭アブダッラなど数人だけが例外である（第八章「再会」）。そしてアラブ人は激情的で官能への惑溺がある。「彼らは激情に酔うのかもしれない。」「……」何か火のようなものが、アラブの男たちを、瞬時にして、狂わしてしまうのかもしれない」（以上、第十一章「砂塵」）。辻が読者として期待した「あまり小説など読まない人々」がこうした記述を読めば、シリアに対する、ある方向性を持った「まなざし」を形成することを助けることだろう。西洋の調査隊、とりわけダマスカスのフランス学院を拠点にしているフランス調査隊が、「学問の厚みが違う」理想像として描かれているが、このテクストはその背景に潜むフランスの帝国主義支配の歴史について何らの疑問を抱いていないのである。『雲の宴』におけるセガール共和国（マリ共和国を思わせる）とアフリカの黒人たちも、『時の扉』のシリアとアラブ人と類似した表象のされ方をしている。パリの街角で、ジャーナリストの日本人女性主人公が清掃人を眺める場面。「痩せた黒人で、みどり色の少しだぶだぶの制服を着て、機械的に箒を動かしていた」。彼に対する日本人男性フォトグラファアの言葉は以下のとおりである。「おそらくアフリカのどこかの国から出稼ぎにきたんでしょう。しかしここには太陽もなければ、砂漠もなく、熱帯雨林もありません。アフリカの自然が与えてくれた彼の能力を発しする場がまったくないのです」。「あのアフリカ人の背後には砂漠や熱帯雨林の存在が濃く感じられる。だからこそ、都会で一層孤独に見えるんですね」（第一章「五月」）。この言葉を、別の場面での同じフォトグラファアの「フランス人で、理想に熱中できる国民なんです」という台詞と比べると、この登場人物のフランスへのまなざしとアフリカへのまなざしの対称性は図式的なまでに明確である。そしてこうしたまなざしを、作者は反語的に扱っているわけではないことに注意する必要がある。作者はこの台詞を否定するのではなく同意しているのである。『光の大地』では、タヒチが「地球最後の楽園」（第二章「楽園」）として描かれている。現地人の「無類に人が好」いたクシー運転手は「現代文明に汚染されない人」なのだ。主人公は「たしかにタヒチの現地人は貧しそうだ。でも、みんなほほ笑みを浮かべて生きている。やさしい。親切だ」（以上、第一章「波濤」）と思う。本研究では辻のこうした作品群について詳細な分析は行わないが、フランスを理想視した辻が、フランス旧植民地の人々をこのように描いている事実には、今後、周知な分析が必要であろう。



## 第三章 研究の方法と構成

### 第一節 学際的研究

遠藤研究にポストコロニアルの視座が有効であるとの認識を私が抱いたのは、エドワード・サイードの『オリエンタリズム』（今沢紀子訳、一九八六年）及び『文化と帝国主義』（大橋洋一訳、みすず書房、一九九八年、二〇〇一年）を改めて再読するなかで、フランツ・ファノンと遠藤周作が、同時期にリヨンで学生生活を送っている事実に気づいたことがきっかけである。二人は二歳違いでそれぞれマルチニック、大連という植民地で育った。第二次大戦後に有色の知識層としてフランス本国に学び、そこでともに有色人差別を受けた。二人は白人女性と恋愛をし、サルトルの同じ著作を読んだ。そしてファノンは『黒い皮膚・白い仮面』で、遠藤は『白い人・黄色い人』で、それぞれ出版していたのである。初期の二人には、重なり合う問題意識があり、それは一言でいうならば、近代植民地主義とそこに組み込まれた人種主義への怒りだった。

現在、初期遠藤とファノンの思想的繋がりに照明を当てることで、遠藤研究の基本的枠組の拡張を提唱しているのは、アメリカ合衆国ではミシガン大学のクリストファー・L・ヒルであり、日本では私である。ヒルと私とは、同じ時期に、互いの研究を知ることなく、『白い人・黄色い人』と『黒い皮膚・白い仮面』でそれぞれ出版した二人の有色人青年が、同時期にリヨンで学んでいた事実注目し、両者の影響関係を考察して、二〇一四年に相前後して論文にした。

すなわち、拙稿「遠藤周作とフランツ・ファノンの比較文化論的考察——フランス本国における有色人差別体験を中心に」（放送大学院文化科学研究科修士論文、二〇一四年三月）と、Christopher L.Hill, “Crossed Geographies: Endo and Fanon in Lyon”, *Representation* 128 (Fall 2014)である。私は四〇〇枚の論文を三〇枚に圧縮したダイジェスト論文を『Open Forum』一一号（二〇一五年三月）に掲載した。このダイジェスト版の原稿を『Open Forum』編集部に私が提出したところに、ヒル論文がカリフォルニア大学の『リプレゼンテーションズ』誌に、三一頁にわたり掲載されたのである。

私はこの偶然に驚くとともに、海の向こうからの支持者の出現を心強く感じた次第だが、当然のことながら、ヒル論文と拙稿には類似点と相違点があった。そこで私はそれらを整理して、二〇一六年一月一九・二〇日に国文学研究資料館で開催された第四〇回国際日本文学研究会において、「遠藤周作とフランツ・ファノン」という題目でポスター発表をした。そこでの内容は以下のとおりである。

ヒル論文の主張は、概ね以下の三点に要約することができる。第一に、初期遠藤にはファノンの直接的影響があるということ。第二に、ファノンを参照することで遠藤文学に新たに見えてくる領域があるということ。第三に、遠藤を読むことでファノン理解が深まるということである。前二点は私の主張と共通するが、最後の点は、遠藤研究があくまで主眼の私には思い至らなかったことである。両者の比較が、遠藤研究のみならず、ファノン研究にも新たな光を投げかけるとすれば、ポストコロニアリズムをめぐる国際的研究が、より一層進展することになる。

さて、第一の論点について、ヒルはアブストラクトで、遠藤がファノンを読んだと断定しているが、拙稿では、その可能性が捨て切れないと慎重な書き方をした。遠藤の蔵書目録にファノンの著作はないし、彼の論文「黒人の生きられた体験」が掲載された号の『エスプリ』誌への言及も、留学時代の日記には見いだせないからである。どのような決定的な証拠をヒルが提出しているのかが私の最大の関心であったが、結論を言えば、私が見出した以上の証拠を、ヒルも提出していない。遠藤が『エスプリ』を熱心に読んでいたばかりか、日本版の発刊を考え、パリで編集部を訪ねているといった状況証拠は多くある。遠藤がファノンを読んでいたことを、私もほぼ確実視してはいるが、断定するだけの確たる証拠はないのである。ヒルは「アデンまで」「コウリッジ館」のテクストを検討することで、ファノンの影響下にこれらの作品が書かれたと主張するが、ヒルも言及している遠藤の評論「有色人種と白色人種」とファノンの論文「黒人の生きられた体験」の類似は、ほとんど逐語的レベルで認められるにもかかわらず、最も有力な証拠として、ヒルがなぜこの評論ではなく小説を分析対象として用いているのか理解に苦しむところである。

ファノンを読んでいなければ、遠藤がメルロ・ポンティやサルトルを読むことはなかったとヒルは記しているが、これは首肯し難い見解である。日本における本格的なサルトル受容は、遠藤がフランスに旅立った一九五〇年に森有正が刊行した『現代フランス思想の展望』であると増田靖彦は指摘しているが（「サルトルは日本でどのように受容されたか——その黎明期を中心として」『人文』六号、二〇〇七年）、同書に収録された論考を遠藤が初出の雑誌で読んでいた可能性は高いし、当時のフランスで大学生がサルトルの書物入手することは、ある意味で当然だったはずだからである。

「黒人の生きられた体験」と「有色人種と白色人種」で両著者が挙げている有色人差別の具体例の類似、サルトル『恭しき娼婦』の同じ場面への言及や、サンゴール編『ニグロ・マダガスカル新詞華集』に寄せたサルトルの序文「黒いオルフェ」に対する考察といった共通点を考えたとき、これらを全て偶然の一致と主張することは困難であろう。

私は日本の植民地大連で育った遠藤と、フランスの植民地マルチニック島で育ったファノンとの伝記的な類似に注意を払わなくては、リヨンで思想的に遠藤がファノンと出会うこともなかったと考えて、拙稿では相当詳しく両者を比較した。紙幅の関係からか、伝記的な比較をヒルはほとんど行わないが、フランス本国で二人が白人たちから有色人差別を受けたこと以上に、白人女性と恋愛した体験が持つ重要性は、明確に指摘する必要がある。

帝国日本の東南アジア支配と敗戦による植民地喪失。東京裁判と主権回復後の日本が冷戦下で置かれた国際的立場等について、ヒルはかなり詳しく記している。これは日本の歴史に必ずしも通じていない英語圏読者を意識してのことと考えられる。目に見えない歴史的状況がホリゾントとしてあり、目に見える雑誌にフランス語で印刷されたファノンの思想がある。その中間には、生身の遠藤周作とファノンがいて、彼らの「生きられた体験」が存在したはずであるが、その部分の考察が、ヒル論文では不十分である。

第二の論点に移る。芥川賞を受賞した「白い人」と、次いで書かれた「黄色い人」は、人種的なタイトルだが、主題的には、評論「神々と神と」以来の遠藤のクリスチャニズムを巡る問題が前景化されている。しかし「アデンまで」で提示された、白人と黒人、そして黄色人たる日本人とを巡る人種間の葛藤という主題が消失したわけではなかった。

反植民地主義の思想家ファノンを参照して初期遠藤作品を読み直したときに、われわれは「アデンまで」に先行して書かれた伊達龍一郎名義の小説「アフリカの體臭」が単なる習作ではないことを理解することができる。また、ヒル論文が分析している「コウリッジ館」に登場する黒人学生ポーランは、その後、「異郷の友」「ルーアンの夏」「黒い旧友」と、一九五五年から一九七五年まで二〇年かけて書かれた作品のいずれにも登場しているという事実がある。私はこれらの諸作を「ポーラン・シリーズ」と名付けたいと思うが、このシリーズのなかで、ポーランと名付けられた黒人像が次第に変容していくことの意味も見えてくる。そして『死海のほとり』が、ポストコロニアル時代における西洋植民地主義の改訂版である現代イスラエルを舞台にしたことの意味も見えてくる。

遠藤文学に描き込まれた人種主義を考察することは、以下の研究によってすでに着手され、現在も行われている。

太田雄三「遠藤周作の作品に現れた人種的劣等感の問題」(『教養学科紀要』一九七二年)

眞嶋亜有「『黄色人種』という運命の超克——近代日本エリート層の〈肌色〉をめぐる人種的ジレンマの系譜」(栗山茂久・北澤一利編『近代日本の身体感覚』青弓社、二〇〇四年所収)

李英和「遠藤周作『アデンまで』論——留学体験と疎外されるという絶望」(『日本語と日本文学』一七号、二〇〇七年)

熊谷雄基(「遠藤周作の初期作品にみる人種問題の視点——『アデンまで』『コウリツジ館』を中心に」(『国際文化研究』一五号、二〇〇九年)

福田耕介「遠藤周作『アデンまで』における肌の色と肉体関係」(『白百合女子大学キリスト教文化研究論集』一七号、二〇一六年)

しかし、ここではファノンの思想は言及されていない。ファノンを参照することによって、それまで重要視されてこなかった作品に光が当てられる可能性が生まれると私は考えている。

最後に、第三の論点に触れておきたい。ポストコロニアリズムがフランスに導入されたのは英語圏に較べてかなり遅い。ファノンの最も浩瀚な伝記も英国人の手によるものである(Macey, David. *Frantz Fanon: A Biography*, 2nd ed. London, 2012)。ファノンはしかし、脱植民地化時代を考える上でくり返し立ち返るべき思想家であり、ヒルが主張するように、遠藤を参照することでファノン理解が深まるものであるならば——私もそれに同意するが——、他民族への非寛容的傾向が世界的に憂慮される二一世紀の今日、遠藤文学が世界に与える思想的衝撃は、キリスト教圏のみに止まらぬ、巨大なものとなるであろう。

さて、本研究では、遠藤の具体的な作品を分析することを通して、白人や黒人といった他者表象がどのように描かれているのかを明らかにしていく。私が刺激を受けた研究としては、Anne McClintock, *Imperial Leather: Race, Gender and sexuality in the Colonial Contest*, New York, 1995 や Samina Najmi/Rajini Srikanth (ed.), *White Women in Racialised Spaces: Imaginative Transformation and Ethical Action in Literature*, New York, 2002 などの文化研究を挙げることができる。

前節で私は従来の遠藤研究の限界について記したが、それはそのまま自分の過去の日本近代文学研究に当てはまるものであった。国際政治学の視点で日本近代文学を捉えるという視野はなかったのである。従来、遠藤研究にポストコロニアリズムが欠落していた大きな理由は、日本近代文学を専攻する大学院生が、国際政治学研究の知的訓練を受ける機会がなかった事実にあると考えられる。その意味で、本研究は、文学テクストを素材とした、学際的な文化史研究ということができる。

また、小説テクストが言語芸術であることを意識し、芸術を、バウムガルテンIIカント的な近代主観主義美学が説く「自己表現」ではなく、「世界表現」による「真理」の開示空間として捉え、「真理」の圧縮的提示の結果として「美」が放射されるという存在論美学(ミーメーシス美学)の立場に私が立つものであることも、ここに記しておきたい(1)。

(1) ミーメーシス美学については、青山昌文『美学・芸術学研究』放送大学教育振興会、二〇一三年参照。存在論美学については、渡邊二郎『芸術の哲学』ちくま学芸文庫、一九九八年参照。ミーメーシス美学も存在論美学も、近代主観主義美学の対極に立つ点で共通している。藤田一美『芸術の存在論——世界述語としての芸術存在』多賀出版、一九九五年も参照されたい。遠藤周作の小説観が、自己表現というよりは、世界表現であることは、第一部第二章で詳述する。

## 第二節 村松剛・辻邦生との比較

本研究では、遠藤のいくつかの作品を分析するのに加えて、同時代を生きた二人の文学者との若干の対比を試みる。村松剛（一九二九—一九九三）と辻邦生（一九二五—一九九九）である。

芥川龍之介研究を専門とする関口安義は「作家研究は、ターゲットとする作家一人を取り上げ、重点的に論じるだけでは、研究は深まらない。同時代の政治・思想・哲学・宗教・教育を視野に入れ、周辺の人物をも群像として取り上げて考えるのが必要条件だ」と述べているが、この主張に私は全面的に同意する（1）。関口はまた、その際、学際的な視点が必要になるとも述べている。本研究においては、国際政治学がその視点として重要な役割を果たすことになる。関口は、豊島与志雄、松岡譲、成瀬正一などを研究対象にすることで、「近代日本の知識人の精神史・思想史を、芥川龍之介を中心とした人物群像に焦点をあてて、考えよう」としていると自分の研究テーマを説明している（2）。本研究において私が試みようとしていることは、関口の言い方を借りるならば、遠藤を中心として、同時代人である村松と辻を視野に入れることで、一九二〇年代に生まれて大学でフランス文学を専攻し、第二次世界大戦後に活動した知識人の異文化理解について検証するということなのである。作家研究の体裁をとってはいるが、私としてはこの研究において、著者性以上に主題性に重点を置きたいと考えている。つまり、三人の文学者を比較して、優劣の判断を下すことに私の目的はないのである。

村松剛は、東京に生まれ、旧制第一高等学校卒業後、東京大学仏文科に学んだフランス文学者、文芸評論家である。遠藤がフランス留学から帰国したのは一九五三年のことである。翌年の六月に創刊された同人誌『現代評論』に参加したことから、遠藤は村松剛と知り合った（3）。当時遠藤は三十一歳、村松は大学院修士課程に進んだばかりで二五歳だった。村松は、旧制第一高等学校と東京大学学生が中心となって戦後に創刊された雑誌『世代』に三編の文芸評論を発表しただけの青年だった（4）。『世代』が終刊となり、村松は執筆の場所を得るために『現代評論』に加わったわけである。

同人会で初めて顔を合わせたときに、「あなたが遠藤周作ですか」「学生の頃、あなたのエッセイを読み、眉目秀麗な人を想像していました。しかし想像と実物があまりに違っているのでびっくりしました」と初対面の村松から言われて唖然としたと遠藤は回想している（5）。村松が六歳年下だが、杉並にあった村松の家には、酔っ払って何度泊まったかわからないと遠藤は記している（6）。遠藤は小説家として再出発する前で、『フランスの大学生』（早川書房、一九五四年）と『カトリック作家の問題——現代の苦悩とカトリシズム』（早川書房、一九五四年）という二冊の本を出したただだった。それで、同じように評論活動を始めたばかりの村松と意気投合したのだった。

二人にはもう一つ共通点があった。それは医学部への進学を勧める父親に叛逆して大学で文学を専攻したことである。このことは従来指摘されたことがないので、説明しておこう。遠藤が慶應義塾大学文学部予科を受験して合格し、医学部を受験しなかったために父親から勘当されたことは有名である。同じことを村松もしているのである。村松は敗戦を旧制第一高等学校一年生のときに迎えた。当時は五年制の中学を繰り上げて四年間で卒業させられたからである。一高で文科ではなく理科だったのは、理科学生に認められた徴兵猶予措置制度もあるが、代々村松家が医家で、医師である父親から医学部に進むことを勧められていたからでもあった。父村松常雄は精神科医で、東京裁判で奇矯なるまいをした大川周明が入院した松沢病院の副院長だった人である（7）。敗戦にともない徴兵猶予問題はなくなったが、文科への転科を父親は認めなかった。ところが、アメリカ占領時代に、その父親がロックフェラー財団に招聘されて国外に行ってしまったため、村松は東京大学フランス文学科を

受験して入学してしまったのである(8)。このような境遇の類似もまた、二人が互いに親近感を持った理由の一つであったと考えられる。

遠藤は、一九五五年、芥川賞を受賞した出世作「白い人」が『近代文学』誌上で活字になる前に、書き上げたばかりの手書き原稿を村松に見せている。東京駅から逗子に一緒に行くことになっていたその日、「今日は小説を書いてきたから、おまえ電車のなかで読め」「傑作やぞ」と遠藤は言った(9)。このように、きわめて親密で、信頼に結ばれた関係が、若い時代から二人の間にはあったのである。この年、遠藤は、村松と服部達とともに、『文學界』四月号から九月号に、「メタフィジック批評の旗の下に」を匿名で連載して注目を浴びた(10)。日本的な「自然主義」である私小説を尊しとする文芸ジャーナリズムに不満を抱いていた遠藤と村松との強い結束がうかがわれる。彼らは要するに「近代文学」派の批判から出発したのである。村松は荒正人(一九一三—一九七九)を名指しで批判したのである。

村松が咽喉癌のため六四歳で亡くなったとき、無宗教献花式の葬儀が青山斎場で営まれた。イスラエル副首相、中華民国李登輝総統、南アフリカ政府要人、元首相福田赳夫から弔電が届き、駐日イスラエル大使が参列した(11)。そこで遠藤は弔辞を読み、出会った頃を回想した。「君の学識の豊かさ、明晰な頭脳は、当時の私にはおどろきの種だった。あれから長い長い歳月、君は立派な仕事を次から次へと発表した。[……] 私は死の次の世界を信じている。その時君が初めて会った時のように笑顔で「村松だ」と言ってくれる時を信じている。どうか永遠の生命のなかで私の行くのを待っていてくれ」と述べた。(12)。遠藤は雑誌に追悼文も書いたが、ここでは「死はこわくないが、歴史に残る仕事をしなかったのが残念だ」という病床から届いた手紙の一節を引用し、「青春の友の死はこたえる。兄弟が死んだように思えるからだ」と書いた(13)。

このように、村松剛は遠藤周作を考える上で、無視することができない存在であった。また、彼は三島由紀夫(一九二五—一九七〇)ともきわめて親しい立場にあったので、昭和から平成にかけての日本文学を考える上で検討しなければならない評論家であることは歴然としている。しかしながら、村松に関する学術的な先行研究は乏しい(14)。

意外なことだが、村松はフランス留学をしていない。機会がなかったとは思われないが、彼は大学院時代から文芸評論家として活動しており、二年間の留学期間中に自分が文芸ジャーナリズムで築きつつある地位の喪失を恐れて日本に留まったものと考えられる。大学院でポール・ヴァレリーを専攻した彼は、その後アンドレ・マルローに関心を移す。初めて海外に出たのは、一九六一年にイスラエルでアイヒマン裁判が行われたときである。三二歳だった。裁判を傍聴した後、ヨーロッパを回って帰国したた、東ベルリンの実情を自分の目で見たことで、彼はソヴィエト連邦と共産主義への幻想を放棄することになる。アイヒマン裁判傍聴が機会となり、イスラエル政府との繋がりが生まれ、日本のジャーナリズムにおける中東問題の専門家となっていく。パレスチナ問題についても、彼はイスラエルの立場から論評を行った。その後もアルジェリアなど、世界の紛争地帯に新聞社の特派員として取材に出かけるなどして、行動する文学者として言論活動を行った人である。

フランス本国に留学した同世代のフランス文学者たちのほとんどは、同国の植民地を訪れてはいない。その意味で、アルジェリア戦争をアルジェリア側で取材した村松はユニークな存在であった。一九五八年から一九六一年までパリに滞在した辻邦生は、アルジェリア戦争をパリから見ているのである。文献主義ではなく現場主義、あるいはフランス本国から植民地を眼差すのではなく、植民地から本国眼差すなどは、彼の批評家としての威信を間違いない高めた。

陸上自衛隊市ヶ谷駐屯地で憲法改正を訴え割腹自決した三島由紀夫(一九二五—一九七〇)とは、母親同士が知り合いだったこともあり、単なる作家と批評家という関係を超えた親密な関係であった。また、妹の英子は舞台女優として三島戯曲になくはならない存在となった。築地本願寺で営まれた三島の葬儀では、剛が実行委員長を務め、英子は演劇界を代表して弔辞を述べた。三島の死後、村松は保守文化人として、文芸評論よりも政治評論に軸足を移していく。やがて村松は戦後の日本がアメリカ合衆国の「保護国」であると述べ、自民党政権を批判した。湾岸戦争に際しては、西側世界に属

する日本の国際貢献を唱えたが、その一年後に病没している。

遠藤より六歳年下ではあるが、フランス文学を専攻した村松が、「日本回帰」をして、天皇を元首とする新憲法を制定することを主張するようになったことは注目される。彼は著書のなかで、近代日本の知識人たちが持っていた白人世界への恐怖を語り、敗戦で被った自信喪失から日本人が自立心を取り戻すことの重要性を語った。彼の書物に歴史的人物としての女性がほとんど登場しない事実は驚くばかりであるが、女性性を排した男性性への強いコミットが村松の身上であった。第二次大戦後のナショナリストの象徴的存在が村松であるといってもよい。

もつとも、村松とほぼ同世代のナショナリストとして、村松以上に名高いのは江藤淳（一九三二—一九九九）である。慶應義塾大学で英文学を専攻し、二〇代に夏目漱石研究で颯爽と文壇に登場した江藤は、アジア太平洋戦争における日本の敗北とアメリカ合衆国の占領政策を思想的主題とし、明治の帝国日本を理想化する保守文化人として、文芸評論のみならず、政治評論でも活躍した。冷戦期の日本の文芸ジャーナリズムにおける江藤の存在は大きく、村松はその蔭に隠れているといえなくもない。江藤には、日本文学史には遠藤が分類される「第三の新人」を論じた著書『成熟と喪失』（一九六七年）があるので、遠藤文学を考察する上で、無視できる存在ではない。しかしながら、ポストコロナルの視点からすると、江藤は必ずしも遠藤研究に参照すべき重要人物とは思われない。敢えて単純化した言い方をすれば、彼にはアメリカ合衆国と日本という二項対立の構図しかなく、村松のように、中東やアフリカ世界に対する関心に乏しかったからである。つまり、村松の方が、国際政治関係について、同じような保守文化人ではあっても、より複眼的な視野を持っており、遠藤研究には相応しいのである。ちなみに、江藤の根底には抜きがたい文学性（ロマン主義的感傷性、悲劇的なものへの憧憬、自己劇化の傾向）があったが、村松にはこうした傾向はなく、非常に醒めた、散文的なところがあった。

さて、第一世界（白人世界）に対決的であった村松の目に、第三世界（アフリカや中東）はどのように映っていたのであろうか。彼はアルジェリア戦争で解放戦線を取材したり、南アフリカ共和国を訪れて論評をしている。彼は国際政治の現場を知っており、議論の水準は、「文士の政治談義」として一蹴することができない高さを持っていた。だが、同時代の批評家も、国文学研究者も、彼の国際政治論を分析する能力が充分ではなかった。そのため、彼は学術的な研究対象とされてこなかったのである。また、比較的若い年齢で亡くなったため、忘却されて久しい。著作集も編まれておらず、先行研究にも乏しいが、遠藤との関係を除外しても、再検討に値する人物である。一九八〇年代以降、欧米諸国知識人の保守化、酒井直樹の言葉を借りれば「西洋回帰」（15）と村松の「日本回帰」が併行していたことも興味深いところである。

遠藤はカトリック教会の独善性——特に第二ヴァチカン公会議以前の教会の姿勢に強い批判的姿勢を持っていたが、村松もまた、共産党Ⅱ国家体制のソ連が持つ独善性に批判的だった。村松の場合、批判の対象はクレムリンのみならず北京でもあったが、カトリック教会とソヴィエト連邦は、インターナショナルであることと、序列的権力組織の徹底、多様な思想を許容しないという点で共通している。その意味では、遠藤と村松とは共通しているところがある。しかし、遠藤が『死海のほとり』を転換点として、日本近世史から国際政治へと視野を拡大し、以後は歴史小説の体裁を取りながら国際政治にコミットしていったのに対して、村松は、国際政治から出発して、天皇を中心とする日本主義へと回帰していった人であるところが異なると私は見ている。

辻邦生は、東京に生まれ、旧制松本高等学校卒業後、東京大学仏文科に進んだフランス文学者、小説家である。スタンダールを専攻した辻は、一九五八年にフランスに留学した。一九六一年に帰国した辻は、遠藤が『沈黙』を刊行して評判となった一九六五年、立教大学一般教育部講師となり、翌年助教教授となった。一九六二年に東大を退官して同大教授に就任した渡辺一夫の招きによる。同大フランス文学科は一九六三年の創設である。当時立教大学には村松剛が講師としてすでに在籍していた。村松は大学院博士課程を単位取得退学した一九五九年に立教大学一般教育部専任講師になっていたの

である。彼が助教になるのは一九六七年のことである。こうして、東大時代に同じ仏文科にいた二人は同僚となった。

帰国後、辻は小説家として旺盛な創作を行い、亡くなるまで多くの長短編小説を発表した。辻の小説の特徴は、ヨーロッパを舞台とした作品が多いことである。登場人物がほとんど全員白人であることも少なくない。彼が描くヨーロッパ世界は、「白いヨーロッパ」という印象を与える。彼はまた、日本人男性と白人女性との国際恋愛をしばしば描いた。

戦時中の日本の軍国主義に嫌悪を禁じ得なかった辻は、フランスを理想化していた。それは敗戦後の日本において、フランスがレジスタンスの国として神話化されていた思潮のなかに辻もまたいたということであるが、辻が亡くなるまでフランスを愛し続けた。理想化され、ほとんど神格化されたのは、フランスだけではなかった。辻は、神々しいまでに美化された女性たちを描いた。辻は作家としての技量が抜群で、堅固な構力と並外れた描写力を持っていたので、ヨーロッパを舞台にした数々の物語を書くことで、多くの日本人読者を魅了し陶醉させることができた。

辻は政治的な発言をすることがなく、文学者の政治的声明に署名することもなかった。その意味では、村松とは対照的な存在であった。しかし、政治から逃れうる文学はない。辻のテクストには、フランス本国や、旧植民地を舞台とした作品が多く、そこに描かれた現地人の表象には、辻が身につけていた価値観——共和国フランスの価値観を「普遍」と見なす——がうかがわれる。辻は第二次世界大戦後の日本人が持った欧化主義的な傾向を象徴する人物のように私には思われる。しかしそれはある意味で当然のことであった。なぜなら、アジア太平洋戦争の敗北は、第二の開国をもたらしたのであり、日本的なものは全て価値なきものとされ、欧米の価値観が優位なものとなされたからである。その意味では、日本の再建を担う世代であった辻が、「西洋」を理想化したことの背後には、日本人としての大志があったと見ることもできよう。日本の「後進性」に劣等感を抱き、フランス人に近づくことで、文明化された「人間」になりたいという当時の日本人の無意識の欲望を、辻が生産したテクストから読み取ることもおそらく可能なのである。

彼に関する学術論文の少なさは、生前の著書の多さを考えると奇妙といつてよいほどである。岡崎昌宏は、辻に関する唯一の博士論文の著者だが、その論文のなかで、文庫本解説を先行研究として数えなければならぬほど学術的研究の蓄積が少ないこと、そして辻の自己解説癖に引きずられた論が多いことを指摘している。

ここで思い起こされるのは、吉田健一（一九二二—一九七七）である。磯田光一は、彼を「肉体化した鹿鳴館」と呼んだ（16）。彼は外交官吉田茂の子として幼少時からヨーロッパで生活をした経験があった。一九一一年（明治四四年）、健一誕生の前年に撮影された記念写真を見ると、ステッキを持つ茂と、大きな帽子を被り健一の姉を膝に乗せて椅子に腰掛けた妻との間に、一見して肌色の違う東南アジア系の「女中」が収まっていて驚かされる。これはコロンIAL時代における白人植民者の「家族の肖像」の修辞学に忠実な画像である（17）。そういう時代に、健一はヨーロッパで青少年時代を送った。西洋的価値観を内面化していた健一は、英国もフランスも過度に理想化することはなかった。むしろそういう日本の知識人を軽蔑した。彼は欧化主義者ではなかった。ヨーロッパは学び取るものではなく、自分の中にすでに存在していたからである。しかし、そのことで苦悩することも彼にはなかった。

小説家立原正秋は在日朝鮮人であったが、日本人以上に日本人らしくふるまおうとして生きた人である。彼が小説世界に描き出した「日本の伝統」は、正に《作られた伝統》（エリック・ホブズボウム）であったが、彼にはそうせざるを得ない痛切な内的必然性があった。村松は、本多秋五と鎌倉の鶴岡八幡宮の境内を歩いていたときに、偶然立原と出会って紹介された。「村松さん、ぼくはあなたが好きなんですよ。あなたには敵が多いでしょう、ぼくも敵が多いから……。」と立原はいった（18）。後に村松は、自著『評伝アンドレ・マルロオ』の推薦文を立原に依頼した。二人は、ある種の同族意識を感じるところがあったのである。だが立原は、フランス最員の辻を嫌い、辻も立原から嫌われていることを自覚していた。辻への評価を立原が修正したのは、辻が『安土往還記』（一九六八年）を

書いた後である。辻には、『嗟峨野明月記』（一九七一年）『天草の雅歌』（一九七一年）『西行花伝』（一九九五年）といった、日本の歴史に取材した小説もある。本研究ではこれらを考察の対象とはしない。なぜなら、遠藤文学研究のために辻文学を参照するからであり、辻の一側面に光を当てて光を意図しているからである。

村松と辻は思想的には対照的な人物ではあるが、二人を参照することによって、遠藤だけを見つめるだけではわからない彼の思想的立場についても、より明確に認識することができるであろう。遠藤自身が、「批評家はある作品を同時代の作家の別の作品と関係で眺めるべきだ」（19）と述べ、例として三島由紀夫と武田泰淳との比較を提案したことがある。遠藤をグレアム・グリーンと比較した先行研究は少なからずあるが、村松や辻と比較したものはないのである。

(1) 関口安義「作家研究」『日本近代文学』九一集、二〇一四年、二〇七頁。

(2) 同右、二〇五頁。

(3) 他の同人には、奥野健男、清岡卓行、佐古純一郎、島尾敏雄、進藤純孝、武井昭夫、服部達、日野啓三、吉本隆明がいた。

(4) 『世代』は一九四六年七月に創刊され、一九五三年二月に終刊した。文学史的立場づけについては、磯田光一「解説——ある世代の展開」（『世代』復刻版 別冊解説）一九八〇年、日本近代文学館）参照。

(5) 遠藤周作『落第坊主の履歴書』文春文庫、一〇三頁。遠藤が友人をエッセイに登場させる際には、滑稽化の粉飾を凝らすことが少なくない。この文章のなかでも、「村松は非常な秀才だが無理にソソつかしい男で、遊びにいくと和服を裏がえしに着てあらわれたり、花瓶と灰皿を間ちがえて煙草の灰を入れるのは日常茶飯事だった」と記している。

(6) 同右、二二五—二二六頁。

(7) 大川周明の日本側主治医は院長内村祐之であり、副院長の村松常雄は米軍との折衝役だったという。村松剛『私の「正論」』日本教文社、一九七六年、一〇二—一〇四頁参照。

(8) 村松剛・勝田吉太郎『対談 一つの時代の終わりに——世界史のなかの近代日本』日本教文社、一九八六年、一四一—一四三頁。

(9) 村松剛『歴史とエロス』新潮社、一九七〇年、二二七—二二八頁。逗子には服部達の住まいがあったので、村松と遠藤は服部宅へ行ったのではないだろうか。

(10) メタフィジック批評については、松本鶴雄「批評家としての遠藤周作——メタフィジック批評について」『国文学解釈と鑑賞』第四〇巻七号、一一八—一二三頁参照。

(11) 和田正美「村松剛『西欧との対決』新潮社——著者への追悼を兼ねて」『明星大学研究紀要』三号、明星大学日本文化学部言語文化学科、一九九五年三月、一六三頁。

(12) 毛利順男「村松剛の批評の世界」『鶴見大学紀要 第一部 国語・国文学編』三五号、一九九八年三月、一二一頁。

(13) 遠藤周作『心のふるさと』文藝春秋、一九九七年、七〇—七一頁。

(14) 書評、選評、追悼文、攻撃文書を除外すると、参照に価するものとしては、入江隆則「村松剛とニヒリスムの超克」『文学の沙漠のなかで』新潮社、一九八五年、一一三—一四三頁）、毛利順男「村松剛の批評の世界」『鶴見大学紀要第一部国語国文学編』三五号、一九九八年三月、一二二—一五五頁）、井上隆史「村松剛と三島由紀夫」（松本徹、佐藤秀明、井上隆史編『三島由紀夫論集1 三島由紀夫の時代』勉誠出版、一九四—二〇五頁）の三編にとどまる。

(15) 酒井直樹『死産される日本語・日本人——「日本」の歴史—地政的配置』新曜社、一九九六年、第VI章「西洋への回帰」と人種主義——現代保守主義と知識人」参照。

(16) 磯田光一『鹿鳴館の系譜——近代日本文芸史誌』講談社文芸文庫、一九九一年、三四五頁。

(17) 『新潮日本文学アルバム 吉田健一』新潮社、一九九五年、四頁。コロニアル時代の「家族の肖像」については、アン・ローラ・ストーリー『肉体の知識と帝国の権力——人種と植民地支配における親密なるもの』（永淵康之他訳、以文社、二〇一〇年）、及び Anne Macockintock, *Imperial Leather: Race, Gender, and Sexuality in the Colonial*



*Contest* (New York, 1995) 参照。

(18) 村松剛「立原正秋——根の回復への夢」『西欧との対決——漱石から三島、遠藤まで』新潮社、一九九四年、二四三頁。

(19) 遠藤周作「新しい批評の基準を」『朝日新聞』一九五八年二月二日（『春は馬車に乗って』文春文庫、一九九二年、六四頁）。

### 第三節 研究の構成

遠藤周作については、多くの論文が書かれてきたが、実は取りあげられる作品には偏りがあり、「白人」「海と毒薬』『沈黙』のように、繰り返し論じられる作品がある一方で、全く論じられてきたことがないテキストが実は数多く存在する。遠藤研究の基本形が、キリスト教が主流を住める西洋人と非キリスト教文化の日本人という対比的コンテキストであったことから、自ずと論じられるテキストが限定されてきたものと考えられる。本稿で私は、先行研究が乏しい作品を取りあげるように心がけ、また先行研究のある作品については、新しい視点から論じるよう努めた。実際には、ポストコロニアリズム研究という本稿の視点が、これまであまり光を当てられることがなかった作品群を発見させたといった方が正確である。

第一章は、背景と前史として、第二次世界大戦の最中と、大戦後の一九五〇年代における日本人のフランス留学について、歴史的な確認を行った。大戦中については、留学時の遠藤が親しくした片岡美智ら、フランス政府給費留学生三人の男女学生の体験をたどり、戦後については、遠藤と同じく、一九五〇年代にパリ留学した多くの日本人学生たちについて、須賀敦子を中心に考察する。女性を中心にしたことには理由がある。近代西洋植民地主義は、人種主義と性主義と複雑に絡み合いながら作動しているが、本論で考察対象とした遠藤、村松、辻が全て男性であるため、ジェンダーの視点による分析が充分とはいえないと考えたからである。その後に、戦後の日本人留学生を主人公とした遠藤の作品「爾も、また」及び遠藤の留学記録と、辻の留学日記『パリの手記』を比較することを通して、遠藤と辻の相違点について考察する。

第二章は、これまで正面から考察されることがなかった遠藤の小説認識を、辻のそれと比較することで明らかにする。遠藤は、創作行為を近代主観主義美学のように「自己表現」とは考えておらず、虚構を用いて人間の真実を描き出す「世界表現」として考えていたことを、渡邊二郎の存在論美学を援用して明らかにする。

第三章は、近年、遠藤の小説第一作として認定された短篇「アフリカの體臭」（一九五四年）と「アデンまで」（一九五四年）を中心に、遠藤の小説家としての出発点にあったアフリカと、西洋植民地主義に対する遠藤の認識を考察する。引き続き、モロッコ出身の黒人ポーランを主人公にしたシリーズを取り上げて、黒人表象が次第に変容していく過程を考察する。最後に、大航海時代のモザンビーク出身の黒人を主人公にした娯楽小説『黒ん坊』（一九七一年）を取りあげて論じる。

第四章は、白人の表象について考察する。最初に、西洋人と日本人、白人と有色人、男と女といった複層的レベルで絡み合う権力関係を主題とした「月光のドミナ」（一九五七年）を取り上げて、初期遠藤の、単純ではない異文化理解について考察する。続いて「ジプシーの呪」（一九五九年）を取りあげ、ヨーロッパ社会の周縁存在であるロマ表象について考察する。さらに、「変な外人たち」（一九六六年）を取りあげ、一九六〇年代の東京で、白人男性が落魄し、白人女性もまた日本人男性の憧れの対象ではありえなくなった姿を考察する。最後に、「ワルシヤワの日本人」（一九七八年）「カプリンスキー氏」（一九七九年）を取り上げて、高度経済成長期の日本人男性の東ヨーロッパに対して抱いた傲慢な優越感を考察する。

第二章は、アジア人、特に中国人と朝鮮人の表象について考察する。最初に「夏の光」（一九五八年）を取りあげ、満州社会における日本人と中国人との権力関係について考察し、次に関東大震災時の大杉栄殺害事件をモチーフとした「地なり」（一九五八年）を取りあげて、日本人に潜む暴力性の作者の認識について考察する。また、現代インドを舞台とした『深い河』（一九九三年）を取り上げ、

インディラ・ガンディーとシーク教徒のそれぞれの描き方の問題点を考察する。

第六章は、若者たちが、皇族を名乗る人物とともに、アジア太平洋戦争の爪痕が残る東南アジアを訪れるという新聞小説『一、二、三!』（一九六四年）と、冷戦期の東京を舞台に、国家・戦争・自衛隊などについて文学的探求を試みた新聞小説『どっこいしょ』（一九六七年）を考察する。さらに戦時中の忌まわしい体験に、戦後になっても苦しみ続ける元兵士を描いた「鉛色の朝」を、辻邦生の「影」と比較考察する。

第七章は、遠藤の兄正介と古山高麗雄を比較して、遠藤における「兄なるもの」に光を当てるとともに、従来研究対象とされてこなかった素人劇団「樹座」の演目『蝶々夫人』（一九八四年）を取り上げて、その演出に注目し、「下請けの帝国」となった日本への政治的イロニーを考察する。併せて、村松剛が戦後の日本をアメリカ合衆国の「保護領」国家として捉えていたことを比較考察した。

第八章は、『死海のほとり』（一九七三年）を取りあげ、脱植民地化時代における植民国家イスラエルの描き方を分析することで、そこに伏流する反植民地主義を考察する。その上で、村松のイスラエルに対する認識を、『ユダヤ人』『中東戦記』を取り上げて考察する。さらに、パレスチナ解放闘争を思わせるハイジャック事件を引き起こす青年を登場させた『砂の城』（一九七六年）を分析する。さらに、『侍』（一九八〇年）の分析を通して、歴史小説に隠されている現代の植民地主義批判を明らかにする。

第九章は、遠藤のテクストに登場する犬の表象をコロナアル・コンテクストの下で分析することで、遠藤の反植民地主義思想を明らかにする。また、短篇「男と猿と」（一九六〇年）と長編『彼の生きかた』（一九七五年）を取りあげて、神・天使・人間・動物というキリスト教的階層秩序に対する遠藤の対抗的認識を浮き彫りにするとともに、『死海のほとり』を新約聖書学との関連から再読解し、独自のイエス像の構築に向かった遠藤の軌跡を明らかにする。

第十章は、帝国医療という分析概念を手がかりに、「ジュールダン病院」（一九五六年）「雑木林の病棟」（一九六三年）を取り上げて、遠藤文学に描き込まれた近代西洋医療、植民地主義、キリスト教の関係について考察する。また、従来研究対象として扱われてこなかった「心あたたかな医療キャンペーン」（一九八二―一九八五年）を分析することで、このキャンペーンの出発点となった諸問題が、近代西洋医学そのものに胚胎した帝国主義性と結びつくものであったことを明らかにする。また、遠藤の独自のイエス像についても、近代西洋医学における「神のごとき医師」という医師像との対比から考察する。

結論では、本論で主題別に考察した内容を解体して、可能な限り時系列に沿って再構成し、全体を集約してまとめとする。

# 本 論

# 第一章 背景と前史 日本人のフランス留学

## ——戦争・性差・人種・階級

### 第一節 第二次世界大戦下のフランス留学

#### ——片岡美智・湯浅年子・加藤美雄のパリ

##### はじめに

遠藤周作のフランス留学時代の日記を読むと、リヨンやパリで接触のあった人物——瀧沢敬一（一八八四—一九六四）、森有正（一九一一—一九七六）、加藤周一（一九一九—二〇〇八）といった人々の名前が登場するが、なかには意外な人名を見出すことがある。フランス文学者片岡美智（一九〇七—二〇一三）である。

遠藤と片岡の関係については、これまで語られたことがない。一九五〇年一月一六日にパリの片岡から手紙を受け取った遠藤は、四日後に彼女に雑誌を送っている。一月一六日にふたたび郵便が届いた。「ヂュ・ボスの参考書文献とモーリアックのヂュ・ボス評、ターブル・ロンド誌のつたもののタイプ」が同封されていた。二日後、遠藤は休暇中にパリにいけない旨の返信をしている。しかし、二七日になって、突然パリに行くことを決心した遠藤は、パリに到着すると、タクシーで片岡宅を訪問している。それからルオーの展覧会を見たあと、夜汽車で黒人学生ポランしか残っていないリヨンの寄宿舎に帰っている。翌年は、一月三一日に、片岡から手紙が来ている。その後は長らく音信がなく、一月一日に「日本に発たれるとの事」と日記に記載がある。それまで「片岡美智嬢」と書かれていたのが、この日は「片岡美智夫人」となっている。同月八日にも「片岡夫人」から手紙が来た。同月一六日の日記には、翌月にパリに行く計画と、その際に面会すべき人名が列挙されている。「アルベール・ベガン、ジョルジュ・ビュルナン、労働司祭、クロード・エドモンド・マニー」と書かれた後に、「片岡美智、森有正、木下氏、萩原氏」とある。一月三日の日記に「片岡夫人から手紙で事情わるくお泊め出来ぬという」とあるのが最後である。

フランスにわたった遠藤が一期親しく文通し、日帰りでわざわざパリに会いに出かけた片岡美智とは、どのような女性だったのだろうか。年代的には、埴谷雄高（一九〇九—一九九七）、大岡昇平（一九〇九年—一九八八）、椎名麟三（一九一一—一九七三）、武田泰淳（一九二二—一九七六）、野間宏（一九一五—一九九一）といった、第一次戦後派の作家たちと同年代である。明治の終わりから大正にかけて生まれた世代、男性であれば、中国大陸や東南アジアの戦地に有無を言わず送り込まれた世代である。

片岡美智はフランス政府給費留学生として、第二次世界大戦下のパリに学んだ人であった。本節では、彼女とその周辺に光を当てることで、第一次戦後派の同世代が体験したもう一つの人生を概観することにしたい。それは、片岡と、やはりフランス文学者である加藤美雄（一九一五—二〇〇〇）、そして物理学者湯浅年子（一九〇九—一九八〇）という三人の若い日本人をめぐる物語である。

第二次世界大戦では、日本はドイツ、イタリアと三国同盟を結び、枢軸国陣営として、英国、フランス、アメリカなどの連合国陣営と戦火を交えた。そのような時代に、彼らはどうしてフランスに留学することができたのであろうか。彼らは何を考え、何を求めてフランスに渡ったのか。そしてフランスでどのような体験をしてきたのか。

また、戦時という非常時においては、文学や科学を研究するということの意味が平時以上に鋭く問われざるを得ない。ドイツ占領下のパリでポール・ヴァレリー（一八七一—一九四五）の講義を聴くとはどういう行為なのか。扉も天井も窓も破壊された実験室で瓦礫をよけながら物理学の研究を続けるとはどういうことなのか。日本大使館の勧告に背いて解放直前のフランスになお文学研究のために留まるとはどういうことなのか。そもそも学問とは——科学とは、文学とは何なのか……。彼らの物語は、そうした問いにわれわれを直面させずには置かない。そしてその問いかけに直面することは、遠藤周作という作家をより深く理解するためのみならず、昭和の戦争が風化しつつある現在にこそ必要なことでもある。

## 一 第二次世界大戦勃発後のフランス行き

ステファヌ・マラルメやモーリス・セーヴの研究で名高い加藤<sup>とみお</sup>美雄が神戸港からフランス郵船のジャン・ラボルド号でマルセイユに向かったのは、一九三九年十二月のことである。当時のフランスは大英帝国に次ぐ世界第二の植民地大国だったが、大日本帝国もまたアジア諸地域に植民地を有していた。万世一系の天皇を戴く帝国日本は「大東亜」の覇者たることを自認していた。

大阪で生まれた加藤は、旧制第三高等学校で第一外国語としてフランス語を選択した。敗戦の翌年にサルトル「壁」を訳出してサルトル紹介の先鞭をつけた伊吹武彦（一九〇一—一九八二）の薫香を受けた。野間宏（一九一五—一九九一）が同窓だった。週一五時間の授業のほか、週二回の個人教授を受け、関西日仏学館にも通った。同館は詩人大使ポール・クロードルの努力で東京日仏学院に続いて一九二七年に開館した学校である。赴任は実現しなかったが、リセ教師時代のサルトルが派遣教師の公募に合格したことは有名である。

京都帝国大学で仏文学を専攻したのは、明治帝国憲法下で家督を相続する権利と義務を持たない次男だったからであろう。フランス語で書いた卒業論文は、モンテーニュ『エッセー』であった。一九三八年度のフランス政府給費留学生試験に合格したが、最年少であることから翌年回しにされてしまった。年が改まり、留学が目前に迫った一九三九年九月、ナチス・ドイツが英仏に宣戦布告した。九月一二日、ポール・ヴァレリー（一八七一—一九四五）がラジオ・フランスで談話を読み上げた。偉大なドイツ国民を、思考の抑圧者ヒトラーから解放しなくてはならないと。

ヨーロッパからは、在留邦人たちが引き揚げ船で次々と日本に向かうことになる。一九三九年九月九日、ボルドーに入港した鹿島丸は、宮本三郎、野上豊一郎、野上弥生子、中村光夫ら一四二名を載せて同月二五日にニューヨークに向けて出帆した。榛名丸は一二月二五日にマルセイユから四九名の日本人を乗せて出港した（1）。

留学どころではなくなってしまうと加藤は思った。ところが三ヶ月後、フランス大使館から「貴君の生命の保証はできないが、フランス留学を許可し、渡仏のための実費及び準備費を支払うこととする」という通知がきた。このようなわけで、二四歳の加藤は、第二次世界大戦下のフランスに渡ることとなったのである。私財を投じてパリ日本館を建てた薩摩治郎八が、給費留学生一人一人を箱根の別荘に招いて、祝福と必要な情報を授けてくれた。

ジャン・ラボルド号は純白の船体に四本の煙突を備えていた。甲板の上から見送りの人々を眺めながら、「自分が戦国に輸送される兵士の姿にも似て一抹の悲壮感があった」と加藤は回想している（2）。神戸からマルセイユまで、寄港地や到着日時は全て秘密だった。フランスの敵国ドイツの潜水艦に狙われなくても限らないからである。ちなみに加藤は二等船客として乗り込んでいた。船員たちは親切で、歴史専攻の学士という給仕と食後に話し込んだりもしている。神戸を出帆してから二週

間後、偶然、パーサーと話を交わした加藤は、一等甲板の更の上層にある船長室で船長とも会見している。航海予定、フランス領の港について説明した船長は、フランスの雑誌を数冊貸してくれた。その後、メートル・デテル（食堂長兼世話係）の案内で、本来二等船客には立ち入ることが禁じられている特等室、半特等室、一等室、読書室なども見学した。「整然としているが、豪華というにはほど遠い」（3）という感想が面白い。船内にはフランス人のほか、アメリカ人、タイ人、インドシナ人など国際色豊かだった。彼らと卓球をして遊んだ。船内で不愉快な思いをすることはなかった。「フランス船はその船上での生活とともに留学生を国際的に育ててくれた」（4）と加藤は記している。

香港では、棧橋で英国軍楽隊の賑やかな出迎えを受け、山上にある英国人別荘地の美しさに感嘆した。そこは「夢の楽園」に思えた。サイゴン港が近くなると、英仏の水上機が護衛のためにラポルド号の上方を飛行していた。シンガポールの印象はあまり良くなく、サイゴンよりも見劣りがすると感じた。マラッカ海峡では、敷設機雷で沈没した英国船のマストが海上から突き出ているのを見たりもした。コロンボでは、案内所の主人が日本語を話すことに驚いている。アデンを経て、ソマリランドのダイブーティでは、夜、「大きな建物の壁のうら側の月光のあたるところに白いものが一ぱいころがっている」ことに驚いた。「白い布にくるまって月光を浴びて眠っている」人間たちだったのである（5）。スエズ運河を渡り、ポートサイドではエジプト見学を自粛した。戦時中であり、無事にフランスに到着することが給費留学生としての義務だと考えたからである。こうして加藤は一九四〇年一月三〇日午前七時にマルセイユに着いた。薩摩治郎八の息子が手配した日本郵船関係者が出迎えてくれていた。マルセイユを観光し、ホテルで一泊した。

日本近海では、その九日前、ホノルルから横浜に向かっていた日本郵船の貨客船浅間丸が英国軽巡洋艦に臨検され、ドイツ人乗客二一名が戦時捕虜とされるといふ事件が起きている。日独防共協定を結んでいた日本と英国の関係は悪化した。第二次世界大戦は日本にもすでにこのような影響を与えていたのだった。

## 二 コレージュ・ド・フランスでのヴァレリー講義

ジャン・ラポルド号には、加藤のほかに二人の給費留学生が乗船していた。三四歳の笹森猛正（一九〇五—一九九〇）と、三二歳の片岡美智である。

笹森は青森県出身。弘前高等学校卒業後、黒石実科高等女学校の英語教師をして学資を蓄え、東京帝国大学仏文科に学んだ篤学の人である。戦後は学習院大学で教鞭を執り、ポーヴォワールの翻訳など多数がある。本人も詩を書いた。

片岡は福井県出身だが、十一歳で東京に出ていた。土佐出身の祖父片岡健吉はクリスチャンで、明治憲法発布以前は投獄された経験もあるが、後に衆議院議長を務めた硬骨の人である。父は歯科医だった。美智も幼い頃から「いいでしたら、きかない」（6）一本気な性格だった。「お茶の水」ではなくキリスト教系の女子学院に進学したのは、母親が「これからの女は英語が出来なくては」という意見だったからである。

関東大震災に被災した翌年洗礼を受け、東京女子大学に進学した。文学から哲学に興味に移っていた片岡は、英語専攻部予科から高等学部編入し、大学部哲学科に進んだ。カント『純粹理性批判』に関する一〇〇枚の卒業論文を書いて卒業した。片岡はパスカルにも惹かれるものを感じていたので、ドイツ語とともにフランス語も学んでいた。学生時代に、ドイツから帰国したばかりの高倉徳太郎牧師の研究会に顔を出し、紹介されたルドルフ・オットー『聖なるもの』に感銘を受けた。内村鑑三の集会にも数回話を聞きにいった。しかし「その熱意には動かされたが、しかし、それが晩年の内村氏であったためか、あまりに排他的挑戦的で、依怙地に思えるほど独善的なその調子に共感がもてなくなってしまう」（7）という。一九二八年に大学を卒業してからはしばらく放心状態だったが、部屋に溢れる書物にうんざりした片岡は、これらを持って、世の中に出ようと思った。

書店で働きはじめ、左翼の若者とのつきあひも生じた。メーデーに参加したりもした。街で「女子

大まで出たくせに「ビールを飲んだことがスキヤンダルとなり、彼女は店主から解雇を申し渡された。せめて解雇手当を出させるべく、「何が彼女をさうさせたか」の作家藤森成吉宅（一八九二—一九七七）の応援を得ようと組合関係の知人二人と同宅を訪問した後、片岡は特別高等警察の男たちに取り囲まれ、一晚拘留された。この体験は、彼女を意気消沈させるどころか、憤激させた。彼女は確かに、着飾ることや、ダンスホールやバーに行くことが好きだった。けれども彼女はそうした形だけの「モガ」（モダンガール）ではなく、硬骨漢たる祖父の血を引く鉄の女だったからである。

一九三四年、法政大学文学部仏文科に入学した。学科長豊島興志雄が女子学生の入学を認めることに積極的で、東京女子大を卒業していた片岡は口頭試問だけで、予科を免除され本科に入学することができた（8）。

卒業論文はスタンダールだった。法政大学を卒業した一九三九年、フランス政府給費生試験に女性も応募できることになり、挑戦して合格した。しかし、このときにも片岡は特別高等警察に出頭を命じられ、麹町署で取り調べを受けた。「少しでも外国に関りを持つ女をスパイとにらむことが、当時の特高の第六感」（9）だったのである。「おまえのような女は、死んだ方が御国のためだ！」と片岡は罵られた。ところが、警視庁外事科で片岡の調査を担当した人が、偶然アテネフランセの同窓であり、未知の人ではあったが彼女を信用してくれたために事なきを得た。彼女は大日本帝国で「これ以上生きてゆくことに熱意を失い始めた」。「この社会はあまりにも窮屈だ！」としか思えなかったからである（10）。

一九三九年一二月、片岡は銀座で留学用のコートなどを揃えた。通りでは、日本髪の「五黄の寅」の女性たちが出征兵士の腹巻きに千人針を縫っていた。駅では日章旗の小旗を手にした人々が出征兵士のために口々に万歳を叫んでいた。

片岡が乗り込んだジャン・ラボルト号。灯火管制で薄暗く、甲板では喫煙さえ禁止だった。明滅する煙草の光を目印に攻撃を受けるかもしれないからである。娯楽らしい娯楽は一切なし。乗客はまばらだった。船は「北支」（秦皇島）まで上った。二〇〇名のインドシナ人兵士をサイゴンまで移送するためである。加藤の目には見えても見えない存在である彼等が、片岡には見えていた。「濃い鉄色の塊が、巨大な幼虫のようにうごめいている」（11）のは、作業をする苦力たちだった。上海の南京町は「悪魔的どさえ思えるほどの悲惨」だった。しかしサイゴンは美しかった。コロンボ観光の自動車のなかで、自分を魅了した世界について、加藤と笹森に語った彼女は、笹森から「フン、片岡さんのスタンダールって、そんな程度のもんですか」と嘲笑され、すっかり萎縮してしまった。船の中で、笹森は無口で深刻な顔つきをいつもしていたという。

マルセイユは雨だった。年配の女たちの練り服装が、さながら喪服のように見えた。パリに行く列車の車窓からは、冬枯れの景色だけしか見えなかった。車内も灯火管制が敷かれ、乗客たちはだまりこくっていた（12）。片岡の記憶のフランスは、こうして始まっている。パリ行きの列車は朝八時にサン・シャルル駅を出発した。パリに到着したのは夜の一〇時だった（13）。

パリのリヨン駅で加藤、片岡、笹森の三人を出迎えてくれたのは、前田陽一（一九一一—一九八七）ら三人の日本人だった。前田は東京帝国大学仏文科を卒業した一九三四年から、フランス給費留学生としてパリにいた。妻と乳飲み子がおり、日本大使館で官補としても働いていたのである。ほかの給費留学生たちはすでに日本に帰国していた。

加藤はパリ国際大学都市内の地方会館に入ることになった。設備が整っている日本館は、フランス政府の徴用となっていたからである。地方会館はフランスの各地方出身学生のための宿舍であった。各部屋のインテリアは部屋ごとに同一色で見事に統一されていた。中心となる国際会館も大部分が徴用されていたが、食堂だけは学生たちに開放されていた。この時点で、給費留学生の今後には不透明なところがあったわけだが、受付窓口の女性は、戦時下でも給費は継続されるだろうとの見通しを誠実な口ぶりで伝えた。

片岡は国際女学生会館に入った。翌日の午後、留学生たちは大学都市事務所です諸手続をし、日本大使館に向いて大使に会った。午後は前田陽一のルーノでパリ見物をした後、加藤、笹森、片岡そろ



ってパリ大学文学部で初めての聴講をした。

コレージュ・ド・フランスでは詩人ポール・ヴァレリーだけが「詩学」の講義を続けていた。数十人の聴講者を前に、六九歳の「フランスの知性」は黒板を使いながら九〇分の講義を行っていた。聴講者に女性や年長者ばかりが目についたのは、若い男は兵役にとられていたからであった。ヴァレリー自身、息子フランソワが九月一六日に入隊していた。ヴァレリーは一九三七年十二月からコレージュ・ド・フランスで「詩学」を講じていた。内容は詩作技巧に関するものではなく、人間存在のさまざまな制作行為に関する生産システムの解明を目指したものであった。前年一月一日に三年目が開講され、講義は金曜日と土曜日の一時から八番教室で行われていた。一月の土曜日の講義では、レオナルド・ダ・ヴィンチについて、日本の浮世絵画家を例として挙げながら講義がなされていた(14)。

ヴァレリーを聴講した翌日、加藤らは日本大使館に行った。紀元二千六百年を祝賀する紀元節(二月一日)だったのである。パリの日本人は全て大使館に集まった。一〇〇人くらいだった。大使が非常時日本を思わせる謹厳莊重な挨拶を行って、加藤ら留学生たちを重苦しい気持ちにさせた。記念歌を斉唱し、大日本帝国万歳を三唱した。「フランス政府のわれわれ留学生にたいする応対と、日本人大使館の邦人の扱い方にはまさに雲泥の差があるように思われた」と加藤は記している(15)。

二月末の未明に、加藤は初めて空襲警報を聞いて飛び起きた。ドイツ機の飛来があったらしかった。不機嫌になっていたヴァレリーは「寝ているところを起こされて、避難場所に連れて行かれたわたしの孫娘は、怒って、ドイツ人を全員殺したいと言いました。それは、とつてもすばらしいアイデアです！」と書いている(15)。

灯火管制のため、家の全ての窓に青ペンキが塗られているパリの暗さが、明るい地中海を経てきた片岡の眼には陰惨に映じていた。ルーブル美術館などでは、万が一の事態に備え、貴重な収蔵品を下室に移動させたりしていた。とはいえ、パリでは音楽会や演劇などがまだ行われていた。桑原武夫や伊吹武彦を識っている日本人最良の本屋があり、日本人留学生たちには二割引で本を売ってくれるなどのささやかな慰めもあった。

### 三 片岡美智と湯浅年子

三月二日、加藤がコレージュ・ド・フランスでヴァレリー講義を聴講していると、途中で教室の後ろから笹森と片岡が入ってきた。学生たちがふりかえったが、ヴァレリーは気にすることもなく講義を続けた。夜一〇時にリヨン駅に井上正雄(一九一五)と湯浅年子が到着すると、の電報を受け取り、それを知らせるために二人は教室に加藤を探しに来たのであった(17)。井上は高知出身の数学者、湯浅年子は東京出身の物理学者である。二人とも加藤、片岡らと同じ年のフランス政府給費留学生試験に合格していたのだが、一ヶ月遅れでパリに到着することとなったのである。

湯浅の父親は農商務省特許局に勤務する官僚(技官)だった。東京帝国大学工学部を卒業した人である。年子は、小学校入学の口頭試問で「大きくなったら何になりますか」と質問されたとき、「理学博士」と答えたという(18)。自然現象に興味を抱く少女で、東京女子高等師範学校附属高等女学校(通称、お茶の水)を経て東京女子高等師範学校へ進み、さらに東京文理科大学物理学科に進学した。一九三四年卒業。同大副手となり、翌年には東京女子大学講師になった。一九三八年東京女子高等師範学校助教授の職にあつたが、大学で読んだジョリオ・キュリーの人工放射能に関する実験証明論文に感動して留学を決意した。この年のフランス政府給費生試験には、二次の口頭試問で不合格となった。湯浅によれば、当時の給費生試験は、「大学またはアテネ・フランセ卒業者に対してその推薦によって応募資格が出来、全国で法律経済で一人、文学哲学で二人、理科と数学で一人または二人、それに医学が一人、芸術と音楽は別扱いでそれぞれ一人くらいであった」(19)。フランス行きを考えたのは、自分が教職の資質に欠けていると感じられたこと、学閥や教授間の複雑な人間関係など「全ての自分を縛っているものから逃れたい」と考えたことが大きかった。女性であるということの不自

由さも痛感していた。

翌年の試験に合格したものの、仏独の開戦によって九月出発が凍結されたことはすでに述べた。ラジオでヒットラーの演説を聴きながら、湯浅は「これで私の希いもすっかり水泡と消えていったのだと思った」（20）。その頃、長兄の死、手術不可能なまで進行していた癌による父親の入院など、留学を断念するには充分すぎるほどの困難な状況が、湯浅の身辺を取り巻いていた。しかし父親が湯浅にフランス行きを強く勧めたので、遂に出発を決意したのだった。東京駅まで行った湯浅は、決意が鈍り、東京帝国大病院の父親の病室に引き返した。「何をしに戻ったのか？」と言われた湯浅は、返事ができず、ふたたび東京駅に向かったのだった（21）。

湯浅らが神戸から乗ったフランス船は、フェリクス・ルッセル号といった。一月二六日早朝、船は栈橋を離れた。いつまでも振る手がちぎれそうに冷たくなった。観光客はいない。公用、社用の人々ばかりである。湯浅は二等船客だったが、そこでも上級軍人の家族、宗教関係者など少数だった。サイゴンでは、一〇〇〇人ほどのインドシナ人兵士たちが四等船室に乘せられた。「まるで馬の輸送である」（22）。「何もしらないで勇んでいるこの兵士達をみたりサイゴンの街の情景に接して植民地の悲哀を身に痛く感じた。征服されさく取される人民達の生活をみて、私は義憤を感じた」（23）。中国からの留学生からは、時計を北京時間に合わせていた。日本軍は、北京の時計を日本時間に合わせていたのである。「日支事変」の不当さについて二人は話し合っている。このような経過があつて、ようやく湯浅はパリに到着したのである。

加藤らは前田のルノーに彼らの荷物を積んで、まず湯浅を片岡のいる国際女子学生会館に送り、それから大学都市地方会館まで井上を送った。

翌日、国際女子学生会館の談話室で湯浅と会った加藤は、彼女の印象を次のように記している。

湯浅さんはわたしより少し年長だが気持のやさしい女らしさをもった人で、決して男まさりには見えなかった。お茶の水大学の校風とでもいうのか、それとも湯浅さんの家庭の習性なのか、極めて礼儀正しい女性で、話し振りも決してまくしたてるような口調ではない。いわば大人しいタイプなのだが、後で次第に分かってきたのは彼女がいかにも頑固で一徹なところがあることだった。例えば誰かと一しよに道を歩いているとき、その方向が間違っていると同行者の一人がいったとしても、彼女はその方向を変えようとしない。それが間違っているたしかな目印に出会わないかぎりそちらに歩くことを止めようとしないのだ。「……」しかもその意志の強さを微笑を浮かべながら表現するので、周囲がそれを止めることができない有様だった。（24）

さて、湯浅は三月一日、ラジウム分離の功績によりノーベル化学賞を受賞したマリイ・キュリーが創設したラジウム研究所を訪ね、ジョリオ・キュリー夫人イレーヌと会見した。イレーヌはマリイ・キュリーの娘であり、ジョリオはその夫だった。湯浅は研究員にしてもらうために会見の申し込みをしていたのである。当時研究所は軍の管理下に置かれていた。外国人研究者を採用することが禁止されていたため、採用は困難だと思われられた。湯浅は緊張が一举に緩み「ここで研究できなければ父も病気ですからすぐ帰国します」と言った。イレーヌはしばらく考えていたが、夫ジョリオに相談することを約束してくれた。三月二九日に湯浅はジョリオと面会し、コレージュ・ド・フランスの研究所に入所を許可された。ラジウム研究所が駄目ならば、コレージュ・ド・フランス原子核化学研究所に入れるようにすると約束してもらえたのである。「心が宙に浮いたようになって、フラフラ、フラフラと街を歩きに歩いた」（25）。午後、湯浅は「Kさん」（加藤の回想に記述がないので、おそらく片岡であろう）とビールで祝杯を挙げ、リュクサンブール公園で、買ってきたメロンを食べた。

一九三九年の時点で、フランスは原子力エネルギー抽出に関して世界最先端の位置にいた。実はこの時期、ジョリオ・キュリーは原子エネルギー放出実験の際に中性子の減速材として必要な重水をドイツに渡さないために奔走していた。ノルウエーの工場にある重水全てがドイツ側の目を欺いて飛行機でパリに到着したのは三月一六日のことである。そのような非常時に彼らが日本からやってきた湯

浅を迷惑がらずに迎えてくれたのは、イレエヌが次のような考えを日頃から持っていたからと考えられる。すなわち「フランスは外国の若い研究者を受け入れることを誇りとしました。マリ・キュリーはこのことを特別に重要視し、それが自分にとつてかなり迷惑なことであつたり、それらの若い研究者たちがフランスの若い研究者に要求される第一段階的な知識のすべてを持ち合わせていないような場合であつても、これらの若い研究者が彼女の実験所に近づくことを容易にしてやることによつて、外国に対するフランスの影響を強めることに役立つのは自分の義務であると考え」ており、自分も同じだということである(26)。ノーベル賞受賞者である彼らの生活は質素きまわりなく、派手な社交とも無縁だつた。自転車による新婚旅行時代から、彼らの簡素な生活は終生変わらなかつた。湯浅はジョリオと気軽に握手する習慣になかなかなじめなかつた。深々とお辞儀をしてしまうのである。ジョリオがドアを開けてくれたときに、ジョリオの前を通るかわりに、壁際に控えてしまうこともあつた(27)。

湯浅は加藤に誘われて、ヴァレリーの講義に出たこともあつた。「目の前に現実の人としてその講義を聴くのであるから、感激した。しかし大きな眼鏡がやせた顔の大半をかくしていて、声は小さく、暗い教室の中でボソボソとしかきこえないのにヘキエキして描いた同教授「加藤」のスケッチは、今も持っている」(28)と湯浅は書き残している。ヴァレリー自身、自分の声がよくないこと、教師としてのトレーニングを受けていないことは自覚していた(29)。それはとにかくとして、加藤は湯浅が隣にいたのでそのような振る舞いに及んだのである。講義の内容を理解するのは容易ではなく、加藤は常に真剣に講義に臨んでいたからである。「詩学」講義は、概要が公式記録によつて、また速記の一部が活字にされているが、全貌を伺うためには不完全なものである。見過ごされがちであるが、毎回出席する数十人の聴講者がいなければ講義は成立しなかつた。週二回のコレージュ・ド・フランスでの講義は、毎朝のカイエ執筆とともに当時のヴァレリーの人生を支えるものであつた。そして加藤はその講義を支える一人だつたのである。

#### 四 戦時下のパリからボルドーへ

五人の給費留学生全員がようやくパリに揃つた。戦時下のパリではあつたが、勉学の傍ら飲食をともし、共通の楽しみをみつけることにも努めた。ある日水彩画を描こうということになつた。井上は地方会館を、加藤は教会を描いた。湯浅は井上と加藤が描いている後ろ姿を描いたらしいが、「それをわれわれに隠そうとして逃げ回る始末であつた」(30)。一九四〇年に加藤が描いた水彩画の図版と湯浅のそれを並べて見ると、使用した絵の具が同一だからであるうか、共通する雰囲気を感じ取ることができる。それらは孤独の中ではなく、友情の中で描かれたものである。

湯浅は四月からコレージュ・ド・フランス原子核化学研究所に籍を置くことになつたが、加藤は、戦局の進展に伴いパリからボルドーに拠点を移すことを考えはじめ、四月にその計画を実行した。彼がなかつたのである。ボルドーは、パリ、リヨン、マルセイユに次ぐ、フランス第四の都市である。パリから列車で九時間かかつた。ボルドー大学で勉強することにしたわけだが、この地でも、四月二〇日以降、空襲警報が頻繁にさかんに鳴るようになった。そして五月一〇日、ドイツ軍がオランダ、ベルギー、ルクセンブルグに侵攻したことが報じられたのである。

五月一九日、夕食後に加藤が下宿先の家族たちと話をしていると、玄関のベルが鳴つた。湯浅年子と片岡美智だつた。一七日、湯浅は研究所でジョリオ教授の部屋に呼ばれ、「すぐに大使館に行くように。その結果を伝えるに来るように」(…)「フランスを去る必要はないが、二週間か一ヶ月くらい、田舎へ行っているように、状態が回復しさえすれば必ず呼んであげるから、貴女も逃げたらすぐに手紙を書きなさい」と言われたのである。ジョリオは前日に軍需省大臣から呼び出され、研究所にストックしてある重水を安全な場所に移してドイツ側に知られないようにするよう告げられていた(31)。ジョリオらはフランス銀行大金庫に移し、数日後、リオムの中央刑務所に再移送した。

湯浅はポルドーに避難することとした。駅も列車も避難民でごった返していた。加藤は二人のための宿を探したがどこもふさがっており、マダムの許しを得てこの家に泊めてもらうことになった。二人の話では、ドイツ軍戦車がランスまで迫り、パリには避難民が流入してきていた。パリでは毎日ドイツ機が現れ高射砲の音が聞こえるとのことであった。実際のところ、片岡は「百姓たちが、納屋という納屋の隅々から狩り出したと思われる古色蒼然たるがたがたの馬車や荷車に、豚や鶏まで積み込んで、疲れ切った体を揺られながら〔……〕南へ南へと行進してゆく有様」を見ていた(32)。その晩、湯浅と片岡は床の上に対角線上に寝た。翌日、加藤は何とか二人の落ち着き先を確保することができた。荷物を駅から運び、二人をポルドー大学に案内した。二人は空き教室で手紙を一所懸命にしたためていた。湯浅はジョリオに手紙を書いていたのである。翌日加藤が二人を訪ねると、やはり話をしながら彼女たちは次々に二〇通を越える手紙を書いてしまった。(33)。

二二日、パリ日本人会と日本大使館から帰国の勧告がなされた。加藤は湯浅と片岡に知らせにいったが、彼女たちは「耳を貸すどころではない！一瞥の下にはねつけてしまおう」(34)。二四日、パリの井上から手紙が届いた。「パリでは大砲か爆弾かわからないが腹にこたえる薄気味悪い音に悩まされた」とあった。翌日、二人の女性を訪ねると、モンテーニュの館を訪ねようと提案された。二六日、バスで三人は遠足をした。すばらしい風景で、湯浅はモンテーニュが思索のために入ったという場所の積石に書いてあった言葉などを書き写した(35)。

五月二八日の夕食後、加藤のもとに湯浅と片岡が来た。ラジウム研究所のジョリオ教授から湯浅に帰還命令が出たのでパリに戻る。片岡も一緒に戻る。ついては、加藤も一緒に帰らないかという提案であった。加藤の目には、二人がジョリオの命令に「盲従するところがあるらしい」と映った。結局、三一日、二人だけがパリに戻るようになった。「運命をどう判断するか女性の場合は意外に速断、悪くいえば、早とちりになるのを危惧するばかりである。」(36)。出発前の二人は、カフェで加藤と三〇分話し合った。「女性の決断は一度きまつたら迷わないものだということを知らされて、却って気持がさっぱりする」。湯浅はジョリオに「ここで研究できずに日をすごすことは、大変辛いことです。たとえパリの研究所で爆弾の下に死ぬとも悔いがないから、どうぞ呼び戻してください」と書いたところ、翌日に電報で「すぐ帰るように」と連絡が来た。そこで「天にも昇る気持ちで」パリに戻ることを決意した湯浅は、片岡とともに軍本部に向き、旅行許可証を取得したのである。湯浅にとって、研究所から離れることは、死ぬことと同じだった。彼女にとつて、研究所がどのような存在であったのかは、後年の次のような回想でよくわかる。

朝から晩まで、時には夜を徹して、研究と真向った生活。これこそ私が望んだものだった〔……〕女性であることも、異国人であることも捨象されて、ここでは研究だけが生き物のように成長して行く。朝、一分でも早く研究所へ行こうと焦り向う脛が棒のようになって動かなくなるほど走りつづけ、パンテオンの円柱に薄紫の朝の陽光がさしはじめるのをふり仰いではじめて立止る瞬間、「自分は幸福だ！」と心の底から思った。(37)

六月に入ると、パリでも空襲があったとの報が加藤の耳に入った。加藤は帰国を考えたが、「結局わたしの考えが早まっていたことに気付いた」。「今こそフランスの文化が戦争に抵抗して継続発展する様子をしかと掴みとらねばならない」(38)と考え直したからであった。

六月七日、昼のラジオ放送で、ペタン將軍が、フランスがドイツに降伏したことを国民に告げた。下宿先の女性たちは泣きはらした眼をし、男たちは黙ったままだった。加藤は町に出て二種類の新聞を買ったが、どちらにも「敗戦」という言葉は使われていなかった。

五月二三日にパリを出て家族とともにブルターニュに避難していたヴァレリーは、ラジオのペタン演説を聴きながら号泣した。

六月九日、ラジオ・パリは首相がパリを脱出するよう呼びかける放送を行った。湯浅と片岡は、国際女子学生会館を出てホテルに一泊したが、ホテルも閉鎖され、日本大使館に転がり込んだ。一四日、

ドイツ軍のパリ入城を二人は目撃している。先頭は軍楽隊だったが、凱旋門を一周する二〇歳位の若いドイツ兵たちは、疲れ果て、目もろくに開けておられず、馬から落ちそうになりながら、入城してくる。睡眠不足で息も絶え絶えで凱旋門に入ってくる。それが彼女らが見た真実の光景であった(39)。このときの情景を、湯浅は日記にスケッチしている。

ジョリオはコレージュ・ド・フランスの研究所で、ドイツ側に研究動向を知られないよう、資料を焼却した。そして六月一日、ジョリオはイレーヌとプジョーに乗ってクレルモン・フェランに必要な実験器具を運んだ。一軒のヴィラで仮の実験所を設置するのである。しかし、さらに計画は変更され、六月一六日、ボルドーに彼等は移動する。船で重水を英国に移すのである。六月一八日、英国船ブルムパーク号は無事出港した。

六月二五日、仏独に休戦協定が結ばれた。ハーケンクロイツのマークが付いた飛行機がボルドー上空を飛び始めた。ドイツ兵たちを乗せた泥まみれの自動車、次々に通りを通過するのを加藤は見た。ボルドーにやってきたドイツ兵たちは礼儀正しいようだったが、各家庭は兵士を泊まらせねばならぬこととなった。七月からは、時計も一時間繰り上げとなった。「ドイツ中央標準時間」に合わせるということだった。「ドイツ兵はみな若く楽しそうに見える。自由時間をフランス人の市街で楽しんでいくようであった。顔色は戦場焼けか土にまみれたあとの色が見える」(40)。フランスの新聞の論調が変化した。対独協調路線が明らかであり、加藤は不愉快であった。対独協力のヴィシー政権が成立し、ド・ゴール將軍の自由フランスも、またロンドンからラジオ放送を開始していた。ボルドーの市民たちの反応はどうであったのか。煙草屋の娘は、フランス語のわからないドイツ兵に「ヴォワラ・コン(ばか)」と喋って煙草を渡していたという。(40)。

## 五 パリ日本大使館での紀元二千六百年記念式典

日本国内では、この時期に「贅沢は敵だ」というキャンペーンが行われ、九月には仏領インドシナに日本軍が侵攻している。

九月、加藤はドイツ占領下のパリに戻った。パンは美味かったが、バター不足のために料理は味が落ちていた。砂糖も不足気味だった。一〇月から大学が再開されることになった。当時の加藤は何を考えていたのだろうか。「戦争のまったなかでのフランス留学はいわば戦争のなかに平和を見出す作業であり、戦争と平和の共存を体験することである」(42)と、後に加藤は記している。九月二七日には日独伊三国同盟が結ばれた。フランス人はショックを受け、いつもならば日本に対する批判めいた言葉を口にしない周囲のフランス人も、非難めいた言葉を加藤に投げかけた。なぜこの時期に日本がヨーロッパの紛争にわざわざ関わりようとするのかという非難である。「われわれの行動はよほどつつしむ必要があるように見えた」(43)。ドイツ占領下を思わせる事柄は多々あった。月初めに給費の小切手を貰いに国立財団に足を運ぶのだが、そこでもドイツ兵の許可を得てから中に入るようになっていた。

ジョリオの研究所では、ドイツ軍科学問題担当者が軍服で現れて、研究所員を前に「輝くばかりの」賛辞を述べた(44)。ドイツ側はウランや重水を手に入れたがために、ジョリオたちに友好的な態度を示そうとしたのである。双方の交渉により、ジョリオは所長の立場を継続し、ドイツ人研究者が四人研究に参画することとなった。実験機材を接收されなかったためには致し方なかったのではないか。ジョリオは「対独協力者」になった。そうしたこともあって、彼はその後、レジスタンスに深く関与することとなるのである。彼は英国に逃れることを周囲から勧められるが、聞き入れなかった。

一〇月四日、コレージュ・ド・フランスでは、ヴァレリーの「詩学」が再開された。ヴァレリーも九月二一日にパリに戻っていたのである。パリ大学でも「十六世紀のフランス語」「フランス文学のルネサンス」といった講義が始まった。また、ソルボンヌの学生を対象に、ゲルマニア学院という無料のドイツ語講座が融和政策の一環として始まった。大学都市内の地方会館隣のモナコ館には、ハーケンクロイツの旗が翻っていた。一〇月二五日、ヴァレリーは、アカデミー・フランセーズでペタン

將軍に祝福のメサージュを送るといふ提案に強く抗議した。アカデミーが対独協力政策に好意的な姿勢を示すことを拒否するよう求めたのである。

一月一〇日、紀元二千六百年記念式典が日本大使館で行われた。君が代斉唱、皇居遙拝、参事官祝辞、記念歌合唱、大日本帝国万歳三唱。それから日本料理の立食となった。日本国内では、すでに前月に大政翼賛会が発足し、東京のダンスホールが営業中止となるなど、暮らしへの締め付けも強くなっていた。

三日後、加藤が大学に行くと、ドイツ官憲が教室の壇上に立ち、学生たちに次のような警告を放った。二日前の前大戦平和記念日に、フランス人学生がエトワール凱旋門において、無名戦士に花束を手向けるがごとき示威行為を行ったために逮捕された、今後は注意せよと。「これを聞いていた学生たちが一せいに起立して拍手するのを見てただ驚くばかりだった」と加藤は記している。「敗戦国フランスを象徴する光景」(45)だった。この事件については、前田陽一の証言もある。前田によれば、学生たちは二本の釣り竿を先導者が掲げて行進したのだという。つまり、「ドウ・ゴール」(二本の釣り竿<sup>11</sup>ド・ゴール將軍)というわけで、「対独レジスタンスの最初の国内表示」だったわけである。この事件でパリ大学総長は罷免されたという(46)。やがて、大学もコレージュ・ド・フランスも、東洋語学校も、閉鎖されてしまった。

日本から届いた手紙を加藤が開封すると、砂糖やマッチが切符制になり、物価は二倍、ビールの入手も難しくなっているとあった。友人に紹介されたインドシナ人と話を交わすと、彼はフランスの植民地支配を非難し、日本軍の侵攻を歓迎すると言った。やはり西洋人による支配から脱却したいのだなと加藤は思った。

このころ、加藤はサン・ミッシェル通りの映画館で、コリンヌ・リュシエールの「美しき闘争」を観ている。そして、その後、日本大使館を通じて半年遅れの手紙が日本から届くと、日本でもこの映画が大評判となっていることを知る。ヴィシー政権は対独協力政権であったので、フランス映画は日本国内でも見ることができたのである。小説第一作「アフリカの體臭」でコリンヌ・リュシエールを登場させた遠藤周作もまた、この映画を日本国内で見た一人かもしれない。

一月二〇日、大学に「学生に告ぐ」という掲示が出たのを加藤は見た。「フランスの再興は若い学生諸君の双肩にかかっている。その責務は軽くはない!」。文学部長が教室で学生たち到大演説をしたが、学生たちは「淋しい拍手を送るのがその反応のすべてで、非常な失望を禁じえなかった」(47)。

## 六 日本大使館の勧告による加藤美雄の帰国

年が明け、一九四一年元旦、日本大使館にパリ在住日本人が集まった。新年祝賀会があったのだ。レコードに合わせて軍歌を合唱した。一九三七年からパリにいた大倉商事パリ支店の大崎正二(一九一三)は「この悲壮感はヨーロッパにない特殊なもの」と感じていた。その後日本映画が上映された。「軍馬として徴用されて行く愛馬に、別れを惜しむ農家の人たちの尽きぬ涙のその場面がはじめといつまでもつづく。映画は徹頭徹尾、国民に涙を強いる不愉快なもので、これまた奇異な感があった」(48)。出席者一同は、最後に大日本帝国万歳を三唱した。

三日から、ヴァレリーの講義も始まった。寒いパリの冬だが、暖房用の燃料が不足していたいそう寒かった。四日にベルグソンがなくなつたが、ユダヤ人ということもあり、葬儀すら行われなかった。ヴァレリーはアカデミー・フランセーズで九日に追悼演説を行い、翌日の「詩学」講義でも、ベルグソンを「思想の最後の代弁者」と称えた(49)。ヴァレリーの追悼原稿は、その後密かにパリの知識人の間で読まれたという(50)。

一月二八日、湯浅は日本軍艦が在留日本人を迎えに来るといふ情報を得て、「帰るか、残るか」悩んだ。日本船が来るとの情報は加藤にも伝わった。一月二九日、加藤は片岡、湯浅と会っている。片岡が落ち着いた口調で「わたし居残ることにするわ!」というのを聞いて、加藤は「なぜか虫酢が走

る思い」がした。加藤は帰国を半ば決意していた。「湯浅さんはこの軍艦に便乗できると考えているのか、しきりに迷ったあげく、わたしにも「帰るの？」と聞く。「……」女性であることをどう考えているのか、明瞭でなく、やや気の毒に思うがいたしかたない。「……」女性というものはいざとなると協調ができなくなるらしい」と日記に記している。加藤は当然帰国するべきだと考えていたのだ。一月三十一日、「湯浅さんがやつてくる。彼女はまだくどくどと繰り返すことを言いながら帰国についてのわたしの意見を聞きたいという。しかし決断は各自の問題なので自分で決める以外には方法はないと忠告するほかなかった」。彼女は迷いに迷っていたのである。「湯浅さんをどうするか、彼女は本当に迷っているのか？ われわれは彼女のために何をすべきなのか」。加藤は友人と遅くまで話し合ったが、「結論は出なかった」。

「発てば生きてお父様に会える。これは大きな誘惑である。しかし今帰ってしまったら、私は研究をしたといえるだろうか」。これは湯浅の二月二日の日記だが、翌三日に、「日本政府は女性と子供の乗船を禁じたという。これで私は全力で研究するしかない。父の希いを実現するためにも。パリはまた雪。」と記した。この情報は加藤にも伝わっていた。「船のことはわれわれと湯浅さんとのあいだの気まずさにつながりそうだった」と日記に加藤は記している。

二月六日、加藤の下宿に留学生たちが集まった。湯浅はよくしゃべった。片岡は黙りがちだった。二日後、湯浅から加藤に手紙が来た。「あの日は夕食にもお付き合いをするつもりだったが、片岡さんのエゴイズムのためにやむなく同行できなかった」と詫びた後で、加藤の帰国には反対である。再考してほしいと書かれていた。「彼女の温かい友情には感謝しきれないものがあつた」(51)。一七日、日本大使館を通じて日本からの手紙が来た。この日、遅くまで片岡、湯浅とホテルで話し込んだ加藤は「湯浅さんは父親が健在らしいのを喜んでいた」と記している。しかし彼女の父親は、一月十九日にすでに亡くなっていた。訃報が届いたのは三ヶ月後のことである。帰国しても生きた父には会えなかったのである。

ポルトガルのリスボンに来るといのは新造船あさか丸八〇〇トンという話であつた。結局、スペインのビルバオ港から出帆することになり、加藤は鉄道でポルドーを経由してスペイン入りした。パリのメトロで、湯浅ら数人の友人たちが見送ってくれた。仏西国境では、ドイツ兵が「ドイツ出国許可証」のスタンプを加藤のパスポートに押した。加藤は乗船前に闘牛を観た。六頭の牛が殺されるのを見て、吐き気を催した。

停泊している濃紺の船は「あさか」と書いてあり、甲板上のものには全て覆いが被せられていた。二門の大砲が備わっており、マストには海軍旗がはためいていた。日本郵船の貨物船浅香丸が海軍に接収され、横須賀で軍艦に艀装されたのである。加藤は知らなかったが、魚雷をドイツ側に提供し、ドイツから海洋遠距離爆撃機ミツサー・シュミットなどを受け取り、日本に運ぶことを第一目的としていたのである(52)。万一敵艦に攻撃されて沈没したならば、加藤らはパリで客死したということになっていたらしい。総勢一〇〇人ほどの日本人が乗り込んだ。無寄港で日本を目指すのである。三月二日には海上で春季皇霊祭りの遙拝式が行われた。甲板でフランス語の本を読んでいると、海軍将校の一人が硬い内容のフランス本を貸してくれたりもした。機関銃や大砲の実弾訓練も行われた。凄まじい轟音に加藤は驚いた。加藤が船上の人であつた頃、日本国内では治安維持法の改正が行われ、厳罰化が進んだ。

あさかが横須賀港に到着したのは四月二八日のことである。翌日は天長節。正午のサイレンの後に礼砲がとどろく。大日本帝国がアメリカ合衆国を相手に戦争を開始する八ヶ月前のことであつた。「今こそフランスの文化が戦争に抵抗して継続発展する様子をしかと掴みとらねばならない」と考えたこともある加藤だったが、結果的にそれを見届けたのは、加藤ではなく、湯浅であり、片岡であつた。

## 七 片岡と湯浅の不和と和解

片岡美智は、湯浅のようには帰国について悩まなかった。何があるうともフランスに留まろうと心

に決めていた。それには理由があった。パリに来て早々に直面したことがあったからである。

文学を学ぶことの容易でないことが解った。科学に身を委ねるのなら、専門の範囲というものが定まっている。毎日身を閉じこめて没頭することの出来る研究所、実験所というものがある。それに反して、文学とは、有って無きが如きものではないか。文学とは、生活と共にあり、文学への理解は生活と共に深まってゆくものではないか。これは大変なことになった！と私は悲鳴を上げた。留学年限として与えられた二年という短い期間に、どれほどのことが出来よう？……

たゞでさえ限りのないものであることに気がついたのに、私が手をつけ始めたのは、フランス文学ではないか。科学者にとってならば、言葉は単なる手段でしかない。彼等にとっては、仕事の本領であるから、一定の語数、一定の表現形式を知っておけば、研究の成果を発表することも出来ようし、互の間に意思の疎通も可能であろう。ところが、一つの国の文学は、その国の言語と一体をなしている。(53)

この思いが、コレージュ・ド・フランスの研究所に嬉々として通う実験物理学者湯浅年子を傍らに見ることで生じた認識であったことは明らかであろう。彼女は「未だかつて覚えたことのない絶望のどん底に落ちこんだ」と記している。彼女はその絶望状態から這い上がるために、一から勉強し直そうと、パリ大学で文学の勉強をするかたわら、大学附属の海外フランス語教員養成校に入学した。「私は前の晩、というより夜半過ぎまで宿題にかじりつき、着の身着のまま数時間まどろんで、毎朝八時迄に学校へ駆けつけるのであった。スユフロ街を横切る時、空を被っているパンテオンの大ドームから、時として朝日がほのかな後光を投射していた。」(54)。

そういう片岡から見ても、パリ大学の学生たちは、真剣さが欠如しているように見えてならなかった。片岡は、そのような義務はなかったにもかかわらず、留学中に博士論文を書き上げることが誓った。湯浅が学位論文を書くことを目指していたことも意識したのではないだろうか。しかし、鋼鉄の意志を持つ二人の女性たちの友情は、次第に危ういものになっていったようである。

湯浅は父親の死を六月になってようやく知るところとなり動揺した。

私は父の死の床に侍られなかった。悔いる気持ちも今となってはすべて無。神もない、父もない、希望も未来も物理もない。あるのはただ母だけである。帰ろう、帰るより仕方がない。「……」野良犬のようにうろろとした気持ちで、一人パリの街を歩き、夜は夢を見て、突然声を立てて泣いた。しかし朝は再び平静な態度で研究所へ行く。

私はいつしか悲しむのに疲れた。ともかく成るようになる。そんなときKさんに会った。

Kさんの十分な知性や才能にもかかわらず、何か大きな距たりを感じる。……(55)

六月二九日、大学人国民戦線の非共産党員メンバーであったジョリオが逮捕された。戦前に彼の助手だった反ナチスのドイツ人の尽力でほどなくして解放されたが、彼はその後共産党に入党し、地下活動に本格的に関わることとなる。レジスタンス活動に挺身するようになるのである。イレーヌは持病の肺結核のために、サナトリウムで療養することも多くなった。

十二月八日、太平洋戦争が始まった。「私はこの種の問題には冷静で、重大さを感じないと思っていた。しかし今日は心に深い悲しみを覚え、突然、この心痛を同胞と共有しなければならぬと考えて非常に深刻になった。」と湯浅は日記にしたためた。(56)。

年が明けた一九四二年の二月一二日の湯浅の日記。「昨夕、つまらぬことでKさんと言い争い、一時的な合意に達して帰ったものの、多くの誤解があり、気分が悪い一夜をすごした。」(57)。湯浅との人間関係の軋みについて、片岡は大倉商事の大崎正二に相談した。相手の女が誰かは言わなかったが、大崎には見当がついた。大崎は絶交状を指南して、日本大使館の集まりなどで会っても口を聞かないこと、手紙が来ても開封しないように言った(58)。こうして二人の友情は終わった。片岡はパ



リの日本人社会の「不快な対人関係」に苦しんでいた。「誰がこういつた彼があいつたと耳にするだけで、既に過敏になっていく私の神経は苛立たずにはいかなかった。苛立てば勉強が思うように進まず、私はいよいよよじれた。」(59)。しかしそれは湯浅も同じだった。三月二日、湯浅は掌編小説「モンスター」を書いていく。パリにいる「お化け」、「手繰ればたぐるほど、親分、子分とある化け物で、いくらでも、いくらでも、出てきて、しかも千変万化」なモンスターである。

片岡は、ある朝、養成校で仲の良い友人ドレフュスの紺色の服の胸に黄色いシオンの星のマークが付いていることに衝撃を受けた。また、ある日ポーランド人の友人ハンナの下宿にお古のハンドバックをあげようとして訪ねると、未明にドイツ兵が来て連行していったと玄関番から言われて愕然とした(60)。帰国した加藤が見なかつた占領下フランスの現実を、片岡は目撃していた。ちなみに、片岡は外国人であるにもかかわらず、同盟国ということもあり、フランス政府から給費を受け続けているが、実はヴィシー政権は、大学生の約一割が受けていた給付を、ユダヤ人学生に対してだけは停止してしまつたのである。(61)。

七月に海外フランス語教員養成校の最終試験に合格したので、片岡は国会図書館東洋部の知人ギニヤール夫人に挨拶に行つた。夫人はやせ細つた片岡を見て、ロアルド地方でドミニコ会主催の修養会があるから田舎の空気を吸ってくるように勧めた。片岡は早速申し込んだ。会場となつたシャトーは広大な敷地と神秘的な雰囲気を持つたすばらしいところだった。マリー・マドレーヌ・ダヴィー女史が組織したこの共同体で片岡は二ヶ月間を過ごすことになるが、数日間は昏々と眠り続けたという。やがて元氣を取り戻すと、日本人が一人もいない環境のなかで、彼女は自分が解放されるのを感じた。惹きつけられる修道女がいて、彼女と対話をするようになり、聖書を読んだ。物質的なものに対する執着が消えてなくなるのがわかつた。九月にパリに戻ると、彼女の人間嫌い、日本人嫌いは消えていた。十月四日、彼女はプロテスタントからカトリックに改宗した。ドミニコ会総管長の司祭から洗礼を授けられた。それは「生きるか死ぬかの問題であつたのだ。私は、死をではなく、生命の方を得た」(62)。片岡は修道会に入ること望んだ。この共同体(ドミニケーン・ド・サン・ジャック)は知的活動も使命としていたので片岡に相応しかつた。代表者はマドレーヌ・ダヴィーという博士号を持つ女性であつた。片岡はパリを去ることにした。彼女は自分を「放蕩娘の帰宅」だと感じていた。ロアルド河畔のモルバール、ブルーに生活の拠点を移した。心に溢れるものを感じていた片岡は、パリを去る間際に、兄に話すような気持ちで一人の日本人男性に夏の体験を話した。ところが彼の口から出た言葉は恐ろしいものであつた。「そんなことが口に出していえるようじゃ、まだ駄目だ!」。

片岡は、日本の男がフランス文化をどれだけ学んでも、実生活の上では「へオイ!」(ヘコラツ!)式の居丈高な殿様根性を、絶対に捨てようとはしないのだ(63)と思うしかなかつた。

湯浅が「人工放射線核から放出されたβ線連続スペクトルの研究」でフランス国家博士号(理学博士)を取得したのは一九四三年十二月のことである。日本人女性として初めてのことであつた。「私共審査官一同の祝辞とともに理学博士の学位を……」というところまでくると、拍手が沸き起り、人々が次々に湯浅に握手をしに集まつてきた。「何だか泣きたいような気持ち」。大きな目標を達成した。だが、人々が去り、がらんとした広い講堂に一人残されたとき、彼女は虚無に自分が浸されるのを感じた。

恐ろしき虚無みつめ居り吾が仕事なれるといへるこの朝にして

幾度か悲しき想ひあふれきぬ友の投げたる数言の罵り

「これからは死のための準備もしておかなければならないと思う」と湯浅は日記に記した。おそらく彼女は人生の一時期を完全に生き切つたのだ(64)。

おそらく学位取得以上に嬉しかつたであろうことがあつた。片岡との和解である。一九四四年の二月二日の日記を引く。

Kさんから手紙が来る。ミス・ワットソン「国際女学生会館の主人」が私の論文のことを知らせたためのお祝なのである。何ともいえずひろがりゆく喜びを感じた。やはり私に欠けていた「友情」が再び帰ってきたよろこびなのであろう。

交わりを絶ちぬし友の送り来しペルス・ネイジュの花鮮しき

片岡がフランス国家博士号（文学博士）を日本人女性として初めて取得するのは一九五〇年のことだが、彼女にとって、湯浅の学位取得は「わがこと」のように嬉しいできごとだったはずだ。「どれだけの女が——しかも女だけが——闇に葬り去られたかも解らない」封建的な日本社会から逃れ、「自分の全エネルギーを注げる場、自分の中に萌芽として持っている凡ゆる可能性に伸びる機会を与える試験の場、それを私はフランスに見出したのであった」（65）と戦後回想する片岡は、同じ情熱を湯浅のなかにも見出してははずだからである。

四月八日、湯浅は片岡がいるブルーのシャトーに赴いた。片岡が彼女を誘ったのに違いない。小鳥たちが鳴き交わす、豊かな自然に囲まれた美しいシャトー。そこは片岡自身が新生した聖なる土地であった。

どんなにかぎこちなくもあろうかと思つた旧友との会見も案外自然であり、昔と同じように話合つて、散歩して、そして今自室に引きこもつてみると、不思議なことに心の作用がピタリと止まつたように、何の情念も起こつてこない。うれいいのか、心苦しいのか、なつかしいのか、悔ゆる心か、どれでもない。「……」私のかたくなさがこの場に至つて卑怯にも逃げを打っているのだろうか。すなおな心、裸の心で話し合つてみたい。お互いにまだまだ脱ぎきらない衣を心に着ている。

二年をおのおのものにもすごしつゝ今あひ見たり友と我はも

苦しみを超えて会ひたる友と我かたみに何の言葉もなき（66）

到着六日目の日記には「昨日は皆と一緒にヌーイの教会まで行き、前にKさんがいたというシャトーを見て、帰りに裏山でわらびなどをとつて帰ってきた。夜の集りに私の歌の仏訳を詠んだ。詠みながら不意に涙が出た。止めようとしても止まらなかった。」とある。湯浅はふたたびパリに戻り、片岡はブルーに留まる。二人の人生の航路が大きく分かれるのは、この数ヶ月後、パリ解放の前後である。

## 八 日本大使館の勧告による湯浅のフランス出国

五月、ヴァレリーはコレージュ・ド・フランスの前で、ドイツ人士官にここは美術館かと尋ねられた。ここはコレージュ・ド・フランスという学校です。「それは、何を話しても許される家です」とヴァレリーは言った。日本国内では日本文学報国会が組織され、自由な言論は封殺されていた。「何を話しても許される家」はどこにもなかった。

連合軍によるノルマンディー上陸が伝えられた六月六日、イレーヌは子どもたちとパリを脱出してスイスに亡命した。大学人国民戦線の責任者になっていたジョリオは抵抗運動のために研究所から忽然と消えた。湯浅はドイツ側からジョリオの行方について訊ねられたが、「私たち日本人はこういうとき、たとえ知っていても言いません」と応えた（67）。ジャン・ピエール・コーモンと名を変えたジョリオは、その後、塩素酸カリウムとガソリンを混合させる爆弾を自らパリのあちこちに仕掛けるまでになる（68）。

六月七日、湯浅は日本大使館からパリを引き上げるよう勧告される。「私は、もはやこの戦争の行く末がわれわれの予想するものである以上、わざわざドイツまで行く気がしない。パリで、研究所へ通いながら、もし死ぬものなら死にたいと思う。大使館の人たちにはこの気持ちを通じない。日本人

として、行動を共にすべきだという。非国民的行為だという。しかし、ドイツへ逃げて、戦争の終るまで何もしないでいるのが、はたして祖国のためになることであろうか」と湯浅は日記に記した。(69)。この時点で湯浅はパリを去る気持ちが強くなったことがわかる。けれどもその二ヶ月後、彼女は「パリで、研究所へ通いながら、もし死ぬものなら死にたい」という思いをひるがえす。

私への引揚命令は大使からのものであると報ぜられました。これをきいて私は決心をひるがして、ドイツ行を決めました。「ジョリオ」先生は私が大使のゆえに、この命令に従ったと思われぬだろうと信じます。しかし、それならなぜか、と思われるでしょう。これは私にもそのときまで、まるで予期しないことでした。「大使の命令は天皇陛下の御命令である」と考えた瞬間、私のうちに知らずにあつた天皇に対する忠誠心ともいふべきものが、明確に姿をあらわしたのです。(70)

この心理の背後には、湯浅の尊敬する父親が、天皇に忠誠を誓う大日本帝国の官僚であつたこともあるのではなからうか。八月一日、日本大使館の公用車二台、前田陽一のルノーら合計八台に分乗してのパリ脱出だつた。この旅については前田の「欧州戦遁走記」に詳しいが、強制収容所の政治犯一行を目撃した文章は紹介しておきたい。「粗い縦縞のピジャマのようなものを着て、ピョコピョコと何かおどけたような歩き方をして来る人々の四列縦隊」を前田は見た。「歩き方といい、表情といい、生気の通っているもののように見え、初めの印象では、フランスの子供達が片手を入れ指で動かして遊ぶギニョルという操り人形のような滑稽味さえ感じられた」。それは四、五〇〇人の囚人であつた。「文字通り骨と皮ばかりなので、生物通有の温い曲線を画く運動は最早できなくなり、顔の表情も余りに長い苦しみに、苦しみの感覚さえ殊によると喪失してしまつたのではないかと思われる程であつた」。行列の傍らには凶暴そうな番犬がところどころに配置されていた(71)。当時の前田は「ナチ政権の爲したことでも全部が全部悪いとは決して思つていなかった」が、この光景には戦慄を禁じ得なかつた。

こうして一行はベルリンに辿り着いた。パリ解放後の八月二六日、湯浅は「全ての希望は無残に踏みじられてしまつた。／八月一五日前四時パリを出発した。Kさん、その他の同胞を残して」と書いた。その他とは、主に配偶者がフランス人の、長谷川潔(一八九一—一九八〇)のような人々であつた。

片岡は一人の独身日本人女性としてフランス国内に留まつていた。無論、彼女の許にも日本大使館からの勧告は届いていた。「在外の日本帝国臣民は皆、行動を一にして母国へ急ぎ帰れという天皇陛下の御命令だとのことである。それに従わず外国にとどまるものは国賊とみなされ、生涯日本の地を踏めないかも知れないとの噂が、私の耳にも入つた」(72)。しかし片岡は即座にこう決意していた。

本質的なものにつくべきだ。自分の道を見出して修業の途次にある私のなすべきこと、それはこの道を進んでゆくことだ。そのために国賊呼ばわりされ、祖国から見捨てられても万已むを得ない。人間として、何ものかに到達することが出来るならば、いつかは何かを与え得る人間になれるだろう。問題は、私自身が、与え得る人間になることだ。(73)

片岡は「天皇陛下の御命令」に従わなかつた。留学前にすでに特別高等警察から「国賊」扱ひされ「おまえのような女は、死んだ方が御国のためだ！」と面罵されていた片岡は、湯浅のように「天皇に対する忠誠心ともいふべきもの」に動かされることがなかつたものと考えられる。「永遠に日本の土を踏むことなく、世を去る」ことも、彼女は覚悟していた。

パリ解放が伝えられると、片岡は知人のトラックに同乗させてもらいパリに向かつた。どこまでも続く麦畑を眺めながら、彼女はシャルル・ペギーを思つていた。パリにドイツ軍が入城する直前、パリ市内のあちこちでペギーの連続朗読会が行われていたのだ。朗読会の最後にはフランス国歌ラ・マルセイエーズが奏でられた。……

麦畑のなかに、アメリカ軍の戦車が並び、黒人兵たちが大勢いるのを片岡は見た。しかし、その遙か向こうに、シャルトルのカテドラルの尖塔が浮かび上がった。「フランスは滅びない！」と片岡は心に叫んだ(74)。

パリ市内は混乱していた。彼女はヒッチハイクをしてパリから五〇キロほど離れたブリー地方のシャトーに居を定めた。修道会関係のシャトーである。地下室には、ドイツ兵が脱ぎ捨てていった制服が山積みにしてあった。片岡らはそれを茶、臘脂、紺などに染め直して普段着に仕立て直した。二ヶ月間をここで過ごした。近くの国道を軍用トラックが若者たちを大勢乗せて毎日走っていく。ドイツ軍の軍服を着ているが、復員するフランスの青年たちであった。片岡は、三階の部屋の窓から、あるいは庭先から、彼らに手を振った。トラックからは、それに応える喚声が上がった。

八月一八日、ヴァレリーは『フィガロ』紙のビルのバルコニーから、ド・ゴール將軍の到着を待つ群衆を見守っていた。戦車。国旗。歓声。その後仕事に取りかかったヴァレリーは、不意に笑いに襲われた。「それは、放心という無防備な道を通って、わたしの底意からやって来た笑いでした。そして、その笑いとは、「出て行つた、やつらは出て行つた」、というものでした」(75)。

## 九 破壊されたベルリン大学研究所での実験

十月、日本では、神風特別攻撃隊の出撃が始まった。十一月以降は、東京、名古屋、沖縄などでアメリカ軍による大規模な都市部への空襲が行われるようになる。

ベルリンの湯浅は後悔の念に襲われていた。一月三〇日、「それにつけてもパリを捨てたこと自身、やはり私の勉強に対する気持ちの純粹さのなかったことからきたのだということをしみじみ思う。その点Kさんの方が純粹だったと思う」と彼女は日記に記している。湯浅は気を取り直し、翌月にはベルリン大学附属第一物理研究所でクリスチャン・ゲルツエンの下で研究する道を開拓していた。

一九四五年二月、日本大使館が邦人の避難勧告を出したが、湯浅はベルリンに留まった。パリを捨てた二の舞を演じることを自らに禁じたのであろう。三月一五日、湯浅は陸軍中佐から、もはやベルリンに残ることは赦されないと言い渡された。陸軍は決して科学を理解しないと悟った湯浅は、日記にこう記した。「私のとるべき道は明らかである。研究を続けること」(76)。湯浅は逃げ惑う人生を止め、踏みとどまる人生を再選択したのである。日本大使館が慌ただしく引越し準備に追われている最中、湯浅はベルリン大学で研究を続けた。「研究所の扉も天井も窓も壊されて、硝子の破片が廊下や部屋に山と積まれる中を、よけよけ研究を続けている。「……」丁度火事場で研究しているようなもので、狂人の部類に入ろう」(77)。こうして、湯浅はパリ時代に作成に着手していたβ線スペクトロメーター(ベータ線スペクトル測定用二重焦点型分光器、質量と運動量を同時測定する世界最初の装置)を完成させた(78)。

四月一五日、湯浅は日本大使館の再度の勧告に従い、ベルリンからマールドルフに移った。日本大使館自体がベルリンを去るがために、食券の配給がなくなってしまうからである。完成させたβ線スペクトロメーターをリュックサックに入れた。「どうして飢えに負けて、研究を途中で抛ってしまったのか? 妥協性! その点で私はKさんの足許にも及ばないことをしみじみ感じる」(79)。ここでも湯浅はフランスに留まった片岡のことを思っている。

マールドルフはベルリンから南西に八五キロほどの地点にある村だった。広大な森に囲まれた、地下室のある三階建の古城に一二〇人ほどの日本人が居住することになった。三月初め、大倉商事の大崎正二と三井物産の上野辰雄が副領事の自動車で使者として城主の伯爵夫妻のもとに滞在していた。夫妻の信頼を得ておくこと、日本人宿泊者用組立式二段ベッドを村の木工場で急いで製作させたりする必要があったからである。伯爵夫妻に初めて会ったとき、大崎はフランス語で話しかけた。するとフランス語に堪能な夫妻の顔に困惑の表情が浮かんだ。当時は危険な行爲だったからである。(80)。

五月八日、ドイツの無条件降伏承認調印の翌日、湯浅はさらに戦争を継続する日本について思索を

巡らせている。政府に戦争の無謀さを伝えようとしなかった在外諸官吏、外交官、陸海軍武官たちこそ「国賊とよばれるべき」もの、「吾等同胞の血を吸って生きてきたものである」。

パリでは、ヴァレリーが「ドイツが息絶える。そして、ドイツとともに、ヨーロッパも——なぜなら、大国は非・ヨーロッパの国々ばかりだから」と書き記していた。すでに衰えていたヴァレリーは、二ヶ月後にこの世を去り、国葬に付される。

湯浅ら一行は五月一日に軍用トラックでベルリンに運ばれ、二五日にモスクワに移動した。満州里までシベリア鉄道で移動し、敦賀港に着いたのは六月二六日だった。

疎開先には、変わり果てた母親がいた。

やせ衰え、老いまして、貧しいふとんに寝ておられ「……」ああ、この姿、姿、私は何も知らずに自分一身のことに屈託しているあいだ、お母様は身をけずり、骨を砕いて、私を待って、待って、待ちきれずにこうして病み倒れてしまわれたのだ。「……」これは夢ではないのか。「……」この何もかも「年子のために、年子が帰ったら」と、食べるものも食わず、貧しいなりですごして、とうとう身も心も弱ってしまわれたお母様を、もう一度もとのお母様に戻して「……」、静かに二人の生活をして、母の余生をすごさせ、その後に私はカトリックの僧院に入って、静かに信仰の生活を送ることにしたい。(81)

七月七日の日記だが、同月二八日、母親は死去する。

湯浅は東京女子高等師範学校助教授に復職し、長野県の疎開先に赴任する。八月六日、広島に投下された新型爆弾が原子爆弾であることにすぐに気づいた彼女は、学生たちにその可能性について話したという。八月一日、玉音放送が流れた。放送を湯浅は聴けなかったが、「ついにことは私の予想したときなるを知った」。

うしほのごとおしよする涙乙女等はなきて大君のみことうけたり

大君のみこころもへばみたま吾等あらがふべきにあらねとはいへ

短歌は湯浅の人生を支えるものであった。彼女の母親が江戸時代の歌人、国学者橘守部（一七八一—一八四九）を曾祖父に持つ人物であったことも、ここで思い起こす必要があるのかもしれない。「おおきのみこと」「おおきのみこころ」。こうした語彙が科学者湯浅年子の日本語世界の根底に沈殿しており、それらが大日本帝国崩壊のときに彼女のなかで甦ったことに私は驚くのである。

## 十 それぞれの戦後

日本の敗北を、片岡はブルヴァールのシャトーの自室で知った。博士論文の第一稿を書くために机にはりついていた。一人の友人が部屋に入ってきた。「ミチ、あなたに一刻でも早く知らせたいと思って……」。片岡は黙って聞いていたが、「私はある厳粛な気分支配された。自分の中で、何かがいやんと襟を直し、両肩に大きな責任がかかったように感じられた。その瞬間から、頭は冴え、異様な力が漲って、勉強が面白いほどはかどった」。数日後、一人の日本人と出会い、「日本が敗けたと知ったとたん、何もかもガラガラッとくずれ落ちた気がした」と言われ、片岡は「同じ日本人でありながら、自分の中に起ったことがそれと正反対であったことに気がついたのであった」(82)。驚かざるを得ないのだが、フランス外務省はパリ解放後も彼女に留学生給費を継続し続けた。パリ大学の二名の教授の推薦、パリ国際大都市会長の口添えなどに拠る計らいであった。それは彼女の身の安全を保証する証しともなったのである。

片岡はパリに戻り、一三区にある北向きの小さな部屋に落ち着いたが、世話になったカトリックの共同体は解体しつつあった。片岡に洗礼を授けたドミニコ会総管長の司祭が解体のために動いていた。

パリ大学で公開講義を持つまでの權威を持つマリー・マドレーヌ・ダヴィー女史の人格が急速に崩壊しつつあったからである。若くして哲学教授資格を取得し、「ギユイヨーム・ド・サン・チェリーの神学と神秘思想」で学位を取り、聖ベルナルの二巻の編集などの業績がある彼女は、次第にカルトのグルめいてきて、「あちこちから詐欺師として訴えられるようにさえた」のである。ダヴィーがのめり込んでいったのはエゾテリズムの世界だったが、当時のパリは、ジプシー占い、ブラヴァツキー夫人の神智学、ルドルフ・シュタイナーの人智学、クリスチャン・サイエンスなどがあちこちで集会を開き評判を呼んでいた。クルシュナムルティ自身の講話もあった。有閑階級の女性たちが、そうした世界に熱中していた。驚いたことに、ダヴィー女史にもそうした秘教的世界の「寵児たらんとするあがき」が見られるようになった。片岡は、「非凡な体力と才能とを兼ね備えた一人の人物が、千丈の谷に落ちる深山の古木のように、どっと破滅の淵に落ちてゆく様を目のあたりにしたのであった」(83)。共同体を立ち去る時が来ていた。ちなみにダヴィー女史は一九五〇年からシモーヌ・ヴェイユに沈潜するようになり新生したようだ。一九六〇年代に、ヴェイユ研究書が二冊邦訳されている。

片岡は、サルトルが登場した戦後のパリで営々と研究を続けた。書き上げたスタンダールに関する学位論文が審査されフランス国家博士号を取得するのは一九五〇年のことである。それからさらに二年間、片岡はフランスに留まった。一二年間余の留学生活。三〇代初めだった彼女は四〇代半ばになっていた。遠藤周作がフランスに留学したのが一九五〇年のことである。遠藤と片岡が文通を交わっていた事実は、冒頭に記したとおりである。遠藤は、片岡とパリで会っていた頃までは、フランスで博士号を取得することを考えていたのかもしれない。

敗戦後、湯浅は東京に戻り、東京女子師範学校校舎に寝泊まりしながら、理化学研究所の囑託となり、研究再開を期した。しかし、GHQは日本の原子力研究を禁止し、一月二四日、理化学研究所の二台の陽子サイクロトロン(核反応実験のための機器)が東京湾に廃棄される。翌日の朝刊でそれを知った湯浅が、駆けつけた理研の実験室の傍らで「呆然と立ちすくんでいた」姿を、その場にいた山崎美和恵は記憶している(84)。彼女は自らを実験物理学者として定義していたから、実験の手段を奪われたことは死の宣告をされたも同然だった。

湯浅はその後、やむなく理論研究を進める傍ら、ジャーナリズムからの執筆依頼に応じて啓発的な書き物を大量にものでしたので、彼女の世間名は高まった。フランスで研究を続ける片岡を意識しないということはなかったであろう。戦後の日本社会で彼女が痛感したことは、人々があきらめの中に「安住」していることであった。「血みどろになっても正しさを守ろうという熱意があらゆるところに欠乏していること」であった。ドイツ占領下のパリでも「ただ一つ、自分の生命をかけて自己の主張を守るという権利だけは、だれにも左右されずに残されているということを実感をもって考えたもの」であった彼女には、それが齒がゆかった(85)。

一九四九年、コレージュ・ド・フランス附属原子核化学研究所の招聘により、湯浅は再度渡仏する。四〇歳になるのを目の前にしての決断であった。同世代の湯川秀樹(一九〇七年―一九八二)がノーベル物理学賞を受賞した年である。ちなみに湯川は戦時中に日本の原子爆弾製造計画に関与していた。科学者にとっては長い空白の時間が湯浅にはあった。けれども意を決して渡仏した彼女は、二度と日本には戻らず、パリで客死することとなる。日記には、科学者としての頭脳の老化を自覚する文章が散見され、痛々しいが、死ぬまで科学者として生ききろうとした気迫には並々ならぬものがうかがわれる。片岡と違って解放直前にパリを去り、三〇代という科学者人生の黄金期に空白の五年間があったことへの苦い思いがあったからに違いない。

湯浅はこのとき、ベルリン時代に制作したβ線スペクトロメーターとともに、原子爆弾投下後の広島を撮影したフィルムを持って行った。それを見たフランス人が受けた衝撃は大きかった(86)。アメリカ合衆国が広島・長崎に原子爆弾を投下したことに、ジョリオとイレーヌは戦慄していた。ド・ゴールもそうだった。一九四五年一二月、フランスは原子力委員会を発足させる。巨大エネルギーの

利用に関するさまざまな危険な思惑に対処するために、原子力研究の国家独占を保証するためであった。ド・ゴールは原子力委員会に核の軍事利用研究も指示したものの、「核抑止」という論理とまだ出会っていないため、この時点ではフランスの核武装を考えてはいなかった(87)。ジョリオは委員長に就任、イレーヌは委員となった。二人は原子力の平和利用を掲げた。一九四八年、フランスは最初の原子炉を稼働させた。湯浅が渡仏した一九四九年四月に三日、ジョリオはフランスで原子爆弾を開発する可能性について、明確にこれを否定する見解を提示した(88)。一九五〇年、彼は原子力委員会委員長を解任される。冷戦が始まり、ジョリオが共産党員であることが問題視されたのである。コレージュ・ド・フランスでは、挨拶をしなくなる同僚が現れた。学生たちだけが彼に忠実だった(89)。この当たりの消息を、瀧澤敬一が文章にしている。『ニューヨーク・トリビューン』から批判されたジョリオは「フランス共産党員は政府から委任された職務のある他のフランス国民と同じく、いかなる国に対しても個人のものでなく国家に属する研究の結果を良心をもつて漏らすと考へることは出来ない」と記者会見したのだが、瀧澤はカトリック信徒で反共産主義者だったので、「フランスの大科学者にはよく赤がいる」といい、ジョセフィン・ペーカーの「恋は二つ生まれ故郷と花のパリ」と重ね合わせて「黒ん坊芸人ならぬ大学者に祖国が二つ舌が二つならば大変だ」と記したのである。(90)。

三人のなかで、最も早く留学生生活を切り上げて帰国した加藤美雄のその後の軌跡についても記しておこう。幸運なことに、加藤は敗戦まで応召されることがなかった。京都にいたので、空襲とも比較的に無縁だった。親族で戦死した者もあったが、たとえば同窓の野間宏は中国大陸やフィリピンに送られたばかりか、思想犯として陸軍刑務所に収監までされているのである。「真空地帯」とも、殺し殺される戦争の惨禍とも、加藤はとりあえずは無縁であった。彼が戦後サルトルに関心を示していないのも、専門領域の違いもさることながら、戦争中に一貫して「銃後」にいたこととも無関係ではあるまい。

帰国した湯浅と加藤は京都を逍遙して旧交を温めた。そして湯浅がパリに再度渡仏した一九四九年、三四歳の加藤はデイドロ『盲人書簡』を岩波文庫で刊行した。吉村道夫との共訳書である。加藤が書いた訳者あとがきに拠れば、吉村は一九四四年三月に応召され、中国で戦死していた。これは彼の遺稿だったのである。アンステイチュ・フランセ関西のホームページにある沿革には、次のような記述がある。「ジロドワの若き翻訳者であった吉村が、戦争の最後の日、中国で戦死した。インドシナ占領に協力することを拒んで、召集され中国へ送られた。インドシナ占領を拒んだのは、愛するフランスに敵対して働かざるを得なくなるのを避けたのだった」(91)。その後、加藤はマラルメ研究に着手する。

一九五二年、フランス人の夫とともに帰国して南山大学に奉職した片岡は、京都外国語大学に移ったときに、加藤に専任教員として来ないかと誘った。すでに大阪大学で教鞭を執っていた加藤は、丁重に誘いを辞退した。こうして、加藤、湯浅、片岡の三人は、それぞれの戦後、それぞれの後半生を歩み始めたのであった。

## おわりに

「〔彼女は〕科学者の道の中に一種の司祭職を見ていた」——これは湯浅その人について語った言葉ではない。ウージェニイ・コットンがジョリオの岳母マリー・キュリーについて語った言葉である。彼女は続ける。研究者の生活というものは、「大きな自己放棄を含む」とマリーは考えていたと(92)。湯浅が自らの人生をどのように形成していったのかを見てきたわれわれは、彼女もまた研究職が「自己放棄」を必要とするものであることを理解していたことに気づく。それは片岡にも当てはまる。今日、彼女たちを讃美することほどたやすいことはない。同時にそれは虚しいことでもある。湯浅や片岡の格闘がわれわれに衝撃を与える理由は簡単だ。われわれが学問や人生の目的を見失っているから

である。アイデンティティとしての小さな自己を捨て去り、コミットメントとしての大きな自己を生きるという行為自体は、とりわけ賞讃されるべき美徳ではないし、まして他者から強いられるべきものではない。しかし、どこであるかと「最前線」で闘い続けるためには、そうした生き方が必要なことは明らかだ。

第二次世界大戦のさなか、世界各地の戦場で、国家から自己放棄を強いられた若者たちが、殺し合いを繰り返していた。その時期に、湯浅も片岡も、自らの意志で自己を捨て去り、研究の最前線で闘っていた。「血みどろになっても正しさを守ろうという熱意」が彼女たちの原動力だった。

遠藤周作がリヨンから日帰りでもパリの片岡をわざわざ訪れたのも、戦時中にフランスに留まった彼女の一徹な生き方に魅せられていたからかもしれない。留学から帰国後、「アフリカの體臭」（一九五四年）、「アデンまで」（一九五四年）、「白い人」（一九五四年）、『海と毒薬』（一九五八年）と、欧化主義者やナシヨナリストの神経を逆なでする問題作を次々に発表した遠藤の反骨を思うとき、そのような推測をせすにはいられない。祖国を棄てようとさえした片岡の生き方を知り、フランスで仏文学の学位を取ることが意味する真実を彼は知った。モーリアックに関する実証的研究で手堅く学位をとり、帰国して母校の教壇に立つことへの疑問が胸に兆したとしても不自然ではない。留学中に小説家として生きることを決断するに際して、片岡の存在は小さくはなかつたのではなからうか。

- (1) 泉孝英『日本・欧州間、戦時下の旅——第二次世界大戦下、日本人往来の記録』淡交社、二〇〇五年、四六一—四七頁。五二頁。なお、和田博文『海の上の世界地図——欧州航路紀行史』（岩波書店、二〇一六年）第六章〔42〕「ヨーロッパからの引揚げ、「大東亜戦争」による欧州航路の消滅」は、この時期の状況を詳細に記している。
- (2) 加藤美雄『わたしのフランス物語——第二次大戦中の留学生生活』編集工房ノア、一九九二年、三〇頁。
- (3) 同右、四一頁。
- (4) 同右、五九頁。
- (5) 同右、四六頁。
- (6) 片岡美智『人間——この複雑なもの』文藝春秋新社、一九五五年、二九頁。
- (7) 同右、八〇頁。
- (8) 「座談会片岡美智さん（京都外国語大学名誉教授） 大崎正二さん（元大倉商事ロンドン・パリ支店長、翻訳家）に聞く——ドイツ占領下（一九四〇—一九四四）のフランス」『人文学報、フランス文学』一—五六、七頁。
- (9) 片岡前掲書、一九五頁。
- (10) 同右、一二七頁。前掲座談会七頁。
- (11) 同右、一三二頁。
- (12) 同右、一三五頁。
- (13) 加藤前掲書、五九—六〇頁。
- (14) 『ヴァレリー集成Ⅲ（詩学）の探究』筑摩書房、二〇一一年、五一—五二頁。
- (15) 加藤前掲書、七四頁。
- (16) ドニ・ベルトレ『ポール・ヴァレリー』松田浩則訳、法政大学出版局、二〇〇八年、六〇六頁。
- (17) 加藤前掲書、八一頁。
- (18) 山崎美和恵編『湯浅年子 パリに生きて』みすず書房、一九九五年、四頁。
- (19) 湯浅年子『続。パリ随想——る・れいよん・うえーる』みすず書房、一九七七年、二〇六頁。
- (20) 湯浅年子『パリ随想——ら・みぜーる・ど・りゅつくす』みすず書房、一九七三年、一九八頁。
- (21) 湯浅年子『パリ随想3』みすず書房、一九八〇年、二四〇頁。
- (22) 『続。パリ随想』二二〇頁。
- (23) 『パリ随想』3、二四一頁。
- (24) 加藤前掲書、八三—八四頁。
- (25) 山崎前掲書、三七頁。
- (26) ウージェニイ・コットン『キュリー家の人々』杉捷夫訳、岩波新書、一九六四年、一八四頁。



- (27) エレーヌ・ランジュヴァン『ジョリオ「思い出の湯浅年子先生」山崎美和恵編著『物理学者湯浅年子の肖像— Jusqu'au bout 最後まで徹底的に』梧桐書院、二〇〇九年、二九四—二九五頁。
- (28) 『パリ随想』六頁。
- (29) ドニ前掲書、五七五頁。
- (30) 加藤前掲書、九六—九七頁。
- (31) ピエール・ビカル『F・ジョリオ『キュリー』湯浅年子訳、河出書房新社、一九七〇年、七七頁。
- (32) 片岡前掲書、一三七頁。
- (33) 同右、一五七—一五九頁。山崎『湯浅年子 パリに生きて』四二—四四頁。
- (34) 加藤前掲書、一六〇頁。
- (35) 『湯浅年子 パリに生きて』四四頁。
- (36) 加藤前掲書、一七〇頁。
- (37) 『パリ随想3』二四二—二四三頁。
- (38) 加藤前掲書、一七九頁。
- (39) 前掲座談会、一五頁。
- (40) 加藤前掲書、二一六頁。
- (41) 大崎正二『パリ戦時下の風景』西田書店、一九九三年、一二二—一二五頁。
- (42) 加藤英雄『続わたしのフランス物語—第二次大戦中の留学生生活』編集工房ノア、一九九四年、八頁。
- (43) 同右、二四頁。
- (44) ピエール前掲書、八三頁。
- (45) 『続わたしのフランス物語』七四頁。
- (46) 前田陽一『西洋に学んで』要書房、一九五三年、三〇—三一頁。
- (47) 『続わたしのフランス物語』一二八—一二九頁。
- (48) 大崎前掲書、一五八頁。
- (49) 村松剛『評伝ポール・ヴァレリー』筑摩書房、一九六八年、四一八頁。
- (50) 及川邦夫「解説」ポール・ヴァレリー『精神の危機他15篇』及川邦夫訳、岩波文庫、二〇一〇年、五〇七頁。
- (51) 『続わたしのフランス物語』一二六頁。
- (52) 木俣滋郎『日本軽巡戦史』図書出版社、一九八九年、九九—一〇一頁。
- (53) 片岡前掲書、一四一—一四二頁。
- (54) 同右、一四三頁。
- (55) 『湯浅年子 パリに生きて』六八頁。
- (56) 同右、七二頁。
- (57) 同右、七三頁。
- (58) 前掲座談会、二三頁。
- (59) 片岡前掲書、一五一頁。
- (60) 同右、一四四—一四五頁。
- (61) 瀧澤敬一「プレサレルかアルバイトか」『第十フランス通信』岩波書店、一九五二年、一二九頁。
- (62) 片岡前掲書、一六〇頁。
- (63) 同右、一三四—一三五頁。
- (64) 『湯浅年子 パリに生きて』八七—八九頁。
- (65) 片岡前掲書、一二五—一二七頁。
- (66) 『湯浅年子 パリに生きて』一〇二頁。
- (67) 『物理学者湯浅年子の肖像』九六頁。
- (68) ノエル・ロリオ『イレヌ・ジョリオ『キュリー』伊藤力司訳、共同通信社、一九九四年、二三九頁。
- (69) 『湯浅年子 パリに生きて』一〇八頁。
- (70) 『パリ随想3』二二〇頁。

- (71) 前田前掲書、一〇一―一一頁。
- (72) 『続わたしのフランス物語』一七六頁。
- (73) 片岡前掲書、一七六頁。
- (74) 同右、一九五―一九六頁。
- (75) ドニ前掲書、六六四―六六五頁。
- (76) 『湯浅年子 パリに生きて』一三二頁。
- (77) 同右、一三三―一三四頁。
- (78) 石原あえか「大戦下ベルリンの湯浅年子」『パリテイ』二〇〇八年八月号、六九頁。
- (79) 『湯浅年子 パリに生きて』一四〇―一四一頁。
- (80) 大崎正二『遙かなる人間風景』弘隆社、二〇〇二年、七―九頁。
- (81) 『湯浅年子 パリに生きて』一四八―一四九頁。
- (82) 片岡前掲書、五二頁。
- (83) 同右、一八七―一九四頁。
- (84) 山崎美和恵「湯浅先生と私」『物理学者湯浅年子の肖像』三八七―三八八頁。
- (85) 『物理学者湯浅年子の肖像』二六三―二六四頁から再引用。
- (86) エレーヌ・ランジュヴァン・ジョリオ「思い出の湯浅年子先生」『物理学者湯浅年子の肖像』二九六頁。
- (87) 美帆シボ『核実験とフランス人』岩波ブックレット、一九九六年、三八―三九頁。
- (88) ピエール前掲書、一三二―一三三頁。
- (89) ノエル前掲書、二九九頁。
- (90) 瀧澤敬一「鉄の扉の西東」『第八フランス通信』岩波書店、一九五〇年、一七五―一七七頁。
- (91) <http://www.institutfrancais.jp/kansai/about/historique/> (二〇一六年一月五日確認)。
- (92) ウージェニー前掲書、一八〇頁。

## 第二節 第二次世界大戦後のフランス留学

### ——須賀敦子を中心に

#### はじめに

第二次世界大戦下のフランス留学について前節で見たが、遠藤と同じように、敗戦後の一九五〇年代にフランスに留学した日本人は多い。その中には、辻邦生もいたが、数は少ないとはいえ、女性も存在した。本節では、カトリック信徒だったイタリア文学者須賀敦子（一九二九—一九九八）をとりあげて、この時期のフランス留学について歴史的な考察を試みることにする。須賀敦子はパリ時代について多くを書き残していない。彼女が端正な文章で語り続けたのはミラノを舞台としたイタリヤ時代である。そのためか、パリ時代はほとんど素通りして論じられることがない。しかし、ほぼ同じ頃に渡仏した留学生たちの回想が存在する。これらを補助資料とすることで、須賀敦子のパリ時代を復元してみることしよう。

#### 一 一九五〇年代の留学者たち

東京銀座でも戦災孤児が見られ、日が暮れて星々が瞬き始めると渋谷の街角に娼婦が立ち並んだ一九四九年、一人の少女が横浜港からフランスに向かった。ピアニスト高野耀子（一九三一—）である。パリ生まれで、当時東京音楽学校の生徒だった彼女は、パリ音楽院に入学するために私費で渡仏したのだ。「OCCUPIED JAPAN」と表紙に印刷された連合国総司令部発行の出国証明書には、係官のサインの下に吉田茂の署名があり、寄港地全ての滞在許可証も携えていたはずである。戦後最初期のフランス留学生である。前年には、前節で詳述した物理学者湯浅年子、そして洋画家荻須高德や仏文学者朝吹登美子ら、戦前にフランス滞在経験がある人々の再渡仏があったが、日本から初めてフランスに留学する人々は、一九五〇年代に多くなった。何人かを年代ごとに並べてみることにしよう。

- 一九五〇年 遠藤周作（仏文学）、森 有正（哲学）、田中希代子（ピアニスト）
- 一九五一年 加藤周一（医学）、黛 敏郎（作曲）、田淵安一（洋画）
- 一九五二年 三保 元（仏文学）、白井浩司（仏文学）、野見山暁治（洋画）
- 一九五三年 須賀敦子（伊文学）、小川国夫（小説）、堀内 秀（なだいなだ、精神医学）
- 一九五四年 鈴木道彦（仏文学）、高階秀爾（美術史）、平川祐弘（比較文学）
- 一九五五年 二宮フサ（仏文学）、芳賀 徹（比較文学）
- 一九五七年 辻 邦生（仏文学）、辻佐保子（美術史）、小木貞孝（加賀乙彦、精神医学）
- 一九五八年 阿部良雄（仏文学）

このように、数え上げていけば切りがない。当時の彼らは「一度行ったら、もう二度と行けないんじゃないか」（高階秀爾）という思い詰めた気持ちで海を渡ったのである。

すでに本国と極東植民地を結ぶ英国国営海外航空がヨーロッパと日本を結んではいた。しかし、フランス国営航空が、パリからベルート、カラチを経由して仏領インドシナのサイゴンまで行くヨーロッパ線を東京まで延長し、アジア極東路線として定期便を運行し始めるのは一九五二年一月。サンフランシスコ講和条約発効の七ヶ月後のことである。銀色に輝くロッキード社コンステレーションが、東京・パリ間を五〇時間で結んだ。しかし高額であり、留学生の利用が主流となるのは、第三次中東戦争の影響で六七年にスエズ運河が封鎖され、船便がアフリカ南端經由になって以

後のことである。

一九五〇年代、ほとんどの留学生は船を利用した。その際、フランス郵船が本国と植民地を結んだ極東航路便を利用する方法と、日本郵船の欧州航路便を利用する方法があった。旅客船か貨物船か、どの等級を選ぶかという問題もある。こうした違いに着目する研究者がいない。だが、当時の留学を考える際には大切である。どういう立場に置かれるか、あるいは一度置かれたかで見えてくる「現実」が違うからだ。なにしろ三五日間の船旅は、長期間にわたる身体的移動を伴う非日常的な変化と危機の「時」なのである。

フランス政府給費留学生試験合格者、フランス政府私費留学生試験合格者、そして純然たる私費で行った者、これら三者の違いにも考慮が必要だ。東京大学仏文科講師だった中村真一郎は、父を早くに亡くし私費留学が困難だった。そのため、役職上要求される水準の研究遂行能力が維持できないと考えて辞表を出した(1)。だがそのための給費留学生制度である。往路の旅費さえ工面すれば、学費、生活費、帰国の旅費はフランス政府が支給してくれる。平川祐弘によれば、中村は受験したが不合格だったのだ(2)。高校進学率が五割、大学短大進学率が一割だった五〇年代半ば頃、留学自体が、国内大多数の選良から象徴的に聖別され身分的威信を高めることだったが、給費留学生への選抜は、ピエール・ブルデュール流に申せば、叙任儀礼を経てフランス政府という最高権威から爵位を授けられることを意味していたのである。

さて、フランス郵船極東航路の定期旅客船は、マルセイエーズ号という豪華客船だった。船体から煙突まで全て純白の「白亜の宮殿」を利用した留学生は多い。遠藤周作、森有正、田中希代子、黛敏郎、野見山暁治、小川国夫など、五〇年から五三年に留学した者は、皆この船を利用している。一等、二等、そして四等があった。給費留学生黛敏郎は一等船客だった。給費留学生だが森有正は二等船客だった。特別だったのは森ではなく黛である。非給費留学生遠藤周作は四等船客だった。四等船室とは船尾の上甲板と船艙の間に存在する空間だった。垂直の梯子を下りると黒人集団がいた。サイゴン裁判で釈放され日本送還になった日本人捕虜を護送してきた、マグレブ出身の植民地兵だった。フランス語もろくに話せず、文字の読み書きもできない彼らと、遠藤は同じ船室でサイゴンまで過ごさねばならなかった。フランス人給仕が「四等の奴は客じゃないぜ。船はお前たち黄色人や黒人を憐れんで乗せているんだ」と遠藤を面罵した。黛敏郎と同じ便、しかし一等ではなく二等船客として乗船していた上智大学派遣留学生田川茂は、四等船客の友人村山素夫を自分の客室に招き入れたところをフランス人パーサーに見咎められた。金モールの肩章を付けた彼は「シッ、シッ」といいながら即座に村山を部屋から追い出し、その場にいた田川も部屋から追い出そうとした。田川が二等船客であることを証すると、その途端、パーサーは威儀を正し「ずいぶんと恐縮していました」(3)。パリ音楽院へ留学する田中希代子は二等船客だったが、一等船客用サロンにあるグランドピアノでの練習を許可され、毎朝五時から六時までの清掃時間に練習ができた(4)。業務用大型電気掃除機の騒音の中とはいえ、政府給費留学生という威光ゆえの特別待遇であろう。一等船客はこのサロンで楽隊の演奏による舞踏会を催したが、四等船客は、上級船客の料理の残余らしきものを、バケツから自らアルミ皿に盛り、鎖で繋がれた折畳式カンパスベッドに腰掛けて食べた。要するに、マルセイエーズ号は、「小さなフランス」だった。そして四等船室はその「小さな植民地(第三世界)」だった(5)。したがって、若く誇り高い日本人が何等船客として三五日間を過ごしたかは、きわめて重要な事柄なのである。給費留学生でありながら四等船客として渡仏した珍しいケースが、なだいなだである。彼は「荷物なみにしか扱われ」ず「炎熱地獄の熱帯の海を、船底で頑張らねばならぬ」(6) 苛酷な旅を文章で再現していない。

五四年にマルセイエーズ号が引退し、高階秀爾はヴェトナム号、芳賀徹や阿部良雄はラオス号、加賀乙彦と辻邦生はカンボジア号に乗った。三隻は姉妹船で、五二年に建造され、定期客船として交互に横浜港にやってきた。「白亜の宮殿」が「フランスの貴婦人」になっても、船内の階層構造はさほど違わなかった。給費留学生加賀乙彦は、カンボジア号の二等船客として、保護留学生辻邦生

は同じ便の四等船客として乗船した（給費留学生辻佐保子は同年航空機で渡仏）。一等は白人のフランス人や裕福な華僑で、二等以下の乗客とは服装からして違っていた。彼らは船上でクレール射撃をしていた（8）。ちなみに、一等は、さらにラックス（極上）からGクラスまで七つの等級区別があった。マルセイエーズ号と違って三等にも食堂があった。三等船室には作り付けの二段ベッドがあったが、四等はキャンパスベッドが柱に括り付けられているのだった。女性は入室不可。食事も「刑務所の食事のようなもの」。「それはもうほんとに並の神経の人には耐えられないような場所でした」（7）。

横浜港を出発すると、神戸、香港、シンガポール、マニラ、サイゴン、コロンボ、ジブチなどを經由してスエズ運河を上り、マルセイユに到着する。その間、留学生たちは巨大な絵巻物のように眼前に繰り広げられる光景——戦禍で焼け爛れた東南アジアの街を、日本の戦時輸送船の残骸が浮かぶ港湾を、あるいは植民地支配されたアラブの港を裸足で歩く現地人の姿を目に焼き付けることになる。受け止め方はさまざまだった。辻邦生はこれらの寄港地に興味を抱けず、現地人の港湾労働者を眺めながら「こういう色の黄か黒か褐色かにくらべると、僕がいかに白い人たちを理解しているかがわかる。彼らの人生観、宗教観、生活様式、歴史、文化、言語に、いかに僕は通曉していることだろう」（9）と日記に書いた。そしてジブチから乗り込んだ「気味のわるい」黒人植民地兵について、フローベールを思わせる精密な描写を試みた。加賀乙彦はジブチの現地人の悲惨を目の当たりにして「ヨーロッパ人の優越感を肌で感じ」（10）た。「欧米に対するいわれのない劣等感」など「はじめから存在しない」世代といい、「自信をもって気軽にヨーロッパへ向か」ったという給費留学生阿部良雄は、寄港地で「うまい物を食べたり気楽な見物をしたりしながら一月の船旅を重ねた」（11）という。

## 二 貨物船の旅

長い前置きはこのくらいにして、須賀敦子の旅を見てみよう。五三年七月、横浜港から、二百人のフルブライト留学生を乗せた氷川丸がシアトルに向けて出港した。汽笛が鳴り、船が動き出すと、デッキの留学生たちと岸壁を埋め尽くしていた見送り客たちを繋いでいた数百本の七色のテープが、徐々にちぎれ、風に吹かれ、海に落ちていった。同じ月に、横浜港から、黒い船体に細い白線が入った日本船が静かに港を出た。黒い煙突に白い帯、さらにそこには二本の赤線が入っていた。日本郵船の「二引旗章」である。船体に平安丸と書かれたこの船は、翌日神戸港に着いた。この船に、白いスーツを着た一人の若い女性が乗り込んだ。フランス政府保護留学生須賀敦子である。第二平安丸は、マルセイエーズ号のような「旅客船」ではなかった。須賀は自著で貨客船と記しているが、それは一代目のことで、二代目は「貨物船」である。三等級の船室を持ち、三〇〇人以上の乗客を乗せられる氷川丸が貨客船である。一代目平安丸には三三〇人の旅客設備があったが、二代目には僅か六名分の設備しかなかった。日本郵船は五二年にスエズ經由欧州航路を再開したが、平安丸は五一年に建造された日本郵船戦後建造外航第一船であった。同年に建造された貨物船二代目赤城丸は、五三年一月に遠藤周作がマルセイユから帰国の際に利用した船である（12）。十二名分の客室があった。乗り込んだ遠藤は、給仕が出す渋茶と漬け物に感動した。そこはすでに日本だった（13）。

須賀のほか三人の乗客がいた。二人は大学教授、あとの一人は洋画家だった。船長と五人の上級船員、そして五十人の船員たち。乗客は船長と食事をした。日の丸を掲げた平安丸の空間は「小さなフランス」ではなく、日本だった。基隆（台湾）、香港、シンガポール、ポート・スウェーラム（マレーシア）、ペナン、アデン、ポート・セツド、アレクサンドリアに寄港した。須賀はマルセイユまで行かず、ジェノヴァで下船した。父の知人の大学教授の出迎えを受け、パリへ列車で向かったのである。

この船旅について、須賀は『ユルスナールの靴』のなかで次のように記している。

一九五三年の七月一日、颱風が去ったばかりの神戸港を出てジェノワに着くまでの四十日の船旅の日々を、海と空しかない索漠にかこまれて、到着の日を待つことだけに私は精力を使い果していた。航海を愉しむ余裕はなかった。「……」香港、基隆（台湾）、マニラ、シンガポール、さらにマレーシアのポート・スウェッテンハムと、つぎつぎにアジアの港をまわって荷を積み、荷を下ろす、それを待つあいだの時間をみはからって、四人の船客はあたふたと町の見物に出かけた。だが、買物をするための金などあるはずもなかったし、どの土地に行っても太平洋戦争を仕掛けた側としての気まずさばかりで、見物もそこそこに船に戻ってくる。（14）

アデンで須賀は初めて「居丈高な」英国人植民地行政官と対面した。現地のアラブ人男性の鋭い視線とも初めて遭遇した。「一分でも早くヨーロッパに着きたい、それだけを一方的に希いつづけていた私にとっては、じぶんをとりまいて異形の人びとも「……」ひたすらうとうとらしいだけで、興味をそそるものではなかった」と須賀は記している。須賀の旅は、「海と空」ばかりであり、寄港地で現れる「異形の人々」すなわち「他者」とは出会い損ねるものであった。彼女は想像上のヨーロッパに眩惑されていたからである。

留学前年、須賀は加藤周一『戦後のフランス——私の見たフランス』（未来社、一九五二年）を読んだ。クロード・モルガンの抵抗文学『人間のしるし』（岩波現代叢書、一九五二年）に感銘した須賀は、加藤の『抵抗の文学』（岩波新書、一九五一年）も読んだに違いない。モルガンについて、須賀は『遠い朝の本たち』のなかで次のように記している。フランスのレジスタンス運動に対する理想化が明らかに見て取れる。

『人間のしるし』が、あの時代に私たちをとりこにした第一の理由は、それが抵抗運動について書かれたものであったからであるのは、まちがいない。わずか三、四年の違いで、戦争に行つた人たちと大きく隔てられていた私たちの世代は、おとなに対してヒツジのように盲従し、メダカみたいに列をつくって、戦争に参加した。そのおなじ時代にヨーロッパでは、同年代の若者を含むあらゆる年齢層、社会階級にぞくする多くの市民が、まずなによりも、人間らしさを大切にするという理由のために、抵抗運動に参加したことを、私たちは戦争が済んでから知って、唯々諾々と戦争を受身で生きてしまった自分たちの精神のまずしさに慄然とした。（15）

加藤周一は航空機で東京国際空港からバンコック、チューリッヒを経由してパリに飛んだ。飛行機には、クレー射撃に興じるフランス人も、半裸で横たわる黒人兵も存在しない。「はじめてパリの町をみたときに、私は大都会というものはどこでも大同小異であると思」つたと加藤はいう（16）。東京から座ったままパリに到着した人らしい感想である。彼は留学前に『抵抗の文学』を著した。この書物はドイツ占領下の抵抗運動を「国民的運動」であったとするレジスタンス神話を日本国内に広める役割を果たした。フランスに留学した加藤は『戦後のフランス』を著したが、そこで彼は「私が日本でフランスについて考えていたことは、まちがっていなかった」と記した。

加藤が『抵抗の文学』の評価を改め、「抵抗」の歴史的な事実から出発して、詩を評価したのではなく、詩の評価から出発して、「抵抗」の歴史を想像しようとした「書物であり、「抵抗」の運動に触れた部分は、根拠に乏し」と認めて活字にしたのは歿後の二〇〇九年である（17）。かつて「抵抗」こそは、占領下のフランスの真に国民的な運動であったといえる。第一に、その目的が「……」本来国民的な関心に係るものであったし、第二に、その支持者が「……」フランス国民の全体にわたっていたからである」と書いた加藤は、五八年後に「すべてのフランス人が「抵抗」の英雄であったわけではない。——それはあたりまえの話である」と記した。

もともとフランス側の政治的宣伝を見抜けずレジスタンス神話を拡散する文章を書いたのは彼だ

けではなかった。ただ、抵抗運動の裏面にいち早く気がついたのが、「パリ以外のフランスから日本をみることは、そもそも不可能である。フランスの地方と日本との間には何の関係もない」(18)とパリで書いた加藤ではなく、リヨンで学生生活を送った遠藤周作だったことは書き添えておきたい。そのようなわけで、留学前の須賀は、松本正夫や、何よりフランスから帰国したばかりの三雲夏生による「新しい神学」に関する新鮮な情報も得ていたものの、加藤の文章などを通じた、輝かしいレジスタンスの国という歪んだフランス像ももっていたと考えられる。「新しい神学」は対独抵抗運動から生まれたものであったから、現実のフランスに接したとき、須賀は違和感に苦しめられることになるのである。

### 三 パリの小さな「第三世界」

パリ南部には、戦間期にできたパリ国際大都市があり、各国の学寮群があった。国柄を表現した各国館はパリ万博会場のミニチュアのように見えなくもない。土地を政府が提供し、建物は各国が建てる。もともと、フランス政府が自ら建てた館もあった。植民地館である。七階建て六〇室以上ある日本館は、ある富豪が私財を投じて二九年に建てたもので、帝冠様式に似た日本館には日本庭園もあり、鯉が泳ぐ池もあった。玄関奥とサロンのステージには、藤田嗣治の大作が掛かっていた。留学生の多くがここに入った。給費留学生阿部良雄は国立高等師範学校の寄宿舎に入ったが、須賀に少し遅れて到着したなだいなだ、小川国夫もここに入った。二人の部屋は隣り同士だった(19)。館長はフランス人で、交換制度により三割が外国人だったが、ここはフランスにある「小さな日本」だった。

須賀がここに入らず、カトリック修道会が経営する女子学生寮に入ったのは、当時の日本館が男子学生用だったからだと思われる。女子寮には五〇人ほどの学生がいた。二人部屋で、ルームメイトは次々に変わった。「ベッドとベッドのあいだが一メートルそこそこ、衝立でかこった洗面台とタオル掛け、窓ぎわに向いあっておかれた、幅が五〇センチあるかないかの勉強机ふたつという、せせこましく混み合った部屋」だった。この寮には、中国人、ヴェトナム人、マルチニック島出身の黒人などがおり、「かたまって行動することが多かった」。他の学生寮に入れてもらえなかった植民地出身の非白人学生が多かったため、植民地出身の白人学生が驚き、「わたしが現地人なんかといっしょに住んでいるって知ったら、両親が気絶しちゃうわよ」といつてすぐに出て行くこともあった(20)。つまりここはフランスのなかの「小さな第三世界」だったのである。

朝鮮半島出身のある学生は、須賀が眼鏡をかけると、日本の兵隊を思い出すから掛けてくれるなといった。戦争中にハノイに逃れ、そこからパリに來た中国人姉妹もいた。第一次インドシナ戦争の最中だったので、民族衣装アオザイを着て市内を歩くヴェトナム人女子学生への市民の視線は険しかった。故郷と音信不通になり送金が途絶えた学生もいた。

加藤周一は「パリでは私はインドシナ人であった」と記している。フランス人にとって、アジア人といえば、中国人か、植民地のインドシナ人だったのだ。フランス人の日本人、ヴェトナム人に対する見方には単純ではないところがあり、五五年にパリ大学研究員として渡仏し、翌年に同大非常勤講師となった今道友信は、アパートを借りようとしたが、貸し主の女性から、「夫の弟がベトナムで日本兵に虐殺されているので、あなた個人になんの恨みもないけれど、日本人だけはこの家に入れたくないのです。その気持ちを理解してください」と断られたことを「暖かいスープ」というエッセイで記している。

須賀は学生時代、サイゴンで生まれ育ったフランス人教師からフランス語を教わった。「目立ってよくできて、トップクラスだった」(21)が、パリではそうはいかなかった。「こちらがおおずおおずと発音に気がつかって口にするセンチンスは、大学でも、語学学校でも、買物の店先でも、ほとんど例外なく、聞きがちがえられたり、なおされたり、もつとはつきり言いなさいよ、とどなられたりし

た」(「ほめる」)。遠藤周作も、初めて訪れたパリで、「r」音がうまく発音できず、首をかしげられたり、クスクス笑われたり、「憐憫とも軽蔑ともつかぬ眼で」眺められた(22)。これは日本人だけの問題ではない。マルチニツク島出身者は、「r」音が脱落しがちなので、間違えるまいと自意識過剰になる。須賀が来る前年にパリにいた遠藤は、郵便局でフランス語の上手でない日本人教授が窓口の女から「黄色人のくせに」と大声で怒鳴られるのを目撃して抗議している。周囲の客はニヤニヤと笑っていた(23)。

遠藤は、インドシナで日本兵に拷問された身内を持つフランス人青年から、日本人の残虐さについて静かな抗議を受けているが、フランスの徹底的な暴力によって独立を阻まれているヴェトナム出身の学生を多く周囲に持った須賀には、そのような体験はなかったようだ。フランスは第二次世界大戦後も植民地維持に執着し続けた。ド・ゴール率いる「自由フランス」の「国土」は、海外の植民地だった。連合国によって解放され、威信を落としたフランスの帝国意識が高まったのは、むしろ大戦後のことであつたといわれている。一九五三年一月、デイエンビエンフーをフランス軍が占領すると、ベトナム軍が武器食料を集結してこれに備えた。翌年三月に戦闘が始まると、ベトナム軍の攻撃により、五月にフランス軍は大敗を喫して威信をさらに落とす。須賀がシャルトル巡礼に参加したのはその翌月のことである。二日間かけてパリから三万人の学生がシャルトルまで歩く。『ヴェネツィアの宿』に拠れば、準備から巡礼まで須賀の世話をしてくれたのは、学生寮で一緒だった学生だった。彼女は父親がフランス人、母親は中国人、仏領インドシナ出身だった。彼女はどのような思いでこの巡礼に参加していただろうか。須賀の文章からは、明敏な女子学生の姿が浮かび上がってくるが、そのあたりの消息については書き記されていない。

この年一月には、アルジェリア戦争が始まる。アルジェリア民族解放戦線は、デイエンビエンフーでのヴェトナムの勝利に力づけられていたのである。加賀乙彦は、サイゴンで、アルジェリア戦争に投入されるフランス旧植民地兵がカンボジア号に多数乗り込むようすを目撃している。インドシナ戦争時には、フランス政府は北アフリカから植民地兵を大量にインドシナに投入していた。いずれも本国兵の損害を少なくするためである。しかし本国兵士によるアルジェリア人に対する拷問、殺戮、「簡易処刑」が明らかになるのは後年のことだ。指揮官ジャック・マシュ將軍は、対独抵抗運動の闘士であり、兵士たちにもレジスタンス経験者がいた。レジスタンスの英雄であり植民地主義者であるという二重性。人権の祖国が植民地帝国であるという矛盾。それは長い間、隠され、意図的に「忘却」されてきた。ヴィシー時代に内務官僚としてユダヤ人迫害に荷担し、アルジェリア戦争時にはアラブ人迫害の責任ある立場だったモーリス・パポンの裁判で、フランス人が過去の記憶によりやく向き合ったのは、一九八〇年代以後のことである。

## 六 フランス人の有色人差別

日本、中国、ヴェトナムの区別がない「普通の人」はいただろうが、自分の周囲では「日本の差別についていうことはまったく無」かつたと高階秀爾は回想している(24)。芳賀徹は、「フランス人は、全く対等に我々に接してくれた。……」あれがフランス留学の、最大のメリットでした」と語っている(25)。パリのアカデミーでは差別がなかったことがわかる。しかしそれは人種差別がフランス社会に存在しなかったこととは同じではない。同じ頃にパリにいた須賀は、「東洋人」として「街で不当な扱いを受けるたびに不満をもらし」ていたし、学生寮の二人部屋でレユニオン出身の黒人学生と同室だった平川祐弘は、植民地出身の黒人学生の多くが自分の出身地について多くを語らないことに無関心だったが、フランス語を自分より遙かに自在に操る彼らが「黒い肌ゆえに自分の他者を思い知らされて」いることを見逃さなかった(26)。「北アフリカ人」というときの「パリ人の軽蔑した目つきや声」に須賀は気がついていて、北アフリカ人とは、アルジェリア、モロッコ、チュニジアといったいわゆるマグレブのことである。だから須賀は、アルジェリア戦争がすでに始ま



ついでに冬に寮友のベルギー人から「あなたって、根本的にノマッド（遊牧民）かもしれない」といわれたとき、「ノマッドとは」サハラ砂漠なんかの、隊商とかラクダとか天幕とか、目つきの鋭い男たちや黒布で顔を被った女、そういうった風景につながることはじゃないの？」と返した。「そういうった風景」とは、アルジェリアの風景にほかならない。「どうして、私が北アフリカ人なのよ」と須賀は抗議した。フランス人のアルジェリア人に対する侮蔑意識に、須賀自身の言葉を使うと「感染」していたのである（27）。

須賀は、パリにきて一年近く経ったころ、つまりアルジェリアで抵抗運動が盛んになっていたころ、対独抵抗運動から生まれた「労働司祭」が、金曜夜にミサを行っていることを知った。シモーヌ・ヴェイユに惹かれていたこともあったのだろう、須賀は出かけた。教会は禁止していたため、彼女は「非合法的な政治集会に参加するのにも似た、ある精神の昂揚を感じて緊張した」。しかし、ミサにあずかり、講義を聴き、薄暗い会場を出て帰路についた彼女は「ミサのあった場所が、十三世紀の天才的神学者アキナスのトマが、ナポリからパリに来てソルボンヌで教えていたときに泊まっていた修道院に違いない」ことに気づき、トマらが「今夜会った労働司祭たちとはちがつて、おそらく生気に溢れていたのだ」と想像した。そして「その後、二、三度、通っただけでやめてしまった」（28）。想像したパリに日本で憧れた須賀は、現実のパリに来ると、今度は過去のパリを想像して憧れている。「もっと新しい風潮にじかに触れられるかと期待していたのに、せいぜいがサン・ジャック街のミサぐらいだった」とも彼女は記す。労働司祭という言葉に惹かれた須賀は、その現実の姿に落胆している。つまり、胸に抱いてきた理想のフランス像が、現実のフランス社会の前で、もはや維持しきれなくなっているのである。

パリ大学の堅実な実証主義が、彼女には「硬直した」もの、血の通わぬ「化石のような」ものとして急速に色褪せて見えてきた。「二分でも早くヨーロッパに着きたい、それだけを一方的に希いつづけていた」須賀は、パリに幻滅したのである。「貧しいけれども勉強する。で、勉強するに十分値するパリでした」と芳賀徹は回想している。この評価の違いは何だろう。留学の動機がそもそも違った。大学院で専攻した社会学におそらく幻滅した須賀にとって、「神を信じるものも、信じないものも、みないっしょに戦った」レジスタンス運動から生まれた「新しい神学」の実態を自らの目と耳で確かめること——これが留学の最大の目的だった。「新しい神学」は、当時の須賀の目には、キリスト教による社会変革の希望の光として映った。そしてそれを生み出したのは「教会の長女」フランスだった。彼女が抱いた期待が現実とずれていたとしても、それを非難することはできない。当時フランスは日本国内の言論界で神々しく輝いていたからである。自由と人権の祖国、理性と文明の国、偉大なるフランス。世界の光源パリが放つ、まばゆいばかりの栄光と威信……。それはしかし、権威者たちの手によって豪華に飾り立てられた壮麗な言語的虚構であり、無数の歪みを持つ、理想化されたフランス像であった。

## おわりに

共和国フランスはナチス・ドイツに正式に協力した国であり、ユダヤ人迫害に組織的に関与していた。強制移送はフランス官憲の手により、市民の目の前で行われた（29）。また須賀の留学中に始まるアルジェリア戦争では、かつての対独レジスタンスの闘士たちが、アルジェリアの独立を阻止しようとして、対仏レジスタンスを凄まじい暴力で弾圧することになる。国民の多くも、植民地の独立を阻止する政府方針を支持していた。社会変革の希望に満ちた「新しい神学」を見出すために共和国フランスに渡った須賀が全身で感じ取ったものは、予想だにしない、植民地大国フランスの血みどろの足掻きだったのである（30）。植民地での暴力の実態はフランス国民には隠されていた。けれども、日々の暮らしのなかで、自らと周囲に突き刺さるようなフランス社会からの風圧を、須賀が感じ取らずにいたはずがない。なぜなら、彼女は生活の本拠地を「小さな第三世界」におく女性だ

つたからであり、男性としてフランスのなかの「小さな日本」にいたわけではなかったからである。これが須賀敦子のパリだった。彼女が出会ったフランスだった。しかし、同時にそれは、ヨーロッパの現実世界への、彼女に開かれた、ただひとつの入口だったのである。

- (1) 中村真一郎『愛と美と文学——わが回想』岩波書店、一九八九年、一五三—一五四頁。
- (2) 平川祐弘「幻想振りまいた仏文の知的群像」『公益財団法人国家基本問題研究所』二〇一一年一月二五日役員論文) <http://jinf.jp/articles/archives/6592> 二〇一三年八月十三日確認。
- (3) 酒井新二編『燃えて生きる——田川茂神父の40余年にわたる教育実践』誠文堂新光社、一九九七年、四一頁、五八頁。
- (4) 萩谷由喜子『田中希代子——夜明けのピアニスト』ショパン、二〇〇五年、八九—九一頁。なお、同書一九頁にはマルセイエーズ号の写真が掲載されている。
- (5) 遠藤周作「有色人種と白色人種」SEZ 12、二〇九—二一九頁。遠藤自身の旅のようすについては『ぼくたちの洋行』講談社、一九七五年等を参照。
- (6) なだいなだ『ぼくだけのパリ』平凡社、一九七六年、一六頁。なお、和田博文『海の上の世界地図——欧州航路紀行史』(岩波書店、二〇一六年)第五章「一九二〇年代に到来するツー李有無の季節[1921—1931]」は、船室の階層性及びフランス・英国・ドイツ・日本の船上の「異文化性」について詳述している。
- (7) 辻邦生『言葉が輝くとき』文藝春秋、一九九四年、三二〇頁。
- (8) 加賀乙彦『加賀乙彦自伝』集英社、二〇一三年、一三二頁。
- (9) 辻邦生『パリの手記I——海そして変容』河出書房新社、一九七四年、八五—八六頁。
- (10) 加賀乙彦『加賀乙彦自伝』集英社、二〇一三年、一三二頁。
- (11) 阿部良雄『若いヨーロッパ——パリ留学記』中央公論社、一九七九年、一〇—一一頁。
- (12) 『日本郵船歴史博物館 常設展示解説書』日本郵船株式会社、二〇〇五年、『七つの海で一世紀——日本郵船創業100周年記念 船舶写真集』日本郵船株式会社、一九八五年参照。
- (13) 遠藤周作『忘れ難い場所がある』光文社、二〇〇六年、一〇—一一—一二頁。
- (14) 『須賀敦子全集』文庫版第三卷、河出書房新社、二〇〇七年、七二頁。
- (15) 『須賀敦子全集』文庫版第四卷、一六五頁。
- (16) 加藤周一『続羊の歌——わが回想』岩波書店、一九六八年、一五七頁。
- (17) 加藤周一「途絶えざる歌」追記『加藤周一自選集1』岩波書店、二〇〇九年、三九二頁。
- (18) 加藤周一「日本からみたフランスとフランスから見た日本」白井吉見編『現代教養全集』2、筑摩書房、一九五八年、三七頁。
- (19) なだいなだ『ぼくだけのパリ』二六—二七頁。小川自身の日本館時代の回想としては、小川国夫「灰色の群れ」『ユリイカ』二〇一二年八月臨時増刊号「野見山暁治 絵とことば」所収がある。また、パリ日本館については以下を参照。林善彦『パリ日本館だより——フランス人ときあう法』中央公論社、一九七九年。小林茂『薩摩治郎八——パリ日本館こそわがいのち』ミネルヴァ書房、二〇一〇年。パリ国際大学都市日本館ホームページ <http://maisondujapon.org/> 二〇一三年八月十八日確認。
- (20) 『須賀敦子全集』文庫版第一巻、河出書房新社、二〇〇六年、三八八頁。同第二巻、一八六頁。同第三巻、三四頁。なお、須賀の下宿時代については、三保元「パリ留学時代のガス」『須賀敦子全集』第七巻月報、河出書房新社、二〇〇〇年も参照。
- (21) 三雲苑子「夢を引き寄せたひと」『須賀敦子全集』第三巻月報、河出書房新社、二〇〇〇年。
- (22) 遠藤周作「哀れな留学生」『ぼくたちの洋行』講談社、一九七五年、四八頁。
- (23) 遠藤周作「黄色い人の哀愁」『異邦人の立場から』日本書籍、一九七九年、一〇四—一〇六頁。
- (24) 高階秀爾「オーラル・ヒストリー二〇一〇年六月四日」『日本美術オーラル・ヒストリー・アーカイヴ』[http://www.oralarhistory.org/archives/takashina\\_shuji/interview\\_01.php](http://www.oralarhistory.org/archives/takashina_shuji/interview_01.php) (二〇一四年一〇月五日確認)。
- (25) 高階秀爾・芳賀徹「一九五〇年代パリ 君と僕の青春」『大原美術館紀要』2、大原美術館、二〇〇五年参照。
- (26) 平川祐弘『ラフカディオ・ハーン——植民地化・キリスト教化・文明開化』ミネルヴァ書房、二〇〇四年、三

四四頁。

(27) 『須賀敦子全集』 文庫版第四卷、八一―八三頁。

(28) 『須賀敦子全集』 文庫版第二卷、一九四―一九八頁。

(29) 以下を参照。渡辺和行『ナチ占領下のフランス』講談社、一九九四年。渡辺和行『ホロコーストのフランス』人文書院、一九九八年。

(30) フランスの植民地主義については以下を参照。平野千果子『フランス植民地主義の歴史―奴隷制廃止から植民地帝国の崩壊まで』人文書院、二〇〇二年。バンセル／ブランシヤール／ヴェルジェス『植民地共和国フランス』平野千果子他訳、岩波書店、二〇一一年、平野千果子『フランス植民地主義と歴史認識』岩波書店、二〇一四年。

## 第三節 遠藤周作と辻邦生のフランス留学

### ——遠藤周作「爾も、また」と辻邦生『パリの手記』

#### はじめに

辻邦生は遠藤周作より二歳年下で、村松剛より四歳年上である。アジア太平洋戦争終結時、遠藤は慶應義塾大学学生、村松は旧制第一高等学校一年生（五年制の旧制中学校を繰上卒業）、辻は前年に入学した旧制松本高等学校を落第して二年目だった。村松と辻は、そのような次第で、東京大学文学部フランス文学科の在籍期間が重なり合っている。村松は鈴木信太郎の下でポール・ヴァレリーを専攻したが、辻は渡辺一夫の指導を受けて、スタンダーを卒業論文のテーマとした。松本高校時代にはトーマス・マンの長編小説に傾倒していた辻は、渡辺に教わりたがために仏文科に進学したのであった。彼はそもそも詩の人というよりも散文の人、そして批評の人というよりは創作の人であった。遠藤が批評家として出発して留学後に小説家に転じたことや、村松が当初から批評家を目指していたことは対照的であった。なお、三人とも生まれは東京である。

辻の小説家としての出発は遅く、フランス留学から帰国した一九六〇年代に入って以後のことである。すでに遠藤は『海と毒薬』（一九五八年）を発表して中堅小説家として認められており、村松はアイヒマン裁判を傍聴したりアルジェリア戦争を取材するなどして、行動的な批評家として活動していた。

#### 一 遠藤と辻のフランス留学

ここでは、遠藤と辻のフランス留学を対比してみたい。遠藤はカトリック関係のスカラシップを得た私費留学として一九五〇年から五三年まで、辻はフランス政府保護留学生として一九五七年から六一年までと、時期は重なっていない。年齢的にも、出発時に遠藤は二七歳、辻は三二歳という違いがある。辻は鈴木力衛の姪である後藤佐保子とすでに結婚しており、フランス政府給費留学生として佐保子も一緒にパリに行った。このような境遇の違いには留意が必要だが、両者の留学にはさまざまな側面で対照的などころがある。

遠藤の留学体験については、すでに修士論文「遠藤周作とフランス・ファノンの比較文化論的考察——フランス本国における有色人差別を中心として」で詳細に記述した。横浜港からフランス郵船の旅客船に乗り込んだ時点から、遠藤はフランス階級社会の最底辺に位置する四等船客として、船員たちによる差別的な待遇を受けた。そこから彼の留学がスタートしたのであった。遠藤はマルセイエーズ号、辻は後継船カンボジア号という違いはあったが、両名ともに四等船客として一ヶ月以上の時間をかけてマルセイユまでの旅をしたのである。遠藤の留学については、「赤ゲットの仏蘭西旅行」「滞仏日記」（1）や『フランスの大学生』（2）などだろうかということが出来る。辻のフランス滞在についても、『パリの手記』（3）で見ることが出来る。辻のパリ留学体験については先行研究があるが（4）、われわれは遠藤との比較が主眼なので、新たな視点からの考察となる。

マルセイユに到着するまでのカンボジア号の船旅に焦点を絞り、乗り合わせた中国人、黒人、フランス人、日本人に関する辻の記述に着目し、それを遠藤と比較する作業を通じて、二人の他者に対する向き合い方の相違を浮き彫りにすることにしよう。メディアが発達した今日と異なり、二人が留学した時代には、すでに所有しているイメージを再確認するような、現在の観光形態は行われておらず、

本来の意味での旅、すなわち未知との出会いが旅の本質であったことは、はじめに確認しておきたい。遠藤が横浜港からマルセイユエーズ号でマルセイユに向かったのは一九五〇年のことである。甲板下のアントロポんに梯子を下りていくと、サイゴンから乗船した半裸の黒人たちがいて遠藤らは仰天した。アフリカ植民地兵であった。詳細は修士論文で論じたので、簡潔な記述に止めるが、戦後にアメリカ占領軍の黒人兵士しか見たことがなかった遠藤にとって、黒人やアフリカ世界は、ターザン映画でしか接したことのないものであった。見送りに来た柴田鍊三郎は、黒人たちの存在を知って、食人幻想に類する言葉を遠藤らに投げた。しかし、最初は煙草の贈与から始まった黒人兵たちとの交流は、サイゴンまでの道中で深まり、三人の兵士とは固有名を名乗り会う関係にまで育ったのである。そしてリヨンの大学に通うようになると、キャンパスや寮で、遠藤は黒人学生と触れ合うことになる。

## 二 「他者」としての中国人

香港から乗り込んできた中国人集団の傍若無人ぶりに、遠藤は閉口している。けれども、パリで歯科医になるための勉強をするという若い女性と知り合いになり、筆談したりして、交流を絶やすことなくマルセイユまで過ごしている。遠藤は満州で少年時代を過ごしたので、中国人、朝鮮人、ロシア人を身近に感じて育った。「内地」に引き揚げてきてからも、彼が過ごしたのは港湾都市神戸であり、ここもまた、外国人の多い土地柄であった。マルセイユまでの寄港地では、遠藤はほぼすべての港で下船して、土地を見聞している。特にジブチで受けた強い印象については、続く第三章で触れる。現地人の路上販売者に酷い態度をとるフランス人の態度に憤りを感じたことも、彼は文章に残している。そもそもフランス階級社会の縮図であるフランス船のなかでの被差別体験が、遠藤には精神的な打撃を与えていた。近代西洋の植民地主義に反発する動機は充分にあったわけである。

辻邦生がカンボジア号でマルセイユに向かったのは、一九五七年のことである。サンフランシスコ講和条約が発効して、まがりなりにも日本は主権を回復した国家として再出発をしていた。

最初の寄港地である香港で、辻は下船した。英国の植民地都市香港——アカシアが咲き、ピアノの音が聞こえる通りを歩く英国人や、小綺麗な制服を来た中国人少女を、辻は見かけた。下町では不潔きわまりない通りの雑踏も見た。そして港湾の労働者たち。辻は大きな衝撃を受けていた。さまざまな東洋人たちがそこでは轟いていた。「こういう色の黄か黒か褐色かにくらべると、僕がいかに白人たちをよく理解しているかがわかる。彼らの人生観、宗教観、生活様式、歴史、文化、言語に、いかに僕らは通曉していることだろう。そうだ、ツーリスト・クラスの客間で、二人のアメリカ青年が話していたアメリカ英語が、何となつかしく響いたことだろう。僕は、無意識にすでに東洋であることを失っている」(5)。これが船旅を出て間もなくの辻の実感であった。

香港から乗船した大勢の中国人が、辻のいるキャンビンよりさらに下の大部屋に入った。彼らに辻もまた閉口している。

僕はこの船に乗りこんでいる中国の大衆をみて、その不潔さ、だらしなき、無自覚さ、非社会性に、日本の大衆とどこが違うかを考えてみた。やたらにツバやタンを吐くのは、日本の地位のある男でもやる悪弊である。(フランス兵は、いれずみをしたりしている連中が多いが、一種の公衆道徳のようなものは、まず完全である。)寝まき姿でぞろりと甲板を歩くのは、ドテラ着のまま、熱海の海岸通りを歩くのと、どこが変わるか。もの凄いゴミ、果物の皮や紙屑やたべちらかし——それは、花見時の行楽地のそれと、どう違おうか。日本のアンちゃんたちをここへつれてきて、彼らと並べてみて、果してどの点でどちらに分があるか？ 疑問である。やはり、ここでも大衆はニッチェの意味で賤民であり、救い難い存在であるのだろうか(6)。

ここでは、中国人を日本人と異なる他者として認識するのではなく、大衆というある種の階級的カテゴリーで辻が捉えていることがわかる。辻は甲板でヴァイオリンを弾いている中国人青年と会話を

交わっている。彼はウイーンに留学するのである。ドイツに神学の勉強に行くという、身だしなみの良い中国人青年についても同じ日の日記に記している。上流階級と労働者たちの著しい階級格差が、目に見える形でフランス船に出現していたのである。

フランス兵——遠藤の場合と異なり、フランス本国の白人兵である——から、辻は「For military use only」の中国語訳「単為軍人」を三枚書いて欲しいと依頼されている。無論、中国人たちを排除するためである。

そこで僕は、この差別をする標識を書かざるを得なかった。一人は「彼らは汚いから、別にするのだ」と説明する。「君は僕らのところにいろ」ともう一人がいう。僕も彼らの傍若無人ぶりには閉口していたので、これはむしろ有難かった。彼らは食事も別のものであり、いろいろのものを買いこんでいて、果物の皮をやたらに散らす。それにむせ返るようなニンニクの臭い。もちろん同じ東洋人が差別されるのは、よろしくないが、僕とパキスタンの老人がそうでない以上、これはフランス兵の優越感によるのではないようだ。ただ例のシクレ「フランス兵の名」だけが、港の労働者やシナ人や誰彼なく話しかけているので、ちょっと感心する。やはり尊敬すべき態度であるのかも知れない（7）。

この日記から一日後、辻の認識には変化が生じる。船はすでにインド洋上を航海していた。

香港からどつと中国人が乗りこんできて、いままで閉じてあった鉄の厚い床が、ワイヤーでまきあげられると、そこにぽっかり穴があいて、広い空間が現われた。僕らの部屋が船底と信じていた眼には、この深い穴蔵は、大きな驚きだった。この大部屋に中国人たちは入れられた。はじめは彼らのもつおそろべきニンニクとにらの悪臭が、この鉄の昇降口からむんと立ちのぼってきたものである。それにしても、折角の閑雅な旅を乱したこの喧しい労働者たちに、僕が憂鬱な拒否反応を覚えたのも当然だった。それは一団としてしか僕の眼には映らず、個々の顔、個々の人間は、集団の霞のなかに消えるほかなかった。しかし（シクレのおかげで）彼らの一人二人と知りだすと、人なつこい中国人のよさが、集団の色のトーンのなかから、吹きあがってくる。何よりも、時間が、日数が、集団の曖昧な混濁のなかから、一人一人の輪郭を描きだしてくる。ある老人は、眼尻に皺をよせ、昔の日本なら、朝鮮のおじさんとでも子供がいつてあめでも買いにゆく人の好い、気の弱そうな顔をしている。彼は日本語をかなりの程度話すのである。（8）

自分から積極的に黒人や中国人と交流を試みた遠藤と違い、「尊敬すべき態度」をとるフランス人青年シクレを通じて、中国人と個人的な接近し、そうすることで、次第に彼らに対する認識が変化してきているところは、注目すべきところであろう。それでも日本人である辻の微妙な立場は、彼を葛藤させないわけにはいかない。

昼食のとき、遅くいったので、フランス兵が四人ほど残っているだけだった。その中の顔みしりが、前に来て並べという。「シノワと一緒にされちまうぞ。」といって。僕は、この兵隊に感謝したが、やはり、すっきりした感じがしない。（9）

このできごとがあった前の晩に、次のような経験を辻はしていた。中国人が食堂でコーヒーを要望すると、フランス人の給仕が半分以下しか注がない。「僕はフランスの兵隊と一緒にだったから、いままでそんな目には会わなかったが、今朝は、いつもより四分の一ほど少い。少々むっと胸にきた。『：』シナの青年が、白人は俺たちを軽蔑しているというのが、よくわかる。たしかに彼らにも、そうされる欠点はあるが、それかといって、やはり、これは、眼の前にすれば、気持よくない」。フランス船のなかで、フランス兵とともにいることであからさまな差別を受けることがなかった辻が、有色

人差別を受けたのである。「すっきりした感じがしない」という言葉に、当時の辻の割り切れない思いがうかがえる。

### 三 寄港する英仏植民地へのまなざし

遠藤が、井上洋治ら日本人留学生と船上で親密に過ごしていたのに対して、辻は同じ船に乗っている日本人留学生とは距離を保っている。日記のなかにも、なるべく彼らと関係を持たずにおこうとする思いが書かれている。

ツーリスト・クラスにいる日本人留学生が、こちらまでやってくるので、それも気が重い。他の日本人と一緒にゆくくらいなら、何もデッキ・パッセージャーにならなかつたろう。(10)。

同じ船には、加賀乙彦や、平岡篤頼、岩崎力らフランス政府給費留学生たちが乗っていた。彼らは二等船客であり、四等船客である辻とは境遇も違っていた。ただし、辻が自分たちを避けたのは、パリ留学に賭けた意気込みの強さによるもので、単純な劣等コンプレックスではなかったようだ。平岡は記している(11)。これら日本人留学生たちの名前は『パリの手記』に一切出てこないが、加賀乙彦は自伝のなかで、辻との船中での親しいやりとりについて記している(12)。

船には、彼と同じフランス文学専攻の人がほかにもいましたが、誰も辻には近づかない。なにしろ、辻はフランス文学専攻なのに、船のなかではハイデガーの『存在と時間』とかトーマス・マンを原書で読んでいるのですから。

加賀と辻は話があって、「毎晩、舳先のほうに行つては、二人で横になつて南十字星を眺めながらいろいろな話をしました」と加賀は記している。だが、公刊された辻の手記には、加賀もハイデガーの読書も出てこないのが不思議である。

寄港地での対応についても、遠藤と辻は対照的である。辻は香港では下船しているが、マニラでは「上陸したくないので、一日寝るつもりだ」と記して下船していない。遠藤らが甲板で拳銃を携行した係官に査問されたときと状況は変わらず、対日感情が悪いために結局日本人は下船できなかったのではあるが、辻は最初から下船する気持ちがないのである。サイゴンでは下船して、一人でひたすら散策したりスケッチをしたりして過ごしている。サイゴンに関する辻の感想の特徴は、視覚的な景観に傾斜していて、現地の人々に無関心なことである。サイゴンの印象を語る前置きとして、植民地という言葉から浮かぶイメージについて、辻は次のように記している。

高い椰子の並木、森林の間をぬける白いアスファルト道路。土人の部落の集まりが遠く見える広い明るい広場に、南国の陽に光る白亜の建物。数少ない高級車が音もなく走りさる後から、はだしの現地人の子供が歓声をあげて追つてゆく。ヘルメットを白く光らせ、黒いサングラス、半そでの開襟シャツ。半ズボンに膝までのストッキング、短靴と白ずくめの西洋人。時おり、同じようなサングラスをかけた現地人の女が、通りを横切つてゆく。(13)

いかにもステロタイプな植民地表象ではあるが、喚起力に富んでいないわけではない。こうしたイメージを、辻はどこで手に入れたのであろうか。彼は海外に出た経験がそれまでないのだから、ヨーロッパ人によって書かれた小説や、製作された映画から獲得されたものであることは間違いない。そうした植民地イメージを下敷きにサイゴンをみると、「言葉の陰うつな、あるいはめくらむような太陽の光あるイメージとは異なる、それでいて、やはり植民地の匂の濃い、瀟洒な町」だと彼はいう。そこには「楽しめるだけの景観は用意」されている。辻の文学に広くうかがわれる「観光のまなざし」

(ジョン・アーリ)の片鱗がここにかがわれることとともに、あらかじめ植民地のイメージがあつて、それと現実のサイゴンを重ね合わせているという点に、われわれは注目したい。表象が現実に先行しているのである。それは、画集で親しんだ数々の泰西絵画を、現地の美術館で確認するような行為ではないだろうか。実際、辻は景観以外の何も見ていない。遠藤が近代ヨーロッパ植民地支配の現実を自分の目で目撃し、それを文章にして非難していることとの隔たりを感じざるを得ない。加賀は自伝で、サイゴンに滞在して驚いたのが「人種差別の激しさでした」と記している。ジブチでも住民たちの貧困と「ヨーロッパ人の優越感を肌で感じ」ている。

そのジブチでも、辻は体調が優れなかったこともあり、下船していない。「せつかくの寄港地を見ないのは残念ではあるが、仕方がない。ひとりでもみて意味があるのは、どうもこんなところではあるまいと弁解してみる」と日記に記している。この言葉には、彼の非西洋世界に対する関心のなさがはつきりとうかがわれる。ジブチで衝撃を受けた遠藤を思うとき、二人の違いが際立つ。

### おわりに——フランスの黒人植民地兵という「他者」

ジブチからフランスの黒人植民地兵が乗船した。日記には、黒人に対する辻の感想が記されているので、引用する。フローベールを思わせる精密な描写である。

ジブチで黒人労働者が食堂で食いのこしを手づかみで喰べているのをみると、急に吐き気がこみあげてきた。黒人というが、ほんとうに真黒である。インド人も黒いが、これはまだ褐色に近い。しかしこのアフリカ黒人というのは、全く気味のわるい存在である。ジブチの埠頭でフランス人が四人話し合っているそばに、黒人の子供が二人腰をおろしていた。出歯で、口をいつもあいているものだから、白い歯がにゅつと出ている。爪も白い。フランス人は、歯の白いのや爪の白いのがまるで目立たないし、分らないのに、黒人のそれは、全くクツキリとしている。船の連中をみているとみんな陽気で、子供じみている。粗暴な田舎の青年と同じで、人中にでも、物珍しさで嬉々としている。中には、眼鏡をかけ、金歯をした、黒いタコ入道みたいのもいる。髪の毛が、チリチリにちぢれていて、細く、金属みたいに光っている。まるい頭に、これが貼りついているのである。低い太い鼻、大きく前に出た口とあつい唇。唇の色も黒い。それに較べて歯は白く、舌は桜色をしている。しかし、これは、この暑い、灼熱する太陽の照りつける国に、有史以前から住んでいるために、焼けこげたことは、その白い足のうらをもみても確かだ。すべて、彼らは、白い足のうらをしている。船の黒人は肉付きがいいが、港の労働者は、細く瘠せ、背が高く、凹んだ眼が光っていた。

(14)

この文章に見られる周到な観察は、文化人類学者が、研究対象である現地人に向けた客観的なまなざしと類似したものを感じさせる。兵士たちは、白人であろうと黒人であろうとフランス人なのであるが、黒人は黒人であるがゆえに、区別される存在として表象されている。辻がフランス人というとき、それは白人のフランス人だけを指している。それだけ、当時の辻と黒人との心理的な距離が大きかったということであろう。彼らは「気味の悪い」存在に止まっていた。『パリの手記』全五巻を通して、固有名を持つ黒人はただの一人も登場しない。辻のフランスは白人のフランスであった。

本節を閉じるに当たり、記して起きたいことがある。辻がパリにやって来たのは一九五七年一〇月のことだった。翌年の元旦、彼は日本大使館に出かけた。パリ在住の日本人たちが集まっている。「赤い絨毯、金屏風、明るい部屋いっぱいのガラス窓」。そこで辻は驚くべき光景を目にした。日本大使が挨拶をした後、「天皇陛下万歳」と唱えたのである。その場の人々が唱和しなかったとは考えられない。この「滑稽な芝居」を部屋のいちばん後列で眺めた辻は、気分が悪くなり、何も食べられなくなった(15)。辻はその場にいた一〇人の知人たちの名前を記している(書籍ではイニシャルになっている)。一ヶ月の船旅でようやくフランスに辿り着いてみたら、そこには小さな日本があった。し



かもそれは、辻が徹底的に嫌悪した日本だったのである。

- (1) ともに、以下の書籍に所収。遠藤周作『ルーアンの丘』PHP研究所、一九九八年。
- (2) 遠藤周作『フランスの大学生』早川書房、一九五四年。
- (3) 辻邦生『パリの手記』全五巻、河出書房新社、一九七三―一九七四年。
- (4) 佐々木涇『辻邦生のパリ滞在』駿河台出版社、二〇〇六年。
- (5) 辻邦生『海そして変容 パリの手記1』河出書房新社、一九七三年、二二頁。
- (6) 同右、二七頁。
- (7) 同右、二〇頁。
- (8) 同右、五五―五六頁。
- (9) 同右、六〇頁。
- (10) 同右、一九頁。
- (11) 平岡篤頼「辻邦生における異国の意味――文学的選択としての留学」菅野昭正編『作家の世界 辻邦生』番町書房、一九七八年、五五―五九頁。
- (12) 加賀乙彦『加賀乙彦自伝』ホーム社、二〇一三年、一三二―一三五頁。
- (13) 『海そして変容 パリの手記1』四五頁。
- (14) 同右、八五―八六頁。
- (15) 同右、一五四―一五五頁。

## 第二章 文学観

### ——「真実」の開示空間としての小説

#### 第一節 遠藤周作の小説認識

##### はじめに

そもそも小説という言語芸術について、遠藤はどのような認識を持っていたのであろうか。従来の遠藤研究においても、この点はことさら主題化されることがなく、いわば議論する必要のないものとして扱われてきた。しかし、文学的な想像力は社会的な想像力と結びついているので、小説という、ある意味で「空想」の世界がわれわれの生活において果たす機能は、「現実」を創造する働きを持つと云って過言ではない。エドワード・サイードが『オリエンタリズム』で行った文学作品の表象分析は、そのような動機によるものであった。

遠藤周作は批評家として出発した人だが、次項で検討する辻邦生のように、小説という文学形式について反省的に考察することに関心を抱かなかつた。彼は一九世紀に完成した小説という形式それ自体よりも、カトリック作家として、小説の内容に強い関心を持っていたからである。

彼が小説という言語芸術を、どのように捉えていたのか。それを明らかにするために、短編小説「シラノ・ド・ベルジュラック」(『文學界』一九五七年三月)を取り上げることとしたい。理由は二つあって、一つには、この作品が、遠藤にしては珍しい、小説に関する小説だからである。もう一つの理由は、この作品が遠藤の初期代表作である『海と毒薬』執筆中に書かれた作品だからである。なお、この作品は、作品集『月光のドミナ』(東京創元社、一九五八年)の巻頭を飾る作品として収録され、新潮文庫版『月光のドミナ』(一九七二年)にも収録された。

##### 一 「人間の真実」を追求する小説

「シラノ・ド・ベルジュラック」は、語り手である「私」が、リヨンでの慎ましい留学時代での、あるできごとを物語るという形式である。

労働者相手の安食堂で、ギリシア語の書物を読みながら食事をとる、身なりの良い白髭の老人がいた。彼が五年前までリヨン大学の修辞学講師であり、容姿に恵まれない妻を若い役者に取られた人であることを知った「私」は、好奇心から老人に近づき、フランス語の個人教授をしてみらう約束を取り付ける。「ムツシユウ、文学とは結局、修辞学ですぞ」という老人に、「私」は苛立ちを覚える。なぜなら「文学とは私にとって修辞学や言葉の美だけのものではなかった。それはまず、人間の真実であり、生きた人間と、その心の闘いを描くもの筈だった」からである。「シラノ・ド・ベルジュラック」についても、老教授にとっては「朗読の美しさであり、言葉の抑揚であり、韻のふみ方であり、劇の構成法」であって、「シラノのロクサーヌにたいする情熱やその苦悩ではなかった」。老教授の不在中に偶然教授の書齋でシラノ自身の手記を発見した「私」は、そこに記されている内容が、

ロスタンの戯曲とは全く違うことに驚く。帰宅した教授にその手記について問うと、教授は「偽作だね。そんなものは」と切り捨てる。

「あれは文学ではないものだ」

「ですが、人間の真実でしょう」

「真実ではない。事実だ。事実は文学とは何の関係もない。本当のシラノがどのような男だろうと彼は君のテキストのシラノには及びはしない」「でも文学とは人間の真実を追究することでしょう。私の国では……」

「君の国ではそうかも知れぬ。しかしこの国ではそうではないのだ。そんなものは宗教がやってくる。ムッシュウ、文学とはまず言葉です」(1)

二人のやりとりには、「私」すなわち作者である遠藤の文学観がはっきりと示されている。文学が言語で構築された芸術である以上、修辞はもとよりその本質であることに疑いはない。けれども、そこに「人間の真実」がなかったとしたら、それは文学の名に値するだろうか。遠藤はそのように問うている。

この意識は辻邦生にもあった。辻は一九九四年に行われた鼎談の席上で「文学とは何よりもまず真実の追求であって、倫理的役割を重く負わされていた。『……』ある意味で、文学の美的な面を楽しむ余裕がなかったのです。『……』戦後の一時期までそうだったでしょう」と語っている(2)。文学に倫理性を求めるこのような認識は、今日ではかなり薄れてしまっているが、一九二〇年代に生まれた世代である遠藤や辻を考える上では重要な前提である。

日本にはヨーロッパのような意味での修辞学の伝統には乏しい。にもかかわらず、遠藤が小説「シラノ・ド・ベルジュラック」でわざわざフランス人教授と小説家志望の日本人留学生との対話という形で自身の文学観を呈示したのはなぜであろうか。

「人間の真実」を「そんなもの」と呼ぶ教授は、それは文学ではなく「宗教がやってくれる」ものであると述べる。この言葉は、日本におけるカトリック文学の創造を自らの文学的課題だと自認していた遠藤が否定しなければならぬ見解であった。どれほど美しい文章で書かれていたとしても、それだけでは文学ではないという立場に遠藤は立っていた。「人間の真実」を追求するためにこそ修辞学が存在するのであった。そして遠藤が「人間の真実の追究」というとき、それはキリスト教の「神」を想定した上でのものであったはずである。この短編発表の数ヶ月後、遠藤は太平洋戦争下に九州帝国大学で行われたアメリカ軍捕虜生体解剖事件に取材した、日本人の精神性に潜む暗部を鋭く抉る問題作『海と毒薬』を発表する。この作品は正に小説という文学形式を通して「人間の真実」を追求したものであった。

## 二 「自己表現」ではなく「世界表現」

ところで、芸術学的な視点から改めて考えると、文学が「人間の真実」を追求するものであるという遠藤の見解は、反近代主観主義美学、すなわち西洋古典主義美学の立場に彼が立っていたことを意味している。渡邊二郎は存在論美学の立場から言語芸術を含む芸術一般の本質について、次のように述べている(3)。「芸術作品は、単なる美的感傷の対象ではなく、生の真実、世界内存在の真相、その本質的諸形態と向き合う場所なのである」。「芸術作品の虚構性とは、この真実の開示性を「見えるようにさせる」ところの、様々な「発見的装置」のことにほかならない」。これは青山昌文が西洋古典主義美学即ちミーメーシス美学の立場から、芸術の本質を「本質的なものの強化的な再提示・再現・再生」であるとすると同一の見解である(4)。

なお、この作品が発表された一九五〇年代半ば、『小説新潮』『オール讀物』をはじめとする中間小説誌が大ブームとなり、娯楽色の濃い通俗小説が大量に市場に出回っていた状況を考えるべきであ

ろう。遠藤自身、こうした中間小説誌にも作品を書いていたので、文学にかける自らの倫理的な決意をここで改めて表明したと考えることもできる。もっとも、遠藤の中間小説には、「私が・棄てた・女」（一九六三年『主婦の友』連載）のように、単なる娯楽小説とは言い切れない「人間の真実」を追求した作品も少なくない。ちなみに辻邦生にはある種の潔癖さがあり、自らの創作の舞台には『新潮』『文學界』『すばる』などの純文学誌を選び、中間小説誌には作品を発表しなかった。

次にわれわれは、一九七三年に行われた遠藤周作と辻邦生との対談「歴史と現代文学 なぜ歴史小説を書くか」を見てみることにしよう（5）。遠藤が『死海のほとり』（一九七三年）を書き下ろし、辻は『背教者ユリアヌス』（一九七二年）を刊行した時期である。遠藤はさきに『沈黙』（一九六六年）を、また辻は『安土往還記』（一九六八年）『天草の雅歌』（一九七一年）『嵯峨野明月記』（一九七一年）という大航海時代の日本に取材した歴史小説を発表していた。

この対談のなかで辻は「ある一つの歴史的な事件が先にあつて、それを一つの絵として、書きたいから書くというよりは、むしろ内在的な一つのモラーリッシュな主題があつて、それがいろんな歴史的素材を呼び起してくるという形だと思ふんですね」と述べている。ここで辻が「モラーリッシュ」という言葉を用いていることは見落とすべきではない。辻もまた遠藤と同じく小説に「人間の真実」の追求するという倫理的姿勢を分かち持っていることがここでわかるからである。

辻はまた「遠藤さんの場合はすごく主題ははっきりしていますね。『……』それは一般の日本人……というへんだけれども、感覚的に、素朴実在的に生きている日本人には、そういうつかみ方は不得手なんです。だからどうしてもエピソードになり、風俗の切り抜き写真になる。けれど遠藤さんの場合、さつき言った、構造的に力動的な主題があるから、そういうものによつてすべての素材が集まってくる」と述べている。もちろんここで辻は、自分にはないカトリック作家遠藤のキリスト教信仰について語っているのである。同時にこれは自分には信仰が主題にはならないということを示している。一九七一年に行われた古屋健三との対談『天草の雅歌』を語る「において、辻は「ぼくは、キリスト教体験はないのです。結局、神の問題は何もわかっていないのですね。神の何たるかをわからないし、したがってキリスト教的側面のヨーロッパの何たるかをわかっていないと、はつきり告白したほうがいいかもしれませぬ『……』そのくせ観念的存在をヨーロッパの本質存在というような立場、考え方には共感を持つのです」と率直に述べている（6）。辻はキリスト教について、宗教的な視点からではなく、もっぱら政治的な視点から捉えている。『天草の雅歌』もそうであるし、『背教者ユリアヌス』も『春の戴冠』（一九七七年）もそうである。

辻は「歴史は永遠に繰り返される円形劇場のようなものであつて、次から次へと演技者がやつてきて演技をし、去つて行くけれども、そこに現れた演技は、様々な形でも、同じような原型の行為を繰り返している。現代も、そういう意味での原型の意識まで達して、原型を掘り起こしてこなければやはり書けないんじゃないかという考えになつていふんです」と述べている。このような考えがあるがゆえに、歴史の転換期の人間を描くために古代ローマ皇帝を現代小説として描くことができるわけである。

遠藤はこの言葉を受け、「いままでの芸術つていうのは、何らかの形で、時代時代の超絶に結びついているんだ」というアンドレ・マルローの考え方を紹介した上で、以下のように述べる。

### 遠藤

「……」ぼくらいま現代の小説家として、じゃあ現代の志向する超絶的なものは何か。かつては、時代の共同体の超越的なものがありました。いまみたいに共同体がなくなつて、各芸術家、各小説家がバラバラに書いているときに、その中から時代の普遍的なものを見つけられるのか。「……」いまわれわれが志向しているのはいったい何だろう。それを書きながらいつも感じちゃう。

辻さんは、原型まで掘り下げてとおっしゃったけれども、原型というのは超絶的なものと結びついているはつきりした姿でしょう。しかし現代はその超絶的なものとの結びつき方が曖昧になっている。

「神が死んだ時代」というニーチェウエーバーの精神史的認識を遠藤は持っており、カトリック作家でありながら、敢えて現代人にとつて「超絶的なもの」は何だろうと辻に問いかけている。

ここで辻は遠藤の間に直接回答していかないのだが、辻にとつての「超絶的なもの」は、明確である。彼は一九七一年に行われた篠田一士との対談「ヨーロッパ体験と小説」(7)において、この世に秩序を与えていた「神」の代わりに「美」を置くのである。

**辻** 本来的なもの、本来的に宗教的なものを失った社会、超絶的な根拠を失った社会というものは、その真実の基準の取り方が当然きわめてこの世的にならざるをえない。すべての真実は、事実的なものに全部還元されてしまう。

**篠田** 宗教的真実、超絶的真実は、事実の前では影がうすれるというわけだな。

この議論を踏まえて辻は、「ぼくは一種の宗教性を考える。つまり宗教的感覚を、無限なものに対する感覚というふうに広くとれば、それは芸術の中にもう一度よびおこされる美的な根拠として息を吹きかえしうるのではないかと、そう考える。これはぼくがギリシャで大体感じたことで、美的なものがわれわれの生全体を支えているという確信、それをぼくはつかむことができたんです。

遠藤もまた辻との対談の席上で「事実しか肯定しないという現代人の病的な考え」に疑問を呈している。事実と真実との関係という、小説「シラノ・ド・ベルジュラック」で語られた命題がここで問われている。「嘘がほしいというのが、人間の条件であるということが、それで除外されちゃうでしょう。こういうものがほしいというのは、かりに架空でも、それは真実だわな。宗教というのはそれで成立する。だから真実とか事実の混同が」現代の小説家の問題の根底にある。以下の二人の対話は重要である。

**遠藤** だから、現代の小説家の悲劇は、人間の条件の中に、人間の魂の欲求というものと真実との関係を否定してしまった部分があるんじゃないかなという気がします。

**辻** そうですね。たしかにそういう真理感覚を、近代哲学以後、経験というものだけで切ってしまうって、つまり事実というものだけで切ってしまうって、そういう切り下げ方が、真実の真実らしさを殺してしまった「……」。

**遠藤** そうですね。例えば簡単に言えば、クリスマスにベツレヘムでイエスが産まれて、これは事実でも何でもないけれども、長い世紀にわたって人間がこの事実でないもので、生きてきたんでしょう。魂がそれをほしかったんだ。

**辻** そうです。  
**遠藤** そのほしかったものがやっぱり小説だと思うんだ。

## おわりに

小説は虚構、すなわち嘘である。しかしそれは渡邊二郎が指摘するように、〈真実の開示性を「見えるようにさせる」ところの、様々な「発見的装置」〉なのである。

以上見てきたように、遠藤の小説観は、自然科学的な事実を偏重する自然主義文学のような「自己表現」ではなく、「虚構(嘘)」という装置を用いて「人間の真実」を描き出す「世界表現」であった。それはまた、「神が死んだ」二〇世紀において、いかにして、なお、超絶的なものとの関係においてそれを描き出すかという問いを、キリスト教の「神」の下に探求するものなのであった。ただしその「神」は、必ずしもヴァチカンの「神」ではなかった。

- (2) 辻邦生・堤清二・安江良介『鼎談 戦後50年を問う』信濃毎日新聞社、一九九四年、七頁。
- (3) 渡邊二郎『芸術の哲学』ちくま学芸文庫、一九九八年、三八頁。
- (4) 青山昌文『美学・芸術学研究』放送大学教育振興会、二〇一三年、六四頁。
- (5) 辻邦生『灰色の石に坐りて 辻邦生対談集』中央公論社、一九七四年、一五六―一九二頁。
- (6) 同右、八一―八二頁。
- (7) 同右、四三―四五頁。

## 第二節 辻邦生の小説理論

### はじめに

遠藤の小説理解をさらに鮮明にするために、ここで辻邦生の小説理解については述べておくことにしたい。辻は小説家として出発するに当たり、小説を書くとはいかなる営為なのかを徹底的に考え抜いた。それは、第二次世界大戦を経て、敗戦国日本の再建を担っていかねばならなかった世代として、医療や土木といった物理的現実世界に直接的に貢献する仕事の重要性和比較したとき、虚構世界の構築という仕事に携わることの意味を自分なりに納得することができなければ一步を踏み出すことができなかいと考えたからである。実際問題として、辻は小説を書くことができなかった。けれども、旧制高等学校時代から、日々常に書きながら考えることを己に課していた辻は、言語を用いて理論的な探究を行うことは可能だった。アカデミックな文学研究者としてではなく、小説の実作者として、創作する代わりに理論的考察を行ったわけである。絵画や彫刻ではなく、言語を用いる芸術分野に生きようとしたことが幸いしたといつてよい。

フランス留学中に書きためた小説論ノートを帰国後に整理し、加筆して刊行したのが長編評論『小説への序章』（河出書房新社、一九六八年）である。辻はその後旺盛な創作活動に入るが、その傍ら〇〇二年、岩波書店）がそれである。ここでは小説家としての出発時に焦点を当てるために、『小説への序章』に拠りながら、辻の文学観を概観することとしよう。辻は、小説という形式を所与のものとして受け取ることとはできず、他人の理論をそのまま鵜呑みにすることもできなかった。『小説への序章』の晦渋さは、そのまま当時の辻の思索の苦闘を物語っている。直線的に論理は展開せず、螺旋状に上昇していくようなところがある。ここでは、彼の小説理論の骨格を圧縮して示すこととする。辻が思索の支えとした学者は、ヘーゲル（美学）、エンゲルス、ハイデガー（「乏しき時代の詩人」「哲学とは何か」「ヘルダーリンの詩の解明」「アナクシマレドロスの言葉」「世界像の時代」「ヒューマニズムについて」）、ルカーチ（『歴史小説論』）、サルトル（『想像力の問題』『情緒論素描』）などが、とりわけハイデガーの影響は色濃い。辻がフランス留学へ向かう船内でハイデガーを読んでいたことは、加賀乙彦が自伝のなかで記しているところである。なお、『小説への序章』で語られた思索を、より洗練された文章で改めて語り直したものととして論文「言語と小説の宿命」（一九七〇年）があることを付記しておく。

### 一 二〇世紀小説の冒険

二〇世紀に入り、小説という文学形式が危機に陥った事実から辻は出発する。一九世紀的なリアリズム小説「ダブリン市民」から出発したが、実験的小説「ユリシイズ」を経て言語実験的な作品「フイネガンズ・ウエイク」に至ったジェームズ・ジョイスの名を辻は挙げているが、ジョイスの身に起こった小説という形式それ自体への疑問視は、同時代の多くの作家が共有する危機意識であった。

なぜ小説を書くのかという問いを、辻は「物語るという行為」（ナラシオン）とは何かという問いに置き換える。なぜならば、物語るという行為こそが、近代小説の中心的要素だったからである。トルストイの「アンナ・カレーニナ」は一人の女性の悲劇である。語り手が物語ることによって、無秩

序な現実世界は秩序あるものとして再構成される。中心となるヒロインが存在することによって、世界は一つの全体を形成する。すなわち、その場にいなかった不在者たる読者を現存者に変えることが、ナラシオンの目的なのである。

ところで、そもそも「未開社会」にも物語は存在した。そこには抽象という操作は行われず、すべて具体的に語られた。抽象化する精神が存在しなかつたからである。彼らは集団表象を共有しており、自明のものとして、神話そのものを生きていた。神話を信じていたのではない。しかし時代が下って近代社会になると、古代の人々が共有していた集団表象は薄れていく。これは近代市民の意識の「下部構造」が、集団表象から解放されたことができる。その淵源には、いうまでもなく、ギリシア古代の抽象する精神があった。けれどもここには陥穽もあって、理性による認識は対象の客観化が伴うため、あらゆる存在から神話的な意味を奪い去り、「無色」化してしまう。神聖血縁的であった国土は、ただの空間となる。人々はそうした疎外に耐えられない。そのため古代人のような、何かしら自分を「同体化」するものを市民的現実のなかに見出そうとする。そのときに、ロマネスクが誕生したと辻は考える。そこには冒険と恋愛がある。トリスタンとイゾルデの恋愛物語は、集団からの個人の解放があつて初めて成立した。感情で外界の事物と結びつくことによって、世界は「無色」な存在であることをやめる。感情で世界と結びつくための感覚性の回復こそが、重要となる。ここにおいて、事実を踏まえたナラシオンから架空のナラシオンへの変化が近代小説を生み出したとすると、バルザック以後の小説が、事実性の再現を重視しているように見える点と、バルザック以前にも、虚構の物語があつたという点において、矛盾が生じるように思われる。けれどもこれは「神が死んだ」(ニイチェ)現代と、超越的な存在によって人間が世界と緊密な意味性で結びついていて、つまり「神々の空間」に人間が生きていた近代以前の相違を考慮に入れれば氷解する。コンテクストが異なるのである。

ブルーストは、このような疎外の時代に生きていたことを自覚していた作家である。習慣化された日常、つまり「無色」な世界に、われわれは投げ出されている。けれども、そうした日常の意識が、何かのきっかけで突然中断されたとき、人間は日常的な「時間の外にでる」ことがある。換言すると、「永遠のなかに立つ」ことがある。それをブルーストは発見した。ところで、ナラシオンは不在者を現存者に変える行為であり、「現在化」の行為であつた。ここでは日常的な時間を超越した「永遠の現在」として過去を物語ることができる。物語ること、日常的な時間に永遠を現在化すること。これこそが小説の目的である。現実世界とは切り離された虚構世界、ロマネスクな世界を生きること、読者は世界のすべてを象徴的に生きることができるのである。ここで辻は自らの文学観の根本をすでに提示しているのだが、改めてロマネスクの時代に遡って論述を再開する。

「神が死んだ」近代に入り、自然を含む世界は人間と緊密な結びつきを喪失し、「無色」な対象と化したのだが、そのような外界の現実世界が、同時に「私の世界」であるという転回、「世界」を存らしめるのは「私」という主観である、という転回を、われわれはルソーに見て取ることができる。ここで辻は述べる。このように転回した世界は、意味性を回復し、「無色」であることをやめる。ここで注意すべきは、この「私」が日常的な「小さな私」ではなく、アノニムな「普遍的な主観」「世界の内部照明」「大いなる自己」とでもいふべきものであることだ。世界を在らしめる「私」は、単純な自意識のことではないのである。

無意味に拡がる「物」の世界は、この新しい開花によって、意味性を回復する。この意味性の中の心的一は、超越的な神々にはなく、自我にある。(1)

告白主体、物語る主体は、「世界を私の世界として根拠づける主観」であり、世界を概念的に認識する理性的な普遍的主体ではない。理性的認識は、中立的な照明領域であるが、私のヴィジョンとして情動性を帯びながら照明された領域は、そうではない。そしてその照明の明るさは、詳細に物語ること、言語化することによってのみ担保される。ここにナラシオンの転回と、近代小説とナラシオン



が分かちがたいことの根拠がある。

現象のなかに浮ぶ「永遠の映像」、本質の「島」、「時を越えた実在」は、対立的な現象が放棄されたところ、私が転回して「私のヴィジョン」に達したところに生れる。(2)

辻はバルザックの作品群が、文学史上の一般的な理解と違って、現実世界の客観的な写真と言いつて、作家自身の言葉が証言するように、現実への、ある種の「陶酔」的同一化によってなされたものだった。バルザックもまた「大いなる自己」として物語ったのであり、小説世界に描き出されるすべての事物は、内面に溢れる「観念」の具体化だった。彼が作品中でリアルに描いたパリの「現実」について、辻は次のように言う。

あくまで可能的真理であって、帰納された客観的真理ではないのだ。そして可能的真理と客観的真理の関係は、アリストテレスが詩と歴史について言ったのと同様の関係であり、それゆえに可能的真理は時として客観的真理よりも「いっそう哲学的で荘重」でありうるのだ。(3)

ここで註釈を加えておくと、アリストテレスは「ポイエーシスは起こりうることを語る」と述べ、悲劇と歴史的対象の記述たる歴史とを区別したのである(4)。

バルザックと同様のことは、シェイクスピアの人物創造にも当てはまる。邪悪、激情、剛直といった諸観念が、それぞれの登場人物として造型されているのだ。かれらは現実存在した人物の再現ではない。

## 二 フローベールとディケンズ

フローベールは違った。彼の「厳密な現実観察、忠実な再現を軸とした、構成の堅牢な言語構造体」としての小説は、一切のロマン性を徹底的に排除したリアリズムであった。彼の「写真主義」は、「無色」な現実を客観的に対象化して描き出したものであり、そこに「大いなる自己」は存在しないのである。この方向性は、美に科学技術を応用するがごとき知性美の追求であり、マラルメへと続く、言語芸術の自己解体への道であった。辻は言語それ自体を意識し始めることに警戒的であり、言語はあくまで透明な存在としなければならぬと信じていた。

このような客観的認識というものが芸術家にもたらす袋小路を克服するためにはどうしたらよいか。ここで辻は改めてブルーストを引き合いにだす。

小説が根底に物語形式をもち、物語形式は全体の個々の細部を、すべて「価値ある細部」として再現するものである以上、内在的リアリテの細部を「明るみ」に保つには、物語形式以外にはなく、したがってそこには、必然的に物語的主体が構成されたことを示すのである。

ここでは小説は「明るさ」への定着と考えられ、あらゆる伝達的な意識から脱却している。小説はある全的な内容をいれる容器と感じられているのである。(5)

ところで、辻は小説空間に出現する「事象の言語映像化」は、「いわゆる描写」とは違うと主張する。なぜならば、描写はすでにある現実を対象化して再現したものであるのに対して、「事象の言語映像化」は、作者の直観的全体の自己実現であり、所与の現実とは無関係である。現実存在があつてそれが言葉によって語られるのではなく、語られることによって虚構世界の現実が初めて存在するものだからである。それゆえ「小説の散文は、伝達的な対象をもたない散文、したがって一定の直観内容を析出している散文ということが出来る」(6)。

辻はこのような小説として、フローベールの立場からは耐えがたい誇張に満ちたデイケンズの諸作品について高い評価を与える。「デイケンズにとって世界は真昼間の平行光線に照らされた、遠近法的な視野のもとに展開する、自明の現実とはならなかった」(一五七頁)。むしろデイケンズの外界認識は「アニミズム的な感受性」に満ちており、いわば「子供」のそれであると辻はいう。彼は認識主体というよりは、情動主体であり、彼の対象把握は、いわば情動的な把握であった。そこでは主体と外界との関係を結びつけるところの意味が回復されている。デイケンズの小説を読む体験について、辻は次のようにいう。

われわれが触れているのは、その表現を通じて現前する現実(あるいは疑々現実)ではなくて、現実を直覚的につかんだ主体が提示する「観念」それ自体である。(7)

近代の人間が「神が死んだ」世界に在ること、「無色」な世界に投げ出されている時代の芸術家の苦悩を描き出した作品が、トーマス・マンの『ファウスト博士』である。ここでは「神的秩序から離脱した人間が、人間中心的な認識と実践によって客観世界を開拓していった揚句に到達した極限の問題——知性の孤立化、また自律的な近代人の自己喪失の問題」(8)が扱われている。この作品には、「絶望の徹底」「救いの拒否」があるが、絶望それ自体を積極的に肯定すること、死すべき存在としてその運命を引き受けることから、人は絶望的な己の生に祝祭性を回復することが可能なのではないだろうか。辻は問いかける。物語の時制はトーマス・マンがいうように、常に過去形である。すべては過去形で語られる。未来ですら過去形で語られる。そこには時間の反転がある。終末すら過去形に包み込む物語的主体がそこには出現している。「われわれは小説の世界を生きることによってわれわれをとりまく現実の生活をもう一度象徴的に生きるのである。」「われわれは小説という行為によって無意味な偶然的な空間を真に人間的な空間へと「反転」させ、神秘的な非合理性ではなく、人間としての生命を回復する可能性を創造するのだ」(9)。これが、現代の精神的状況のなかで小説を書くことの根拠である。

辻はまた、次のような言葉も記している。

スタンダールはジュリアン・ソレルをヴェリエールとブザンソンとパリに生活させる。しかしそれは「十九世紀年代記」として作者の心に向つたのだ。ジュリアンは一人の偶然に選ばれた青年ではなく、無数の青年がジュリアンのなかを通過する。パリの政治劇は新聞に書きたてられる政治的事実ではなく、あらゆる政治的事実が『赤と黒』の中を通過しているというところに意味がある。

(10)

ここで辻は、小説に描かれた社会状況も、主人公も、ともに象徴的な存在であることを強調している。それは歴史的な現実世界の再現ではないというのである。

## おわりに

以上が辻邦生の小説観である。なるべく辻自身の用語を使って要約的に紹介してきたが、ここで美学上の概念である「ミメーシス」(模倣)と「ポイエーシス」(制作)を用いて、若干の批評を加えておきたい。辻はルソーに典型的に現れたところの、視線のロマン主義的転回について述べるとともに、現実の再現たる描写と観念の表現としての言語的映像について述べているが、同じ問題について、フランス文学者塚本昌則は次のように述べている。

文学のイメージ性は、すでに存在するものを言葉によってどれほど正確に写しているのかという問題とは無関係である。言葉が模倣するかに見える現実ではなく、その現実にもけられたまなざし

が、どのように作られているのかが問題なのだ。少しかたい言葉を使えば、現実の「模倣」ではなく、言葉による世界の「制作」が、イメージ性の根幹にある。(11)

塚本は近代小説は「現実の模倣から、個別の人間を通して見た世界の制作へと、作品成立の原理が転換されたのだ」とも述べている(12)。

辻も塚本も、間違ったことを述べているわけではない。しかしながら、ミメシス(模倣)からポイエシス(制作)へという論述は、誤解を招く虞れがある言い方であることも指摘しておかねばならない。なぜなら、藤田一美が指摘するように、「無」からポイエシス(制作)世界創造)する「神」と違い、人間が行うポイエシス(制作)芸術創作)は、いつでも「有」からのミメシス(模倣)であることを運命づけられているからである(13)。ミメシスなくしてポイエシスはあり得ない。したがって、ミメシスとポイエシスを、あたかも対立する概念であるかのごとく用いるのは、この場の議論の水準では正しいことであつても、より根本的な次元においては通用しないと考えられるのである。実際問題として、小説読者は、辻邦生の小説を読む際に、その克明な場面描写を、歴史的現実の言葉によるミメシスとして読まないことは困難である。なぜならば、小説における言語表象は、それがいかに想像によるものであるうとも、常に現実世界に存在する形象のミメシスだからである。辻の小説に登場するフランス貴族も、シリアの現地人も、ジェノヴァの毛織物業者も、すべて想像されたものであると同時に、現実存在したそれぞれのミメシスだからである。辻の小説を読んでみると、辻が否定するフローベールを髣髴とさせるような、見事なまでの、遠近法に忠実な客観描写をいくらでも見ることが出来る。彼が追求した小説の理論的地平と、彼が実際に実現した小説世界とは、ぴつたりと重なり合うものではないのである。

小説創作におけるミメシス性にわれわれがこだわるのは、小説世界に描き込まれた他者表象が担う「意味」を問題にしたいからにはかならない。われわれは誰でも、現実世界をあるがままに見るのではなく、小説や映画、教科書、新聞などで得た「表象」を通して見るのである。辻がポイエシスした虚構世界と、いわゆる現実世界とは、読者の意識のなかで、浸透し合う。もつとも、小説がミメシスするのは、物理的現象世界の表象にとどまらない。ギリシア悲劇がそうであつたように、人間世界に「起こりうること」のミメシスでもあるのだ。

藤田は芸術作品で呈示されることが真なることとして享受者に体験される場合、それが「その限りで現実である」ことを指摘し、「ポイエシスの地平とヒストリアーの地平が融合する」可能性に言及している(14)。実は辻はこのことに気がついており、論文「想像的世界の地平」において、物質に基礎を置く現実の世界と虚構の世界という別個の世界が、前者は真実だが後者は嘘であると捉えられている限り、虚構世界に意味はないが、「両者の質的差異にもかかわらず、それぞれが人間的現実にあつて真実であると考えられる」ときに、虚構世界は現実世界と等しい「真実さ」を主張できると述べている。

フィクションの内包する真実性は、それが描く内容が「事実」性に裏づけられているか、どうかにあるのではなく、フィクションという精神的な構築そのものに存在する。したがってそれがいかに荒唐無稽な主題を扱おうと、「事実」的世界に無関係な事柄を描こうと、そのフィクションがならぬかの働きを精神に及ぼすならば、それは人間的現実の視野のなかでは、現実を生起したことと考へうるのである。(15)

このようにして、虚構世界たる小説を書くことが、歴史的な現実世界と同等の意味を人間精神に働きかける営為にはかならず、人生を賭けるに値する事業であるとの確信を、辻は持つことができたのである。これが小説家として出発するときの辻の認識であつた。

さて、あらゆる人間的な営みは、夢見られたものと現実化されたものとの間に大きな落差を生じるものである。それは芸術製作においても例外ではないのであつて、辻が理念として抱いた小説がその

まま彼の作品を説明するものでない。岡崎昌宏が博士論文で指摘したとおり、従来、辻文学について語らえてきた批評は、辻自身の自作解説をそのまま支えにする傾向が強かった。自作解説は、結局のところ、自己正当化に逢着するしかなかるう。そもそも、芸術製作は、意識と無意識の共同作業であり、構想や計画はエンジニアのそれではない。書き終えて攔筆したときに、はじめて作者は自分が書くこうと思ったことについて知るのである。それゆえ、作者の自作解説よりも、作品そのものに即して論じるよう努めなければならぬ。辻自身の小説理論について見定める作業もまた、これまで充分になされていたとは到底言いがたい。二重の意味で、これまでの辻研究は不充分だったのである。

(1) 辻邦生『小説への序章』『辻邦生作品 全六巻』6、河出書房新社、一九七三年、六九頁。

(2) 同右、七九頁。

(3) 同右、九五頁。

(4) 藤田一美「ミーマーシスとポイエーシス」『新岩波講座哲学13 超越と創造』岩波書店、一九八六年、一四九—一五〇頁。

(5) 辻前掲書。一三一頁。

(6) 同右、一四〇頁。

(7) 同右、一六四頁。

(8) 同右、一八六頁。

(9) 同右、一九六頁。

(10) 同右、一九五頁。

(11) 塚本昌則『フランス文学講義——言葉とイメージをめぐる12章』中央公論社、二〇一二年、iv頁。

(12) 同右、四頁。

(13) 藤田前掲論文参照。

(14) 同右、一五一頁。

(15) 辻邦生「想像的世界の地平」『辻邦生作品 全六巻』6 二三八頁。

## 第三章 アフリカ——黒人の表象

### 第一節 「アフリカの體臭」「アデンまで」

#### ——フランス植民地支配への反撥

#### はじめに

遠藤が生産した多種多様なテクストを詳細に検討すると、そこには非西洋世界、すなわち、アフリカ、中東、アジアの諸国や人々が、さまざまに描き込まれていることがわかる。そこに注目して遠藤文学を説明しようとする試みは、これまで本格的にはなされておらず、研究上のいわば盲点となっている。それは緒論で述べたように、キリスト教を中心とするヨーロッパと日本という比較文化論的コンテキストの中で研究されてきたからにはほかならない。

本章では、遠藤文学に描かれた黒人表象について考察する。はじめに、二〇一四年に遠藤の作品と認定された短篇「アフリカの體臭」（伊達龍一郎名義、一九五四年）を、遠藤の大学卒業論文「ランボオの沈黙について」及び、従来小説第一作と考えられてきた「アデンまで」（一九五四年）と併せて論じること、初期遠藤周作にとってアフリカがどのような役割を果たしたのかを明らかにする。次にポーランという黒人を登場させた短篇群を「ポーラン・シリーズ」と名付けてその黒人像の変容を確認する。最後に黒人を主人公にした唯一の長編小節『黒ん坊』（一九七一年）を取り上げて考察する。

#### 一 アルチュール・ランボーを契機とするアフリカへの関心

遠藤周作の卒業論文は「ネオ・トミズムの詩論」である。この論文の一部は、大学を卒業した一九四九年の一二月に「ランボオの沈黙をめぐって——ネオ・トミスムの詩論」と題して『三田文学』に発表され、フランス留学後の一九五四年、評論集『カトリック作家の問題』に収録された。四百字詰原稿用紙に換算して約二七枚の小論考である。なぜ卒業論文の一部だと解るのかといえは、『三田文学』掲載本文中の註に、別稿として「ネオ・トミズムの詩論Ⅲ、ポエジイとミステイク」の存在が示されているためである。慶應義塾大学予科時代はドイツ語専修だった遠藤が本科でフランス文学に進んだのは、佐藤朔『フランス文学素描』（一九四〇年）で紹介されていたフランスカトリック文学に関心を抱いたからであった。慶應義塾大学入学以前に遠藤は上智大学予科で短い学生生活を送っているが、太平洋戦争下にあつて、文学とキリスト教は彼の胸中を占める中心主題であった。なかでも新トマス主義に彼が深く親しんだのは、岩下壮一神父が創設したカトリック寮で哲学者吉満義彦から薫香を受けたことの影響が大きかったものと思われる。

この論考は、哲学者ジャック・マリタンとその妻ライサ・マリタンを中心とする新トマス主義者たちの詩論を整理し、アルチュール・ランボーの『沈黙』の理由について、理論的な説明を試みよ

うとしたものである。ランボーの沈黙を自分なりに納得することは、これから文学の世界に生きていこうとしていた若き遠藤にとって、避けて通れない問題であったと考えられる。

それでは、以下に、遠藤論文の概略を示すこととしよう。

新トマス主義の詩論において、詩人の認識は聖者の認識と類似したものとして捉えられる。けれどもそこには相違がある。前者は必ず作品という表現に向かうのに対して、後者は深い満足を覚えて沈黙のなかに安らうからである。詩人はその誠実の証として作品の絶対的完成を目指す、それは人間の分際を超えて天使になろうとする傲慢に陥る。かといって、人間的条件下で作品を創作することは、不完全で制約に満ちた現象世界にとどまることとなる。ここに詩人のジレンマが存在する。ランボーが直面した問題もこれである。詩の純粋性を目指したランボーは、表現への着地を超越した詩的認識とでもいふべきものへと突き進んだ。その結果、「彼は詩の根本本質である「創る」事 *alextra* を喪い詩作の放棄と異国への逃亡と言う余りに悲劇的な結末をたどらねばならなかった」と遠藤は結論する。

この論考を、遠藤文学の研究者たちはこれまで重視してこなかった。その理由の一つは、小説家となった遠藤が、ランボーについてその後まったく語らなかつたからであろう。しかし、この論文は少なくとも二つの点で重要である。一つは、新トマス主義を通じて、遠藤が、トマス・カトリック的世界観を学んだことだ。とりわけ、全能の神、理性を持ち肉体を持たない天使、理性と肉体を持つ人間、そして理性なく肉体だけを持つ動物、という階層構造を理解したことは看過しえない。遠藤はフランス留学でこのような人間理解に強い違和感を抱くようになる。同時に、天使でも動物でもない「人間」の中にも細かな序列があることに気がつくからである(1)。もう一つは、ランボー研究を通して、フランスの植民地でもあったアフリカ世界に対する関心を深めたことである。フランスは、英国に次ぐ第二の植民地帝国であり、本国のほかに広大な海外領土を有していた。アフリカもアジアも、その一部はフランスだったのである。

フランスに留学するために遠藤が横浜港を出帆したのは一九五〇年六月四日のことである。マルセイユまで、フランス郵船の旅客船マルセイユーズ号の四等船客として三五日間の旅である。香港、シンガポール、マニラ、サイゴン、コロンボ、ジブチなどを経由していく。第一次インドシナ戦争中のヴェトナムや、反日感情の激しいマニラなど、東南アジア諸地域の現況を目と耳で知ったことは、前後して航空機でパリに行った加藤周一や、同じ旅客船でも二等船客であった多くのフランス政府給費留学生たちと違って、作家遠藤周作を形成する上で重要な体験であった(2)。

旅日記を読むと、アフリカと初めて出会うことになったジブチの土地が、彼に強い印象を与えていることがわかる。六月二八日の日記を抄録してみよう。

朝、ジブチ近くなる。

窓から初めてアフリカをみる。一草一樹だにない黄褐色の絶壁が百米前につづく。それから砂漠。感無量である。空がすばらしく青い。

七時、ジブチ着。

太陽が白く、その周りを赤黒いうん気が漂っている。重苦しい暑さだ。

原住民の漕ぐはしけに乗って上陸。「……」誰もいない道、馬小屋のような家、光も建物の色も、海も、すべて強烈だ。まひるのさがり、死の街のようだ。

このようにジブチの印象を印した遠藤の脳裏に、突如ランボーが出現する。

ランボオを近くよもう。

コロンボの自動車の中で、ぼくは汎神の世界がこの腐土からどうして生まれるのかを考えた。しかし、どうもハッキリしなかつた。だが、ジブチの中には虚無の色彩、光が逆にねばりついて

いるのだ。絶望の絵画の色彩。ランボオはそこに相応しかったのである。彼がここに来ねばならなかった気持、又、ここに来た時の気持を、僕は感じる事が出来る。

ランボオの『沈黙』について、卒業論文において理論的に考察した遠藤は、ここで感覚的にそれを理解している。少なくとも、そのように考えている。ジブチの印象はよほど強かったものと見えて、すでにリヨンで学生生活を送っていた一九五一年一月九日の日記にも、次のような記述が見られる。

お前はアフリカに行く事は出来ないものであるか。アフリカに住みたいという願望、初めてアフリカを見た日の朝のむき出した山、木一つなく、白陽がキラキラと光っていた。街は死んだようであった。その時の身の疼き……。

巴里に住む事、次にアフリカに渡る事。

明らかに遠藤はアフリカに魅せられている。そしてアフリカは、まずランボオの幻影と結びついていたのである。

アルチュール・ランボオその人は、一〇代の頃にはパリやロンドン、ブリュッセルなど、ヨーロッパの都市を遍歴していたが、二〇歳くらいで詩を書かなくなり、やがてアフリカに赴く。アデン（英国領）、ハラル（エチオピア）、タジュラー（ジブチ）、カイロ……。彼はヨーロッパから行った他の商人たちと違って、しばしばフランスに帰るといことがなかった。ようやく帰ったのは、死ぬ年のことである。ランボオにとつて、詩は、ヨーロッパの「キリスト教」文明」とともに捨て去られるべきものであったように見える。彼はアフリカの「野蛮」に向かったのだ。死の床で彼は司祭による告解を受け入れたが、ムスリムの死の祈りも唱えたといわれている。

ランボオのアフリカ時代については、近年、「アフリカ書簡」の解説が進み、彼の行動の詳細の解明や、詩と書簡を「書かれたもの」として連続的に捉える研究も日本語で行われている（3）。遠藤がランボオに親しんだ時期には、アフリカ書簡は知られてはいたものの、テクストとして読める分量は限られていたし、詩を棄てて砂漠に赴いた早熟な天才詩人というロマン派的イメージが強かったことには注意を払う必要があるだろう。先に引いた卒業論文に見られる「詩作の放棄と異国への逃亡と言う余りに悲劇的な結末」といった文章に、そうしたロマン派的イメージは端的にうかがわれる。

ランボオが商人としての拠点とした街に、アラビア半島南端のアデンがある。ジブチの対岸に当たる港湾都市である。長らく遠藤の小説第一作と見なされてきた「アデンまで」（一九五四年）の主人公は、マルセイユから船に乗った日本人留学生である。彼は白人のフランス女性と別れて、四等船客として病気の黒人女性とともに乗船している。黒人女性は旅の途中で亡くなり、水葬に付される。この小説では、アデンはヨーロッパ世界が終わる場所として設定されている。換言すれば、ヨーロッパ社会からの抑圧が減ずる地点として表象されているのである。

アデンはまた、芥川賞受賞作「白い人」（一九五五）においても重要な役割を果たしている。八月中旬にアデンに来た主人公の少年（父親はフランス人で母親はドイツ人。長じてヴィシー時代のリヨンでナチス協力者となる）は、「目も昏むような熱さ」のなかで「アフリカの黒人、褐色のアラブ人、黒布を顔にまいた女たちのみが蠢いている」アデンで解放感に浸る。彼はアラブ人の曲芸少年を金で買い、岩陰で暴行して暗い快感に浸る。アデンは「道徳、宗教、家庭、学校がそこに住む一切の人間の本能や欲望をしばりつけている保守的なリヨンの重苦しい」世界と違って、日頃抑圧されている本能や欲望を自由に解放し得る世界として設定されている。

遠藤は、リヨンで二年間の学生生活を送り、パリに移ってから、フランス人の白人女性フランソワーズと恋愛している。当時の日記を読むと、遠藤は彼女とともに、アフリカに旅行することを夢

見ている。日本人の自分と西洋人の恋人との逃避行——その場所としてアフリカが夢想されているのは何故だろうか。キリスト教の及ばない世界、そこから逃れられる世界、あるいは、肌色の違うカップルを許さない西洋世界を相対化する場所としてアフリカが表象されていたと見ることもできよう。しかしまた、遠藤が魅せられていたランボーが象徴主義の系譜にあることから、ボードレーが「髪」(『悪の華』所収)で、恋人の髪に「燃えるアフリカ」の幻影を見たことを考えると、初期遠藤のなかには、象徴派の精神への親和性ととも、エキゾチズムとしてのアフリカイメージもまた潜んでいたのかもしれない。

## 二 「アフリカの體臭」と「アデンまで」

フランス留学前の遠藤周作は、「神々と神と」(四季一九四七年十二月)に始まる評論によって、すでに文芸批評家として出発していた。一九五〇年六月から一九五三年二月に至る留学から帰国すると、遠藤は「アフリカの體臭——魔窟にいたコリンヌ・リュシエール」(伊達龍一郎名義『オール讀物』一九五四年八月号)、「アデンまで」(『三田文學』同年十一月)を書き、小説家として再出発する(4)。前者は長らく幻の作品であった。管見の限りでは、新潮社版日本文学全集の解説で、村松剛(一九二九—一九九四)が、タイトルを記さずに短く言及していたのみである(5)。

リヨン大学に籍を置いた当初は、フランソワ・モーリアック研究で学位を取り、帰国後は慶應義塾大学の仏文学教師になることを考えていた。スタンダールで学位を取得したばかりの片岡美智と面会した頃は、そのように考えていたものと私は思う。だが、この計画はやがて捨て去られ、小説家になることが彼の目標となる。批評家から小説家へ。この転換の背後には何があったのか。社会の上層に位置する白人男性の視点から描かれた小説を通してフランスを見ていた遠藤は、人種、民族、階級、宗教、男女、美醜といった権力関係が複雑に絡み合ったフランス社会の現実を、本国のみならず植民地の実態も含めて見聞した。批評という形式は、複雑な現実を抽象化し、因果律で単線的に論証しなければならぬ。しかし、小説という形式ならば、複雑な現実世界を複雑なまま一挙提示的に表象することができる。遠藤自身はこのような言葉で説明したことはないが、彼が批評家から小説家へと方向転換した動機には、以上のような思いがあったのではないだろうか。

同時期に書かれた「アフリカの體臭」と「アデンまで」は、六〇年前に書かれたとは思われない衝撃力を持つ作品である。「アフリカの體臭」については、研究者によって取り上げられることもなく今日に至っており、ほとんど読まれたことのないテクストゆえ、論述の必要上簡単に紹介しておくこととしよう。

一九五〇年六月フランス船マルセイエーズ号でパリに向かう日本人留学生が語り手の一人称小説である。主人公は、サイゴンから乗り込んできた、インドシナ戦争取材の特派員ピエールと、ジプチで衝撃的な体験をする。三〇年代に銀幕で活躍したが、ヴィシー時代にナチス高官の愛人だったことから、戦後裁判にかけられ、五〇年一月に結核で亡くなった女優コリンヌ・リュシエール。彼女がジプチで娼婦になっているという外人部隊兵士の話を確かめようとするのだ。探し当てた淫売宿の覗き部屋で主人公たちが見たものは、ラクダ用の鞭で黒人の少年をいたぶるアラブ人の女だった。ところが、女の顔を覆っていた布が滑り落ちると、出現したのは紛れもない女優の顔であった。「白豚のよう」な女主人は、しかし「あれは此処の女だ。[……]ジプチに来たら、さう考へなくちゃ、いけないんだ」と声を荒げる。パリに着いた主人公は、この話をして誰にも信じてもらえなかったが、ボーヴォワールだけが「この話をくひ入るやうに肯きながら聞いてくれた」……

以上が梗概である。作者のメッセージは明白であろう。ヴィシー時代にユダヤ人差別政策を行うナチスに加担した対独協力者は戦後罰せられ、死んで葬られたことになっている。しかしそれは虚構であり、フランスは現在も植民地では現地人を差別して迫害している。そしてその欺瞞を本国で深刻に受け止めているのは一部の知識人にすぎない、というものだ。



タイトルについても考えてみたい。「アフリカの體臭」といいながら、ジブチという土地や現地人に対する臭いの描写は一切ない。白人女優の黒人少年への暴力が繰り広げられる娼婦の館でのみ、強い臭気が描写される。「僕はそれまで、又その後も色々な土地の淫売屋をみた事がありますが、これ程、烈しい臭気と、不潔な娼家の内部ははじめにして終りです」。「女が僕たちを連れて行ったのは二階でした。「……」下と同じやうに、ひどい臭気が鼻につきました」という二箇所が該当部分である。つまり、フランス人のアフリカ人に対する暴力が、悪臭と不潔さに結び付けられているのである。このようなことから、このタイトルは「アフリカに染み込んだフランス植民地主義」の隠喩と見るのが適當ではないだろうか。

遠藤はジブチで強い印象を受けていた。一九五〇年六月二十八日という、主人公がジブチに到着した日付けも、この作品の描写の一部も、留学日記の内容と一致している。小説中に、ジブチで「白夜」があるとか、ここが「アフリカの南端」であるとか、首を傾げるような箇所があるのは、実在した女優を登場させつつも、この物語があくまで「虚構」であるということを読者に強調するための「テキスト内事実」として受け止めるべきなのかもしれない。「白い人」の冒頭部分でも、連合国軍のリヨン進駐が、歴史的事実とは齟齬する一九四二年に設定されていたことを思い合わせると、おそらくそのような考えるべきなのであろう。その一方で、覗き部屋から逃げ出した女優を追跡したものの見失ってしまった、諦めて売春宿に戻る主人公らの行動の描写には、明らかに説明不足のところがある。小説を書き始めた初期遠藤には、修練不足のところもまたあったと考えてよからう。

コリンヌ・リュシエールは日本でも人気があった女優である。一九二一年生まれだから、一九二三年生まれの遠藤と、ほぼ同世代である。遠藤は少年時代から映画好きだったので、彼にとっても憧れのスターであった。慶應時代に、小林聖心女子学院出身の美しい少女がリュシエールに似ていると三浦朱門に語ったことがあった(6)。野坂昭如(一九三〇―二〇一五)は彼女を「戦死者をもっとも多く出した世代の、銀幕の恋人」であると記している(7)。野坂はそうした世代よりかなり年下なのである。野坂はまた、一九四九年夏に雑誌『りべらる』で彼女がアルジェリアで肺病にかかっているという記事を見、さらに一九五二年頃に、彼女がアルジェリアで「娼婦の館の女主人になっている」とい噂を、何かで読んだ」といふ。野坂は一九六三年にフランスに行った際、リュシエールと面会しようとしたという。一九五〇年一月の彼女の死を知らなかったのである。「娼婦の館の女主人になっている」とい噂を、何かで読んだ」といふその何かとは、遠藤の「アフリカの體臭」かもしれない。三浦朱門は、一九五二年の秋に、安岡章太郎の紹介で初めて遠藤と会ったときに、アルジェでリュシエールが娼婦になったという噂があると話したと証言している(8)。なお、野坂と同世代の小田島雄志(一九三〇―)も、この女優への「恋心」を文章にしている(9)。

リュシエールについて、遠藤と同世代の鈴木明(一九二五―二〇〇三)が一冊の本を書いている(10)。女優の母親や弟、フランスの映画関係者などにも直接取材をし、よく調べて書いている書物である。同書に拠れば、亀井勝一郎、円地文子、古屋綱武、羽仁五郎、堀口大學、石川達三、河上徹太郎、北原武夫、尾崎行雄といった人々が、リュシエールの出世作「格子なき牢獄」に賛辞を寄せたという。彼女の対独協力について、ナチス高官の情婦であったというそのレットテルが、アメリカ人ジャーナリストによって国際的に定着したものであることを鈴木は解明している。この書物の最後に、パリ郊外の市民霊園に彼女の墓をようやく探ね当てたときのようすが記されている。その場所には、墓石すら置かれておらず、ただ枯れ草に覆われていた。墓守の老人は、コリンヌという女優の存在すら知らない。彼女は一九七〇年代後半のフランスで、すでに忘れられた女優だったのである。

ある時期の日本人にとって、コリンヌ・リュシエールが憧れのスターであったことは確かで、それゆえ遠藤の「アフリカの體臭」は、憧れの美しい人の零落の哀れを描いた作品という体裁を持っている。「魔窟にいたコリンヌ・リュシエール」という扇情的な副題は、編集部で付けたのであろうか。短い作品であるにもかかわらず、本文にも「淪落の女優」「魔窟探険」「子供を買ふ」「のたうつ

金髪女」「夜の幻影」という小見出しがゴチック体で記されているが、これも編集部が付けたものかもしれない。要するに、読者にショックを与えることを作者は狙っていると考えることができる。

美しいフランスの若い女性が実は暗い部分を抱えていることが暴露されるといふ図式は、実はこの作品が初めてではない。『フランスの留学生』（一九五四）巻頭に収録された「恋愛とフランス大學生」では、シモーヌという美しい女學生が自殺を遂げたが、「果実のようにみずみずした」彼女が「雑貨屋の、だみ声の老人の情婦であったこと」がわかり、「何かそこに陰惨な衰弱感と情欲の死翳が絡み合っている」のを見たという話がかかれていた。美しく見えるものの背後に潜む暗黒という構図は、初期遠藤周作に顕著なものであった。それはそのまま美しき共和国フランスの醜悪な裏面のメタファーであるようにも思える。

リュシェールの死については、朝日新聞でもロイター共同の訃報が出たので、留学前の遠藤は、彼女の戦時中の対独協力と戦後の死について知っていた可能性がある。知っていたのなら、慶應義塾の仏文学教室ではレジスタンス文学がもっぱら話題となっていたので、対独協力と美貌の女優との結びつきは、遠藤に強い印象を与えたであろう。鈴木は、「格子なき牢獄」が一九七七年の正月にテレビで再放映されたときに、ゲストとして遠藤がスタジオに招かれていたときのようすを記している。遠藤はコリンヌが「われわれの青春時代の象徴である」というような意味の言葉を口にした。そして、ヴィシー時代の対独協力についてホストが語るのを聞いて、遠藤は「しばらく絶句し、眼のやり場を失ったようであった」と記している（11）。「アフリカの體臭」の作者はここで驚いたふりをしたわけである。

村松剛は、先に言及した文学全集の解説文において「小遣いかせぎのためだけではなく、小説の筆ならし、という意味もあつたようである」（12）と書いているが、それ以上の深い意味合いがあつたものと考えるべきであろう。

「アデンまで」の主人公も日本人留學生の青年である。彼は、マルセイユからフランス船マドレーヌ号に乗船する。甲板下の船艙にある、油虫が這い回る薄暗い四等船室は、荷物を積む空間であり、乗客は彼と病気の黒人女性しかいない。この船は植民地共和国フランスの階層構造の縮図である。白人男性の船長が頂点にいて、以下、白人の男性船医、白人の（ジブチに向かう）中年修道女、下級水夫などがいて、黒人女性が最底辺にいる。この黒人女性は「このままでいいだ。黒人はみな、このままでいいだ」とフランス語クレオールで呟き続けるが、やがて船室から隔離室へと無理矢理排除される。どれだけの手当がなされたのか、彼女の死亡を主人公は耳にする。検疫の手間を省くため、遺体はアデン到着を待たず水葬に付される。彼女はマドレーヌ号、すなわち白人が主役の間世界から消去されてしまうのである。船長、事務長、船医、修道女、そして遺体に入った布袋を運ぶ二人の水夫。厳粛な顔で彼らは足下の布袋を見つめる。修道女が読み上げる祈祷書のミサ典書。何という偽善だろう！「白人の祈祷」が、「もはや俺の耳には乾いた意味のない音としか聞こえなかった」と主人公は呟く。これが遠藤が描き出したフランスだった。

船体のペンキも所々剥げかかった「老朽貨物船」であるものの、それが「まだきちんと動いている」ことから、李英和はマドレーヌ号を「ヘーローロッパ（白色人種）」と「アジア（黄色人種）」（ヘーフリカ（黒人人種）」の過去、すなわち植民地主義時代、帝国主義時代を表わす言葉」として読み取るとともに、「今も顕在しているアフリカ、アジアに対するヨーロッパ人の思考形態を象徴する事物」と分析している。首肯し得る見解である（13）。

小説中には、主人公が友人たちとモンパルナスの裏通りの屋根裏部屋で、淫売婦によるいかかわしい見世物を見る場面がある。「アフリカの體臭」と同様の趣向だ。全裸の白人女が、全裸の黒人女を転がしたり引きずったりする。痛めつけられ役であるにもかかわらず、稼ぎの取り分が白人女より少ないことについて、黒人女は「わしは黒人だもん」と弱々しく呟く。白人の人種差別的価値観を完全に内面化した黒人の姿がここには描かれている。

### 三 小説家遠藤周作の出発点にある反植地主義

このように、小説家遠藤周作が出発時に主題化したのは、フランス植民地アフリカと本国を舞台とした人間社会における人種、階級、男女間の権力構造だった。この主題は、留学前の遠藤が書いた評論には全く登場しなかった。「神々と神と」において、遠藤は、「神」「天使」、そして「人間」の諸関係について真摯な思索を重ねている。それは新トマス主義者の著書から吸収した思想であった。しかし、書物のなかに言葉としてあるその「人間」とは、現実世界では実のところ「白人」の謂であり、有色人種が除外されていることに、遠藤はフランスに留学するまで気がつかなかったのである。「人間」の頂点に白人男性がおり、以下、白人女性、黄色人男女、黒人男女がおり、さらにその下に、「ホッテントット」、アボリジニ、オランウータン、野獣が位置することを、遠藤は肌で理解するようにになっていた。そうした西洋の「人間」観を認識したことが、「アフリカの體臭」や「アデンまで」を遠藤に書かせたのである(14)。

若き日の遠藤が重要な決断をした上でこれらの作品を発表したことは疑いない。連合国軍占領下の言論統制時代、すなわち出版物の検閲が徹底して行われていた数年前までであれば、連合国の威信を傷つけるこの作品が活字になること自体がそもそもあり得なかった。検閲制度がなくなっていたとはいえ、連合国への敵対心を払拭するための占領政策が徹底して行われてきた時期に、フランス人の有色人差別と、それに対する日本人の心理的屈折について、これを正面から主題とすることは、新人作家として安全着実な第一歩ではなかった。とりわけ当時のフランスは全体主義体制を打ち破った自由の国として日本の知識層に理想化されて語られていた。「抵抗の文学」を生み出したフランス文学も特別であり、ヨーロッパ文学の「代表」と目されていたのである。したがって、「アフリカの體臭」も「アデンまで」も、作者に賞讃も承認も与えない可能性の方がむしろ高かった。白人に対する非難は、「鬼畜米英」に代表される大戦中のプロパガンダを思い起こさせることから人々の忌避する話題であった。また、フランス帰りの留学生にしてみれば、自らがまとう眩惑的光背効果を危うくしかねない秘密の暴露だった。これらの作品は、フランスを理想化する当時の多くの日本人の神経を逆撫でする作品だったのだ。「アフリカの體臭」が別名義であったのは、実名では危険だと考えたからだろう。当然のごとく、「アデンまで」は『三田文學』の合評会で「酷評されたので、大いにしよげていた」(15)。とはいえ、遠藤が本当に「大いにしよげていた」のかどうかは疑問である。彼が臆することなく、フランス現代史の最暗部たるヴィシー時代の対独協力者を主人公にした「白い人」の執筆に引き続き取りかかったのは、その信念が揺るぎないものだったからとしか考えられないからである。「アデンまで」以上の衝撃力を持つ「白い人」は『三田文學』も掲載を見合わせざるを得なかったし、日本国内でこそ代表作とされているが、遠藤の生前は英語にさえ翻訳されず、現在でも仏独語には翻訳されていない。

以上見てきたように、小説家としての初期遠藤周作を理解するにあたり、フランスの植民地であるアフリカは、無視することのできない重要な意味を担っていた。学生時代にランボーへの関心から生まれたアフリカへの関心は、フランス留学時代に自ら直面した西洋植民地主義の生々しさへの強い反発の導火線となり、遂には小説家として出発するための起爆剤となったのである。

(1) トマス・カトリックの人間観に対する遠藤の違和感の背後には、地上の全ての存在を「生類」として並列的に捉える日本人の世界観があると考えられる。第九章参照。

(2) 一九五〇年代の日本人フランス留學生の実態については、第一章で見たとおりである。

(3) 鈴木和成『ランボー、砂漠を行く——アフリカ書簡の謎』岩波書店、二〇〇〇年。

(4) 「アフリカの體臭」は、「遠藤周作『侍』展——(人生の同伴者)に出会うとき」(監修・加藤宗哉／今井真理、町田市民文学館ことばらんど、二〇一四年一月一八日—三月二三日)において、遠藤の作品であると認定され展示された。

- (5) 村松剛「解説」『新潮日本文学』56 遠藤周作集』新潮社、一九六九年。
- (6) 三浦朱門「インタビュー わが友、遠藤周作を語る」『別冊文藝遠藤周作(増補新版)』河出書房新社、二〇一六年一三四頁。
- (7) 野坂昭如「アルジェの果てまでも」(『文藝春秋』一九八七年七月臨時増刊『女優―わが青春の女優たち』) 九頁。
- (8) 三浦朱門『わが友遠藤周作―ある日本のキリスト教徒の生涯』PHP研究所一九九七年、一七七頁。
- (9) 小田島雄志「コリンヌ・リュシエール 青春の憧れはいつまでも」『文芸春秋スペシャル』二〇一三年春号、一七〇―一七一頁。
- (10) 鈴木明『コリンヌはなぜ死んだか』文藝春秋、一九八〇年。なお、同書は書き下ろしではなく、『週刊文春』に連載された後に単行本としてまとめられたものである。当時の読者層がそのままリュシエールを記憶している年代であったことがわかる。
- (11) 同右、一〇―一一頁。
- (12) 前掲『新潮日本文学』56 遠藤周作集』五三一頁。
- (13) 李英和「遠藤周作「アデンまで」論―留学体験と疎外されるという絶望」『日本語と日本文学』四五号、二〇〇七年。
- (14) ヨーロッパのこうした差別的な人種階層観については第九章及び以下の文献参照。岡崎勝世「リンネの人間論―ホモ・サピエンスと穴居人」(『埼玉大学紀要(教養学部)』四一巻二号)二〇〇五年)、竹沢尚一郎『表象の植民地帝国―近代フランスと人文諸科学』世界思想社、二〇〇一年、竹沢泰子編『人種概念の普遍性を問う―西洋的パラダイムを超えて』人文書院、二〇〇五年、ステイヴン・グールド『増補改訂版人間の測りまちがい―差別の科学史』鈴木善次、森脇靖子訳、河出書房新社、一九八八年、藤川隆男編『白人とは何か―ホワイトネス・スタディーズ入門』刀水書房、二〇〇五年。
- (15) 遠藤周作『落第坊主の履歴書』文春文庫、一九九三年、一〇七頁。

## 附記

「アフリカの體臭」は、本節の初出である拙稿「遠藤周作とアフリカー―『アフリカの體臭』『アデンまで』を中心に」(『二松學舎大学』『人文論叢』九四輯、二〇一五年三月)発表の翌年に刊行された、遠藤周作の作品集『沈黙』をめぐる短篇集』(慶應義塾大学出版会、二〇一六年六月)に初収録された。ただし、歴史的仮名遣いは現代仮名遣いに変更されている。同書刊行時には「幻の処女小説」の発見として、『産経新聞』(二〇一五年六月三日)をはじめ各紙で報道されたが、この作品の意義についての検討はその後も充分にはなされていない。ポストコロニアルという視点を持つ研究者がいらないからである。従来、キリスト教を軸とした西洋／日本という比較文化的視点からは、この作品が持つ思想的意義は鮮明に見えてこない。『沈黙』をめぐる短篇集』の巻末解説で、編者である加藤宗哉は、この作品が「アデンまで」発表以前の小説であることから、「娯楽小説の要素が強いとはいえず、「アフリカの體臭」を遠藤周作の処女作とすることも可能なのである」と指摘しているが、「文体から見ても、小説の内容・状況から見ても、これがフランス留学から帰ってまだ日の浅い遠藤周作によつて書かれたことは間違いない。のちに人気作家となる要素も十分に感じさせる小篇である」と説明しており、娯楽小説的側面を強調して、思想的価値には触れていない(同書三〇九頁)。

## 第二節 《ポーラン・シリーズ》——黒人表象の変容

### はじめに 遠藤文学における黒人表象

評論「神々と神と」で批評家として出発した遠藤は、フランス留学後、「白い人」（一九五五年）で芥川賞を受賞して小説家として再出発を遂げた。彼はその後、「黄色い人」（一九五六年）を書いた。日本人とキリスト教という、遠藤の生涯を貫く思想的主題がそこに込められていたことは事実だが、前節で見たように、「白い人」に先立つ「アフリカの體臭」（伊達龍一郎名義、一九五四年）「アデンまで」（一九五四年）で提示されていた、ヨーロッパ白人社会における有色人差別という主題も消えてなくなったわけではなかった。初期の遠藤文学には、マルチニック島出身の黒人思想家フランツ・ファノンと共通する近代西洋植民地主義に付随する有色人差別への怒りが底流していたのである。とはいえ、彼は続けて「黒い人」を書くことはなかった。

ターザン映画でしか黒人を知らなかった遠藤にとって、生身の黒人との出会いは、敗戦後の東京で見かけたアメリカ占領軍兵士だった。少年期を満州の大連で過ごした遠藤にとって、ロシア人は珍しくはなく、国際都市神戸に暮らすようになってからも、夙川教会のフランス人神父の存在などが身近にあり、白人と接触する機会は、日本人にしては豊かであった。けれども、黒人と触れ合う機会は、ほとんどの日本人と同様、乏しかったのである。

一九五〇年に横浜港からフランス郵船の旅客船でマルセイユに向かったとき、四等船室で同室だったフランスの黒人植民地兵たちとの遭遇が、黒人との本格的な出会いだった。サイゴンで彼らが下船するまで、遠藤は同じ室内で彼らと交流をすることになった。最初はどのようなふうになるかよく分からない遠藤が、徐々に彼らと親密になっていった経緯はいくつかのエッセーに記されている。

ところで、注意深く遠藤の仕事を見ると、純文学系列のいくつかの作品にも彼は黒人を登場させている。すなわち、「コウリッジ館」（『新潮』一九九五年一〇月号）、「異郷の友」（『中央公論』臨時増刊号、一九五九年一〇月）、「ルーアンの夏」（『群像』一九六五年三月号に「留学」第一章として発表）、「黒い旧友」（『別冊文藝春秋』一三二号、一九七五年六月）がそれである。「コウリッジ館」については、ポストコロニアリズムにとって重要な人種問題の視点から分析した先行研究がある（1）。しかし、これらの四作は、いわばシリーズとして統一的な視点から考察することが必要である。ことに「異郷の友」を除く三作は、計算したかのように一〇年ごとに執筆されており、人物の設定状況も重なるなどの共通点があることに加え、何よりもそこで描かれる黒人像が大きく変容しているからである。筆者は「コウリッジ館」については以前に詳しく分析したことがあるが（2）、本稿では、後の三作と合わせて改めて論じることとする。

### 一 フランス本国の黒人事情

個々の作品を考察する前置きとして、遠藤が留学した当時のフランスの大学生が置かれていた状況と、黒人差別を巡る状況について、これまでの遠藤研究では参照されることがなかった瀧澤敬一（一八八四—一九六五）の文章を一瞥しておくこととしよう。

遠藤がルーアンからリヨンに移ったのは一九五〇年九月のことである。一〇月一四日土曜日の日記に、「瀧澤敬一老を訪問する。よくしゃべる元気な老人である」との記述がある。翌日の日曜にも「瀧澤老人、三雲兄弟とルージュールクロワという所にある老人の田舎家にあそびに行く。成程老人が自慢

するだけあって、なかなか気持ちのいい別荘である」記されている。瀧澤敬一は、横浜正金銀行員で、リヨン支店に異動してからフランスに長期滞在し、フランス人の妻を娶り、第二次世界大戦中も現地にとまった人で、フランス事情を伝えた著書『フランス通信』（岩波書店）は、一九三七年の第一集から、一九五二年の第一〇集までシリーズとなって日本国内でよく読まれた。三浦朱門の証言によると、遠藤は瀧澤に会ったときに、「フランスの捕虜になった日本兵みたいな気がした」と三浦に語った。これはおそらく、当時の自分の姿を瀧澤に投影したのであって、遠藤は自分がフランスの捕虜になった日本人のような気がしていたのだと三浦は分析している（2）。これまで遠藤研究において、瀧澤の文章を参照したものはないが、一九五〇年前後の瀧澤の文章には、遠藤が学生としてフランスにいた当時のようすがよくわかるので、少しく見てみることにしよう。

「月謝も本も下宿も恐ろしく上つて、パリ遊学費は少くも月二万と言はれ、中産者では骨が折れる」。「政府の給費生は年額七万フラン、三度のめしを二度にしやと寝るだけでこの倍はかゝる。まして内職は出来ず勝手の知れない外国人留学生だと、余程貫はなくてはパリの学生生活は出来ない。大都市の学生会館は室数に限りがあつてなかくもぐり込めず、第一に宿舍が頭痛の種、妻を得んとせば先づアパートを確保せよとの格言を準用して、下宿が先入試は後となる」（3）。これは瀧澤が一九四九年一月に書いた文章である。フランスの学生は、経済的に裕福とはいえない戦争犠牲者の子女であつても、明朗快活で苦学生という印象を与えない。「若駒の意気に燃えてあまり広くない大学の門に突進して行くのは、文化国フランスの為に慶賀すべきことであらう」と結んでいる。

これは、「学生生活の苦しさは、日本だけではありません」と述べ、リヨン大学の生活には月に一五〇〇〇フランは必要だという遠藤の証言ともほぼ一致する（4）。五〇〇〇フランの差額は、おそらく首都パリと地方都市リヨンとの物価の差に帰因するものである。フランスの質素な女子学生の姿を見て、遠藤は三年前の慶應大学の女子学生の方がよほど贅沢な服装をしていたと驚いている。

さて、瀧澤には「白哲人の国に住んで」という文章がある。一九五〇年九月四日の『毎日新聞』に掲載されたものだが、この時期のフランス本国における有色人差別の証言であり、見過ごすことができない重要なテキストである（5）。瀧澤は、冒頭でまず、「フランス帝国の一部であるフランス熱帯アフリカ（A・E・F）のセネガル」出身のある青年が体験したエピソードから語り起こす。パリにやってきてホテルを探すが、どこも満室ですと断られる。そこで電話で宿泊を申し込んだところ、二つ返事で部屋がとれた。ところがいざホテルに到着すると、「あれだけ上手にフランス語を喋つたお客の顔がまつ黒とあつて急に風向きが変わり、色々申訳をしても泊められない理由を説明した」。アメリカ人観光客が黒人を喜ばないからだというのである。「フランス本国こそ世界一自由の天地と信じて来た青年は落胆もし憤慨もしたのである」。瀧澤は、セネガル人を「あの地方の土着民は黒光りする愛嬌者」と表現している。この文章は、全体としてはフランス本国人の黒人差別を批判するものとなっているが、「黒光りする愛嬌者」とは、粉末飲料「バナニア」の広告に見られるステロタイプなセネガル人イメージそのままである。要するに、大きな子供としての黒人イメージである。

私はフランスに住むとは思ふが白人国だと考へたり感じたりしたことはない。顔の色で差別待遇を受けた覚えは更になし、日常こんなことは話題にも上らないからである。フランスが誰にも住みよくて「二つの故郷がある、自国とフランスだ」なる諺を生んだ所以であらう。

白哲人種といふがラテン系で南国の男などは白いは思へない。目鼻の恰好こそ違へ顔色だけではわれくと五十歩百歩のフランス人は沢山居る。シャンデリヤの舌では白人黄人の区別はつかずいゝ気になつてダンスも出来る。フランスの女を見馴れるとこれがほんとの色であつて、時折見かける金髪で肌のすき通る様なスウェーデン娘など人間ぢやない様な気がする。

このように述べる瀧澤は、フランス人がドイツ人を「ボツシュ」といい、日本人が「毛唐女唐」「ロスケ」「イタ公」と呼び、アメリカ人が「ジャップ」ということを批判する。そして「皮膚の色をと

やかく論じて居ては丸い地球も丸くは納まらず国際連合の旗が泣く。フランスに住むわれくが白人国だといふことを忘れられる様に日本に居る欧米人も黄色員国であることを感ぜず、誰しも人種上の優劣観念など持たぬ世の中にしたいたいものである」と結んでいる。

この文章にはわれわれにとつて注目すべき証言が二点含まれている。第一に、当時のアメリカ人一般が持っていた白人至上主義が、フランスの黒人差別に影響を与えていたということであり、第二に、瀧澤が「顔の色で差別待遇を受けた覚えは更になし、日常こんなことは話題にも上らない」と述べていることである。「アデンまで」に見られる、フランス人と日本人の間に横たわる海溝のように深い人種的懸隔を思うとき、瀧澤のこの述懐は、一見不思議に思えるのではないだろうか。

ところが、このような視点から遠藤自身のテクストを検討すると、「フランスに来れば人種の差別は忘れろとは日本でたびたびきました。事実そうでした。フランス人は、リヨンのような保守的な街でも、そう言う事に拘泥しない」(6) という文章を見出すことができる。これは一九五一年九月に発表されたものである。しかし、この文章には続きがあつて、遠藤は大学キャンパスにおけるフランス人学生の黒人差別に関する次のようなエピソードを紹介しているのである。少し長くなるが、重要な文章ゆえ、煩を厭わず引用する。

ある日のこと、ぼくは学生食堂で順番をまっていました。すると、次のような声をきいたので。「乳色コーヒー、黒コーヒーはこちら」それは丁度彼等のうしろで順番をまっている褐色のアフリカの学生、と黒色のアフリカの学生とに対する、あてこすりでした。こういう馬鹿愚鈍知能低劣な学生がフランスにもいるのかと、ぼくは驚きました。流石に他のフランス学生も気をわるくしてか、黙っていました。もう一度、「黒コーヒー」という声をききました。他人事ながら、思わずかつとなつて、ぼくは言つてやりました。「ぼくはここに来て初めてフランス学生に幻滅した。ぼくはフランス学生のエスプリを尊敬していたけれど、そんなものだったのか。君たちがいつまでも白人とただで優越感をもっているから、その優越感に反抗する他民族の敵意がたえないんだ。東洋の悲しい戦争も今、そこに一原因があるのだぞ。ぼくは日本人だけど、印度支那の戦争は単にコミニスムの問題だけじゃなくて、君たちのそうした態度が、彼らをコミニスムに結びつけるんだ」しばらく行列の中で沈黙が続き、それから他のフランス学生たちが叫び始めました。「あいつらは本場のフランス学生じゃない。日本人、誤解するな」黒コーヒーといった学生たちは皆から行列外に追いだされてしまいました。(7)

ここでわれわれは二つのことに気がつく。第一に、日本人の遠藤自身は、瀧澤が証言しているように、フランス人学生から、あからさまな差別を受けることはなかったこと。第二に、しかし黒人に対するあからさまな差別は存在していて、遠藤がそれに激しい憤りを覚えたことである。第二の点について、最初に考察することにしよう。白人学生による黒人差別に、遠藤はなぜそこまで強い怒りを感じたのであろうか。舞台となった大学が、国立リヨン大学なのか、リヨン・カトリック大学なのか、判然としない。遠藤は両方で学んでいたからである。だが、どちらにせよ、キリスト教徒が人種差別をしている事実には強い衝撃を受けたからではないだろうか。遠藤は戦時中、「愛」の宗教であるキリスト教徒であることによつて、官憲から迫害を受けた経験を持っていた。彼がフランスに対して抱いた憧れは、「カトリックの長女」と呼ばれた国に行くという期待と重なり合っていた。ところが、そのフランスで彼が目撃した現実、あからさまな人種差別だったのである。遠藤が憤激したのも当然であろう。「他人事ながら」と遠藤は記しているが、彼は他人事とは考えていない。彼は自分を黒人の側に引き寄せて考えているのであり、白人に対する有色人種として彼らと自分を同類視しているのである。そうでなければ、「アデンまで」が書かれることはなかったであろう。なお、改めて確認するまでもないことではあるが、フランス人学生が、差別主義者を「あいつらは本場のフランス学生じゃない」と言つたとあるが、レイシストの学生たちもまた「本場のフランス人」なのである。その点を遠藤が見逃していないことは、これから分析する諸作品を見れば歴然としている。

さて、第一に点に論点を戻す。黒人差別を目撃した遠藤自身は、差別を受けていなかった。この事実は、遠藤に、同じ有色人でありながら、黄色人と黒人の、それぞれの白人に対する関係の差異について、改めて考えさせることになった。遠藤は、白人学生からは「黒人学生はしようがない。感情にむらが多すぎ、それに先天的に怠け者だ」とささやかかれ、黒人学生からは「フランス人は、こんな所じゃ親切のように努めるけれど、アフリカではひどいんですよ」とうちあけられる立場にあった(8)。黒人が登場する一連の作品が生まれたのは、このような理由からと考えられる。

## 二 「コウリッジ館」のポーラン

「コウリッジ館」の舞台は一九五〇年代のリヨンである。語り手は、当時カトリック系の男子学生寮にいた日本人留学生である。そこにいた黒人学生ポーランに、日本から書いた手紙という体裁をとっている。けれども、今現在ポーランがどこにいるのかを語り手は知らない。これはいわば、投函されることのない手紙——それゆえ、書き手が過去を確認するために、自分自身に宛てて書いた手紙なのである。

コウリッジ館の入寮者は全て白人だった。彼らフランス本国の青年たちは、露骨な差別をするわけではないが、語り手のチバは、彼らが「今度、黄色人(ジョンヌ)がはいるんだってサ」「そうさ、便所が黄いろくなるぜ。来学期から」という彼らの陰口を聞いてしまった。娯楽室に入ると、彼らが話をびたつとやめてしまうこともある。何となくしらじらしい空気がそこにはあった。それでも次第に話を交わす同宿者も現れてくるが、ここで描かれる白人学生たちは、煙草なり酒なり、語り手から何かしらの利益を得ようとするような、人間的に尊敬できない、ずるがしこく卑小な存在として描かれている。

ある日、寄宿生たちは、アフリカからの留学生が入ることを老司祭から知らされる。「今度は黒人(ネグロ)だぜ」「便所が黒くなるぞ。明後日から」と白人学生たちが言い合うだろうことを語り手は想像する。その日、黒人学生ポーランは、「道化師のような服装」でコウリッジ館に現れる。「仏蘭西人なら、どんな学生でもない、この醜悪な色彩の服装のなかに、ぼくは白人に嗤われまいとする君の悲しい努力の痕をみました」。翌日、語り手の部屋を、おびえた声で「ごめん下さい。ムッシュ」といながら訪れたポーランは、部屋の主が日本人であることを知ると、一転して態度を豹変させる。「なんだ、お前か」「どこから来たんだ。お前は」という言い方は、「ジブジに上陸した日、仏蘭西人の役人がパス・ポートを調べながら一人のアラビヤ人を怒鳴りつけた口調」だった。「君たちの彫刻の写真集がその本箱にあるぜ」と語り手がいうと、ポーランはいきり立つ。「え？ アフリカを、お前、ターザン映画と同じだと思っっているんだろ」「カサブランカは仏蘭西の街と同じなんだから。地下鉄だって、今、作っているんだから。日本で地下鉄、見たことないだろう」。旧稿でも指摘したところだが、当時のカサブランカには地下鉄は存在しない。ポーランはここで嘘をついて虚勢を張っているのである。

このように、語り手の日本人留学生と黒人留学生とは、白人たちの館のなかで、互いに打ち解けることができない。モロッコと日本と、どちらがより「近代化」しているのか、つまりヨーロッパ化しているのかを競い合うのである。「あの日から、コウリッジ館の白人学生の中に放りこまれた二人の有色人種、ぼくと君とは、まるで白人という男を奪い合う二人のあさましい女のようにした」。

物語の結末は悲惨である。ある日、白人学生アンドレが、実家から送金された金がなくなると騒ぎだし、どうやらそれは別の白人学生ピエールの仕業らしいのだが、ポーランに嫌疑がかけられる。

「ネグロが、今朝、部屋にいたぜ」「そうだろ、チバ」とピエールが叫び、語り手は弱々しく頷く。学生たちはポーランの外出中の部屋に乱入する。夜、語り手は、帰宅したポーランが、散乱した自分の部屋のなかに呆然と立ち尽くす光景を寢床で想像するのである。……

遠藤はリヨン時代にクラリッジ館という学生寮にいたことがあり、そこには白人学生アンドレ、ピ



エールとともに、黒人留学生ポーランがいた。したがって、この作品が、自身の体験的事実から多くの素材を借りていることは明白である。もっとも、当時の日記を読むと、周囲の学生たちは親切だったようで、作品中で誇張して描かれているような露骨な有色人差別を遠藤自身が体験したりしたことはなかった(9)。マルセイユに向かうフランス船の中が、フランス社会の縮図であったように、遠藤は、コウリッジ館という寄宿舎をフランス社会——白人でキリスト教徒が圧倒的多数であるところの——として設定しているのである。そうしたホワイト・ワールドの中に、有色人、すなわち黒人と日本人を投げ入れることで、ポストコロニアル時代に残存するヨーロッパ社会の植民地主義を浮き彫りにしているのである(10)。

この作品が書かれた一九五五年は、日本がサンフランシスコ講和条約発効により占領下から主権を回復してまだ五年足らずであるとともに、インドネシアではバンドン会議が開催されてアジア・アフリカ諸国が世界に存在感を示した年である。遠藤は「白い人」で芥川賞を受賞したばかりで、西洋植民地主義に対する鋭い批判意識を持続させていた時期であった。なお、先行研究がすでに指摘しているように、「コウリッジ館」の日本人留学生の名前は「チバー」であり、「アデンまで」の主人公と同じである。前者はフランス人女子学生との恋愛の破綻を描いた作品だが、二作を重ね合わせて読むことも可能であろう。「アデンまで」の主人公は四等船室で病気の黒人女性とともに過ごしている。白人船医は彼女に暴力をふるう。そして、黄色人種である日本人留学生の主人公は、白人と黒人の間に挟まって、葛藤している。

### 三 「異郷の友」のポーラン

「コウリッジ館」に登場した黒人学生を思わせるポーランが、四年後に書かれた短篇「異郷の友」にも再登場する。外国留学生のパーティの席上のことである。主人公の「私」はリヨンにいる日本人留学生である。時代は一九五〇年。当時リヨンにいる日本人留学生は「私」と工藤の二人だった。この作品の主題は、同じ日本人留学生でありながら、暖かい友情だけで結ばれたわけではない同胞心理の複雑さであるが、ここにも黒人学生が重要な役割を果たす存在として登場しているのである。

その黒人学生ポーランは、ある集まりで、同席した白人学生に促されるままに、ジャズ音楽に合わせてダンスを披露する。

曲がなりだすと、彼は手足を水車のように回転させながら奇声を発して飛びあがったり、しゃがんだりした。それは決して彼の国の民族的な舞踏といえるようなものではなかった。よし民族的な舞踏としても彼はこの奇妙な踊りが白人の学生たちに与える滑稽感に気がつかぬ筈はなかった。気づいた上で彼はこうした舞踏をやり、肌色のちがった連中に追従していることを敏感に私は感じとった。(11)

主人公は何人かのアフリカ系学生がポーランを軽蔑したまなざしで見ていることにも気づいた。彼等は白人学生の顔をうかがいながら、彼らと一緒にあってポーランを嘲笑していた。この場面における黒人学生の二つの態度について、熊谷雄基は「自尊心や自文化の価値観を投げ捨ててまで白人社会に同化しようとする戦略をとることや、その過程に競争や優劣判断の観点を持ち込むことで誰かを蹴落とし否定すること」と要約し、主人公がこれを有色人種の陥る「罠」であると洞察していることに改めて注意を促している(12)。

主人公は、自分がポーランのように白人に阿諛しようとは考えなかったが、気がつけば、もう一人の日本人留学生と競うようにして外国人学生たちと仲良くなろうとしている事実が気がつくのである。その意味で、黒人学生ポーランは、日本人たる自分の似姿であった。

かつて洗礼を受けた事実を利用してフランス人学生に取り入ろうとしているとしか見えない工藤の

前で、主人公は、わざと黒人学生と騒ぎながら通り過ぎたりする。すっかりフランス人になりきろうとしているふうな彼の姿が、自分の分身であったことに主人公が気づくのは日本に帰国してからのことである。ここでは、「コウリツジ館」の一人の語り手の日本人が二人に分裂しているばかりか、二重身同士が相争っているのである。

「コウリツジ館」に登場したポーランと同名の黒人学生が、白人たちに気に入られようと、パーティの席で、他の黒人学生たちの軽蔑のまなざしを浴びながら、滑稽なダンスを披露する。強い印象を与える場面だが、この情景は、その後の作品でくり返し反復されることとなる。

#### 四 「ルーアンの夏」のポーラン

「ルーアンの夏」は、中編小説「留学」の第一章として書かれた。物語の設定は、遠藤が自分の留学期間から材料を借用しているという点で「コウリツジ館」と似ている。もつとも、主人公の日本人留学生工藤（「異郷の友」の工藤とは無関係である）は、リヨンの寄宿舎ではなく、ルーアンでホームステイしている。彼は異教徒の国にキリスト教を広める目的で、世界各地の学生をフランスに招くというカトリック教徒の篤志で運営されている奨学制度を利用してフランスにやってきた学生なのである。時期は一九五〇年代初めである。地元の新聞にも紹介されたために、それだけでなく東洋人ということでも目立つ工藤は、街を歩けば声をかけられる。それが息苦しい。工藤は、外国に行くことなど夢物語であった時代に、キリスト教徒であったことで「出世の足がかり」を得たことに得意だった。だが、現地に来てみれば、「君たちの留学がやがて日本の布教に貢献すること」を期待しているという周囲からの圧力が息苦しい。ジイドを読んでいることを咎めるような「与えられた教理で固まった眼で万事を割り切るフランス人を内心彼は批判する。「しかしその軽蔑がすぐに鋭い刃のように自分にはね返ってくるのを感じてしまう。この人たちがそうならお前は一体、何だというのだね。少くともこの人たちは自分の強い信念を持っている。お前ときたら自分の保護色を適当に変える意気地なしじゃないか」。

さて、ある日工藤は、レストランで開かれた集まりで、モロッコ出身の黒人学生たちと出会う。「ポーランとよばれた黒人の学生は固い細い頭の毛を仏蘭西人のように無理矢理に二つにわけてべっとり油をつけている。それは工藤になにかあさましく憐れな感じを起させた」。

ポーランは両足を広げ手拍子をとりはじめた。歌いながら体を動かす。かん高い声を出し、こちらが見ているも恥ずかしくなるほど大袈裟な身ぶりをする。司祭はパイプを噛みしめながら笑いをこらえ、婦人たちはたまりかねて、横を向く。彼女たちがこの歌や踊りを美しいとは思っていないのが、工藤にもはつきりわかる。それなのにポーランは歌い続けている。彼は彼でこれらの婦人たちの心の動きをちゃんと心得ているし、計算しているのだ。(13)

工藤は目を背ける。「日本人も、ああいう風に歌ったり踊ったりすることが好きかね」と司祭に問われた工藤は「絶対にしませんよ。我々は……」と吐き出すように応じる。

ポーランともう一人の黒人学生マジロとの間に口論が始まる。マジロは「もう沢山だ。巴里に帰る」とフランス語で叫び、ネクタイを外して退席する。司祭は「この頃、巴里で共産党の学生たちとつきあっていると聞いたが、マジロはその悪い影響を受けたのだ」と呟く。工藤はしかし、マジロに感動する。「強いなあ」。「工藤は、マジロが婦人たちを突きとばすように出て行った姿を羨ましいと思つた。自分にもあの強さがほしかった」。

「砂糖菓子のように皆がくれる愛情を、払いのけて、反抗するほうを選んだ彼にくらべると、頭をかかえてうなだれながら婦人たちから慰められていたポーランはたしかに醜かった」。だが、工藤は自分は周囲の「善意」を傷つけることになるので、マジロのように振る舞えないのである。

「ルーアンの夏」において、黒人学生の挿話は物語の中心的主題というわけでは必ずしもない。け

れども、われわれの関心からすると、「コウリツジ館」で登場したポーランが、白人たちに必死になつて媚びようとしていた点が、「ルーアンの夏」のポーランと同一であることを注目するとともに、マギロという白人に叛逆する黒人像がここで提出されている点に、前作との著しい相違を認めるのである。これは「ポーラン・シリーズ」として見た場合、驚くべき展開ではなからうか。マギロは周囲の白人たちに正面切つて戦いを挑む小さな英雄であり、純粹な怒りに光り輝いている。彼は、その誇り高さという点で、ほとんどフランツ・ファノンを思わせる。

「君の国に今よりも基督教の光があたるよう、我々は努力しよう」というフランス人の言葉に工藤は心中で思う。「日本はアフリカのチャッドやコンゴとは違う。あなたたちは日本について何も知らぬ」と。これは、アフリカの前近代性を述べているわけではなく、ヨーロッパの植民地主義と手を携えたキリスト教布教が、ある程度の成果を収めたアフリカのように日本はいかない、という意味である。「私の国には基督教がその根を腐らしてしまう風土があるのだ」。主人公が呟くこの認識は、『沈黙』（一九六六年）でも強調されることとなるわけだが、ここでは、アフリカ世界に対するステロタイプな主人公の偏見もまた露呈しているのである。

キリスト教を押しつける白人たちの「善意」をはっきりと拒絶するアフリカ出身の黒人学生は、読者に鮮やかな印象を残す。この作品が発表された一九六五年は、英仏植民地だったアフリカ諸国が次々に独立を果たしたことで、「アフリカの年」とよばれた一九六〇年からすでに五年が過ぎていた。アルジェリアの独立が一九六二年、アフリカ諸国が団結することで、植民地主義と戦うことを謳ったアフリカ統一機構の成立は一九六三年のことである。日本でもまた、東京オリピックが開催され、東海道新幹線が開通し、高度経済成長時代の最中であつた。日本人も自信を回復しつつある時期であつた。「コウリツジ館」の卑屈なポーランではなく、勇敢なマギロが登場する時代的背景は用意されていたのである（14）。

なお、「留学」第二章は、一転して物語は一七世紀の切支丹留学生に変わる。そして、一九六四年に『文學界』に連載された「爾も、また」と合わせて長編小説「留学」として刊行された。「ルーアンの夏」を半ば独立して本節で扱つたのは、このような構成から、この章だけを扱うことが可能だからである。

## 五 「黒い旧友」のポーラン

これまで見てきた三作は、いずれもフランス本国が舞台だったが、「黒い旧友」は現代（一九七五年）の東京が舞台である。当時は国際空港でもあつた羽田空港で、語り手の「私」は、リヨン留学時代に寄宿舎で一緒だつた黒人学生と、二三年ぶりに再開するために、スカンジナビア航空便の到着を待っている。彼は、昔は「暗い陰気な顔をした黒人だつた」。これまで文通らしい文通をしていたわけでもなく、クリスマスカードだけは交換していたという設定である。寄宿舎の近くの停車場で、よく戦争で夫を亡くした狂女が毎日待っているという挿話は、「コウリツジ館」で使われたものの再利用である。寄宿学生は、ブラジル出身のマルセロと黒人の彼と自分以外は全て白人だつた（これは遠藤自身の実体験と同じである）。入寮したとき、白人学生が案内してくれたが、黒人学生の部屋の前で「まだ眠っている。あいつら黒ん坊（ネーグル）はいつもこうだ」といったとき、「私」は反応する。

黒ん坊（ネーグル）という言葉が私の神経をすこし傷つけた。日本にいた時、道をたずねた進駐軍の兵士に「ヘイ、ジャップ」と言われた不快感をこのとき、不意に思いだした。（15）

白人が黒人を「ネーグル」と呼んだことで、白人が自分を「ジャップ」と呼んだ過去の体験を再活性化させられたということは、主人公が白人のなかに抜きがたく存在する有色人種への軽侮の念を知り、ショックを受けたということにほかならない。

ピエールという白人学生が、「俺たちはそいつを黒コーヒと呼んでいるよ。連中はこつちを嫌っているけど。こつちだって向うさんが好きじゃないから、それでいいのさ」という。ある日ピエールが「留学生友の会」に連れて行ってくれたとき、「私」は二人の黒人学生を見た。ほかにはヴェトナム、アラブ、インドなど、二〇人程度の学生たちがいた。黒人学生の一人がアコーディオンを弾き、もう一人が故郷の歌と踊りを始めた。「おどりながら歌う彼の声は奇妙で、しばしば白人学生たちの笑いを誘う。笑いには失笑ともあわれみともつかぬものがまじっていたが、黒人の学生はそれを意識して、かえって大袈裟な身ぶりや声を出すのだった」。「私」は「この国で自分の似姿を見させられたような気がして少し不快だった」。「道化みたいな真似をして、みんなから可愛い黒ん坊（ネーグル）と思われようとしているんです」と白人学生が囁いた。

ここまで読むと、われわれは、作者が「ルーアンの夏」の世界を再現していることに気がつく。けれども、ここにはネクタイを捨ててその場から立ち去るマジロはいない。彼はどこへ行ったのであるうか。

寄宿舎に戻った「私」は、そこで初めて黒人学生ポーランと出会う。部屋に誘い入れた語り手は、「留学生友の会」に行ってきたと言う。するとポーランは、自分はあるいふ機会には行かないと応えた。「あの会の仏蘭西人たちはニセの友情で黒人を砂糖づけにしようとしている」からである。会にいた二人の黒人学生のことをいうと、ポーランは「そいつら、本当の黒人じゃない。白人の真似をして、白人になりたがっている連中だ」と早口で激しく非難する。

私が理解した限りではこの大学の黒人の学生には二つあって、一つは白人の文明や文化を自分が身につけたことを得意がり、その上、同じ黒い皮膚をもった黒人を馬鹿にする手合と、もう一つはわざと、可愛い黒ん坊（ネーグル）になりきって白人学生からいい奴だと言われて悦んでいる連中である。しかし俺はそんな黒人たちとは違うのだと彼は声をあげた。(16)

「黒い旧友」のポーランは、「コウリツジ館」「ルーアンの夏」に登場した、あの卑屈で憐れなポーランではない。彼は「ルーアンの夏」に登場した反逆者マジロその人なのである。「俺は白人を憎むし、白人からそのために憎まれたほうがましだ」。「そのほうが対等の立場になれるじゃないか」。遠藤のなかで、ポーランは徐々に人間的に成長し、誇りを持つ人格に変容していったのである。これは驚くべきことではなからうか。遠藤周作という日本人作家のなかには、ポーランという一人の黒人が生きていたのである。彼は目を背けたくなるような卑屈な態度を白人学生にとることもあった。だが、いつまでもそのような人格ではなかった。彼は自己を否定することで、新しい人間になるのである。

語り手はしかし、周囲の白人学生たちが、日本人である自分もポーランの同類と見なすことを恐れる。求められるままにポーランと握手をした彼は、自己嫌悪を感じつつも、生理的な不快感から、彼が去ったあと、手を洗うのである。ポーランは明らかに親近感を抱いたようすで、ある日学生食堂で先に席をとってくれようとした。だが、白人学生の目を意識した語り手は、仲間に巻き込まれることを恐れ、ほかのアジア人学生と食べるからと咄嗟に嘘をついて断る。「一瞬裏切られたような幻滅の色」がポーランの目に走った。自己嫌悪にかられながら、「俺はポーランが黒人だから避けているんじゃない。ただ彼があまりに白人の学生を嫌い、その感情に俺を巻きこもうとするから嫌なんだ」と内心で反復する。

フランスにおける日本人留学生の、黒人学生に対するこのような微妙な心理的屈折を描いた昭和文学は、ほかには見当たらない。遠藤は、日本人が最も直面したくない現実と真正面から向き合おうとした作家であることが、このような場面からもわかる。

さて、寮で盗難事件があり、どうやらピエールが怪しいが、白人学生たちの間からは、ポーランの名前が出る。しかし証拠もないのに疑うのはどうかという意見もあり、事件はうやむやになる。だが、わかまりは残り、しばらくしてポーランは寮を出た。作者はこのあたりは、「コウリツジ館」を若

干変形して再利用しているわけである。

さて、そのポーランが、一九七〇年代半ばの東京にやってくる。どのような姿になっていることであろう。読者の期待も高まる。

何という変わりかただろう。あの頃は洗いざらしたような長袖のスポーツシャツによれよれ兵隊ズボンをはいていた彼が、仕立てのいい紺色の背広を着て、幅ひろい流行のネクタイをしめている。たちどまって彼は眼前にいらんだ日本人たちを少し見くだしたような眼で眺めている。(17)

周囲の日本人たちも、彼に無関心である。占領軍の黒人兵士に驚いた時代は去っていたからである。「サリユー」と二人は学生言葉で挨拶し合った。タクシーのなかで、二人は話題を選びながら会話を交わす。共通する思い出は大学と寄宿舎しかなかったが、二人にとって、あまり愉快な記憶ではなかったからだ。ポーランは貿易会社の経営者である。政府関係者との強いつながりや、従業員の数などを彼は自慢する。内ポケットから取り出した三枚の家族の写真。「その背後にはあきらかに彼の国が植民地時代に仏蘭西人が住んでいたにちがいない洋風の白い家があった」。彼は儀礼的に、小説家となった語り手に、何冊本を書いたのかと訊ねる。

そばに腰掛けているこの黒い男が私の知っている二十数年前のポーランとはまったく別の人間のような気がしてくる。あの暗い、陰気な顔をして、足音を忍ばせながら寄宿舎を歩いていたポーランは死に、別の男がその名を使って日本に來たようだった。(18)

ホテルに入り、バーで並んで腰掛けたポーランは、語り手に、ホテルが良くないと不平をいい、「東京はきたないね。俺の国の首都のほうがもっと綺麗だ。ホテルだって素晴らしいのがある」という。まるで「コウリッジ館」のポーランのように。「それはあんたが昔、嫌っていたフランス人が作ったものだろう」という「私」の心の動きを察知したポーランは、「俺たちは結局彼等を追い出して、それを自分のものにしたんだ。今では仏蘭西人が俺たちの機嫌をとっているのさ」といった。

「コウリッジ館」「異郷の友」で描かれた一九五〇年代の卑屈な黒人学生ポーラン、「ルーアンの夏」で描かれた反逆児マギロ、そして彼らの二〇数年後を描いた「黒い旧友」に登場する、アフリカ新興国で成功した「別の男」のようなポーラン。遠藤が一〇年ごとに描き出した黒人像は、ヨーロッパ植民地出身の黒人が自信を深めていく時代背景をそのままに映し出していたということもできるだろう。一九七〇年代半ば、第三次中東戦争をきっかけとする第一次石油ショックの影響から、一九六〇年代の高度経済成長には翳りが見えていたとはいえ、それでも日本の経済大国化は著しかった。その時代から振り返ってみれば、自分が留学した一九五〇年代は何と現在とは異なる状況だったことだろう。作者はそのように考えたのではなからうか。学生時代に寄宿舎で知った黒人学生ポーランは、遠藤に強い印象を与えていた。彼を忘れることはできなかった。その後の交流はなかったようだが、彼はずっと遠藤の心の中に生きていて、四編の作品に間歇的に姿を現したのである。

### おわりに——黒人表象の変容が示すもの

遠藤には、「有色人種と白色人種」(一九五七年)というエッセーがある。これを読むと、本節で分析してきた四作品の背景がうかがわれる。横浜港から乗船したフランス船のなかで差別を受けたことについては、第一章で論じたが、このエッセーのなかにある、リヨン時代に見聞した黒人差別に関する記述に改めて注目したい。

知り合った黒人学生を見ているうちに、彼等がこの人種的意識だけを糧として生きているのを存

分に知らされた。一言でいえば黒人学生は昼と言わず、夜と言わず、その住む場所の如何にかかわらず、自分の黒い皮膚、扁平な鼻、針金のように固くて、縮れた頭髪を意識せずにはいられないのだ。「……」私たち黄色人ならば理念や抽象の世界に逃れることができるが、黒人は自分の肉体を考えずにはいられないのだ。(19)

「今日でもリヨン大学の学生食堂では褐色のアフリカ学生は、「ミルク色珈琲」とよばれ、黒色の学生は「黒珈琲」と陰口を叩かれている筈である。彼等の中にはそのコンプレックスから逃れるため、時には幫間のように白人学生に追従し、時には彼等にたいして暴力的な反抗をみせる者が多い。この気分のはげしい移り変りは白人学生をして益々、彼等を不可解な存在にしまうのである」。この文章は、「黒い旧友」に登場するエピソードと重なりあう。

遠藤は、「国際学生、友の会」に出たときに、「次第に何かを大きな声をあげて叫びたくなった」という。「それは私を白人のようにではなく人間として取り扱ってもらいたいこと、そして黄色人として正当に交際してもらいたいことなのである」。白人学生たちにはそれがわからないのである。

遠藤はまた、その会に出席する黒人学生側の問題点も指摘する。出身が異なるアフリカ出身の二人の黒人学生は、白人学生がいない場所では、白人の植民地支配をとにも批判しあう。だが、白人学生と一緒に席になると、どちらの方がより西洋化されているのかを競い出すというのである。また、あるとき、一人の黒人学生が「奇妙な旋律で彼の部落の唄を歌った」。白人学生たちは笑いをかみ殺すのに必死だった。もう一人の黒人学生が冷たい視線でそれを見ていたが、痕から遠藤に「可愛いネグロ」になるうとしているのだと説明された。遠藤は、阿諛も反撥も、ともに同じ心理から生まれていると述べ、私たち黄色人もまた例外ではないと語っている。

以上のことから、このエッセーを読むと、四編の作品に登場する場面の多くが、遠藤自身が留学中に体験した出来事であることが明らかにになる。

白人世界に置かれた有色人種が胸に抱く屈折した感情を、遠藤はわがこととして体験し、そこから目を逸らすことなく噛みしめるところから文学者として出発している。一度作品に登場させた黒人学生を何度も再登場させ、同じ場面を何度も語り直すことを、遠藤は二〇年にわたり継続した。黒人に投影された有色人たる自己の問題は、それだけ重要な主題であったということができよう。世界には、白色人と有色人がいる。有色の人であるということが、日本人として生まれた自分の根源的事実であるとの認識が、フランス留学を経たカトリック作家遠藤の根底にはあった。「ポーラン・シリーズ」で、経済的自立とともに卑屈から尊大へと変容する黒人の姿を描くことで、ポストコロニアルの時代が進んでも、なお人間として相対することが難しい白人／有色人間の関係を、遠藤は改めて浮き彫りにしたのである。

- (1) 熊谷雄基「遠藤周作の初期作品にみる人種問題の視点——「アデンまで」「コウリッジ館」を中心に」東北大学『国際文化研究』一五号、二〇〇九年、一一三—一二六頁。Christopher L. Hill, "Crossed Geographies : Endo and Fanon in Lyon," *Representations*, 128, (2014) pp. 93-123. 両論文ともに、初期遠藤文学における人種問題を考察する上で「アデンまで」とともに「コウリッジ館」に注目している。だが、「コウリッジ館」は、シリーズの出発点となっている点が重要な点である。
- (2) 拙稿「遠藤周作とフランツ・ファノンの比較文化的的研究——フランス本国における有色人差別体験を中心に」放送大学院文化科学研究科修士論文、二〇一四年三月。ダイジェストは「遠藤周作とフランツ・ファノン——ポストコロニアリズムの視点から」『Open Forum』一一号、二〇一五年三月、一一〇—一二五頁。
- (2) 三浦朱門「わが友、遠藤周作を語る」『文藝別冊 遠藤周作〈増補新版〉』河出書房新社、二〇一六年、一三七頁。

(3) 瀧澤敬一「学生生活の今日」『第八フランス通信』岩波書店、一九五〇年、一四九—一五四頁。

(4) SEZ11、一二頁。

(5) 瀧澤敬一「白哲人の国に住んで」『第九フランス通信』岩波書店、一九五一年、二〇八—二二二頁。

- (6) SEZ 12、一二三頁。
- (7) 同右。
- (8) 同右。
- (9) 遠藤周作「作家の日記」(SEZ 15所収)を読むと、作品中の人名が、すべて実際に寮にいた人物からとられていくことがわかる。しかし、これらの人名が実際の人物とは全く異なる人間として造型されていることもまた了解される。確かに「アンドレ、ピエール、シモーヌ、モニック、こういう愚劣な学生と毎日つきあうのはたまらない。もう今日からおさらばにしたい」(一九五一年五月一日)といった記述を見出すことはできる。だが、これが一時的な感情であつたことは他の日の記述内容から明白であるし、同じ理由から、遠藤の怒りが彼らの人種差別に帰因するものではないことも明らかである。五月三〇日には、仲間と飲酒して帰宅したところ、夜の一時半というのに門の前でポーランとクリスチャンヌが変な声をあげて騒ぎになり、パジャマ姿の学生たちが部屋から出てきたことを愉快そうに書いている。また、同年七月一日の日記では、彼らが次々に寄宿舎から出て行くことを感傷的に悲しんでいる。
- (10) フランス旅客船内の等級区別がフランス階級社会の縮図であつたことについては、第一章参照。
- (11) SEZ 6、三四四―三四五頁。
- (12) 熊谷雄基「遠藤周作の初期作品にみる人種問題の視点――「アデンまで」「コウリッジ館」を中心に」『国際文化研究』一五号、二〇〇九年、一二二頁。
- (13) SEZ 2、二三―二四頁。
- (14) 反植民地主義の思想家フランツ・ファノンが遠藤に与えた影響を鑑みるとき、ポーラン・シリーズに登場する黒人イメージの変容に注目することの重要性はより高まる。
- (15) SEZ 8、一九二頁。
- (16) 同右、一九五頁。
- (17) 同右、一九九頁。
- (18) 同右、二〇〇頁。
- (19) SEZ 12、二二三頁。

### 第三節 『黒ん坊』——もう一つの黒人表象

#### はじめに

遠藤は、一九七一年に『黒ん坊』を刊行した(1)。初期の遠藤が、「白い人」(一九五五年)「黄色い人」(一九五六年)に引き続き「黒い人」を著して三部作としなかったのは、日本人にとつてのキリスト教をテーマとしていた遠藤に、黒人にとつてのキリスト教やイスラム教、あるいはアフリカの神話世界に対する関心も知識もなかったからである。もっともこれは、遠藤がヨーロッパの白人世界にのみ関心を抱き、その植民地であったアフリカに無関心だったことを意味しない。既述のごとく、「アデンまで」に先立ち、伊達龍一郎名義で書かれた第一作が「アフリカの體臭」だったように、アフリカは大きな意味を持っていた。だがそれは、近代西洋の植民地主義を逆照射するという意味に限定されていた。

「白い人／黄色い人」という初期遠藤の問題意識は今日でも意義を失っておらず、それを踏まえて前節に引き続き本作を考察することは価値ある試みといえる。遠藤の中間小説研究は純文学作品に比べて不当なまでに手薄だが、本作に先行研究がないのは、タイトルにまわりつく差別的語感が影響していないこともないだろう。黒人はこのテキストで、どのように表象されているのだろうか。

#### 一 織田信長の黒人従者「彌介」の発見

遠藤が『黒ん坊』のモデルである戦国期の黒人奴隷を知ったのは、一九六〇年代半ばのことである。『沈黙』(一九六六年)執筆のために切支丹史を研究するなかで、遠藤は松田毅一『南蛮史料の発見——よみがえる信長時代』(中公新書、一九六四年)を読み、織田信長に仕えたモザンビーク出身の黒人「彌介」に興味をそそられたのである(2)。「黒人の来日だが、松田毅一教授の『南蛮史料の発見』には、さまざまの面白い逸話があつて、その中に、日本にはじめて黒人がきたのは信長の時代であつたことを教えてくれる。『……』この黒人の話は私の興味を甚だひくが、あまり人も知らぬようだし、今日まで小説などでも描かれていないのではないだろうか。」と遠藤は記している(3)。次の文章もある。「私はかつて必要あつて、信長の頃に日本にやってきた南蛮宣教師の通信文をかなり読んだが、宣教師たちは秀吉や家康よりもはるかに信長を(彼等の功利的な意味もあるが)激賞している。／信長が生れて初めて黒人を見たエピソードなど、はなはだ愉快である。／信長が京都にいる時、宣教師が謁見に出かけたが、その時、この宣教師の従者に一人の黒人がまじっていた。(おそらく日本で最初に来た黒人であろう)」(4)。これらの文章から、遠藤が史料に現れた黒人に、強い印象を受けたことがうかがわれる。

それまでに、遠藤は黒人一般とどのような関わりがあつたのだろうか。最初はターザン映画だった(5)。この映画が、黒人を野蛮な存在として描き出していたことは今や常識といつてよい。現実の黒人を遠藤が見たのは、敗戦後の占領軍兵士だった。大連で幼少時代を過ごした遠藤にとつて、白人(ロシア人)は珍しくなかったが、黒人の姿はそこでは見られなかったのである。黒人との本格的な出会いは、留学のために横浜港から乗船したフランス船四等船室で一緒になった北アフリカの植民地兵であった。同船した井上洋治は青い顔で「クロンボがいる」。「俺たち、クロンボと一緒にだぞ」と言い(6)、見送りの柴田鍊三郎は、「お前、神戸に行くまでに、あいつ等に食われてしまうぞ」と言った(7)。一九五〇年の出来事を一九六七年に回想したものであるが、「クロンボ」の食人幻想



が、半ば冗談としてこの時期まで語られたことがわかる。「戦後まもないその時まで我々日本人は米国の進駐軍にまじっている黒人のほか黒人を知らなかったし、まして褐色の白い入墨をしたアフリカ人など見たことはなかった。柴田さんの言葉はとりもなおさず私たちの気持そのものだった」と遠藤は記している。だが、同室で過ごすうちに気心が知れ、彼らに対する認識は大きく訂正されることになったのは既述のとおりである。ちなみに、単行本『黒ん坊』カヴァーの題字は柴田である。遠藤は二〇年前の柴田の言葉を覚えており、この小説は柴田への遅い返札でもあったのだ。なお、装幀挿画は秋野卓美だが、別の画家による角川文庫版、遠藤周作文庫版と異なり、表紙に黒人の絵はない(8)。

次に遠藤が接したのは、リヨンの下宿にいた北アフリカ出身の黒人学生ポーランドだった。大学にも黒人学生がいた。遠藤は前者をモデルにして短篇「コウリッジ館」(一九五五年)を書き、後者からは、評論「有色人種と白色人種」(一九五六年)を書いた。小説と評論で、白人世界に置かれた黒人の現実を浮き彫りにしたのである。つまり、戦国時代の黒人と出会う以前に、遠藤には黒人と、かなり長いかかわりがあったのである。頭の片隅には、常に黒人の存在があったと思われる。フランス本国の黒人は、自分の目で見て知っていた。しかし、日本国内の黒人についての知識は乏しかった。それゆえ、日本史の重要な時期に、キリスト教宣教師が連れてきた黒人がいた事実を知り、強い興味を持ったのであろう。

『黒ん坊』が連載された一九七〇年には、大阪で日本万国博覧会が開催されている。遠藤は、坂田寛夫、三浦朱門とともに、「目と手——人間の発見」というテーマを掲げたキリスト教館のプロデュースを務め、この国家的プロジェクトに深く関わった。カトリック教会とプロテスタントが合同で行う事業であることに共感したからであった。日本万国博覧会は、一九六四年の東京オリンピックに継ぐ、アジア初の博覧会であり、日本を含む世界七ヶ国が参加した。アフリカからも、ザンビア、アルジェリア、エチオピア、象牙海岸(現コートジボワール)、タンザニア、ガーナ、マダガスカル、ウガンダ、ガボン、中央アフリカ、ナイジェリア、モリシヤス、シエラレオネの諸国が参加している(9)。万博のテーマが「人類の進歩と調和」であったように、科学技術とともに世界は進歩しており、それが人類を幸福にすると当時の日本人は考えていた。日本は「先進国」の一員であり、アフリカは明らかに「後進国」だったが、遠いアフリカが、一気に身近に感じられる機会ではあった。このイベントへの関与が遠藤を刺激し、本作の執筆を強く促したのかもしれない。

## 二 もう一人の「おバカさん」

遠藤はこの作品を、良くいえばドタバタ喜劇的な、悪くいえば低俗でくだらない通俗小説として書いた。江戸の戯作文学に見られる笑いの文学伝統に、遠藤は親近感を抱いており、世の「ユーモア文学」という言葉にも「クソマジメな作品にたいして劣っているという感じがひそんでいる」と反撥していた(10)。したがって、笑いの文学を書こうというのが積極的な理由だったと考えられる。外国人の内面を描くことに畏れを感じていたので、黒人の内面を描くことに困難を覚えたことも、消極的理由としてはあっただろう(11)。

第一章「異形の者」で、宣教師ヴァリニャーノの手で信長の前に参上したツンパ・フランソワ・アシジ・ステファノ・オウグスチーヌは、芸を求められる。「小鼓を手にとると黒人は子供のように嬉しそうに眺め、指で二、三度、音をたしかけてためしてから、急に腰を前後にふっっておどりはじめた。意味のわからぬ言葉で唄を歌う」。「ブー、ブー、ブー／ブー、ブー、ブー」「高く、低く、強く、弱く、リズムをつけて、得意満面の彼は、尻をもって音を奏していたのである」。演劇的に誇張した所作が描かれるばかりで、作者は彼の内面を描かない。ツンパは、終始一貫、情けなく、ぐうたらで、滑稽で、笑われる対象として描かれている。「このツンパは気が弱く、臆病で、ブンガ族の集落にいた時も、狩りでは役に立たぬゆえ、奴隷商人に売られたのである。たらふく食べてぐうぐう眠り、陽気に唄を歌うことが彼の夢であった」。故郷でも落ちこぼれだったという設定である。

「笑われる他者」としての白人を、遠藤は『黒ん坊』の一年前に書いている。評価が高い「おバ

カさん」(一九五九年)がそれである。主人公ガストンは、ナポレオンの血を引くフランス人という設定だが、子供のように純粹なところがあり、ばかにされながらも、愛すべき人物として描かれている。ガストンが子犬を連れている代わりに、ツンパは象を従えている。彼らが笑われるのは、自分が投げ込まれた文化のコードを子供か愚者のように侵犯するからである。「大きな子供」のようなところが彼らにはある。違いはただ、白人か黒人かという相違である。そして、ガストンもツンパも、カトリック信徒なのである。

ツンパは「総身黒うて牛のごとくだが、心は雪の名のごとく白い」とされている(第三章「野望の人々」)。近代という時代が定式化した図式は、白人が差別する側で、黒人は差別される側であった。また、ガストンがやってくる日本は白人世界との戦争に敗れて間もない東京だが、ツンパがやってくるのは戦国時代の日本である。ガストンは人間として遇されているが、ツンパはほとんど動物として扱われている。第七章「証拠」では、ツンパは文字通り「見世物」になる。笑う側は文明に属し、笑われる側は野蛮に属している。たといそれが言語的虚構にすぎないとしても、実際にそれが作動する歴史的現実がある。

読者が白人ガストンを笑う場合に感ずる心理的優越感と、黒人ツンパに笑うと場合のそれとは同じではあるまい。ガストンは、白人であるにもかかわらず滑稽なのであり、ツンパは黒人であるがゆえに滑稽なのではないか。外国映画や小説などに登場する黒人の表象が、劣等の刻印を押されたステロタイプなものであり、そうした白人のまなざしを、われわれも内面化してきたからである。それが「有色の帝国」(12)の残存意識に繋がることを、今日のわれわれは気づいている。裏を返せば、作者も含めて当時の日本人は、それが自覚されていなかったということではないだろうか。しかし、本当にそうなのか。

遠藤は人種問題を我がこととして理解している作家であり、発表の舞台となった『サンデー毎日』も、リベラルな週刊誌であった。『黒ん坊』が連載され、単行本化され、二年後には文庫化までされたのは、作者も編集者も読者も批評家も、要するに当時の日本人全体が、それを全く問題視しなかったことを証している。『黒坊物語』の題で刊行されたこともある「ちびくろサンボ」が黒人蔑視とされ、各社一斉に絶版となるのは一九八八年である(現在は入手可能)。このできごとの社会的背景としては、日本国首相や政調会長の発言に対するアメリカ黒人議員連盟の抗議もあったと指摘されている(13)。

角川文庫版の解説者は、ドイツ文学者小松伸六である。彼には「ドイツ文学におけるフモール」(『早稲田文学』一九七七年一月)があるが、『黒ん坊』の笑いに関する比較文学的考察はない。彼はこの作品を「奇想天外な時代小説」といい、「二十世紀の日本でも、田舎に黒人があらわれたら、やはり目につくのではないだろうか。それは人種差別というようなものでなく、くろいもんだなあ、世界は広いんだなあ、といった素朴な驚きである」と記す。トーマス・マンやナチスに抵抗したケストナーの翻訳がある人だが、小松はこの作品に登場するルイス・フロイスやオルガンチーノ神父を「毛唐」と記している驚かされる。小松がいうとおり、ツンパが「善良で無垢な自然児という設定である」ことは確かだが、黒人をそのように表象することには、西洋社会の長い伝統がある。小松の解説は、黒人を取りまく歴史的文脈を一切省みないもので、啓発されるものがない。

『黒ん坊』の解説を書いた三年前、小松は遠藤の小説「協奏曲」の文庫版解説を執筆しているが、ここで彼は驚くようなことを記している。イタリア人と結婚した小松の次女は、在住する南チロル(旧オーストリア領、現イタリア領特別地区ピティノ)で、現地の子供たちからよく唾をかけられたというのである。また、一九六〇年代の終わりに小松自身がミュンヘン大学構内で「アジア人、下宿おことわり」というビラを見たことがあったという(14)。西洋白人世界の人種主義(有色人差別)について、そのような体験を持つ人であるので、『黒ん坊』に関する記述は、ことさら遺憾に思われるのである。もつとも小松は「単一民族、単一言語の日本ではあまりないことだが」と記しているので、西洋の人種主義については理解しているも、日本の人種主義に対しては無自覚だったのかもしれない。「単一民族、単一言語」であるがゆえに、有徴の者に対する排除は苛酷であるとも考えられるからで

ある。

遠藤に評論「有色人種と白色人種」があることはすでに述べた。フランス留学体験を踏まえ、白人世界に置かれた黒人のリアルな状況を冷静に観察して分析を加え、そこから有色人種たる日本人の在るべき姿について真摯な思索を展開している。実は小松は「協奏曲」解説で、遠藤のこの論考にも触れていた。彼は遠藤のフランス船内で受けた差別体験に触れ、ヨーロッパには「こんな苛酷な人種差別があった。いや、多分、現在でもあるだろう」と記しているのである。

人種主義に関するそのような文章を書いた作家であるにもかかわらず、遠藤が黒人を笑われる存在として描いたのはなぜなのか。ここでわれわれは、ツンパだけが笑われる対象なのではなく、秀吉のような権力者も、読者の笑いを誘う存在として描かれていることに着目しなければならない。

### 三 滑稽本、ラブレール、スカトロロジー

『黒ん坊』では、荒唐無稽の哄笑とスカトロロジーが全編に溢れている。これらは遠藤の純文学系列の作品群においては徹底的に抑圧されている。当時、遠藤は『沈黙』に続く純文学小説として、『死海のほとり』に結実する連作を執筆していた。新約聖書の福音書でイエスが一度も笑わないように、『死海のほとり』は笑いの欠落した深刻な小説である。さきに記したとおり、笑いの文学的伝統への親しみが遠藤にはあったが、キリスト教と笑いとの親和性は薄いと考えていたようである(15)。「日頃、聖書に親しんでいるはずのキリスト者自身が、聖書のユーモアについて、ほとんど知るところがないのが実情である」という宮田光雄の言葉は、遠藤にもあてはまるようだ(16)。純文学作品で抑圧された哄笑を、中間小説で解放したいと考えたのではないか。『黒ん坊』の笑いの世界は、『死海のほとり』執筆が強いる緊張による硬直から、精神の柔軟性を護ってくれるだろうから。

さて、荒唐無稽の哄笑とスカトロロジーとはいかなるものか、ツンパが信長の前で放屁しながら踊り狂う第一章から、象が肥溜から人糞を吸い上げ、秀吉ら五〇騎の兵に吹きかける最終章のスペクタクルまで、具体例を拾い出すことは容易い。第一章で、槍術の達人一柳俊之介が、三年の修行の末に得た免許皆伝の封書に「心なき、身にもくさは知られけり／湯気立つ糞の秋の夕暮」とあるのは序の口である。豊臣秀吉を寂光が訪ねる場面が第六章「覇者」にある。そこで秀吉の漢詩(狂詩)が三首紹介される。句点を補って順に示せば「道 道 道 脱糞。無紙 以手 拭。惜之 而食之」。「欲垂臨雪隠。雪隠中有人。咳払尚未出。幾度吾身震」。「椀椀椀椀亦椀椀。亦亦椀椀亦椀椀。夜暗何匹頓不分。始終只聞椀椀椀」となる(送り仮名は省略)。秀吉の呆れた「漢詩」に読者は笑うことになる。第四章「密使」では、桑実寺に残された寂光の書が紹介される。曰く「老翁 飲酒 醉死。老婆 驚愕 頓死」と。これを作者は「みごとな字であり、みごとな詩である」と評するのである。スカトロロジーと狂詩といえば、蜀山人大田南畝にも『通詩選笑知』に「屁臭」と題する狂詩がある。曰く「一夕爛曝。便為腹張客。不知透屁音。但有遺失跡」と(17)。

遠藤のスカトロロジーに、江戸の滑稽文学との親和性を見るのは容易である。旧制中学時代の愛読書だった十返舎一九の滑稽本『東海道中膝栗毛』にも、初篇の冒頭間もない箇所以下に以下の狂詩がある。「雖非亡命可奈何。借金不報擗尻過。夫居本貫掛乞衆。将是川向成干戈」(18)。戦争が始まり、弥次喜多的人間を国家が許さなくなつたころ、この本はふたたび輝きを増して遠藤の前に現れた。あるとき「自分は戦争中、日本人を信じたために膝栗毛を読みました」と渡辺一夫から聞いた遠藤は、我が意を得たりと思つた(19)。

その渡辺が戦争中に訳したフランソワ・ラブレール「ガルガンチュワとパンタグリユエル 第一之書 ガルガンチュワ物語」第一三章の「短詩」は以下のごとくである。「先日脱糞痛感。未払臀部借財。同香而非同香。濛気芬々充滿。何人許諾欣然。希携行我佳人。善哉善哉。欣然塞小用孔。野人常不習礼。佳人敢弄纖指。得探我峽間穴。善哉善哉」(20)。訳者略註で渡辺は「全くの戯訳」と記すが、遠藤の狂詩は、『東海道中膝栗毛』を介して戦時中の苦衷を肝胆相照らした渡辺への、返礼でもあつたはずである。渡辺訳ラブレールの笑いは「心の底から人生を肯定する」エネルギーに満ちた笑いだと、

遠藤は考えていた。それは近代文学が好んだ「嗤笑や風刺の笑い」と違い、人間を孤独をより深めるものではなく、疎外された人間と世界との結びつきを回復させるものなのである(21)。

『東海道中膝栗毛』には、女性の尊厳を傷つける記述が多いが、全編に溢れるスカトロロジー感覚と、そこから生じる笑いが特徴である。江戸のスカトロロジーと笑いは、遠藤が帰依したキリスト教の倫理におよそ制約されぬ、端的に卑俗で下品な世界だった(22)。その下品な笑いの世界、「オコ(烏漕)」の世界に、近代文学が切り捨てた可能性があると遠藤は考えていた。「今の日本の純文学雑誌にはオコの文学伝統をまったく拒絶はしなくても軽べつするような気風が巖としてある」(23)のを遠藤は腹立たしく思っていた。

講談研究家田邊孝治は、遠藤周作文庫版解説で、遠藤が戯作者であり、同時に「大きな苦悩を秘めた現代の文学者である」と述べ「氏の内部には、この二者が奇妙な形で、しかし実に巧妙に混在してゐるとしか思へない」(24)とする。これは遠藤文学全体をロマネスク教会建築に喩えてみればよい。聖人がいる重厚な正面が純文学系列の作品であり、奇妙な動物や滑稽な身振りの世俗的人物彫刻が見られる廻廊が中間小説である。教会が正面だけでできていないように、遠藤文学全体は、多くの中間小説で支えられている。したがって、中間小説の重要性に無自覚では、遠藤文学の全貌を明らかにすることはできない。

さて、連載当時の日本は、今日とは異なり、都市部でも田畑には肥溜があり、家庭用汲取式便所も多く、列車の便所も新幹線以外は線路に直接撒く開放式で、糞尿に関する笑話は誰にも身近だった。しかるべき時と場所をわきまえない放屁や脱糞は、場違いなものゆえ笑いを誘う。遠藤はカトリック信徒であったので、神学的知見を参照すると、スカトロロジーという問題設定が可能なのは、理性と肉体を持つ人間においてのみであることが浮かび上がる。トマス・スカトリックの世界観に照らせば、天使は肉体を欠いた純粹に理性的な存在であり、動物は肉体を持つが理性を持たない存在である。自然界の動物には、場をわきまえた排便はありえず、放屁に羞恥心を覚えることもない。また、スカトロロジーは、人間の天賦的要素ではなく、動物的要素を強調する思想でもある。この作品においては、ともすれば自分を天使と同一視する「天使主義的虚偽」(25)に陥りがちな近代的人間、それを牽制のための文学的手法として、スカトロロジーが機能している。そもそも、神学的には、動物という類のなかに、理性を有する動物(人間)と、理性を持たない動物(獣)という種があると考えるべきなのである(26)。このように考えると、作者がどこまで意図していたかは不明だが、スカトロロジーをもってこのテキストが表現しようとしているものの一つは、動物を人間以下の存在とする西洋的世界認識への揺さぶりとも解釈できよう。

#### 四 神、天使、人間、動物

前節で人間と動物について若干を述べたが、神―天使―人間―動物、というキリスト教的階層構造の図式を参照することは、遠藤文学を考える上で有効である。本作では、神―天使の部分が隠されており、人間と動物との関係が顕在化している。人間のなかに、近代西洋はさらに、白人男性―白人女性―有色人男性―有色人女性という階層を設けた。これはそのまま権力構造となっている。ツンパは、動物に近い存在として造型されているが、それは即ツンパが「野蛮」であるということを必ずしも意味しない。遠藤は動物と人間の間を、単純な上下関係でとらえてはいないからである。

遠藤はキリスト教徒ゆえに、神―天使―人間(白人―黄色人、男性―女性)―動物という西洋的序列意識に違和感を抱いた。そこで、「月光のドミナ」では、強い白人女性と弱い日本人男性との権力関係を描き、「男と猿と」(一九六〇年)では、労働者階層と知的障害者の白人男性、日本人留学生、公園の猿を登場させて、それぞれの流動的な権力関係を描いた(27)。そして『黒ん坊』の後には、『彼の生きかた』(一九七五年)で、西洋の動物観とは根本的に異なる、日本人とニホンザルとの濃密な関係を描き出す(28)。

つまり、ツンパと周囲の日本人たちとの関係も、丁寧に分析する必要があるのだ。ツンパと上下関

係ではなく横の関係を持つのは、身寄りのない少年（乙吉）、女性（雪）、そして動物（象）である。日本人のなかにも、織田信長のような権力者が頂点にいて、底辺には無名者の群がいる。ツンパはこの作品のなかで、日本人一般から笑われる存在なのではない。彼を虐げるのは権力者であり、登場人物たちは、彼と同列か、ほとんど上下関係を感ぜさせない立場なのである。ツンパは確かに「笑われる他者」ではあるが、ただひたすら笑われるだけの存在ではない。読み進めるうちに理解されてくるが、彼は、共感と友愛の対象でもある。ツンパは「われわれと違う」存在から「われわれと同じ」存在へと変容していく。それゆえ、第一節での主張は次のように言い直さねばならない。この小説は、一見すると、白人を上、そして黒人を下にみる近代西洋の支配的な語りを無批判にミメーシスしているかに見えるが、徐々にそれが対抗的な語りになっていくのである、と。

「江戸時代はじめの権力者は、秀吉の猿や諸大名の猛犬のような好みが強かったようだ。[…:]」徳川家康は、オランダ人から虎の子とインコとを贈られて、これを江戸にいるふたりの孫、のちの家光とその弟に遣わした。「[…:]」ペットになりにくいものを飼うのは、海外の地からの入手品のなかでも生きものは権力を誇示するのにとくに有効だったからでもあり、また常人には畏れられる動物を飼い馴らすことの力を自他ともに明らかにするからでもあった」と塚本学は記している（29）。信長が彌介を側に置いた理由にも、黒人⇨動物による権力誇示の意味合いがあつたであろう。

本作では、ツンパが属する世界で、人間と動物との境界が曖昧になる。第八章「怒れ、黒ん坊」には、いつしかツンパの仲間となる忍者佐助が、ツンパが「黒豹のような身軽さ」で岩から岩へと溪流を跳ぶ姿に驚く場面がある。「南の阿弗利加国など知らぬ佐助には、仲間と草原を走り、断崖を駆けたツンパの「幼年時代を想像しえない。食糧となる獣や鳥を追ってジャングルに小屋をつくって一夜をあかす黒人の生活を知らない。佐助が山での修行によって得たものもツンパは狩や毎日の生活から学んでいたのである」。未開で野蛮なアフリカというステロタイプが再表象されているとも見られるが、ツンパの運動神経に感心する佐助が、「犬男」と別称されていることは見逃せない。佐助の師は動物なのであり、ここでは通常考えられる立場が転倒している。動物的存在ではないだろうか。佐助がツンパに賛嘆する根拠となる。そもそも動物は、人間以上に誇り高い存在なのではないだろうか。

図式的にいえば、遠藤は、人間と神との関係を純文学作品で追求し、人間と動物との関係を中間小説で追求した。カトリック作家と神をモチーフにした『死海のほとり』は『黒ん坊』と繋がり、霊長類学者とニホンザルをモチーフにした『彼の生きかた』にも繋がっている。『彼の生きかた』で遠藤は、「同伴者イエス」（30）ならぬ「動物の同伴者」（31）としての人間を描き出し、神―人間―動物を捉える透徹したまなざしを獲得するのである。

## おわりに

『黒ん坊』というタイトルは、読者を身構えさせる。黒人に対する社会的まなざしに変化し、この言葉自体がステイグマ化されているからである。しかし「くろぼう」「くろんぼう」「くろんぼ」といった言葉自体、長い歴史を背負っており、『日葡辞書』や節用集、『倭訓栞』を参照しても、その示すところは現代とは大いに異なるのである（32）。

この作品が黒人の尊厳を傷つける作品でないとは言いつてもいい。人種問題の繊細さに理解がある作家が、細心の注意を払って書いた作品には見えないからだ。だが、単純な黒人蔑視だけの小説ともいえない。『黒ん坊』は、研究者にさまざまな視点からの熟考を迫り、容易な合理化を拒むテクストなのである。本稿はその糸口となるべき一考察にすぎない。

生涯をかけて遠藤が取り組んだ、日本人にわかるキリスト教の探求とは、西洋的「普遍」の価値観を相対化することでもあり、そこには感受性の西洋化（『植民地化』への抵抗も潜んでいた。西洋文化が持つ強力な同化作用への抵抗は、本作では、江戸のスカトロロジーを介して、肉体を持つ動物という人間認識の強調と結びついて表現された。人間と動物の序列すら流動的なこの世界では、驚くべきことに、世俗的な序列も、肌色の違いによる差別も、「神」の下での人間がそうであるように、完全

にその意味を喪失するのである。

- (1) 初出は『サンデー毎日』一九七〇年六月二一日号—一九七一年三月二八日号。一九七一年五月に毎日新聞社から単行本化。一九七三年六月に角川文庫、一九七五年二月に講談社遠藤周作文庫版刊行。新旧『遠藤周作文学全集』（新潮社）には未収録。本文は、冒頭の「天正八年」が同九年に遠藤周作文庫版で変更されたほかは、踊り字の表記など些細な異同があるのみで、文章の大幅な変更はない。
- (2) 彌介については藤田みどり『アフリカ「発見」——日本におけるアフリカ像の変遷』岩波書店、二〇〇五年、第一章に詳しい。「彌介」の名は『家忠日記』初出という。
- (3) 遠藤周作「遠くから来た人」『異邦人の立場から』日本書籍、一九七九年、二八六—二八七頁。初出は『芸術生活』一九六四年二月。
- (4) 遠藤周作『ぐうたら人間学』講談社、一九七二年、五五—五六頁。これは『夕刊フジ』（一九七二年一月—五月の連載「狐狸庵閑話」をまとめたものである。
- (5) 遠藤周作「ぼくたちの洋行」『ぼくたちの洋行』講談社、一九七五年、三八—三九頁。初出は『小説新潮』一九六七年一〇月。ターザン映画における表象のアフリカについては、藤田前掲書、第四章第三節が詳細をきわめている。
- (6) 同右、三五頁。井上は当時カルメル会修道士。司祭となり遠藤と終生親しかった。
- (7) 同右、三六頁。なお『落第坊主の履歴書』（文春文庫、一九九三年、一三九頁）、及び『忘れがたい 場所がある』（光文社文庫、二〇〇六年、八九頁）にも同種の記述がある。慶應義塾大学卒業の柴田は「イエスの裔」で、一九五二年に直木賞を受賞する。
- (8) 毎日新聞社版は一八枚の挿画を収録する。ステロタイプな黒人の描き方を、秋山はどの画でもしていない。黒人を描くのは六枚。二枚は遠景か後姿。戦災孤児一六人の笑顔に囲まれたツンパの全身を描いた二〇七頁の画はとりわけ印象的である。
- (9) 『日本万国博覧会公式ガイド』日本万国博覧会協会、一九六九年参照。
- (10) 遠藤周作「笑いの文学よ、起れ」SEZ13、三六〇頁。初出は『東京新聞』一九六五年九月一六、一七日。
- (11) 遠藤周作「外国人を書く」SEZ13、三二七—三二九頁。初出は『文學界』一九八二年一月。「小説で外国人の宣教師を登場させたことが再三あった。しかしその時、小さな私はいつまでか外国人がわかるかという不安がつきまわっていた」。
- (12) 小熊英二『日本人の境界——沖繩・アイヌ・台湾・朝鮮 植民地支配から復帰運動まで』新曜社、一九九八年、六六一—六六七頁参照。小熊は、有色人種の植民地帝国だった日本を「有色の帝国」という言葉で概念化した。白人への憧れと反撥というアンビヴァレントな感情は、現代にも残存すると小熊は指摘している。
- (13) 杉尾敏明・棚橋美代子『焼かれた「ちびくるサンボ」——人種差別と表現・教育の自由』青木書店、一九九二年、三四六頁。本書は焚書から絶版に至る詳細を記す。
- (14) 小松伸六「解説」遠藤周作『協奏曲』講談社文庫、一九七九年、二四四—二四五頁。
- (15) 小川国夫、加賀乙彦、高橋たか子といったカトリック作家の作品にも、笑いの要素は乏しく、随筆等でも、キリスト教と笑いを結びつける思索は見当たらない。
- (16) 宮田光雄『キリスト教と笑い』岩波新書、一九九二年、七二頁。
- (17) 『大田南畝全集』第一巻、岩波書店、一九八五年、四一六—四一七頁。永井義男『江戸の糞尿学』作品社、二〇一六年、一一一頁に教示された。
- (18) 『新編日本古典文学全集81 東海道中膝栗毛』小学館、一九九五年、五二頁。
- (19) 遠藤周作「私の『膝栗毛』」SEZ13、二二九頁。初出は『日本古典文学全集』48 月報、小学館、一九七五年。遠藤は中学校の国語教師からこの作品を教えられた。
- (20) フランソワ・ラブレール『第一之書ガルガンチュワ物語』渡辺一夫訳、岩波文庫、一九七三年、八九—九一頁。同書の単行本初版刊行は戦時下の一九四三年である。
- (21) 前掲「笑いの文学よ、起れ」SEZ13、三六一—三六二頁。
- (22) 遠藤が深い関心を抱いたマルキ・ド・サドにもスカトロロジーはあるが、無神論者サドの場合は、カトリシズム

との鋭い緊張関係を抜きにこれを考えることはできない。

- (23) 前掲「笑いの文学よ、起れ」SEZ 13、三六〇頁。
- (24) 田邊孝治「戯作者狐狸庵——解説」『遠藤周作文庫・黒ん坊』講談社、一九七五年、四八七頁。この解説で講談本と本作との関連に踏み込んでいないのは遺憾である。
- (25) モーティン・アドラー『天使とわれら』稲垣良典訳、講談社学術文庫、一九九七年、第四章参照。人間は人間を語りながら、実は天使について語り、それに気づかない。
- (26) 稲垣良典『天使論序説』講談社学術文庫、一九九六年、一八三頁。稲垣がこの区別を、生物学的分類ではなく哲学的分類として語っていることに注意が必要である。
- (27) 第四章第一節及び第九章第一節参照。
- (28) 第九章第二節参照。
- (29) 塚本学『江戸時代人と動物』日本エディタースクール出版部、一九九五年、二一九―二二〇頁。生類憐令など、近世日本人と動物との関係には興味深いものがある。
- (30) 「同伴者イエス」への私の考察は、第九章第四節参照。『死海のほとり』については、第八章第一節も参照。
- (31) 『死海のほとり』での同伴者イエスの幻影と、『彼の生きかた』での猿を従えた主人公との照応については、第九章第三節参照。
- (32) 藤田前掲書、一八一―一九頁。四八―四九頁。六〇―六二頁。「黒坊」が意味する範囲は時代により変化し、安土桃山時代と江戸時代でも異なっている。

## 第四章 ヨーロッパ——白人の表象

### 第一節 「月光のドミナ」——日本人男性と白人女性（1）

#### はじめに

前章では遠藤文学における黒人表象を考察したが、本章では白人表象について考察する。最初に「月光のドミナ」（一九五七年）を取り上げ、以下、「ジプシーの呪」（一九五九年）、「変な外人たち」（一九六六年）、「ワルシャワの日本人」（一九七八年）、「カプリンスキー氏」（一九七九年）を取り上げることで、一九五〇年代から一九六〇年代、そして一九七〇年代へと、白人表象が徐々に変容していく過程を考察する。

一九五八年四月、遠藤は『海と毒薬』（文藝春秋新社）を刊行した。この作品で遠藤は作家としての地位を確固たるものにしたとされる。この小説は、『沈黙』（新潮社、一九六六年）以前の彼の代表作であった。この作品の陰にひっそり隠れるようにしてあるのが、同年三月に出版された短編集『月光のドミナ』（東京創元社）である。表題作「月光のドミナ」（『別冊文藝春秋』六〇号、一九五七年一〇月）は、論じられる機会に乏しいテクストだが、初期遠藤周作の問題意識を考える上で見過ごすことができない。

フランス留学を終えて、小説家として再出発した遠藤周作には、日本人が直面したくない現実に敢えて直面しようとする決意があったように思われる。くりかえし述べているように、「アフリカの體臭」（伊達龍一郎名義）「アデンまで」「白い人」と続く初期作品群に共通する主題——それは近代西洋の植民地主義と、白人種が有色人種に対して抱く優越意識の糾弾だった（1）。「神々と神と」（一九四七年）という比較文化的評論から批評家として出発した遠藤が、フランス留学で経験したのは、西洋人の有色人差別であった。心温まる扱いを受けることもあったが、彼らの差別的言動に不愉快な思いをすることも多かった。「愛」を説くキリスト教の「本場」に行くという期待が大きかっただけに、フランス人の心ないふるまいには、遠藤を思想的に動揺させるものがあったのである（2）。

敢えて図式化すれば、神——天使——人間——動物、というトマス・カトリックの世界構造、その「人間」のなかに、さらに近代西洋が人種的階層区別を設けて有色人を見下していることを、彼はフランスで体験的に感じ取った。すなわち、具体的な生活の各場面で出現する差別のまなざしの背後には、頂点に白人男性を置き（最頂点にあるのは英仏男性である）、以下、白人女性（そのなかの頂点は英仏女性）、有色人男性、有色人女性、アボリジニ、オランウータン、野獣と続く階層構造があることを肌で理解したのである（3）。

欧米人が無意識のうちに持つそうした人間認識のテンプレートは、当時の日本社会では強調されることがなかった。戦時中に喧伝された「鬼畜米英」は、戦後は「誤解」であったことにされたし、ヨーロッパ、特にフランスは、「レジスタンスの国」として過剰に理想化されて見られていた。ファシズム体制から解放された直後の日本人大多数にとっては、それも無理からぬことであった。だが、現



実のフランス社会を経験してきた遠藤は、そうした日本国内の言論状況に、違和感を抱かざるを得なかった。彼はその違和感を誤魔化さず、むしろそれを創作のモチーフにすることから、作家として出発したのである(4)。

先の人種的ヒエラルキーに照らせば、「月光のドミナ」において遠藤は、上から二番目と三番目の関係、すなわち白人女性と有色人男性との権力関係にスポットライトを当てて、そこを拡大して描き出したのである。

## 一 サディズム——権力関係の隠喩としての

「月光のドミナ」の分析に先立ち、芥川賞を受賞した出世作「白い人」(一九五五年)を簡単にふりかえっておきたい。ここでは、「月光のドミナ」を分析するに当たり重要な鍵となるサディズムの問題が、一つの間人観として提示されているからである。初出では、タイトルに「ユーロペアン」とふりがなが付けられていた(5)。初出誌、最新全集ともに本文中の「文明人」という語に「ユーロペアン」とルビが振られていることから、「白人文明人」という図式を、初出の表題には見て取ることができる。

主人公は、ドイツ人の母親とフランス人の父親を持つ男性で、ヴィシー政権下の対独協力者である。彼は、聯合軍の侵入が目前に予期されたリヨンで、軍紀が乱れたナチス兵士たちに言及しながら、「聯合軍であろうが、文明人であろうが、黄色人であろうが、人間はみな、そうなのだ」と手記に記す。サド侯爵の「かくて人間の血は赤くそまり/その目は拷問の快楽に赫き」という言葉を引用した後で、少年時代に家の窓から女中イボンヌが犬を折檻する姿を見て昂奮を覚えたことを思い出し、これこそが「人間が他者に対する真実の姿勢」だと思うと記す。主人公がそう考えるのは、少年時代に父とアデンに行ったとき、アラブ人少年に金を与えて暴行を加え、性的昂奮を覚えた体験があったからである。

サディズムが、ここでは主題ではなく手段として機能している。すなわち、この小説で遠藤は、西洋人の持つ他者との関係認識を、支配/被支配という権力関係として提示しようとしているのであり、そうした関係を誇張拡大して見せる仕掛けとして、サディズムが利用されているのである。「文明人であろうが、黄色人であろうが」と書かれてはいる。しかし、このように記す主人公は西洋人であるから、作者は、西洋人の関係認識として、このような図式を示しているのである。「ドイツ人」(ナチス兵士)の「フランス人」(市民)への暴力、「フランス人」(女中)の「動物」(犬)への暴力、「フランス人」(主人公)の「アラブ人」(少年)への暴力という三者を連結することで、西洋人が、他国人、異民族、動物に対してふるう権力の隠喩として、サディズムが利用されているのである。

第一作「アフリカの體臭」では、ジブチの「淫売宿」で、白人の元女優コリンヌ・リュシエールが黒人の少年を鞭打つ覗き部屋が描かれていた(6)。サディズムを西洋人の人間観と重ね合わせる思考は、小説家として出発した当時からあったのである。マルキ・ド・サドへの関心は、当時の日本では乏しかった。遠藤は、澁澤龍彦とともに、サドへの強い関心を覚えていた少数派であった。遠藤は、単行本『月光のドミナ』刊行の翌年に「サド伝」(『群像』一九五八年九月・一〇月)を著している。留学時代に、パリでポーヴォールなどがサドに関心を示していたことの影響も考えられる。彼女の『サドは有罪か』は、一九五四年に室淳介訳で新潮社から翻訳が出ていた。カトリック作家遠藤は、無神論者サド侯爵というフランス文学史上異色の存在に強い関心を惹かれた。それが近代西洋植民地主義の社会的現実と結びついたのは自然である。留学中、「文明人」と「黄色人」との関係に、遠藤は単なる「支配/被支配」という構図以上のものを感じ取っており、それを文学的に圧縮して描き出す原理としてサディズムを再認識したものと考えてよかろう。

## 二 マゾヒズム——序列的人種観と男女間の権力構造

回想で登場するアラブ人（すなわち「褐色の白人」）を除けば、登場人物全てが白人だった「白人」と異なり、「月光のドミナ」では日本人が登場する。若い白人女性に暴力をふるわれることで性的昂奮を覚える男性が主人公なのである。ここではサディズムではなくマゾヒズムが前景化されている。その意味で、この小説は「白い人」と対になる作品と捉えることが可能である。ここでも、マゾヒズムは、権力関係を誇張拡大して示すための方法である。小説「黄色い人」と「白い人」は、「神々と神と」という比較文化的視点からは対になる作品だが、西洋人と日本人との権力構造という、本稿の視点に立つならば、自ずと違う見え方になる。「神々」には「神」を、「白い人」には「黄色い人」を、そして「サディズム」には「マゾヒズム」を、遠藤はそれぞれ対置する。さまざまな次元において、複眼で世界を見ようと心がける姿勢が、遠藤にはあった（7）。そして「月光のドミナ」においては、さらにひねりを利かせ、「女性的な日本人男性」と、「支配的な西洋人女性」という設定を試み、両者の関係を劇的に提示するために、マゾヒズムを導入するのである（8）。

なお、「月光のドミナ」が発表されたのは、沼正三の「家畜人ヤプー」『奇譚クラブ』一九五六年一月—一九五八年四月）が連載されていた時期に当たる。ドイツ人女性と日本人男性の恋人同士が未来世界に行く。白人女性が支配層であるその社会で、最下層に位置する日本人男性が「家畜」化されるというこの小説は、三島由紀夫など、遠藤の周辺でも注目を集めていたことから、遠藤も読んでいた可能性がある。しかし、両者の発想には類似がなくもないが、描き出している小説世界は異なっているし、「月光のドミナ」の場合、「家畜人ヤプー」と違って、遠藤の他の小説群との関係を無視して単独で考察するだけでは、十全な理解をするには限界がある。

「月光のドミナ」は、語り手がフランス留学時代にパリ日本館で出会った一人の日本人青年の物語である。冒頭の一頁を使って、パリの大学都市内のパリ日本館が、他の外国館と比較すると「最も貧弱なみすばらしい建物」であったことが語られる。文学的誇張が行われているわけだが、敗戦国であった当時の日本が置かれていた状況を際立たせようとしたのであろう。自信喪失状態を脱していない日本人を、読者は思わずにはいられない。

リヨンからパリに来た日本人男性の語り手は、背が低く、頭髮が薄く、唇だけが赤黒い、千曲という青年と出会う。彼は「女言葉」を話し、他の日本人留学生たちと付き合おうとしない。家政婦は彼の部屋が臭いという。「男色家」であるという噂もあった（9）。

全集にも収録されている作品ゆえ、梗概は省略するが、千曲の手記から、彼がマゾヒストであったことが徐々に明らかになってくる。「白い人」の主人公が、少年時代に犬を打つイボンヌを盗み見て、自らのサディズムに目覚めたような特別な体験が、千曲にもあった。六歳のときに、勝ち気な女の子にじめつ子から守られて、彼女の言葉に従うことに喜びを見出したこと。十歳のときに、同居していた叔母に告げ口を叱責され、強い力でつねられたときの喜び。そして戦争の最中、旧制中学四年生の夏、大磯で友人たちと過ごした千曲は、ある夜一人で海岸に行ったときに、海から現れた全裸の若く美しい白人女性と遭遇した。向き合って平手打ちされ、倒れたときの強烈な歓喜。この女性が「月光のドミナ」である。幼児から徐々に目覚めていった支配的な女性への屈従の喜び、そのクライマックスともいえる体験が、大磯の夜の出来事であった。

## 三 「美」の権力性——もう一つの「ヴィーナスの誕生」

海から出現した「月光のドミナ」のイメージは、西洋絵画の主題の一つである、女神アフロディーテの誕生を想起させる。切り落とされ、切断して海に投棄された男根の泡立ちから生まれたアフロディーテ、すなわちヴィーナスは、軍神アレスとの間にエロスを産んだという。ヴィーナスの誕生を描いた絵画は数多くあるが、「月光のドミナ」に相応しい作品は、ポッテチェリの名高いそれではなく、フランス世紀末象徴主義の画家ギュスターヴ・モロー描くところの「漁師に現れたヴィーナス」であ

ろう(10)。ここでは女神が乗る帆立貝も、彼女が従える神々も描かれていない。画面には、ただ写實的に描かれた、海から現れた純白の女神と、その圧倒的な美しさに戦慄する、影絵のような漁師しかない。モローは「宿命の女」を描いた画家だが、遠藤が描き出す「月光のドミナ」もまた、主人公を破滅させる点で、「フラム・フアタル」的である。

千曲が打擲される場面は、異様な迫力を持っており、強い印象を読者に与える。「アフリカの體臭」でリュシエールが黒人少年を鞭打つ場面、あるいは「白い人」で、イボンヌが犬を打擲する場面とは、比べものにならない鮮烈さである。ドミナはいわば再上演されたリュシエール、再上演されたイボンヌだが、ドミナの鮮烈なイメージは、リュシエールやイボンヌが単なるリハーサルだったと思わせる迫力がある。一人称で語られる異常な体験ゆえに、特に男性読者にとっては、打たれる者に自分を同一化しやすいからであろうか。

若い女だった。白人の女だった。のみならずその人は一糸もまどつてはいなかった。顔をふつて額を覆った栗色の髪を払うと、長い脚で碎ける波をふみしめながら、ゆっくりと浜に近づいてきた。月光がその人の濡れた髪や顔や真白な立派な体にかがやいていた。僕にはその肩や乳房や脚に光っている玉のような水滴まではつきり見える気がした。

その人は僕をじっと見つめながら浜に上ってきた。それから立ちどまって僕とむきあった。長い間、二人は黙っていた。突然、彼女は右手をあげると烈しい音をたてて僕の頬を撲った。

水によるめて倒れた僕の目の前に彼女の濡れた細かい砂のついた両脚があった。その足の指を月光に輝いた波が押しよせては洗い、洗っては退いていく。僕はその人に打たれた痛みで酔っていた。その痛みは頬だけではない、五体の隅々にまで痺れるような不思議な感覚を伴ったものだった。口惜しさも怒りも僕は感じなかった。なにか暗い世界に引きこまれ、落ちていくような気がする、その暗い世界は人間が死後、すいこまれていくあの涅槃のようなもの、考えることも、苦しむこともなくただ眠ることのできる涅槃に似ていた。(11)

強烈な経験が忘れられず、千曲は新宿の淫売屋で娼婦相手に「大磯の夜」の再現を試みるが、それは所詮ニセモノの体験でしかない。戦後オランダの貨物船に乗り渡したのには、「本物」のドミナを探すためであった。モンパルナスの娼婦も、やはりニセモノだった。「その打擲には本当の陵辱感、痺れるような感覚が欠けている」のである(12)。

第二次世界大戦中、日本国内でも、敵国米英の価値下落を企図したプロパガンダが行われていた。大磯の女性は同盟国ドイツの人だったのであろうか。もともと、この夢のような情景においては、若く美しい全裸の白人女性というイメージが最重要であり、国籍は問題ではない。「有色の帝国」(13)たる日本が劣等の烙印を押そうと懸命な西洋人、しかも女性、それが白い魅力的な身体で夜の海から現れて、日本人の少年を見つめ、おもむるに平手打ちする。彼女は、国家権力のプロパガンダを一瞬のうちに無化するほど強く美しい存在として、千曲と読者を圧倒する。この場面の「異常さ」、何か信じたい事件が出来たという驚愕の印象が、語り手と読者を揺さぶる。この状況全体が「本物」なのであり、女性が「本物」だったわけではない。だが千曲はそうは考えられなかったのである(14)。

千曲はリヨンに行き、いわゆる性的倒錯者のための店に通うようになる。「ふつうの人間のように」なれない自分の性癖に、罪悪感に似た羞恥心を感じる千曲は、行くなという「影の声」を聴く。だが彼は結局行ってしまふ。「良心」の声とも、「神の」声とも解釈可能な「影の声」への言及で、この小説は終わる。「千曲がきいたという影の声とは一体、何ものなのだろうか。」と語り手は考える。そして、キリストもまた人間の肉慾の苦しみも背負ってくれるという、ジュリアン・グリーンの言葉に対する司祭の言葉を思い出すところで物語は閉じられる。小説は最後になってみるみる生彩を欠き、理屈っぽくなり、衰弱して終わる、と筆者には感じられる。あたかも作者は自分がカトリック作家であったことを、最後になってようやく思い出したかのようなのである。しかし、「美」が悪しき誘惑者となって人間を転落させてしまふこの物語において、「聖」による救済可能性が暗示されている

ことは、無視してはなるまい。この稿では十分に検討することができないが、カトリック作家遠藤の中核的テーマがここに潜んでいることは疑いが無い。

#### 四 「向こう側の世界」からの誘惑

「月光のドミナ」発表から半世紀以上が経過した今日の人権感覚では、同性愛も、サディズム／マゾヒズムも、個人の性的嗜好の多様性として、社会が徐々に許容する傾向にあり、いわゆる「異常」性は相対的には減圧されている。現実世界はともかくとして、少なくとも虚構を旨とする文学の世界においては、ことさら特異な主題ではなくなっているといつてよい。それでもなお、この小説が日本語世界の読者、特に男性に衝撃力を持っているのは、白人女性から加虐されることに喜びを覚える日本人男性という構図が、精神的安定を揺さぶるからだろう。遠藤もまた、小説の枠組としては、マジョリテイたる異性愛者である語り手が、「異常」者である千曲について語るといふ構成をとりつつ、その中に千曲自身の手記を挿入するという、慎重な方法を採用している。コンテキストとしては、あくまでも千曲を「こちら側」ではなく「向こう側」の人間として描いているのである。

もつとも、千曲から「遠ちゃん」と呼ばれる主人公は、千曲に「生理的な嫌悪」を感じて、自分には関係ないとパリ時代にも思おうとし、帰国して手記が送られてきてからもそう思おうとするが、気持ちの上で完全に切り捨てることができない。自分は「普通」であり、千曲は「異常」である。語り手はそう考えるが、確信が持てない。そもそも嫌悪を覚えるとは、自分のアイデンティティを脅かそうとする他者に対して抱く感情であろう。語り手にとって、千曲は、ユング心理学というシャドーのような存在といつてもよい。

作者は、語り手から話を聴いた精神科医に「多かれ、少なかれ、誰の心理にもそういうマゾヒズムなり、サディズムの衝動はあるんだよ。他人を苛みたい。あるいは他人からまともな人間としてではなく、一種の道具や物のように扱われたいというふしぎな欲望がひそんでるんだ」と言わせている。「こちら側」と「向こう側」は、画然とした境界線があるわけではないとされているのである。

#### 五 国家総力戦下の大磯海岸での「美」への降伏

この小説は、マゾヒズムに人種や性差の問題が絡めてあるわけだが、何かある決定的な体験をした人物が、その体験を反復再現しようとして果たせないことを主題化しているともいえる。「異常」のレターを貼られて「正常」な社会から排除されるマイノリティの苦悩を主題化しているとも言える。また、昼間の秩序を脅かす怖ろしいものが性の世界に潜んでいて、それは誰の人生においても通じているという恐怖を描いているとも言える。一つの主題に集約することができない意味の多重性がこのテキストにはあるといつてもよい。この小説が、読後に何ともいえないぬ不気味さを感じさせる理由はそこにある（15）。

日本人男性とフランスの白人女性という組み合わせは、「アデンまで」（一九五四年）の日本人留学生とフランス人女子学生、『海と毒薬』（一九五七年）の日本人医師とドイツ人の夫人、という前例があった。前者では、敗戦後に留学した主人公は人種の違いを克服することができず、恋愛を成就させることができなかった。後者では、帝国大学教授の医師が、留学先のドイツから恋人を日本に連れて帰り、妻としている。そして「月光のドミナ」においては、戦中に少年時代を送った千曲がフランスにまで永遠の女性ドミナの幻を追って行き、そこで客死するのである。ドミナという言葉は、ラテン語では淑女を意味するが、ドミネーションの省略形として支配的女性の意味も持っている。

見下すにせよ、見上げるにせよ、それは男性が女性と対等の関係を結べない、あるいはそれを拒否する在り方である。千曲は女性的な男性、ドミナは男性的な女性であり、両者の間に存在するのは暴力的な権力関係である。美の化身として千曲を圧倒する点で、ドミナは男性を凌駕するフォースフルな存在である。美もまた権力なのだ。千曲がドミナに平手打ちされた時期、「皇軍」という男性集

団では、日常的な鉄拳制裁が行われていた。それゆえ、西洋人女性から平手打ちされるといふ千曲の体験は、男性性が過度に強調された時代の価値観からすれば、秩序を転倒させるものでもあったはずだ。だからこそ、それは千曲の胸にしまわれたまま、誰にも話すことができない「秘密」となったのである。

ドミナとの出会いの舞台が、大磯海岸に設定されていることにも、注意が必要である。大磯は、伊藤博文、大隈重信、西園寺公望、陸奥宗光、山県有朋、吉田茂といった政治家たちの別荘地として高い。白人国を相手の国家総力戦の最中に、帝国日本の屋台骨たる男性の私的世界を象徴する土地で、白人女性が日本人男性を平手打ちにする。この設定にも、作者の鋭い批評意識がある。若い日本人男性が、軍服に身を包む時代のコンテクストのなかで、若い白人女性が全裸で日本人男性を精神的に征服するありさまが描かれているからである。圧倒的な「美」の権力性が、国家の権力性を凌駕してしまう。「美」がそれほどの力を持つがゆえに、主人公は決定的な衝撃を受けてしまうのである。

## おわりに

遠藤には「月光のドミナ」のように、白人女性と日本人男性との権力関係を描いた「ジプシーの呪」（一九六〇年）という短篇がある（16）。海外航路の客船で働いていたバーテンと、マルセイユの見世物小屋で知り合った肌の白いロマ女性との関係が描かれているが、主人公の男性が、相手の女性を見下している点が「月光のドミナ」と異なる。そのまなざしの背後には、ロマの人々が、たとい肌の色が白くとも、「劣等」な存在として西洋社会から見下されてきた歴史的事実を抜きにしては説明できない。作中でも、外国人キリスト教宣教師は主人公に「ジプシーの呪」の恐ろしさについて警告を与えるのである。

本節では考察の枠組を限定し、キリスト教的視点からの緻密な分析を保留したが、「月光のドミナ」が、戦時と平時、日本人と西洋人、男性と女性、サディズムとマゾヒズムといった二項対立を巧みに組み合わせ、人種、性差、倒錯、そして美が複雑に関与して生じる人間間の権力関係を暴き出そうと試みた、野心的な作品であったことを明らかにすることができた。遠藤周作は、キリスト教世界たる西洋と、非キリスト教世界たる日本という単純な構図で、異文化間にせめぎ合う具体的現実を見ていたわけではなかったのである。

(1) 第三章で考察したように、遠藤は「アフリカの體臭」で、大戦後に死んだはずのフランス人女優（ナチス高官の元愛人）が密かにジプチに逃れ、娼館で黒人を鞭打つ姿を描き出し、ユダヤ人迫害に代表される西洋の人種差別が、戦後も植民地で生き延びていることを指弾している。

(2) 遠藤が自身の見聞を理論的に認識する上で、フランツ・ファノンが重要な役割を果たしたというのが、私とクリストファー・ヒルの主張するところである。

(3) 遠藤は「男と猿と」で、知的障害者の白人男性、労働者階級の白人男性、そして公園の猿を登場させることで、主人公の日本人男性留学生と彼らとの流動的な権力関係を追求している。また『彼の生きかた』では、霊長類学者の日本人青年とニホンザル集団との濃密な関係を通して、人間と動物との間にある西洋的な垂直的序列関係とは根本的に異なる日本人の動物観を描き出している。第九章参照。

(4) 遠藤をはじめ、一九五〇年代に留学を果たした文学者たちが日本国内でフランスに抱いていた憧憬と現地での体験の落差については、第一章で述べたとおりである。彼らが横浜港から乗船したフランス郵船の客船は、一等から四等まで、客室のクラスがそのまま階級社会フランス本国の縮図だった。船上は、階級差別、人種差別が日々上演される「小さなフランス」だった。マルセイユに到着する前から、彼らのフランス留学は始まっていたのである。

(5) 「白い人」は『近代文学』一九五五年五月号と六月号に分載された。厳密には、五月号のルビは「ユーロツペアン」であり、六月号が「ユーロピアン」だった。

(6) 伊達龍一郎（遠藤周作）「アフリカの體臭——魔窟にいたコリンヌ・リュシエール」（『オール讀物』一九五四

年一月、一二六一―一二七頁)。

(7) テキストに隠された遠藤の「複眼」は、まだまだ解明し尽くされていない。それまでとは異なるコンテキストに作品を置き直すことで、はじめてそれが可視化される場合もある。一例を挙げれば、『死海のほとり』を国際政治学のコンテキストに置き直すことで、作者が、ナチスに迫害される大戦下のユダヤ人のみならず、現代のイスラエル国に抑圧されるアラブ系住人についても、幾重にも韜晦しつつではあるが、暗示的に語ることを試みていることが明らかになる。第八章第一節参照。

(8) 「サド伝」で遠藤も言及している「マルセイユ事件」で知られるように、サド侯爵の場合、羊皮紙で作った鞭や草蓐で自らを娼婦に打たせるなど、マゾヒズムの実践において、通常の意味における支配／被支配の権力関係は逆転する。ただし、侯爵も娼婦もフランス人である。一方、「月光のドミナ」の主人公は、この稿で詳しく論じるところだが、社会的に下位にある娼婦からは快楽を得ることができない。あくまで、自分よりも強い女性からの陵辱が性的快楽をもたらすのである。要するに、優位な者が劣位の者を支配するという関係は、通常と変わることがない。そしてそこに、白人と有色人種との権力関係、さらに美の権力性という問題が加わる。このように考えると、この作品におけるマゾヒズムは、それだけを取り上げるならば、サド侯爵におけるそれよりも、はるかに複雑な構造を有している。

(9) キリスト教の道徳的圧力が少ない日本においても、一九五〇年代、同性愛者は「変態性欲者」であり「異常者」と同義だった。異性愛に挫折する同性愛の青年の苦悩が描かれた三島由紀夫『仮面の告白』の刊行は一九四九年である。

(10) モローは三点のヴィーナス像を描いている。ピエールルイ・マチュー『ギユスターヴ・モロー その芸術と生涯全完成作品解説カタログ』(高階秀爾・隠岐由紀子訳、三省堂、一九八〇年)での、八五番「海から出るヴィーナス」、八六番「ヴィーナスの誕生」、八七番「最初の人間達の前に現れたヴィーナス」がそれだが、筆者がここで言及したのは八六番の作品である。夜明け前を思わせる暗い画面左側の波打ち際から、純白全裸のヴィーナスが、ただ一人で浜辺に現れる。右手には、女神の圧倒的な美しさにおののく漁師たち(全て男性)が写實的に描かれている。

(11) SEZ6、一九八頁。

(12) フランスにおける千曲と白人女性との具体的な交渉場面は一切描かれていない。そもそも遠藤周作のテキストには、性交渉の描写が存在しない。露骨な性描写に対する作者の排除と抑圧は徹底している。フランソワ・ラブレー的なスカトロロジーへの寛容と比較するとき、その潔癖性は際立っている。

(13) 小熊英二は、欧米Ⅱ文明Ⅱ白人Ⅱ支配者という帝国主義の時代において、有色人種の植民帝国であったことで微妙な立場に置かれた日本を「有色の帝国」という言葉で概念化している。白人への憧れと反撥というアンビヴァレンツな感情は、現代にも残存しているという。『日本人の境界――沖縄・アイヌ・台湾・朝鮮植民地支配から復帰運動まで』(新曜社、一九九八年、六六一―六六七頁)参照。

(14) 「月光のドミナ」の読後に「白い人」を再読すると、サディストの主人公が、何か「本物」でない印象を筆者は受ける。それほど千曲の人間像は精彩を放っている。

(15) ただ一つの真実を伝達するテキストはプロパガンダであり、文学だとしても瘦せた文学であろう。全集未収録の大衆小説も含めて、遠藤の作品には、切実な問題提起と深遠な思索があり、論じ尽くされたかに思われる作品も、新たな読み直しを誘う魅力に満ちている。彼の作品は、唯一の真実ではなく、複数の真実を読み解くことが可能な、多層的テキストだと筆者は考えている。

(16) 遠藤周作『遠藤周作怪奇小説集』(講談社、一九七〇年)所収。

## 第二節 「ジプシーの呪」——日本人男性と白人女性(2)

### はじめに

本節では一九五九年七月から九月にかけて『週刊新潮』に連載された「周作恐怖譚」のなかの一作である短編小説「ジプシーの呪」を取り上げて、このヨーロッパ周縁世界に存在するマイノリティたるロマ(1)が、どのように表象されているかを考察してみることとしたい。この作品は外国語に翻訳されておらず、作品論も存在しない。千葉美千子によるささやかな言及が僅かにあるばかりで(2)、夏目漱石、森鷗外をはじめとする明治以後の日本語世界に登場するロマ表象を辿った水谷驍の歴史的概観でも本作は言及されていない(3)。

### 一 分析「際」の「観」

「ジプシーの呪」は、読者から来た手紙という形式が採用されている。全集未収録であり、現在ではほとんど読まれることがないテクストゆえ梗概を紹介しておく。

手紙の差出人は神戸のホテルのバーで働いている五七歳の男。彼は二〇年ほど前、三五、六歳のときに我が身に起きた怪異な出来事を語る。戦間期という時代設定である。舞台はフランスのマルセイユ。語り手は、当時は日本郵船海外航路の客船勤務のバーテンだった。

「私」は、乗船していた「さんとす丸」がマルセイユに到着したので、仲間たちと娼館に向かうが、「金で楽々と買える女」を相手にするのが嫌になり、「素人の娘」をひっかけようと仲間と別れる。日本人ではあるが容貌に自信があり、「フランスの女を誘惑する自信」があつたからである。繁華街近くの公園で、屋台などに混じって「ジプシー」たちの箱車が並ぶ一面に迷い込む。見世物小屋があり、水着姿の若い女が、客の呼び込みをする若い男の傍らにいます。「真白い肉づきのいい四肢や、それから大きな胸のふくらみ」に魅了された「私」は小屋に入る。ここではマジックショーが演じられる。舞台上上げられた語り手は、箱に入れられ、剣で突き刺されるが、うまい具合に幕に隠された裏側に出る仕掛けになっていた。目の前にいる先ほどの女に欲情を抱いた語り手は無理矢理接吻する。店を出た後公園で時間を潰した語り手は、小屋に戻り女とワゴンのなかで情交を結ぶ。停泊期間の間二人は情事を重ねた。結婚してくれと言われた「私」は軽い気持ちで諾す。その場で一人の老婆がいるワゴンに連れて行かれた「私」は奇妙な婚約の儀式をさせられた。どちらかが裏切りを働いたときは怖ろしいことが起きるといふ予言がなされる。二ヶ月後にまたマルセイユに来るから、その時に結婚しようと約束したが、真面目に結婚を考えていたわけではない。船の仲間に自慢話をした「私」は、外国人老宣教師から船上で話しかけられた。結婚する気など毛頭ないと応えた語り手に、宣教師は言う。「とんでもないこと。あのしるしは悪魔の呪いとして西洋人には怖れられていますよ」。「こちらは日本人だから大丈夫でしょ」とおどけた語り手は、横浜につくと、今度はアメリカ行きの客船に乗ることとなり、次第に「ジプシー」の女のことを忘れていった。

半年後、会社に封筒が届く。中には一枚の写真が入っていた。裸の男の腹部に腫物ができている気味の悪い写真である。三ヶ月後、五ヶ月後、そして一年後に同じ写真が送られてきて、それで終わりだった。ところが、その後、語り手の腹部に同じような腫物ができて、徐々に大きくなっていったのである。……

われわれは二つの観点からこの作品を分析することしよう。一つは、作品に描かれたロマ像という観点、もう一つは、初期遠藤作品に特徴的な、西洋人女性と日本人男性との交渉の構図という観点である。

## 二 表象されたロマ

この作品が書かれた一九五九年当時、ロマに関する日本語の学問的著作はなかった。千葉美千子によれば、一九五七年刊行の『世界大百科事典』（平凡社）の「ジプシー」の項では、「彼らは昔から歌舞音曲師、ばくろろう、かじ屋、うらない師、どろぼうとして聞こえている」といった記述があった（4）。同項執事は、戦後長らく日本民族学の指導的地位にあった岡正雄（一八九八―一九八二）によるものである。

もとより日本国内にロマは存在しない。学校教育で教えられるわけでもない。にもかかわらず、ロマに対する漠然としたイメージは、日本人に共有されていた。それは西洋の文学や絵画、音楽に描かれたロマ像によって半ば無意識のうちに刷り込まれたものであったと考えられる。シェイクスピア、ディケンズ、ブロンテ姉妹、セルバンテス、ユーゴー、メリメ、サンド、フロベール、ゾラ、ヘミングウェイなどのテクストにはロマに関する記述がある。モネ、マネ、コロ、ルノアール、マティスといった画家たちの作品にもロマが描かれており、ビゼーの「カルメン」やヨハン・シュトラウスの「ジプシー男爵」といた音楽作品もあった。これらが全て日本国内でよく知られていたわけではないにせよ、ヨーロッパ世界に存在する周縁的な存在、放浪生活を送る不思議な民族としての断片的なイメージの集積が、当時から現在に至る日本人のロマ像を形成しているといつてよいだろう。水谷驍の研究に拠れば、ロマが登場する西洋文学は、大正初めから昭和前期以後に次々と邦訳されている（5）。

「ジプシーの呪」に登場するロマは、ワゴン生活者の兄妹と老婆の三人である。兄妹は、フランス語を早口で話し、英語はたどたどしい。見た目は肌が白く、ヨーロッパ系フランス人の姿をしている。女の名前もフランス人によくあるクロードという。「私」に結婚を申し込む妹は、成熟した肉体を持つ女性で水着を着ている。彼らは、人体を箱に入れて剣を突き刺すという大がかりな近代マジックの見世物興業で収入を得ている。こうした設定には、ロマの実像とは相違する点と、通俗的イメージに合致する点の両方がある。現在では修正されているが、長年の間、ロマは見た目が浅黒く、エキゾチックな風貌をしていることが多いとされてきた。その点からすると、小説の女はロマ風ではない。また実際の彼らは家族単位で生活しており、避妊をしないために子沢山であることが多い。大家族が普通であり、定住するヨーロッパの核家族とは正反対の生活形態を持っている。早婚であり、女性は一三、四歳で第一子を出産するといわれる。非ロマと結婚することは、まずない。職業は、占い、職人、芸人などであるが、有名な占いにしても、通りすがりの他者に近付いたり、家の中に入り込むための手段として発達したとの見方もされている。このような点では実態と違った設定がなされている。遠藤は、一九五〇年から三年間のフランス留学時代に、リヨンやパリの郊外でロマを実際に見たことがあったと思われるが、彼らの生活実態に関する詳細な知識は持っていなかったであろう。この作品に登場する女性は、ヨーロッパ系白人フランス女性の外観をしているが、ロマ風に仕立てられているのである。近代マジックにしても、そこには「魔術的」な性格があるのは事実であり、曲芸を業とする者もいたことから、職業設定として許容範囲といつてよい。また奇怪な呪術を行う老婆にしても、フランス社会における周縁的存在としての設定がなされていることは間違いない。

港町マルセイユ。繁華街の周縁に位置する公園に設けられた見世物小屋。非日常的舞台が設えられ、そこでドラマは起きる。周縁世界が幾重にも強調されているわけだが、定住生活者が主体であるヨーロッパ世界において、遊動生活者であるロマが最下層の人々であることは強調されていない。主人公は、「素人の娘」をひっかけようとして、ロマの女と情交を結ぶ。つまり、フランス社会に生きる女性であることは共通しているが、社会序列のなかでは距離のある存在であることをさほど意識してはいないのである。西洋女はそれがどのような社会階層に属そうとも西洋女であることに変わりはない



からである。出会ったばかりの客である東洋人青年に対して、その晩のうちに体を許すロマ女は、よくいえば自由奔放、悪くいえば享乐的、放蕩者、ふしだらな存在と云ってよい。これは一八世紀以来フランスで行われてきたジプシー像の再生産に他ならない。

宣教師の言葉に対して主人公が語る台詞は、キリスト教のコンテクストに生きていないわけではない日本人にとって、「ジプシー」の「悪魔の呪い」も通用しないだろうという論理を構成している。キリスト教が主流の西洋世界に対立するものとして、「悪魔の呪い」に生きる「ジプシー」の世界があるという優劣の対立構図が背後にここにはある。彼らは、何か得体のしれない、不気味な存在である。これもまたヨーロッパ人が作り上げてきた他者幻想のエコーと云っていい。

一九八〇年代に入るまでほとんど知られていなかった歴史的な事実には、ナチスドイツのホロコーストの被害者がユダヤ人のみならず、ロマでもあったということがある。この事実は第二次世界大戦後、ユダヤ人のように世界の注目を集めてこなかったし、現在でもユダヤ人ほどには知られていない。フランスに限定しても、一九一二年に顔写真と指紋のある識別身分証明書所持が義務づけられていたロマは、一九四〇年の通達によって強制収容所へと送られた。家族単位であったことがドイツと異なっていたが、当初は北フランスのモントルイユ・ベレー、ジャルジョー、ポワティエの収容所へ、ドイツとの休戦条約後は、南フランスのリヴザルト、サリなどの収容所に送られた(6)。彼らはフランス国内にいた、フランス国籍を持つロマであった。彼らは最終的には、ブッヘンヴァルト、ダッハウ、ラーヴェンスブリュックに移送されたのである(7)。なぜこの点を述べるのかといえば、遠藤はナチスドイツのユダヤ人迫害に強い関心を示していて、アウシュビッツ強制収容所を訪れてもいるし、取材した小説も執筆しているからである。その際、遠藤はユダヤ人とともに、ポーランド人についても、配慮に満ちた書き方をしている。それゆえ、ロマのホロコーストについて知っていたとすれば、第二次世界大戦後もなおロマを「劣等民族」として眼差すヨーロッパ人の視点を、いささか安易に取り入れた「ジプシーの呪い」を遠藤が執筆することはなかったのではないかと思うからである。遠藤はすでに第二次世界大戦中の九州帝国大学で行われたアメリカ人捕虜の生体実験をモチーフとした『海と毒薬』(一九五七年)を発表していた。ロマがナチスドイツにおいて、民族衛生学のための「実験対象民族」とされたことも、遠藤は知らなかったものと思われる。

半世紀前に書かれた「ジプシーの呪い」に描かれたロマ像に違和感を覚え、作者を批判しても仕方のないことである。むしろこのテクストには、当時の日本人一般がロマに対して抱いていた好奇のまなざしと他者幻想とが描き込まれていると云っていいのではないだろうか。週刊誌に掲載される大衆小説は、読者の期待に応えることが何よりも求められるものだからである。

### 三 西洋人女性と日本人男性という構図

「ジプシーの呪い」と同じくマルセイユを舞台とした「アデンまで」で、主人公の日本人留學生の青年がフランス人の恋人と別れて港から去る。フランスの女性との出会いと別れが描かれているものの、「ジプシーの呪い」の場合とは男女の政治的力学が正反対である。それは、相手の女性が、堅気のフランス人女子学生か、見世物小屋のロマ女性か、というフランス社会における階層的序列と無関係ではない。

遠藤が留学した一九五〇年当時、戦犯国として日本人に注がれるフランス人のまなざしは厳しく、留學生生活は不愉快なことが少なくなかった(8)。留学以前の「神々と神と」という問題意識は、帰国後に「白人と有色人種」に入れ替わる。そしてそこに「男と女」という第三の主題が重なってくる。遠藤の初期の小説では、日本人の男と西洋人の女(白人の女)という組み合わせは、女の方が優位にあることが多いことは注目に値する。「アデンまで」の主人公は自分を愛してくれるフランス人女性と対等に付き合うことができない。「月光のドミナ」(一九五七)では、登場する日本人留學生は自分を陵辱する永遠の白人女性を求めて異国の地に客死するマゾヒストである。ところが、「ジプシーの呪い」では、主人公の日本人青年は、ナポリではイタリア人娼婦を情婦にして貢がせたり、アメ

リカ合衆国で娼婦と関係することを何とも思わない。そしてフランスでは「素人の娘」を引っかけようと思つてそれを実行する。要するに、西洋人の女性（白人女性）に何の幻想も抱いていないのである。時代設定が、第二次世界大戦前であることを割り引くとしても、西洋人に対して劣等意識を持たない日本人主人公の存在は遠藤文学においては特異である。主人公は、見世物小屋の舞台の上で、シヨールとはいえ、水着を着た若い女の体を、太い縄で縛り上げさせる。

そもそも、トマス・カトリック的世界観においては、神―天使―人間―動物、というヒエラルキーが厳然としてある。近代西洋においては、この「人間」のなかに、さらに、白人男性―白人女性―有色人男性―有色人女性、があり、その下に、グラデーションを描く形で、アポリジニーオランウータン―野獣と続く。遠藤の初期作品には、こうした序列のなかの、「白人女性―有色人男性」の部分が拡大されて描かれているといつてもよい。「アデンまで」の場合は、相手の女性が大学生であることで、白人女性の方が日本人男性よりも優位にある。けれども、「ジプシーの呪」では、相手の女性が見世物小屋のロマ女であることから、白人でありながらも、日本人男性の方が優位にあるのだ。ロマは、男女の区別なく、蔑視の対象、抑圧と排除、貧困と差別の対象だからである。

では、作者は日本人男性が西洋人女性よりも優位に立たせるための道具立てとして、ヨーロッパ社会で周縁に位置するロマを登場させたのであろうか。ここで主人公の日本人男性の設定に注意を向けてみることにしよう。「ジプシーの呪」の主人公はフランスの大学に留学したエリート学生ではなく、海外航路の客船勤務の中年のバーテンである。彼が素人の娘として想定しているのは、大学生のような知識階層ではないだろう。労働者階層の女性、あるいは端的に「娼婦ではない」女性と考えてよい。彼が船上勤務者として設定されていることは興味深い。見方を変えれば、彼もまた「移動生活者」という点において、見世物小屋のロマ女クロードと共通点がないともいえない。航路の定まった移動ではあるが、ロマにせよ、彼らの遊動範囲は県単位程度のものであり、決して広域を「放浪」しているわけではないからである。作者は日本在住の男性日本語者を主な読者として想定していたと考えられる。定住し、会社や工場に勤務する都市生活者である読者にしてみれば、小説に登場するロマもさることながら、主人公もまた、自分たちにはない移動の自由を持つという点で、想像するしかない浪漫的世界を表象する存在である。主人公は、ヨーロッパの地を踏み、そこで多くの西洋人（白人）女性と気ままに性的交渉を行うという、当時の日本人男性の大多数には不可能だった特権的体験をする。「選ばれたマイノリティ」なのである。当時の日本は、朝鮮戦争の「特需」により復興を加速させてはいたが、「もはや戦後ではない」（一九五六年度『経済白書』）と言われてからまだ三年しか経っていないかった。

それにして、この主人公が女性に対する男性の圧倒的優位を確信していること、そしてそれが必ずしも人種の差異に基づくものではないことも注目に値する。遠藤の小説に登場する男性主人公は、高等教育を受けた知識層であることが多いが、この主人公は反省的知性を持つ人物ではない。見世物小屋の舞台に上がる際に心中で思う「ええ、ままよ。旅の恥のかき捨てだ」という言葉が明確に示しているように、この中年の主人公は、クロードとの情交の結果、彼女が妊娠する可能性についてすら全く顧慮するところがない。彼女をかりそめの性的欲望の対象として、要するに、金のかからない娼婦としてしか見ていないのである。

それに対して、クロードは、自らが属するロマ世界から拒絶されることを覚悟の上で日本人主人公に結婚を望む、けなげな女性として造型されている。けれどもさすがに口約束だけでは不安があったのである。彼女は、老婆を立ち会わせて婚約の誓いを行わせる。約束を踏みじった主人公の身体に異変が現れたのは、呪いの成就というよりは、予言の成就と見なすべきである。それにしても、二〇年前の事件を作家宛の手紙にしたためている物語中の現在において、五七歳になった主人公の腹の腫瘍はどうなっているのであろうか。小説を読み終えた後、そのような疑問を抱く読者がいるように、作者はおそらく故意に筆を止めている。読者の想像力を刺激するための工夫である。手紙のはじめに「自分が味わっている奇怪な体験をお知らせしたい」と書かれているので、今現在も症状は改善していないとも思われるが、「ああ、この腫物は決して治らない。自分はあの写真のように体中、腫物だ

らけになり癩病やみのようになるにちがいない」という一時の絶望的な心情は、乱れない手紙の文章からはうかがい知ることができない。したがって、腫瘍はおそらく消滅したか、問題にならない程度の大きさに小さくなり、心理的不安は過去のものになっていると想像される。なぜそうなったのであろうか。クロードが老婆に願ひ出て「呪」を解いた、自分を裏切った男を許した、と考えるのが自然であろう。「わたしが・棄てた・女」である彼女は主人公を愛していたのである。けれども、主人公がそれを理解しているかどうかは大いに怪しいと言わざるを得ない。手紙の文面を読む限りにおいて、主人公の意識はおぞましい腫瘍を精密に描写することに集中していて、傷ついたクロードの心中を想像することは一切ないからである。

このように考えてくると、ヨーロッパ世界の周縁に生きるロマの兄妹たちは、日本人主人公の、女性と性的以外には関係を結ぶことができない人間性の欠如、自らの言葉に対してすら不誠実であるしかない無責任な人生態度を際立たせるために登場させられていると考えることも可能である。

遠藤文学においてロマが重要な役割を担って登場するのはこの作品だけである。週刊誌に掲載された大衆小説ではあるが、純文学作品と違って大衆読者層を強く意識して書かれた娯楽的作品であればこそ、かえって作家の文学的想像力と、場合によっては、その限界をうかがい知ることができよう。この小説に描かれるロマは、ヨーロッパ世界が彼らに注ぐ視線を基本的に受け継いだものであった。それは「放浪の民族」であり、神秘的な占いを行う人々であった。先にも触れたように、これは遠藤個人の問題というよりは、当時の日本人全般の平均的なロマ理解であったと考えるのが自然である。

作者はそれがロマの通俗的イメージであることを認識していなかったわけではなく、むしろそれを知った上で、意識的に作品に利用したとは考えられないだろうか。なぜならば、ロマ女性がステロタイプに描かれているのと同様に、主人公もまたステロタイプな「船乗り」として描かれているからである。自ら語るところによれば、「私」は日本郵船株式会社海外航路の客船乗務員である。同社は明治以来の沿革を持つ日本を代表する実在の海運会社であり、第二次世界大戦前の海外航路便は格式のある世界であった。バーテンとはいえ、マルセイユでの言動が真実であるならば、主人公は社員に相応しい品格を著しく欠いている。それは同社の権威と信用を失墜せしめるまいである。ところで、語り手の「私」は、自分の言葉に関して無責任な人間であった。言葉は自分を証し、未来を確固たるものとするためのものではなく、目の前の人間を騙すための手段、その顛末を自慢する手段でしかなかった。そのように考えると、日本郵船社員という言葉もまた虚偽であるばかりか、この手紙自体が、作家を騙すための作り話である可能性も排除できない。語り手は人づてに聞いた真偽定かならぬ話を自らの「武勇伝」に仕立てたのかもしれない。このように、主人公を信用ならない人物として造型することで、作者はロマに関する通俗的イメージを安心して再利用可能にすることができたと考えられるのである。

さて、「周作怪異譚」という連載の必要上、ロマの呪いの実現の詳細な描写が前景化されてはいる。怪異譚として読み終えることももちろん出来る。けれどもこの作品は二重底になっている。作品が描き出した世界は、男性優位を確信する日本人中年男性の女性に対する蔑視、それに結果する不毛な男女関係であった。「わたしが、棄てた、女」は、遠藤文学において重要な主題の一つであったからである。ストーリーのみを追うことが小説を読むことだと考えている単純な大衆小説の読者には理解することが難しい読み方だが、遠藤の中間小説には、そのような仕掛けがしばしば見られるのである。ロマの娘がクロードという固有名を持つのに対して、主人公が「私」であることにも作者の意図があるだろう。すなわち、主人公は日本人であるという以外に匿名の存在なのであり、特殊な、例外的存在ではないことが暗示されているのである。「周作怪異譚」の他の作品を見ると、「三つの幽霊」「黒痣」「初年兵」「鉛色の朝」など、第二次世界大戦の影を引きずったものが少なくないことがわかる。

「もはや戦後ではない」というのは日本政府の宣言であった。多くの日本人が戦後を引きずっていたからこそ、このような宣言がなされなければならなかったのである。帝国の兵士として中国大陸や東南アジアなどの「海外」に赴いた多くの日本人男性も、当時の『週刊新潮』の読者層であった。戦場を体験して帰還した男性読者のなかにも、「私」はいると作者は考えていたのかもしれない。戦地で

の「武勇伝」を語る男たちが、当時の日本社会には存在していたからである。

## おわりに

最後に、主人公の腹部に出来る老婆の顔をした腫物について触れておきたい。これは遠藤の独創ではないからである。古くは江戸時代の僧侶浅井了意（一六一二—一六九一）の仮名草子『伽婢子』（一六六六）巻之九「人面瘡」に農夫の脚部にこのような腫物ができたとの話がある（9）。近代に入ってから、谷崎潤一郎（一八八六—一九六五）の「人面疽」（『新小説』一九一八年三月）が有名である（10）。これは、アメリカ人商船の白人船員と恋仲になった長崎の花魁と、彼女に憧れる日本人の乞食の物語が劇中劇のように嵌め込まれた小説で、乞食の青年を裏切った花魁の脚部に、呪いの腫物が出現するのである。第二次世界大戦後に、推理小説家横溝正史（一九〇二—一九八一）が、谷崎を意識して「人面瘡」（『講談倶楽部』一九四九年一月）を書いている（11）。登場人物の若い女性の右脇の下に、野球ボールほどの腫物ができるのである。谷崎作品との違いは、この腫物が物語の最後で医学的に説明されている点である。この作品が改稿の上単行本に収録されたのは『支那扉の女』（東京文芸社、一九六〇年七月）が初めだから、遠藤がこの作品を読んでいるとすれば「講談倶楽部」の初出であろう。もっとも、本稿では、このような先行作品との影響関係は問題ではないため、類似の作品がそれまでに書かれている事実のみを提示しておくに止めたい。ただ、裏切られた日本人男性の呪いの結果として、白人船員男性と結婚した日本人女性の身体に不気味な腫物ができるといふ谷崎作品は、登場人物の性別や国籍は違っているものの、「ジプシーの呪」と似ているところがあるので、谷崎作品を遠藤が参照した可能性も頭から否定はできないと思われる。

(1) 「ジプシー」をインドに起源を持つ放浪の「民族」とする定説は、一八世紀にドイツの歴史学者グレルマンが提唱したものであり、一九七〇年代以降、彼らを多様な社会的孤立集団として捉える研究者たちによって疑問を呈されている。本稿では歴史的な差別的呼称である「ジプシー」の代わりに「ロマ」を使用するが、この呼称自体、彼らを一つの「民族」として表象する点で問題が全くないわけではないことは稿者も認識しており、機械的に言い換えているわけではないことを申し添える。

(2) 千葉美千子「ナチズムの犠牲者としてのスインテイ、ロマの位置づけ——忘れられて犠牲者をめぐる考察」（『北海道大学大学院国際広報メディア研究科院生論集』第一号、二—三二頁）の註一参照。「日本では「ジプシー」という言葉がもつ幻想的な響きが人びとのイマジネーションを誘発し、小説や漫画などで用いられる」一例として本作が挙げられている。ただし、千葉は本作を一九七〇年の発表としているが、これは単行本の刊行年であり、執筆の年ではない。

(3) 水谷驍『ジプシー 歴史・社会・文化』平凡社、二〇〇六年、第五章第一節「日本人のジプシー認識」参照。

(4) 千葉前掲論文、四頁。なお、同百科事典の記述が変更されたのは一九八八年のことであると千葉は述べている。

(5) メリメ『カルメン』が大正四年、セルバンテス『ジプシー娘』とユゴー『ノートルダムド・パリ』が大正一〇年、ロレンス『処女とジプシー』が昭和一〇年、プーシキン『ジプシー』が昭和一一年、ヘミングウェイ『誰がために鐘は鳴る』が昭和一六年である。水谷驍前掲書、二一六—二一七頁参照。

(6) アンリエット・アセオ『ジプシーの謎』遠藤ゆかり訳、創元社、二〇〇二年、一〇六一—一〇八頁。

(7) アンガス・フレイザー『ジプシー 民族の歴史と文化』水谷驍訳、平凡社、二〇〇二年、三四三頁。

(8) 本論文附論第二章参照。

(9) 『新日本古典文学大系 伽婢子』岩波書店、二〇〇一年所収。

(10) 『谷崎潤一郎全集』第五巻、中央公論社、一九八一年所収。

(11) 『聖女の首』出版芸術社、二〇〇四年所収。なお、「人面瘡」が谷崎「人面疽」を意識したとの説については、浜田知明による同書解説に拠る。浜田は「本の本」6号（一九七六年六月）に掲載された、中島河太郎、松長昭雄との座談会上での横溝自身の発言を根拠としている。

## 附記

本節を執筆に際しては下記の諸文献に拠るところが多い。金子マーティン編『「ジプシー収容所」の記憶——ロマ民族とホロコースト』岩波書店、一九九八年。ジュール・ブロック『ジプシー』木内信敬訳、白水社、一九七三年。ドナルド・ケンリック、グラタン・パッソン『ナチス時代の「ジプシー」』小川悟監訳、明石書店、一九八四年。ニコル・マルティネス『ジプシー「新版」』水谷驍・左地亮子訳、白水社、二〇〇七年。ロマニ・ローゼ編『ナチス体制下におけるスインティとロマの大量虐殺』金子マーティン訳、反差別国際運動日本委員会、二〇一〇年。

### 第三節 「変な外人たち」——白人表象の変容

#### はじめに

『沈黙』を書き下ろして発表した一九六六年、遠藤は短篇「変な外人たち」を発表している(1)。純文学作家が大衆小説誌に発表した、いわゆる中間小説であることから、全集にも未収録であり、海外にも紹介されておらず、学術的な先行研究もない。しかし、東京を舞台にして、白人たちをイロニーッシュに描いた作品として注目に値する。一九五四年に「アフリカの體臭」「アデンまで」から出発し、「月光のドミナ」を書いた遠藤が、ヨーロッパの白人世界に注いだまなざしの変容が、ここにはうかがわれるからである。「ポーラン・シリーズ」の分析を通して、黒人表象の変容を見てきたが、白人表象の変容について、この作品を通して考察したい。

#### 一 物語の梗概

小説家である「私」は、仕事場として、青山の小さなホテルが気に入っている。ここには外国人客が多い。英独仏語以外の言語も聞こえる。アラビア語かトルコ語かもしれない。タクシーの運転手はこのホテルに来る外国人は三流だという。確かに富豪には見えない。娼婦も出入りしているらしい。

このホテルで「私」はある老人と知り合う。白人男性で、白髪が黄ばんでおり、片足を引きずっている。何となく落ちぶれた感じである。部屋に「私」を招いた彼は、自分が撮影したというフィルムを見せる。若い男と女との肉体的交渉が写されていた。画面のなかの男の右腕に入れ墨があった。二本見た後で、老人は、画面に登場した男が三〇年前の自分であるといい、入れ墨を見せた。

また「私」は、ロビーで編み物をしている中年白人女性とも知り合った。編み物は神学校に通う甥のためのものだという。「えらいもんだ。牧師になって布教するなんて」と言ったところ、彼女は「あなたは信者ですか」と問う。ちがうというと、聖書を貸してあげますといい、部屋に英訳聖書を持ってきた。「私」はちよつと見ただけで、あとは放置した。友人が文学賞を受けたので、祝う会に出席したあと、出版社社長の世話で赤坂のナイトクラブに行く。そこで白人のストリップパーが登場したが、驚いたことに、彼女はあの聖書を貸してくれた女性だった。翌日、ロビーに行くと、彼女は編み物をしていた。「聖書は世界で一番立派な本です。私はもう何度もくりかえして読みました」と彼女は言った。そして、数日したら大阪に行くのだと続けるのだった。……

#### 二 都内のホテルというトポス

物語の舞台となる都内のホテルについて、まず確認しておこう。赤坂プリンスホテルを思わせる「赤坂のPホテル」や、ホテルオータニを思わせる「上智大学裏にある巨大なOホテル」を二、三度使ったという語り手は、「こうした一流は設備もいけれどあんまり気位が高くてどうも小説書きの仕事には不向きだ」という。こぢんまりとした青山のCホテルは、「サービスの点はどう見ても良いとはいえぬが、客を放ったらかしにしておいてくれるのが、かえって仕事をする上に都合がいい」。その上、「小説家の好奇心を満足させるような得体の知れぬ東洋人や外人がうるうる集まってくることも、このホテルを利用する理由である。アラビア語やトルコ語らしき言語が聞こえることから、ここにはヨーロッパの本国人とともに、旧植民地の人々も、区別なく一緒に宿泊していることがうかが

われる。この設定は、時代がすでにポストコロニアルであることを示しているし、白人たちが現地人化して混ざり合っていることを暗示しているようでもある。

タクシー運転手の言葉を通して、このホテルを利用する外国人客が、タクシー代のお釣りをしつかりと受け取ることから「三流」であるときれ、ホテルにも、深夜になれば、「洋パン」（西洋人相手の私娼）が出没すると語られる。「洋パン」は日本人だけではなく、「香港から流れてきたような白人の淫売」もいるというのである。主人公は、深夜に暗い部屋の中に白人女性が立っていることに驚いたことがある。宿泊客が部屋を間違えたのではなく、「毛唐のパン助」（外国人の私娼）だったことが、按摩の口から語られる。つまり、己の肉体を売るしかない、貧困層の白人たちがここには集まっているのである。また、同性愛の外国人たちの連絡場所にもこのホテルはなっており、「白人女と中国娘とが愛撫しあいながら酒を飲んでいるのを目撃したことがある」とも語られる。同性愛は、遠藤のテクストにおいては、すでに「月光のドミナ」で見たように、正常／異常という区分の後者に分類されるものである。

以上は物語の冒頭で読者に与えられる情報であるが、物語の最後でも、「タクシーの運転手が「三流外人」とよんだこれらの客はどうせ日本に来て一流のホテルには宿泊できぬ連中なのである」と語り手は述べている。ここでわかることは、小説家である語り手の「私」は、一流ホテルを使うことができるが、東京にやってくる外国人（白人）のなかには、一流ホテルを利用することができない三流の層があり、彼らに対して主人公が優越意識を持っているということである。ホテルに出没する外国人（白人）娼婦や、同性愛者たちは、何か正常ではない人々なのであって、日本人である彼は、小説家としての好奇心から彼らを眺めている。敢えて格式が低いホテルに投宿することによって、一流ホテルでは見聞できない外国人の生態を観察しているのである。「このホテルで私がひろったエピソードはまだまだ幾つもある。小説にもならぬことばかりだが、しかし他のどんなホテルよりも私にはここが居心地がいい」というのがこの小説の最後の一文である。

### 三 老いた白人男性

物語の前半に登場する白人の老人について考えてみよう。彼は「白髪のきたなく黄ばんだ年寄りで、片手に分厚い新聞を持っている。片足が悪いのか、幾分、右足を引きずるように歩いている」。彼の白髪が「黄ばん」でいるのは、「アデンまで」で、主人公が乗船する「白い部分も、錆で赤茶けている」マドレーヌ号がから「黄色の吐瀉物のような液体がたえず、海中に吐きだされてい」たことを想起させる。つまり、彼は老朽船のように、身体的には衰えており、往年の輝かしい「白さ」を喪失しているのである。だが、分厚い新聞を手に行っていることから、世界に対する知的関心は衰えていないことがうかがわれるのである。

この老人は、自分が撮影したフィルムを見に来るよう部屋に誘うのだが、主人公は「きつと日光や鎌倉で写した八ミリを正月一人ぼっちでホテルにいる日本人に自慢したいのである」と考える。有難迷惑とは思ったものの、「落ちぶれたような老外人と何かを話してみるのも悪くない気持ち」がして、彼の部屋に赴く。一ヶ月前からこのホテルにいるという老人は、映写機を用意する。

カーテンをしめたためますます臭気のもった部屋のなかで映写機が鈍い単調な音をたてて回転しはじめた。すると壁にかけたポータブルの映写幕に空虚な銀色の影が流れ、やがてそこに人間らしい者が亡霊のように動くのが見えた。それは日光や鎌倉の風景ではなく、どこかの部屋の中らしかった。画面は非常に古かったが油虫が這っているような壁紙と、その壁紙の下に鉄製の寝台がおかれているのに私は気がついた。一人の青年がそのそばで洋服をぬいでいた。彼が洋服をぬぐとひきしまった、立派な肉体があらわれた。それから彼はベッドの中に横たわっている女を見て笑いながら何かを言っていた。女の髪はもう三十年ほど前に流行したあの大きな傘のような髪である。画面のなかでその青年と女とがうごめいていた。ラクダが跪いたような恰好をして……。男の右腕に入

墨があった。(2)

どうやら音声を欠いたサイレント映像のようである。老人はもう一本別の「映画」も見せる。「同じような暗い哀しい映画だった。男と女が無言のままうごめいていた。彼等もまたラクダが跪いたような恰好をして……。女は違っていたが男はさっきの男と同じで、その右腕に、花びらの入墨があった」。同じ男が登場していることに気がついた主人公に、老人はそれが自分であることを告げ、「むきになって彼は上衣をぬぎ、よごれた色シャツの腕をまくりあげ、花びらの入墨のあとを見せた。染みのついた、カサカサの腕にその花びらは縮まり、みにくかった」。そして、そのフィルムはジュネーブで撮影したものであること、映像のなかの交渉相手が、商売女ではなく「本当の愛人」だったことを「憑かれたようにしゃべりつづけた」のだった。

物語の現在を一九六五年として計算すると、「バイヤー」(仕入れ人)と称するこの老人は、一九〇六年頃に生まれた人で、ベルリン・オリンピックが開催された一九三六年頃にこのフィルムを撮影したことになる。

「ラクダが蹲ったような恰好」というのは、俯せて首だけ上げている姿がそのように見えたということであろう。ラクダという動物が遠藤の作品に登場することはほとんどない。しかし、遠藤文学に深く親しんだ読者であれば、「アデンまで」のなかで、主人公の目に砂漠をゆくラクダの姿が映っていたことを忘れることはあるまい。

だれも歩いていない。いや、一度だけ、俺は、一匹の駱駝が主人もなく、荷もおわず、地平線にむかってトボトボと歩いているのを見た。砂漠は広いので、駱駝はやがて小さくなり、遂には一点と化してしまうまで、見えていた。その風景は、俺の胸をせつないほど、しめつけた。なぜだか、わからない。(3)

歴史もない、時間もない、動きもない、人間の営みを全く拒んだ無感動な砂のなかを一匹の駱駝が地平線にむかって歩いている風景、それはなぜか知らぬが、俺にはたまらない郷愁をおこさせる。俺にはその理由はわからないけれども、この郷愁は黄いろい肌を持った男の郷愁なのである。(4)

白人の男女の裸体が交わる姿をラクダに喩えたのはなぜだろうか。ラクダは砂漠とイメージの上で結びつく動物であることから、「立派な肉体」にもかかわらず、若々しさや瑞々しさに欠けたもの、乾ききったものとして描いていると考えることはできよう。白髪が「きたなく黄ばんだ」老人は「むきになって」上着を脱ぐが、現れたのは「カサカサの腕」だったのである。また、「文明」化したはずの西洋人が、多くの動物と同じように、後背位で性行為を行っていることで、彼らの「野蛮」さを強調しているのかもしれない。いずれにせよ、雄々しさや美しさとは結びつくイメージではない。

「アデンまで」では、白人の肉体に劣等意識を持つ日本人男性主人公が描かれていたことを思い合わせると、この作品で、若い白人男性の裸体が「暗い哀しい映画」の主役としてイローニッシュに描かれていることは看過することができない。一九三〇年代に流行した髪型の女と入墨の男は、生きた人間というよりも、「人間らしい者」であり、「亡霊のように動く者」である。「アデンまで」の語り手は、「色の対立は永遠に拭うことはできぬ。俺は永遠に黄いろく、あの女は永遠に白いのである」(5)と呻いたが、永遠に白いはずであった白人は、この短篇においては、白さを喪失して、ほとんど有色人化しているのである。

この老人の国籍ははっきりしないが、ヨーロッパ系の白人であることから、彼が象徴する役割は明確であろう。すなわち、過去の栄光を誇示するだけの、老い衰えたヨーロッパである。「その頃、女に不自由をしなかった」という彼の台詞は、宗主国が自分たちを男性として、植民地を女性としてしばしば表象してきたことに照らせば、自分たちヨーロッパが海外にたくさんの植民地を持っていたと語っていると受け取ることができる。要するに、この老人は、帝国主義時代の西洋の栄光を日本人に



誇示しているのである。「さつきのトマト・ケチャップのついていた唇が開いたり閉じたりするのを私は茫然と見つめていた」のは、日本人の主人公が、老いて醜くなった西洋人の彼に、もはや「落ちぶれたような」無残な姿しか認めることができなからなのである。

白人のこの男は徹底的にぶざまであり、醜悪である。そして作者は彼にわずかな同情も与えていない。西洋の「偉大さ」は、ここでは完全に否定されている。腐臭を放つような頹廢がここにはある。「アデンまで」においては、日本人男性主人公は、周囲の白人たちから軽侮のまなざしで見られる存在であった。だが、この作品においては、その関係は逆転しているのである。

### 三 中年白人女性

物語の後半では、中年の白人女性が登場する。彼女は西洋人の中年女性によくある肥満体ではないが、目尻に細かな皺があることから、四〇歳を越えていると「私」は見当をつける。つまり、一九二六年頃に生まれ、第二次世界大戦終結時は二〇歳前後だったということになる。子供はいないというが、夫がいるのかもわからない。国籍はイタリヤと自分から語っている。主人公は、息子のために編み物をしている妻の姿を彼女に重ね合わせる。女性が持つ母性的な側面が強調されるのである。神学校に通っているという一二、三歳の男の子の写真を、甥だといって主人公に示す。フィレンツェにいうとこの少年は、一九四四年頃の生まれということになる。神学校生徒というが、もしかすると家庭が貧しいのではないだろうか。将来は東洋に布教するというので、彼女は日本から絵葉書を送っているという。聖書を押しつけられたことから、「伝道師だな。このオバさんも」と語り手は内心呟く。東京や軽井沢で、日本語で伝導している外国人伝道師の姿を「私」は想起する。彼らは地味な恰好をして、「このオバさんのようにあまり魅力のない中年女だった」。

彼女が部屋までわざわざ持ってきた聖書を、主人公はばらばらと捲る。赤い印は彼女がつけたもののルカによる福音書第七章にある言葉である。ここで遠藤は、この「オバさん」が「罪の女」であることの伏線を張っているのである。

ナイトクラブでこの「オバさん」がストリップパーとして登場して、「私」は度肝を抜かれる。「初めは信じられなかったが、たしかにオバさんだった。目ばりを入れたり、口紅を強くぬっているがオバさんの顔にちがいがなかった」。編み物をしていた母性的な女性が、今度は一転して性的誘惑者として再登場するのである。ここでも白人と日本人の「見る／見られる」関係は、「アデンまで」とは転倒している。

「あのストリップパーは何国人かね」

「さあ」ホステスは自信なさそうに言った。「アメリカ人じゃない？」

「聞いてきてくれないか」

「どうして。そんなに気に入ったの」

それでもホステスは立ちあがって事務室に行ってくれた。自分では仏蘭西人だと言っているが、当てにはならないでしょうとの返事だった。香港から来たのである。名前はマドモアゼル・マリイ・ローズと言うが、これは勿論、芸名である。(6)

ホステスが「アメリカ人じゃないの」というのは、占領期以来、日本国内で見る外国人の多くがアメリカ人であったことの反映である。「アデンまで」の老朽船マドレーヌは、マグダラのマリヤに由来する名前だが、ストリップパーのマリーは、聖母マリヤに由来する名前である。罪の女を自覚する「オバさん」がマリーを自称していることには興味をそそられる。

ホテルの部屋に戻った主人公は、「オバさん」が置いていった聖書を手に取り、「多く愛する者は多く許さるるなり」という箇所を改めて読み、「その聖句の背後に私はオバさんの人生をぼんやりと

想像した」。翌日のロビーで彼女に会った「私」は、「聖書は世界で一番立派な本です」という彼女の言葉に「そうだろうと私は素直にその言葉を今は信じてきた。私はもちろん、あのナイト・クラブで彼女を見たなどとは一言もいわなかった」。聖書がこの女性の全人生を支えていることがわかったからである。

ここでは、この中年の白人女性に対する人間的な共感がある。そこが前半に登場する老人への対応と大きく異なる点である。神学校に通う甥のために編み物をしている「あまり魅力のない中年女」がストリップパーであったというギャップには、苦いユーモアがある。カトリック司祭は独身を義務づけられているゆえ、彼女の甥は、やがて信徒たちに性的な貞淑を説く立場になるわけだから。

彼女の肉体はまだ性的魅力を失ってはいない。音楽に合わせつつ、彼女が「腰をふりながら、ブラジャーをとり、それをうしろに放りなげ」と、露わになった乳房に「日本人の女はあんなのみると自信なくなるわよ」と日本人ホステスは言うのである。

この女性が、フランス人を騙るイタリア人であることも面白い。イタリアは第二次世界大戦中、ナチス・ドイツとともに日本の同盟国であったが、ムッソリーニ政権崩壊と戦後の庶民の苦労は並大抵ではなかったからである。彼女が「子供がいませんと言ったのか、独身だと言ったのか今では記憶がはつきりしない」とわざわざ語り手がいうのは、戦中戦後の彼女の苦労を、同年代の人間として思いやっているからである。

白人女性との恋愛に挫折して帰国する「アデンまで」とは異なり、この作品にあつては、若さを失いかけた白人女性は、自らの肉体を商品として、日本にまで出るばる出稼ぎに流れてくるような存在である。彼女は主人公の日本人男性にとって、人間的共感の対象となっており、フランツ・ファノンの的な、有色人男性が白人女性に対して抱く性的欲望の対象ではなくなっている。「月光のドミナ」（一九五七年）で描かれた、日本人男性を圧倒する神々しいヴィーナスのごとき白人女性の裸体はここにはない。そして、もはや若くはない、衰えつつある白人という点で、前半に登場した老人とこの中年女性とは共通している。

ナイトクラブの司会者は、「二世のような」と書かれている。日本人男性の容姿で、英語が上手であるということであろうか。半分外国人のような存在の「日本人」が描き込まれていることも、この時代の東京風俗に対する作者の批評を暗示しているといえよう。

## おわりに

以上見てきたように、この作品では、ヨーロッパの白人世界は、完全に相対化され、「アデンまで」で描かれたような、激しい葛藤の対象たることをやめている。物語の冒頭では、深夜に部屋の中に現れる白人の娼婦が描かれる。日本人男性に白人女性がすすんで自らの肉体を売るわけである。敗戦から立ち直り、オリンピック開催を経た国際都市東京が、すでに白人世界に対抗する勢いをつけたった日本の姿を代表しているかのようである。

帝国主義的な覇権を誇った白人世界はすでに過去のものとなったとの認識を、この小説ほどあからさまに描き出した作品はない。一方に黒人を主人公として描いた「ポーラン・シリーズ」を置いてみると、遠藤がポストコロニアル時代における有色人種の地位上昇と、白人の相対的下降とをはっきり認識していたことは歴然としている（7）。

日本の現実を虚心に見れば、広告写真に多く白人男女モデルが使われることから明らかなように、二一世紀の今日でも、人体の美的基準をアジア人ではなく、白人に置く意識が日本人には強い。それゆえ、この作品は当時実在した風俗を描いたというより、むしろあり得べき世界を予言的に描いたというべきであろう。この作品に登場する白人たちは「変な外人たち」なのであり、正常／異常の区分に照らせば後者に属する者たちなのである。白人を優秀とし、有色人を劣等とする近代西洋人が持っていた価値意識の転倒が、ここでは描かれている。

この作品から、さらに一〇年を経ると、経済成長がもたらした物質的な豊かさにより、すっかり思

い上がつて白人を見下す醜悪な日本人の姿を、遠藤は「ワルシヤワの日本人」（一九七八年）で描き出すのである。

- (1) 初出は『小説新潮』一九六六年一月号。単行本『うちの女房、うちの息子——第三ユーモア小説集』（講談社、一九七四年）に収録。『第三ユーモア小説集』（講談社文庫、一九七七年）に再録。
- (2) 遠藤周作『第三ユーモア小説集』講談社文庫、一九七七年、二二二―二二三頁。
- (3) SEZ 6、二二二頁。
- (4) 同右、二四頁。
- (5) 同右、二三頁。
- (6) 『第三ユーモア小説集』、二一八―二一九頁。
- (7) 眞嶋亜有は、『「肌色」の憂鬱——近代日本人の人体験』（中央公論社、二〇一四年）第六章で、遠藤周作の「人種差別体験論じているが、「アデンまで」で提示された思想を固定的に捉えてしまっている。しかしながら、本稿で見たように、彼の白人世界に対する認識は、徐々に変容していったのである。

## 第四節 「ワルシャワの日本人」「カプリンスキー氏」

——見つめ返される日本人

### はじめに

本節では東ヨーロッパの現代ポーランドを舞台にした二つの短篇を取りあげる。

ポーランドは、遠藤にとって特別な国であったようだ。遠藤の作品は広く海外に紹介されているが、ポーランド語にも多数翻訳されている。一九六九年には『海と毒薬』が、一九七一年には『沈黙』が、一九七六年には『おバカさん』、一九七八年には『わたしが・棄てた・女』、一九八七年には『侍』、一九九六年には『深い河』が、それぞれ出版されている(一)。一九七六年一月、遠藤は同国ピエトウシヤック賞を受賞した。授賞式のためにワルシャワに行き、この機会にアウシュビッツ収容所跡を訪問している。

ポーランドは、カトリック信徒の国でありながら、第二次世界大戦後はソヴィエト連邦の共産主義圏に属することとなった珍しい国である。クラコフ出身の教皇ヨハネ・パウロⅡ世が即位したのは一九七八年のことで、これは共産主義国家から教皇が選出されたことから大きな驚きを持って迎えられた。第二次世界大戦中はナチスへの抵抗運動に関与した人である。一九七九年にポーランドを訪問した際は、共産党も秘密警察も、教皇訪問を阻止したら暴動が起きる可能性があったことから、これを承認せざるを得なかったといわれる。帰国後の一〇月には国連安保総会に参加して、人権尊重が行われない東側諸国を批判した。これがポーランド国内の反体制運動を刺激した。一九八一年にはワレサの「連帯」指導者と会見をしている(二)。

遠藤がポーランドを訪れたのは、ポーランド民主化が進み始める少し前の時期に当たるが、同国訪問が二つの作品を生むこととなった。「ワルシャワの日本人」(『野生時代』一九七八年四月号)と「カプリンスキー氏」(『文學界』一九七九年一月号)である。同じヨーロッパのカトリック国といっても、西側陣営に属するフランスと、東側陣営に属するポーランドでは、東西冷戦期のこの時代、全くことなる二つの世界があったといっても過言ではない。一九七〇年代半ば、高度経済成長を遂げた日本人にとって、東ヨーロッパは、白人世界であるにもかかわらず、目にはつきりと見える貧困ゆえに、蔑みの対象ともなっていたのである。そのあたりを、遠藤は辛辣なまでに巧みに描き出している。なお、「ワルシャワの日本人」は、一九九五年にイタリア語に、一九九六年にフランス語にそれぞれ翻訳されている。ポーランド語には翻訳されていない。「カプリンスキー氏」の外国語への翻訳はない。

### 一 「ワルシャワの日本人」

この作品は、ワルシャワ空港に到着したポーランド航空機から、日本航空の海外団体旅行のツアーバックを肩から下げた一〇人ほどの日本人中年男性グループが降りてくる場面から始まる。旅行会社には雇われた現地の日本人ガイド清水が彼等を出迎えた。清水はポーランドにすでに二年いる留学生である。関西弁を話す団体旅行客たちは、工場見学のためにヨーロッパにやってきた同業者であり、ロンドン、パリをすでに訪れてきたのである。古ぼけた市電やワルシャワ市民の長い行列に、男達は一様に驚く。ホテルのロビーも暗い。彼らは女と遊ぶためにわざわざポーランドまで来たのである。

「女。女が穴場やがな。ここは」とリーダー格がいう。ホテルのベッドは堅く、スタンドの傘が破れかけており、バスルームの蛇口から出る湯は赤く濁っていた。トイレットペーパーも粗末である。す

べてが西ヨーロッパとは違っている。

主人公今宮は長崎出身で、戦争中に中国大陸にいた。雪と泥で汚れたワルシャワの街は、満州の長春のようだと彼は思う。日本人たちは、食事をするのも、土産物を買うのも、すべて全員が固まって行動する。ガイドの清水は、こうした日本人を内心では軽蔑している。彼等はポーランドの貧しさをあからさまに軽蔑しているからである。それゆえ清水は、生活のために、機械のような存在として自分を考えるようにしている。共産主義とカトリックが共存しているという話をガイドとしてするが、「これら日本人乗客の誰一人の関心も好奇心もひき起さぬことぐらい、百も承知している」。絵葉書に出ている場所を紹介すると、日本人たちは、争うように車外に出てカメラを向ける。

土産物屋の娘やレストランで隣の席になった男から、コルベ神父のいた国から来たのですねと言われ、「コルベって一体、何者や」と日本人は訊ねる。ポーランド人の男性が手短かに話をしてくれるが、今宮はふと、幼い頃に長崎で出会った外国人宣教師たちを思い出した。「丸い眼鏡の奥から悲しそうな微笑を眼にかべた頬肉のおちた顔」、もしかすると、あの宣教師たちのなかにコルベはいたのかもしれない。

日本人たちは、ある晩、女を買いにナイトクラブへと繰り出す。「こんばんわ、こんにちわ、みつびし、そにい」という女がいる。今宮も小柄な栗毛の娘を選び、彼女のアパートまで行く。部屋の壁に宗教画や両親らしき夫婦と少女の写真があった。そしてその横には一人の男の肖像画も貼り付けてあった。見覚えのある顔だった。

バスルームからバス・ローブのまま出てきた女は、その肖像画と向きあい、じっと見つめている今宮に小さな声で教えた。

「コルベ」(3)

物語はこのようにして唐突に終わる。この作品で容赦なく描かれる日本人の醜悪さは、比類がない。日本人の海外団体旅行は、一九七〇年代から盛んになった。「ワルシャワの日本人」の登場人物たちが下げているJALパックのツアーバックは、カメラを首から提げて、団地で傍若無人にふるまう日本人を象徴的に示す記号として用いられている。娼婦が「みつびし(三菱)、そにい(ソニー)」と口にするが、実在する企業名を敢えて作者が記していることにも驚かされる。日本人はいつからそれほど傲慢になったのか。ここでは、白人のヨーロッパ世界が、経済的豊かさを達成した日本人にとって、理想でも憧れでもないものになっている。美しい白人女性は、金で買う存在となっている。

日本人たちは、ポーランドの人々の暮らしぶりを、見下している。彼等を眺める視線は、最悪の水準での「観光のまなざし」(ジョン・アーン)であり、対等な人間として見ているとは到底言いがたい。今宮もそうした日本人と大同小異なのであるが、小説の最後の場面で、幼い頃に「こにちは」と挨拶したコルベの肖像画から、見つめかえされるのである。いわば見つめる主体と見つめられる客体が入れ替わるのである。

一九五〇年代のリヨン留学時代、戦犯国出身の日本人ということで、周囲のフランス人たちからの突き刺さる視線、あるいは押しつけがましい「善意」の視線を嫌うほど浴びた遠藤は、黒人を作品に登場させることで、見られる側の屈折した心理をくり返し描き出した。「ワルシャワの日本人」は、そのような日本人が見つめる側にまわったときに、いかに人間らしい感情を喪失するかを描くとともに、一人の司祭のまなざしが、転落しかけた日本人をまなざすことによって覚醒させる瞬間を描いた作品とあってよいだろう。

## 二 「カプリンスキー氏」

「カプリンスキー氏」は、ワルシャワを訪れた日本人作家が、アウシュビッツ収容所のサバイバーであるクラコフの作家に現地を案内してもらおうという筋立ての作品である。

作者その人を思わせる語り手「私」は、妻と、日本人留学生「I君」の三人で、ポーランド人作家カプリンスキー氏の案内で中世の町並みが残るクラコフを案内してもらおう。「私」と同じくらい下手なフランス語で挨拶をした彼は、クラコフの町を背景とした作品ばかりなのだという。「私」は自分と異質な作家と一緒にいることで疲れを感じ始める。明日はどこを案内しようというカプリンスキー氏に、「私」はアウシュビッツ収容所に行きたいのだと告げる。妻はやめるといっているので、彼女を案内してやってほしいと付け加えると、作家は自分が案内するという。自分はそこにいた人間だからだといって。

「私」がアウシュビッツを訊ねたいと考えたのは、「人間がどこまで墮ちるかと言うことよりそこで人間だったある神父の死の話が私を前から感動させていた」からであった。改めていうまでもなく、コルベ神父のことである。到着すると、カプリンスキー氏は、「私」と「I君」を黙って先導する。彼は何もいわない。何を考えているのか。

さっきから私には彼の心がわからなくなっていた。この人がこの収容所でどんな経験をしたのか、何を見たのか、こちらも好奇心で問うのをはばかったし、向うも話し手はくれなかった。「……」私がカプリンスキー氏ならば二度とその場所に戻ってきたくはない。まして日本から来た男を案内しようという気にもなれぬだろう。なんのために彼が私たちの前を歩き、何を今、考えているのか、私にはわからない。(4)

やがて無数の写真が壁面いっぱい飾られている廊下に出た。「写真はすべて、ここで殺された囚人たちの顔だった。囚人たちはいずれも眼を大きく見ひらいている。私たちを凝視している」。

カプリンスキー氏がそばに立っていた。彼はゆっくりと右手をあげ、その一つの写真を指さした。丸坊主にされた青年のような若い女性がやはり眼を見開いて、私たちを見つめていた。

「私の姉です」

彼は言った。そしてその顔に昨日から私がたびたび見たあの諦めたような微笑がゆっくり浮かんだ。(5)

このようにして物語は終わる。この作品でもやはり、アウシュビッツを見にいった主人公は、逆に写真から「凝視」される。玩具の山がある部屋があり、そこには女の子の人影があった。両目を見開いたまま、両手を広げている。「その眼は怖ろしかった」という記述もある。見る側にいたはずの間が、見られる側になる。しかもそれは、単に眺めるというのではなく、魂に突き刺さるようなまなざしによってである。

## おわりに

アウシュビッツ収容所を訪れたときのことを、遠藤はエッセーで書き残している(63)。これによると、クラコフを訪れた遠藤は、ポーランド人ジャーナリストからアウシュビッツ訪問を誘われたのだった。遠藤が当惑したのは、「収容所を見物に行くのはできそうもなかった」からである。躊躇する遠藤に、ジャーナリストはぜひ行って欲しいのだと言葉を重ねた。そして、自分が収容所のサバイバーであることを告げたのである。だから「よく説明できるのです」といった彼は、しかし到着すると、小説にあるように、黙々と遠藤を案内するばかりだった。「収容所のこの静かさと、彼の深い沈黙とが三百万人の墓場についてのただひとつの正確な説明であることを、私もようやくわかりかけていた」と遠藤は記している。ホテルに戻ると、遠藤は自分の靴を新聞紙に包んで棄てに行ったという。「恨みと呪いと悲しみのしみこんだ地面に触れた物をそれ以上、身につけられなかったからだ」。

村松剛が翻訳したロベール・メルル『死はわが職業』について、遠藤はこのエッセーで触れている。

収容所長をモデルにしたこの長編小説で、自分が最も衝撃を受けたのは、彼が自宅でよい父親として妻子と夕べの一時を過ごした記述であると記している。「彼等を不気味な人間と思うべきではない。南京の虐殺に加わった日本兵士だって家庭ではよき夫、よき父親だったろう」。彼等は我々と変りなく、いや、我々自身が彼等なのだ」。このように述べた遠藤は、しかし、虐げられた囚人たちのなかにも人間的な愛を失わなかった人がいたように、加害者側のなかにも「自分の力の及ぶ範囲で、人間的優しさを囚人たちに示した人がなかったとは私にはどうしても思えない」と想像を巡らしている。これはいかにも遠藤らしい発想であって、ナチスと囚人という単純な二項対立で割り切ることをしないのである。

コルベ神父についての記述はこのエッセイの最後に出てくる。ポーランドのあちこちで、遠藤はコルベ神父について訊かれたという。他人の囚人の身代わりになって死んだこの司祭に対する感銘は、小説「カプリンスキー氏」に書かれているとおりである。

小説の主人公のように、自分からアウシュビッツ収容所を訪れたいと考えたのではなく、元囚人のジャーナリストから誘われて、葛藤を経て訪問を決断し、足を運んだという事実には注目したい。「見物に行くのはできそうもなかった」という言葉が全てを語っているが、要するに彼はアウシュビッツのような場所は「観光」の対象であってはならないと考えているのである。「ワルシャワの日本人」に登場する団体ツアー客は、文字通りの観光客であり、ガイドの案内にしたがって、車外に飛び出してはカメラを向ける。それはある意味で暴力的な視線を投げかける行為にほかならない。遠藤は沖繩を訪れたときにも、激しい戦闘が行われた場所を案内されることを断ったと、同じエッセイのなかで記している。作家としてというよりは、人間としての慎ましさの問題かもしれないが、歴史的な負の遺産まで観光地にしてしまうのが現代という時代である。遠藤はそうした「観光の視線」に徹底的に拒否しようとした作家であった。

- (1) 国際交流基金「日本文学翻訳書誌検索」に拠る。[http://www.jpfi.go.jp/JF\\_Contents/InformationSearchService](http://www.jpfi.go.jp/JF_Contents/InformationSearchService) (二〇一六年一〇月一日確認)。
- (2) 松本佐保『パチカン近現代史——ローマ教皇たちの「近代」との格闘』中公新書、二〇一三年、第八章「ポーランド教皇の挑戦」参照。
- (3) SEZ 8、三〇八頁。
- (4) 同右、二七〇頁。
- (5) 同右、二七二頁。
- (6) 遠藤周作「アウシュビッツ収容所を見て」SEZ 13、二六五―二七三頁。

## 第五章 アジア——中国人・日本人・インド人の表象

### 第一節 「夏の光」——満州における中国人

#### はじめに

本章では、黒人以外の非白人の表象を取り上げる。具体的には、中国人と日本人、そして「褐色の白人」であるインド人である。

遠藤が日本の植民地であった満州の大連で育ったことは、東京で生まれ育った辻邦生と比較するとき、新たな光を帯びて見えてくる。それは、大連が「有色の帝国」の現場にほかならなかったことであり、植民者たる日本人と現地人中国人の間に厳然として存在する優劣関係を、少年時代の遠藤が目当たりにしてきた事実である。

遠藤はフランス留学から帰国して「アデンまで」「白い人」に始まるヨーロッパ人の帝国主義意識を強く前景化した作品から出発したが、彼は西洋批判に止まらず、『海と毒薬』以後は、日本人の帝国主義意識に向き合う作品を書き始める。これと対照的なのが辻邦生で、彼にはそもそも西洋の帝国主義に対する批判意識が乏しいが、近代日本の帝国主義に対する批判も、辻のテクストから見出すことは困難なのである。

本節で取り上げる短篇「夏の光」(1)は、遠藤が「有色の帝国」たる戦中の日本を真正面から取り上げた作品である。物語の舞台は大連であり、時代は太平洋戦争開始から二年後の昭和十八年、すなわち一九四三年である。語り手は医師の父親を持つ日本人の少年である。少年のまなざしに映る満州の日本人と現地が、このテクストにはどのように描かれているのかを分析してみることにしよう。

#### 一 仕立てられる犯罪者

一年前の秋に両親とともに大連にやってきた語り手の少年「ぼく」は、以前から大連にいた伯母の家に二週間滞在し、大連高商に通う従兄とともに海水浴を楽しんだ。内地では生活物資が欠乏しつつあったが、「この植民地では水泳を楽しめるぐらいの余裕があった」のである。家族のもとに帰るために大連駅に来る場面から小説は始まる。「八月のはじめの日だったからホームは満州国人の家族やゲートルを巻いた学生や国民服をきた日本人たちで雑踏していた。その間を白い腕章をつけた憲兵が歩きまわっている」。列車が動き出す。

斜め向こうには満人の母親が夏蜜柑の皮をむき、眼の細い白い幼児にやっている。彼女はぼくが眺めているのに気づくと、ニツと卑屈な笑いをうかべた。満人は日本人をみるとみんな理由もないのにあんな微笑を顔につくるのだ。(2)



このように、この小説では冒頭から、満州における植民者日本人と満州人との優劣関係が描写される。帰宅した語り手は、土産と車内で食べ残した玄米パンを母親に渡す。母親は玄米パンの匂いを感じ、「これはおぼはんにおやり」という。使用人である「満人」の老婆のことである。「井戸ばたで汗だらけになりながら風呂の水くみをしている「おぼはん」は、謝謝といって「幾度も頭をさげる」。家庭においても、街中で日々上演されているような日本人と満州人との関係が再現されているのである。

「ぼく」の父親は医者である。日本人重住宅地で中毒があったということで、父は自転車で出かけている。鉛化中毒らしいということになり、井戸水の検査を行うことになる。住宅地の人々の間で「一昨夜、住宅地を怪しい満人がうろついていたのを見たんだってさ」といった会話が出てくる。憲兵がやってくる。「憲兵が来た以上、こりや、やっぱり毒は外部の仕業だね」。「工場で働かせとる李が怪しいという話をききましたぜ」という言葉に、「ぼく」の父親は「そりや誤解や」と即座に返すが、「なあ——李が臭いというのはみんなの一致した推測ですぜ」という者がいる。李を「ぼく」も知っている。便所のくみ取りに来るからである。彼は「ぼくらをみると意味のない卑屈な笑いをいつも顔いっぱい浮べた」。「暑気で腐りかかった残飯を古新聞で包んで」母親がやると、「頭をバツタのようにさげながら庭の隅に坐り、新聞紙をひろげて飯を手づかみでたべるのだった」。

李はしかし、「日本人の工員たちに半殺しになるところを父や工場の幹部の人たちが説得したために助かった」。李の代わりに家に来るようになった「満人」は、「胸のうき出た肋骨が見えるほど瘦せこけた小さな男」で「くぼんだ眼に例の満人特有のうすら笑いをうかべた」。

ふたたび日本人住宅地で中毒事件が起きる。日本人たちが殺気だってくる。「警察は何もせん」。「李が中毒事件の犯人という証拠がないもんですから」。「すると幹部はなにか、日本人より満人の生命の方が大事だと言うのか」。「こうなっちゃ、李を検挙するより仕方がありません」。「李一人を検挙すれば、みんな安心するんだ」。こうしたやりとりがあり、李をかばおうとしていた父親も、最後には黙る。李を取り調べることになったと聞いて、「歓声をあげながら大人も子供も警官を先にたてて河のように満人部落にむかって歩いていった」。やがて「帰ろう」と促した父親に、「なぜかぼくはその父を初めて憎み、初めて軽蔑した」。

## 二 「有色の帝国」の植民地

このように、大連における「満人」のようすが、少年のまなざしで描かれている。これは遠藤自身が少年時代を大連で過ごしたという伝記的な理由からではおそらくはない。ここにあるのは作者の周到さであって、内地から来て間もない日本人の少年と設定することによって、現地では普通のことになり、透明なものになっている。「植民地の日常」が、真新しい世界として少年の目に浮かび上がっているのである。

満州の中国人たち。彼らは、日本人に対して、それがたとい子供であったとしても、卑屈な笑いを顔に浮かべねばならない立場におかれている。大連という植民地空間における支配者は日本人だからである。彼らは腐りかけた食物を与えられても、何度も頭を下げてそれをありがたがり、手づかみでそれを食べる。日本人住宅地と「満人部落」は区別されていて、その生活格差のすさまじさが自ずから想像されるようになっていく。

大連での日本人の暮らしぶりは、『海と毒薬』（一九五七年）第二章でも、夫とともに移住した女性の視点から描かれている。

はじめの頃、わたしはこの植民地の街をめずらしく思いました。手入れの行き届いたアカシアの並木もロシア風の建物も薄ぎたない日本の街とはちがっています。軍人も市民も日本人であれば肩で風を切って歩きすべてが活気にみちていました。

「満人はどこに住んだるの」と夫にたずねると、

「街のはずれで」と彼は笑いながら「そらあ、穢い所だぜ。大蒜臭うて、お前にやとても通れんぜ」「……」

彼の言う通りこの街に来て二カ月もたたぬ内、わたしは日本人として一番はじめに覚えねばならぬことが満人にたいする態度だとわかってきました。たとえばわたし達の隣にいる雑賀さんや奥さんの家では十五、六歳のボーイを使っています。庭一つ隔てて、雑賀さんや奥さんがそのボーイを罵ったり、叩いたりする音がきこえます。わたしは始めの頃、その罵声を聞くのが怖かったのですが、やがて、それも馴れていきました。叩かねばすぐ怠けるのが満州人の性格だと夫も言っていました。一週に三度、わたしの家に女中代わりにアマが来るようになると、やがてわたしも彼女を理由もないのに撲るようになりました。(3)

大連時代の遠藤の家庭でも、満州人の少年が使用人として働いていた。遠藤の父親は銀行員であったし、事件は虚構と考えられるが、戦時中の満州を知る人々が、この作品が発表された当時にはまだ数多くいたことを考えれば、ここに描かれた世界が全く荒唐無稽なものであったとは考えにくい。文学的な誇張があつたとしても、植民地における日本人の優越意識や差別感情はこのようなものであつたに違いない。

大連で青少年期を送った清岡卓行(一九二二—二〇〇六)は遠藤と同世代の詩人・小説家だが、彼の「アカシアの大連」(一九六九年)が甘美な叙情に彩られ、大連で生活したことのある日本人のノスタルジーを掻き立てる作品となつているのに対して、「夏の光」は、むしろ日本人読者に居心地の悪さを感じさせるものとなつている。それは作者の批評意識であるといつてよい。多くの日本人が見たくない世界を見せようとする決意が遠藤には常にあつた。それはヨーロッパ世界に対してもそうであつたし、日本についても同様であつた。何かを美化して描くという方法は、遠藤にはなかつた。

大連が美しい計画都市であつたことは、清岡の一連の「大連もの」(4)で描かれているとおりである。アカシアが咲き誇る季節の美しさは比類がないといわれる。遠藤が大連を描くとき、そうした景観美は無視される。清岡が描く大連の美しさは、辻邦生が描くパリの美しさと似ている。要するに、どちらも、支配層の視線に自らの視線を重ね合わせて都市を眺めているのである。それに対して、「夏の光」の大連は、美しいというよりは、むしろ人間の暗い側面が露出する醜悪な空間である。夏の光の下、「アカシアの樹の下で満人の馬車曳きが上半身、裸のまま死んだように眠っている」。「果樹園ではすっかり水気がぬけて白い埃をかぶつた林檎や梨の葉が力なくうなだれている」。

「夏の光」では、妹が伯母からもらった少国民童話集に書かれていた賛美歌を口ずさむ場面が三回描かれている。それは次のようなものである。

茨のかんむり かぶせられ

つばきせられ 鞭うたれぬ

わが主エスは 人の生贄(5)

「ぼく」は妹に「阿呆、アーメンの歌を歌う奴は非国民やで」と怒鳴る。この作品の一家はキリスト教徒という設定ではないが、さりげなくこのようにキリスト教的な要素を描き込むことによつて、宗教的視点が作品に導入されていることには、やはり注意を払う必要がある。作者はカトリック作家であることを常に自覚しており、ここでは犠牲者李とイエスとがさりげなく重ね合わされているのである。日本人住宅地での相次ぐ中毒事件は、果たして誰かが井戸に毒を投げ入れたことが原因なのか。そうだとすると、犯人は誰なのか。それは最後までわからない。ただ、空間の支配者である日本人の動揺を鎮めるためにだけ、満州人である李は犯人に仕立てられるのである。

尊敬していた医者のお父さんに「ぼく」が憎悪と軽蔑を覚えるのは、長いものに巻かれ、周囲のいいなりになつてしまう姿に少年らしい正義感から幻滅を覚えるからである。この一行は、日本人の大人たちの救いのない言動が描かれるなかで、微かな救いの光を作品に投げかけている。西宮出身で、大連

に移住してきたこの少年は、来年は大連高商を受験することになっている。しかしその一年度に太平洋戦争が終結することを読者は知っている。この少年は帝国日本の滅亡を植民地で体験することになるはずだ。

小説の最後は自宅から下駄を履いて外にでた「ぼく」が「白く燃えた陽に照りつけられながら海のように広がる高梁の畠」を眺める光景である。「かすかな音もきこえなかつた。ぶきみなほど静かだつた」。その時に李がどのような仕打ちを受けているのかを想像し、読者は戦慄を覚えずにはいられない終わり方となっている。

## おわりに

「夏の光」における李が、同じ作品集『最後の殉教者』に収録されている「コウリツジ館」で、白人フランス人青年たちによって下宿の盗難者に仕立てられてしまうモロツコ出身の黒人留学生ポーラんと同一の立場に置かれているとする上総英郎の指摘は慧眼といつてよい(6)。フランス本国人の植民地での黒人差別と、日本人の植民地での中国人差別が重なる。遠藤は「有色の帝国」日本でヨーロッパと同じ行為が行われていたことに意識的だったのである。「コウリツジ館」は一九九五年『新潮』に発表されているが、三年後、同じ『新潮』に「夏の光」を発表したのは、おそらく偶然ではないと考えるのが自然ではないだろうか。前者が書かれたことよつて、後者が書かれたのである。

遠藤はこの二ヶ月後、「地なり」を発表した。これは関東大震災における大杉栄殺害事件をモチーフにした作品である。「夏の光」で植民地を舞台に描かれた中国人差別が、今度は日本内地における同胞差別にスライドして描き出されるのである。

(1) 「夏の光」の初出は『新潮』一九五八年八月。単行本『あまりに碧い空』新潮社、一九六〇年に初収録。

(2) SEZ 6、二四七―二四八頁。

(3) 清岡の「大連もの」は、『清岡卓行大連小説全集』上下(日本文芸社、一九九二年)に集成されている。なお、清岡は辻邦生と同じく東京大学フランス文学科で渡辺一夫に師事した人である。辻邦生の東大入学は一九四九年だが、清岡は七年間在籍し、一九五一年に卒業しているので、在学の時期が二人は重なっている。清岡もポストコロニアリズムの観点から興味深い作家である。

(4) SEZ 1、一三三―一三四頁。

(5) SEZ 6、二四八―二四九頁。

(6) 上総英郎「解説」(遠藤周作『最後の殉教者』講談社文庫、一九八四年、二二〇頁)。

## 第二節 「地鳴り」——関東大震災の日本人

### はじめに

一九五八年一〇月『中央公論』に発表された短篇「地なり」(1)は、一九二三年九月一日に発生した関東大震災における大杉栄殺人事件をモチーフとした作品である。この小説を発表する二ヶ月前に、遠藤は前節で取り上げた「夏の光」を『新潮』に発表している。前年に太平洋戦争下の九州帝国大学でのアメリカ軍捕虜生体解剖事件をモチーフにした長編小説『海と毒薬』を発表していた遠藤は、引き続き日本人の「悪」の問題について追求していた時期だったのである。「地なり」を発表した同じ月に、遠藤は短篇「松葉杖の男」も『文學界』に発表している。この作品は、太平洋戦争中に中国大陸で行った加害行為の記憶に戦後苦しむ日本人男性を描いたものである。

遠藤がなぜこうした日本人の残虐行為を描く作品を創作したのかといえば、それは彼がフランス留学から帰国して以来、自分が日本人であるという事実には強いこだわりを持っていたからである。フランス人の有色人差別、その背後にある帝国主義と植民地主義——遠藤はそれを留学で思い知らされたが、近代日本もまた「有色の帝国」であり、西洋人と同様の他民族差別を行っていたことを、植民地大連で育った遠藤は改めて認識したのである。それゆえ、植民地主義に対する怒りは、ヨーロッパに向かうだけで終わるわけにいかず、日本に対しても向かうこととなったのである。それは自己の深淵を目を背けずにのぞき込む姿勢である。遠藤は、辻のように近代ヨーロッパを理想化する傾向や、村松のように天皇を中心とする日本の伝統を理想化する傾向には乏しく、西洋でも日本でも、歴史的な暗部をこそ進んで直視しようとする傾向があった。

### 一 再表象された大杉栄殺害事件

「地なり」は、長野県蓼科にある小学校校長が、避暑に来ていた小説家をPTA講演会に招き、慰労の席で地酒をふるまいながら、関東大震災時に目撃した大杉栄殺害事件について語るといふ一人称独白体の作品である。「先生はお幾つです。はあ、三十五歳ですか。するとなんだ。大正十二年の生まれですな。関東大震災のあった年だ」という言葉から、物語の現在が昭和三年、つまりこの小説が発表された一九五八年であることがわかる。校長自身は五〇代半ばであることもわかる。目の前の小説家が関東大震災の年に生まれたということを知ったことから、校長は「今日一つ平生から心につかかっていることを聞いてもらおうという気になりました」といって大杉栄殺害事件を語り始めるのである。

校長は震災時は兵役にあり、東京の第一師団に入隊して憲兵隊に所属していた。戒厳令が敷かれた震災翌日、彼は中隊命令で麹町の憲兵分隊に転属した。分隊長は天洲大尉、副官は森曹長だった。九月二日、「流言飛語」が飛び交い、なかでも朝鮮人暴動の噂が人々を戦かせた。三日目の夜、砲兵工廠の毒物が壕に投げ込まれたとの自警団の呼びかけを聞いた。第一師団所属小隊が砲兵工廠の警戒に当たっていたため明らかな流言であると確信した「わたし」は天洲大尉を見るが、うすら笑いをした分隊長は「放っておけ」といふ。「朝鮮人が掴まれたらしい」といふ言葉が聞こえ、憲兵隊は闇の中で、殴る蹴るの暴行を受けている中年男を発見する。「鮮人らしいのを一人、掴まえましたところで、濠ばたにかくれて毒物を水に流そうとしたりした」。自警団の男たちのように「わたし」は息を呑んだ。「棒を持った者。日本刀を腰にさした男。いずれもまるで顔中ギラギラ光って、肩で息をし

て眼だけは獣みてえに大きく開いている。まるで女に欲望をみたしたあのような顔でした。「……」わたしは眩暈がしそうだった。「……」この人たちも平生ならばわたし等と同じ平凡な人間なんだね。愛想のいい八百屋、子煩悩な煙草屋、働きの職工、そうした市民の顔がこんな凶暴に怖ろしく歪んでいる。ここまで変わる事ができる。先生、すると人間の顔というものはどちらが本当なんかね。顔をどこまで信用してよいもんかね」。実際は、その男は朝鮮人ではなかったのである。

一週間後、街中もようやく少しは落ち着きを取り戻しつつあり、久しぶりに外出許可が出たが、早めに戻った「わたし」は、天洲大尉に命じられ、サイドカーで淀橋警察署に向かう。署の特高二人と天洲大尉ら三人で、豊多摩群柏木にある社会主義者大杉宅へと向かったのである。洋装の女性と少年を連れた、白い背広の紳士が現れると、彼等三人を車に乗せて麹町署の憲兵分隊へと戻った。取り調べはなかなか終わらない。ようすをうかがいにいくと、低い声のやりとりが聞こえ、突然「椅子の軋む音や何かが落ちる音」がした。庭に出ると、隊長室の窓が見えた。洋装の女性に天洲大尉が近づき「二人の影がもつれあいながらまるで海草みたいにゆっくり椅子から立ちあがって女の身体は崩れてしまったので、窓には大尉の横顔だけが映とつたが、その顔は眼を細めて何かに酔ったようでした」。その後、「火をつけたように泣きわめく子供の声」が隊長室でしばらく続いたと思うと、急にその声が静かになるのをじつと聞いとりました……。こうして三人の殺害が行われたのである。「わたし」はその後、師範学校に入り、教職に就いた。「あんたはどういう動機で小説家になったか知らないが、わたしの場合はあの震災直後の経験がなければ師範学校なんぞ入らんかったでしょう」。

あの九月一日の震災からこの十六日の事件まで今のわたしにはまるで悪夢みたいに思うとります。だが悪夢ならば忘れることもできるが忘れられんことが一つある。それは先生、人間が人間を殺そうとする時のあの顔だ。「……」人間というものはいつもはそのような顔が自分にあるとは思えうとらんでしようが。自身の襲うた日、眼にみえん恐怖におびえた時、戦争の時、あの憎しみに歪んだ顔ができることもたしかだな。「……」先生はこの顔がいつかは人間からなくなると思うとられますか。わたしはねえ子供たちを教育する仕事につくはついたが、あの思い出がある限り、どうも自信のもてんものが残つとります。無邪気な学童たちと遊んどの時も、この子たちもひよつとするとあの自警団の連中と同じ顔をするかもしれない。「……」それはもうどんな立派な主義でも教育でも、どうにも変えられん宿命みたいな気がしましてな。(2)

## 二 日本人の「もう一つの顔」

一読してこの作品が、いわゆる甘粕事件、すなわち社会思想家大杉栄と婦人解放運動家伊藤野枝、そして大杉の甥で当時六歳の橘宗一が憲兵隊構内で絞殺され古井戸に遺棄された事件をモチーフにしていることがわかる。作中の社会主義者大杉は大杉栄その人であるし、天洲大尉、森曹長は、それぞれ実在した甘粕正彦大尉と森慶次郎曹長がモデルであることは明らかである。小説では、甘粕自身が三人を殺めたふうに描かれているが、この点については、実際には曖昧な点があるようだ。

この作品の眼目は、大杉殺害事件そのものにあるのではなく、普段ならば「愛想のいい八百屋、子煩悩な煙草屋、働きの職工」が、ある状況に置かれたときに、突然「凶暴に怖ろしく歪んで」しまうことにある。「人間が人間を殺そうとする時のあの顔」を、語り手の小学校長は忘れることができる。ない。

聞き手の小説家の言葉は一言も書かれていない。もっぱら聞き役に徹して、校長の話に一切の批評を行っていない。「先生は小説家だから人間を扱う商売だし、わたしも曲がりなりにも子供の教育をする田舎校長だ。どっちも心の底では何を考えてるかかわらんが、表面では人間を信じているような顔つきをせねばならんしね」と校長はいう。この校長は、好きで憲兵をしていたわけではない。徴兵で陸軍に入り、そこから憲兵に配属されて、大杉事件に関与させられたのだ。天洲らが大杉を検束した際に、彼は外で待つ少年の頭をなでていた。「あの頃の男の子は丸坊主が普通でしたが、この

子は女の子のように神をのぼしとった。やわらかな髪の毛でした」。彼が「このイヤな兵役をすませたら師範学校に入りたい」と考えたのは、明確には語られていないものの、教育だけが人間の善良性を高めることができる考えたからであろう。普通の人間が、ある状況に投げ込まれたときに、平気で他の人間を殺すこと。そこには「どんな立派な主義でも教育でも、どうにも変えられん宿命」があるような気がするといいつつも、そうした性質に何とかして抗おうとする姿勢が、イロニーに満ちた校長の言葉からは感じられる。

この短篇の優れているところは、「夏の光」で賛美歌の一節が書かれるような、キリスト教の要素が一切描き込まれていない点にある。この作品においては、作者はただありのままの日本人の姿を見つめ、それを描き出そうと努めている。救いは「年をとった惨めさというもんは結局、若い連中と違って今更、自分をどうにも変えようもない年齢になったということかもしれない」自嘲笑味に語る地方都市の小学校長の日々の営みにこそあると作者は暗に語っているようである。

関東大震災では、朝鮮人が多数虐殺された事実があるが、小説「地なり」ではこの点については詳しく描かれていない。それは短編小説という形式上、大杉栄殺害事件に絞ることで作品としてのまとまりをつけるという必要があったことに起因していると考えられる。また、詳しく描かずとも、朝鮮人に間違われた中年男が半殺しにされている場面を描くことで、日頃は普通の日本人が残酷な行為に出してしまうという事情はすでに十分に描かれていると作者は考えたに違いない。

### 三 「野蠻」の記憶の記念碑化

「地なり」で描かれる日本人のもう一つの顔、「まるで顔中ギラギラ光って、肩で息をして眼だけは獣みてえに大きく開いている」その顔は、実は『海と毒薬』でも描かれている。第三章の捕虜生体実験の直後、手術室の外に出た将校たちのようすが次のように描かれている。

「大したことではなかったですなあ」一人が突然、大声をあげた。だが彼の声はいかにも態とらしくうつろに壁にぶつかった。

「村井さん。あんた、ほんに女と寝たあのような顔をしとるが」

彼は仲間の眼を指さしてふしぎそうに言った。「眼が真赤になつとるが」

だが赤いのは指さされた将校の瞳だけではなかった。他の軍人たちの眼もまたギラ、ギラと光り、みにくく充血している。それは本当に情慾の営みを果したあとのあの血走った、脂と汗との浮いた顔だった。

「ほんに女と寝た顔じゃ」(3)

遠藤周作が小説家として優れていると知れるのは、一つは前節で指摘したように、日本人のもう一つの「顔」、すなわち状況に応じて集団心理で容易に暴力行為に走る負の側面に直面し、それを赤裸々に再表象する勇氣を持つていたことである。彼は「野蠻」の記憶を作品にすることで、いわば記念碑化しているのである。この作品は英訳されることによって、国際的な記念碑になっている(4)。

遠藤が大杉栄に関心を抱いた経緯は不明である。カトリック信徒として戦争中に遠藤は官憲から迫害を受けた経験があり、社会主義者大杉とは思想的立場を異にしていたとはいえ、権力による思想的弾圧の恐ろしさについては、当事者的な共感を抱く要因はあったと考えることができる。また、大杉は三八歳で亡くなっているが、「地なり」を執筆した当時の遠藤は三五歳であり、『海と毒薬』の作者として右翼勢力から脅迫状や日本刀を送りつけられるなどの嫌がらせを受けていたところから、自らの小説家としての姿勢を再確認する意味もあったのかもしれない。彼は「アデンまで」で出発して以来、「安全無害」な作家であることを望まなかった人であったからである。虚構を通してのみ到達することができる真実を呈示することが遠藤が目指したものであった。

## おわりに

『海と毒薬』の主人公は、自分がふたたび同じ状況に置かれたら、やはり同じことをするのはなにかと考える。これが日本人のメンタリティーに関する作者の認識であるとすれば、「夏の光」で描かれた中国人差別も、「地なり」で暗示的に描かれた震災時における朝鮮人虐殺も、「松葉杖の男」で描かれた戦場での殺人行為とその記憶による苦しみも、すべては過去の過ぎ去った歴史の悲劇ではありえない。それはこれからもまた再現されていく可能性を含むものとして作者はとらえていたと考えるべきであろう。

最後に改めて指摘しておきたいことは、中国及び朝鮮の植民地支配という近代日本の暗黒の過去に直面する勇気を遠藤が持っていたという事実である。彼は近代西洋の植民地主義だけを問題にしたのではなかった。それは近代日本の問題でもあったからである。この姿勢は、日本の植民地支配への関心が比較的薄かった村松剛とは異なる点である。また、近代植民地主義には、西洋のそれにも日本のそれにも強い関心を持たなかった辻とも異なっていた。

(1) 『あまりに碧い空』新潮社、一九六〇年に初収録。その後『最後の殉教者』講談社、一九七四年にも再録。

(2) SEZ 6、二八九―二九〇頁。

(3) SEN 1、一七〇頁。

(4) Shusaku Endo, *The Final Martyrs* (trs. Van C. Gessel, Tokyo, 2005).

## 第四節 『深い河』——表象のインディラ・ガンディー

### はじめに

英国の植民地支配から一九四七年に独立を果たしたインドを舞台とした最後の長編『深い河』（講談社、一九九三年）については、多くの先行研究がある。それらの作品論は、大別すれば、宗教性（汎神論、宗教多元論、マザー・テレサ等）の視点から分析したもの。登場人物の人間像——女性像（成瀬美津子）、道化像（ガストン）などを考察したもの。『沈黙』『叛逆』『スキヤンダル』等、先行する諸作品との関連性を探ったもの。他の作家（グレアム・グリーン、宮澤賢治）との文学的・霊性的関連性を考察したものなどである。

従来の研究の死角は、この小説が一九八四年一〇月三十一日のインド首相イマディラ・ガンディー暗殺前後という明確な歴史的日付けを物語の現在としている事実への関心の薄さである。物語のなかで、葬儀を中継するテレビには、英国首相マーガレット・サッチャーや、フィリピンのマルコス大統領夫人イメルダ、日本国総理大臣中曽根康弘といった実在の政治家たちが登場する。このようなことは、現代社会を舞台とした遠藤の小説、特に純文学作品ではきわめて珍しいことなのだが、そこに焦点を当てた論はない。

遠藤が取材のためにインドを訪れたのは、一九九〇年二月のことである。創作日記の開始が同年八月。第一稿の完成が一九九二年九月である。つまり、一九八九年のベルリンの壁崩壊後にインドに取材旅行をした遠藤は、東西冷戦最中の一九八四年のインドを舞台にした小説を、ソヴィエト連邦が崩壊して東西冷戦構造が崩壊した一九九三年に公にしたことになる。

『深い河』創作日記（講談社、一九九七年）を読むと、この作品を書き進めるなかで、登場人物の設定や、細部を支える具体的な挿話、あるいは会話などについて、あれこれ試行錯誤しながら、徐々に原稿を書き進めていったことがわかる。創作という作業は、意識的な部分と無意識の部分との協働作業的なものがある。ジョン・ヒックの『宗教多元主義——宗教理解のパラダイム変換』（間瀬啓允訳、法蔵館、一九九〇年）との出会いのような、意味深い「偶然」も生じる。創作日記を読むと、そのあたりの消息が実によく伝わってくる。しかし、物語の現在を一九八四年に設定することは、明確に意識的な行為であるから、どのような理由で作者がそうしたかは、分析の主題たり得るだろう。ガンディー首相暗殺を物語のクライマックスに持つてくるという計画は、一九九二年の七月二二日の日記に僅かに見えるのみである。創作日記のほかに、基本的な構成や登場人物の人間関係等を書き付けた創作ノートがあるのかもしれないが、現時点では公開されていない。

以上のような問題意識から、本節では、これまで論じられてこなかった、『深い河』におけるインディラ・ガンジーの表象について考察する。

### 一 表象のインディラ・ガンディー——受難の女神チャームンダー

この作品のなかで、インディラ・ガンディーがどのように描かれているかを摘出してみよう。彼女が最初に現れるのは第七章「女神」である。大連育ちの童話作家沼田がインドのホテルで朝食を食べる場面である。

沼田はインドの政情にはまったく無知で関心もなかったが、食卓におかれた新聞の一面にインデ



イラ・ガンジー首相の写真が大きく掲載されていたので、義理でたずねた。

「どうも不穩ですね」と江波はナプキンで口をふきながら答えた。「シーク教徒が動きを示しています。この国はインディラ・ガンジーのカリスマ的存在でどうか秩序を保っているのですか」

「シーク教徒というのは、あのターバンで頭を包み、髭をはやしている印度人ですか」

一応はそんな質問をしたが、沼田には興味のない話題である。(1)

江波とは、ガイドの青年である。彼は「ワルシャワの日本人」の日本人留学生ガイドと同じ役割を作者から与えられている。すなわち、インドに四年間留学して印度哲学を学んだが、大学に職を得ることができず、不本意ながら団体旅行の添乗員をしているのである。彼は内心で日本人観光客を軽蔑している。もつとも、そうした顔をツアー客に見せることはない。

江波は日本人観光客たちを、ある寺院に案内して、チャームンダー像を見せる。一二世紀に作られたこの女神は「受難の女神」であり、「印度人とともに苦しんでいる」。この女神に江波は、「夫に棄てられながら色々な苦しみに耐えて彼を育ててくれた母」の姿を重ね合わせていた。「印度の聖母マリアのようなものですか」というツアー客の質問に、江波はそう考えてもかまわないが、「でも彼女は聖母マリアのように清純でも優雅でもない〔…〕」逆に醜く老い果て、苦しみに喘ぎ、それに耐えています」と応じる。

バスで移動すると、「たちまち彼等の周りを、物乞いの女子供たちがとり囲んだ。身もだえして口に向かを入れる真似をする子供、這いながら指のない手をさしだすハンセン氏病の女は日本人たちの憐れみをさそった」。なぜ彼等を施設に入れられないのかという問いに、江波は次のように答える。「この子たちを施設に送ればその一家は飢えるんですよ。彼等は家族にとって重要な財源なんです。体の不自由な子もハンセン氏病の女もその病気を使って大事な働き手になっているのです」。

「ひどい国だな。この国の政治家は誰なんです」

「御存じありませんか、母なるガンジス河を想わせる、インディラ・ガンジー首相です。ネルーの娘ですよ。印度の母と言われています」(2)

一九九二年七月二二日の創作日記には、「ほとんど強引と言える筆の進め方で女神チャームンダーの場面を書いたが（これはやがてガンジー夫人の暗殺場面と照応さすためだ）、江波の台詞は最後が良かった」という言葉が見える。遠藤は、「受難の女神」女神チャームンダーを、「印度の母」インディラ・ガンディーと重ね合わせているのである。

第八章では、カースト上位の豪華な結婚式をホテルで見た美津子が、盛装した若者たちと議論する場面で、ふたたびインディラ・ガンディーの名前が登場する。ネルーとインディラの往復書簡を読んだかとインド人の青年は美津子に質問して熱弁をふるう。「ネルーは娘のインディラに書いています。今のアジアはヨーロッパに抑えられているがもともとアジアの方がはるかに進んでいたのだ。それを回復するのが印度人の使命だ、と」。

「あなたはインディラ・ガンジー首相を女性として、どうお思いですか」

「わたくしには印度の政治の知識がまったくありませんの」

「彼女は印度の母です。印度のさまざまな宗教さまざまな民族の、対立や矛盾が彼女の女性としての優しさと強さによって支えられています」(3)

美津子はこの議論に「空虚」で「偽善の臭い」を感知する。そして「女神チャームンダーには苦悩と病氣と愛とが樹の根のようになりみあっていたが偽善は存在してなかった」と彼女は思うのである。つまり、ここで作者は、理想化されたインディラ・ガンディー像を、敢えて相対化している。もつとも、美津子は全てをまっすぐに受け取ることができない人物として造型されているので、作者の意図

には二重のイロニーが込められている。

第九章で、美津子はインディラ・ガンディーが暗殺されたことを沼田から教えられる。彼はテレビのニュースで、首相がシーク教徒に射殺されたことを知ったのである。

「シーク教徒って、一体、何です」

三條がやっと運ばれてきた朝食を食べながら尋ねたが、江波のいない日本人たちグループは複雑なヒンズー教徒とシーク教徒との対立や関係は一向わからない。(4)

沼田と美津子は、首相の死を悼む行列に街角で出くわす。楽隊が葬送行進曲を奏で、白い幔幕には、英語とヒンズー語で「我らはインディラ(ガンジー)を忘れぬ」と書かれていた。「インディラは我等の母」という叫び声があたりに響いた。

このように、インドという特定の国家の為政者を理想化して描き出すという、見方によっては非常に政治的な試みを、遠藤は最後の長編小説で初めて行ったのである。

## 二 現実のインディラ・ガンディー——戦闘の女神ドゥルガ

「沼田はインドの政情にはまったく無知で関心もなかった」。「ひどい国だな。この国の政治家は誰なんです」。「わたくしには印度の政治の知識がまったくありません」。「シーク教徒って、一体、何です」。こうした言葉は、自分自身の悩みや苦しみだけで頭が一杯な日本人登場人物の、インドに対する徹底した無関心の表現だが、このような無知で傲慢な日本人ツーリストと、現地の事情を歴史的に理解している若い男性添乗員という構図は、「ワルシャワの日本人」ですでに使われた方法である。近代インドが辿ってきた歴史的経緯を、作者はもちろんよく理解しているのである。当然、インディラ・ガンディーについても、遠藤はよく調べていたはずである。

賀来弓月は、「インド人は誰もが深い霊性をもっている」という類いの、外国人による「神話」がインドには多いと注意を促している(5)。また、インドという国を考えるとき、知識人の視点で見ると、最貧層の視点で見ると、あるいは首都の視点から見ると、地方から見ると、つまり、視点の定め方で全く見えてくる世界が異なると指摘する。それは宗教の世界においても同様であり、哲学的レベルで見ると、土俗信仰のレベルで見ると、かつとも大きく異なるという。

『深い河』のインドは、アメリカ西海岸のニューエイジ・ムーヴメントと親和性が高いステロタイプ化が意識的に用いられている。団体ツアーという設定もまた、周到な仕掛けであって、先進国の人間が、途上国を眺める視線は、いわゆる「観光のまなざし」(ジョン・アーリ)にならざるを得ないことを逆手にとっているのである。遠藤は、インドを描こうとしたのではなく、インドを舞台として自らの霊的探求の物語を提示しようとした。『深い河』に描かれたインドは、表象のインドであって、現実のインドではない。インディラ・ガンディーもまた同様である。

インド有権者の絶対多数が非識字層であることが、インド人の英雄崇拜と結びつき、政治におけるカリスマ性の重要性を規定しているといわれる。それは「古代から王が神(クリシュナ)の化身とみなされ、崇拜されてきた伝統にも根ざしている」(6)。インディラは初代首相ネルーの娘である。ネルーのカリスマ性は「独立運動の輝かしい経歴、マハトマ・ガンジーによって後継者として指名されたこと、最名門(カシュミールの最高位のブラーミン)、エリート教育、プリンス風の端麗な容貌と品位と風格、父親(モティラール・ネルー)の威光」や理想主義に支えられていた(7)。インディラもまた、名門の出、エリート教育、美貌、父親の威光といったカリスマ性を備えていたが、単なる親の七光りの二世だったわけではない。首相にとって何よりも重要な政治的指導力の高さがあった。彼女は、一九七一年にパキスタンと戦争をして勝利し、核保有する中国への対抗と、通常兵器しか持たない隣国パキスタンに脅威を与える目的から、一九七四年に地下核実験に踏み切った人である。インドの核開発への日本人の批判は、アメリカ合衆国の核の傘に護られている国の偽善的な論理であ

るとというのがインドの論理である(8)。小説中では、街角でヒンズー教徒から暴力をふるわれ血まみれになる壮年の男性について、路上の青年が、「彼はシーク教徒のリーダーです。あなたはシーク教徒が今朝、ガンジー首相を殺害した事を知っていますか」「シーク教徒が我等の母を殺す理由はありません」とそれを目撃していた磯部に話しかける(第一〇章)。しかし、現実世界において彼女が暗殺された直接的な原因も、彼女がインド軍に命じたブルースター作戦において、シーク教徒分離派の指導者ジャルナイル・シン・ビンドランワレを黄金寺院で殺害してシーク教徒たちの恨みを買ったことであつた(9)。小説中に表象されたインディラ・ガンディーとは異なり、歴史上のガンディー首相は、政治家として、国家の安寧のためには、最終的には軍事的解決を命ずる人だったのである。非凡な政治的指導力を発揮したインディラ・ガンディーを、インド人民党の指導者が「女神ドウルガ(シバ神の妻)の化身として神格化」したことがあるのは、興味をそそられる事実である(10)。ドウルガは戦いの神であるが、死を司る女神であるチャームンダーと同一視されることがあるからである。つまり、「印度の母」は、現実には戦闘的な女神像で語られることすらあつた人であつたにもかかわらず、遠藤が彼女に投影したイメージは、共苦する女神像という反対のイメージだったのである。実際のインディラもまた、「印度の母」という自己イメージを政治家として利用していたことは考えられるが、ここで問題にしているのは、小説世界で表象されたインディラのイメージである。

第一三章「彼は醜く威厳もなく」の葬儀の場面で、作者がさりげなく登場させたマーガレット・サッチャーもまた、強いカリスマ性を持っていた政治家である。しかし、「鉄の女」と呼ばれ、断乎として自らの政治的信念を貫こうとしたこの新保守主義の女性首相は、どう考えても、国民の苦しみを引き受ける「英国の母」ではなかつたし、「受難の女神」チャームンダーのイメージを重ね合わせることもできる人ではなかつた。また、「鉄の蝶」と呼ばれたこともあるフィリピン大統領マルコス夫人イメルダは、独裁者であつたマルコスが一九八六年のエデウサ革命で失脚すると、夫とともにアメリカ合衆国に亡命した。マニラの宮殿に大量の靴や服が残されていたことから、浪費癖が取りざたされた人であり、こちらもまた、貧しい人々から支持される女神ではなかつた。

インディラ・ガンディーの葬儀の実況中継をテレビで見ながら、登場人物たちが会話を交わす場面がある。

「頑張ったんだけどなあ、彼女は」

江波はその小さく見える画面に顔を向けてひとりごちた。沼田がきいた。

「なぜ殺されたんです、彼女は。シーク教徒の宗教的憎悪ですか」

「直接にはね。しかし結局は言語も宗教も異にする七億の人間が住む世界の矛盾や、それから皆さんが御覧になつたあの貧しさですよ。そしてカースト制。彼女はそれに何らかの調和を与えようとしたが、やはり駄目でした」(11)

江波の言葉は、インドの政治的状況を知るはずの人物としては、いかにもおざなりである。「シーク教徒の宗教的憎悪」の直接的原因となつたのは、先鋭化したシーク教徒が立て籠もる聖地黄金寺院のインド政府軍による襲撃事件であり、その際の指導者ビンドランワレの殺害であつた。それを知らないはずなのに、江波はこれを説明しないからである。それをさせてしまうと、インディラに投影した「受難の女神」のイメージが崩壊するので、作者はこのような台詞にしたのである。ガンディーが暗殺された日から二日間、反シーク暴動が勃発し、事実無言の流言がそれをさらに煽り、デリーを中心に、シーク教徒たちの大規模な殺戮が行われた事実も、遠藤はこの小説に描き込んでいない(12)。それは遠藤が「地なり」で描き出したような、阿鼻叫喚の世界だつたはずだ。それに、そもそも黄金寺院に突入した政府軍のなかにもシーク教徒はいたのである(13)。「シャーがいなければホメイニが出現しなかつたように、インディラがいなければビンドランワレのような人物も生まれなかつたろう」という意見がある。ビンドランワレのような原理主義者が勢力を持つ政治的状況を作りだしたことの責任は、彼女にあるともいえるからである(14)。にもかかわらず、『深い河』では、

シーク教徒は「受難の女神」と同一視されたインディラ・ガンディー首相を暗殺した悪者としか描かれていないのである。

小説の中で、美津子は葬儀の中継を見ながら、「生き残ったものの世界はこれからも互いに憎み、争うだろう。イランとイラクの戦は相変わらず続き、レバノンでも内戦が起こり、テロリストたちは英国ブライトンで、首相の宿舎を爆破して三十数人が傷つき死亡している」と考える。ここで作者は、いわば「永遠の相の下に」（スピノザ）登場人物に語らせていると考えるべきであろう。しかし、南アジア（インドの首相暗殺）や中東（イラン・イラク戦争、レバノン内戦）の事件や紛争が、近代というパースペクティブで見れば、西洋植民地主義という政治的要因に由来することは、当然のことながら、踏まえているのである。

遠藤は、『深い河』を完成した時期に、「一般に宗教戦争と言われるものの背景をよく見ますと、民族的感情だとか、政治的な原因とか、そういう別の要素の方が多い」と述べたことがある（15）。ここで遠藤は、例として島原の乱を取り上げ、これは「宗教的なものに帰因する暴動ではなく、農民一揆の一形態なんです」と述べている。このような透徹した認識を持っていたがゆえに、遠藤は、パレスチナ／イスラエル問題についても冷静なまなざしを持ち、『死海のほとり』のような小説を書くことができた。ユダヤ教徒とイスラム教徒の二〇〇〇年の対立という図式で語られることが多いパレスチナ問題の本質は、宗教を巡る問題ではなく、土地を巡る問題（植民国家イスラエルによるパレスチナの占領）だからだ（16）。

### 三 表象のマザー・テレサ——褐色の人々を救う白人女性

美津子は「宗教の違いが昨日、女性首相の死を生んだ」（第二章「転生」）と認識しているが、彼女が救いを求めるように思わず声をかけるのは、白人の修道女である。

その時、人々が急に道をあけた。担架を持った二人の男をつれて、ねずみ色の尼僧服をきた白人と印度人の若い修道女が老婆に近づいた。彼女たちは老婆にヒンディー語で何かを囁き、そのうつろな顔を水でぬらしたガーゼでふいた。

「マザー・テレサの尼さんたちですよ」

と江波が日本人たちに説明した。（17）

この修道女たちのなかに、美津子は「たまねぎ」（「神」）の人間への転生を認める。このとりわけ重要な場面において、マザー・テレサという、世界的に名高いカトリック修道女の名が登場する。一九七九年にノーベル平和賞を受賞し、一九八一年には来日したマザー・テレサは、日本のみならず世界中で有名であり、称賛はされても批判されることはなかった。マザー・テレサは尊敬に値する宗教家であると私も考えている。しかし、メディアにおける表象のテレサについては、今日では強い批判があることも忘れてはならない。

マザー・テレサは「褐色の体を誘惑と過ちから救うために働く、植民地の典型的な白人女性のイメージ」であると、ヴィジヤイ・プラシャドは記したことがある（18）。クリティカ・ヴァラグルは、プラシャドの言葉にも言及するとともに、「彼女の崇高なイメージは事実と違い、基本的に弱体化したカトリック教会がメディア・キャンペーンを強要した結果だった」というオタワ大学の研究結果を紹介している（19）。彼女はマザー・テレサについて、「彼女のイメージは植民地の論理に完全に縛られている。世界で最も貧しい褐色の肌の人々を救う、輝く光を持った白人というイメージに」と断じている。このような厳しい批判には、マザー・テレサを崇める国際的な言説に批判的視点を提供するという意味で、そして何よりも、プラシャドもヴァラグルが、二人ともインド人であることから、傾聴に値する。直接マザー・テレサを知る手立てもないわれわれ日本人が、メディアを通じた表象の彼女から感銘を受けるとき、それは西洋白人の立場に自らを同一視しているのかもしれないの

である。

遠藤は、病院の介護ボランティアに関する対談の席で、「すべてがマリア・テレサになることはできんと、ぼくはいつも言うのよ。マリア・テレサは素晴らしい。だから、その行為の形を見習ってね、しかもそれが無理なくできるのが一番望ましい。マリア・テレサもそうだって言っておられる」と述べたことがある(20)。カトリック信徒であった遠藤が、マザー・テレサを尊敬していたことは当然であろう。だが、海外の読者を強く意識していた遠藤が、世界中にメディアを通して流通している表象のマザー・テレサを、「愛」を実践する象徴的人物像として、作品中に用いようとした側面も、全くないとは言えないのではなからうか。短篇「道草」(一九六五年)で聖心女学院中等科という実在する学校の保護者を俗物として描くようなイロニーを遠藤は持っている人だった。マザー・テレサに対して、批評的まなざしを全く持つていなかったとは考えにくいのである。

## おわりに

河合隼雄は、三浦朱門との対談の席で、「ぼくのアメリカの友人たちが『深い河』を読んだり、映画を観たりして、非常に感激していましたね」「最初の構想にあつて、あとでなくなつたのはセクシヤルな問題です。ぼくはそこが非常に興味ぶかい。ただ、それは『スキヤンダル』に書かれていますね。だからぼくはアメリカ人で『深い河』を好きな人に、『スキヤンダル』を読ませているんです。両方読まなければ解らない。そうするとやっぱり感激しますよ。ぼくは『スキヤンダル』がすごく好きなんです。あれは非常に宗教的な本だと思えます」と語っている(21)。この対談では、現代インド政治とインディラ・ガンディーに関する話題は全く登場しない。話は文学と宗教性の問題に限られている。これは日本人研究者がこの作品に対する姿勢と同一である。

アメリカ人が『深い河』に感激したという河合の発言のあとに、三浦がインドについて、「先進国の人間がそこにセンチメンタルな感動などおぼえるのがちゃんちゃら可笑しくなるような、〔…〕それなりのスタイルとして「洗練された」混乱、「洗練された」無秩序」があるはずなんです」と醒めた見解を披瀝しているのはさすがである(22)。三浦のこの言葉は、インドを「機能しているアナーキー」と評した米国初代駐印大使ガルブレイスの言葉と響き合うものがある(23)。三浦は『深い河』に感激するアメリカ人と、『深い河』に登場する日本人が「素直にインドの現実にショックを受けたりする」ことを暗に批判しているのである。アメリカ人と日本人の、インドに対する「センチメンタルな感動」は、インドのステロタイプなイメージ、賀来弓月の言葉を借りれば、外国人による「神話」に根ざしていると、突き放した見方をすることもできるのである。

自分が国際的な著者であることを知っていた遠藤は、『深い河』の想定読者を、そもそもどのようなと考えていたのだろうか。英語に翻訳され、アメリカ人読者が「感激」することも予期していたと私には思われる。遠藤は一九八五年にサンタ・クララ大学から、一九八七年にジョージタウン大学から、一九九一年にジョン・キャロル大学から、それぞれ名誉博士号を授与されるなどしており、合衆国の読者を、遠藤は強く意識していたと思われるからである。実際、刊行の翌年に英訳が英国で刊行されると、『インディペンデント』新聞主催の外国小説賞最終候補の一つとなり、一九九五年には『ニューヨークタイムズ』で二頁の書評にとりあげられている(24)。

しかし、遠藤はインド人の読者を想定してはいなかったのではないか。歴史的評価が定まっていないうインディラ・ガンディーを「受難の女神」チャームンダーのイメージと重ね合わせることや、配慮が充分とは考えにくいシーク教徒の描き方などは、シーク教徒を含むインド人がこれを読んだときに、どのような評価に晒されるか予断を許さないとこころがある。一方、マザー・テレサの描き方は、キリスト教徒の西洋人ならば素直に受け入れることができるであろう。

日本人の登場人物たちが、インドの歴史にも政治状況にも全く無関心であるという設定には、批判をかむするための意識的な韜晦があるのかもしれない。『死海のほとり』の主人公に、現代のイスラエルについては全く関心がないとわざわざ言わせているのと同様の政治的配慮である。それでも、日本

人研究者が素通りしてしまうところで、インド人読者⇨研究者が躓きを持つ可能性は捨てきれない。印パ戦争で敗北したパキスタン人には、さらに抵抗を覚える作品であろう。

以上、これまで分析の対象とされてこなかったインディラ・ガンディーの表象に光を当てることを通して、『深い河』を考察した。表象とは、単なるイメージではない。それももう一つの現実である。それゆえ、われわれは歴史的現実と文学作品に描かれた現実との差異に敏感でなければならぬのである。

- (1) SEZ 4、二七二頁。
- (2) 同右、二八二頁。
- (3) 同右、三〇三頁。
- (4) 同右、三〇八頁。
- (5) 賀来弓月『インド現代史——独立五〇年を検証する』中公新書、一九九八年、四頁。
- (6) 同右、三〇頁。
- (7) 同右、三六頁。
- (8) 高橋和夫『現代の国際政治——9月11日後の世界』放送大学教育振興会、二〇〇八年、二九三—二九四頁。
- (9) マーク・タリー、サティッシュ・ジェイコブ『ネールⅡガンジー王朝の崩壊——アムリツアル／ガンジー女史の最後の闘い』岡田滋行訳、新評論、一九九一年参照。
- (10) 賀来前掲書、三二—三三頁。
- (11) SEZ 4、三四三頁。
- (12) ジェイコブ前掲書、二〇—二四頁。
- (13) 同右、二四四頁。
- (14) 同右、三一八頁。
- (15) 遠藤周作「宗教の根本にあるもの」『深い河』創作日記』講談社文庫、一四六—一四七頁。初出は『歴史読本ワールド』一九九三年二月号。
- (16) 高橋和夫『パレスチナ問題』放送大学教育振興会、二〇一六年、第一章参照。
- (17) SEZ 4、三四四頁。
- (18) Vijay Prashad, "Mother Teresa as the Mirror of Bourgeois GuiltSamina", Najmi, Rajini Srikanth (ed.), *White Women in Racialized Spaces: Imaginative Transformation and Ethical Action in Literature* (New York, 2002) pp.67- 68.
- (19) ヴアラグルはインド出身女性で、「ハフポスト US 版」「What's Working」プロジェクト・アンシエイトエディターである。当該の記事は「マザー・テレサは聖人ではなかった」(二〇一六年四月二二日)である。  
[http://www.huffingtonpost.jp/kritika-varagw/mother-teresa-was-no-saint\\_b\\_9658658.html?cid=twetlinkjphpng00000001](http://www.huffingtonpost.jp/kritika-varagw/mother-teresa-was-no-saint_b_9658658.html?cid=twetlinkjphpng00000001) (二〇一七年五月七日確認)。
- (20) 遠藤周作『遠藤周作のあたたかな医療を考える』読売新聞社、一九八六年、一九五頁。なお、遠藤には随筆「マザー・テレサの愛」(『読売新聞』一九八一年四月二一日)もある(『春は馬車に乗って』文春文庫、一九九二年所収)。この文章を読むと、遠藤がこの修道女に心の底から感服していることが理解される。
- (21) 「対談『深い河』創作日記を読む」『深い河』創作日記』講談社文庫、二〇〇〇年、一六一、一七四頁。
- (22) 同右、一六一—一六二頁。
- (23) 賀来前掲書、八頁。
- (24) 山根道公作成年譜に拠る。山根道公『遠藤周作 その人生と『沈黙』の真実』朝文社、二〇〇五年、四八八頁。

# 第六章 大日本帝国と「大東亜戦争」の記憶

## 第一節 『一、二、三!』——国家・戦争・皇族

### はじめに

帝国日本は近代西洋植民地主義を模倣し、東南アジア諸地域を植民地支配した歴史を持つ。そこで本章では、アジア太平洋戦争の記憶をモチーフとした遠藤の新聞小説『一、二、三!』(一九六四年)と『どっこいしょ』(一九六七年)を取り上げ、さらに短篇「鉛色の空」(一九六〇年)と辻の「影」(一九六二年)を比較考察する。

長編小説『一、二、三!』は、『北海タイムス』に一九六三年六月六日から一二月一二日まで連載され、翌年の一〇月に、中央公論社から出版された。連載から一〇年後の一九七三年には、新装版が刊行されている。大衆小説ゆえ、全集にも収録されず、先行研究もないが、アジア太平洋戦争終結から一八年後、マレー半島に生存する旧日本兵を探しに日本から若者が行くというストーリーや、皇族と戦争との関係が重要なモチーフとなるなど、本研究の視点からはきわめて重要な作品である。次節でとりあげる『どっこいしょ』とともに、従来の遠藤文学研究からは排除され、重要視されてこなかったことは遺憾である。

グアム島で残留日本兵横井庄一(軍曹)が発見され、五七歳で帰国して日本社会に衝撃を与えたのは、この小説が書かれてから九年後の、一九七二年である。また、フィリピンのルバング島でやはり残留日本兵の小野田寛郎が発見され、五一歳で帰国したのはその翌年のことである。小野田は遠藤より一歳年上だけであった。彼らは日本が降伏した後も、戦争を継続していたのである。この小説は、そうした社会的事件を虚構のなかで先取りするものであった。

### 一 作品の梗概

ともに東京大学受験を四回失敗した尼子猪之介と丸山順太郎は、あるとき、本名を名乗らない謎の青年と知り合う。優雅な身のこなしでどこか気品のある顔立ちの彼は、ブラジルで農園を経営していたが、処分して帰国したという。「男爵」と呼んでくれというこの青年と猪之介、順太郎の三人は、「癪に障ること」を解決するという会社を作り、三銃士と名乗り新聞広告を打つ。三浦万里子というクラブのママが、マレー半島で残留日本兵として生存している可能性がある兄を探し出して欲しいと彼らに依頼する。兄は学徒兵で敗戦時に大尉だったが、政府からは戦病死をしたと通知があった。しかし三年前に新聞で、ペナンから一〇〇キロ離れたジャングルに残留日本兵がいるらしいという話が現地住民の間で噂と、「H・M・I・U・R・A」というシガレットケースが落ちていたという記事を読み、もしかしたら兄ではないかと考えるようになったのである。さっそく問い合わせをした日本の外務省もマレー大使館も、ろくな対応をしてくれず、三銃士に依頼したというわけである。最初は尻込みし

たが、結局かれらは依頼を引き受ける。

万里子と三銃士は、赤城丸に乗ってペナンに行く。船内ではパイプを啜えた文化人佐川光彦が万里子につきまとう。彼は社会心理学者で、ラジオやテレビで活躍する気障な四〇代の男で、ケルンで開催される会議に招かれたのである。三度目のヨーロッパ行に飛行機を利用しなかったのは、商用の人間が使うものと馬鹿にしているからである。マニラ、サイゴンを経由して、ようやくペナンに到着した四人は、ジープに乗って、タハンというダヤク族の部落まで行くことにする。その住人が日本軍人を目撃したからである。

万里子と三銃士のことが『シンガポール・タイムス』の記事になると、日本政府や当地の日本大使館への侮辱だと、日本人会の中年男が抗議にやってくる。「お前たちは非愛国的だ」と怒鳴るその男とのやりとりのなかで、「男爵」が実は「大塔寺ノ宮」という皇族であることが判明する。彼は皇太子の従兄弟であるが、皇族という立場が嫌になり、新しい生き方を「一、二、三」と切るつもりでブラジルに行ったのであった。しかし、現地でも自分を担ぎ出す国粹主義者が登場するなどして嫌気がさし、ふたたび日本に戻ったのであった。頭脳明晰な彼は、四人のリーダー格となる。

四人はマレー人が殺された現場に遭遇する。そばには「H・M I U R A」と刻まれたナイフがあった。マレー軍巡察隊のメルド大尉は万里子の兄が犯人かもしれないと疑った。四人はついに三浦を発見するが、彼は万里子の兄ではなかった。話を聞くと、軍医だった彼は、日本の敗戦を知っていたが、日本よりも現地が好きになり、帰国を自らしなかったのであった。倉田啓三という人物に対する怒りを三浦は述べた。強制労働で現地人が多く死んだ事件を戦後に英国軍から取り調べられた倉田は、全ての責任を部下に押しつけて生き延びたというのである。部下は監獄に入れられ銃殺された。英語ができたために英国側にうまく取り入った倉田は貨物船で日本に引き揚げたという。

実はこの倉田こそ佐川光彦であった。マレー人を殺害したのも彼なのであった。万里子と猪之介、順太郎の三人は、ついに佐川を追い詰めるが、彼は開き直り、「生きることが、まず何よりも大切だ。どんな事をしても生きることが何よりも俺の主義だ」というのだった。

「男爵」こと大塔寺ノ宮は、実は精神病院の入院患者であった。マレー行の旅のなかで、「あの戦争のときに、血をながした日本人の一人でももどらない限りは、皇族は甘えた気持で生きてはならぬということです」としみじみと語った彼は、聡明な人物であった。病院関係者の話では、よい家庭に生まれ、東大法科を卒業した人だったが、勉強をしすぎているうちに自分を皇族だと思い込むようになったのだという。「狂っているのは世間のほうじゃないか」と猪之介は順太郎に向かっていうのだった。

## 二 日本人の「忘却」

万里子と三銃士のマレー行は、遠藤のフランス留学での経験が活かされている。彼は往路はフランス郵船のラ・マルセイエーズ号を利用し、復路は日本郵船の赤城丸を利用していたのである。寄港地であるマニラで、夜に甲板に出た三銃士たちが、「バカヤロ、ニポンジン」「バカヤロ、コロスゾ」「バカヤロ」という、「合唱するような叫び声」が聞こえて怖ろしくなるところや、サイゴン市街の景観や現地の人々の生き生きとした描写は、作者の実体験をうかがわせる。豪華なフランス総弁務官邸宅、真っ赤な花をつけた火炎樹、フランス語で書かれた店の看板、フランス人男性と歩く、アオザイを着たヴェトナム人女性、アメリカ軍将校と歩くヴェトナムの兵隊、冷房の効いた店内のフランス人ママムなど点描される。

猪之介と順太郎は、サイゴンを歩きながら論争を交わす。彼らは戦後生まれなので、戦争など昔の出来事だと思いきんでいたため、マニラでの「バカヤロ」にびっくりしていたのである。一九六三年当時、すでに帝国日本が東南アジアで行った行為は「忘却」されていたのである。

順太郎は、なるほど日本の東南アジア進攻は、軍閥戦争として批判されるべきだが、しかし、仏



印の人々は、そのおかげで独立心を刺激されたのだから、あの戦争全体が悪いとはいえぬと主張した。猪之介は、それには大反対で、仏印人は日本がここに来なくても独立を完成したろう。それは、むしろ、歴史の必然性だと、平常の彼に似あわず、頭のよいところを見せた。

「どうなんや、男爵の意見は」

「ぼくですか、ぼくは二人の考えには反対ですね」

男爵は、むしろヴェトナム独立は、共産党のひきいるヴェトミンに対抗するため作られたのだから、その原因は日本のためでもなく、むしろ仏印の特権事情によるものだと言いだした。(1)

この議論に関する作者の意図は、おそらく二点あった。一つは日本国内にある複数の見解の提示である。新聞小説ゆえ、さまざまな政治的見解を持つ読者を想定しなければならぬからである。もう一つは、若者たちの議論の稚拙さを示すことである。彼らの議論は、彼らが嫌う軽薄な文化人佐川光彦のそれを思わせるものだからである。

片言の日本語を話すヴェトナム人男性が、三銃士たちを日本兵の墓に案内する。「あんだの国は今平和。しかし、この日本兵、戦争して、苦しんで、病気で、死んだ。平和になっても彼にはなにもほうびない。死んだ者、結局、損か」。「この墓みると、わたし、いつも考えるな。この日本兵のこと、みんな、忘れてる。あんだの国の人たち、サイゴンの田舎に日本兵の墓があること、忘れてる。そして平和のこと、たのしんでいる」。「この日本兵、なんのために死んだか」(2)。ここでも日本人の「忘却」が示されている。日本人は、東南アジアで現地の人々に対して行ったふるまいを忘却しているばかりか、そこで命を落とした同胞についても忘却しているというわけである。小説のなかでは、このヴェトナム人の問いかけを、最も深く受け止めたのが「男爵」こと皇族大塔寺ノ宮ということになっている。

### 三 表象の現地人

マレー政府がジャングルを開拓して、三五箇所の「開発部落」を建設して、ここに入植した農民が登場する。作者がここを訪れたことはおそらくなかったのではないかと思われる。現地人と四人組との交渉は、急にリアリティを失い、遠藤に特徴的な滑稽さを加味したオリエンタリズムが登場する。それは、笑顔でいたずら半分に手で水しぶきをかけてよこす娘たちであり、万里子の下着を盗もうとする男性であったり、「変てこな節まわしの唄をハンドルをまわしながら小声で歌う」ジープの運転手だったりする。マレー語を日本人たちは理解しないので、「疏差、バタン、イツ、ブカン、ブタン」というように、片仮名書きで、現地の言葉が、おそらくはデータラメな音で書かれる。

二人の青年たちは、マレーの村落の、一見牧歌的に見える暮らしぶりに、ある種の憧れを持つ。村人たちとささやかな交流をしたときの場面を見てみよう。

(すべてが、爽やかだ)

胸の奥そこまで空気をふかく猪之介は吸いこんだ。狭くなるしい日本、スモッグのこもった息ぐるしい日本にない空気の味だった。

(こんな国に住み着いて……：：：～～～) 心のどこかにそんな空想がかすめる。(3)

猪之介も順太郎も、東京大学に進学して、日本社会の支配層になることを目標にしていた青年である。しかし四度の受験に失敗して、人生競争からみごとに脱落した。この場面における猪之介の空想は、文明批評ともいえないステロタイプなオリエンタリズムだが、竹山道雄の「ビルマの竖琴」から、本研究で分析する辻邦生のシリアやタヒチの現地人に対する描写にまで継続する「日本人用」の原住民イメージと変わるところがない(4)。それは、現地人は貧しく、教育もなく、魯鈍であるが、平

和に穏やかに暮らしているというものである。そして彼らはみな、日本人に好意的なのだ！

シンガポールで敗戦を迎え、マレーのジャングルの村に止まることにした軍医三浦は、物語のなかの現実において、日本社会から意識的に脱落することを積極的に選択した人物である。「日本民族」の共同体に帰属することを自ら止めた人である。マレーは、そうした日本人を自然に受け入れてくれる世界として空想されている。

オリエンタリズムの最高潮は、虎狩りの場面である。三銃士たちのジープがあることから、村長が人を襲った虎を仕留めることを決定し、日本人たちもそれに同行することとなるのである。この小説は、「文明化」され、東京オリンピック開催を翌年に控えた日本から、虎が人を襲う「野蛮」なマレーに残留日本兵を探しにくるという、ある種の《冒険小説》の粧いを持ったエンターテインメントなのである。したがって、虎狩りの場面は、描かれるべくして描かれたものといえよう。

### 三 皇族と戦争

マレーのホテルに、現地日本人会の中年男が乗り込んでくることは梗概で記したとおりである。「お前たちは、のこのことマレーに来て、在留邦人たちの名譽に傷をつけようと言うのか」。「貴様たちは日本大使館や日本政府を、侮辱しとるじゃないか」と彼は息巻くのである。しかし「男爵」が皇族であることを名乗ると、最初は「きちがい」扱いした男は、次第に自信を失い、「も、も、申し訳ございません」。「これと言うのも、われわれ日本人が国家を思うあまり……」としどろもどろになるのである(5)。

「ブラジルに行かれるときまって、反対があつたでしょうね」と訊ねる万里子に、大塔ノ宮は「それは大変だった。山菜ノ宮も那須ノ宮の叔母もみんな反対でした。もちろん宮内省の大部分が首を横にふつたのです。一人南白河の叔母が私の味方でした」と語る(6)。  
マニラ湾に浮かぶ日本船の残骸を眺めたとき、彼は謎めいた言葉を口にしていった。

「ぼくの伯父がこれを見たら……」

「え？」

「いや……かまわんです。かまわんです」

「伯父さん……男爵の伯父さんもフィリピンで戦争した一人か」

「フィリピンじゃない。すべての国で……」(7)

「男爵」こと大塔寺ノ宮は、皇太子の従弟という設定であるから、彼の伯父というのは昭和天皇にほかならない。帰国後に、「男爵」は、万里子に、最初に依頼に尻込みしたことを謝罪して、次のように語る。

「あのことを旅行中、いつも恥かしく思っていました。ぼくは皇族です。仕方ないですけど皇族の家に生れてしまった身でしょう。戦争が終つて、皇族というのは普通の人と同じになりましたが、皇族だったわれわれには他の方とちがった問題があるのだとしみじみ思いました」

男爵の顔はいつになく苦しそうで、真剣そのものだった。

「それは……あの戦争のときに、血を流した日本人の一人でももどらない限りは、皇族は甘えた気持で生きてはならぬということです」

「でも……」

「まア、聞いて下さい。少くともぼくはそういう甘えかたをしたくないと決心したのです。マレーに行く途中、マニラで戦争中、日本船の沈んだあとを見ただけでしょう。あの時、ぼくは……男爵はそこまで言うのと、絶句したように口をとじて、

「皇族ということは……重いですよ、実に、重いのです」

そして、しみじみと彼は自分の指をみつめながら辛そうに微笑した。(8)

この小説で、作者が精神病患者という仕掛けを巧みに用いて、皇族をマレー行に参加させているのはなぜだろうか。「男爵」がなぜ自分を皇族だと思いついているのか、病院関係者は次のように説明する。

「むかし、葦原將軍と違って、自分を將軍と信じた患者がいましたが、近頃はスターリンと自称する狂人もいます。ルーズベルトの子だという者もいます。あの患者の場合はちよつと違っています、そういうエリート意識からではなく、一種の罪障意識が痛烈なために、自分を皇族と思いつているようですね」

「罪障意識？」

「あなたたちに言いませんでしたか。自分が皇族として戦争の責任をすべて背負うようなことを……」(9)

アジア太平洋戦争におけるすべての日本人が被った苦しみの責任を、皇族は負っている、それゆえ、皇族はそのための罪障感に苦しんでいる、苦しむのが当然である、という認識がここでは示されている。日本人であることから「降りた」帝國軍人三浦と異なり、皇族の一員として日本国家と一体化している大塔寺ノ宮は、マニラ湾で、沈没した日本船の残骸を見て、何を感じたのであるうか。異国で命を落とした多くの日本軍人を思つて胸が詰まったということもあるだろう。だが、それだけであるうか。大東亜共栄圏という帝國日本が抱いた夢想、日本民族の栄光の見果てぬ夢の幻影を、ここで彼は見ていたのではないだろうか。すなわち日本船の残骸は、「帝國の夢」の残骸だったのである。彼は一度は皇室を離脱してブラジルに新天地を求めて果たせず、ふたたび日本という共同体に帰属することを再選択した人であった。「皇族ということとは……重いですよ、実に、重いのです」という言葉は、自分たち皇族は、日本から逃れられないということの表明である。

「男爵のどこが、狂人なんだ」と猪之介は心に叫ぶ。「自分を皇族と信じているにせよ、あの旅行中、男爵がくるしんだ悩みは猪之介のような男から見ても、それ自体誠実なものだった。正しい苦しみだった」。「狂っているのは世間のほうじゃないか」(10)。遠藤がこのような思いを抱いていたことは、改めて思い起こされてよい。

もつとも、ここで、大塔寺ノ宮が、フィリピンにあつて、日本及び日本人のことしか考えていないという点には注意が必要である。東南アジアの現実を彼は見ていない。見ているのに見えていない。彼の激しい「贖罪意識」は、あくまで日本人に対して感じているものなのである。

#### 四 佐川光彦が象徴するもの

世間の何が狂っているのかといえ、戦時中、部下を銃殺に追い込みながら、自分はぬくぬくと帰国し、文化人として活躍している佐川光彦のような男がいるからである。自らの悪行が露見したあと、佐川は万里子らの前で傲然と開き直る。「俺は恥ずかしくないね」「ハレンチで結構。しかし君たちがいくら非難しても、俺のしたようなことぐらいい、他の多くの日本人がしていることさ。戦争中、お先棒をかついだ男が、今は有名な民主主義思想家になっている。あの頃憲兵だった男が今では大手をふつて会社の重役だ。あの頃、戦争推進の旗頭だった政治家が、今日でも大臣になっている。要するにこれらの連中は生命力があるのさ。俺もその日本人の一人だよ」(11)。

戦争中に時局に迎合した人物が、戦後も社会の支配層に在るということへの嫌悪は、次節で検討する『どっこいショ』でも描かれている。エゴイズムに徹底してその時々潮流にうまく乗ることで、いつの時代にも活躍することができる人物の象徴として、佐川は造型されている。

彼が文化人であるのは、メディアを通して万里子のような一般大衆を啓発する立場にいる知識人の

なかに、作者が無責任きわまりない口舌の徒を見ていたからである。知識人に対する遠藤のまなざしは厳しい。『どっこいシヨ』でも、ジャーナリズムで鋭い社会批評を行う若手批評家が、バス停で小さな不正行為をめぐるいざこざに巻き込まれることに怯えて、何もできないでいる場面を描くことで、遠藤はそうした知識人を批判している。

戦争をまたいで、かつての戦争協力者が、ふたたび日本社会の表舞台で活躍を始めている。佐川が自らいうところの「生命力」は、男性性と言い換えてもよかるう。部下に責任を負わせて死に追いやるというのは、アウシュビッツ収容所で他の囚人の身代わりになって死んだコルベ神父の正反対の在り方である。遠藤は、コルベ神父を尊敬していたことは、すでに「ワルシャワの日本人」を分析した節で触れたとおりである。

この小説が書かれた一九六〇年代、佐川のような男は読者の周囲にもたくさんいたことであろう。また、万里子のような人もいたはずである。

## おわりに

中間小説であるがゆえに、登場人物は典型的に描かれており、特にマレー人の表象はいわゆるオリエンタリズムそのものである。戦時中の日本とフアリピン、シンガポール、マレーとの関係も、通り一遍の表層的な描かれ方に止まっている。とはいえ、皇族（と自己画定する）人物や、戦争を知らない若者を登場させて、戦争を過ぎ去ったものとして忘却の彼方に葬り去ろうとする思潮に抵抗を試みた作品として『一、二、三！』は軽視することができない内容を持っているといつてよい。

- (1) 遠藤周作『一、二、三！〔新装版〕』中央公論社、一九七三年、一〇三頁。
- (2) 同右、一二二―一二三頁。
- (3) 同右、一四〇―一四一頁。
- (4) 酒井直樹『日本／映像／米国――共感の共同体と帝國的国民主義』青土社、二〇〇七年、一二四頁。ここで酒井は「ビルマの堅琴」を詳細に分析している。
- (5) 同右、一二七―一二八頁。
- (6) 同右、一五六頁。
- (7) 同右、一〇〇頁。
- (8) 同右、二〇九―二一〇頁。
- (9) 同右、二一一頁。
- (10) 同右、二二二―二三頁。
- (11) 同右、二四〇―二四一頁。

## 第二節 『どっこいシヨ』

### ——戦時中の徴兵拒否と一九六〇年代の自衛隊

#### はじめに

本節では、遠藤の新聞小説『どっこいシヨ』を取りあげる。この作品は、一九六六年六月九日から一九六七年五月一五日まで『読賣新聞』夕刊に連載されたものである。連載開始の三ヶ月前に、遠藤は書き下ろし長編小説『沈黙』を刊行して評判になり、一〇月には谷崎潤一郎賞を受賞している。『どっこいシヨ』は、学術的な先行研究がなく、遠藤文学研究の上で重視されているとは到底言いがたいが、扱われている社会的テーマは、戦争であり、国家であり、自衛隊であり、要するに現代日本をめぐる政治的・主題的なものであり、本論文の視点からは看過することができない。むしろ、遠藤には珍しく現代日本の政治的・主題を扱っているがゆえに、これまでこの作品が研究対象とされてこなかったというのが真実なのではないだろうか。遠藤文学研究において、生々しい現代の政治的・主題は敬遠される傾向があったからである。

しかし、この小説は、一九六〇年代から七〇年代にかけて、多くの日本人読者の支持を得た作品であった。一九六七年に講談社から刊行された単行本は版を重ね（初版刊行五年後の一九七三年六月発行時点で第一二刷）、一九六八年には「日本の青春」と改題されて小林正樹監督により映画化され、一九六九年には全六五回のテレビドラマにまでなっているのである（1）。一九七四年には講談社文庫に収録されている。発表当時の日本人読者の強い支持があったにもかかわらず、この作品は、今日では全く忘れ去られている。もちろん、海外には翻訳されていない。

一九六五年という時期は、世界的にはどのような時代だったのであろうか。何といっても、アメリカ合衆国が北ヴェトナム爆撃を開始した年であり、大韓民国が南ヴェトナムに派兵をし、日本国内では「ベトナムに平和を！ 市民文化団体連合（ベ平連）」が、初のデモ行進をした年である。小説のなかにも、ヴェトナム戦争は、重要な出来事として書き込まれている。そして、一九六〇年代の日本は高度経済成長のただ中であり、東京オリンピック（一九六四年）を経て経済大国への道をひた走り、走っていた時代でもあったが、その一方で、アメリカ軍基地が集中する沖縄は、まだアメリカ占領下にあった。

#### 一 作品の梗概

今日では文庫本でも入手が困難な作品ゆえ、原稿用紙一〇〇〇枚の長編ではあるが、ごく簡単に梗概を記しておくことにしよう。

主人公向坂善作は、大正生まれの「戦中派」である。小学生のときに「満州事変」が起こり、日中戦争、私立大学学生時代は太平洋戦争の最中であった。両親を早くに亡くし、伯父に育てられたという設定だが、当時大学に進学できる者はエリートであったので、今日読むに際しては留意が必要である。善作は信濃町の下宿で学友大野と相部屋で暮らしていた。大野は名古屋出身、母子家庭に育った人で、二人とも文科の学生である。下宿には芳子という可愛らしい娘がいて、二人とも好意を持っていたが、それを口にすることはなかった。月曜日から土曜日までは川崎の工場で勤労働員され、日曜日の午後には軍事教練があった。

神宮球場での学徒出陣の行進に、善作も大野も参加した（一九四三年一月二二日）。一九四四年

二月、大野に召集令状が来る。大野は朝鮮羅山で戦病死する。善作にも召集令状が来るが、彼はアメリカ軍の伝単（宣伝ビラ）で名古屋に大規模な空襲があることを知り、一計を案じて、入営前に名古屋の大野の母親を訪ね、空襲に紛れて行方不明になり徴兵を忌避しようと考え。けれども、空襲で罹災した人々を見るうちに、自分だけが苦しみから逃れることはできないと考え直し、国家ではなく国のために入営することを決意する。軍隊で、外国人捕虜収容所で働いたとき、上官は残酷な鈴木少尉であった。偶然のことながら、善作は、かつて勤労働員から貧血で早退したとき、ゲートルをほどいて芳子と歩いていたところを鈴木に咎められ、殴られたことがあった。鈴木は将校を養成する陸軍士官学校を卒業しているの、戦場経験はないにも関わらず、階級上、組織に君臨していた。捕虜の窃盗行為を見逃した善作に、鈴木は目の前の外国人捕虜を竹刀で痛めつけることを命じるが、善作にはできない。激昂した鈴木は竹刀で善作に襲いかかり、その結果、善作は片耳が「ツンボ」になったのである。

さて、物語の現在は、一九六〇年代の東京である。善作は、戦後に見合いで結婚し、特許事務所を開いて、戸建て住宅に、浪人生の長男廉二と私立高校に通う長女咲子と暮らしている。平凡で退屈な日常であるが、それすら許されなかつた青春時代を思うとき、これが幸福なのだと思おうとしている。愚痴ばかりこぼす妻の美代には、愛情というよりも憐憫を覚えている。廉二は二言目には戦争中の話をする父親を疎ましく思っている。大学進学に疑問を持ち始めている。本屋で若手の批評家名越達彦を見かけて憧れのまなざしを注ぐ。ところが、バス停で割り込みをしようとした男に注意した結果、逆に凄まれた廉二を、周囲の誰も助けようと思わない。社会の不正義についてもジャーナリズムで鋭い批判を述べている名越も、怯えた顔で、本を目を落として見て見ぬ振りをしている。窮地の廉二を救ったのは、背広を着た若い青年だった。彼は幹部自衛官を養成する防衛大学校を卒業した岬という自衛隊二尉であった。廉二は防衛大学への進学をぼんやりと考え始める。

善作は、人を介して耐熱塗料の特許に関する依頼を受けたが、これは亡くなった芳子の夫の発明であった。善作と芳子は二〇年ぶりに再会する。芳子には子供がなく、銀座の場末でバーをやっている。二人は、大野が出征したあと、空襲警報下の下宿で、一度だけ口吻を交わしたことがあった。善作は芳子が大野よりも自分に好意を抱いていることを薄々は感じていたが、この行為を大野に対する裏切りととらえ、自分を許せないでいた。善作は特許申請をしたばかりか、実用化に向けて企業への売り込みに奔走するが、この発明に関心を示した会社社長は、善作の耳を不自由にしかつての鈴木武則少尉であった。また、大学受験予備校で廉二が知り合った美しく聡明な女性真理子は鈴木の一人娘だった。

善作は廉二の防衛大学進学にも鈴木の娘との交際も絶対反対である。鈴木が耐熱塗料の発明に関心を持ったのは、これを武器（火炎放射器）に利用することが可能で、日本の防衛庁（現防衛省）に売り込むことを考えたからであった。彼はゆくゆくは政界に進出しようとも考えている。妻を亡くしていた鈴木は、芳子にも興味を抱き、銀座の自分のビルに芳子の店を移したらどうかと提案する。

善作と芳子は、互いに惹かれ合うものを感じてはいるのだが、善作には勇気が出ない。父親から鈴木木の戦時中の暴力を聞いた廉二は、それを聞いた真理子の導きで鈴木と対決するが、鈴木の強引な男性性には魅力を感じざるを得ない。これは芳子も同じであった。善作は一切を『どっこいしょ』と置き去りにしてどこか遠くに行ってしまうと思う。家を出て岬の世話で自活を始めた廉二の勇敢さに刺激された善作は、ある日、東京駅に向かい、そのまま名古屋に行き、召集を逃れようと思った街並みを歩く。大野家の墓に参ったときに、芳子が現れる。配送のアルバイトとして自分の店に現れた廉二から、善作の失踪を教えられ、ぴんときた芳子は名古屋に追ってきたのである。

このまま東京に帰らないことを二人は考える。翌日の一〇時に名古屋駅で待ち合わせるが、善作は結局、待ち合わせ場所に行かない。彼は東京に帰って、家庭を守ることを選択するのである。芳子は自宅マンションに来た鈴木に強引に関係を持たされるが、部屋のガス栓を捻って二人で自殺する。真理子は親族から映画会社重役の息子と結婚させられそうになるが、これを断る。廉二は防衛大学への進学を決意する。

## 二 戦中派と戦後派

梗概は以上のとおりだが、ただちに理解されることは、一九二〇年代に生まれて戦争を体験した善作の世代と、戦後の第一次ベビーブームに生まれた、いわゆる「団塊の世代」の若者との世代間の意識のズレが、この作品において重要な役割を果たしていることである。この小説が、新聞連作当時から評判を呼び、単行本となつてから、映画やテレビドラマになつたことの大きな理由の一つは、こうした世代間の対立が、多くの日本人にとつて切実なテーマであつたからに他ならない。前作と廉二という父子の葛藤は、皇国教育を受けて育ち、戦争を実際に体験した世代と、戦後の平和教育を受けて育ち、戦争を体験していない世代との葛藤なのである。

プロローグで登場するところから、主人公善作は、冴えない中年男として描かれている。若い娘が「あたし、嫌いだな」「あんな中年の人、戦中派っていう世代」「戦争で、精も魂も使い果たしたのよ」という台詞を作者は書き込んでいる。当時の戦中派は、四〇代である(2)。善作が仕事で同年代の男性を紹介されると、「あんた、兵隊は？」という会話が必ず出てくるのである。軍隊時代の繋がりが、戦後の仕事でも活用されることは、この物語だけの話ではなく、当時の男性社会ではありふれたことであつたらう。「俺たちは、結局、一番、つまらんクジを引かされた年代でしたなア」と、ある登場人物は呟く(3)。これは、作者が戦中派の代表として語らせている台詞だと考えてよい。

「お前などは、父さんの時代とちがつて、勉強などしようと思えば、いくらでもできるんだから……父さんの頃は戦争で、自分のしたいことは、何ひとつできなかつた」

息子の顔にうす笑いがかすかに浮かんだ。

「どうした」

「聞きあきたよ。戦争、戦争って何かの話をするれば父さん、いつもそれを持ち出すだろ。まるで自分たちだけが一番つらい時代を送つたような言い方をするんだもん」(4)

このような会話が何度か繰り返される。「父さん、過ぎ去つた時代のことを引き合いに出すのは止してくれよ。父さんはまだ戦争が終わつて間もないと思つていらしいが、あれから二十年以上も経つているんだぜ。ぼくなんか全く関係のない昔話だもの」「それにそういう時代は、悪い時代じゃないのかい。例外的に悪い時代だよ。例外的に悪い時代の学生生活を標準にして、今のぼくらのことを批評するのが第一おかしいよ」「今になつてブウブウ文句を言うくらいなら、なぜその時、そんな国家に対して反抗しておかなかつたんだい」(5)と廉二は善作に言うのである。

善作は大学を卒業した人だが、口下手で、自分の感情や思考を筋道たてて言語化することができない人物として設定されている。それゆえ、息子に説得的に話をすることができない。彼は黙り込む。

「彼は自分の気持をだれに話しても通じないのをいつも感じていた。しかしそれは善作だけではなかつたあの杉山剛一も遠山正介もそんな世代に属していた」(6)と作者は書く。

廉二が防衛大学に行くという選択肢を可能性として示したとき、善作は「……」絶対にかん。かりにもそんな気を起すのは」と反対するのだが、「父さんは……むつかしい理窟でどうの、こうのと言つてるんじゃない。父さんは学者や政治家じゃないから自衛隊があつたほうがいいのか、ない方がいいのかもわからない。しかし、お前が……自衛隊の学校に行くことは……この気持がゆるせんから……言つとるんだ」(7)とようやく言うばかりである。善作は、自衛隊の存在には関心がない。しかし、「みんなが死んでいくあの時代の再現はこりこり」であり、自分の息子がそのような時代に生きるの嫌なのである。

おそらく、『讀賣新聞』の連載を読んでいた戦中派の男性読者は、善作に自分の姿を見出し、戦後派の男性読者は、廉二に自分の似姿を見出したのではなからうか。同じことは、夫に先立たれて一人で生きている女性芳子や、善作の長女咲子にもいえるのであつて、この新聞小説は、当時のさまざま

な年代の男性女性読者が、登場人物たちに自らや自らの親や子を投影して読んだのである。『讀賣新聞』は発行部数の多さが世界有数の日刊紙であり、夕刊とはいえ、数百万部が印刷されている。作者は、この小説に登場する人物たちを、当時の多くの日本人読者が共感を持って読むことができるように造形しているのである。善作も廉二も、極端な政治的信条に生きる人物ではない。むしろ、ノンポリテイカルといった方が正確であろう。

新聞には毎日ベトナムでの悲惨な戦争のことがでてくる。戦争のつらさは身にしみて知っている戦中派の善作だが、だからといって自分が何を言ったところで通じる筈はない。ベトナム人は気の毒だと思いが、しかしどうにもしようがない。(8)

善作はこのように考えるのであるが、これは当時の『讀賣新聞』でベトナム戦争関連の記事を見ていた戦中派を中心とする男性読者層の多くの思いの代弁であったのではなからうか。「外部の社会や政治に無関心ではないが、諦めの気持のほうに先に立ってしまう」のである。その結果、万事に事なかれ主義になってしまい、家庭でもそうした傾向になっている。

廉二はどうかというと、彼も空虚を感じている点では善作と似たり寄ったりである。

彼はハチ公の広場でトラックの上から右翼の男がやる政局演説をぼんやり聞いていた。制服に身をかためた彼と同じぐらいの青年が演説者のそばで腕をくんで立っていた。

駅前ではベトナム反戦の書名をみなによびかける学生たちがいた。しかし、その大声にもかかわらず署名する人はほとんどいなかった。

(空白だ)と彼は思った。(空白で空虚だ)(9)

これが、戦後二〇年が経過した一九六五年当時の戦中派と戦後派の、大方の心象風景だったのである。ヴェトナム戦争は、当時の日本文学にも大きな主題となっていた。先に触れたベ平連の呼びかけ人でもあった開高健が『ヴェトナム戦記』(朝日新聞社)を刊行したのが一九六五年のことである。日本のジャーナリズムでこの戦争が重要な社会問題として取りあげられたのは、ヴェトナムに出撃するアメリカ軍が、日本に存在する米軍基地から飛び立っていったからである。この戦争は、国際政治上の問題であるとともに、日本国内政治の問題でもあったのである。とはいえ、『どっこいしょ』の登場人物たちのように、「ベトナム人は気の毒だと思うが、しかしどうにもしようがない」と考えていた日本人の方が、圧倒的なマジョリティであったことはほぼ間違いないと思われる。

### 三 「国家」と「国」

「国家って何なんだろう」という台詞が、この小説には何度も繰り返される。召集令状が届いたときの善作と大野との対話では、ささやかな家庭の幸福を願った自分を戦場に送り出す権力について、大野が善作に「なんでそんな国家のために俺たち命を捧げねばならんねん」と問い、善作は沈黙する。壮行会が開かれ、東京駅では万歳とともに校歌や軍歌が合唱される。「あいつらも、ああやって騒いで、怒鳴って、自分たちの不安を誤魔化してるんだ」(10)と、善作は密かに考える。

善作は大野と同じように国というものが今、理解できぬのを感じた。国は彼にとってたった今、自分に暴力をふるった若い将校と同じようにみえた。無法に自分たちの人生を歪め、泥靴でふみつけるもの。その国のために命を捧げることは善作にはできないような気がした。(11)

「美しい空、美しい海、愛してきたものたち。それら全てと自分とを今、国家が引き裂こうとする。ただ一枚の赤紙で」。「国家とは一体なんだろう。そんな理解できぬ無法なものに、みなはどうして



自分と愛する者とを捧げることができのらうか。妻が夫を、母親が子供を捧げられるのらう。命までですることができのらう」(12)。そう考えた善作は、徴兵忌避を計画するのである。ところが、名古屋の空襲で焼け出された人々を見た善作は、考えを改める。彼は「国家のためではなく国のために入営」することを決意するのである。

彼のまわりには多くの罹災民たちが巢を失った動物たちのように、うずくまっていた。これが国だと彼は思った。国家と国とはちがう。国はむかし考えていた国家のような抽象的なものではなかった。眼の前にいる苦しみ、傷ついている人々の集り、それが今の彼にとって国というものだった。

要するに、みなが辛い思いをしているのであって、学生の自分だけが辛い思いをしているわけではない。そうしたなかで、自分だけが召集を忌避するのは卑怯であるとの思いが、善作を軍隊へと向かわせたのである。

遠藤の大衆小説には作者が顔を出すことがしばしばあるが、この作品についても同様で、「善作ぐらいの戦争体験をもった中年男ならみなさんの周りにウジャウジャいるのだ」と付け加えている。くになるが、作者は主人公を戦中派の日本人男性一般の代表として設定しているのである。カトリック作家として主人公をキリスト教信徒にする作品が多いが、この物語にはキリスト教は前景化されていない。

#### 四 「男性性」と「脱男性性」

善作という日本人男性は、遠藤の多くの小説に見られる脱男性性の刻印を帯びた人物である。彼は強い性格ではない。むしろ逆である。善作と対照的な人物が鈴木である。彼は精悍で筋肉質の身体を持ち、ゴルフで日に焼けている。独善的、暴力的で、要するに、男性性を体言した軍人的。パーソナリティなのである。

真理子の前で、廉二と鈴木が対決する場面は、緊迫感に満ちている(14)。廉二が善作の息子だと真理子に紹介されて、鈴木は顔に一瞬「狼狽の色が走った」。けれども鈴木はすぐに自分を取り戻す。自分の父親を殴って「ツンポ」にしたのは事実かと迫る廉二に、鈴木は、日本の軍隊は全てそうであったと述べてはぐらかそうとする。「君は戦争中のモラルと平時のモラルをどうも混同しておるね」。

「……」ぼくたちはただあなたたち前の世代が、戦争中何処にでも生じたそういう問題をどう苦しんでいるのか知りたいんです。本当に知りたいんです」という廉二の問いに、「あの時代の道徳が、そう我々に要請したんだから、それに従い、それに生きるのが俺たち国民の生き方だったんだ」と鈴木は応じる。

「結局、あなたは時代、時代によって、ぼくたちのモラルは違ってくるって考えているんですね」

「そうだ。時代によって変らぬモラルなどはない」

「親爺は戦争や平和によっても左右されぬ人間性やモラルを馬鹿みたいに信じてたんでしょ」

「それは弱い者の自己弁解だね」

「……」弱虫というのは、そういうバックを楯にして自分を持たず、虎の威を借りたあんたですよ」

ここでは、モラルという言葉が用いられているが、語られている内容は、規範的な主題であって、要するに、正義や人権に二重の基準があつてよいのかという問いである。作者遠藤にとって、それはあつてはならぬものであつた。彼はキリスト教信徒であつたからである。

対話のあと、鈴木は大理石の階段を上って去って行く。興味をそそられるのは、作者が廉二に鈴木に対するアンビヴァレンツな感情を書き添えている点である。「そのうしろ姿には親爺のような寂し

い影など探してもどこにも見当たらなかった。口惜しいけれど、ぼくの言ったことは彼を少しも傷つかなかったのだ。それは——こんなことを書くのは怖ろしいが——ぼくには彼は魅力的でさえあった。「一方では真理子の父親の態度を憤慨しながら、もう一方ではあの男の雑草的な生命力というか、そういうものに一種の魅力を感じていたのだ。平気で何でもできる男、そりゃあ、あの男には良心や反省はひとかけらだつてない。しかしその代りに妙な強さがある」。

こうした鈴木 of 男性性の「魅力」は、芳子が善作に求めようとして求められないものでもあった。鈴木、善作、芳子の人物類型は、すでに論じた『彼の生きかた』の登場人物にも見られるものである。文学的な誇張がほどこされているとはいえず、高度経済成長期の「企業戦士」には、鈴木のようなタイプはある種の理想像でもあったはずである。

廉二は鈴木が自分の父親であったとしたら、彼をどのように弁護するであろうかと思考実験を試みる(15)。「彼はあの時代のモラルに従ったのだと。そのモラルと国家が要請したモラルだが、しかし彼はその国家の要請したモラルを固く守ったのだと」。「それじゃあ、君はモラルとはそれぞれ国家が決めるものと思ってるのですか。モラルとは国家や民族を超えて、どんな世界の人にも共通するものじゃないんですか」「命令をきかなかつた捕虜をなぐることはたとえ国家のモラルでも、それを無視するのが普遍的なモラルでしょう」と、廉二は反対意見を想定する。「すると、あなたは、たとえ特攻隊のような戦死の仕方も国家のモラルに従っただけだからと言って否定なさるのですか」。廉二は神風特別攻撃隊に「その是非は別として、その行為にある魅力を感じるのだった」。それは有名大学から有名企業に就職する安全な生き方、父親のような生き方の対極にあるように感じられるのだ。

作者遠藤が、登場人物たちを類型的に描きつつも、このような微妙な感覚を書き込んでいる点は見逃してはならない。厳しい父親のような裁くものとしての西洋的なキリスト教の神に違和感を抱いた遠藤は、男性性というものに対して疑念を抱いていた人だが、それが持つ魅力を否定するわけではないのである。

## 五 「日本軍」と「自衛隊」

廉二の進路を防衛大学校に向けさせたのは、岬という自衛隊二尉であったことは既に記した。彼は爽やかな青年として描かれている。彼は千鳥ヶ淵でボートを漕ぎながら、廉二の議論に真面目に応えようとする。予備校にいる学生たちの将来は、バス停で窮地に陥った廉二を見て見ぬふりをした名越達彦だ。「口ではうまい理窟を言う。何でもかんでも批評する。日本のインテリの特徴だ。そして人間が一番大事なところを裏切つて平気なんだから」(16)。岬はその反対にるように廉二には見えただのだ。

「君、愛国心をどう考える」。岬は廉二にそう問いかけ、さらに「じゃあ、君たちはぼくら自衛隊員をどう思う」と続ける。「……」多くの日本人は自衛隊という言葉からむかしの日本の軍隊を思いだす。陰惨で辛かった軍隊の連想がそこにかぶ。それから亦、軍隊と戦争との関係が連想される。だから自衛隊というのは、日本をむかしの焦土にみちびく一つの輪みたいに見える」と岬は言う。これに対して「俺の反戦はむつかしい理窟じゃない。どうにも抜けがたい気持だ」という父親の言葉を廉二が述べると、岬はよくわかるという。彼の父親は戦死していたのだ。廉二は岬に向かって次のようにいう。「社会党や共産党はもちろん自衛隊に反対でしょう。だから自衛隊員であるためには、この二つの政党の考え方に反対な者でなければならぬ」。そして自衛隊が存続するためには自民党が政権を維持することが必要だから、あれは、自民党だけのロボットにすぎないような気がするんです」。

既成の政党について、小説中の登場人物の台詞とはいえ、作者がこのように歯に衣着せぬ見解を記していることには驚かざるを得ない。遠藤周作という作家は、「ワルシャワの日本人」で三菱、ソニーといった企業名を娼婦に言わせるなど、ときに非常に大胆なことをやってのける作家であった。

このような率直な廉二の言葉に、岬はたじろがない。「でも、岬さんは、ぼくにこうまで言わせて何故だまっているんですか」という言葉に「ぼくは……ぼくの生き方に自信をもっていているからさ」と応じるのである。「……」小市民的幸福を狙うより、国家のために何かできるといいうほうが、まだ男らしくないかね。「なんで、ぼくがわざわざ、この日本を愛さなくちゃなんのですか。ぼくは日本人になることを、自分の意志で選んだんじゃないもん」。小説中の議論は続くが、すべてを紹介するわけにはいかない。

平和を護るために防衛力が必要だという岬の論理に、月並みな考えだと思いつつも、廉二はバス停で何もできなかった名越達彦を思い出す。しかし、岬の論理にも全面的には承服できない。防衛力を持ったがために「かえって全面戦争にまきこまれる危険が逆に生ずる怖れだっている」からである。

岬の案内で、横須賀にある防衛大学校を見学し、岬の後輩たちに直接質問をぶつけた廉二は、次第に防衛大学校への進学を考えるようになっていく。家出をして岬の世話で自活生活を始めた廉二は、あるとき、父親に、防衛大学に進学することを決めたと告げる。「息子はもはや、善作の手の届かぬところにいた」(17)。「廉二が生れた時、まだ若かった善作はこの子がたとえ一時でも銃剣を握ると思ひもしなかった。だが、そういうことになってしまったのである。要するに、彼の夢や意志は息子のなかに生きなかつたのだ」(18)。作者はそこまで書いてはいないが、陸軍士官学校に進学した鈴木と、防衛大学校に進学する廉二は、重なり合うキャリア形成を行うことになるのである。任官しない卒業生もいると、作者は美代など登場人物たちに語らせているが、廉二が自衛官になる可能性の方がどう考えても高いと考えてよい。

新聞に連載する大衆小説のなかで、娯楽に徹することなく、このようなシリアスな政治的テーマを既成政党の名前を出しながら書いていた事実は、遠藤という作家に対する見方の修正を迫るものではないだろうか。ある特定の立場から、遠藤は書いていない。政治的意見は、登場人物の心理や台詞で語られ、常に相対化されている。

もっとも、芳子の夫が残した耐熱塗料の発明を、鈴木が火炎放射器に応用することで、防衛庁(現防衛省)の指定工場にするという設定と、それに対して善作が憤激して、それを阻止しようとする展開には、遠藤自身の思いが込められていたのかもしれない。芳子もまた、映画館で見たニュースで、ヴェトナムの民衆がアメリカ軍の火炎放射器で焼かれる情景を見て、全てを悟るのである。

## おわりに

五〇年前に書かれた『どっこいショ』が、今日のわれわれにとって再考の価値を持つ所以は何か。廉二の世代(「団塊の世代」)がすでに社会の第一線を退いたこの時代に、自衛隊を取り巻く状況は大きく変わった。冷戦終結後の一九九一年以降行われてきている国際連合平和維持活動(海外派遣)はすでに四半世紀を越えている。二〇〇七年には防衛庁が防衛省に移行し、二〇一六年には武器使用も認められた。二〇一四年には、武器輸出三原則が見直され、新たな「防衛装備移転三原則」の制定により、弾薬の輸出も解禁された。半世紀前に、自衛隊を巡る日本国内の認識が、人々の生活レベルの目線においていかなるものであったのかを知る上で、この作品はまたとない物語なのである。

現時点からこの小説を読み返して痛感するのは、やはり冷戦期の作品であるという動かしがたい事実である。ヴェトナム戦争が時代の背景として描かれているとはいえ、それは要するに外国の戦争であり、善作の意識は日本国内に完全に閉じている。彼は世界史のなかに生きてはいないのである。日本が実質的にアメリカ合衆国の「下請けの帝国」であることの意味も、善作は理解してはいない。もっとも、作者はそれを必ずしも肯定していたということではないだろう。新聞小説という枠組自体が持つ限界だったのでないか。とはいえ、国家と国、規範的テーマと二重基準の問題など、きわめてシリアスな思想的テーマを扱った作品であることは動かない。ヴェトナム戦争も、単なる小説の背景というわけではないのである。

作者はこの新聞小説を書くことで、作家としてある種の危険を冒しているといえなくもない。これ

は遠藤周作という作家を考える上で重要なことである。小説第一作「アフリカの體臭」が『オール讀物』であったことを考えるにつけても、遠藤にとって、純文学と大衆小説という区別はほとんど意味をなさない。

なお、この小説には、外国人捕虜収容所が重要な役割を果たしている。そこで「おバカさん」のガストンを思わせる、不器用で人の良い白人が登場するが、本稿ではこの点について検討は行わない。『どっこいしょ』は、多角的に論じられるべき小説であることを、最後に改めて指摘しておきたい。国民に死を命じる国家とは何かという問いと、空襲に紛れての徴兵忌避という計画と、入営への再決心などは、ほぼそのままの形で短篇「入営の日」（『オール讀物』一九六三年一二月号）で書かれていることも指摘しておこう（19）。ただし、こちらでは、先に入営した友人も主人公も、ともに復員して、現在では同じ会社の同僚として働いているという設定である。

(1) 小嶋洋輔「遠藤周作「中間小説」論——書き分けを行う作家」『千葉大学人文研究』三六号、二〇〇七年、三七—三八頁。

(2) 戦後の復興を支えた世代であり、この作品が書かれたすぐ後には、「企業戦士」という言葉が生まれている。遠藤が狐狸山神として「ぐうたら」シリーズを執筆し、これらがベストセラーとなるのは一九七〇年代に入ってからだが、『どっこいしょ』もまた、経済成長に邁進する当時の日本社会に対する批評的作品だったのである。

(3) 遠藤周作『どっこいしょ』講談社、一九六七年、五八頁。

(4) 同右、七三頁。

(5) 同右、七五頁。

(6) 同右、七六頁。

(7) 同右、九五頁。

(8) 同右、六九頁。

(9) 同右、八八頁。

(10) 同右、二二頁。

(11) 同右、二七頁。

(12) 同右、三〇頁。

(13) 同右、四九頁。

(14) 同右、二一六—二二二頁。

(15) 同右、二二五頁。

(16) 同右、九六頁。

(17) 同右、二七七頁。

(18) 同右、二九三頁。

(19) 「入営の日」は『うちの女房、うちの息子——第三ユーモア小説集』（講談社、一九七四年）に収録された。

## 第三節 遠藤周作「鉛色の朝」と辻邦生「影」

### はじめに

本節では、一九六〇年に発表された遠藤周作の短篇「鉛色の朝」(1)と、一九六二年に発表された辻邦生の短篇「影」(2)を比較分析する。これら二篇は、第二次世界大戦に関連する類似した出来事をモチーフにしている点で興味深いテキストだからである。二人の同時代作家の資質の違いについて触れておきたい。

### 一 辻邦生「影」

はじめに辻邦生の「影」から考察する。後に触れるが、この作品は辻の全文業のなかできわめて例外的な内容を持っている。私がここでこの作品を取り上げるのも、だからこそなのである。

この作品は「私」という語り手が、同じ重工業会社に勤務して、個人的な接触もあった\*次長多田の、謎めいた死について、証人として語るという体裁を採っている。多田は、西垣常務の輸出事業決定の判断ミスを糊塗するために、負債金額を全て下請け零細企業に肩代わりさせるため、値段を上乘せして発注する。会社と乗務とを救うにはそれしかない、と、多田は「私」に告げる。「私」もその考えに異を唱えなかった。「事件のあとになって、このことはある悔恨をともなつて私の胸につきささる。しかしそのときはなぜか私はそれを口に出せなかった」のである。下請け業者は多田に何とかならないかと必死になって訴えるが、多田は冷たく撥ね付ける。夜、病後で実家に戻っている妻に手紙を書いていた多田は、奇妙な幻覚を見る。それは自分をみつめる目である。自分でも不思議なくらい、多田はこの目に怯える。ある日新聞を見ていた多田は驚愕する。あの零細企業の社長は親子三人で一家心中してしまったことが三面記事に掲載されていたからである。

戦争中、多田は奉天にいて兵長を務めていた。そのときの小隊長が士官学校を出たばかりの西垣だった。西垣は反戦思想の持ち主である一等兵里見を戦死の名目で射殺すると多田にいう。里見に人間的な感情を抱いていた多田は里見の教育係を自ら買って出たのだが、西垣に反抗することができず、結局、里見を見殺しにしてしまった暗い過去があった。深更、多田は一人の若い男が自宅を訪れる幻影を見る。また来るといつて男は去る。それが里見だと多田は気づく。多田は戦時中はまだしも、戦争が終わった今、ふたたび自分が西垣のために下位にいる人間——そしてそれは実は「愛する仲間」なのだ——を見殺しにしたことに良心の呵責を感じ、精神の安定を著しく損なう。約束の夜、ふたたび自宅を訪ねてくる足音が聞こえる。ドアが開く。多田はついに発狂する。

このような作品である。途中から語り手の「私」は文章から消失し、多田の行動と内面を作者が自由に描く三人称小説になっており、小説構成上は破綻している。執筆当時の日記を見ると、作者はこの作品を苦勞してようやく書き上げており、本作がどれほど当時の辻にとつて難題であったかがうかがわれる。パリ時代に書かれた作品だが、「一応昨日最後まで書いてみて、あまり素材がなまだという気がする」とあるので、学生時代の自動車関係のアルバイト先あたりで類似した出来事があったのかも知れない。しかし数日後には「小説が不可能である」という主題が「本来の主題と分裂している」と指摘してもらった」とあるので、決定稿に至るまでにはテーマとモチーフを巡り、相当の紆余曲折があったものと考えられる(3)。

初期短篇がすべて、作者が当時暮らしていた西洋を背景とし、主題に好んで芸術の存在理由を軸とした生と死、永遠、美、愛などを取りあげているのに対し、この作品だけは戦後の日本における良心性の問題を扱っている点で、異なった方向を目ざしている。現在までの作者のなかで、この方向へ作品が十分に発展させられていないが、作者自身は決して異質な作品と思っているわけではない。(4)

最終的に完成したこの作品に関する、一九七二年の時点での作者の見解だが、その後辻はこの方向の作品を書くことは二度となかった。

## 二 遠藤周作「鉛色の朝」

遠藤周作の「鉛色の朝」は、ある男が「私」の前に姿を現すところから始まる。二月の寒い朝のことである。「ソビエトからの送還船」の記事が新聞に出ていた。会社に行くために家を出た「私」は、路上で顔色の悪い男が「頬に皮肉な微笑を浮かべて」じっと見詰めるのに気がつく。それが誰か、どうしても思い出せない。会社につくと男のことは忘れてしまいが、帰宅すると、妙な男が自宅の前をうろろろしていたと告げる。男の風体は、朝自分が見た男とよく似ている。「私」は身体が震えるのを覚える。

翌日、「私」は男が薄笑いして立っているのをふたたび見た。男は「長い時間かかってやっと探したんだ。村松さん」。「憶えがないと言うんですか。じゃ、チャンとした所に出ましようか。訴えたっていいんですよ。君のために俺たちはどんなに苦しい思いをしたか、察しもつくでしょう」という。「私は黙って眼をしばたいた。この男がどんな用件できたのか、私にはわかっていった。あのシベリヤの収容所の黒い建物やノルマに疲れた仲間たちの顔が幾つか、私の頭をかすめていった」。

「私」は男に財布のなかの金を渡す。「今日はこれだけしかないんだ」といって。「何時かはこのような事が起るかも知れぬとは思っていた。日本に帰国した当座、私は毎日、怯えながら日を過し、電車の中でも路でも何処かで見たとような顔に出会うと、思わず、ギクルとしたものだった。名前を改名したり、応召前勤めていた会社をそつとやめたのもそのためだった」。「だが今日、遂に私は彼等の一人から見つけられた。あのジャンパーを着た男は、シベリヤの作業地で私たちと一緒に石を切り、その石を運んだ一人なのである」。

「私」はシベリアに三年間抑留されていたが、帰国したいばかりに、ソヴィエト連邦の大尉の三日間の訊問に根を上げて仲間を売った過去があったのである。不気味な男は、しばらくするとまた金をせびりにやってくる。「私」は暗澹たる今後の生活を思い、男を殺すことさえ考える。けれども、あつけない結末が待っていた。男はシベリア抑留中の仲間の一人ではなく、同僚からも平気で金を借りる同じ会社の日野が、飲み屋で「私」の名前で借借書を書いたために取り立てに来た人物だったのである。自分を拝みながら謝る日野の前に、「私」は立ち尽くす。「私は、眼をしばたたきながら黙っていた。私が見つめているのは、日野の顔ではなかった。日野の顔のむこうに曇っている空だった。シベリヤの曠野のように鉛色にどこまでも拡がっている空だった」。

このような作品である。「周作恐怖譚」は、作者が実体験を語るという体裁のもの、読者からの手紙を紹介するという体裁のもの、いわゆる小説風のもの、とさまざまな語り口が活用されるが、本作は小説らしい小説の形式を採っている。辻の「影」のような人称上の破綻はない。同僚の日野が頭をかきながら「私」から借金をするという伏線や、新聞のシベリア送環船の記事から主人公が思わず目を逸らすなど、構成上も工夫されている。遠藤はさほど苦労することなくこの作品を仕上げたように見えるが、実際は辻の「影」に残されているような苦労の痕跡が、綺麗に拭い取られているだけなのかもしれない。

### 三 「裏切り」と「罪」というテーマ

二つの作品を並べてみたときに、すぐに気がつくことは、辻は戦時中の満州の奉天、遠藤は戦後のシベリア収容所と異なるが、よく似た設定で作品を構成しているところである。もともと、遠藤作品の主人公もまた満州からシベリアへと移送されたと考えられることから、南方ではなく中国大陸が舞台であることが共通しているといってもよい。第二次世界大戦に出征した元大日本帝国陸軍兵士が、内地に戻る前に、良心に反する行為をしてしまう。ようやく内地に戻り、平和な日常に戻るが、ふとした機会に過去の亡霊に脅かされるといふ点が共通している。作者自体にも共通点がある。辻は一九二五年生まれ、遠藤は一九二三年生まれで同世代であることは冒頭でも記した。敗戦のときは、辻が二〇歳、遠藤が二二歳である。つまり、二人とも召集されてもおかしくない年齢であったわけだが、辻は「兵役逃れ」で旧制松本高等学校理科乙類に在籍しており(5)、遠藤は肋膜炎を起こした後の徴兵検査で第一乙種合格で入隊が一年延期となったため、戦地に赴いていない。したがって、二つの作品は、いずれも戦地での実体験を持たなかった小説家が書いた戦争ものという点でも共通しているのである。

一九六〇年頃は、敗戦からすでに一五年が経過していて、五年前の朝鮮戦争の特需から、日本の経済状況は活気を取り戻し、高度経済成長の予感が感じられる時期であった。けれども、当時三〇代から四〇代の働き盛りの男たちは、その多くが戦場の体験を持っていた。それゆえ、「影」や「鉛色の空」で主人公が感じる恐怖の感情は、当時の読者にとってはそれなりのリアリティーを持つものであったと考えることができる。

「影」の多田は、物語の最後で狂気に陥るが、「洪水の終わり」(一九六七年)で、ナチスに両親を殺されたポーランドの女子大学院生が、一九六〇年代にフランス南部のサマーセミナーにおいて金髪のドイツ人学者のこころない振る舞いから精神の安定を崩し、物語の最後に狂気に陥ると類似している。ただし、「影」と「洪水の終わり」が異なるのは、狂気に陥る原因が、本人が犯した罪によるものか否かである。「影」の多田を、最後に狂気に陥らせることで、作者は結末をつけている。ところが、遠藤は「鉛色の空」で、主人公が味わった恐怖が、とりあえずは過ぎ去ったものの、いつぶたたび、今度こそ本当のものとして自分に迫り来るかもしれないという締めくくる方を採用している。さらに興味をそえられるのが、「影」の多田も、「鉛色の空」の村松も、彼等の罪は「仲間」を裏切ったというところにあることである。「裏切り」というテーマは、遠藤周作において生涯をかけて追求するべきものとなった。それは宗教的な次元へと上昇し、『沈黙』のような「神」をめぐる主題となり、世俗的に下降して『彼の生きかた』のような、人間と動物をめぐる主題となった。けれども、辻邦生にとっては、継続して追求するべき切実な主題とはならなかった。

太平洋戦争については、戦場体験を持つ第一次戦後派、第二次戦後派が精力的に小説を発表していた。遠藤周作や安岡章太郎といった「第三の新人」たちは、市井の生活を描く人々であるといわれるが、少なくとも遠藤に限っては、戦場体験こそないものの、戦争を背景にしない作品の方が少ないといってもよいくらいである。

「影」も「鉛色の朝」も、ともに外地での、同胞に対する罪の意識が主題であることは、留意すべきかもしれない。つまり、加害の相手が「敵」ではなく「味方」であるという点である。他者(敵)との関係ではなく、国民との関係が深く突き刺さる経験となっているのは何故だろう。帰還兵が、その後も長く苦しむのは、ヴェトナム戦争以来よく知られるようになった戦後遺症が示すように、「敵」との関係によるものが現実には多いと考えられるからである。辻も遠藤も戦場体験がないということはあるにしても、良心の呵責が同胞に対するものとして設定されている事実は、一考に値すると思われる。ここでは問題提起だけ行っておく。

## おわりに

辻邦生が「影」一作で日本人とアジア太平洋戦争について書かなくなるのは、一つには敢えて自分が取り組まずとも、ほかにそれをやるべき小説家がたくさんいるという事実を認識したからに違いない。彼等と競合する作品を敢えて書くことに自分の作家としてのユニークネスがあるとは思えなかったのである。辻が小説家として書いていきたかったのは、国民全てが何らかの形で巻き込まれた戦争とその爪痕といった歴史的出来事ではなく、「芸術の存在理由を軸とした生と死、永遠、美、愛など」であった。そこに辻のユニークネスと困難があったといつてよい。辻のまなざしは、地上の現実よりも超越的な美の永遠世界へと向いていたのである。

- (1) 初出は『近代文学』一九六二年一月。『辻邦生作品 全六巻』1（河出書房新社、一九七二年）に収録。
- (2) 初出は「周作恐怖譚」として『週刊新潮』一九六〇年七月一日―九月七日連載の一篇。単行本『遠藤周作怪奇小説集』（講談社、一九七〇年）に収録。
- (3) 『辻邦生全短篇』2 中公文庫、一九八六年、四二四―四二七頁。
- (4) 『辻邦生作品 全六巻』1 三二〇頁。
- (5) 丸谷才一との対談で、辻は「徴兵を逃れるために松本高校の理科にも入ったわけだし。入ってからもひたすら軍事教練をサボってね。終戦の条約が締結されるのを待ちに待った」と語っている（『灰色の石に坐りて 辻邦生対談集』河出書房新社、一九七四年、一九六―一九七頁）。



# 第七章 大日本帝国海軍と『蝶々夫人』の幻影

## 第一節 遠藤正介と古山高麗雄

### ——遠藤における「兄なるもの」

#### はじめに

本章では、アジア太平洋戦争及び戦後の日本が置かれた国際政治上の立場について、遠藤がどのような認識を抱いていたのかを考察するために、兄正介と、素人劇団「樹座」の活動を取り上げて考察した上で、村松の戦後日本認識について比較考察する。

遠藤研究において、二つ違いの兄正介（一九二一—一九七七）については、これまで十分な学術的考察が加えられてきたとはいえない。一つには、一九六〇年代まで、遠藤が兄の存在について、随筆では言及することがあったものの、創作の世界では消去していたからである。「童話」〔『群像』一九六三年一月号〕、「私のもの」〔『群像』一九六三年八月号〕、「母なるもの」〔『新潮』一九六九年一月号〕など、自身の大連時代、神戸時代を素材に私小説的手法を意識的に用いた短篇では、主人公の語り手に兄がいない。代わりにいるのは幼い妹である。現実の遠藤には、兄はいるが、妹はいない。これは、母と自分との関係に焦点を当てる上で、自分以上に苦しんでいたであろう兄の存在を登場させるよりも、状況がよく掴めていない妹を登場させることの方が都合がよかったからであると考えられる。両親の不仲を、兄という緩衝役なしに正面から受けとめる立場に自分を置くことができるからである。換言すれば、「母なるもの」を前景化するために、「兄なるもの」を後景化したといってもよい。

それが、「初恋」〔『別冊小説新潮』一九七九年夏季号〕になると、兄が登場する。「二つ年上の兄は、そのつらさ「父母の不仲」を逃れるためか、いつも机にかじりついて勉強していた」とさりげなく言及されているのである。秀才の兄と劣等生の弟という構図で、遠藤の兄弟関係が言及されることは、作家自身が随筆（例えば『落第坊主の履歴書』一九八九年）で書き記したこともあり、諸家の伝記的記述にないわけではない。しかしながら、賢兄愚弟という単純な理解は、遠藤における正介の存在の大きさを明らかにするどころか、反対に覆い隠してしまうものである。遠藤の人間形成において、両親の不仲と離婚は確かに大きな出来事であり、「父なるもの」と「母なるもの」の葛藤乃至対立が、彼の思想の根底にあることは疑いようのない事実である。しかしながら、そうした二項対立的構図で遠藤を捉えてきたことから、これまで、兄正介の重要性が閑却されざるを得なかったのである。

本節では、正介の生涯と人間像を、遠藤が親しかった作家古山高麗雄のそれと対照して考察することで、遠藤における「兄なるもの」の役割の重要性を明らかにする。古山を参照するのは、正介と古山が同世代であり、伝記的な類似と相違を持っているからである。

## 一 正介の生涯

『遠藤正介』（遠藤正介氏追悼事業委員会、一九七八年）所収の年譜を基礎に、正介本人の文章及び諸家の証言から、彼の生涯を振り返っておくことにしよう。

遠藤正介は、一九二一年に東京で生まれた。一家で大連に渡り、大広場小学校に入学、卒業後の一九三三年に、大連第一中学校に入学した。同年夏に母、周作とともに神戸に戻り、灘中学校に転入した。夙川カトリック教会で洗礼を受けたのは翌年のことである。洗礼名はペトロだった（母親郁はマリア、周作はパウロである）。一九三七年、灘中学校四年修了で旧制第一高等学校文科丙類に入学。ポルト部に入部した。一九四〇年、同校を卒業して、東京帝国大学法学部政治学科に入学。一九四二年七月、高等文官試験合格、九月に大学卒業して通信省に入省して東京都市通信局に配属されたが、四日後に現役入隊して、海軍経理学校補習学生、海軍主計見習尉官となった。一九四三年、周作が慶應義塾大学仏文科に入学した年に、海軍主計中尉。シンガポールに赴任。労務担当士官として、海軍軍人及び軍属、現地採用の人々の風紀取り締まりに当たった。一九四四年、正七位。戦闘の経験はないが、米軍爆撃直後に下士官を率いて波止場で輸送船からの物資の荷下ろし中に、火薬が爆発して腹部に弾丸を受け負傷した（1）。一九四五年、海軍主計大尉。サイゴンで物資調達業務に従事。敗戦後、メコン川流域の収容所での俘虜生活のために、必要物資の調達などに当たった。岩塩の積み出しなどの肉体労働に従事。独立を目指すベトナム軍の夜襲で弾丸を腹部に受け負傷した。一九四六年、復員して通信省に戻り、大阪通信局に配属された。一九四七年、結婚。周作の大学卒業はその翌年のことである。一九四九年、通信省大臣官房人事管理課主査となり、翌年には労務課主査となる。周作がフランス留学に旅立つのはこの年のことであった。一九五一年アメリカ合衆国に七〇日間の出張。一九五三年、周作がフランスから帰国した年に、母が死去する。正介は三二歳であった。周作が「アフリカの體臭」「アデンまで」で小説家として再出発したのはその翌年のことである。

一九六〇年代、四〇代の正介は、東京電気通信局副局長、経理局次長、職員局長、総裁室調査役、近畿電気通信局長、営業局長を経て、五〇代に入ると、日本電信電話公社理事、同総務理事となる。海外への長期出張も多い。一九六二年には、デンマーク、スウェーデン、ドイツ、オランダ、英国、フランス、スイス、オーストリア、イタリア、アメリカに五〇日間、周作が『沈黙』を発表した一九六六年には、フランス、オランダ、西ドイツ、スイスに一三日間、一九六七年にはカナダ、アメリカに一〇日間、一九七二年にはアメリカ、英国に一六日間、一九七三年には、スリランカ、ケニア、ザンビア、エチオピア、ポルトガル、フランスに一九日間の公務出張をしている。また、一九七六年には、長男を連れて、シンガポールを訪れている。これは私的な旅行であり、敗戦時に心に定めたことであった。一九七七年食道静脈瘤破裂のため急逝。享年五六歳。従三位勲二等瑞宝章。聖イグナチオ教会で葬儀ミサ。府中カトリック墓地に埋葬された。兄の死に際して、遠藤は「俺は孤児になった、孤児になった」と家族に語ったという（3）。

正介の公的履歴を一瞥すれば、彼の人生は、日本の指導層に属する選良のそれであったことは明らかである。実際、旧制第一高等学校や東京帝国大学、海軍時代の人間関係には、戦後に官公庁幹部、大学教授、弁護士、大企業重役などになった人が多い。

## 二 正介の人間像

正介は、昭和天皇を敬愛し、大阪万国博覧会の電気通信館の責任者として直接接してからは、さらにもその念を深め、天皇皇后の大きな写真を総務理事室の応接間に飾っていた（2）。また、周囲から勧められることも多かったようで、国会議員に転身して内閣総理大臣を目指すことを考えていた一時期もあった（3）。アジア太平洋戦争においても、帝国海軍兵士として戦地に赴くことに躊躇いを覚えなかった。戦後も国家官僚として、また電電公社という一兆円規模の巨大公益企業の理事として、日本の国家体制と一体化した人生を送った人であり、そうした生き方に疑問を抱いた節は見受

けられない。官僚的なエリートとして生きた人なのである。

興味をそえられるのは、労務管理という領域に、正介は生きがいを感じていたことがうかがわれることである。「遠藤労政」という言葉が当時あったという(4)。敗戦時に、インドシナで、帰国して何をやりたいのかと俘虜仲間に問われた正介は、「労務だよ」と答えたという(5)。正介には家父長的なところがあった。長男であるという意識がとりわけ強かったようである。三浦朱門の証言によれば、正介は、周作が自分と違っていわゆる学校秀才的な性格ではなかったことから、弟の生活を一生面倒みなければならぬと考え、結婚する際には、妻に「おれには周作という出来損ないの弟がいて、おれは一章そのめんどうをみることになるかもしれないけれども覚悟してくれ」と話したという(6)。また、長男の証言によれば、正介は、自分の家族のみならず、弟家族を含めて、遠藤一族全体の長として生きようとしていたという(7)。これは、彼が大日本帝国憲法時代の国家主義者、家父長的な権威主義者であったということであろうか。そういうところもあったかもしれない。しかし、彼はそうした権威主義だけの人ではなかった。

電電公社時代、女性の育児休業や、身体障害者の計画的雇用方針を策定するなど、日本の労働環境に関する人々の理解が一般的ではなかった時代に、先駆けとしてこれを導入するように尽力したことがあった(8)。また、社会福祉法人「ねむの木学園」(肢体不自由児養護施設)の後援会結成にも関与している。こうした公私の実践は、彼がカトリック信徒であったことと無関係ということはない。従姉妹の証言に拠れば、インドシナ時代に日本兵から、看護師などの従軍女性たちを保護することが自慢だったという(9)。要するに、彼は単なる攻撃的な男性性だけの人ではなく、弱い者を護るという、もうひとつの男性性を持った人物だったのである。それはおそらくキリスト教的な「愛」の教えと無関係ではなかったはずである。不出来な弟を決して見捨てない。自分の家族以外にも、何かあったならば自分が何とかしようとする。彼はそういう人間であった。女子学生への親切に、「どうしてそんなに親切にできるの」と従姉妹が尋ねたとき、正介は「個人的な感情の問題ではないからだ」と答えたという。妹は、これを「彼の神への信仰の深さは生活と結びついたものであった」(10)と解しているが、そのとおりであろう。

### 三 古山高麗雄の生涯

次に古山高麗雄の生涯について、『昭和文学全集29』(小学館、一九八八年)所収年譜及び玉居子精宏『戦争小説家古山高麗雄伝』(平凡社、二〇一五年)に拠って確認しておこう。

古山高麗雄は、一九二〇年に朝鮮新義州で生まれた。父は開業医で、家庭は裕福だった。頭脳明晰で成績は抜群だった。中学卒業後、父親の母校である第二高等学校に二回不合格となり、一九四〇年に旧制第三高等学校文科丙類に入学した。合格した慶應義塾大学医学部予科には行かなかった。前年に補習学校で安岡章太郎と知り合っている。授業にほとんど出ず、進級できないため、翌年に退学した。学級主任の伊吹武彦に、「あなたのような人は、辞めたほうがいいのではないだろうか」と言われたという(11)。この年に母親が死んだ。一九四二年、徴兵検査で第二乙種合格。仙台の歩兵第四聯隊入隊。一九四三年第二師団司令部に転属。マニラ上陸。一九四四年ビルマに駐屯。その後中国雲南省で断作戦に参加。マラリアで野戦病院に入院。一九四五年、原隊復帰。カンボジアに移動。俘虜収容所に転属。ラオスに移動。敗戦後に上等兵に昇進(ポツダム上等兵)。一九四六年、戦犯容疑者としてチーホア監獄に収監。その後、サイゴン中央刑務所に移る。一九四七年、禁固八ヶ月の判決。未決通算により釈放。日本人キャンプで半年間を過ごした。同年復員。

日本に戻ってからは、結婚して一女をもうけ、編集者として生活を始める。河出書房、教育出版株式会社を経て、芸術生活社で『芸術生活』の編集に従事した。一九六七年、遠山一行、江藤淳、高階秀爾らの『季刊芸術』同人となり、芸術生活社を退社して専従となった。一九六九年、江藤淳の勧めにより初の小説「墓地で」を『季刊芸術』に発表し、以後、小説家として活動を始めた。一九七〇年、サイゴン中央刑務所時代を舞台にした小説「プレオーの夜明け」で芥川賞受賞。四九歳だった。一

九七五年、フィリピン、シンガポール、マレーシアに二週間戦地再訪。一九七六年にも、ビルマ、タイを再訪。一九八年、戦争三部作の第一作『断作戦』（文藝春秋）刊行。一九八五年、第二作『龍陵作戦』（文藝春秋）刊行。一九八六年、フィリピン訪問。一九九〇年、中国雲南省の戦場を再訪。一九九二年、北朝鮮新義州への再訪を試みる。一九九四年、「セミの追憶」で川端康成文学賞受賞。一九九六年にも新義州再訪を試みるが、前回同様、満足な見学はできなかった。一九九九年、戦争三部作の第三作『フーコン戦記』（文藝春秋）刊行。二〇〇〇年、戦争三部作により菊池寛賞受賞。二〇〇二年死去。享年八一歳。

#### 四 古山高麗雄の人間像

河出書房の編集者と現れた古山について、野上弥生子（一八八五—一九八五）は「美しい心情の持ち主であることも分つて悦しかつた」と日記（一九五一年一月一八日）に記した（12）。これは、簡潔ではありながら、彼の人間性を語って余りある言葉ではないだろうか。

第二高等学校受験の口頭試問で「教練は嫌いですから」（13）と答えて不合格となった古山だった。その彼が旧制第三高等学校に合格できたのは、口頭試問で「八紘一字とは何か」と問われ、侵略主義とどこが違うかと重ねて問われたときに、「八紘一字と言っても、結局は侵略主義です」と答えた古山を認める度量が、当時の三高にはまだあったからである。大東亜共栄圏の話の総長がしたときに、日本は東洋の長兄で弟たちを正しく導かねばならないという話に納得できないものを感じ、それは日本が勝手に決めたことだと挙手をして異議を唱えた彼は、「この国で出世してはいけない」と友人に話したという（14）。国家と一体化して生きることを拒否し、体制から落ちこぼれることが、彼が選んだ生き方だったのである。

正介と古山の履歴を比べて見ると、似ているところと異なるところがある。同世代で、エリート階層の長男として、日本の植民地で少年期を過ごしたこと、少年期から秀才（小学校時代の成績は「全甲」）であったところは似ている（15）。しかし、正介が旧制第一高等学校に進学して、そのまま東大法学部へ進み、国家官僚となっていたのとは異なり、古山は旧制第三高等学校を一年で退学して無頼な世界へと沈淪してしまう。ここには、戦争の時代と帝国日本の国家主義に対する嫌悪が働いていた。軍隊に入ってから昇進することなく、「兵隊蟻」としてアジアを転戦し、敗戦後は戦犯として刑務所に入った（敗戦直後にポツダム上等兵。驚くべきことに、さらにその後昇進して、形式上は最終的に軍曹になった）。復員してからは、地味な編集者として、また、小説家としても、左右のイデオロギーとは距離のあるところで自らの文学的営為を重ねていった。彼の戦争小説は、大岡昇平の「レイテ戦記」のように、作戦を日米両国の公文書などを参照しながら俯瞰して描き出すような作品ではなく、蟻のような兵隊の視点から描き出すものであった。

要するに、正介と比較したとき、古山の履歴は、いわゆる世間的な栄達とは対照的なものであったことがわかる。これは生き方の違いであり、優劣をつけられるものではない。ただ、遠藤周作の身近にこのような二人の対照的なメンターがいたことに注目しておきたいのである。

#### 五 「同伴者イエス」と正介の面影

遠藤周作文学における、「兄なるもの」の大きさは、これまで看過されてきた。この視点からは、三浦朱門が、遠藤の小説『侍』の主人公長谷倉に、正介の面影を見ている。

「正介は」とにかく少佐にまでなってしまう。そしてその後も日本の体制の中でどんどん出世する。これはキリスト教徒であることを表に出さうまいきつこないのに、兄貴はその中で自分の世俗的なものと宗教的なものを両立させている。そのテーマが『侍』のような気がする。『侍』に出てくる従者がいますね。馬鹿で教養がなくて、そのくせ変にまともに信者になってしまう。あれ

が遠藤自身じゃないかと思えますね。(16)

士官ではあるが、正介は大尉(尉官)であり、少佐(佐官)というのは三浦の勘違いである。インタビュー記事なので、「世俗的なものと宗教的なものを両立させている」という理由付けが、いまひとつ腑に落ちないところがあるが、『侍』という小説に兄正介の投げかける影を見ている点は、身近に親しく接した友人ならではの炯眼と思う。『侍』は作者が自分の人生を投影した作品といわれるが、兄正介の人となりについて知れば知るほど、小説『侍』の背後に潜む兄正介の面影を拭いさることは、簡単にはできないように思われてならないのである。正介が「サムライ」という言葉が好きであったという妻の証言を知るとき(17)、タイトルが『侍』とされたことにも、単なる偶然の一致とは考えにくいのである。そして私は、主人公長谷倉以上に、「あの方」すなわち「同伴者イエス」に、兄正介の面影を思い浮かべるのである。

父親的な裁く神ではなく、母親的な許す神。これまで遠藤文学が形象化した「同伴者イエス」の姿は、もっぱらこうした二項対立の図式で捉えられてきた。しかし、考えてみれば、父親も母親も、子どもを庇護する存在という点では同一である。「同伴者イエス」は、人間の男性の姿をとった神だが、女性的な側面を持った男性である。それは、裏切られても裏切った者を許し、見捨てず、かたわらに寄り添い続ける神である。そこに、遠藤の優しい母親の面影と、彼女に象徴される女性性を見て取れることは、もちろん可能である。しかし、「同伴者イエス」が、女性性を兼ね備えた「男性」であることに改めて注目するとき、兄正介に象徴される、女性的な優しさを兼ね備えた男性像を、ここに重ね合わせることもできるのではないだろうか。

遠藤が文学的に提示した「同伴者イエス」は、これまで考えられてきたように、西洋の父親的なイエスではない、母親的なイエスであるとの見方も、異なった見方が可能だと私は考える。見捨てることなく、人生に同伴する生き方、女性や障害者などの弱者への実践を伴った暖かなまなざしは、遠藤文学に描かれた同伴者イエスとよく似ているからである。彼は電電公社の労務担当として組合と折衝する際にも、スト処分者の救済方法を取り入れるなど、情け容赦なく切り捨てる人ではなかった。そのため、自民党タカ派議員の不興を買って総裁の責任が問われかけ、辞任を覚悟したこともあったのである(18)。

### おわりに

正介が書いた弟に関する文章「愚兄賢弟」は、思いやりに満ちたものである。正介と遠藤は、月に一回は都内で会って、銀座や渋谷のバーで酒を呑む関係だった(19)。

正介には少なからぬ数の随筆や論文があるが、旧制第一高等学校三年生時代に吹田紀夫名義で書いた小説「盗み」を紹介したい(20)。主人公は寄宿舎に二〇年勤続する五〇代の「小使」である。掃除のときに財布を拾った彼は、「舎監様」に届けようと思ったそのとき、近づいた足音に驚き思わずその財布をポケットに入れてしまう。その現れた学生に、財布を見なかったかと尋ねられた主人公は、疑われることが怖ろしくなり、知らないと答えてしまう。「小使」は、あった場所に財布を置いておこうと考えたが、若い同僚に財布を落とすところを見られてしまう。五人の学生(寮長)たちに査問されることになった主人公は、精神的に追い詰められるが、最後になって、「殆ど世の中のあらゆる不正に対して、強い反抗の力が、体の底から、もくもくと、湧き上って来るのを感じた。そして彼はその力に押し上げられる様にして、つと立ち上がった。彼の、崇高に近い顔や態度に、五人の寮長は、吃驚して、話しつづけていた口を止めて恐れと、驚きに満ちた眼で見上げた」。彼は青い顔をしながら、しかし自らの潔白を堂々と主張する。そして部屋を出て行く。誰も彼を追わない。

このような短篇である。この小説には、階級、権力、正義、そして何よりも、人間の尊厳という主題が扱われている。寄宿舎内の盗みという事件に、人種問題を絡めれば、これは遠藤の短篇「コウリツジ館」に繋がっていくであろう。遠藤兄弟は、おそらくはカトリック信仰を基盤として、人間の尊

敵に対する感覚において、通底するものを分かち持っていたのである。

遠藤における古山高麗雄の存在の大きさについては、樹座について論じる次節で詳細に考察するが、兄正介と同世代でありながら、社会のいわゆる表街道を歩んだ正介と違って、落ちこぼれることを選んで生きてきたこの人は、エリートたる兄正介の、裏返しのような存在であったように思われる。

(1) 遠藤正介「傷痕」(『遠藤正介』遠藤正介氏追悼事業委員会、一九七八年、五六八―五七一頁)に拠る。一九七四年、電電水交社の会合における挨拶文の記録である。だがこれは「全くのうそ」との第三者の言もある。電電公社総裁秋草篤二「遠藤君の思い出」に拠ると、遠藤とゴルフの後、風呂で遠藤から「秋さん、見てくれ。この玉の肌を。俺は灘で酒をつくる宮水を産湯に使ったんだ。傷一つ無い、つやといい、色といい、どうだい」と言われた。そのときに傷はなかったようだというのである(『遠藤正介』二〇―二二頁)。しかし、水交会の挨拶という公式の場で虚言を吐くことは考えられない。「脇腹と臍の横に二センチ大の弾丸あとが残っています」という言葉は真実と考えるべきである。

(2) 朴木実「万博での思い出」『遠藤正介』遠藤正介氏追悼事業委員会、一九七八年、二四九―二五〇頁。

(3) 遠藤順子『夫・遠藤周作を語る』文春文庫、二〇〇一年、三七頁。

(4) 杉山源作「水師宮」『遠藤正介』一六一頁。

(5) 本多静雄「遠藤さんのこと」『遠藤正介』二五五頁。

(6) 三宅敏郎「シンガポールでの出会い」『遠藤正介』二八〇頁。

(7) 三浦朱門「わが友、遠藤周作を語る」『文藝別冊遠藤周作(増補新版)』河出書房新社、二〇一六年、一三五頁。

(8) 「父を語る(座談会)」における長男遠藤絢一の発言。『遠藤正介』三七六頁。

(9) 荒木幸之助「遠藤さんを偲ぶ」『遠藤正介』二九―三〇頁。なお、遠藤正介の論文「雇用問題についての私の考え―身障者雇用と女子局に関連して」『遠藤正介』所収も参照されたい。

(10) 竹井恒子「正介兄」『遠藤正介』三四七頁。

(11) 同右。

(12) 玉居子精宏『戦争小説家古山高麗雄伝』平凡社、二〇一五年、三七頁。

(13) 同右、一一五頁。

(14) 同右、二五頁。

(15) 同右、三二頁。

(16) 遠藤正介「愚兄賢弟」『遠藤正介』五〇―一頁。玉居子精宏『戦争小説家古山高麗雄伝』一三三頁。

(17) 三浦朱門「わが友、遠藤周作を語る」『文藝別冊遠藤周作(増補新版)』一三八頁。

(18) 遠藤マツ子・坂部正夫「夫を語る(対談)」中でのマツ子の発言。『遠藤正介』三八六頁。

(19) 本多静雄「遠藤さんのこと」『遠藤正介』二五五頁。遠藤正介の労務管理に対する考え方については、彼の論文「労務対策の秘訣―管理者のために」及び「労使関係近代化の歩み」(『遠藤正介』所収)も参照されたい。

(20) 遠藤正介「愚兄賢弟」『遠藤正介』五〇―三頁。

(21) 『遠藤正介』所収。

## 第二節 樹座版『蝶々夫人』の政治的イロニー

### はじめに

遠藤は、素人劇団の座長でもあった。学生、主婦、会社員、公務員といったさまざまな立場にある演劇の素人たちによる劇団である。北杜夫、佐藤愛子、林真理子といった小説家たちが参加することもあったが、世間名のある彼らも、こと演劇に関しては全くの素人だった。「樹座」と名付けられたこの劇団は、一九六八年に活動を開始し、二九年間の間に一九九七年に追悼公演で幕を下ろすまで、二一回の公演を行った(1)。東京、神戸、大分など国内ばかりか、ロンドン、ニューヨークでも公演している。公演会場も、紀伊國屋ホールをはじめとして、帝国劇場、国立劇場といった一流の劇場が使われた。

これまでの遠藤文学研究において、樹座は対象外とされてきた。小説や戯曲といった作品が、小説家としての遠藤の本領であり、素人劇団は彼の余技とみなされてきたのである。これは研究者ばかりではなく、遠藤と生前に親しかつた小説家仲間の見解でもあった。たとえば、加賀乙彦は「樹座というふざけたしかし熱心な劇団」を、「宇宙棋院という名前の堂々とした棋院で楽しんだりダンスの会で女性を集めて悦に入ったり」することと同列のものとなししているし(2)、舞台に立つことこそなかったものの、樹座のメンバーだった三浦朱門は、遠藤が滝亭鯉丈『花暦八笑人』や梅亭金鷲『妙竹林話七偏人』などで描かれる「非生産的な遊興と駄洒落に日を送っている」境遇に憧れていたことから、「仕事や厳しい創作生活によつて生ずるストレスの解消法として」樹座や宇宙棋院などを作ったと述べている(3)。

しかし、四五歳からの遠藤の人生において、樹座に大きなエネルギーが注がれたことは事実であり、大きな意味でこれを作品として捉えることも可能であろう。加賀や三浦と違い、長年裏方を務めた加藤宗哉は、「樹座こそが、じつは遠藤周作の隠れた最高傑作だったのでないか、と思うことがあるのです」と述べている。「生活があつて人生のない一生ほどわびしいものはないから、遠藤周作は樹座のみんなに人生を味わってもらおうとした。つまり樹座は、単なる遊びを越えた(へ)人生を愉しむ味わう劇団)でした」(4)。加藤の言葉は、樹座を単なる遊びとする見解に疑問を投げかけるものである。このように、樹座の活動の評価は定まっていない。私は樹座を遠藤の最高傑作とは考えないが、小説創作と並ぶ重要性を持つていたと考えている。

もちろん、狭義の実証的国文学研究における研究対象が、小説や戯曲といった作品であることは当然である。私がここで試みようとするのは、樹座という活動をポストコロニアリズムの視座から文脈化することであり、遠藤研究の新しい見取り図の提示である。ただし樹座は遠藤研究の死角の一つなのであつて、ここを手がかりに、遠藤研究は新しい視野を獲得することができると私は考えているのである。

私は樹座の舞台を一度も見たことがない。岳父板東慧(経済学者、公益社団法人国際経済労働研究所会長)は、一九八〇年の『カルメン』神戸公演で闘牛士エスカリョ役を演じた人で、北杜夫や佐藤愛子とともに舞台に出た当時をかなり詳しく聞いたことがある。だが、私は多くの関係者への聞き取りなどは行っていない。活字化された少なからぬ証言と舞台写真(文藝別冊)など文献資料から、可能な限りの考察を試みることにする。私が展開しようとする議論は基本的に表象レベルでの分析である。

## 一 解放された世界

樹座は、『季刊藝術』編集長だった古山高麗雄（一九二〇—二〇〇二）が、あるとき、素人劇団を作って舞台に立つという着想を述べたことがきっかけであった。既述のとおり、古山は仏領インドシナ（現在ラオス）で敗戦を迎えた人である。捕虜收容所に勤務していたことから、B C級戦犯容疑者としてサイゴン中央刑務所に収監され、八ヶ月の禁固刑を受けたが、未決期間を通算して判決の翌日に釈放されて復員した。（5）。

古山は復員前に、サイゴン（現ホーチミン）近郊で、軍隊の野外劇として『白浪子守唄』と題する「歌、踊り、芝居ありのナンセンス劇」を上演したことがあった（6）。浅草で「まげものオペレッタ」と言われた芝居を意識していたという。古山は、脚本を書き、演出もし、出演もした。衣装や舞台は手作り、音楽は軍楽隊に頼んだ。毎週、脚本を書いては三日間の練習をして週末に上演した当時の舞台については、古山の芥川賞受賞作「プレオー8（ユイット）の夜明け」に詳しい。安南囚人たちの、ヴェトミン独立歌と、フランス人囚人たちのラ・アルセイエーズの斉唱から始まる刑務所の生活を描いたこの作品には、「日仏安の歌合戦でもやりませんか。海に河馬、みみずく馬鹿ね（海行かば、水漬く屍）。へへへ」という驚くような台詞や、刑務所内のジェンダーの揺らぎなどを描いて、戦争の現実を知らない世代の読者を驚かせる。「白浪子守歌」に関する既述もこの小説にはあるが、演劇と人生とに関する哲学的思索もこの作品には書かれている。

芝居は、私たちの人生のどの辺から始まっているのか。だいたい、監獄ってやつが、考えてみると遊戯じみている。人間が人間を檻の中に入れて見張っているなんて。だが、遊戯じみていると言ってみるところで、私はそこにしかないのだ。もし私が二十年檻の中に入れられるとすれば、二十年この状態が続くのだ。それが私の現実だ。（7）

ともあれ、樹座のルーツは、仏領インドシナで戦犯となった日本帝国陸軍兵士古山高麗雄のナンセンス芝居にあったのである。それは帝国主義、植民地主義の崩壊という歴史の変動を背景としており、「人生を愉しみ味わう劇団」というコンセプトの源泉も、皇軍の兵士という役割を付与された男たちが、芝居を通してつかの間の生きる喜びを取り戻すところにあったわけである。

素人劇団を作るといふアイデアを古山が口にしたその場には、小学館編集者野口晃史もいた。共感した遠藤が、周囲にこの話をしたところ、賛同者が次々に現れた。そこで遠藤は、銀座のレストランレング屋主人稲川慶子に依頼して賛同者を一同に集めた。四〇人を越える人々が集まっていた。「サラリーマンあり、学生あり、主婦あり、テレビ局の演出家あり、税務署の役人あり」という状況であった（8）。こうして樹座は発足した。

以上は遠藤の書き残した文章に拠るが、古山の文章では、樹座の発案は古山ではなく遠藤である。季刊誌『芸術生活』の連載原稿を受け取るために編集者として遠藤宅を訪れた古山が、ある日、遠藤宅で雑談をしているうちに、「世の中つまらんことだらけですな」「どうですか。芝居でもやりませんか。ちよいと酒を飲んでも一晚、何千円もかかる。そのお金を会費にして芝居でもやったら面白いんじゃないか」と言い、自分も賛成したというのである（9）。遠藤は『季刊芸術』一九六七年夏季号（通巻第二号）に短篇「土埃」を掲載しているから、おそらくこの原稿のやりとりの次期ではなからうか。三浦朱門によれば、遠藤は「自分のことを他人のことに書く」ことがしばしばあったという。自分がキャバレーにいつて若いホステスと交わした可笑しなやりとりを、同席していた三浦とホステスとのやりとりとしてエッセーに書いたりしているというのである（10）。そのように考えるならば、芝居をやるうと言いだしたのは、実は古山がいうように、遠藤だったのかもしれない。だが、それはどちらでもいいことであろう。素人劇団というアイデアは、戦中派の作家と編集者が話を交わしているうちに、自然と生まれ出たものであったというのがおそらく真相であり、ファウンダーが誰かという問題は、文学作品ほどには重要ではないと考えられるからである。



劇団名として、「コメディ・ジャポネーズ」という案を遠藤は提出したが、投票の結果この名前は採用されず、野口晃史の「樹座」に決定した。素人が劇団をつくるのは気障であるが、どうぞお許しを、という意味だという。遠藤が、由緒ある王立劇団コメディ・フランセーズにあやかた劇団名を提案したことは興味深い。コメディは俳優の謂であるため、コメディ・フランセーズの演目は演劇全般であるが、樹座で上演された舞台は、喜劇ではない演目も、すべて喜劇的なものとなることに特徴がある。したがって、遠藤がコメディ・ジャポネーズという名前を考えたときに、コメディの語に喜劇の意味も重ねていたことが想像されるのである。演目も、シェイクスピアから始めたことは、日本人にも有名な舞台を選んだということもあるだろうが、コメディ・フランセーズを意識した可能性もある。つまり、西洋演劇の正統性のパロディたることを最初から意識した劇団であったと考えることができる。この劇団が、多くの点で、西洋演劇の約束事をことごとく破壊する自由さを持っていたのも、そのように考えると納得がいく。実際、演目は、古山高麗雄の原作とする『白浪子守唄』を一回公演した以外は、すべて西洋の原作なのである。

この劇団の「約束」は以下の二点だった。

一、うちの劇団は全員みんな平等、対等である。

二、役は恨みっこなしのためみんなの希望をできるだけ入れ、アマダクジで定めること。(11)

第一回『ロミオとジュリエット』の公演では、福田恒存(一九一二—一九九四)の劇団「雲」の関係者に演技指導をしてもらったり、画家渡辺藤一に舞台装置のプランを作ってもらったりした(12)。稽古は閉店後のレストランで行った。僅か四日間、二時間という稽古だった(13)。配役を阿弥陀籤で行うこととしたが、端役に当たった人が気の毒だということから、一幕ごとに主要な役を交替することとした。『ロミオとジュリエット』は四幕なので、四人のロミオとジュリエットが登場することになるのである。遠藤は牧師役、古山高麗雄は墓掘りの役だった(14)。

初日は、定員四〇〇名のホールが大入りだった。役者たちはすっかりあがってしまつて、台詞を忘れたり、同じ台詞をくり返したりして、観客席から失笑が洩れた。自分の役が終わった遠藤は、観客席に行つて舞台を見た。「観客席から見ると、いや仲間の演技も演技などというものではない。『…』」当人たちは大マジメ、真剣も真剣、必死も必死なのだから、見ている観客にはただ愚劣にして滑稽なだけらしく(15) 大声の野次が飛んだという。おそらく誇張した書き方を遠藤はしているが、素人劇団樹座の初公演は、観客が腹を抱えて笑つたことで、惨めな失敗ではなく、大きな成功を収めたのである。

ここでわかることは、職業的演技者ではなく、普段は会社員、学生、主婦として生活をしている人々、しかも演劇に関しては全くの素人が、八時間の練習をして舞台に上がり、数時間の間、自分の人生の、あらゆる現実的束縛から解放されて、物語中の人生、虚構の生を生きることが、樹座であったことだ。団員は「全員みんな平等、対等」であった。これは、性別、職業、年齢、地位、国籍、宗教、思想、人種などによって一切差別されないという意味で、歴史的現実世界ではこれまで実現されたことがない、自由で解放された夢想の共和国であったといつてよい。

第二回『ハムレット』では北杜夫もハムレット役を演じたが、演出を手がけた日活企画課長広石廉二は、シェイクスピア演劇について調べるうちに、エリザベス朝時代の舞台がエプロンステージ(三方を観客席に囲まれた張出し舞台)であつて、役者と観客との間に強い親密感があつたことを発見して勇気づけられたという。団員が多く、主役を四人でやるような樹座では、「役者と観客が交歓できるような形の中でしか演じようがないと思つていた」からである(16)。シェイクスピアを高級な古典と見なすのは、それを古典のなかの古典と祭り上げた英国人の価値観に影響されたわれわれの見方であつて、当時の演劇が持つていた猥雑性や政治性については、シェイクスピアに関するポストコロニアル研究を参照すれば直ちに理解できることである(17)。その意味では、観客席から盛んに声がかかる樹座のシェイクスピアは、本来のシェイクスピアが持つていた大衆性と通底する要素を持つていたということもできよう。

また、既述のとおり、樹座では、『クレオパトラ』では一八人、『オーケストラの少女』では一九

人が、幕ごとではなく、場面ごとに、主役を演じた。その都度、主役が、痩せたり太ったり、老いたり若返ったりするのを観客は見なければならぬ。これは、職業的な俳優が持つ特権的な主体性を骨抜きにするものであるとともに、観客が物語に没入することを妨げる働きをする。つまり、観客は舞台の上に繰り上げられる物語が、文字どおり「お芝居」であることを常に意識させられる。その意味で、樹座の舞台は、芝居の芝居であるような、メタフィクション的傾向を持っていたと見ることができ。

## 二 独自の『蝶々夫人』

本稿では、一九八四年に行われた第一二回公演『蝶々夫人』を取りあげて考察する。長崎を舞台とし、アメリカ海軍士官ピンカートンと日本人女性お菊との悲恋を描いたこの作品が、ポストコロニアルの視座から見ると、きわめて植民地主義的な演目であり、欧米の白人世界での絶賛とは対照的に、日本ではさほど評判が高いとはいえないものだからである。小川さくえは、この作品が日本人の観客に「愛着と嫌悪という両価的な感情を呼び起こす」一点に注意を促している。そこには『蝶々夫人』に感動したことが、鑑賞者を自己嫌悪におとし入れ、ついにはこのオペラを嫌悪させるに至るという屈折した心的プロセスがある。小川はそれを次のように分析する。

第一幕で延々と繰り広げられる奇矯な結婚式は、奇矯であればあるほど、西洋の観客の視線を釘づけたのちがいない。観客は、まるで博物学者によって新大陸から持ち帰られた珍奇な動物や植物の「標本」を展示した「驚異の部屋」に足を踏み入れたかのように、好奇心に満ちたまなざしで、極東の不思議な風習とその国に住む人間たちをみつめたであろう。日本人は、ここではそもそも「見られる者」（標本）であって、「見る者」（観察者）としては想定されていない。その意味で、このオペラの鑑賞者となったとき、「見る者」の立場に回った日本人がおぼえる愛着と嫌悪という両価的な感情は、まなざしの主体と客体に引き裂かれることからくると言ってもよいだろう。まなざしを所有する者をもつ権力は、完全に西洋の側にあった。文明を謳歌するアメリカ合衆国の軍人であるピンカートンが、未開の日本を「発見」し、「観察」し、そして日本的なものとは何かを「定義」づけるのである。(18)

樹座版『蝶々夫人』は、一九八四年に東京で初演され、翌年に『マダム・バタフライ』と改題して再演された後、同年秋季にロンドン公演を果たした。一九九一年には大分でふたたび『蝶々夫人』の題目の下に再演されている。『ロミオとジュリエット』や『白浪子守歌』のように、一度しか上演されなかつたものと異なり、くり返し上演された演目だった。パンフレットのイラストレーションを見ると、ジャポニズム風であり、セルフ・オリエンタリズムの提示のようでもある。

蝶々夫人や「女中」のスズキを日本人が演じるのはともかくとして、蝶々夫人を棄てる白人のピンカートンを演じるのも日本人である。われわれは、西洋人が舞台や映画で非西洋人を演じることに違和感を感じたり、場合によっては「文化の横領」と批判したりことがあるが、日本人が西洋人を演じることには意外と無自覚である。オリエンタリズムの物語である『蝶々夫人』も、単純な悲恋物語として演じたり鑑賞したりすることはもちろん可能だが、日本人男性が、アメリカ人男性ピンカートンを舞台上で模倣することのイロニーを見過ごすわけにはいかない。「文明」化された西洋人の前では女性的存在として表象される「野蠻」な日本人男性が、日本人の女を捨てる残酷な白人男性を模倣することになるのだから、この役割の代行は、深刻な心理的葛藤を演者と観客に惹き起こすとも考えられるからである。ところが、樹座版『蝶々夫人』は、ほかの演目と同じく、素人のお芝居ということから笑劇化されており、『蝶々夫人』原作オペラの戯画的再現となっている。それ結果、芝居の虚構性が必要以上に強調されることで、ピンカートンアメリカ合衆国白人世界が放つ眩惑性は滑稽化されてしまうのである。ごっこ遊びのように日本人がアメリカ軍人を模倣することで、ピンカートン

が身に纏う栄光はメッキめいたものに格下げされてしまう。

第三回全国生涯学習フェスティバルにおける大分特別公演では、ピンカートン役を、現役の県知事平松守彦（一九二四―二〇一六）が演じている。これは遠藤が平松の出演を条件としたことから実現したのであった。現役のアメリカ合衆国の州知事が日本海軍士官の役を演じることの異様さを想像してみれば、県知事がアメリカ海軍士官を演じることが、いかに政治的イロニーに満ちていたかが明瞭になるだろう。敗戦後の日本がアメリカ合衆国の「下請けの帝国」（酒井直樹）であることを、これほどイロニーニッシュに示す配役はない。平松は「しぶしぶ引き受けた役がピンカートン」（19）と記しているもので、これはあてがわれた役であろう。元国家官僚（通商産業省出身）の平松が、そのような政治的メタメッセージに無自覚であることにも私は驚くのである。

このように考えると、小説『死海のほとり』にイスラエル批判が隠されていたように、樹座版『蝶々夫人』にも、隠された政治的テーマが潜んでいた可能性を捨てることはできない。これまでの遠藤周作研究に欠けていたのは、彼が持っていた政治性に注目しなかったことなのである。

樹座版『蝶々夫人』が持つそのような政治性を理解していたと思われるのが、村松剛とも親しかった黛敏郎である。彼は音楽監督兼指揮者として、東京シテイ・フィルハーモニック管弦楽団を指揮した。「仮にもプロとなれば、如何なる調子外れ、リズム音痴の歌にも、何とか追いかけ、立ち止まり、合わせていかねばならぬ」。だが、「二管編成のシンフォニー・オーケストラとなると、臨機応変、外れた調子に合わせていくことは技術的に不可能となる」。そこで黛は、「オーケストラは絶対に歌に合わせない。歌の方でオーケストラに合わせなさい」と宣言してタクトを振った（20）。黛が無償で樹座の裏方を引き受けたのは、遠藤との親しい関係からに相違ないが、『蝶々夫人』の政治性を彼が理解していたと私が考える理由は、この演目が持っていた複雑な入れ子構造と無関係ではない。次にそれについて論じることとしよう。

### 三 虚構の「入れ子構造」

中間小説において、遠藤はしばしば作者自身が作品中に登場するというメタフィクション的な試みをしている。小嶋洋輔はこの手法について、読者との距離を狭める意図からものとしているが、首肯できない（21）こうした操作を行うことにより、読者は小説世界が虚構であることを改めて認識することとなるのであり、そこにこそ作者の意図があったと考えられるからである。いわゆる純文学系列の作品において、この手法を用いることがなかったのは、物語世界に読者を没入させなければならなかったからである。

樹座版『蝶々夫人』では、この入れ子構造が存分に用いられている。順番に見てみることにしよう。中心には『椿姫』がある。純愛の物語である。これは『蝶々夫人』の劇中劇となっており、蝶々夫人は椿姫の悲恋に戦き、自分たちはあはならないでしょうかとピンカートンに言う。ピンカートンは、あれは物語ですと応じる。つまり、自分たちの現実世界の「結婚」は、悲恋に終わる虚構世界とは違うのだと主張するのである。

しかし、『蝶々夫人』もまた虚構の世界であることを観客は知っている。ピンカートンに決定的に去られた蝶々夫人が自害して舞台が終わると、日本帝国海軍士官の純白の夏用礼服と白靴を着用した阿川弘之（一九二〇―二〇一五）と大久保房雄（一九二一―二〇一四）が、旭日旗を手にした下士官役の編集者を従えて登場する。そして「いつ帰るかかわからないアメリカ人なんか待っているから不幸になるのだ。その点、我々のような帝国海軍なら……」といい、軍歌「勇敢なる水兵」（佐佐木信綱作詞、奥好義作曲）を歌う。呆然とするような演出だが、要するに、アメリカ海軍士官の物語である『蝶々夫人』が、劇中劇として、四〇年前の帝国日本の時代に巻き戻され、日本帝国海軍士官の優位が宣言されるのである。

ところが、阿川が三番まで歌ったときに、遠藤が登場して「やめてください。いつまで歌っているんです。皆、迷惑しとるじゃないですか。もうお引き取りください」と言う。「何言っとるんだ。そ

つちが出てくれっっているから、出てやったのに、何という礼儀知らずだ！ さあ、帰ろう！」と阿川が応じる。つまり、遠藤の登場で、観客は現実世界に引き戻されるのである（22）。

阿川が演じる日本海軍士官の登場によって、ピンカートンⅡアメリカ合衆国は、道徳的敗北者となり、威厳を剥奪され、否定される立場へと格下げされてしまう。日本軍人がアメリカ軍人よりも優れているというナショナルな幻想、帝国海軍の美化が行われる。そこで阿川たちは日本海軍の栄光のイメージに合一化を果たし、自己陶醉するが、その幻想をもの見事に破壊するのが座長である遠藤なのである。その瞬間、海軍士官へと演劇的変身を遂げていた彼らは、滑稽な道化役へと転落する。思えば、アジア諸地域に植民地を持っていた帝国主義時代の日本人が、ピンカートンと同様の振る舞いをしていたことは明白であり、「我々のような帝国海軍なら……」という認識は自己欺瞞に満ちた虚構にはかならない。

阿川は、世代的には遠藤の兄正介や古山と同じである。彼は一九三七年、広島高等学校文科乙類に入学し、一九四〇年、東京帝国大学国文科に進学した。一九四二年、大学を繰り上げ卒業すると、海軍佐世保海兵団に入隊。台湾の航空隊で予備仕官候補生として教育を受けた。一九四三年、台湾から帰国し、横須賀海軍通信学校で特務班要員として暗号解読の訓練を受けた。同年海軍少尉任官。軍令部附となる。一九四四年、中尉に昇進。志那方面艦隊司令部附として漢口にて通信諜報作業に従事した。一九四五年、敗戦後に大尉に昇進。俘虜生活を経て、一九四六年帰国復員した。吉行淳之介、安岡章太郎、三浦朱門らと同人誌「現代」を通して知り合ったのは、一九五二年のことである（23）。

以上の経歴からもわかるように、阿川もまた、正介と同様、古山が経験したような、前線での戦闘体験はない。彼は日本帝国海軍を愛し、保守の人ではあったが、決して偏狭なナショナリストではなかった。とはいえ、一九六六年にニューギニア、ソロモ群島を訪問した目的は、ブーゲンビル島のジャングルで山本五十六元帥搭乗機を発見しようとしたからであり、そのときの旅行記を「山本元帥！阿川大尉が参りました」（『中央公論』一九六七年二月号）と題して発表するような人ではあった。南方で戦闘に参加した古山とは、かなり戦争に対する感覚が異なっていたのである。

もともと、「文人海軍の会」というものがあって、これは、阿川のほか、十返肇、梅崎春生、源氏鶏太、林健太郎、池島信平、城山三郎、宮内寒弥、野口富士男、竹之内静雄などが、毎年一回、海軍記念日に参集して歓談して、最後は軍歌を斉唱するという会であった。ここでは一等水兵がいちばん威張っており、士官はおとなしくしなければならぬという「サカサ世界」であったという（24）。つまり、阿川は、そのようなユーモアを解する人でもあったのである。そうでなければ、樹座版『蝶々夫人』で、このような道化役を演じることはなかったであろう。

さて、阿川が登場する樹座版『蝶々夫人』は、黛敏郎のテレビ番組「題名のない音楽会」でも「遠藤周作オペラに挑戦」と題して放送された。この舞台が持つ政治性を、黛が充分理解していたと私が思うのも、彼が村松剛と同様に、敗戦後の日本国がアメリカ合衆国の準植民地であることを痛切に認識していた人だからである。植民地主義的な構図が明らかなブッチーニのオペラ『蝶々夫人』の物語を上演するに際して、最後にアメリカと日本の非対称な権力関係を逆転させ、さらにそれが幻影であると否定する。この演出には、リアルな国際政治的認識が込められていたのであり、黛もまた、そこに共感していたと思われる。黛は、村松とともに、三島由紀夫の死後、保守の言論人として、国家主義的な言論活動を旺盛に行った人である。だが、イロニーに満ちた自己批評をすることもできた人であったことが、樹座版『蝶々夫人』への関与からもうかがわれるのである。黛はその後、『オーケストラの少女』では、ストコフスキー役で舞台にも役者として立っている。

樹座の脚本は、宝塚出身の童話作家・ミュージカル脚本家の山崎陽子が全て書いている。座長である遠藤は、制作者として劇団に関与していたが、さまざまな『蝶々夫人』のなかに『椿姫』を入れるといったアイデアは彼が出しており、それを山崎が苦心して脚本化したのである。その意味では、樹座の演目における遠藤周作の著者性は、文学作品の場合よりは、確かに後退しているといっていよい。しかし、それは、政治性を含めた遠藤の世界認識が舞台上に反映されていないことを意味してはいないだろう。自らが脚本を書き下ろすことがなかった分、最も厳しい自己検閲を免れて、遠藤の隠された

意図が、メタメッセージとして舞台に現出していたということは、充分に考えられるのである。

#### 四 ヒロインの死に立ち会う医師役

『蝶々夫人』は、国際恋愛の挫折を描いた物語である。キリスト教に改宗し、親族から絶縁されてまでしてピンカートンと結婚した蝶々さんは、ピンカートンがアメリカ合衆国に去り、ふたたび来日するまでの三年間に、白人女性と結婚して子供までもうけていた事実を直視して、潔く身を引き、武士の娘として自裁する。

卑劣な白人男性と健気な日本人女性との悲恋物語を思うとき、遠藤周作という一人の日本人男性の生涯において、自然と脳裏に浮かび上がってくるべきことがある。遠藤の死後に徐々に明らかになった、フランス留学時代の白人女性フランソワーズ・パストルとの恋愛である。一九三〇年にフランス軍人の娘として生まれた彼女は、遠藤の七歳年下である。一九五二年、パリで入院中の遠藤との出会いから、二人は恋愛関係に陥った。遠藤のフランソワーズ宛の書簡を読めば、彼の一途な思いは明らかである(25)。結婚を考えていることを、遠藤は彼女に書き送っている。ところが、帰国後の遠藤からの手紙は徐々に少なくなる。一九五四年に二通、一九五五年には一通。この年に、遠藤は、フランスに告げることなく日本人女性と結婚している。フランソワーズはその後、一九六六年に来日して北海道大学講師、二年後には獨協大学講師となるが、一九七〇年、乳癌に罹り、帰国後の一九七一年に四一歳の若さで早世している(26)。結婚を約束したフランス人女性を裏切って日本人女性と結婚した遠藤自身もまた、ピンカートンだったのである。

樹座版『蝶々夫人』で遠藤が演じた役は、劇中劇『椿姫』でヒロインの臨終を告げる医師役であった。恋人への愛ゆえに恋愛から身を引き、今は病床にあるヴィオレッタの死に立ち会う役である。遠藤自身は、実人生において、フランソワーズの死に立ち会うことはなかった。もしかすると、劇中劇、虚構の中の虚構、幾重にも現実から護られた純粹な夢想の世界において、現実世界では立ち会うことができなかった恋人の死に、遠藤は立ち会っていたのかもしれない。上演においては、「お気の毒ですが、もう手のつくしやうがない」という台詞も、「ご臨終です」という台詞も、大時代がかつた独特の台詞回しから、観客の笑いを呼ぶのが常であったようだ(27)。だが、ヴィオレッタの死の瞬間に彼の胸に去来していたものが何かは、第三者が永遠にあずかり知ることのできぬ事柄であろう。このように、遠藤の伝記的コンテクストからも、『蝶々夫人』を読み解くことは不可能ではないのである。これは、政治的イロニーならぬ、遠藤自身のセルフイロニーであったといつてよい。

#### おわりに

このように考察を重ねてくると、樹座という活動が、三浦朱門が考えたような、「仕事や厳しい創作生活によって生ずるストレスの解消法として」実践された、単なる遊びではなかったと考えざるを得ない。少なくとも、『蝶々夫人』に関しては、そのような見解は当てはまらない。政治的イロニーと遠藤自身のセルフイロニーが、虚構の中の虚構、芝居の中の芝居といった入れ子構造によって幾重にも韜晦されつつ、笑劇という装いを纏ってメタレベルのメッセージとして語られていたからである。要するに、樹座版『蝶々夫人』は、少なくとも重層する三つの次元から眺めることができるのである。第一は、加藤宗哉が主張するような、窮屈な日常生活から離脱して、生き生きとした人生を取り戻すための解放された世界という次元である。第二は、韜晦された政治的イロニーの表明という次元である。そして第三は、自身の胸深くに封印された、死せる恋人の鎮魂という次元である。

このように、樹座の活動のなかには、ストレス解消のための単なる遊びではなく、ポストコロニアルの歴史的状況と、遠藤個人の人生が、ともに刻み込まれた「作品」が含まれていたのであり、遠藤周作という文学者を考える上で、文学的著作と同様の重要性を帯びたものであったと言わねばならないのである。

(1) 樹座の全公演は、以下のとおりである。『遠藤周作と劇団「樹座」の素敵な仲間たち』(きこ書房、一九九八年)及び「樹座神戸公演「カルメン」11月3日(月)神戸文化ホールに寄せて——ふるさと神戸で樹座初公演」(『月刊神戸っ子』一九八〇年一〇月号、四〇—四一頁。<http://kobe-kobecco.com/wp-content/uploads/2015/05/19801003.pdf>二〇一七年三月五日確認)、『朝日新聞』一九八四年五月縮刷版から作成した。

- 一九六八年 第一回『ロミオとジュリエット』紀伊國屋ホール
- 一九六九年 第二回『ハムレット』紀伊國屋ホール
- 一九七〇年 第三回『夏の夜の夢』紀伊國屋ホール
- 一九七一年 第四回『白浪子守唄』紀伊國屋ホール
- 一九七七年 第五回『カルメン』紀伊國屋ホール
- 一九七八年 第六回『トニーとマリア』都市センターホール
- 一九七九年 第七回『風と共に去りぬ』新宿厚生年金小ホール
- 一九八〇年 第八回『カルメン』都市センターホール

『カルメン』ニューヨーク公演 ジャパンソサエティ劇場

『カルメン』神戸公演 神戸文化ホール

- 一九八一年 第九回『イライザストーリー』都市センターホール
- 一九八二年 第一〇回『王妃マリー・アントワネット』帝国劇場
- 一九八三年 第一一回『トニーとマリア』都市センターホール
- 一九八四年 第一二回『蝶々夫人』都市センターホール

\*テレビ番組「題名のない音楽会」(五月二〇日)で「遠藤周作オペラに挑戦」として放送。

『蝶々夫人』東急百貨店東横劇場(東急百貨店五〇周年記念)

『蝶々夫人』つぼん丸船上

- 一九八五年 第一三回『スカレット物語』都市センターホール
  - 一九八五年 第一四回『マダム・バタフライ』都市センターホール
  - 一九八六年 『マダム・バタフライ』ロンドン公演 ジャネット・コ克蘭劇場
  - 一九八六年 第一五回『THEオーディション』都市センターホール
  - 一九八八年 第一六回『THEオーディション』東京青山劇場
  - 一九八九年 第一七回『椿姫』都市センターホール
  - 一九九一年 第一八回『クレオパトラ』東京青山劇場
- 大分特別講演『蝶々夫人』大分文化会館
- 一九九三年 第一九回『オーケストラの少女』東京青山劇場
  - 一九九五年 第二〇回『THEオーディション』国立劇場
  - 一九九七年 遠藤周作座長追悼・解散公演 『ラストステージ97』芝公園メルパルクホール

(2) 加賀乙彦「遠藤周作さんと私」『没後一五年 遠藤周作展——二一世紀の生命のために——』二〇一一年、県立神奈川近代文学館、九頁。

(3) 三浦朱門『わが友遠藤周作——ある日本的キリスト教徒の生涯』PHP研究所、七二—七四頁。しかし三浦は、文化庁長官だったときに、国立劇場での樹座の公演について力になっている。

(4) 加藤宗哉「劇団樹座の価値」『文藝別冊遠藤周作(増補新版)』河出書房新社、二〇一六年、一七八—一七九頁。

(5) 古山高麗雄の生涯については、玉居子精宏『戦争小説家古山高麗雄』(平凡社、二〇一五年)に主に依拠する。

(6) 古山高麗雄「遠藤座長のすすめで、私の軍隊時代のアチャラカ芝居をやった」編集委員会編『遠藤周作と劇団「樹座」の素敵な仲間たち』きこ書房、一九九八年、一一八—一一九頁。

(7) 古山高麗雄『プレオー8の夜明け 古山高麗雄作品選』講談社文芸文庫、二〇〇一年、一二五頁。

(8) 編集委員会編『遠藤周作と劇団「樹座」の素敵な仲間たち』きこ書房、一九九八年、一一頁。

(9) 古山高麗雄「稽古なし。アドリブだらけのシェークスピア劇をやった」『遠藤周作と劇団「樹座」の素敵な仲間たち』八八—八九頁。

- (10) 三浦朱門『わが友遠藤周作——ある日本のキリスト教徒の生涯』P H P 研究所、一九九七年、一九六—一九七頁。
- (11) 同右、一三頁。
- (12) 同右、一五頁。
- (13) 同右、二八頁。
- (14) 古山高麗雄「稽古なし。アドリブだらけのシェイクスピア劇をやった」『遠藤周作と劇団「樹座」の素敵な仲間たち』八九頁。
- (15) 同右、二二頁。
- (16) 広石廉二「テキストレジーのむつかしさ」『遠藤周作と劇団「樹座」の素敵な仲間たち』一〇一頁。
- (17) 本橋哲也『本当はこわいシェイクスピア——〈性〉と〈植民地〉の渦中へ』講談社、二〇〇四年。
- (18) 小川さくえ『オリエンタリズムとジェンダー——『蝶々夫人』の系譜』法政大学出版局、二〇〇七年、一一四—一七頁。
- (19) 平松守彦「出る人、観る人を幸せをくれる樹座の芝居は凄い」『遠藤周作と劇団「樹座」の素敵な仲間たち』三三〇頁。
- (20) 黛敏郎「思い知れ！ 音楽監督の居直りの弁」『遠藤周作と劇団「樹座」の素敵な仲間たち』二一七頁。
- (21) 小嶋洋輔「遠藤周作「中間小説」論——書き分けを行う作家」『千葉大学人文研究』三六号、二〇〇七年、四二—四四頁。
- (22) 『遠藤周作と劇団「樹座」の素敵な仲間たち』二一一—二三〇頁。山崎陽子『遠藤周作と世界一の素人劇団「樹座」 遠藤さんの“原っぱ”で遊んだ日』小池書院、二〇〇〇年、一二九—一三二頁。
- (23) 『昭和文学全集21』小学館、一九八七年所収阿川弘之年譜に拠る。
- (24) 『阿川弘之の本』KKベストセラーズ、一九七〇年、一三八—一四〇頁。
- (25) 「フランス留学時代の恋人フランソワーズへの手紙」『文藝別冊遠藤周作〈増補新版〉』所収。
- (26) 今井真理「遠藤からフランソワーズへの手紙」『文藝別冊遠藤周作〈増補新版〉』河出書房新社、二〇一六年所収。ジュヌヴィーヴ・パストル「妹フランソワーズと遠藤周作」『三田文学』一九九九年秋季号参照。
- (27) 山崎陽子『遠藤周作と世界一の素人劇団「樹座」 遠藤さんの“原っぱ”で遊んだ日』二二八頁。

### 第三節 村松剛の戦後日本認識——「保護領国家」論

#### はじめに

前節では、「樹座」版『蝶々夫人』を取り上げて、阿川弘之が登場する演出が、戦後日本が置かれたアメリカ合衆国の「下請けの帝国」という政治状況のセルフイロニーであることを指摘した。音楽監督兼指揮者だった黛敏郎がその点を充分に承知していたと私は述べたが、黛も村松同様、生前の三島由紀夫と親しい関係にあり、三島の死後、思想的に右傾化していった人である。本節では、黛と保守的な政治姿勢を共有していた村松の、戦後日本認識を検討する。最初に一九六〇年代に書かれた「占領の遺産」及び「核の拡散と日本」(1)、「沖繩報告」(2)、「占領のもたらしたもの」(3)をもとに、冷戦期における村松の政治的、文化的な日本認識を確認し、次に、冷戦後に書かれた「品格ある国家とは何か」及び「病めるアメリカと肥大した「捕囚」日本」(4)を取り上げて、冷戦後の日本の在り方に関する村松の見解を考察する。

#### 一 アメリカ占領軍の「功罪」

敗北後、「進駐軍」(連合国軍。実質的にはアメリカ軍)による七年間の占領時代を日本は経験した。占領軍が解放者としての役割を担ったことも一面の事実ではあると村松は考えていた。農地制度改革など、すぐれた諸改革があったからである。けれども、その時代を「解放の時代」「戦後民主主義の時代」として懐かしむ心情が自分には理解できないと村松はいう。外国の武力の下にあった占領時代は、占領軍に対する一切の批判は禁じられ、私信まで検閲されるなど、言論の自由が封殺されていたからである。七年間は長く、村松にはそれが永遠に続くように感じられたという。

占領が日本に残した最大の問題は、政治的文化的自信喪失であり、主体的に生き方を考えることができなくなってしまったことであると村松は指摘する。「日本の国際的なありかたについては、日本人が自分で進路をきめることなど、ゆるされてもいなかった」(5)。

吉田内閣以後の政府の政策が、その傾向を強めた。

近代国家は、中央集権、常備軍とともに誕生した。国家を代表するものは従来に通念でいえば軍隊だった。それにたいして、戦後の日本は、経済に国家を賭けようとする。新しい時代に即応した、一つの見識にはちがいないのだが、しかし世界中がまだ武力を中心として動いている以上、その中でいかに生きてゆくかということの具体的な検討が、いや応なしに必要となる。

日本がえらんだ解決方法は、それはすべてアメリカの依存する、ということなのである。(6)

ここには、国際政治に関するリアリズムの立場がはっきりと打ち出されている。すなわち、安全保障を軍事力によって確保し、争点となる領域ごとに、それに対応した国際機構の活用など、複合的な相互依存による重層的な国際関係の調停を重視しない立場が鮮明となっているのである。しかしながら、国家の最重要政策目標、すなわち国益が安全保障にある以上、特に冷戦期においては、強い側と手を結ぶ「バンドワゴン」(追従政策)が一つの戦略として当然である以上、日本がアメリカに依存することは、本来のリアリズムの観点からも、支持されるべきではないだろうか。村松はこの戦略を「おメカケになってもお金がもうかったほうがよい、という実利主義だったことになる」とする



が、短絡ではないだろうか。

このように、政権与党である自民党を村松は批判するが、野党社会党の政策については、「日米安保条約を廃止し、自衛隊を解散し、安全保障の力をぜんぶなくしたうえで北朝鮮を承認し、（したがって韓国は事実上否認し、）中共と大いに親密にする、ということなのだ」と分析し、これを「狂気の沙汰」と非難する。

共産党は立場がはっきりしているのだからべつとして、一般に日本の進歩勢力の特色は、政治的プログラムの脱落したその文学性にあるだろう。対中国政策に関しては、中共を承認したド・ゴールの例がよくひきあいに出されるが、ド・ゴールは米ソという大武力の中で自主性をつらぬくために、核爆弾まで装備している。日本の場合とは、次元を異にしているのである。（7）

このように議論を進める村松は、「軍隊など、もちろんできるなら、ない方がいいにきまつているし、それを最小限にとどめるために、アメリカの核爆弾の傘の下にはいるということ自体は、合理的、現実的なみちだるう」と続けている。要するに、村松もバンドワゴニングを認めているのである。では何が真の問題なのか。「問題は、こういう状態が、占領中の環境の継続を思わせることであり、そのもたらす心理的、精神的効果なのだ」。「アメリカとの提携それ自体の是非を、ぼくはいっているのではない。問題は日本人が現在の針路を、自分でえらんできたか否か、少なくとも自主的にえらんあという感情をもっていか否かにある」（8）。

## 二 「核の時代」における日本の在り方

こうした問題意識を、より先鋭化するために、村松は「核の時代」に日本がどのように対処すべきかを考察する。米ソの専有物であった核は、一九六五年現在で、米ソ英仏中の五ヶ国が保有している。だが一〇年以内に倍以上の国家が核を保有することになるだろう。フランスにしても、ヨーロッパは独自に国益すなわち安全保障を追究しなければならぬと考えるがゆえに核を保有するのである。「フランスは核の引金を手に入れることによって、ヨーロッパとの軍事上、政治上のリーダー・シップの「アメリカからの」奪回をねらったのだった」。

核の拡散が不可逆的だと認識する村松は、日本の安全保障の選択肢を四点挙げる。一、アメリカの核の傘に入る。二、ソ連か中共の核の傘に入る。三、武装中立。四、非武装中立。一の立場は一応合理的といえる。しかし、日本とアメリカの利害が完全に一致することはあり得るだろうかと村松は疑問を呈する。「日本とアメリカはそれほどに一心同体の仲直のか」。ド・ゴールも反共という点ではアメリカと同じだが、「イデオロギー上の利害の同一が、ただちに国民的利害の同一を、物語りはしないのである」。したがって、「日本もまた、アメリカのために防衛されねばならない」（9）。東西対立という冷戦構造の下に現在の日米安保条約も結ばれている。だが、いつでも必ずアメリカが日本を助けるといふ保証はない。アメリカとの「軍事同盟」をより確乎とするためには、「従属国としての状態を、いっそう強化」しなければならない。果たしてそれでよいのか。もつとも、日本が核を持った場合、ド・ゴールのような自主性は到底持つことができず、アメリカの世界戦略に組み込まれるだけだとの懸念は払拭できない。しかし、「日本の将来を考えてゆくととき、一つの論理的な必然として、核の所有という命題がうかび上がる」。「核の時代はあらゆる国民に、核をもつことと、もたないことの利害損失を、励精に計算することを強いる。日本もまた例外ではあり得ないだろう」（10）。

このように述べた村松だが、持丸博の証言に拠れば、三年後の一九六八年に日本学生同盟が林房雄、三島由紀夫、村松剛の三人を招いたセミナーの席上で、村松は日本の核武装について否定的な発言を行ったという。核持つ方向性は良いが、直ちに持つべきではない。その理由は、第一に国民的合意が得られず、政治的混乱が予期されること。第二に経済的負担が大きすぎることである。したがって、

当面はアメリカの核の傘の下に入らざるを得ないというのである(11)。

このセミナーでの発言の一五年、つまり一九八三年に書かれた文章のなかでは、もう少し整理した形で核防衛について記している(12)。すなわち、①日米安保条約は軍事同盟だが、アメリカの庇護が嫌ならば、スウェーデンやスイスのように徴兵制を施行し重武装するしかない。②反ソ陣営でもアメリカとは異なる独自路線を選ぶフランスは核兵器も独自開発している。もつともこれは、万一場合にアメリカを巻き込むための外交的道具である。③非武装で通すためにはアイスランド、モナコ、ルクセンブルグのように他国に安全保障を全面的に頼るしかない。④要するに、日本はスウェーデン方式かフランス方式を選択するしかない。⑤しかしながら、日本は地政学的にスイスやスウェーデンのような位置におらず、またフランス方式の核戦力保有は重荷である。⑥また日本の核保有をアメリカは望まず、アジア諸国は警戒し、日本国民にも心理的準備がない。このように村松は記している。現実的な選択肢としての日米安全保障条約についてはこれを承認しているわけであり、当然のことながら、日本の完全な軍事的独立を目指しているわけではないのである。

### 三 占領下沖縄の訪問

村松がアメリカ軍政下の沖縄を訪れたのは一九六七年である。独自の歴史と文化を持つ地域に、突然外国の異質の文明が流れ込み、国際政治の渦中に引き込まれたという点において、「沖縄の状況は、日本そのものの縮図である」と村松は述べる。「いかなる理由が存在するにもせよ、異民族による支配が、住民に歓迎されるはずはない。これは自明の理であり、したがって本土への復帰は当然の要求なのである」。「沖縄の返還要求は当然だとしても、それには軍事上、経済上その他の、現実的な配慮がともなわなければならないことは、いうまでもない。現地住民の思想、感情への理解もその一つだろう」(13)。

アメリカ統治のもたらす暗黒面は、アメリカ兵による犯罪とこれにたいする警察、詩法措置において、もつとも尖鋭な私たちであらわれている。これはわれわれも敗戦後七年間の占領期間に、経験したことであって、およそ占領軍と被占領民族との最大の摩擦面がこの部分だろう。「……」根本的なことからは、日本がわに逮捕、喚問の権利が、つまりは司法権がない、ということなのだ。

(14)

異民族に支配された人々が行うサボタージュは、ある種の「抵抗」である。これは占領下の本土でも経験した感情ではあるが、占領軍の労務を沖縄の人々が「できるだけ怠ける」ようなことがあるとすれば、アジア・アフリカの旧植民地特有の「腐敗」に繋がることは恐れなければならないと村松は記している。

沖縄は戦争下に、本土の防波堤としての役割を演じた。沖縄の流血があったから、アメリカ軍の本土上陸がおくれ、本土が戦場にならないですんだともいえる。戦後は太平洋のキイ・ストーンとして、これもある意味では本土にかわって、基地を背負う役をひきあてられた。

核ないしは一般に基地をおくなら、復帰もやめるという論は、事実上、沖縄の玄奥を固定化することである。自分がいやなものをかかえこまないために、沖縄だけにそれを押しつけて、アメリカ分配の現状を維持させる。沖縄の住民は、再び沖縄は犠牲に供された、と感じるだろう。(15)

このように記した村松は、「沖縄の復帰が実現しないかぎり、戦後はおわらないということばは、本当と思う」としめくくりの段落で記している。彼は自分がアメリカ占領軍に支配された七年間の経験を持っていたので、外国に占領されるということがどのようなことを意味するかを知っていた。この点は、次章で検討するパレスチナ問題に対する村松の認識を考える上でも、確認しておきたい。

#### 四 評論「占領がもたらしたもの」

沖縄に行った翌年、『昭和批評大系』第三巻、昭和二〇年代（番町書房、一九六八年）の解説として、村松は「占領のもたらしたもの」を執筆した。「占領の遺産」と似たタイトルだが、こちらでは明治時代に遡り、日本近代というスケールのなかで、太平洋戦争敗北後の占領時代以後を、政治的側面からではなく、文化的視点から分析している。その際、日本近代における欧化主義と日本回帰という視点から語られていることが特徴的である。明治初めの欧化主義（文明開化）に後に、明治二〇年代の日本回帰（国粹主義）が来る。大正末期から昭和初めにかけての欧化主義（欧米崇拜）の後には、昭和一〇年代の日本回帰が来る。ここで村松は敗戦後の日本の状況について語ろうとしているのである。「占領軍を一方的に解放の軍隊と考え、日本の過去のすべてを否定する見方は、排外思想の延長にすぎない。逆に敗戦の屈辱にのみ執着するのは、愚かな国粹主義だろう」（16）。では、当時の日本人はどうだったのか。

第一次世界大戦後にクルティウスが書いた文章に言及しつつ、「負けた国では、過去のすべての価値が疑いの眼をもつて見られる、それにたいして勝った国では、戦争中のナショナリズムが戦後もなおしばらくのあいだは持続する」と村松は指摘する。そして、クルティウスは、ドイツ人はヨーロッパの危機を感じているのに、フランス人にはそれが無いといっているのだと述べ、第二次世界大戦で敗北した日本人にはクルティウスが感じたようなヨーロッパという共通の土俵のようなものがあつたのだろうかと問うのである。

日露戦争に勝ち、第一次大戦にはイギリスに協力して勝者がわに立ったことによる自信と、そのあと不当に排斥されたことによる幻滅感とは、日本人のなかに、白人社会にたいする憤怒を湧き立たせることになる。「……」黄禍論と日本がわの反撥、白人社会の疑心暗鬼という形で、両者の疎隔は相乗的につよめられてゆく。そしてこのことが、その後大東亜戦争にいたる日本の進路に、大きな影響をあたえていることは、疑いをいれないのである。中国への侵攻の問題もあり、戦争の原因は複雑だが、戦争はたしかに、白人支配への挑戦という一面をもっていた。（17）

敗戦後の極東軍事裁判でも、「判事席には、アメリカ、イギリス、ソ連、フランス等々の、白人国を代表する人びとが坐った」。同盟国ナチス・ドイツ崩壊後も日本は戦い続けたが、「負けてからも日本は孤独だった」。戦後のドイツが、ドイツの文化的伝統とナチスとを切り離すことは可能だった。しかし日本はそのようなドイツを持つ硬骨を持たなかったと村松はいう。ドイツが持っていたようなヨーロッパという土俵を持たなかったからである。明治維新のときに、日本が過去の一切の文化伝統を捨て去ろうとしたような「思いきりのよい自己否定」が、太平洋戦争敗北後の日本に再現した。

この後の議論の骨子は、「占領の遺産」と同様である。アメリカの占領政策には軍国主義を根絶するという理想主義も確かにあつた。だが日本によって、占領軍による解放は、そのまま占領軍への隷属と同義だった。

大正時代のコスモポリタニズムが昭和前期に崩壊し、日本回帰の傾向を深め、戦時中は国粹主義に陥る。戦後派ふたたび国際主義になる。戦後は「第二の文明開化期」である。ジャーナリズムの中心的主題は、マルクス主義と近代的自我であった。これがつまり、「占領がもたらしたもの」なのだということであろう。

遠藤周作らの「第三の新人」の登場とともに、ようやく近代主義への反省が生まれたと村松はいう。ここでの近代主義とは、マルクス主義に彩られた欧化主義の謂である。そして、ハンガリー事件の年に石原慎太郎が登場し、「教養主義や平和論的なヒューマニズム」への対抗的価値観が挑戦的に提示されたのだと村松は述べている。ここでもハンガリー事件が時代の区切りを示すできごととして提示されていることにも注目すべきである（18）。また、「内向の世代」が小川国夫や加賀乙彦などの作

家のみならず、秋山駿や柄谷行人といった批評家も包含するのに対して、「第三の新人」がもつばら小説家だけを指すことにも注意されてよい。村松は「第三の新人」との共通する世代意識を持つていたことが、この文章からも理解できるのである。先行世代を否定することから新しい世代が自己主張して存在感を示そうとすることは珍しいことではない。遠藤も村松も、初期の発表の舞台として『近代文学』は重要な媒体だったのである。それゆえ、メタフィジック批評は、「父親殺し」のような意味合いもあった。逆から言えば、それだけ、荒正人、本多秋五、埴谷雄高といったマルクス主義に影響された『近代文学』派の存在感と影響力は大きかったということでもある。

## 五 ポスト冷戦時代の世界

敗戦による占領下から冷戦期までの日本が置かれた状況について概観してきた。では、冷戦後について、村松はどのように見ていたのであろうか。

ソヴェエト連邦崩壊三ヶ月前、村松は「巨大な植民地帝国が、解体の危機に瀕している」と述べた。共産主義がユーラシア大陸の大半を支配下においたことは、二十世紀をかぎりなく暗い時代にした。預言者マルクスの教えを奉じなかったり、共産党の嘘を受け容れなかった人びとは、「反動」として処刑された。処刑された男女の数は、毛沢東、ボル・ポト等による粛正を含めると両度の世界大戦の戦死者数を上まわる。(19)

この一文は、村松が「現実の共産主義」(ステファヌ・クルトワ)に対して、『共産主義黒書』(原著一九九七年)の著者たちと共通する認識を持っていたことを如実に語ったものである。つまり、ナチズムと共産主義との類似、ナチスの犯罪と共産主義による犯罪との共通性を村松は認めているのである。『共産主義黒書』の著者たちが、一時期マルクス主義者であったことも、村松と似ている。

さて、ソ連崩壊を受けて、国際政治の力学の大変動は必定だった。第二次世界大戦は英仏の植民地を解体させた。しかしソ連は世界のあちこちに介入していたので、解体の影響は大きいことが予期される。このように分析する村松は、一例として、南アフリカ共和国が「安心してアパルトヘイトをやめ」たのは、アンゴラとモザンビークにソ連の軍事援助が無くなったからであると述べている(20)。一面的な見方とも思われるが、村松の政治的立場を示す一文ともいえよう。

また村松は、「イスラエルは中東に立つ自由世界の砦としての軍事的な意味を、少くとも大部分喪失した。アメリカとのあいだに感情的な結びつきはあるにせよ、政治、経済の面ではアメリカは明らかにこの国を重荷として感じはじめている」と、これは正確に分析している。アフガニスタンのゲリラも、ソ連牽制のための外交戦略である「チャイナ・カード」もまた同様である。では日本はどうか。

日本は冷戦下の自由世界にとっては極東の砦であり、中曽根元首相のことばをかりれば不沈空母だった。イスラエルの場合とはちがって日米間には共通の価値観や、それにもとづく太い感情的な絆がない。冷戦がおわれれば不沈空母など、スクラップにされる運命かもしれない。(21)

このように危機感を述べた村松は、日米安保条約が、アメリカ合衆国が結ぶ四ヶ国との同盟にあつて、唯一の片務的条約であることを指摘する。これはソ連側からすれば「目障り」な条約だったので、ソ連も日本国内の左翼勢力もこれに反対した。けれども、この条約を敗戦後の外交の基軸にしたことは正しかった。しかしながら、片務的条約は、日本をアメリカの「保護国」にしてしまうことと同じだった。一八八九年から一九六一年までクエートがイギリスと結んだ保護領条約と似た状態だったのである。このように議論を進める村松は、次のように述べる。

保護領としての枠を脱して日本がアメリカに協力し、自衛隊を海外に派遣すれば、それは集団的自衛行動になる。集団的自衛行動や集団的安全保障を、日本の現行憲法は禁じてはいない。「……」憲法の解釈として日本が勝手に、そういう行動を自分に禁じて来た。「……」国連の警察行動に小部隊を派遣することをさえ軍国主義へのみちと考える短絡的な思考は、日本性悪説に根ざしている。「……」政府は集団自衛行動や集団安全保障を否定する憲法解釈を変ようとはしなかった。簡単にいえばアメリカの保護領的国家としての地位に、甘んじてとどまって来た。(22)

保護領的な状況が長く続けば、政治家も国民も緊張感を喪失すると村松はいう。国際政治情勢に、ジャーナリストもまた無知である。冷戦構造があったればこそ、日米安保条約という片務的条約が生まれた。ソ連が崩壊した現在、極東の地域紛争が将来的に起きたとき、アメリカが日本を援助する義理はない。ソ連崩壊がもたらした変動は、日本が今後、保護領国家から脱却することを要求している。以上、「品格ある国家」とは何か(一九九一年一月執筆)に従って、冷戦が終結する時期の村松の情勢判断について概観した。次に、この文章を書いて三ヶ月後の一九九二年一月に発表された「病めるアメリカと肥大した「捕囚」日本」を見てみることにしよう。

冷戦後の世界を正確に見定めることは難しいと、まず村松は述べる。その上で、冷戦が終われば平和な時代が来るといった観測の誤りは、湾岸戦争やユーゴスラビア内戦がすでに証明していると続ける。軍事的対立とイデオロギーが結びついた冷戦期は、人類の歴史上、僅かに七〇年に過ぎないのであり、これからの紛争はなくならないであろう。その上で、日本人は新しい時代に生きる覚悟を決めなければならぬ。「ソ連という「悪魔」が消えてしまった今日、アメリカ人が自分たちの生活を犠牲にしてまで他国を援助し、名まえを聞いたこともない国を守るために血を流さなければならぬのか」という感情が、この国でたかまことに不思議はない(23)。国際的な孤立を避けるためには、日本も国際的な安全保障活動に参加することが必要である。アメリカの力が弱まれば、日本がこれを補うことが求められるからである。国連のPKO活動への参加は軍国主義とは無関係である。また、崩壊後のソ連では混乱が当面続くだろうが、資源に恵まれた国土であり、将来的にはふたたび軍事大国として復活する可能性もある。北朝鮮の脅威が将来消えれば、アメリカは韓国から兵を引き揚げるだろう。冷戦終結にともない、自衛隊を縮小するという政府の方針は無責任である。

このように議論を進めた村松は、占領時代の心理的呪縛が現在もなお日本人に残っていると主張し、自立の道を真剣に探らなければならぬと結んでいる。

## おわりに

われわれが注目すべきは二点ある。第一に、イスラエルと日本との同一視である。イスラエルは共産主義に対する「中東の砦」であり、日本は「極東の砦」だった。それがソ連崩壊により、その役割が失われたため、アメリカ合衆国にとつての重要性が低下するという認識である。第二に、アメリカの保護領、すなわち植民地を脱し、独自に国際平和に貢献するために、憲法解釈を変更して集団的自衛行動、集団的安全保障の道を開き、日米安保条約も見直さねばならないという主張である。これは日本をイスラエル化するというふうに読み替えてよいのではないか。イスラエルは、国際的支援を当てにせず、建国以来、自らの国は自らで守るという姿勢を徹底してきた国家である。村松はそのように明言はしていないものの、脳裏には、核兵器すら保有するとみられるイスラエル・モデルがあったことは間違いないと思われる。

ナチス・ドイツと同盟国だった帝国日本の軍国主義をふたたび繰り返してはならないと村松は考えていた。そして、憲法解釈変更による集団的自衛活動は、軍国主義とは結びつかないと彼は考えている。だが、太平洋戦争開戦時の「空気」が、昭和天皇がそれを阻止することを不可能にさせたとい、戦後のジャーナリズムがアメリカやソ連のそれぞれの普遍主義を最善とする「空気」を醸成したと述べている(24)。日本人の在り方が戦前も戦後もそうであるならば、どうしてふたたび日本が軍国主

義に陥らないと断言することができようか。村松の論理には危ういところがあるといわざるを得ない。国際的な孤立を避けるために、憲法解釈を変更して集団的安全保障活動に自衛隊を参加させるという村松の構想は、村松がいうように、日本がアメリカ合衆国の「保護領国家」、すなわち酒井直樹の言葉で言い換えれば「下請けの帝国」である限り、自衛隊の国軍化はそのままアメリカ合衆国の世界戦略に組み込まれた「植民地軍」になる可能性が高いという見解もあるからである(24)。

- (1) 村松剛『日本の回復』番町書房、一九六五年所収。
- (2) 村松剛『戦後の神話』日本教文社、一九六八年所収。
- (3) 村松剛『歴史とエロス』新潮社、一九七〇年所収。
- (4) 村松剛『保護領国家 日本の運命——冷戦後の世界の中で』新潮社、P H P 研究所、一九九二年所収。
- (5) 村松剛『日本の回復』一四頁。
- (6) 同右、一五頁。
- (7) 同右、一六頁。
- (8) 同右、一八一—一九頁。
- (9) 同右、五八—五九頁。
- (10) 同右、六八頁。
- (11) 持丸博・佐藤松男『証言三島由紀夫・福田恆存たった一度の対決』文藝春秋、二〇一〇年、二〇八頁。
- (12) 村松剛「非常識を代表する日本の新聞」『豊かな世界の相続人たち』日本教文社、一九八五年、二一六—二二二頁。
- (13) 村松剛『戦後の神話』一九四—一九五頁。
- (14) 同右、二〇一頁。
- (15) 同右、二〇七頁。
- (16) 村松剛『歴史とエロス』一三八頁。
- (17) 同右、一四三頁。
- (18) ナシヨナリストにその後変貌していく石原慎太郎、江藤淳、黛敏郎などは、大江健三郎、谷川俊太郎、浅利慶太らとともに「若い日本の会」のメンバーであり、一九六〇年の日米安保条約改定の際には国会前デモに参加していた。村松はすでにこの時期には醒めた認識を持っており、国会前デモに行くことはなかった。なお、「若い日本の会」は、一九五八年に警察官職務執行法改正反対のために結成された若手文化人の政治的グループであった。
- (19) 『保護領国家 日本の運命——冷戦後の世界の中で』九—一〇頁。
- (20) 同右、一八頁。
- (21) 同右、二二—二三頁。
- (22) 同右、三九頁。
- (23) 同右、五一—五二頁。
- (24) 酒井直樹・西谷修『増補〈世界史〉の解体——翻訳・主体・歴史』以文社、二〇〇四年、三三八—三三九頁。

## 第八章 ポストコロニアル時代の植民地主義

### 第一節 『死海のほとり』

#### ——シオニズム国家とパレスチナ

#### はじめに

本章では、第二次世界大戦後のポストコロニアル時代にあつて、なお行われている植民地主義に対する遠藤の認識を考察する。そのために、現代イスラエルを舞台とした『死海のほとり』（一九七三年）と、パレスチナ解放闘争を思わせるハイジャック事件をモチーフとした『砂の城』（一九七六年）を取り上げるとともに、村松の中東国際政治認識と比較検討する。また、一七世紀のスペインによる南米植民地政策を背景とした『侍』（一九八〇年）を、現代の植民地主義と結びつけて考察する。

『死海のほとり』（新潮社、一九七三年）は、『沈黙』（新潮社、一九六六年）に続く遠藤の代表作である。ヨーロッパ人とは異なるキリスト教理解を追求しつつあつた作者が、〈永遠の同伴者〉たるイエス像を提示した記念碑的作品と日本国内では評価されている。ところが、この作品は韓国語以外には翻訳されていない（1）。多くの小説が諸外国語、とりわけ英仏語に翻訳されることで、遠藤が「世界文学システム」（2）に組み込まれた国際的な著者であることを考えると不思議なことといわねばならない。

考えられる理由として、この小説におけるキリスト・イエスの描き方を考えることができる。この小説では、イエスは、奇蹟行爲を行うことができず、ただ虐げられた人々に寄り添うことしかできない、徹底的に無力な男として描き出している。加えて、彼の十字架上の死と、ナチスの収容所の囚人の死を結び付けて描いている。このようなスキヤンダラスな衝撃性を持ったイエス像を、海外の読者が受け入れることが容易ではないと考えたからという理由である。しかし、『死海のほとり』と同年に出版され、同じイエス像を描いた『イエスの生涯』が、五年後の一九七八年には英訳されていることを考えると、現在に至るまで英訳が行われていないことの理由としては不十分である。

別の理由として考えられるのは、海外で読まれたときに、この作品が強い政治性を帯びたテキストとして読まれる可能性を否定できないことである。この小説は、イエス探究という主題の背景として、ユダヤ人を抑圧したナチス・ドイツの暴力が中心化されている。しかし、テクストの周縁部に注目して丁寧を読むと、イスラエル国内に留まり虐げられているパレスチナ人の苛酷な現実もまた描かれているのである。イスラエルが国内のパレスチナ人を抑圧している直接的な場面が具体的に描かれているわけではない。しかし、現代イスラエルを舞台としたこの小説では、当然のことながら、ユダヤ人が被った歴史的悲劇だけが描かれているわけではなく、パレスチナ人が置かれている政治的状況もまた、自然と察知されるように描かれているのである。

フランス留学から帰国後、「アフリカの体臭——魔窟にいたコリンヌ・リュシェール」（伊達龍一

郎名義『オール讀物』一九五四年八月号)で小説家として再出発した時点から、遠藤は、いわば「安全無害な作家」になるつもりはなかった(3)。「アデンまで」(一九五四年)「白い人」(一九五五年)は近代西洋批判の要素があるし、『海と毒薬』(一九五八年)は日本批判の要素があった。『沈黙』(一九六六年)は、カトリック教会批判としても読みうる。これらの諸作品は、しかし、日本語世界の読者を想定していた。遠藤が英仏を中心とする「世界文学システム」に自らが組み込まれたことを自覚したのは、一九六〇年代に続けて作品が外国語に翻訳されて以後のことと考えられる(4)。一九七〇年代に入ってから遠藤は、海外の読者を想定して作品を執筆せざるを得なくなっていた。

『死海のほとり』刊行当時の遠藤が置かれていたこのような状況を考えると、この作品が周到な配慮の下に書かれたとしても当然である。イスラエルという現実の国家の描き方如によっては、最悪の場合には、「反ユダヤ主義者」と見なされる可能性もある。それは国際的な著者としての立場を危険にさらすことになるだろう。この小説で作者はイスラエルを糾弾しているわけではない。しかし、今日まで英訳すら行われていない事実は、以上のような理由からなのではないだろうか。

このような問題意識を踏まえて、本稿では、この小説が書かれた時代背景と著者の取材方法、そして作品の細部に注目することを通して、『死海のほとり』というテクストの新たな読解を提起したい。

## 一 村松剛の仲介によるイスラエル政府の取材協力

パレスチナ／イスラエルを巡る中東情勢について、必要最低限の確認をしておきたい(5)。国際連合の分割決議に基づき、一九四八年にシオニズム国家イスラエルが建国された。背景にはナチスに弾圧されたユダヤ人への同情が国際世論にあった。しかし、パレスチナの地に生活してきたアラブ人の反発を招き、同年第一次中東戦争が起きる。勝利したイスラエルは国連が示したよりも遙かに広い領土を獲得する。一九五六年には第二次中東戦争が起きた。一九六七年には第三次中東戦争が起きる。三度目の戦争によって、イスラエルはパレスチナの大部分を領土とし、ヨルダンが支配していた東エルサレムも獲得した。

遠藤は一九五九年に、当時はヨルダン領だったエルサレムを訪れている。その後、イスラエルを訪れたのは一九六九年、一九七〇年、一九七二年である。一九七二年は三月から四月にかけての滞在だが、翌月にはテルアビブのロッド国際空港(ベン・グリオン国際空港)で日本赤軍のメンバー三人による乱射事件が起き、日本国内で大きな衝撃が走っている。『死海のほとり』が刊行されたのは一九七三年六月だが、同年一〇月には第四次中東戦争が起きた。その翌月から第一次石油危機が日本国民の生活を襲った。したがって、この小説が発表されたタイミングは、それまで日本人に薄かった中東情勢への関心が、にわかになくなっていった時期にあたるのである。

一九六九年一月から二月にかけてのイスラエル取材旅行時、遠藤はイスラエル大使と親しい村松剛を通してイスラエル政府に訪問を伝えている。そのために、現地ではイスラエル外務省が「運転手と七人乗りの車」を用意してくれていた(6)。「今度は六日間戦争のためにエルサレムはもちろん、ほとんど新約聖書関係の場所がイスラエル占領地域になっているのは旅行者にとっては幸いであった。六日間戦争の名残りはエルサレム市に残るさまざまの弾痕にもうかがわれたが、私たちが滞在している間にもほど遠からぬヨルダン川で砲撃戦があり、その砲声が昼食をとっていた我々を驚かせた」と遠藤は記している(7)。知られるように、「六日間戦争(Six Day War)」という呼称はイスラエル側のもので、アラブ側は「六月戦争(June War)」というのである。「六日間戦争」という呼称を用いているからといって、遠藤がイスラエル寄りの見方をしているというわけではないだろう。むしろ、イスラエル側が取材旅行の外国人作家に見せたいと思った世界と、実際に作家が見てしまった世界とは、おそらく違ったものであったと考えるのが自然である。

遠藤と村松は、ともに同人誌『現代評論』同人だった。やはり同人だった服部達と三人で「メタフィジック批評」(一九五五年)を提唱したこともあるなど、若いころから交友があった。村松はポール・ヴァレリー研究から出発した人だが、アンドレ・マルローに関心を移し、一九六一年にはエルサ



レムで行われたアイヒマン裁判に『サンデー毎日』特派員として傍聴に行った。イスラエル政府と村松との関係は、このときから始まっている。ハンナ・アーレントが『ニューヨーク』特派員として来ていたことは名高い。村松は一九六二年に『ナチズムとユダヤ人——アイヒマンの人間像』（角川新書）を著している。翌年、アーレントは『ニューヨーク』に「イエルサレムのアイヒマン」を連載し、ユダヤ人たちからの激しい非難に曝されるが、同年、村松は『ユダヤ人——迫害・放浪・建国』（中公新書）を刊行する。この本で村松は放浪の果てにイスラエルを建国したユダヤ人に対するこの底からの共感を隠そうとしていない。

第三次中東戦争勃発前夜、村松は「イスラエル問題は発火するか」（『中央公論』一九六七年七月）を発表し、「発火寸前の状態」の中東情勢を分析した。戦争終結直後には国防相モシユ・ダヤンに会見して「イスラエル首脳会見記」として発表した（『中央公論』一九六七年八月）。この記事で村松は、アラブ側の政治的立場を無視しているわけではないが、結果的には、日本語世界に「われわれは今後永久に、エルサレム旧市街を手放さないだろう」というイスラエル政府の立場を伝達する役割を果たしたといつてよい。ナセル首相には日本語世界で政治的主張を伝達する人物はいなかったのだから。村松はその後もイスラエル紀行「スエズ運河はいつ再開されるか」（一九六九年二月）、「中東——この絶えざる紛争点」（『中央公論』一九七〇年四月）を発表している。彼は文芸評論家であると同時に中東問題の専門家であった。そして後者における彼のスタンスは、「現代ユダヤ・イスラエル」にあつて、「現代アラブ・パレスチナ」ではなかった。

『死海のほとり』発表の前年に刊行された村松の『中東戦記——六日間戦争からテル・アヴィヴ事件まで』（文藝春秋、一九七二年）は一九六七年から一九七二年までのパレスチナ／イスラエル地域の紛争を記述した書物である。次節で詳細に述べるが、この書物はアラブに敵対するイスラエル寄りの立場から書かれたものなのである。一九七五年一月、村松は『文藝春秋』に「イスラエル首相単独会見記」を発表し、首相イツハク・ラビンとの直接会見を発表している。「アラブ人の海の中にただよう小国の和平への努力と苦悩」という副題が、イスラエルに好意的な内容であることを如実に示している。当時の村松は、イスラエル政府の最高指導者と直接対話が可能な存在にまでなっており、イスラエル側に好意的な論客として、政治評論を日本語世界で行っていたのである。ラビンのみならず、一九八〇年代に入ると、メナヘム・ベギン首相、ラファエル・エイタン参謀総長とも会見している（『文藝春秋』一九八三年三月）。

ところで、イスラエルが、ある意味で「希望」であった時代があつたことを現代のわれわれは忘れてがちである。村松の「ダヴィデの星——イスラエルという国」（『世界』一九六一年九月）はそういう時代の雰囲気をよく伝えている文章である。一九六〇年代、イスラエルを理想化し、彼の地のキブツで働く日本人の若者もいたのである。パレスチナ問題の実態が徐々に日本国内でも知られるにつれて、イスラエルに対する日本人の見方は変化していったのである。

## 二 イエス時代のパレスチナ地図

『死海のほとり』は、現代イスラエルを舞台とした「巡礼」の奇数章と、古代イスラエルを舞台とした「群像の一人」の偶数章が、対位的に展開していく。二つの物語は、最後に寄り合わされ統合される。つまり、「かつて」と「今」が、小説のなかで出会うのである。

この作品が持つ複雑さは小説世界の時間／空間についても例外ではない。小説の舞台となる空間には四種類ある。エルサレムを中心とした現代のパレスチナ／イスラエル、同じく古代のパレスチナ／イスラエル、そして第二次大戦下の東京とゲルゼンである。そして小説の内部に流れる時間には、三種類がある。イエスが生きた古代パレスチナ／イスラエルの時間と主人公が生きる現代パレスチナ／イスラエルの時間。そして、現代を生きる主人公の胸中に入れ子のように流れる第二次世界大戦中の時間である。二つの物語、それぞれの物語の中の空間と時間は、しかし読者の意識のなかで混乱を呼ぶことはない。むしろそれぞれが互いを照らし出す仕掛けになっている。現在が過去に重なり、逆に

過去が現在に呼び起こされるふうになっているのである。

単行本には、死海以北の「イエス時代のパレスチナ」図が掲載されている（新潮文庫版も掲載。新版『遠藤周作文学全集』は不掲載）。地理的理解が必要だと作者が判断したからに違いない。しかしながら、パレスチナ／イスラエルのほとんどをイスラエルが占領した「現代（第三次中東戦争後）のパレスチナ」図は併載されていない。これがあれば、読者はイスラエルとアラブ諸国との政治的緊張を強く意識してこの小説を読まざるを得なかったはずである。古代と現代の二つの物語で進行していく小説であるにもかかわらず、なぜ一方だけを作者は掲載したのであるうか。作者は、キリスト作家として重要な、独自のイエス像を描き出すことに読者の注意を集中させたからと解するのが自然であろう。現代イスラエルを巡る国際政治的状况は、あくまで物語の背景であり、中心の主題ではないからである。

### 三 台詞と描写による反対のメッセージ

エルサレムに到着したカトリック作家の主人公が、学生時代の友人で聖書学者の戸田と再開する第一章の場面を見てみよう。「このエルサレムにも二つしか見物する面がないな。古いエルサレムと新しいエルサレム。現代のイスラエルと聖書に出てくるエルサレム」と戸田はいう。新しいイスラエルとは、「戦争をしているイスラエル。集団農場（キブツ）や砂漠の開発、ロックフェラー財団、「……」と続ける戸田に、主人公は「砂漠の開発を見せてもらうより、イエスの生きた遺跡でも見せてもらうほうが、まだわかりやすいし……」と応じる。

このやりとりを文字通りの意味レベルで受け取れば、主人公即作者は、あくまで古代に生きたイエスの足跡を尋ねることがイスラエル訪問の目的なのであって、パレスチナ／イスラエルをめぐる生々しい国際政治には関心を払わないと宣言している、ということになるう。しかし現代のイスラエルを舞台として設定している以上、それは容易ではないのであって、もしかすると、これは作者の韜晦に過ぎないのではないかと疑ってみることができよう。

なぜなら、こうしたやりとりの直後に主人公が見るともなく見るのが「二軒だけあいている映画館」の看板に描かれた「騎兵隊のジョン・ウエインの似顔」であり、切符売り場に列をつくるユダヤ人の若者たちだからである。ジョン・ウエインは多くの西部劇に出演して、ヨーロッパからやってきた植民者たちの「開拓者精神」を体現した俳優であった。それらの西部劇では、先住民は野蛮な悪役として描かれているのが常であった。ジョン・ウエインはまた、アメリカ合衆国内でヴェトナム戦争反対活動が高まっていた時期に、『グリーン・ベレー』（一九六八年）という、陸軍特殊部隊のヴェトナムでの「活躍」を描いた、政治的色合いの濃い映画を監督・主演していた。一方で、ラルフ・ネelson監督が『ソルジャー・ブルー』（一九七〇年）で、騎兵隊による先住民民族無差別虐殺を生々しく描き出したのは一九七〇年である。それまでの西部劇における騎兵隊と先住民の描き方を大転換したこの映画は、アメリカ合衆国によるヴェトナム戦争介入を強く意識した政治的な作品であり、日本でも一九七一年に公開されていた。

アメリカ合衆国の歴史において、騎兵隊が白人入植者の土地を拡張するために先住民を次々に虐殺した歴史と、新国家イスラエルが先住アラブ人たちを追い出し、町を破壊し、財産を没収し、土地の名称を変えていった歴史を、遠藤は当然のことながら知っている。このように考えると、このテクストは「現代のイスラエル」には関心がないという、「意味を強制する」言葉とともに、ジョン・ウエインの騎兵隊という視覚的イメージを配置ことで、「現代のイスラエル」についても語っているのではないだろうか。台詞と描写で、反対のメッセージを同時に読者が受け取れるようになっていないだろうか。

「二十日戦争の時、ここだって危なくて通れなかったよ」という戸田に、主人公は「戦争の時ほどここにいた？」と尋ねる。「国連の事務所。すぐそばでヨルダンの部隊が機関銃をうってきて、こちらは床に伏せて身動きもできなかったな。この先に当時の砲弾の跡が随分残っている」と戸田は応える。

二十日戦争とは、ここでは第三次中東戦争を指しており、要するに「テクスト内事実」である。この戦争の結果、先に引用した遠藤の文章にもあったように、ヨルダンが管理していた旧市街を含む東エルサレムをイスラエルが占領して自国領土としたことにより、イスラエルのユダヤ人が「嘆きの壁」に行けるようになったのである。

主人公はイスラエルでイエスの足跡を尋ねて歩くのだが、自分がそれまで抱いていたイエス像が、戸田の言葉によってことごとく虚構の産物であったことを思い知らされる。つまり、捏造された神話の虚構性が徐々に暴かれていくというのがこの小説の推進力なのである。神話の虚構性が暴かれていくのは、しかしイエスだけではない。主人公の目に映る矛盾に満ちた現代イスラエルの現実を読者は追体験することになる。このテクストは、ねずみと呼ばれるキリスト教修道士（ポーランド系ドイツ人）を登場させることでナチスのユダヤ人迫害を強く前景化しながら、同時に後景化しているシオニズム国家イスラエルのパレスチナ人迫害についての読者の想像力を刺激するのである。

#### 四 パレスチナ人の表象

知られるように、イスラエル社会は三層構造になっている。最上層にいるのがアシケナジムと呼ばれるヨーロッパから逃れてきたユダヤ人である。その下の層が、セファルディムと呼ばれるヨーロッパ以外から来たユダヤ人である。そして再下層に置かれているのが、イスラエル国会内にとどまった先住アラブ人、すなわちアラブ系イスラエル人、要するにパレスチナ人である。

作品世界において、彼らはどのように表象されているだろうか。それは主人公のトランクを運ぶホテルのボーイであり、裸足で主人公に施しを迫る少年である。ラクダを連れてゆつくりと歩く男であり、路傍でトランプに興じる男たちである。彼らは小説の舞台装置に現れる名も無きエキストラのようにも見える。だが、時に細かい描写が行われることがある。主人公が「ピラトの家」を見学して出た直後の場面を見てみよう。

壺を頭にのせたアラブ女がゆつくりと坂道をのぼってくる。紺色のボロ布のような衣服をまとい、サンダルもはいていない。鶏のそのような足は埃によごれ、驢馬の糞も平気で踏んでいく。すれちがいがま彼女は私を壁にぶつかる陽光のように鋭い強い眼で見たが、その眼ざしには憎しみがまじっているように思われた。……（8）

さりげない描写だが、パレスチナ人の憎しみが混じるまなざしがここでははっきりと記述されている。この場面に続いて続いてアメリカ人の巡礼が現れる。血色のいい神父に連れられて、全員がカメラを肩から下げている。戸田は、ホテルに帰れば信者たちに絵葉書をせっせと書くに違いないと「アメ公の神父たち」を嘲るのだが、パレスチナ人の女は戸田も内心で蔑んでいるであろうことが暗示されている。イスラエル社会で最も虐げられているのはパレスチナ人であるにもかかわらず、アメリカ人の神父も信徒も、そして日本人も、彼らが透明人間でもあるかのように見ようとはしないからである。主人公たちが憩うカフェにきた、買い物籠を下げた「イスラエルの婦人」は、サングラスを掛けている。彼女は、腰を下ろして煙草を喫う。イスラエル社会の最上層にいるアシケナジムなのである。

二人はユダヤ人虐殺記念館に足を向ける。これをきっかけにして、主人公は「ねずみ」と呼ばれたポーランド系ドイツ人修道士を思い出す。財産を没収され強制収容所へと送られ多くのユダヤ人が虐殺された。その記念館を訪れる主人公とともに、読者はナチスドイツの暴力について考えるよう仕向けられる。そして、主人公とともに虐殺記念館を出てイスラエルの街角へ、現代イスラエルの現実へ戻らされるのだ。

第三章には、「街道にそったコココーラやジュースを売る小屋の前に赤ん坊をだいたアラブの女が人生を諦めたような姿で立っていた」という描写もある。コココーラがアメリカ合衆国の象徴である

ことはいうまでもない。そしてアメリカ合衆国は、イスラエルの最も強力な支持国である。第七章で、主人公がパレスチナ人の村を眺めながらイエスの時代を想起する場面に注目してみよう。

通過する路の風景は既にユダの荒野とはすっかり違ってはいたが、そのかわり、押し潰されたようなアラブ人の村がいくつもそこにあつた。煙の煤でうす汚れ、雑巾のような色をした家の前で山羊の群れが集まり、木の枝を持った少年がそれを追っている。天秤棒を肩にして籠を重そうに女が運び、老人が壁にもたれてぼんやりと我々の車を眺めている。どの村にもそんな風景があり、どの村も強い陽光に曝されていた。

「イエスも、この路を歩いたのかしらん」

「と思うよ。ここは昔からサマリヤを通るただ一つの街道だったから」

「もっとみじめだったろうな、当時は」(9)

パレスチナ人集落を眺めながら主人公がイエスの時代を想起するのは、地理的な理由である以上に、眼前に存在するアラブ系イスラエル人たちのありようが悲惨だからである。テクストは現代イスラエル社会の現実に読者の意識を向けさせつつ、それをイエスの生きた世界に結びつけようとしている。

## 五 イスラエル兵士の表象

小説のなかでは、当然のことながら、イスラエル人も描かれている。イスラエル兵士について見よう。イスラエルには徴兵制がある。男性は三年間、女性も二年間の兵役が義務である。もともとアラブ系イスラエル人には徴兵が免除されている。政府は彼等に銃を持たせたくないからだといわれる。ちなみに、正統派ユダヤ教徒も、当時は兵役が免除されていた。

第一章で、街角で横断歩道を渡る姿が、この作品に初めて登場するイスラエル兵士である。「銃を肩にかけたイスラエルの兵士が二人、船首の立像のように直立している」のを主人公はホテルの窓から見る。主人公が戸田と話を交わし、ホテルから出ると、「さつき窓から見えた兵士がまだ辻に立っていて、その喫っている煙草の火が明滅していた」。作中での言及はないが、彼らが所持している銃はアメリカ製であり、コカコーラを売る小屋の前で「人生を諦めたような姿で立っていた」パレスチナ人の女が登場する場面とともに、イスラエルの背後に見え隠れする大国アメリカが暗示されている。第五章で主人公と戸田が自動車でベトレヘムに行くとき、途中で小休止しているとジープが上ってくる。

二人のイスラエル兵が乗っていて、草色の軍服から腕を出した彼等が、じっとこちらを見ている。すれ違った時、その一人が若い獣のような眼で笑顔をつくり、

「何処から来た(メイアン・アタ)」

と声をかけた。(10)

主人公は彼等を見たことから、戦争中の記憶を呼び起こすのだが、「若い獣のような眼で笑顔をつくり」という箇所は含みを感じさせる表現である。銃を持ったイスラエル兵の「つくられた」「笑顔」の「若い獣のような眼」は、得体の知れない戦慄を喚起するような表現でないだろうか。

イスラエル人は銃を持つ存在として描かれる。主人公は、「ねずみ」の収容所時代について知るために、ゲルゼン収容所にいたユダヤ人(アシケナジム)がいる集団農場(キプツ)を戸田と訪れる。第五章で、主人公らが夜に集団農場を訪れたときの場面を見よう。

やがて、果樹園をふちどる白い柵が夕闇に帯のように浮かびあがり、丈のたかいユーカリの樹木がどこまでも道の片側につづく、この道の奥が我々の目指す集団農場だと私にもすぐわかった。

犬の吠える声も次第に大きくなり、家々の灯が木立の間にちらつき、戸田が車の速度をゆるめた時、向うに二人の青年が手をあげて我々をさえぎった。作業服を着ていた彼等の肩に銃があった。(11)

叙情的な描写だが、集団農場の青年たちは兵士でもないのになぜ銃を携行しているのか。自衛のためという名目で、武装することをイスラエル政府から植民者たちが許されているからである。この集団農場も、かつてはパレスチナ人の土地でありパレスチナ人の農場であったかもしれないのである。主人公は「銀髪のいかにもユダヤ人らしい高い鼻をもった老婦人」と面会する。ゲルゼン收容所のサバイバーである。注目すべきは彼女の部屋のさりげない描写である。「きちんと食器をならべた木造の棚の上に、軍服を着た若い娘の写真がおいてあった」と書かれている。ナチスのユダヤ人迫害から生き延びてイスラエルに逃れてきたこの女性の娘は現在兵役にあり、パレスチナ人迫害に荷担していることが暗示されているのである。

この小説のなかで、制服を着て銃を持っているのは、回想場面に登場するナチスドイツの将校と、物語の現在に登場するイスラエル兵士だけである。

このように、テクストの細部に注目すると、イスラエル人は銃を持つ強い存在として描かれ、パレスチナ人は悲惨な生活を余儀なくされる存在として描かれていることが明らかになる。主人公が接するイスラエル人はアラブ系ではなく、すべてユダヤ人、それもアシュケナジムばかりである。ゲルゼン收容所に少年時代にいた医師が、フランス語で手紙を主人公に送ってくる。彼は集団農場を主人公が訪問したときに外出していて会えなかったのである。彼は自分がユダヤ教徒ではなかったと手紙のなかで記している。そして、その手紙のなかで、「ねずみ」の最後を語るのである。ナチスの「うすみどり色の制服を着た将校」が、背広のドイツ人とささやきを交わす。それで「ねずみ」の運命が決まった。

「ねずみ」は人間的弱さを体現したような人物として造型されている。強制收容所内でも、ひたすら保身に走り、他の收容者に襲いかかる苛酷な運命には知らぬふりをし、仕方がないと言いつける卑怯者である。しかし、アウシュビッツで死を強制されるねずみとは一体誰のことなのだろうか。この問いをテクストは読者に突きつける。この人物を考察するためには、ナチスによるユダヤ人迫害を考えるだけでは充分ではない。イエスを迫害した帝政ローマ、キリスト教徒を迫害した帝国日本、そしてパレスチナを占領するイスラエル——このような多層的な支配／被支配関係のなかで、いつの時代にもねずみは存在したはずなのである。

そのように考えた上で、私はここでは、シオニズム国家という小説の舞台設定に特に注目したい。ナチス政権下のドイツで最も惨めな存在はユダヤ人であった。そしてイスラエルで最も惨めな存在はパレスチナ人である。そのように考えれば、ねずみはパレスチナ人でもあるのではなからうか。

『死海のほとり』は「同伴者イエス」を描き出した作品である。そこに疑いはない。しかし、この小説が現代イスラエルを舞台とすることで、人間の悲惨が第二次世界大戦中のユダヤ人迫害という歴史的出来事にとどまるものではなく、アラブ世界で現在進行形の出来事であることをさりげなく描いている点を見逃してはならない。かつて他者から虐げられた者が別の他者を虐げるといった人間の悲惨がこの小説の背景になれば、「同伴者イエス」像が読者に与える感銘も、薄れてしまうであろう。

## おわりに

遠藤は、取材旅行から帰国後に書いたエッセイで、次のように語っている。

イスラエルはユダヤ人の国家だが、周知のように純粋ユダヤ人というのは少ない。

シオニズムの名の下にここに復帰してきたユダヤ人たちはいずれもそれまで世界各国に分散して、言語も環境もちがって生活してきた人々の集団である。極端にいうならばバラバラの混血ユダヤ人たちの集まりなのである。それを今、統一しているのは、アラブ人との戦いでひき起された国民感

情と、自分たちが世界でうけた迫害意識であろう。だからもし戦争が終り、迫害意識がうすれた時は、彼らの団結を支えるものは何かという感じがしないでもなかった。(12)

このように遠藤は考えていた。研究者もまた、アラブ系イスラエル人を除外すれば、さまざまに細分化されたイスラエル国民としてのアイデンティティーの「共分母」は、アラブの脅威に対する連帯感にほかならないと指摘している(13)。ヨーロッパ社会で受けた迫害の記憶——特に自分たちがホロコーストの犠牲者の末裔であるという意識については、各種記念式典や高校生のアウシュビッツ研修旅行などの教育により植え付けられているが、近年ではそのようなシオニズム事業への疑問視もイスラエル国内では出てきているという(14)。

遠藤は、一九六九年の取材旅行の際、イスラエル外務省側の申し入れでキブツに連れて行かれた。キブツにもいろいろあるので、イスラエル側が見せようと選別したキブツであったことは想像に難くない。それまでは軽快にあちこちを歩き回っていた遠藤が、そのときだけは、「しかたなしにという具合に」歩いていったという。外務省の案内役と妻の順子が一緒に歩いている後から、いかにも興味なさげに「ぺったん、ぺったん、歩いて」いったのだ(15)。礼節を欠いた態度といえるが、これは意識的なふるまいだったのでないだろうか。日本の作家の好感を得て、できれば取り込みたいイラエル政府の思惑に、遠藤が気づかないはずがない。首相をはじめ、イスラエル首脳部と親交がある村松剛の口添えを得て来たこともあり、申し入れを断るわけにはいかなかった。仕方なく行くだけは行こうという遠藤のあからさまな態度は、イスラエル政府の思惑とは無関係に、自分は一人の作家として、見るべきものを見たいという無言の表明だったと考えても不自然ではないのである。事実、『死海のほとり』で主人公がキブツを訪問する場面を見れば、そこでの描写は、必ずしもイスラエルに好意的なものとはなっていない。彼らがパレスチナの土地における武装した占領者として描かれていたことは、既述のとおりである。

エルサレム旅行に同行した順子の証言に拠れば、一九五九年、第一回の旅行の際、夜、夫婦で散歩をしていたところ、ヨルダンとイスラエルの緩衝地帯(バッファゾーン)に誤って入り込んでしまったという。五分以上留まっていた場合、無条件で攻撃していいと後から知った。大声で警告され続けたことで、ようやく気がついたのだった(16)。「アラブ側は見るからに暗くて、イスラエル側は煌々と電灯がついて」いたが、彼らは「もう少しそこに留まっていたら、銃で撃たれても全然おかしくなかった」のである(17)。

このときの体験は、遠藤自身も文章にしている。

何も知らぬ私はその時イスラエル領まではいりこんでいたのである。丘の上から人々の騒ぐの聞きえだが、アラビヤ語を知らぬ私はそれをキリスト捕縛の夜の群衆のように聞いていたのである。

「あなたは無茶ですなあ」

翌日、私の話を聞いた国連の日本人はびっくりして叫んだ。

「あそこにはいれば、あなたはもう二度とヨルダン領にもどれなかったのですぜ。発砲されて死んでも仕方がなかったのですぜ」(18)

笑い話のような書き方を故意にしているが、実際には戦慄を伴う体験であったはずである。そしてこれは、多少の危険を冒しても自分の目で現実を見ようとする作家遠藤に、いかにもふさわしい出来事のように私には思われる。

『死海のほとり』に先だって書かれた短篇「道草」(『文藝』一九六五年七月号)は、このときの旅行を思わせる作品である。中年の日本人夫妻が、二ヶ月間のヨーロッパ旅行の帰りに、エルサレムに立ち寄る。夫は長旅で疲れ切っていて、妻とすぐに喧嘩になってしまう。妻は、娘が聖心女学院中等科に通っていることを自慢にしているが、他の保護者もほとんど行っただけで、いかにエルサレムに行くことで、「単純」なマザーたちの歓心を買おうと考えているのである。夫も高等学校時代、寮の方

年床で聖書を真剣に読んだことがあったが、今では「どうせ毛唐の宗教だ。俺たちには関係ない」と口にしてはばからない。妻は「見物したことはしたんだから」といって、証拠のための写真を撮る。要するに、虚栄心が強いだけの、俗物を絵に描いたような夫婦なのである。この夫婦は、作者遠藤とも、遠藤の妻とも、似ても似つかない。どう考えても、これは、エルサレムという土地にも、その土地を巡る血生臭い中東国際政治にも関心が薄い、当時の日本人全体の、イローニツシユな肖像画であろう。イエス探求という主題を中心に据えつつも、イスラエルを舞台にした小説が、どこまで日本人読者に理解されるか、遠藤はこのときすでに、その困難を自覚していたものと思われる。

遠藤は、パレスチナ問題に強い関心を出していたと思われるが、『死海のほとり』ではそれを作品中に最小限しか書き込まなかった。自分が日本人であるとの強い自覚を持っていた遠藤は、日本赤軍とパレスチナ解放人民戦線のメンバーによるハイジャック事件が起きたとき、これをモチーフに、『砂の城』（一九七六年）を書くことで、現代の植民地主義がもたらす暴力について、正面から取り上げるのである。

(1) 国際交流基金日本文学翻訳書誌検索に拠る。

[http://www.jpff.go.jp/JF\\_Content/Information/SearchService?ContentNo=13&SubsystemNo=1&HtmlName=search.html](http://www.jpff.go.jp/JF_Content/Information/SearchService?ContentNo=13&SubsystemNo=1&HtmlName=search.html)

(二〇一五年三月七日確認)。

(2) 「世界文学システム」という概念は、パスカル・カサノヴァ『世界文学空間——文学資本と文学革命』岩切正一郎訳、藤原書店、二〇〇二年に拠る。

(3) 既述のように、遠藤の小説家としての第一作は「アデンまで」（『三田文学』一九五四年一月）とされてきたが、三ヶ月前に発表された「アフリカの体臭」であったことが「慶長遣欧使節団渡欧400年 遠藤周作『侍』展——人生の同伴者に出会うとき」（加藤宗哉・今井真理監修、町田市民文学館ことばらんど、二〇一四年一月一八—三月二三日）の展示で明らかにされた。伊達龍一郎という筆名は伊達政宗に由来するものと考えられる。正宗は支倉常長らを慶長遣欧使節として派遣した人物であり、遠藤が筆名として選ぶのに相応しい人物だからである。すでにこの作品において、支倉常長をモデルにした小説『侍』（一九八〇年）とつながる要素があったようである。『侍』にも「アフリカの体臭」と共通する反植民地主義が描き込まれているが、作品全体に溶け込ませる手法が洗練されていること、またポストコロニアリズムの時代思潮も幸いしてか、諸外国語にも翻訳されている。

(4) 最初に翻訳されたのは「ジュルダン病院」で、ソヴィエト連邦の雑誌に一九六一年に掲載された。単行本は、やはり一九六一年に『海と毒薬』がロシア語に翻訳されたのが最初である。この小説は一九六七年にアメリカ合衆国で英訳された。『沈黙』は、一九六九年に英国で英訳され、以後数カ国語に翻訳された。スウェーデン語にも翻訳されたのは、ノーベル賞受賞を意識した戦略的な意図からと考えられる。ちなみにイスラーム圏で使用されるアラビア語には一冊も翻訳がなく、シオニズム国家イスラエルの公用語であるヘブライ語には、カトリックの破戒僧を扱った『火山』一冊があるのみである。

(5) 「パレスチナ／イスラエル」という地域呼称は、イスラエル対パレスチナという対抗図式、敵と味方という論理的枠組を乗り越えるべく用いられるようになってきたものである。詳しくは臼杵陽「日米における中東イスラーム地域研究の「危機」——一九・一一事件後の新たな潮流」（『地域研究』七巻一号、二〇〇五・六、一一三—一五頁）を参照。

(6) 遠藤周作「死海を訪れて」（『東京新聞』一九六九・三・一一）。S E Z 13、四五頁。

(7) 同右。

(8) S E Z 3、三九頁。

(9) 同右、一〇二頁。

(10) 同右、七二頁。

(11) 同右、八〇—八一頁。

(12) 遠藤周作「死海を訪れて」S E Z 13、四五頁。

(13) ヤコヴ・M・ラブキン『イスラエルとは何か』菅野賢治訳、平凡社新書、二八二—二八四頁。

- (14) 同右。
- (15) 遠藤順子『夫・遠藤周作を語る』文春文庫、二〇〇〇年、一六二―一六三頁。
- (16) 同右、一六〇―一六一頁。
- (17) 同右一六二頁。なお、「道草」(『文藝』一九六五年七月号)には「同じエルサレムでもイスラエル側にはネオンの光が華やかに見えるのに、こちらヨルダン側は、ほとんど灯の数も少ない」という一文がある。
- (18) 遠藤周作「エルサレム巡礼」(『朝日新聞』一九六〇年三月二日) KEZ 11、一八二―一八三頁。



## 第二節 村松剛のシオニズム史観

### はじめに——他国による軍事的占領

前節で『死海のほとり』を取り上げて、イスラエルによるパレスチナ占領という国際政治的状况に関する遠藤のまなざしを考察したが、本節では、遠藤の取材旅行の口添えをした村松剛のパレスチナ認識について考察することで、両者の相違について検討することとしたい。

そもそも、他国による自国の軍事的占領とはいかなるものなのか。ヴィシー政権下のパリ、フランス支配下のアルジェ、アメリカ占領下の日本について、村松は次のようにそれぞれ語ったことがある。ナチス占領下のレジスタンス運動は、アメリカ軍の来たアフリカ上陸作戦後に盛んになった事実を指摘した村松は、次のように語っている。「外からの来援の希望がなければ、民間人による抵抗なんて実際上できるわけがありません」。「簡単にレジスタンスとかいう人間は」本当の恐しさを知らないのですよ。内戦というものの恐しさを。そういう状態になれば、占領軍に協力するのが必ず出てきます」。「買収されるのもいるし、好んで協力するものもいるでしょう。イデオロギーのちがう味方を敵に告発した例は、史上いくらでもあります。そうなると、国民が二つにも三つにも割れるのです。これはお互いに、殺し合いをはじめめる」。「内戦は、通常の戦争よりよっぽど怖しいのです」(1)。

アルジェリアを取材したときのアルジェのようすは『アルジェリア戦争従軍記』(中央公論社、一九六二年)に詳しく書かれている。赤信号でも自動車から狙撃されるので建物の蔭に隠れているとか、巻き添えを恐れて、東洋人である村松が近づく周囲が皆嫌がるといった体験を考えると、いった記述がある。市街地でのテロ行為への恐ろしさという視点から改めて考えると、それだけの危険を冒した取材であったと考えられる。実際、村松の部屋に自動小銃を持った男がはいって来たことがあったという。幸い、すぐに撃たなかったので、パスポートを見せて事なきを得たという(2)。

アメリカ占領下時代の自身の経験については、次のように語った。村松は渋谷で日本人女性がアメリカ兵に襲われている場に遭遇したことがあった。兵士は拳銃を持っているので、周囲の日本人は守ってやる事ができない。人垣ができるほどの人数で、ただ兵士を睨んでいることしかできない。それでも、何とか女性はその場から逃げ去ることができたのだという。一九四七年頃、村松はアメリカ軍基地で働いていた一時期があった。金は稼げたが、不愉快な「亡国の姿」を眼にするばかりで、バーボンウィスキーをラッパ飲みしながら働いたという。「素面じゃ、とてもできない」(3)。基地には精神的に国籍不明な「やくざのような」通訳もいたという。遠藤は、占領期のこのような体験についてほとんど文章に残していないが、それは村松が見聞したような不快な経験をしなかったということを意味するわけではないだろう。

さて、「占領」というものに対する村松の一般の見解を確認したのは、イスラエル占領下のパレスチナに関する村松の理解を考察する上で必要な手続きだったからである。一九四八年に建国が宣言されたイスラエル国が、歴史的パレスチナ地域への植民地国家であり、特に一九六七年の第三次中東戦争で圧倒的な勝利を収めて占領地域を大規模に拡大し、国連安保理決議による撤退決議に従わないまま、今日に至っていることは周知の事実である。第二次世界大戦後のポストコロニアル時代の植民地国家イスラエルについて、そして第三次中東戦争後のパレスチナ占領について、村松はどのように考えたのであるか。パレスチナ側には、村松のいうように、占領軍すなわちイスラエルに協力する者があり、また、外国からのさまざまな支援から、抵抗活動が継続しているのがパレスチナの現状である。村松は、本土復帰前の沖縄を訪れて、アメリカ占領下の現地の状況をつぶさに見て、占領政策を

批判しているのである。

## 一 村松のイスラエル理解

さて、イスラエル国に対する村松の理解を知るために、一九六三年に刊行された『ユダヤ人——迫害・放浪・建国』（4）と、一九七二年に刊行された『中東戦記——六日間戦争からテル・アヴィヴ事件まで』（5）を、中東専門家の研究（6）を参照しながら考察することとしよう。

『ユダヤ人——迫害・放浪・建国』は、一九九一年三月時点で六三刷というロングセラーの書物である。アイヒマン裁判傍聴のためにイスラエルを訪れたのが一九六一年、帰国した村松は、ユダヤ人の宗教や思想に関する「無知」を思い知らされたという。「砂漠の神に魅せられた」村松は、その後の二年間、旧約聖書ばかりを読み続けた。「その旧約を中心に、ユダヤ人の歴史と思想をえがいてみたのが本書なのだ」という（7）。構成を見ると、以下のとおりである。

- 序 建国への道
- I 放浪の民
- II ユダヤ民族の成立
- III イスラエル—ユダ王国の興亡
- IV 異民族の剣のもとに
- V エルサレム悲歌
- VI “不死鳥”の民

二〇世紀現在のイスラエルについて書かれた章が、最初と最後に置かれ、旧約聖書の記述を挟みこんでいることが一見してわかる。つまり、現在のイスラエル国を、ユダヤ人の歴史と直結させて語っているのである。「迫害・放浪・建国」という副題が示すように、迫害され、放浪し続けたユダヤ民族が、数千年のうちに、近代国家イスラエルを建国したというナラティブになっている。そしてこれは、典型的なシオニズムの語りであり、換言すれば、イスラエル政府公式の見解なのである。

国連のパレスチナ分割決議について触れた序章で「たとえ小さくても、この父祖の地に独立国をいとなむことが、二千年来の彼らの夢だったのである」。「彼らはいまや、千九百年ぶりに故郷を持つ」。最後のユダヤ人国家、マカベア王朝が、ローマ共和国の属領となったのは、西暦紀元前六三年のことだから、それから数えればまさに二千年ぶりに、彼らは独立を獲得するだろう。二千年といえは、日本の長い歴史がそのまますっぽりとはいつてしまう年月であり、彼らの歓喜は想像にあまりある」（8）と村松は記している。

また、第一次中東戦争については、英国委任統治中にすでに英軍指揮下のアラブ軍が「テロ集団」化していたと述べ、「ユダヤ人にとって、パレスチナが父祖伝来の故郷の地であり、神聖な土地であるなら、それはアラブ人にとっても同じだろう」。「どちらにとっても、神の名の下に行われる戦争だったのである。政治的、人種的対立に、神の名がもう一つつけ加わり、砂漠の神はその性、強烈だから、争いはいっそうはげしいものになった」（9）と述べる。戦争の結果、「ユダヤ人以外のだれひとり、予想していなかったことが起こった。十二万のユダヤ人男女は、手製の小銃や追撃砲や地雷を、はじめは主要な武器として、アラブ軍の機甲部隊と戦い、年をこすと、その占領地は、国連の分割案で指定された地域を、はるかにこえるまでになっていた。イスラエルは生き残ったのだ」（10）。

このように、村松はイスラエル国を、小見出しの言葉を用いれば、「奇跡の国」として劇的に描き出した上で、旧約聖書の時代のユダヤ人の歴史について語り始めるのである。最終章では、ふたたび近代以降の歴史記述となる。シオニズムに関する歴史的説明が行われ、英国の政策の不手際、第二次世界大戦中のナチスによるホロコースト、そして戦後の国連決議と第一次中東戦争へと叙述を進めていく（11）。

第一次中東戦争については、序章で触れていたが、ここで村松は改めてこの戦争について述べる。「ユダヤ人はもちろん、この試練に耐え得ない、と英国は考えていた。武器もなく、出身国もまちまちで、お互いにことばさえろくに通じないひとにぎりのユダヤ人が、七カ国十二万のアラブ正規軍の怒濤の進撃を、喰いとめられるわけがないだろう。イスラエルがこの条件下で動員できる軍隊は、せいぜい三千人であろう、と英国の新聞は評価していた。奇跡が起こらないかぎり、パレスチナのユダヤ人に希望はないと考える点で、世界中のどの国もが一致していたのだ。[…:]」しかしまさにその奇跡が起こったのである」(12)。

こうして生まれたイスラエルだが、アラブ諸国からの脅威は続いている。「エジプトのナセルは、「帝国主義イスラエル」をほろぼすことをつねに叫んでいる。イスラエルが強大な軍備をもつのはそのため」なのである(13)。「不死鳥のような民族」とユダヤ人を呼ぶ村松は、「現存する、おそらくは世界最古の集団。人類は彼らに、いかに多くのものを負うていることか。そしてその返礼に、人類はいかに無残な迫害をもってしてきたことか。四千年を生きぬいた彼らの底力は、まさに畏敬するに足りる」(14)と賛嘆してこの書を閉じるのである。

## 二 村松のパレスチナ問題理解

われわれの課題は、イスラエル占領下のパレスチナに関する村松の認識を確認することであるが、村松のこの書物は多くの手がかりを与えてくれる。

高橋和夫は、「イスラムとユダヤの二千年来の宗教対立」といったパレスチナ問題の語りが現実と対応していないと指摘している。問題は宗教的な争いではなく、土地を巡る争いであって、一九世紀末にシオニズムによってユダヤ人がヨーロッパから入植を始めたことから問題が発生し、一九四八年のイスラエル建国以降に、さらに問題が深刻になったのである(15)。臼杵陽は、「イスラエルとパレスチナ人の対立は、考古学や聖書学などの学知をも動員しつつ、古代の「物語」までも、その対立を固定化するために動員されてしまつて」といって指摘している。また、「パレスチナという地域の歴史をイスラエルの民の歴史として聖書の記述だけに引きつけて理解するのは長い歴史の一部だけを切り取るということになり、それ以外の歴史的な事実をおろそかにすることにな」とも述べている(16)。

このような専門家の指摘に照らすと、村松の語りも、問題含みであることが明らかにになる。村松は序文で、自分が「旧約の専門家でも何でもなく、一介のものの好きな素人にすぎない」と述べているが、アイヒマン裁判傍聴というイスラエル訪問がユダヤ人に対する関心のきっかけとなっていたので、現代のイスラエルからユダヤ人の歴史をふりかえるという視点は、彼にはごく自然ななりゆきであったと考えられる。僅か二年間の研究でこれだけの内容の書物を著したことには驚きを禁じ得ない。部分部分の記述には教えられることが多いし、イスラエルに対する著者の思い入れが行間に溢れ、生彩を放っている。三〇年以上にわたるロングセラーになったことも肯ける。出版された年が、現在に比べれば情報が乏しい一九六一年であることにも注意が必要であろう。第一次中東戦争でのイスラエル軍の勝利も、近年の研究では「奇跡」ではなかったといわれている。しかし、同時代の日本の文学者で、この書物を持つ水準でユダヤ人とイスラエルについて執筆することができた人物は、おそらくいなかったものと思われる。

もつとも、一般書として、中部日本新聞特派員として中東に一九五五年から一九五七年まで滞在した熊田亨(藤村信)が著した『砂漠に渴いたもの——中東1944—1958』(東洋経済新報社、一九五九年。新版第三書館、一九八二年)が存在していたことは指摘しておきたい。第三章「パレスチナ戦争」は、イスラエルがシオニストによる建国であることが明確にされており、イスラエル建国は、ユダヤ数千年の歴史と結び付けられるのではなく、むしろ反対に「一千年以上もそこに住んでいた百万人のアラブ人を追い出す」(17)ことになった事実と連結され、強調されているのである。しかし、一般読者への影響という点からすると、一九九〇年代までロングセラーを続けた村松の新書の

方が、一九八二年まで絶版品切状態であった熊田の書物よりも大きかったものと思われる。

『ユダヤ人——迫害・放浪・建国』を執筆するに際して、村松はイスラエル外務省アジア局長、同次長、在日イスラエル大使館の「あらゆる便宜」の提供を受けている。イスラエル政府は、そうすることで、日本語世界におけるイスラエル寄りの文学者を一人獲得したのである。一九七〇年代に入ると、村松は『中央公論』『文藝春秋』といった総合雑誌で、イスラエル政府首脳と単独会見を行うような存在になっていくのである。

今日の視点から最も問題だと考えられることは、村松がユダヤ人とシオニストの区別を設けないこと、ユダヤ人とイスラエルを同一視していることである。ユダヤ人が最も多くいるのはイスラエルではなく、アメリカ合衆国であり、ユダヤ人をイスラエルが全て代表していると言い切れるかどうか疑問があるし、ユダヤ教徒のなかにはシオニズムを強く批判するユダヤ教内の立場があることを、われわれは知っているからである。イスラエルを考察する上では、ユダヤ教徒とその歴史を参照するのではなく、反対に全て抜き去って考えなければならぬとする立場である。そこにはシオニズムとユダヤ教とを区別する思考があるわけだが、聖書に記述されたユダヤ教徒の歴史などを脇に置いて、他の近代国家を考察するときと全く同等の資格で、ありのままのイスラエルを扱うべきであるという主張は全く正しいであろう（18）。

### 三 ユダヤ人とシオニストの同一視

次に村松の『中東戦記——六日間戦争からテル・アヴィヴ事件まで』を検討することにしよう。この書物は、前著『ユダヤ人——迫害・放浪・建国』の続編として書かれたと著者が後記に記している。執筆中、村松はイスラエルを四回訪問し、大統領シヤザール、元首相ベン・グリオン、首相ゴルダ・メイアー、国防相モシュ・ダヤン、外相アバ・エバン、グル空挺旅団長、ヨッフエ中部指揮官など、多くのイスラエル政府関係者に取材している。中心的に扱われているのは第三次中東戦争である。写真図版が四頁あるが、巻頭には嘆きの壁の前に立つ五人の若いイスラエル兵の上半身が映し出されている。「1967年6月7日 ヨルダン領エルサレム旧市の奪回なる。《嘆きの壁》は実に2000年ぶりにイスラエルの手にかえったのだ。」と説明がある。要するに、前書以来のシオニズム史観で執筆されているのである。

第三次中東戦争で、イスラエルは圧倒的な勝利をおさめ、占領地を拡大して領土を五倍に拡大した。この戦争がもたらしたものについて、臼杵陽は、中東の軍事大国であることを証明してアメリカの反共の砦としての地位を築いたこと、イスラエルの現実に幻滅してイスラエルを去って行く人が多かった戦争前と比べて、国内のムードが高揚したこと、アラブ側はアラブ社会主義が終わりを告げたことを挙げている。そして「アラブ・イスラエル戦争」が「パレスチナ／イスラエル紛争」へと変質し始めた」と指摘している（19）。

村松は、第三次中東戦争のはじまりから終わりまでを丁寧に記述した後、「ユダヤ人は二千数百年ぶりに、占領軍という名を背負った」（20）と述べ、拡大した占領地問題について筆を進めた。イスラエル政府内にも、占領地の扱いに複数の意見があったことに言及した村松は、非干渉主義政策の下でアラブ人労働者が行った罷業や教師の指定教科書使用拒否などの「騒動」も、次第に収まっていたと記している。この年の一月に、国連安全保障理事会は、占領地からのイスラエルの撤退を決議するが、その後、現在に至るまで、イスラエルが撤退せず入植を進めていることは周知の事実である。村松は、外相アバ・エバンの夫人と自動車であら被占領地区に迷い込み、機関銃を積んだ軍ジープの将校から「このカスバには、まだ軍も夜間はいれない」と怒鳴られたと回想している。ダヤンの占領政策について、彼は次のように記している。

ダヤン自身が、青年時代には反英の地下運動家だった。生活の安定が、地下運動に対抗する最良のみちであることを、彼はよく知っていた。彼はテロリストの地下組織を虱つぶしにしていたが、

それだけなら治安当局がいつの場合にも行なうことである。この人物の面白きは、一方でヨルダン川にかかる橋（アレンビイ橋）を解放し、被占領地区アラブ人のアラブ諸国への旅行を、許したことであった。彼らがイスラエル国内に働きに行くことも、彼は許可した。（21）

イスラエル側の抵抗者は「地下運動家」、アラブ側の抵抗者は「テロリスト」と、村松が言葉を使い分けていることに注意したい。村松は「六日間戦争後も被占領地区に留ったアラブ人たちは、もともとが生活の安定の方をえらんだ人びとである。しかもイスラエル占領下で、生活は改善されてゆく。彼らはテロリストとかかわりをもって面倒な問題にひきずりこまれることを、望まなかった」（22）と続ける。彼は、アラブ人の武力的抵抗運動をテロリズム、あるいは括弧付きの解放戦争と呼んでいる。ガザは「エジプト系パレスチナ・ゲリラの、巨大な基地」（23）である。ガザを訪れた村松は、「憤激を禁じ得なかった」。なぜならば「ナセルは難民を穴蔵同様の場所に放置し、エジプト本国への転居を許さなかった。〔…〕ナセルにとっては、状況は悲惨なほど反イスラエルのシヨール・ウインドウとして有効だったのだろう」（24）。要するに、村松はイスラエルの占領政策を肯定的に認めており、一方でアラブ側の抵抗運動＝レジスタンスを「テロリズム」と見なしているのである。

#### 四 第三次中東戦争をめぐる二つの見解

われわれが戸惑いを禁じ得ないのは、アルジェリア戦争を取材した際は、フランス政府へのアルジェリア側の軍事抵抗組織FLNを村松はテロリストとは見なしていなかったからである。また、第二次大戦後の日本のアメリカ占領が、サンフランシスコ平和条約後も実態としては継続していることに對して村松が一貫して批判しているからである。他国による占領行為——それは当然のことながら植民地主義に繋がる——にあれば反撥している村松が、イスラエルについては、どうしたそれを承認してしまうのだろうか。

村松が一貫してイスラエル政府の立場から第三次中東戦争を見ているのに対して、アラブ側から見ているのが、板垣雄三である。板垣は一九三一年東京生まれで、村松より二歳年下である。村松が東大文学部でフランス文学を学んでいた時期に、板垣は東大文学部で西洋史を学んでいた。一九六二年にアジア経済研究所の現地調査のため、クエート、エジプト、レバノン、シリア、ヨルダン、イラク、イランを回り、一九六五年から二年間、カイロ大学に留学した。『中東戦記——六日間戦争からテル・アヴィヴ事件まで』を村松が刊行した二年後、板垣は『ドキュメント現代史13 アラブの解放』（25）を刊行している。この書物は、イスラエル側ではなく、パレスチナ側から書かれた多くの関係資料を一巻に編んだものである。当初板垣は『パレスチナの解放』という表題を考えていたが、出版社の意向が優先された。

板垣は前書きで、「中東紛争の根にはアラブとユダヤ人との宿命的な確執があるのだ、という人を欺く説明が横行し普及している。このような一面的な、また虚偽の宣伝に、ジャーナリズム一般が無分別にもまき込まれ、力を貸しているのが現状である」（26）と述べている。巻頭の解説年表「ユダヤ人国家」——その虚構性——で板垣は、一八九七年の第一回シオニスト会議から筆を起し、その後、一九一七年のバルフォア宣言を詳細に分析し、英国とシオニズムの結びつきを解明し、「アラブとユダヤ人とは何千年にもわたって死闘を繰り返してきたという何の根拠もない二〇世紀の神話」が人為的に形成されてきた由来を明らかにする。第二次世界大戦後の国連パレスチナ分割決議について、そのような国際体制が形成されていくなかで、「最後まで忘れられているもの、そしていつさいの犠牲のしわ寄せを背負うことになった存在、それがパレスチナ人であった」（27）と述べている。

第三次中東戦争がもたらしたものについて、板垣は「イスラエルはついにパレスチナ（カイロ会議と国際連盟がきめた）の全体を統合しえたかに見えた。国際体制は（サン・レモ会議の当事国であった日本も含めて）、パレスチナ人の主体的形成を消滅させる「中東和平」に熱中しつつある」（28）と結論している。

板垣は、パレスチナ問題が、単独で存在しているのではなく、「それ自体のうちに、世界史の全過程を貫くような歴史性と、世界中のありとあらゆる問題と深く関連しあう世界性とをかかえている」(29)との認識に立っている。南アフリカ共和国のアパルトヘイトも、沖縄の問題も、全てパレスチナ問題に連関しているというのである。この視点はわれわれにとつて示唆に富む。なぜならば、村松はアルジェリア戦争、中東戦争、沖縄問題、南アフリカのアパルトヘイト政策など、国際政治のさまざまな問題に関心を寄せ、現地を訪れ、記事にし、それを書物にしていたが、それら全てを中東問題と関連づけて考察するということをしなかつた人だからである。先に言及した、アルジェリア抵抗運動とイスラエル抵抗運動への評価の相違は、このことが理由だったのである。

パレスチナ問題とは植民地主義の問題に他ならないが、日本も欧米もあまりに植民地主義に浸されているのでそれがわからない。また、パレスチナ人とは、ヨーロッパが棄民して成立したシオニズム国家によって「新しいユダヤ人」にされた人々なのだと板垣は主張する(30)。パレスチナ人は、国がなく、アラブ世界でも差別され、自助努力と団結で生き延びていく人々であることから、彼らが「アラブ世界のユダヤ人」であるとの認識は、高橋和夫も述べているところである(31)。

なお、板垣は巻末の参考文献に、村松の『中東戦記——六日間戦争からテル・アヴィヴ事件まで』を挙げている。問題が多面的であるため、専門書や学術論文に限らず、「多様な文献を盛り込む」ようにしたからである。

## おわりに

『ユダヤ人——迫害・放浪・建国』(一九六三年)、『中東戦記——六日間戦争からテル・アヴィヴ事件まで』(一九七四年)、そして本節では言及できなかった『血と砂と祈り——中東の現代史』(一九八三年)を加えた中東三部作は、要するに「イスラエル史」であり、ユダヤ人とシオニストを同一視する立場に立つ著者の政治的立場から書かれたものであった(32)。イスラエルがユダヤ人の全てを代表しているという立場がシオニズムである。村松は、シオニズムを批判する正統派ユダヤ教徒を、しばしば「ユダヤ教過激派」と記している(33)。ただし村松は、世俗国家に生きる現代人として、西洋史におけるキリスト教宗教改革を重視しており、イスラム教が宗教改革を経験していないように、世俗化を拒絶するユダヤ教正統派に対して反撥を覚えていたものと思われる。

筑波大学教授時代、村松はエジプト出身留学生の指導もしていた。後にカイロ大学教授となり、サウジアラビアやエジプトで多くの日本研究者を育てることになったカラム・ハリール(一九五八—)も村松から教えを受けた人である。カイロ大学日本語・日本文学科三期生だった彼は、一九八一年から一九八八年まで文部省の奨学金を得て筑波大学で学び、「日本中世における夢概念の系譜と継承——日記と和歌を中心として」で博士号を取得した。その後、サウジアラビアのキングサウド大学で教鞭を執り、二〇〇五年から二〇〇八年までは、在日エジプト大使館で文化参事官を務めた。村松について、彼は「奥深い日本の古典文学への扉を開いてくれた恩師です」と述べている(34)。つまり、政治的立場こそイスラエル寄りであったものの、アラブからの留学生に対しては、政治的立場を超えて親身な指導を行う教育者であったのである。

遠藤の蔵書目録を見ると、ユダヤ—イスラエル関係の書物としては、A・ジークフリード『ユダヤの民と宗教——イスラエルの道』(鈴木一朗訳、岩波新書、一九六七年)、アイザック・ドイッチャー『非ユダヤ人的ユダヤ人』(岩波新書、一九七〇年)が確認できる。当然のことながら、遠藤は村松の書は読んでいたし、サルトルの『ユダヤ人』(安堂信也訳、岩波新書、一九五六年)も読んでいたはずである。その遠藤が、イスラエルに批判的なドイッチャーの書を読んでいたことは注目に値する。それは村松のイスラエル観を相対化する見解の存在について、遠藤が知っていたことを意味するからである。

- 二八五―二八六頁。
- (2) 同右、二八八頁。
- (3) 同右、一三二―一三三頁。
- (4) 村松剛『ユダヤ人―迫害・放浪・建国』中公新書、一九六三年。
- (5) 村松剛『中東戦記―六日間戦争からテル・アヴィヴ事件まで』文藝春秋、一九七二年。
- (6) 白杵陽『イスラエル』(岩波新書、二〇〇九年)及び『世界史の中のパレスチナ問題』(講談社現代新書、二〇一三年)、高橋和夫『アラブとイスラエル―パレスチナ問題の構図』(講談社現代新書、一九九二年)及び『パレスチナ問題』(放送大学教育振興会、二〇一六年)。
- (7) 村松剛『ユダヤ人―迫害・放浪・建国』i―ii頁。
- (8) 同右、五―六頁。
- (9) 同右、一三―一四頁。
- (10) 同右、一七頁。
- (11) ただし、この書では、ナチスのホロコーストについての記述はほとんどない。『大量殺人の思想』(文藝春秋新社、一九六一年)と『ナチズムとユダヤ人―アイヒマンの人間像』(角川新書、一九六二年)で詳述されている。たからである。
- (12) 同右、二〇九頁。
- (13) 同右、二一一頁。
- (14) 同右、二一二頁。
- (15) 白杵陽『世界史の中のパレスチナ問題』講談社現代新書、二〇一三年、九―一〇頁。
- (16) 同右、二八頁。
- (17) 熊田亨(藤村信)『砂漠に渴いたもの』第三書館、一九八二年、八九頁。
- (18) ヤコヴ・M・ラブキン『イスラエルとは何か』菅野賢治訳、平凡社新書、二〇一二年、三二三頁。
- (19) 白杵前掲書、二八一―二八三頁。
- (20) 村松剛『中東戦記―六日間戦争からテル・アヴィヴ事件まで』文藝春秋、一九七二年、二六四頁。
- (21) 同右、二八三頁。
- (22) 同右、二八四頁。
- (23) 同右、三八六頁。
- (24) 同右、三〇六―三〇七頁。
- (25) 板垣雄三編『ドキュメント現代史13 アラブの解放』平凡社、一九七四年。
- (26) 同右、i頁。
- (27) 同右、三四頁。
- (28) 同右、三五頁。
- (29) 同右、三七四頁。
- (30) 長沢栄治・阿久津正幸編『中東イスラーム研究の先達者たち2 板垣雄三先生インタビュー1』人間文化研究機構地域研究推進事業「イスラーム地域研究」東京大学拠点、二〇一二年、八頁。一七頁。
- (31) 高橋和夫『パレスチナ問題』放送大学教育振興会、二〇一六年、一一五頁。高橋はレバノン戦争後にシオニスト側に芽生えたパレスチナ人への関心という文脈でこのように述べ、「ユダヤ人たちは、自らの姿を鏡に映し出したような感情を持ったことであろう」と記している。
- (32) 村松は『血と砂と祈り―中東の現代史』においても、例えば第三次中東戦争に関する件りで、「二千年の放浪と迫害とのあげくにナチ・ドイツによる大虐殺にあい、ようやく国をつくってアジア大陸の西端に身を寄せあるようにして生きて来た人びとが、世界を驚嘆させる大勝利を収めた」と記述している(文庫版二四八頁)。藤村信は両者の区別に敏感である。シオニズムとイスラエル右派の結びつきに関する藤村の認識については以下を参照されたい。藤村信「イスラエル国家の変貌」『赤い星 三日月 絹の道―中東紛争の十年』岩波書店、一九八四年、二九四―三一頁。
- (33) ユダヤ教正統派のシオニズム批判については、以下の書を参照されたい。ヤコヴ・M・ラブキン『トーラーの

名において――シオニズムに対するユダヤ教の抵抗の歴史』菅野賢治訳、平凡社、二〇一〇年。ヤコヴ・M・ラ  
ブキン『イスラエルとは何か』菅野賢治訳、平凡社新書、二〇一二年。

(34)「カラム・ハリール カイロ大学教授 「アラブ圏での日本語教育にかける」(二〇一一年一月二日配信)『nippon.  
com 知られざる日本の姿を世界へ』 <http://www.nippon.com/ja/people/e00006/?pnum=2> (二〇一七年五月三日確  
認)。



## 第二節 『砂の城』——島原の乱とパレスチナ解放闘争

### はじめに

前節で、村松のパレスチナ問題に関する認識について考察し、親しい友人であった遠藤とは異なる見解を持っていたことを明らかにした。パレスチナ問題に関連する小説を、遠藤は『死海のほとり』を刊行した二年後に書いている。長編小説『砂の城』（主婦の友社、一九七六年）である。本節ではこの作品を取り上げて考察する。

この小説は、一九七五年八月から月刊誌『主婦の友』に一年間連載された。一九七九年には新潮文庫にも収録されている。この時期の遠藤の状況をふりかえると、一九七三年に『死海のほとり』を書下ろし作品として上梓した後、『遠藤周作文庫』（講談社）全五巻の刊行が一九七四年から始まり、また、第一次『遠藤周作文学全集』（新潮社）全一巻の刊行も一九七五年から始まるなど、五〇代に入ってから、それまでの仕事を集大成する時期に当たっていた。

『砂の城』は、いわゆる純文学系列の作品とは見なされてこなかったため、『遠藤周作文学全集』（新潮社）には、旧版でも新版でも収録されておらず、大衆小説も収録する方針で編まれた『遠藤周作文庫』（講談社）にも、おそらく刊行年の関係から未収録である。海外への翻訳もない。武田友寿による新潮文庫版の巻末解説がある以外には、学術的な研究も行われていない。しかしながら、この作品は、江戸幕府による苛酷なキリシタン弾圧を象徴する「島原の乱」と、イスラエル建国がもたらしたパレスチナ問題とを連結させるといふ驚くべき内容を持っているため、見過ごすことができないものである。いわゆる「団塊の世代」の青春を描いたこの小説は、さきに取りあげた『死海のほとり』と関連付けて読まれるべき作品なのである。

### 一 『砂の城』の梗概

長崎市からバスで一時間足らず町に暮らす早良泰子は、電気器具店を営む家の一人娘である。父親は中国大陸での戦場体験を持つ人で、母親は泰子が四歳のときに亡くなっている。一六歳の誕生日に、泰子は父親から一通の手紙を受け取る。亡くなる一週間前に、母親が、一六歳の誕生日が来たら泰子に渡すよう夫に頼んでいたのだった。手紙には、自分が一六歳だったころの戦争中の青春が書かれていた。恩智勝之という大学生と訪れた、宝塚の奥にある溪流の静けさと、そこで彼が言った「負けちゃだめだよ。うつくしいものは必ず消えないだから」という言葉を母は忘れることができなかったという。学徒動員で入営した恩智が、朝鮮を経由して満州の関東軍に編入されたことは、戦後にわかった。ソヴィエトの捕虜収容所にいた彼が復員したのは一九四八年の春だった。恩智が上京した半年後に母は泰子の父になる男性と見合結婚した。「この世のなかには人が何と言おうと、美しいもの、けだかいものがあったて、母さんのような時代に生きた者にはそれが生きる上でどんなに尊いかが、しみじみとわかったのです。あなたはこれから、どのような人生を送るかしれませんが、その美しいものと、けだかいものへの憧れだけは失わないでほしいの」と手紙は結ばれていた。

高校を卒業した泰子は、長崎にある短期大学英文科に進学した。友人水谷トシも同じ短大の家政科に進学した。N大学の男子学生と合同で年一回行われる英語劇に参加することになった泰子は、島原出身の純朴な学生西宗弘と親しくなる。トシと島原を日帰りで案内されたとき、二人は、星野恒夫という西の高校時代の友人に紹介された。英語劇の練習を通して、泰子の先輩で才色兼備の向坊陽子は、

N大の秀才田崎と交際するようになった。トシもまた、星野と密かに交際するようになる。星野が神戸に転勤すれば、短大を辞めていくとトシは泰子に打ち明ける。上京してスチュワードス（客室乗務員）になると、陽子は卒業式で泰子に告げた。トシも家出同然で神戸に出走した。二回生になると、泰子は、陽子が東京でプラスチック工場の事務員をしているという話を聞き訝しむ。陽子が交際していた田崎が過激派に入り、警察に二回逮捕されたという話も聞いた。西の消息も不明だった。その年の暮れ、泰子は全日空の客室乗務員採用試験に合格した。偶然都内で再会した元N大の学生から、西が過激派で活動しているという話を泰子は聞く。長崎への帰路、神戸のトシを訪ねた泰子は、汚いアパートでの淋しい暮らしぶりに驚く。信用金庫勤めだが、働かない星野から離れられないのだ。国際線の客室乗務員になった泰子は、パリで偶然、恩智勝之と巡り合う。今でも独身の彼は、インドのニュー・デリーにある国際救癩本部で働いているという。一方、トシは星野の頼みを断れず、勤務先から大金を横領するが、監査で発覚して星野とともに逮捕される。面会に行った泰子に、トシは、自分の生きかたを後悔していない、隣れまいで欲しいと語って泰子を驚かせた。

ある日、羽田空港から南回りでロンドンに向かう定期便が、ハイジャックされる。乗務員として搭乗していた泰子は、犯人グループのなかに西がいることに衝撃を受ける。彼は大学卒業後、田崎や向坊と行動をとりにしていたのだった。ニュー・デリー空港に緊急着陸したあと、交渉の結果、乗員乗客全員が解放され、代わりに日本から移送された犯人グループの仲間と、人質役の日本大使館員、そしてインドの国会議員が乗り込んだ。飛行機の下に隠れていたインド軍兵士が、出口に現れた西を狙撃するとともに、飛行機内に催涙弾を投げ込み、事件は解決する。泰子は事件を聞きつけて現れた恩智と再会し、「美しいものと善いものに絶望しないでください」と告げられる。

## 二 作品中のハイジャック事件の意味するもの

小説中に登場するハイジャック事件にはモデルがある。一九七三年七月に起きたドバイ日航機ハイジャック事件がそれである。日本赤軍とパレスチナ解放人民戦線（PFLP）の合同による、パリ発羽田行便のハイジャック事件で、乗っ取られた日航機は、アラブ首長国連邦のドバイ空港に着陸した。犯人グループは、日本国内に拘留されている日本赤軍二名の釈放を要求したが果たせず、シリアのダマスカス空港で給油をしたあと、リビアのベニア空港に着陸。乗員乗客を解放後、機体を爆破してリビア政府に投降し、その後国外に逃亡した。事件の首謀格であった日本赤軍の丸岡修（一九五〇—二〇一一）は、その後一九八七年に都内で逮捕され、二〇一一年に医療刑務所で死亡したが、事件後の詳細は、本作品を理解する上では不必要なため省略する。

武田友寿は、遠藤文学の先駆的な研究を行った文芸評論家の一人である（1）。彼は、遠藤の「軽小説群」は、「しばしば世人の耳目に鮮明に記憶されている世間を騒がせた事件を使う」と述べ、作品中のハイジャック事件が「日航ハイジャック事件（連合赤軍事件犯人および連続爆弾事件犯人の釈放要求事件）を連想させる事件」であると指摘している（2）。武田の事件理解は必ずしも誤りとはいえないが、日本の国内問題としてのみ事件を捉えており、ハイジャック行為がパレスチナ解放運動と連動している点を見落としている。そればかりではない。武田は「ここに展開される小説世界についても、大学生活や社会生活といった平凡なもので、詐欺、横領、ハイジャック、就職、恋愛などなど、現代風俗の反映であって、この作家の硬小説の主題や材料とはおよそ別種のものである」と述べている（3）。詐欺、横領、就職、恋愛とハイジャックを同列に捉えているのは、武田が中東の国際政治に暗く、ドバイ日航機ハイジャック事件が持つ国際政治上の意味について「現代風俗」としてしか理解できなかつたからと考えるほかない。『砂の城』の主題が、「硬文学」すなわち純文学系の作品と別種であるという見解にも、後段で述べる理由から、同意することはできない。

小嶋洋輔は、遠藤の中間小説（非純文学系作品）が、これまで学術的な研究対象として扱われてこなかつたことを問題視しており、その問題意識を私は支持する者である。彼は「読者との共通のコードとして実際に世間を騒がせた事件を作品中に描き入れることも、遠藤の「中間小説」に見られる特

徴である」と捉えた上で、武田同様、「一九七五年の『砂の城』（「主婦の友」）は、過激派グループの一員である西が国際線をハイジャックする場面が作品のクライマックスを担っている。この背景には、一九七三年の日航ジャンボ機ハイジャック事件が直接にはあると考えられる。着陸した場所が『砂の城』ではインドであり、実際のリビアとは異なるが、犯人グループの編成や、その事件の顛末は類似している」と指摘している（4）。小嶋は「こうした実際の事件を、小説作品の舞台とすることで、もまた、芸能人、著名人の名前を作品に描くのと同じ機能を持つといえよう。読者は他の場所、例えばテレビニュースや週刊誌の記事で手に入れた情報を、遠藤作品のなかに見つけることにより、その虚構としての新情報を手に入れてゆくのである。極言すれば、他の情報と並置される日常の側面としての小説の機能を、遠藤「中間小説」は意図的に目指していたともいえる」と主張しているが、同意できない。現実起きた事件を作品中に取り込んだことは、読者との距離を近づけるための「共通のコード」として、芸能人や著名人の名前を作中に取り入れることと同様の意図によるものとは考えられないからである。「犯人グループの編成や、その事件の顛末は類似している」と小嶋は述べており、それはそのとおりではあるものの、表面的な捉え方といわざるをえない。作者は現実の事件からパレスチナ解放運動に関する要素を周到に削ぎ落しているの、そこに意図された遠藤の狙いをこそわれわれは探らねばならないのである。

なお、トシが行う公金横領も、連載開始の前月である一九七五年七月に発覚した足利銀行詐欺横領事件が下敷きになっていると考えられるが、本稿では論点をハイジャック事件に限りたい。

### 三 ハイジャック犯西宗弘の人間像

西宗弘は、島原で文具店を経営する家に生まれた。父親が死に、家業を継いだ兄が学資を出してくれただけで、一家で初めて大学に進学できたという設定である。泰子が進学する短大が、活水女子短期大学（現活水女子大学）を思わせる活水女子短大と表記されているのに対し、西が在籍する大学は、「N大」とイニシャル表記されている。長崎大学を連想させるが、イニシャルにしたのは、西らをハイジャック犯とするための配慮であると考えられる。夏季休業中には、長崎近郊の漁港で漁師に交じってアルバイトをしていた（5）。飾るところがなく、純朴な青年として造型されている。

泰子らを島原に案内する場面で、美しい景観に見とれる泰子らに、西はキシタン弾圧の歴史を話題にし、「明治大正になっても天草の女たちは人買いに買われてこの口之津から船に乗せられ、ニューギニアやジャワに連れていかれたもん」という。

「ほんと？」

「ほんとさ、あんたたちや無邪気すぎるよ。いつの時代も弱か者は虐げられるとたい」

「西さんは」

トシはびつくりしたように、

「左翼？」

「左翼じゃなか。しかしぼくも現代の学生じゃから革命に関心があるなあ」（6）

このような会話のあと、西、泰子、トシの三人は原城跡を訪れる。そこでの会話はこうである。

「島原にはその首塚のあるとぞ。ここで殺された三万の農民の男女は長崎、天草、島原に埋められたばってん」

西はこわごわその空濠を覗きこむトシと泰子とのうしろに立って説明した。

「よう、知つとらすね、西さんは」

「小学校の時も中学の時も、遠足と言えここに連れられていたもん。それに、ぼくの祖先もあるいはここで死んだかもしれんし……」

「ほんと」

「か、どうかは知らん。でも、ぼくの体内には島原の一揆の連中の血が流れとるかもしれんよ。少なくとも彼等が一揆ば起したそげん心情はわかる気がする」(7)

英語劇の練習のあと、泰子と入った書店で、西はゲバラの『メキシコ革命の記録』を購入する。サマセット・モームの小説を探していた泰子が「そげん本ば西さん、好き？」と訊ねると、「わからんけど、心情的に合うような気がする。それで買ったとき」と西は応える。本屋の出がけに顔を合わせた田崎は「お前が本屋をのぞくとは珍しか。気でも狂うたか」と笑いながら言う。西は田崎のように頭脳明晰な青年ではないのである。注目すべきは、西が島原の乱を起こしたキリシタンにつながる血を自らなかに意識し、虐げられた者への心情的な共感を持つ人物として設定されていることである。西は秀才の田崎のように、政治理論への理性的納得からではなく、弱者への心情的共感から「過激派」になるのである。

英語劇の練習の合間に、田崎と西が政治的な議論を始めて、泰子ら短大生を困惑させる場面がある。

「N大の人、いつも左翼的な話ばかりするんですか」

と泰子が途中でとがめるように口をはさむと、

「ごめん」と田崎は笑って「女の子の前でこげん話、禁物だと忘れとった。恋愛論のほうがよか」と言っただけで話をはぐらかせたが彼女には二人が何かをかくしているように思われた。(8)

短大を卒業後、客室乗務員となった泰子が西と再会するのは、ハイジャックされた国際線の機内だった。

何人目かの同じようなハイジャッカーが食事にやってきた。泰子たちの場所からずっと離れた後部座席を監視していたこの男は同じように黒い眼鏡をかけ、口髭をはやしていた。ずんぐりした体に陽にやけた横顔を見せた彼はスチュワーデスたちに、

「迷惑かけます」

と言った。そして泰子に気がつくと、一瞬、びっくりしたように立ちどまった。(9)

この口髭の青年が西だった。眼鏡をとって声をかけた西に泰子は驚く。

「なぜ」

と泰子は小声でたずねた。

「西さんがこげんなことを……」

「やがて、わかるよ、ぼくらが何故、ハイジャックしたか」

「理解できんとよ、わたしには」

「泰子さんは何もわかつたらんとよ。わかつたらんから、ぼくらの行為も暴力沙汰に見えるとやろ」

「でも、ピストルを持ったり、飛行機を乗ったり……」

「ぼくらは今、戦いよつと、戦いよつとば知ってほしかね。ぼくらのやつとることが暴力なら、もっと大きな暴力がベトナムなどで行われたこと、泰子さん、考えたことなかるうが」(10)

「その横顔をみつめながら泰子は西が変わったと思った。それはあの島原の海べりを一緒にドライブした時の西宗弘とはすっかり違っていた。茂木の港で漁師たちにまじって荷あげをしていた、真白の歯をみせて笑う昔の彼ではなかった。言葉は温和しかったが眼には言いようのない鋭い光があった」

「悲しか」

と泰子はつぶやいた。

「なにが」

「だって……あの長崎で一緒だった皆が今は一人、一人、別の方向に歩いとるでしょ。トシはあげん風になるし……そして西さんは……わたし、西さんのこと、わからんようになった」

「みんな、自分の情熱で生きるとね、仕方ななか」

と西はしみじみと呟いた。

「そげんピストルば持って。昔の西さん、そうでなかつた。一緒に英語劇やった時は……」

「そうやったな、君に発音ば教えてもろうたとね。今でもあの台詞ば憶えとるよ。言うてみようか」(12)

この場面は、『砂の城』のなかで、おそらく最もパセティックな箇所である。具体的な台詞はここで再現されていないが、英語劇「ゴールデン・カントリー」のなかの、長崎奉行所で奉行が役人たちにキシタンをどのように見つけ出すかを説明する場面の台詞こそが、泰子が西に発音を教えた台詞だったことに、注意深い読者は気づくであろう。遠藤には戯曲「黄金の国」(一九六六年)がある。島原の乱から二年後のキシタン迫害を描いた作品で、『沈黙』の姉妹編といってよいものがある。

『砂の城』に登場する英語劇「ゴールデン・カントリー」において、泰子は「切支丹の侍を父親に持つ雪という娘」の役になり、西は「ノロ作」という「少し頭の鈍い、人の良い百姓」の役になったと、さりげなく作者は記している。戯曲「黄金の国」の雪の父親は、信仰を捨てていない隠れキシタンだが、かつて踏絵を踏んで「転んだ」人物として、長崎奉行所キシタン取調の役人になっている。宣教師フェレイラを匿っているが、捕縛され穴吊にされて絶命する。雪もまた、奉行所の若い役人と恋仲となり悲劇的な最期を迎える。「のろ作(ノロ作)ではない」は、キシタンたちのなかでも軽く見られるような単純素朴な青年である。このように見ると、作者遠藤が、『砂の城』の西に、江戸時代のキシタンと同様、時の権力から執拗に迫害される側の人間として描いていることが明らかになる。

「もう、変えられんと」

「なにを」

「もう一度、人生ば、やりなおすこと」

「ぼくは信念でこればやつとるばい。やりなおす必要はなか」(13)

「ぼくらは、そんな時代に生れたんだ」という西の悲痛な言葉を反芻する泰子は、「時代が私たちを別々の人生に歩かせたのか。ちやうど戦争が母と恩智勝之とを別れ別れにさせたように」と思う。つまり、西の登場によって、泰子の母親が生きた「戦争の時代」と現在の「平和な時代」という図式がここでは崩れ、泰子が生きる現在の「平和な時代」がそのまま「戦争の時代」であるという世界認識へと視野が塗り替えられるのである。

西はニュー・デリー空港で迷彩服を着た現地軍兵士により射殺され、解放された泰子はその瞬間を遠くから目撃することとなる。

「有色の帝国」(小熊英二)が大東亜共栄圏を掲げてアジア侵略を行っていた時代、恩智は国策に組み込まれ、国家から軍服を着せられ、銃を持たされて中国大陸に出征した。そして日本がアメリカ合衆国の「下請けの帝国」(酒井直樹)となった冷戦期、小説中にはあからさまには書かれていないものの、イスラエルの占領に抵抗するパレスチナ解放闘争に共鳴して、西は「過激派」の一兵士としてハイジャック事件を起こす。恩智は戦時下の体制下で反逆することができずに大日本帝国陸軍兵士となったが、西は国際的な非合法活動に自ら飛び込んでいったのである。

#### 四 『主婦の友』という媒体

『砂の城』が連載された『主婦の友』は、石川武美（一八八七—一九六一）により一九一七年に『主婦之友』として創刊された婦人向け雑誌である。アジア太平洋戦争中も、休刊される雑誌が多いなかで発行を継続し、当時の新聞雑誌と同様に、米英を敵視して戦争を鼓吹する編集を行った。敗戦後に再出発したが、二〇〇八年に終刊した。戦時中に「新編・路傍の石」を連載していた山本有三は、内務省による圧力に抵抗して連載を中止している。戦後は三島由紀夫、瀬戸内晴美（瀬戸内寂聴）らがこの雑誌に小説を執筆している。羽仁もと子（一八七三—一九五七）がキリスト教思想に基づき創刊した『婦人之友』（一八九八年『家庭之友』として創刊、一九〇八年改題）よりは歴史が浅いとはいえ、大正以来の伝統を持ち、生活実用を編集方針として大衆性を持たせることにより、既存雑誌との差別化を図っていた。

婦人雑誌は、文学好きを対象とする文芸雑誌とも、不特定多数の読者を想定する日刊新聞とも異なる媒体である。若い女性を主人公とするのは暗黙の了解といってよい。地方在住で小売業の家庭に育った女性が、地元の短期大学を卒業してナショナル・フラッグの客室乗務員として活躍するというストーリーは、当時の若い女性の憧れを誘う成功物語であった。四年制大学に進学する女性が少なくなっている現状とは異なり、短期大学は、高等学校を卒業した一割強の女性が進学する高等教育機関として機能していた（14）。短期大学を卒業して大企業に就職し、数年間働いて結婚を機に「寿退社」し、専業主婦となって出産するという生き方が、女性のひとつの人生行路としてあったのである。短期大学には英文科、国文科、家政科が置かれることが多かった。女性が四年制大学に進学して文学部以外の専攻に進んだり、大学院に進学することは、一般的とはいえなかったのである。ちなみに、男女を合わせた全国の高等学校進学率が九割を超えて進義務教育化されたのが一九七四年のことで、中学校を卒業した東京への集団就職列車が終了したのが一九七五年のことであった。

このような時代背景のなかで、『主婦の友』という雑誌を舞台にして、遠藤は、単なるエンターテインメントを書くこととしたわけではなかった。一見、「いわゆる軽小説群に属する作品で青春小説とっていいもの」（武田友寿）の体裁を持ちながら、世間的な倫理観の枠組に収まらない生き方の肯定という主題を盛り込もうとしたのである。いわゆる純文学雑誌に掲載された作品ではないという先入観から、作品自体の価値を最初から割り引いて判断することは正しい研究態度ではない（16）。

遠藤は、一九六五年、『小学館の女性月刊雑誌『マドモアゼル』に長編小説「協奏曲」を連載している。雑誌名が示すように、幻想のフランスに彩られたこの雑誌の若い女性読者のために、遠藤は主人公を若い女性雑誌編集者とした。彼女が恋愛感情を抱く既婚男性作家を追って、パリに行くという通俗的な物語であった。彼女の愛を退ける中年作家は、自分のかつての恋人で、現在はフランス大使夫人となっている人妻に会うためにパリに行くのである。この作品では、読者の憧れを誘うストーリーという点では『砂の城』と同様とはいえ、ヨーロッパは観光絵葉書と異なるところのない、ただの書き割りに過ぎない。政治的含意のないエンターテインメントである。「協奏曲」から『砂の城』までの一〇年間に、遠藤は『沈黙』を書き、『死海のほとり』を書いている。発表媒体の違いと作者の執筆姿勢の変化を両者の違いに認めることができよう。

#### 五 恩智の「分身」と「分身」の西

遠藤は、泰子に、読者が憧れを抱く生き方をさせただけではいい。彼女を、恩智、トシ、西らの生き方に直面させることで、自らの生き方に対する疑問を抱かせている。国際救済活動に人生を捧げるという、世間一般では「崇高」と看做されるであろう恩智の生き方も、彼自身に「私たちのやっていることが、果して美しいことか、善いことかは、必ずしもわかりません」（16）と作者は語らせているし、泰子にも「恩智勝之の生き方もひよっとすると、よごれたものからの逃避ではないのかという

気がした」(17)と言わせているのである。ゲバラの書物を西が購入する場面があるが、医師免許を持つていたゲバラが、ペルーでハンセン病施設に自らを捧げようと一時期考えたことを思えば、恩智が西のような生き方を選択したとしても不思議ではない。つまり、西は恩智の「分身」なのである。作者は、おそらくゲバラのこの挿話を知っていて、彼の名を作品中に登場させていると思われる。

西の射殺と他の犯人の捕獲で事件が一段落したあと、ホテルに、恩智が訪ねてくる。彼は、ニュー・デリー市街を、自らが運転する自動車で泰子とともに回る。勤務する国際救癩本部が見える場所で停車した彼は、ピアニスト、オートレーサー、大学教授といったさまざまな職業を持つ人々が、美しいこと善いことを考えた結果、その答えを求めに世界各国からこの機関にやってくるのだと語る。泰子の母親と二人で訪れた戦時中の溪流の小さな美しい場所が、現在の自分にはこの建物なのだ述べ、「美しいものと善いものに絶望しないでください」と続けた彼は、「人間の歴史は……ある目的に向かって進んでいる筈ですよ。外目にはそれが永遠に足らぬように見えるように見えますが、ゆっくりと、大きな流れのなかで一つの目標に向かって進んでいる筈ですよ」と泰子にいう。「目標？ それは何でしょうか」という泰子に「人間がつくりだす善きことと、美しきことの結集です」と応える。恩智には、自己批判能力があるので、近代西洋医療の帝国主義的側面に気づいており、野蛮な世界から病気を根絶するという西洋医学の自己陶酔的な英雄主義を自明視していない。それゆえ、自分たちの活動が果たして本当に美しいこと、善いことなのかはわからないと述べつつも、病気という「たしか悪」と戦っているという事実が自分にやりがいを確認させているのだと述べる。

しかし、このような恩智の論理は、そのまま西の論理に置き換えることができることに注意を払う必要がある。「我々の要求は現在、日本の反動的政府、及び警察によって不当にも監禁されている同志たちの釈放にあります」(18)「これ「ハイジャック」も、我々の革命運動のためには仕方なかったことです」(19)という言葉が、作品中の犯人グループの唯一手がかりとなる台詞である。作者はおそらく意識的に彼らの思想的背景を記述していないが、「監禁されている同志」は、下敷きになった事件を参照すれば、パレスチナで創設された日本赤軍のメンバーであり、「革命運動」とは、パレスチナ解放闘争と連動した世界革命のことであることがわかる。彼らもまた、美しいこと、善いことを求めて世界から集まってきた人々であり、「人間の歴史は……ある目的に向かって進んでいる筈」と考えていたのである。遠藤は、恩智に自らの生きかたを語らせることによって、西の生きかたについても語っていると考えてよい。換言すれば、作者は恩智の生きかたを称賛して、西の生きかたを否定しているわけではない。ハンセン病患者もパレスチナ人も等しく「弱か者」であり、恩智も西も彼ら「弱か者」のために自分の人生を捧げている。その意味で、両者は完全に相対化されている。そして、ここは注意を要するところであるが、西の生きかたを承認することは、西のハイジャック行為を承認することと必ずしも同義ではない。西の生き方を「正しい」と見なしているわけではないからである。

恩智は、世代的には戦中派であり、『どっこいシヨ』の主人公と年代である。恩智は戦争を潜り抜けたあと、病気という「悪」と戦うことを決意した人物であるが、『どっこいシヨ』の主人公は、ささやかな日常生活を後生大事に思う平凡な中年男であった。彼にとって、新聞の朝刊一面で報道されるベトナム戦争の状況は、いわば他岸の火事に過ぎなかった。彼にとつては、過去の「戦争の時代」の対極にある、現在の「平和な時代」だけが大事だった。彼は、息子が防衛大学校に進学して幹部自衛官をめざすことに動揺するが、最終的には彼の生きかたを承認する。作者もまた彼の生きかたを肯定している。それと同様に、『砂の城』では、主人公泰子すなわち作者は、西の生きかたも肯定している。「今は彼を憎んだり、恨んだりする気持は消えていた。西には西なりの懸命な生き方があったのである。水谷トシには水谷トシの必死な生き方があったように」(20)と書かれている所以である。泰子は、「そういう友人とは早く手をお切りになったほうがいいですね」という見合い相手山下の言葉に驚き、彼と結婚して米国で勤務する道を捨て去る。トシの存在によって、自らの生き方の修正を行うのである。素直な性格だが政治的な関心が薄く、英文科を出て全日空に就職し、日本の管理社会体制に完全に組み込まれて生きる泰子が、かつての友人たちの、到底受け入れられないような生き方

に直面することを通して、自分の生き方を考えはじめるのである。

公金横領者トシと、ハイジャック犯西を、作者は「懸命な生き方」「必死な生き方」をした人物として、敢えて同列に扱っているように見える。だが、西の行為の動機が、恩智と同じく「弱か者」への人道的共感に基づいているのに対して、トシのそれが個人的な愛欲と、泰子への女性としての対抗意識に基づいている点は見過ぎしてはならない。トシの破滅的な生き方が、本当に美しいもの、善いものを求める生き方であったのか、それとも単なる個人的な自己満足なのか、作者は読者に問いを投げかけている。トシと西を作者が同一視していると決めつけることは必ずしもできないのである。

『砂の城』がいわゆる中間小説であり、武田友寿がいうように、遠藤の純文学系の作品とは「おおよそ別種のもの」とはいえないことはもはや明らかである。泰子は恩智、トシ、西らの生き方を相対化する役割を作中で持たされてはいるが、泰子自身もまた、彼らの生き方を参照することで、自らの生き方を相対化するからである。そして泰子は、読者一人ひとりでもある。武田は「賢い女・泰子がトシの愚かさを肯定しうるまでに賢くなっている」ことに注意を促している。(21) そういう見方も可能ではある。しかし、武田が泰子とトシを「賢い女」対「愚かな女」という小さな構図に閉じ込めてしまっているのは遺憾である。これでは国際救療施設を自らの生き方に定めた恩智や、国際的テロ組織の一員として命を懸けている西の、性差を越えた、人間としての気高い生き方という根本的な主題が消えてなくなってしまうからである。

この小説は、人間の世界では、どのような生き方が美しいものを求める生き方なのか決定することができないと語っている。作者はおそらく、それを知り得るのは「神」だけであると考えているのである。

## おわりに

国際的な著者であることを自覚していたことと、戦時中の言論弾圧の恐ろしさを知っていたことから、遠藤は、政治的テクストとして自らの小説が読まれる可能性を回避するための韜晦が巧みだった。『死海のほとり』でも、イスラエルに抑圧されるパレスチナ人については、見過ごしかねないほど、さりげなく、暗示的な描き方を用いていることは、すでに論じたとおりである。

『砂の城』も同様である。西のハイジャック事件は、下敷きとなった事件から、パレスチナ解放闘争の側面を意図的に捨象しており、一見ただけでは、イスラエル占領によって虐げられているパレスチナ人という国際政治上の問題はわからない。けれども、クリシタン弾圧と島原の乱、革命家ゲバラ、そして国際線ハイジャックと、西の思想形成の軌跡を飛び石のように描くことで、暗示的ながら、パレスチナ人が武装闘争へと踏み込まざるを得なかった必然性を描こうとしている。そして、西が行き着いたハイジャック事件は、そもそも、パレスチナ問題を世界に知らしめる目的で、PFLPに採用された戦術なのであった(22)。「美しいこと、善いこと」を恩智＝作者がかけがえのないものとして強調するのは、現実世界が、醜いこと、悪いことで満ちあふれているからにはかならない。それを象徴的に示す出来事が、ヴェトナム戦争であり、パレスチナ問題なのである。

優れた文学作品が犯罪者を描く例は枚挙に暇がない。その際、読者は、登場人物がそのように生きるしかなかった、それしかなかったことを納得し、心を動かされる。『砂の城』において、西の生き方に読者が宿命的なものを感じるほどに丁寧描かれているかといえば、確かにそうとはいえない。だがそれは、作者のせいではなく、エンターテインメントという形式が持つ限界であったと考えてよい。その限界ぎりぎりまで遠藤は描き込んでいる。

『どっこいしょ』と「一、二、三」は、かつての「戦争の時代」と現在の「平和の時代」を時間的に対比させて捉えた作品であった。これに対して、『砂の城』は、母が生きた「戦争の時代」と泰子が生きている「平和な時代」という構図を、母親からの手紙を通して示した上で、これを否定する。すなわち、西のハイジャック事件という展開を通して、現在もまた「戦争の時代」であるとの新たな認識を提示しているのである。「戦争の時代」と「平和の時代」を彼岸と此岸のように捉える認識は



冷戦期の日本国内だけに通用する論理であり、平和な日常と戦争に代表される暴力とは、地球上にいつでも並存し、両者は相互依存的といってもいい関係にあると、この作品は語っているのである。この認識の変化は、ナチスのユダヤ人迫害と、イスラエル国内のパレスチナ人が置かれた状況を複眼的に捉えた『死海のほとり』を執筆することで獲得されたものと考えるのが自然であろう。

『砂の城』は、読者に大きな問いを投げかける小説である。美しい生きかた、善い生きかたとはどのようなものなのか。国家の暴力に抵抗しようとするとき、抵抗勢力が暴力を行使することは肯定されるのか。美しい生きかた、善い生きかたというものを、読者に上から教え諭すのではなく、読者に考えさせようとする小説であり、そのために、世間的な常識を敢えて揺さぶろうとした作品なのである。

- (1) 武田には『遠藤周作の世界』(中央出版社、一九六九年)、『遠藤周作の文学』(聖文舎、一九七五年)がある。
- (2) 武田友寿「解説」遠藤周作『砂の城』新潮文庫、一九七九年、三一四頁。
- (3) 同右、三一五頁。ハイジャック事件を現代風俗として捉えるという点からいえば、辻邦生『雲の宴』の男性副主人公郡司の弟が日本赤軍メンバーであり、一九七四年に発生したオランダにおけるフランス大使館占拠事件以後行方不明という設定こそ、物語の主題にとって本質的な重要性を持たないという意味で、当てはまっている。
- (4) 小嶋洋輔「遠藤周作「中間小説」論——書き分けを行う作家」『千葉大学人文研究』三六号、二〇〇七年、三六頁。
- (5) 漁師として働く西に、使徒の面影を重ね合わせるのとは不可能とはいえない。アンデレ、ヤコブ、ヨハネ、そしてシオン・ペトロという漁師出身の弟子たちのうち、特に直情血行のペトロは、西の人物像と重なるのではないだろうか。
- (6) 遠藤周作『砂の城』八一頁。
- (7) 同右、八三頁。なお、原城の発掘調査が初めて本格的に実施されたのは、この作品が書かれてから一五年後の一九九〇年である。
- (8) 同右、八六―八七頁。
- (9) 同右、二七一頁。
- (10) 同右、二七三―二七四頁。
- (11) 同右、二七五頁。
- (12) 同右、二八四―二八五頁。
- (13) 同右、二八五頁。
- (14) 二〇一五年の高等教育進学率七三パーセント中に占める短期大学進学率は八パーセントであるが、一九七五年当時の高等教育進学率は約二五パーセントであり、そのうち短期大学進学者は約半分であった。文部科学省「大学・短期大学等の入学者数及び進学率の推移」参照。  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyoy4/gijiroku/03090201/003/002.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyoy4/gijiroku/03090201/003/002.pdf) (二〇一六年一月二日確認)。
- (15) 一九五三年から翌年にかけて、三島由紀夫が「恋の都」を同誌に連載している。この作品も、東京を舞台にした娯楽小説の体裁をとりつつ、アメリカ合衆国の植民地となった日本というポストコロナアル的状况を描き出した問題作である。武内佳代「三島由紀夫『潮騒』と『恋の都』——(純愛)小説に映じる反(アンチ)ヘテロセクシズムと戦後日本」『ジェンダー研究——お茶の水女子大学ジェンダー研究センター年報』一二号、二〇〇九年三月)参照。
- (16) 遠藤周作『砂の城』三〇七頁。ここには作者遠藤の、近代西洋医療に対する批評的姿勢がうかがわれる。辻邦生は、『光の大地』の主人公あぐりの父親を、中央アフリカで活躍する医師として設定した。そこには「野蛮」な原住民を病氣から救済する「救世主」としての「文明」化された日本人が描かれているのである。ここでは権力装置としての帝国医療は当然のように免罪されている。帝国医療に関しては、見市雅俊他編『疾病・開発・帝国医療——アジアにおける病氣と医療の歴史学』(東京大学出版会、二〇〇一年)第一章、及び、奥野克巳『帝国医療と人類学』(春風社、二〇〇六年)二九頁参照。
- (17) 同右、二五七頁。

- (18) 同右、二七六頁。  
(19) 同右、二九四頁。  
(20) 同右、三一一―三一二頁。  
(21) 同右、三二〇頁。  
(22) 『パレスチナ解放人民戦線（PFLP）の反イスラエル武装闘争と日本赤軍の連帯については、白杵陽『世界史の中のパレスチナ問題』（講談社現代新書、二〇一三年、四〇七―四〇九頁）参照。』

## 第三節 『侍』——占領者への同化と抵抗

### はじめに——福音宣教と近代植民地主義

『侍』は、一九八〇年に新潮社「純文学書き下ろし特別作品」シリーズの一冊として刊行された。遠藤は、同シリーズで『沈黙』（一九六六年）、『死海のほとり』（一九七三年）を刊行し、『侍』刊行後も、『スキヤンダル』（一九八六年）を書いている。一九六一年から二〇〇〇年まで続いたこのシリーズは、有力作家の力作がラインナップされることで有名である。遠藤がこのシリーズで書いた作品は、どれも彼の代表作といつてよい。韓国語にしか翻訳されていない『死海のほとり』以外は、全て英語をはじめとする西洋諸国語に翻訳されている。

この年の野間文芸賞を受賞した『侍』は、英語、フランス語、ドイツ語、ロシア語、フィンランド語に翻訳された。繙言は不要と思われるが、物語の粗筋を略述すれば以下のとおりである。支倉常長をモデルとする『侍』すなわち長谷倉六右衛門ら一行が、伊達藩の使者として、キリスト教宣教師とともにメキシコ、スペインを経て、ローマに渡り、教皇とも謁見する。しかし、帰国すると江戸幕府の切支丹禁制は全国に及び、伊達藩の政策も方向転換しており、長谷倉は切腹を命じられる。命じられた「お役目」を果たすために、心ならずも切支丹となったことを、改めて咎められたからである。宣教師ベラスコもまた、マニラから日本に再入国して捉えられ、火刑に処せられる。『侍』が刑場へ曳かれていく際に、やはり切支丹である従者の与蔵が「ここからは……あの方がお供なされます」と言う場面は、あまりにも有名である。

先行研究は、主人公長谷倉六右衛門、宣教師ベラスコ、日本人元修道士という三人の登場人物に照明を投げかけ、それぞれの人間像や信仰が持つ意味を論じている。これは文学研究の王道といつてよいが、われわれはポストコロニアリズムの視点から、主に登場人物たちが置かれた作品の背景をなしているスペインの植民地主義とキリスト教布教に着目することとしよう。それこそは、一九五〇年に遠藤がフランスに渡ったときからこだわりをもち続けた主題——日本人にとつてキリスト教とは何なのか、という主題の蔭に隠された、もうひとつの主題にほかならないからである。そして、その考察のあとに、本研究で扱ってきた諸作品との内容上での照応について語ることにしたい。

### 一 同化するインディオ

中南米におけるヨーロッパの植民地支配の歴史については、周知のことからゆえ詳細は割愛するが、最低限の確認をしておく。コロンプスの「新大陸発見」以後、スペイン、ポルトガル両大国による三〇〇年に及ぶ植民地支配は、一五世紀にローマ教皇の承認の下で両国間で結ばれたトルデシリヤ条約の結果、新世界の分割が明確になったためであった。中南米においては、ブラジルをポストガルが獲得した以外は、スペインが圧倒的な領域を支配することになった。圧倒的な軍事力により、王国を滅ぼし、先住民を殺害して現地を「文明」化していくことは、キリスト教に改宗させることとともに正義であり、使命であると当時考えられていたことは、改めていうまでもない。そしてこれは、スペイン、ポルトガルのみならず、英国、フランス、オランダといったヨーロッパ諸国に共通する思想であり、植民地支配の向かう先は、中南米のみならず、アフリカ、中東、アジア諸地域であったことも知られるとおりである。

『侍』に登場する宣教師ベラスコは、当然のことながら、布教の使命感に燃えている。彼は日本人

をキリスト教に改宗させること、日本をキリスト教の国にすることに自分の命を捧げるために生まれてきたと信じている。なお、彼は『沈黙』の主人公フィレイラとは全く違う人物像として造型されている。ベラスコは信者を救うために棄教するような人間ではない。彼は次のような内的独話をする。

布教のためには眼をつぶらねばならぬこともある。このノベスパニヤも征服者コルテスが一一九九年に上陸し、わずかの兵士で無数のインディオを捕え殺した。その行為が神の教えから言って正しい行為とは誰も思わぬ。しかしその犠牲の上で、現在、多くのインディオたちが我らの主の教えに触れ、その野蛮な風習から救われ、道を歩みはじめた事実も忘れてはならぬ。インディオたちを悪魔の風習のままに放っておくか、多少の害には眼をつぶっても神の教えを彼らに伝えるべきか、軽々しくは誰も判定できない。(1)

メキシコを訪れた一行に、ベラスコは、「神の御心にかなう村」を見せる。キリスト教に改宗した「原住民のために作られた村で、スペイン人司祭が訪れて、スペイン語、牛馬を飼う方法、機織りの方法などを教育するという。村人たちは辮髪をしている。ベラスコは村長の老人を連れてくる。彼は緊張して体を硬くしている。

「この村ではすべて信徒であろうか」

「はい、パードレ」

「お前たちは、お前たちの祖先の間違った邪宗を棄て、まことの神の教えを訊いたことは俵せであらうか」

「はい、パードレ」

「お前たちは、ここに来るパードレたちから何を習ったのか」

「はい、パードレ。読むことと書くことを。エスパニヤの言葉で話すことを」村長は眼を伏せたまま、暗唱した言葉 を呟くように答えた。「それから、種まき、畠の耕し方、皮のなめし方を」

「そのことをお前たち全部は悦んでいるだろうか」

「はい、パードレ」(2)

このようなやりとりを日本人一行の前で行ったあと、ベラスコは「このような神の村をノベスパニヤにあまた作りました。切支丹になったインディオたちは皆、俵せでありましょう」というのである。ここで作者は、キリスト教の周到な宣教が、インディオたちの「野生の思考」(レヴィー・ストロース)を圧殺しつつある生々しい現場に読者を立ち会わせているのである。

また、使者一行に随行した商人たち三十八人が、商取引を有利に運ぶために受洗した際に、修道院長は「このノベスパニヤで多くのインディオたちが今、エスパイアの保護のもとにその野蛮な風習と邪悪な宗教とを棄てて、神の道を歩んでいる。同じように、この三十八人の日本人がその邪宗から正しい手に迎えられた。聖堂を埋めた人々と共にあの日本が一日も早く神の国になることを祈りたい」と語った。

日本人たちはどうかといえ、キリスト教の押しつけは日本人には迷惑であり、なぜそつとしておいてくれないのかというのが率直な気持ちである。使節の一員である松木忠作は、四人の使節のなかで最も政治的な人間であり、藩上層部に対してもイローニッシュな視線を持つ人物である。彼は一人メキシコから商人たちと帰国することを選択し、別れの宴の後で、ベラスコにそれを直接問い詰めたこともある(第五章)。「パードレはなぜ吾らの領内を騒がせたいのだ」。「我らは……いや、我らだけではない。日本は今日まで静かに生きてきたのに、それをパードレたちはなぜ乱しに来られた」。

「パードレたちのまことの至福とは日本には烈しすぎる。強き薬はある者の体には毒と変る。パードレの説く至福は日本によりその毒薬なのだ。ノベスパイアに参つてようわかった。このノベスパニヤもエスパニヤの船が訪れねば、静かに生きてであろうに。パードレたちがこの国を乱された」。「あ

の小さな我らの島には迷惑なのだ」。

## 二 抵抗するインディオ

しかし、スペイン人支配層に対する抵抗者もこの小説には描かれている。日本人元修道士は、「あれだけ虐げられれば……温和しいインディオも忪えきれなくなりましょう」と同情するが、道中でインディオたちの叛乱に巻き込まれる災厄を不安視する異見に対して、田中太郎右衛門は「我らは女、子供ではない。たかが百姓の一揆ではないか」。インディオたちは日本の者に恨みのある筈はない。我らに関わりのない一揆だ」と距離を持った態度を保っている。

結局、彼らは待ち伏せしていた辯髪インディオ、ワシユテカ族に襲撃されることになり、田中は右足を骨折し、重傷を負った従者を一人失うことになる。

キリスト教に改宗し、スペイン語を習い、新しく与えられた村に居住するインディオが登場する場面を先に紹介したが、同化先住民の代表たる村長が、ロボティックな人物として造型されていたことと対照的に、網に入れた石を岩山から投げることですペイン人を襲撃するワシユテカ族は、動的であることよって実に対照的である。ワシユテカ族の叛乱に呼応する形で蜂起した農園の小作人を、農園主は情け容赦なく銃で撃つ。スペイン人の侵略は、物語の現在においても、過去のできごとではなく、現在進行形なのである。

「お役目」しか頭のない使節一行は、インディオが置かれた状況に対する同情もなければ関心もない。ただ、読者はそうではない。ヨーロッパ近代植民地主義の実態が、ここではメキシコを舞台として再現されていることに目を見張ることになるのである。ここでは銃を持つ「文明」人が投石で対抗する「野蛮」人を、武力で制圧し、被支配層となるべく再教育する。彼らを文明化し、神の福音を伝えることこそが白人の使命だからという理由と経済的搾取は表裏の関係にあった。

ワシユテカ族の抵抗は、「投石」という素朴な手段であることよって、占領者への抵抗の、いわば「原型」となっていることは見過ごすことができない。一九八七年に発生したパレスチナ人のイスラエル軍への抵抗（第一次インティファダ）が、「石の戦い」と呼ばれたごとく、女性や子供を含む民衆の投石による抵抗であったことをわれわれは知っているからである。

## 三 大航海時代の「武士」

日本人使節たちは、武力による領土の獲得については、むしろ当然のこととしてこれを受け止めている。「いくさ」の時代はすでに去っている。主人公の長谷倉も、中年の現在に至るまで、モデルとなった支倉常長とは異なり戦闘経験はないという設定である。とはいえ、周囲には合戦の経験者もあり、田畑を使用者とともに耕すような生活をしてはいても、『侍』という戦闘集団の一員であることに変わりはない。それは日本国内での戦いの正統性を承認することに繋がるから、航海術を持ち武力を持つ異国が侵略することもまた、それ自体を否定する理由とはならないのである。日本人元修道士から、スペイン人たちがインディオを殺戮し、土地を奪われた歴史を聴かされた長谷倉は、「だが、戦とはそういうものだ」。「いずれの国にても、戦に敗れた時は、そうであるう」と語り、それが何も特別な事柄ではないとの認識を示す。

日本を軍事的に侵略してしまえば話が早いという関係者に対して、ベラスコが異見を唱えるのも、日本が武士という強力な戦闘集団を擁しているからであった。

「なぜその島国をフィリピンの総督は占領しないのです。そうすれば、パードレの布教も楽になる。我々もそこに新しい農園を作ることができる」

「日本は小さいが、戦にかけてはどこの国にも引けはとらぬ。ここのインディオを制圧したようにはいかぬのです」(3)

使節四人のなかでも、田中太郎左右衛門は合戦の経験者であるばかりか、武士としての誇りを持ち、「南蛮人」に侮られないように、常に気を引き締めている。その彼が「お役目」のためにキリスト教の洗礼を受けることになるが、彼は全てが徒労となったことを悟ったときに、長谷倉が予期したとおりに、異国の地で切腹して果てるのである。ベラスコが近代ヨーロッパの植民地主義と一体化したカトリック教会のメンタリティを体現した者として造型されているように、田中太郎左右衛門は、理想化された武士階級を体現する人物として描かれている。

ところで、武士は「政（まつりごと）」すなわち政治には関与しない。使節四人は政策決定集団の意志決定の下で行動するだけである。大航海時代という大きなコンテクストがあり、徳川幕府の国内統治政策と対外政治戦略があり、東北の一藩の下級武士という主人公は、藩の政策のために「召し出し」を受けた結果、歴史の荒波に翻弄されることになるわけである。

遠藤の数多い小説のなかで、政治について、この作品ほど徹底してその本質を描いたものはない。政治に関するいかなる幻想も、ここでは退けられている。そこにはもちろん、小説構成上の狙いがある。地上の王国は、権謀術数が渦巻く政治によって支えられており、永遠のものではあり得ない。主人公が政治に翻弄され、すべてが徒労となったばかりか、切腹まで命じられる。そこまで主人公を押しやることで、彼が天上の王たるキリストと出会うことの必然性が読者に納得されるからである。インディオたちと暮らす日本人元修道士が、マニラの神学校、メキシコの修道院に馴染めず、「すべてに幻滅した」人物であったことが、伏線となっている。彼は「パードレさまの説く切支丹は信じておりませぬ」というが、それでも自分は切支丹であると信じている。教会もまた、否、教会こそが「政（まつりごと）」そのものなのである。

#### 四 ヨーロッパ人の「體臭」

この作品のなかには、使節たちの間でベラスコの体臭に関する次のような会話がある。

「南蛮人のあの臭いをどう考える」

「臭い、でございますか」

「俺はこの船に乗ってからあの強い臭いがたまらもう厭になる。たとえばベラスコがこの部屋にくるたびに時折、強い臭いがただようてくる。南蛮人の臭いだ」（4）

松木忠作が西に問いかけている場面である。彼は続けていう、「ベラスコの臭いは南蛮人の烈しさよ」「あのような体の臭いをだす男ならばこそ、遠い日本にまで来たのであろう。ベラスコだけではないぞ。南蛮人が大船を造り、世界の国を渡り歩いたのも、その烈しさからであろう。西、南蛮人の烈しさに気づかず、あの者たちの造り出したものを盗んだとて猿真似にすぎぬ。しかもその烈しさは我らにとって毒になることも忘れるな」と。

遠藤の小説のなかには、西洋人の體臭や口臭に関する記述が少なくない。『沈黙』や『死海のほとり』にも、またすでに扱った一九五〇年代に書かれた短篇「コウリツジ館」から一九七〇年代の作品「カプリンスキー氏」まで、枚挙に暇がないといつてよい。『侍』でも、地の文章のなかで、作者はベラスコの脇の下の臭いをわざわざ描写している。これはヨーロッパ人が数多く登場する辻邦生の小説には決して見られないことである。なぜ遠藤はこのような点にこだわるのであろうか。物質的な肉体を持つ人物を表現する上でのリアリティを高めるといった単純な理由ではないのではないか。

ここでわれわれは、遠藤の小説家としての再出発が「アフリカの體臭」であったことに思い当たるのである。私はこのタイトルについて、これがヨーロッパ人がぬぐい去ることができない植民地主義の暗喩であると論じた。作者は松木忠作の口を借りて、「南蛮人」の烈しさと言い換えている。これ

は飽くことなき自己拡大の意欲、すなわち帝国主義的な際限のない拡大の野望といってもいいだろう。世界中全ての地域にキリスト教の福音が行き渡ったとき、野蛮な邪宗が根絶されたとき、初めてカトリック教会の伝道活動は終結する。世界中の全ての人々がキリスト教徒となることが、伝道の目標である。そしてこの信念は、遠藤がフランス留学から帰国したあとの第二ヴァチカン公会議まで、教会のものだったのである。教会の外に救いなし。そして、體臭や口臭というものが、当事者には気がつかないように、自らの独善性を、ヨーロッパ人は気がつかないのである。

嗅覚は、しばしば異文化に対する違和感と拒絶の原因となる。文化人類学者の青木保は、肌の色も差別の要素となるが、匂いもまた偏見の材料になると指摘し、「私などが小さいころには「外人」（白人のこと）は体臭が強くて近くに行くの大変だ、といった話が日常的に言われました」と述べている（5）。体臭というものは、人間もまたアニマルであることを如実に示す指標であるといってもよい。自らを尊しとし、文明化されていると誇るヨーロッパ人が、動物を連想させるような体臭を発している、自分たちはそれに気がつかない。西洋人の自意識過剰の暗喩としてこれほど相応しいものがあるうか。

## 五 動物のまなざし

私は「男と猿と」『彼の生きかた』を論じた第五章において、遠藤が、幼い頃に友であった飼い犬のまなざしにキリスト・イエスのまなざしを重ね合わせていたことを指摘した。『侍』においても、村に帰ってきた長谷倉が、次のような内的独白を行う箇所がある。

俺は形ばかりで切支丹になったと思うてきた。今でもその気持は変らぬ。だが御政道の何かを知ってから、時折、あの男のことを考える。なぜ、あの国々ではどの家にもあの男のあわれな像が置かれているのか、わかった気さえする。人間の心のどこかには、生涯、共にいてくれるもの、裏切らぬもの、離れぬものを——たとえ、それが病みほうけた犬でもいい——求める願いがあるのだ。あの男は人間にとってそのようなあわれな犬になってくれたのだ。（6）

「そう、あの男は共にいてくれる犬になってくれたのだ」と心のなかで侍は繰り返す。イエスと犬と同一視することは、神—天使—人間—動物というヨーロッパのキリスト教的ヒエラルキーに照らせば、到底許容できない思考であろう。『侍』の英訳者ヴァン・C・ゲツセルは、新潮文庫版『侍』解説において、次のように主張している。

ベラスコは、いったんみずからのプライドを捨て去るや、理性的かつ攻撃的な信仰をもって、栄光あるキリストを礼拝し、仕えることを「作者に」許されているし、彼の殉教は、そのダイナミックな西洋的信仰の純粋な反映として描かれている。これに反し、長谷倉は、ほとんど受け身の形でイエスとのまじわりを受け入れている。彼の信仰は根本的に非理性的であり、完全に内面的なものだ。（7）

長谷倉の信仰が非理性的であるという指摘は正しい。犬とイエスを重ね合わせる思考がどうして理性的といえようか。だがこれは、西洋的な理性に照らしてという註釈が必要である。遠藤には、次章で分析するように、キリスト教と人種主義が結合した西洋的存在位階の序列に対する反撥があったからである。ゲツセルがいうように、ベラスコの信仰について、これを安易に批判することなく、一人の信念を持った人間として描いていることも事実である。遠藤は外国人の内面に入り込んで小説を書くことに戦きを感じている作家だった。ヨーロッパ人が、いかに日本人と異なる価値観で生きているかを知っていたからである。

## おわりに——現代への照射

『死海のほとり』は第三次中東戦争でエルサレムを占領地とした現代のイスラエルを舞台としていたがゆえに、韓国語以外の諸外国語に翻訳されることがなかったのではないかとの仮説を私は提示した。『侍』の国内外での成功は、一七世紀という過去を舞台としたことも一つの理由であった。ヨーロッパの帝国主義、古典的な植民地主義も、ポストコロニアルの時代にあつては遠い過去の出来事だから、現代の国際政治の生々しさとは無縁の世界であつたからである。

しかし、それは実は真実ではない。スペインとともに植民地獲得を競ったポルトガルは、実に第二次世界大戦終結から三〇年を経た一九七五年まで、アフリカ大陸で、アンゴラ、モザンビークなどの植民地を、「海外州」と言い換える欺瞞で手放そうとしなかつたからである。そして本国のセラザール独裁政権を支えていたのが他ならぬカトリック教会だつたからである。カトリック教会は、その後ポーランドの解放を後押しすることとなるが、ヨーロッパのアフリカ植民地支配を二〇世紀後半に至るまで支援していたのである。セラザール政権が倒れたことで、モザンビークは独立を果たしたが、その後も長い内戦状態に陥つた。遠藤が、こうしたヨーロッパ植民地支配の継続を知らなかつたとは考えにくい。また、イスラエルによるパレスチナ支配や、アメリカ合衆国と日本との関係のような、姿を変えた植民地主義が行われていることも、遠藤は認識していたと考えられるからである。

「神の御心にかなう村」で描かれる、ロボティックな原住民たちは、決して一七世紀南米だけの光景ではない。

パリから、ロンドンから、アムステルダムから、われわれヨーロッパ人が「パルテノン！ フラテルニテ（友愛）！」などという言葉を投げかけると、アフリカやアジアのどこかで、唇が自ずと拓いて叫ぶのであつた。「……テノン！ ……ニテ！」と。それは正に黄金時代であつた。（８）

フランツ・ファノン『地に呪われたる者』（一九六一年）の序文でこのように記したサルトルは、「黄金時代は終わりを告げた。唇は勝手に開きはじめた。黄色陣主や黒人の声は、依然としてわれわれのヒューマニズムについて語っていたが、それは他ならぬわれわれの非人間性を告発するためであつた」と続けた。けれども、パリに憧れ、「フラテルニテ！」と叫んでヨーロッパを讚美する知識人は二〇世紀後半の日本にもいたし、ワシントンから遠隔操作される植民地的知識人もいないわけではなかつた。ヨーロッパと、有色人世界に対しては自らを西洋人と見なす、白いアメリカの「黄金時代」は、決して過ぎ去つた過去の物語ではなかつたのである。

日本史を世界史のなかで見なければいけないと、遠藤は常々考えていた。「アフリカの體臭」から出発した遠藤は、『死海のほとり』以後、歴史小説の世界に分け入つていったが、それは多分に戦略的な姿勢だったのであり、大航海時代を描きながら、二〇世紀を照射していたのである。『砂の城』で考察したように、かつての「戦争の時代」と現在の「平和な時代」という、日本国内でしか通用しない時代認識から、両者が現在という時間軸で空間的に並存する国際世界に生きていると遠藤は考えるようになっていた。過去の出来事は、実はそのまま現在の出来事なのである。

(1) SEZ3、二八四頁。

(2) 同右、二八〇—二八一頁。

(3) 同右、三一〇頁。

(4) 同右、二六七頁。

(5) 青木保『多文化世界』岩波新書、二〇〇三年、四五頁。青木保『異文化理解』岩波新書、二〇〇一年、一〇二—一〇三頁も参照。

(6) SEZ3、四一七頁。

(7) ヴァン・C・ゲッセル「解説——『侍』における事実と真実」遠藤周作『侍』新潮文庫、一九八六年、四二—



頁。

(8) ジャン・ポール・サルトル「序」フランツ・ファノン『知に呪われたる者』(フランツ・ファノン著作集3)  
鈴木道彦・浦野衣子訳、みすず書房、一九六九年、五頁。

# 第九章 キリスト教的階層秩序と近代西洋植民地主義 —— 神・天使・人間・動物

## 第一節 遠藤周作と満州犬クロ

### —— 純血・忠誠・勇敢への反発

#### はじめに——近代西洋植民地主義と犬

ポストコロニアリズムは、西洋対非西洋の権力関係に注目する。それは文明対野蛮、普遍対特殊、白人対有色人、人間と非人間という図式でしばしば示される。西洋社会における「人間／非人間」を考えるとき、キリスト教的な存在の位階構造を参照しなければならぬ。本研究では、キリスト教の視点から遠藤文学を考察することを基本的には退けてきたが、本章では、キリスト教の階層秩序と結びついた近代西洋植民地主義という視点から、遠藤文学に登場する動物の表象を考察する。また、遠藤が独自の「同伴者イエス」像を生み出すに至ったかも、新約聖書学との関係から考察する。

キリスト教カトリシズムの世界観において、世界には、全能の「神」と、理性と肉体を持つ「人間」だけが存在するわけではない。理性を持ち肉体を持たない「天使」がおり、理性を持たず肉体を持つ「動物」がいる。これらは「神—天使—人間—動物」という位階構造を形成している。このような構図を前提として改めて遠藤文学を見てみると、これまで見えていなかった世界が見えてくる。遠藤には「人間—動物」を扱った作品が少なくないのである。ただし、それらは、純文学系統の作品群にではなく、ほとんど研究の対象とされてこなかった大衆文学系統の作品群に顕著である。このことに気づくと、大衆文学作品が、新たな光の下に立ち現れてくる。「神—人間」を描いた『沈黙』の作家遠藤は、「人間—動物」を描いた作家でもあったのだ。そして、これまでは、前者ばかりに研究者の心が集中し、後者は死角となっていたのである。

動物の表象分析から遠藤文学の本質に迫るといふ理論的アプローチは、従来の研究では行われてこなかったものである。本節では、「犬」の表象に焦点を当てることで、遠藤の根底にある政治的思想性を浮かび上がらせる。ペットとして商業化された現在と違って、近代日本において、犬は政治性をまとった動物だったのである。帝国日本における犬の表象について分析した先行研究としては、ポストコロニアルの視座によるアロン・スキヤブランドの著作が、質量ともに唯一のものである(1)。遠藤のテキストに現れた犬の表象について、彼の研究を考察の大枠として参照しつつ分析してみたい。

#### 一 植民者の犬と土着の犬

ポストコロニアル・セオリーが理論化した近代西洋の世界認識として、西洋Ⅱ文明、非西洋Ⅱ野蛮という図式があるが、これが人間のみならず、犬にも当てはまることを、スキヤブランドは豊富な史料をもとに説得的に論じている。

彼に抛れば、近代西洋の植民地において、植民者の犬と土着の犬は、文明と野蛮という固定的な図

式で理解されており、近代日本においてもそれは同様であった。主人に服従する落ち着いた西洋犬は、いわば文明化された優秀な犬であり、放し飼いで時に人間に危害を加える日本の土着の犬は、野蛮で劣等であるという認識は、西洋人のみならず、当時の日本人自身によつて認識されていたのである。そのために、在来犬の大規模な殺傷さえ行われたのである。ところが、日露戦争以後、日本が海外に植民するようになる、ナシヨナリズムの高揚とともに、事情が変わる。文明の側にいた西洋犬の位置に、日本犬が入りこむ。土着の犬から植民者の犬に、日本犬は役割を転換してしまふのである。在来犬のなかから「日本犬」が「創造」され、それを称える言説が大量に生産されるようになる。純血、忠誠、勇猛——日本犬が持つとされたその「優秀性」は、日本人の民族的優秀性と照らしあうものとされ、武士道と結び付けて語られるようにさえる。一九世紀に猛威をふるった人間に関する科学的人種主義と同様に、日本においても、犬の科学的品種研究が行われる。昭和期に入ると、天然記念物という国家的榮譽が日本犬に与えられる。

スキヤブランドの記述は現在にまで及んでいるが、本節に必要な論点について、きわめて単純化してスキヤブランドの研究を要約すれば、帝国主義と犬との密接な関係は、およそ以上のようなことになる。

## 二 満州犬とシェパード

遠藤は、三歳から一〇歳まで満州の大連で過ごした。一九二九年から一九三三年までに当たる。遠藤という作家を考える上で、彼が一九三〇年前後の大連で育ったことは、いくら強調してもしすぎることはない。一九三一年九月には満州事変が起こり、翌年の三月には満州国が建国されている。満州事変のあと、日本軍の将兵が自宅に宿泊したことなどは、短篇「人生」(『文藝春秋』一九八一年二月号)に書かれている。また、小学校で満州国の国歌を教わり、沿道で左右の手に日本国と満州国の国旗をそれぞれ持って、自動車で巡行する皇帝溥儀を迎えたことなどは、『落第坊主の履歴書』(日本経済新聞社、一九八九年)に詳しい。

一九三二年頃から父母の仲が悪くなり、愛犬クロに悩みを打ち明けたことも、同書で語られているとおりである。「子供の時から、他の子と同じように私も犬好きだったので、捨て犬を拾ってきては親に隠れて飼ってみたり、満州犬をねだり、飼うことができただけだったり、犬好きの方と同じように色々な思い出がある」(2)と記しているのが、遠藤が最初に飼ったのは捨て犬(おそらくは満州の在来犬)であったことがわかる。次に「満州犬」を親にねだって飼育することになったわけである。この満州犬は黒毛で舌が紫色だった(3)。性格はおとなしく、「善良なもの」だった(4)。遠藤がクロと名付けたこの犬は、雑種だった(5)。放し飼いだっただが、それは当時は普通だったという(6)。小学校への登下校にクロは「のそのそと」ついてきた。しばしば遠藤はクロに話しかけた。すると、クロは慰めてくれた。「ほかに話し相手のない子供にとって、その犬だけが悲しみのうち明け相手、慰めてくれる友だった」(7)。

やがて父母が正式に離婚することになり、遠藤は、母親、兄とともに内地に戻るか、父親、クロとともに大連に残るかを選択を迫られた。当日まで、遠藤はクロに日本に帰ることをうちあけられなかったという。

別れの日、大連の埠頭に行くため私たちが馬車に乗った時、クロはうしろをふりかえる私をどこまでも追いかけてきた。クロにはなぜ私が見捨てて去っていくのか、よくわかっていないようだった。馬車が路をまがっても執拗にうしろを駆けつけ、やがて諦めて立ちどまった。

その時の彼のあわれな、寂しそうな眼を年とっても私はまだ忘れることができぬ。クロも「ただ一人の友」だった私に見捨てられるとは思わなかったのだろう。(8)

後年、遠藤は、クロのまなざしを、自分を見捨てたペトロを眺めるイエスのまなざしと重ね合わせ

るようになるが、こうしたキリスト教のメタファーについては、ここでは触れない。本稿におけるポイントには、植民者（の子供）である遠藤が「友」とした動物が、満州犬（土着の犬）であること、そして雑種（非純血種）だったという事実である。大連時代の少年遠藤におけるクロの重要性は、すでに遠藤研究においては自明視されているが、ここではこれまで言及されることがない、もう一匹の犬について記すことにしよう。

大連の遠藤家にときおり遊びに来る女性がいた。渡辺静というその女性は、遠藤の母親の出身校である東京音楽学校の卒業生のピアノリストで、遠藤の母親と親しくしていたのである。彼女はやがて歌手東海林太郎（一八九八―一九七二）の再婚相手となるが、当時は大連で一人暮らしをしていた。小学校の近くに暮らしていたので、遠藤は下校の途中、彼女の家に立ち寄り、菓子をつるまってもらったりした（9）。その家には、大きなシェパードがいた。大型犬だが、家の中で飼われていた。「シェパードは大きなわりに温和しく、「遠藤の遊び」相手をしてくれた」（10）。遠藤はシェパードと遊びたくてその家に立ち寄るのだった。

「どうして犬を家のなかに飼っておくの」

と私はたずねたことがあった。捨犬をひろってきて、部屋にかくしていたため、母に叱られたからだ。

「おばさん、一人だから」（11）

ここからわかることは、一人暮らしの日本人女性が、警護犬として、西洋犬であるシェパードを飼っていたこと、そして遠藤はその犬と遊んでいたということである。シェパードは、軍用犬として「皇軍」が採用している犬であり、その意味では、植民者の犬であったといつてよい。

日本では、明治末から警察犬の育成が行われ、大正時代には軍用犬の育成が始まった。そして満州事変を機会に軍用犬の活用が本格化していったのである。帝国陸軍が採用した「軍犬」は、ジャーマン・シェパードだった（12）。日本の軍用犬の九割はシェパードだったという（13）。シェパードは、「帝国の犬」として、日本のみならず、世界の軍隊や植民地警察で使用された。とりわけドイツでは二度の世界大戦でシェパードを使用した（14）。日本の植民地警察や憲兵隊がシェパードを現地人にけしかけることがあったとスキヤブランドは記し、一九四〇年に満州に移住した日本人女性による以下の証言を引用している。

わたしの夫が軍から大きな犬を買って参りまして、それはエースという名のジャーマン・シェパードでした。とても良い犬で主人が居ないあいだ私を護ってくれていたのでございます。夫の申しますには犬は満州人しか噛まないよう訓練されています。満州人の服装をさせた者を使って、その者が部屋に入ってくると攻撃してふくらはぎに噛みつくよう犬を躾けるそうです。「……」私たちは使用人の趙さんにけっして中国服を着ないよう言いつけておりました。（15）

このような証言を参照すると、少年時代の遠藤が下校の際に立ち寄った渡辺静宅のシェパードも、「大きな割に温和しく」と遠藤は回想しているが、それは遠藤が日本人だからであって、この犬もまた「満州人しか噛まないよう訓練されて」いたことが推測されるのである。現在でも、かつて植民地支配された諸地域では、朝鮮半島でもアフリカでも、シェパードは植民地政権と同一視されて嫌悪されるトスキヤブランドは述べている（16）。

満州事変の際に伝令として使われた那智と金剛、そしてメリーの三匹のシェパードが、「名誉の戦死」を遂げたことから、軍用犬の亀鑑として石碑が建てられ、一九三三年には文部省国定国語教科書（小学校四年生）に収録されるなど、熱狂を呼んでいたことも忘れてはならない（17）。三匹は行方不明となり、那智とメリーの死体が見つかったが、金剛は見つからなかった。調教師の歩兵太尉がその後戦死すると、一連の事件は伝説化されて、帝国日本に命を捧げる栄光を讃美するプロパガンダと

して利用されたのである。シェパードとは、そのような「帝国にふさわしい」犬なのであった。遠藤は、長編小説『女の一生 二部・サチ子の場合』（朝日新聞社、一九八二年）で、アウシュビッツ収容所でナチに奉仕する残忍なシェパードを描いている。

ある雨の朝、ヘンリック（囚人）たちはただならぬ軍用犬の声にいつもより早く起された。犬はこの収容所でナチの監視兵士が連れてきているシェパードの群れだった。監視兵のなかには、このシェパードをわざと囚人に襲いかからせて悦ぶ狂人のような者がいた。その時、痩せ衰えた囚人にシェパードはとびかかり、その足や手に噛みついた。（18）

この描写を裏書きするように、ボリア・サククスは「アウシュビッツには親衛隊から選抜された特殊連隊が常駐し、犬の管理に当たった。この隊員は、しばしば面白半分て犬を囚人にけしかけたという」と記している（19）。シェパードは「第三帝国に奉仕する犬」だったのである。

満州時代の遠藤家がシェパードを飼っていなかったのは、父親がいて番犬が不要であったこともあったかもしれないし、幼い遠藤にあてがうには、訓練された大柄なシェパードよりも、子犬の方がふさわしく、遠藤自身もまた「満州犬」を望んだからだったのかもしれない。とにかく、彼が愛したのは土着の満州犬であった。主人の命令に絶対服従し、満州人やユダヤ人しか噛まないように訓練され、戦場では死をも恐れない勇猛果敢なシェパードではなかった。土着の現地人が植民者たる優秀な日本人よりも劣っているように、劣等な犬として観念される種類の犬なのであった。

満州犬を劣等とみるまなざしとしては、スキヤブランドが紹介する「満州犬は日本の犬と比較で大分違う。日本の犬は脱糞した後では屹度後脚で砂を掛けておくが、満州の犬は垂れ放しである。日本の犬は途中で逢へば必ず格闘？を始めるが、満州犬は悠々と互に唸り合っている。唸り合うのみで中々噛み合わない。流石は支那の犬だけ不潔も悠長もよく主人に似て居る」という陸軍中尉猪熊敬一郎の言葉が示唆に富む（20）。日露戦争中のものであるが、すでにこの時期に、被植民地の人や動物を蔑視する帝国日本のコロニアル・メンタリテイが形成されつつあったことがうかがわれる。このような心性は、徐々に増幅されることはあっても、薄められることはなかったと考えるのが自然ゆえ、遠藤の少年時代においても同様であったと考えてよからう。

少年時代の遠藤にとっては、満州犬クロも、渡辺家のシェパードも、ともに遊び相手であったということでは共通している。しかしながら、クロに関する遠藤の文章を読むにつけ、クロの在り方は、攻撃性を秘めながら、主人への高い忠誠心の特徴とするシェパードとは似ても似つかぬものであることがわかる。「小学校に行く時、この犬は学校までついて来て、授業中、校庭で寝そべっているのであった。学校から帰る時も彼はノソノソとあとからついてくるのであった」（21）。そして、あるとき遠藤が尻餅をつくとき、クロは「歯をむいて嘲笑した」のである（22）。

### 三 純血種のクウと雑種のシロ

「私は血統のいい犬より雑種の犬が好きだ。血統のいい犬はいささか偉そうな雰囲気があるが、雑種の犬は生きるために懸命に努力する」（23）と遠藤は書いたことがある。犬の話ではあるが、作家としての出発点に、近代西洋植民地主義とそれに絡み合うヨーロッパ人の人種主義への反発があったことを思えば、犬の品種にこだわる心性に、遠藤が半ば無意識の反感を抱いたとしても何ら不思議ではない。「血統のいい犬はいささか偉そうな雰囲気がある」というのは、アーリア人種を最も優秀であると感じたナチズムを極点とした科学的人種主義思想にそれが結びつく要素を持っていたからではなからうか。

ヒットラーがブロンディという牝のジャーマン・シェパードを身近に置いていたことは有名だが、アメリカ合衆国大統領が、自らの威信を高めるために、ホワイトハウスで犬とともにメディアに露出することを友人から聞いて、遠藤は「犬がステイタス・シンボルになるとは驚きだ。わが庵の、雑種

のうす汚い犬のことを思い出した」(24)と呆れている。

その遠藤が、日本犬(柴犬)を飼育していた一時期がある。すでに雑種犬シロを飼っていたのだが、第三の新人の仲間である近藤啓太郎(一九二〇—二〇〇二)が無類の犬好きであったことから、中型の柴犬を貰い受けたのである。絶えず食べているために、クウと名付けられたこの犬の写真を見ると、紛うかたなき柴犬である(25)。純潔、忠実、勇猛というのが、ナシヨナリズムの高揚とともに作られた日本犬の特徴であったが、遠藤のテクストに登場するクウは、そうではない。

「茶色くて、耳が立っていて、口の下に黒い斑点があるために、チョボ髭をはやした下品なおツさんのように見える」(26)。「このクウは、日本犬の特徴で、すこぶる愛想が悪い。その頃、同時に飼っていた雑種のシロなどは私を見ると、喜色満面という顔で尾をふるのだが、クウは無愛想な表情で私をじっと見るだけである。大人になるについて、何となくムツリ助平の親爺という顔になってしまった」(27)。このように描かれるクウは、たまに脱走すると、女性の下着を持ち帰ったり、散歩では、「通りすがりの娘さんのスカートのなかに突然、顔をつつこんだり」(28)。「どこかのお宅の掃きよめられた門や玄関の前で脱糞する」(29)という妙な癖があった。頭も悪く、お手もお座りもおぼえられない(30)。そして、ある夏に軽井沢の別宅に連れて行ったところ、野良の牝犬に手を出して、性病にかかり、再発して手術の結果、こともあろうに陰茎を切除されてしまったのである。

遠藤は、エッセイのなかでは、自や知人たちをも滑稽化して描くことが多く、クロについてもかなりの誇張があると考えるべきである。遠藤はクウを一〇年以上飼育していたことから、愛情を持って接していたことは明らかである。ここでのポイントは、雑種犬シロと対比的に、純血種クロが滑稽な役回りをあてがわれていることである。シロは遠藤が近所から貰ってきた犬だった。ある日自動車で走っていたところ、「畑のなかの雑貨屋の前に箱があつて、生後二カ月ぐらいの仔犬が四、五匹入っていた」。「片眼が眼やにで潰れたような白い一匹が、ちぎれんばかりに尾をふり箱から這い出てきた」(31)。それがシロだったのである。

なぜ遠藤は日本犬クウにこのような役回りをさせたのであろうか。滑稽さは、見かけの立派と実態の落差から生じるものであるから、三角の耳と巻いた尾を持つ由緒ある柴犬のクウが、愛想のない下品なおツさんとして描かれるがゆえに可笑しいのである。犬の「階級」が、ここでは転覆され、日本犬の「威信」が台無しにされている。

実は、日本犬と現在認識されている犬たちは、日本の在来犬を代表するものではない(32)。稲作中心の農耕文化を基盤としていた日本社会にとって、狩猟に使用する猟犬は主流とはいえないなかったからである。日本在来犬の主流は、村や町で放し飼いにされている「あるがままの犬」であった。満州事変の年である一九三一年に天然記念物第一号として指定されたのが、マタギ犬に洋犬や土佐犬の血を交配させて作った秋田犬であり、ヨーロッパ人に人気だった愛くるしい狎犬ではなかったことに谷口は注意を促している(33)。狎犬は、ペリー提督に徳川幕府が贈り物とした犬であり、一八六〇年代中ばには欧米で「狎熱」が流行したのであった(34)。一九三〇年代に、ナシヨナリズムの高揚とともに、三角形の耳と巻いた尾という身体的特徴と勇猛果敢さこそが日本犬の優秀性とされた歴史的事実は、大方の日本人には現在でもよく知られているとはいえない。日本犬は、近代になって「創造」されたのである。そして、ファシズム体制下の帝国日本において日本犬が果たした政治的役割の象徴的存在が、秋田犬であった「忠犬ハチ公」なのであった(35)。

## おわりに

遠藤は無類の動物好きで、犬、猫、小鳥、金魚などを飼育していた。猿を家に置いた一時期もあった。本稿では犬に話を限定したが、雑種犬のシロと血統犬のクウを同時期に飼っていたことはとりわけ興味深い。遠藤には、自身も語っているように、純血種を好むという感覚がないのである。それは品種や人種の純粋化と、そこから優劣を導きだそう思考の危険性を彼が熟知していたということでもあろうし、およそ地上で生命を持つ「神の被造物」に、人為的な改良を加えたり、ヒエラルキーを設

けたりすることへの違和感もあったのではなからうか。考えてみれば、純潔種は、その存在を雑種に依存しているともいえる。雑種がいなければ、純血種は自らの存在価値を示すことができなからである。しかし、クウを長年にわたり飼育したように、遠藤は、純血種をことさらに嫌悪することもなかった。要するに、彼には個々の犬に対して、品種によって差別するという発想がなかった。これは遠藤周作という作家の根本的な在り方を考える上で、大いに示唆に富むのではなからうか。品種は人種に通じるのであり、犬を品種で差別しない態度は、初期遠藤の作品に濃厚だった反人種主義の思想と照応するものといつてよからう。

もつとも、雑種犬好きというのは、同時代の作家たちを眺めると、決して遠藤だけではないことがわかる。私が面白いと思うのは、吉田健一（一九二一—一九七七）も雑種犬好みであったことだ。もる、さぶ、彦七と名付けた犬たちは、全て雑種の牝犬であった。どれも貰ってきたものであり、「なぜか、最後まで残りそうな、小さな犬や器量の悪い犬をもらってきた」（36）という。吉田茂の長男として生まれ、幼少時にヨーロッパで生活した健一は、西洋的価値観を内面化した文学者であった。磯田光一は彼を「肉体化した鹿鳴館」と呼んだ。「外交官の子息として海外に故郷が意識され、英国が日本人の気質や体質にまで浸透してい」たからである（37）。だが、これは一面の真実を衝いてはいるが、やはり図式的な見方である。文化的エスタブリッシュメントであった健一は、むしろそれゆえに、ヨーロッパを崇拜することがなく、洋犬を好むようなコロニアル・メンタリティからも解放されていたのである。吉田茂は、大磯の私邸で、シェパードや、サンフランシスコ講和条約の折に、アメリカ合衆国で購入した二匹のケアンテリアなどを飼育していた人であった。吉田邸には柴犬などもいたようだが、宰相が雑種犬を貰ってきて可愛がることは、アメリカ合衆国大統領のフアーストドッグを考えてみれば、無理な相談であったことがわかるだろう。健一の雑種犬好みは、西洋人の気質・体質というよりも、むしろ日本人の大衆的な心性と通底していたと考えられるのである。

- (1) アーロン・スキヤブランド『犬の帝国——幕末ニッポンから現代まで』本橋哲也訳、岩波書店、二〇〇九年。
- (2) 遠藤周作『わが最良の友 動物たち』グラフ社、二〇〇三年、二七—二八頁。
- (3) 同右、一四頁。なお、遠藤がクロと一緒に写った二枚の写真が『作家の犬』（平凡社、二〇〇七年、八七頁）に収録されている。一枚は、一九二七年、遠藤が四歳のときのもので、クロは子犬である。両耳は立っているようにも見えるが、確かとはいえない。
- (4) 『わが最良の友 動物たち』一九頁。
- (5) 遠藤周作「狐狸庵動物記」『落第坊主の履歴書』文春文庫、一九九三年、一五〇頁。
- (6) 同右、二六頁。
- (7) 『わが最良の友 動物たち』一八頁。
- (8) 同右。
- (9) 遠藤周作「東海林太郎の妻」『落第坊主の履歴書』一八—二二頁。遠藤周作「静という人」『ピアノ協奏曲二十一番』文春文庫、一九九〇年、一四七—一六六頁。
- (10) 遠藤周作「静という人」『ピアノ協奏曲二十一番』文春文庫、一九九〇年、一五一頁。
- (11) 同右。
- (12) 谷口研語『犬の日本史——人間とともに歩んだ一万年の物語』吉川弘文館、二〇二二年、六七—六八頁。
- (13) スキヤブランド前掲書、一六五頁。
- (14) 同右、一六二頁。
- (15) 同右、一九一頁。
- (16) 同右、七三頁。
- (17) 同右、一九五—一九六頁。学齢から、遠藤はこの教科書を使用していないと考えられるが、那智と金剛の話はメディアを通して知ったことであろう。
- (18) 遠藤周作『女の一生 二部サチ子の場合』新潮文庫、一九八六年、一五二頁頁。
- (19) ボリア・サックス『ナチスと動物——ペット・スケープゴート・ホロコースト』関口篤訳、青土社、二〇〇二

- 年、一三二頁。
- (20) スキャブランド前掲書、一一七頁。
  - (21) 遠藤周作「狐狸庵動物記」『落第坊主の履歴書』一五〇頁。
  - (22) 『わが最良の友 動物たち』三六頁。
  - (23) 同右、三七頁。
  - (24) 遠藤周作『ウスバかげろう日記』文春文庫、一九八〇年、一九九頁。
  - (25) 『作家の犬』八六頁。
  - (26) 『わが最良の友 動物たち』六三頁。
  - (27) 同右、二九頁。
  - (28) 同右、六四頁。
  - (29) 同右、三〇頁。
  - (30) 同右、四三頁。
  - (31) 同右、三七頁。
  - (32) 谷口前掲書、二二六―二二七頁。
  - (33) 同右、一八四頁。
  - (34) スキャブランド前掲書、一三九―一四〇頁。
  - (35) 同右、第三章「フアシズムのふわふわの友——「忠犬」ハチ公と「日本」犬の創造」参照。
  - (36) 『作家の犬』六九頁。
  - (37) 磯田光一『鹿鳴館の系譜——近代日本文芸史誌』講談社文芸文庫、一九九一年、三四五頁。



## 第二節 「男と猿と」——動揺する西洋的階層秩序

### はじめに

「犬」の表象について考察した前節に引き続き、本節と次節では、「猿」の表象を取り上げる。短篇「男と猿と」(『小説中央公論臨時増刊号』一九六〇年七月初出。『最後の殉教者』講談社、一九七四年収録)は、一読して忘れがたい印象を与える作品である。しかし何故かこれまで本格的に論じられたことがない。注意深く読むと、この小説には、西洋人の人間観と日本人の人間観の鋭い対比を見出すことが可能である。したがって、その後の遠藤文学の展開を考える上で見過ごすことができない重要性を秘めている。

この短篇小説には、話の種となったフランス留学中の体験がある。孤独な学生生活を送っていたときに、公園で遠藤は一匹の猿と出会い、自らの孤独を慰めたことがあるのだ。その体験について、遠藤は、「動物と男」のスケッチ(『週刊朝日』別冊、一九六〇年一月初出。『第三ユーモア小説集』講談社文庫、一九七四年収録)という小説を書いたが、文字通りスケッチめいたこの作品を改めて書き直すようにして完成度を高めたのが「男と猿と」なのである。遠藤はまた、このときの体験を二つの随想に書いている。随想の一つは「動物と男」のスケッチ」及び「男と猿と」を発表する四年前に執筆された「旅人と猿と」(『大阪新聞』一九五六年六月二二日初出。『遠藤周作による遠藤周作』青銅社、一九八〇年収録)であり、もう一つは、小説を書いた一二年後に発表された「狐狸庵動物記」(『夕刊フジ』一九七一年一—五月連載。『ぐうたら人間学』講談社、一九七二年収録)中の一章である。これらのパラテキストを小説と併せて検討することで、この作品で作者が描き出そうとしたものの解明を試みたい。

### 一 素材となった出来事

遠藤周作がフランスに留学したのは一九五〇年から五三年までの三年間である。五〇年六月に横浜港を出発し、七月にマルセイユに到着。九月までルーアンでホームステイし、一〇月に新学期からリヨンに移った。五二年暮れにパリに移り、翌年二月に帰国の途に着いた。リヨンでは学生寮に入り、友人もできた。しかしこの街の冬の陰気さを記した文章がいくつか存在する。「特に冬の間というのは、毎日、毎日、黄濁した霧が街中を舐めつくし、街そのものがまるで墓場のように静まりかえってしまふ」(1)が一例である。一九五一年一月二四日の日記には、次のような記述がある。

Xマス、サン・ジャン教会の夜ミサに出る。  
血痰つづく。

みなはかえってしまった。広い寒々としたこの寮の中で、一人になってしまった。  
病気、孤独、たったそんな事にも耐えられぬ程、卑怯な弱い男なのか……。 (2)

ここに出てくる「サン・ジャン」界限は、「リヨンでも最も古い」「昼なお暗い一角」で、「中世期のころからの家が今なお残り、狭い通りには尿とも油とも人間の体臭ともつかぬ一種異様な臭気がたちこめ、どの家も午後四時ごろから灯をつけねば仕事ができぬ場所」(3)であった。当時の日記に

は、リヨン郊外にある「金の頭公園」で猿と出会ったとの記述は見出せないのだが、その出来事があったのは、おそらく孤独感に苦しめられていたこの冬のことと考えられる。

論述の必要上、短篇小説「男と猿と」の元になった体験をほぼ忠実に再現していると考えられる随想「旅人と猿と」について、その梗概を示す。「朝鮮事変」が始まった頃「ぼく」はリヨンで勉強していた。「ぼく」は「裏町の屋根裏部屋で、毎夜、重く重い気持ちで一人、住んでいた」。降誕祭が終わり学友たちが帰省すると「ぼく」は下宿屋の一室で長い夜をすごした。郊外に「金の頭」公園があった。公園の隅に「一匹の汚い牝猿が檻に入れられていた。眼にはヤニがうかび、毛もぬけて年とつた、元気がない猿だった」。「その姿を憐れんで、というよりも、いかにもその一人ぼっちな寂しげな姿が、異郷にある自分のそれに似ていたので」、「ぼく」はパンくずを「彼女」に与えるようになった。「一人の外国人が猿にパンをやっている光景を人夫たちが見つけて「猿とお前と同じ皮膚の色をしているな」などと心ない冗談を言うこともあった。」「彼女」は、ある日から「唇を細かく震わせる」ようになった。帰国した「ぼく」は、動物学者の本から、その動作が「恋情」の表現だと知った。

## 二 小説「男と猿と」

この体験に基づき、遠藤は次のような内容を持つ短篇小説「男と猿と」を創作した。

「ぼくは朝鮮事変の始まった年からこのリヨンの皿町に住んでいた。」下宿は労働者街にあった。「ぼく」は週に数回「いやいやや大学に出かけるほか」下宿に籠もる生活をしてきた。夕方、町工場の工員たちは居酒屋にたむろして「この時刻、きまつて皿町にやってくる白痴の男をからかったり」する。「白痴の男」は皆から「男（ギャルソン）」と呼ばれていた。「丈のみじかい上衣に、これももちろんちくりんのズボンをはき、両手を大きく振って歩いている」。一月、「ぼく」は「街の北にあるひろい公園」に行った。「音楽堂の裏にまわると、猿を入れた檻がおいてあった」。その前に「男」がいて、「怯えたような媚びるようなうすら笑い」を口に浮かべてこちらを見た。猿は「首や尻の毛がひどく抜けて赤黒い肉がむごたらしくのぞいていた」。「周りに自分たちを見る者がいないので、ぼくは露骨に軽蔑の色を顔に出して男に近付いた」。「人影のない冬の公園で頭の少し鈍い男が毛のぬけた猿をじっと見ている。その猿が右手で生殖器を握っているのをじっと見ている」。「ぼく」はこの光景が「ひどく不潔で生臭い」ように思われ「ま、ぬ、け」と言った。猿は突然小刻みに唇を動かし、それ以後、「ぼく」は彼と道ですれ違っても「眼をそらすようになった」。三月になり、「ぼく」は外出するようになった。「馬鹿」を見なくなつたことに気づいた。病気だと聞いた。「ぼくの心にはあの馬鹿がどこか教会の暗い納屋の隅でじっと横になっている姿が眼にうかんだ。それは少し憐れだった」。三週間後、八百屋の亭主から男が死んだと聞いた。「遠い昔の話聞くような気持ちでぼくはその言葉をきいた」。四月、復活祭の日、修道院の鐘が鳴り「初聖体の少女たち」が問の前に並んだ。午後、「ぼく」は公園に行った。檻から猿はいなくなつていた。帰国した「ぼく」は、動物学者の随筆から、その動作が「友情」の表現だと知った。

## 三 テクスト間の相違点

この短篇小説を書いた後、遠藤は随想「狐狸庵動物記」の猿に関する章で、ふたたびこの体験を取り上げた。その時の印象がよほど強かつたのであろう。留学中の経験に触れるまでの前半部分は省略し、該当する箇所について簡単に紹介する。

戦後でもない頃「私は中仏のリヨンという都市に留学していた」。「頼るものといえは、自分一人きりしかないなかった頃である」。「その冬、私は一人ぼっちだった」。「大学の帰り、一人で街のはずれにある「金の頭」という公園によく行った」。そこで「私」は小さな檻に「毛のぬけた猿」がいるのを見た。「猿は私を見ると檻から手をだして唇をふるわせた」。以後たびたび「猿をたずねるよう

になった」。自分のパンの半分を猿に与えるのである。「私は寂しかったし、寂しい私の眼には、この友もいない一匹の猿が自分と同じように孤独にうつつたのである」。帰国した「ぼく」は、動物学の話から、その動作が「牝猿に恋された」ことだと知った。

このように、三つのテクストが同じ体験を元に行っていることは明らかだが、登場する主要な人物と動物を詳細に比較すると、そこには看過できない相違が認められる。

随想「旅人と猿と」では、登場するのは、フランス人労働者階級の「人夫たち」、日本人留學生の「ぼく」、そして「牝猿」の三者である。しかるに、短篇小説「男と猿と」では、フランス人労働者階級多数（キャベツ売りの老婆、兎の肉を売り歩く男、手風琴をかかえた老人、町工場の工員たち、洗濯屋の亭主、牛乳屋の内儀等）、日本人留學生の「ぼく」、「牡猿」に加えて、フランス人上中流階級（紳士や女たち、晴れ着を着た人々）、そしてフランス人知的障害者「白痴」が加えられていることがわかる。それが随想「狐狸庵動物記」になると、一転して登場するのが日本人留學生の「私」と「牝猿」のみになる。

これはおそらく偶然ではないだろう。少なくとも、短篇小説「男と猿と」の人物設定は、周到に考えられた結果である。それは三つのテクストに登場する登場者間の社会的優劣関係を分析することによって明らかとなる。

随想「旅人と猿と」において、日本人留學生の「ぼく」は、フランス人労働者の「人夫たち」から、「猿」と同列の存在として見下される存在である（「猿とお前と同じ皮膚の色をしているな」。けれども、小説「男と猿と」における「ぼく」は、フランス人労働者「八百屋の亭主」などと対等の存在である（商店の亭主や内儀は主人公を見下さない）。彼らはフランス人上流階級の「紳士や女たち」を《階級の違う存在》として見上げる一方、フランス人知的障害者「白痴」と「猿」に対しては、両者が共に幼児程度の知能しかないということから見下すのである。実体験の白人優位、有色人劣位という上下関係が、小説においては部分的に逆転していることに注意を払う必要がある。この小説では、白人が、知的障害を持つという理由で、人間よりも知能が劣る猿と同列に扱われているのである。一転して、随想「狐狸庵動物記」では、日本人「私」は「猿」と対等に触れ合う存在であり、そこでは上下関係が消失している。そしてこの文章にはフランス人が一切登場しない。

#### 四 西洋と日本の人間観・動物観

さて、随想「旅人と猿と」に登場するフランス人「人夫」たちの言葉には、フランス人（白人）は有色人よりも上位にあるという意識がうかがわれる。階級的には労働者階級に属していても、高等教育を受けている中産階級の有色人よりは、白人であるという事実によって、優位に立っているとの認識がそこにはある。

近代西洋の人間観は、おおよそ次のようなものであった。最上位には英仏の白人男性が位置し、その下に英仏の白人女性と、英仏以外の白人がいる。その下に黄色人種、黒人がおり、さらにその下にアボリジニ、「ホツテントット」らがいる。要するに、白人が信ずる「文明」から「野蛮」への、上下のヒエラルキー構造があるのだ。興味をそられるのは、さらにその下にオランウータンがおり、最下層に野獣がいるということである。

このように人間から野獣までを地続きに考える思考は啓蒙思想に由来する。「非合理」ゆえに教会を攻撃した啓蒙思想家は、「創世記」第一章第二六節以下に見られる、人間と動物とを厳格に区別するキリスト教的な動物観を退けた。そのため、人類と動物との境目は曖昧になったのである。

人間を動物との間に越えがたい境界を設ける思考は、「創世記」のみならず、ギリシア哲学、すなわちアリストテレス『政治学』にも見られた。『政治学』の注解を行ったトマス・アクイナス『神学大全』の動物観に、キリスト教神学に受容されたアリストテレス哲学を指摘する見解がある。そして、このトマス・カトリック的動物観が、中世キリスト教世界における主流となったのである。

キリスト教世界における「文明」と「野蛮」という区別についても改めてここで触れておこう。近代以前においても、人間は文明人と野蛮人とに区別されたが、キリスト教文明圏の人間だけが「文明人」であったわけではなく、インド、中国のような非キリスト教文明圏の人間もまた「文明人」であった。野蛮人とは「文明を持たぬ人間」を指したのであり、それがキリスト教徒であるか否かは問われなかったのである。文明人という区分は並列的な配置であって、キリスト教文明、中国文明、インド文明に、優劣関係はなかった。それは空間的、地理的な分類だったのである。「神の財産目録の作成」を企てたカール・リンネ（一七〇七―一七七八）の人類分類体系もまた同断であった。「美」を判断基準として白人を頂点に置き、空間的配置を直線の序列配置に転換したのが、フリードリッヒ・ブルーメンバッハ（一七五二―一八四〇）であり、これがチャールズ・ダーウィン（一八〇九―一八八二年）の進化論と相まって、近代西洋の白人至上主義的な社会進化論を導くこととなったのである。ルソーは『人間不平等起源論』において、次のような記述をしている。「コンゴ王国には、インドではオラン・ウータン、すなわち森の住人という名前をもち、そしてアフリカ人がクオジャ・モロと名づけているこれらの動物がいっぱいいるそうである。[…:]このけだものは非常に人間に似ているので、人間の女と猿とから生まれたのかもしれないという考えが、幾人かの旅行者に浮かんたほどだという」（5）。ここで思い起こされるのは、フローベール（一八二一―一八八〇年）の小説「汝何を望まんとも」（一八三七年）である（6）。この物語には、黒人奴隷女とオランウータンとの混血児が登場する。白人男性のボル氏が、ブラジルで黒人奴隷女を買い取り、牡オランウータンと同じ部屋に閉じ込め、女を妊娠させる。生まれた人間と動物との中間的存在であるジャリオは、「白痴」である。ここでは、人間と動物との境目が曖昧であると考えられており、近代西洋の人間観がそのまま小説に提示されているといつてよいだろう。

「旅人と猿と」に登場する公園の老夫たちの「猿とお前と同じ皮膚の色をしているな」という言葉には、有色人種と動物（猿）とを地続きとする、そうした近代西洋の人間観・動物観がうかがわれる。遠藤は、フランスに行く船内で白人ボーイに「汚い黄色人」と侮辱され（7）、パリでは郵便局で日本人男性が窓口のフランス人女性に「黄色人のくせに」と罵られるのを目撃している（8）。一九五〇年頃のフランス市民の間には、このような意識が依然として強く残っていたのである。

一方、随想「狐狸庵動物記」における語り手と猿との関係には、そうした西洋の人間観と対照的な、日本人の人間観・動物観がうかがわれる。それは、人間も動物も、ともに「生類」、あるいは「有情」であるという仏教的思考である。人間と動物とは、輪廻により一方から他方へと生まれ変わることもある。それが伝統的な日本人の感情であった。『本朝文粹』『今昔物語集』『日本霊異記』などにもそうした思考が見られるという（9）。またキリシタン時代のキリスト教義書『妙貞問答』では、神が人間のために動物を創ったという立場への対抗的言説として万物が輪廻転生するという仏教の立場が主張されているという（10）。

近代に入り、ダーウィンの進化論や肉食思想が日本に入ってきたのは事実である。しかし、それらは表面的な知的理解にとどまり、日本人の心性の底流には、伝統的な「生類」の思想が連綿として流れていたといつてよい。遠藤が実際に公園の猿と触れ合ったときの感覚には、そのような伝統的感性による触れあいがあったものと考えられる。

遠藤は、以上に記したような西洋人の人間観について、書物を通して理論的に理解していたというよりも、体験的に肌でそれを理解したものと思われる。その彼が短篇小説「男と猿と」を書いたときに、登場するフランス人を、さらに上中流階級、労働者階級、そして知的障害者と三層を描き分けたていることに注目する必要がある。「白痴の男」は、ミシェル・フーコー（一九二六―一九八四）が『狂気の歴史』（一九六一年）において、近代の特徴として指摘した「隔離」を受けていない。住所不定ではあるが、街中をうろついている。それは植民地においては、白人全体の権威を動揺させる存在であるということ、現地人の目に触れてはならぬものであったが（11）、本国の、パリに次ぐ第二の都市リヨンでは、留学生の目にも平気で曝されているという想定である。主人公は有色人種ではあるが、男が白人とはいえ「白痴」であるという事実を根拠に、自分の方が優位にあると考えている。

## 五 ヒエラルキーの動揺

興味をそそられるのは、この小説のなかで、知的障害者の男の呼び方が、最初と最後で変化することである(12)。最初は「白痴の男」と呼ばれる。しかし物語の最後では「あの馬鹿」になるのである。「白痴」という言葉は、現在では差別的な言葉として捉えられているが、そもそもは精神医学上の用語であった。それが生活のなかで用いられる際には、侮蔑的なニュアンスを含むことになる。この小説のなかでもそれは同じである。主人公は、自分とは距離のある存在としてそのように呼んでいる。公園の檻の前で、主人公は彼に「ま、ぬ、け」という。意図としては侮蔑の表現ではあるが、ここにおいて主人公は、男と無関係でいることができず、二人称的な関係ができてしまっている。この出来事以後、主人公は男を避けるようになるが、しかしそうした行動に反して、彼のことを忘れることができず、むしろ強く意識するようになる。そして男の姿が街中から見えなくなると、八百屋の主人に尋ね、病気だと聞くと気の毒だと思ふようになる。そして「あの馬鹿」というように、罵りの意味合いの薄い、むしろ親密さを感じさせる呼び方を心中でするようになるのである。つまり、小説のはじめには、主人公は男を見下ろしているのだが、公園での出来事を境に、彼に対して関心と共感を深めていく。自分を男より上とみる傲慢さが薄れていく。最後には、自分と男、そして猿との間の優劣関係が溶解され、物語の最後では「生類」として同一平面上の対等的関係へと変化していくのである。

すでに見たように、小説「男と猿と」では、猿と交流する人間が、実験での「ぼく」から「白痴の男」へと変えられている。しかし、「ぼく」「男」「猿」の関係は、一筋縄ではいかないように思われる。作者は主人公に「異国の街に一人で住む自分の影を、彼のなかに投影していたのかもしれないなかつた」と語らせているが、作者は彼が猿にも自分を投影するようにも描いているからである。改めて、公園の檻の前で主人公が男と猿を見る場面を考えてみよう。牝猿が小説では牡猿へと設定変更されているが、これは何故か。体中に傷がある猿が勃起した生殖器を右手で握っている。それを男が薄ら笑いしながら見ている。おそらくこの猿は、異国の生活で傷つき、女もいない主人公自らの似姿である必要上、作者によって牡にされたのである。主人公は猿の姿に隠しておきたい己の姿を発見した。そこで自分が男に嘲笑されているように感じて感情をかき乱されたのだ。檻の前で主人公が同一視したのは男ではなく猿である。「ま、ぬ、け」という言葉は、男に向かって吐いたものと主人公自身思い込んでいるが、それにしても不似合いな台詞である。この場面では、強い侮蔑の言葉としての「ば、か、や、ろ」の方が適切である。これはむしろ、場もわきまえず滑稽な振る舞いに及んでいる猿に対して吐かれた言葉と解釈した方がふさわしい。主人公が男を避けるようになるのは、主人公が自ら説明するがごとく、彼の薄ら笑いが「猿の行為をみて、お前も楽しかったらと言っているように見えたから」ではなく、男に自分の痴態を見られたように感じたからなのである。だからこそ、主人公はその後公園までわざわざ出向き、自分の分身たる檻の猿に小石を投げつけるのだ。このように考えると、主人公は男と猿の両方に自己を投影していたことになる。リヨンの街の周縁に位置する公園の、そのまた隅にいる一匹の猿。それはフランス社会の周縁にいる日本人留学生の「ぼく」とも、社会秩序から排除されるぎりぎりのところにいる「白痴の男」とも共通する周縁的存在なのである。フランス社会のなかで、三者の序列はそもそも虚構といつてよいくらい薄いものだったのである。

## 六 対抗的イエス像

これまで、西洋と日本の人間観に焦点を絞ることで、問題を単純化して論述してきた。ここからは、以上を踏まえた上で、キリスト教の視点から作品を見てみることにしよう。

物語の最初で、女子修道院の晩鐘を毎日鳴らす「白痴の男」の存在が紹介される。彼は住所不定の人間だが、あるきっかけからその役割を自分の仕事と心得るようになったのだ。日曜日に男が教会か

ら出てくるのを主人公は目撃する。つまり、男はキリスト教と深い結びつきを持つ人物として造形されている。主人公は信者とは書かれていないが、しょっちゅう教会前で男を見かけていることから、教会の周辺を文字通りうろろしている人間であることが暗示されている。主人公はそこで、男が紳士や女たちに懸命に奉仕している姿を見る。復活祭の頃に男は死に、猿も消滅し、初聖体の少女たちの姿が教会の門前に見られることが描かれる。つまり、秋からクリスマスを経てイースターまでがこの小説に流れる時間なのである。ちなみに、フランスの高等教育機関の休暇は、宗教歴に従っている。一〇月に新学期が始まると、降誕祭から新年にかけて二週間程度の休暇がある。二月の告解火曜日に二、三日の休暇があり、三月から四月の復活祭に、ふたたび二週間程度の休暇がある。そして、五月から六月の聖霊降誕祭に二、三日の休みがあり、六月下旬が年度末となる。

「白痴の男」に、おそらく遠藤は「おバカさん」のイメージも付与している。無垢な貧者キリストのイメージである。重要な舞台となる公園が、小説では「金の頭公園」と固有名で記されていないが、それは、黄金のキリストの頭が見つかったという伝説を持つこの実在の公園名を記せば、キリスト・イエスと「白痴の男」とのダブルイメージが露骨になり過ぎると判断したからではなかるうか。浮浪者であるにもかかわらず、男が不潔で悪臭を放つふうには描かれていないのも、意識してのことであろう。男の死はイエスの受難と時期的に重なる。どのような形で復活するのかは描かれていないが、帰国した主人公の胸に、猿と心を通わせていたこの男の姿は、ある日よみがえる。そしてこの物語が語られ始めるのである。貧者のみならず、動物の世界にまでへりくだり、語りかけるイエスというイメージがここでは提示されている。ここには、人間と動物とを明確に区別する、トマス・カトリック的な伝統的潮流の中では例外的な、小鳥に語りかけたアッシジのフランチェスコの思想と通じるものがあるといえよう。

## おわりに

本節で考察したことをまとめると、次のように整理することができる。

遠藤はリヨン時代に孤独な一時期を持った。そのとき、動物園で一匹の猿と触れ合うことで、孤独を慰めた。そこにあっただのは、近代日本人の無意識に横たわる伝統的な日本人の動物観、すなわち、人間の猿も、ともに「生類」であるという意識によるものだった。しかるに、その場にフランス人夫婦が現れ、西洋人の視線から眼差されることにより、「生類」という意識が破られた。それは自らを最上位と見なす人間観・動物観が暴露された瞬間でもあった。遠藤は帰国後に「男と猿」という作品を書き、上流階級、労働者階級、有色人、動物という白人社会の階層秩序を脅かす白痴を登場させることで、近代西洋人の人間観の虚構性を揺さぶった。それはまた、聖書（創世記）とアリストテレス哲学を二源泉とする、人間と動物とを厳格に区別する伝統的なトマス・カトリック的動物観を揺さぶることであった。そして「白痴」の男を無垢なキリストのイメージとだぶらせることにより、動物の次元にまでへりくだった救い主というフランチェスコ的イメージを提示したのである。

議論が繁雑になるため、「男と猿と」に先だって書かれた小説「動物と男」のスケッチについて触れなかった。この作品では、酒を飲んだフランス人の若い男が二人、檻の中の猿を眺めている主人公のかたわらにきて、猿に小石を投げつける。「よした方がいいでしょう」とたしなめた主人公に、「猿とこの東洋人とはよ、顔までよく似ていやがる」と彼らは言い捨てて去って行く。「怒りと屈辱感」をおぼえつつも、主人公は、「今の青年たちが言ったように、自分とこの動物との間になにか似かよったものがあるのではないか」と感じ始める。両者ともに、ひとりぼっちだからである。話としては単純である。

おそらくこの作品を書いた後、遠藤は、せっかくの素材を活かすことができず、実際の出来事に引きずられて、思想的に深い展開をすることができなかつたとの反省に立ち、周到な構想の下に「男と猿と」を書いたものと思われる。特に、フランス人の「白痴の男」を登場させたことが大きい。コロニアル・コンテクストにおいて、文明と野蛮、正常と異常、理性と狂気といった分類は、前者が西洋

で後者が非西洋と見なされていたからである。「白痴の男」の登場は、そうした近代西洋の価値観を大きく揺さぶる上で実に効果的な仕掛けであったといわねばならない。

- (1) 遠藤周作『ぐうたら好奇学』講談社、一九七四年、二〇八頁。
- (2) S E Z 15、一六二頁。
- (3) 遠藤周作『ぐうたら好奇学』二六三頁。
- (4) 川上恵江「ヨーロッパ思想における動物観の変遷」『熊本大学文学部論叢（歴史学篇）』八九号、二〇〇六年、三一―三三頁。川上は、トマス・カトリック的動物観への対抗的認識としてアッシジのフランチェスコをあげており、稿者もこの見解に従う。また、本稿では詳しく言及しない個々の啓蒙思想家の動物観の差違についても川上は緻密な検討を加えている。
- (5) ジャン・ジャック・ルソー、小林善彦訳「人間不平等起源論」『世界の名著 30 ルソー』中央公論社、二〇五―二〇六頁。
- (6) ギュスターヴ・フロバール、山川篤訳「汝何を望まんとも」『フロバール全集』6、筑摩書房、一九六六年所収。
- (7) 遠藤周作「有色人種と白色人種」S E Z 12、二〇九―二一九頁。
- (8) 遠藤周作「黄色い人の哀愁」『異邦人の立場から』日本書籍、一九七九年、一〇五頁。
- (9) 中村生雄『日本人の宗教と動物観』吉川弘文館、二〇一〇年、一六一頁。
- (10) 塚本学『江戸時代 人と動物』日本エディタースクール出版部、一九九五年、六六頁、二九二―二九三頁。
- (11) アン・ローラ・ストラー、永渕康之他訳『肉体の知識と帝国の権力―人種と植民地支配における親密なもの』以文社、二〇一〇年を参照。
- (12) 本節は二〇一三年一〇月一九日に開催された関東学院大学キリスト教と文化研究所「キリスト教と日本の精神風土」研究グループ第一回研究会での口頭発表が元になっている。質疑の際の武田俊哉教授のご指摘が、この点を掘り下げて考察する糸口になった。武田教授に改めて御礼申し述べる。

### 第三節 『彼の生きかた』 ——非キリスト教的動物観の提示

#### はじめに

前節に引き続き、ここでは猿と人間を巡る遠藤の長編小説『彼の生きかた』（一九七五年）を取り上げる。この作品も、これまで重要視されず、研究者によって研究対象とされてこなかったが、「神——天使——人間——動物」というキリスト教的な存在秩序に照らして見るととき、論ずるに足る重要性を持った作品として立ち現れてくるのである。

#### 一 『彼の生きかた』の梗概

長編小説『彼の生きかた』（『産経新聞』一九七四年三月二一日—二〇月二日連載。単行本『彼の生きかた』新潮社、一九七五年。新潮文庫、一九七七年）は、現在、省みられる機会に乏しいテクストゆえ、簡単に梗概を記しておくことにしよう。

阪急六甲の近くで女中のいる家庭に育った福本一平は、吃音のため人間よりも動物と親しむ気の弱い少年だった。旧制高校を二次試験で落ち、東京の私立大学予科文学部に進んだ。徴兵検査は第二乙で尾道で勤労働員中に終戦となった。戦争直後、宝塚動物園で飼育員の青年と仲良くなる。「ぼくがやれへんかったこと、君やってくれや」といわれ大学に戻る。一九五〇年代前半、一平は京都にある日本猿研究所の所員となっていた。一平以外の所員は全員が国立大学卒だったが、所長は一平の理解者だった。志明山の「野生サル」の餌付けを一平は行う。餌付けに成功しつつあったとき、所長が交替する。新所長は研究費を調達するために開発業者とも手を組むような人物で、一平は辞表を出して志明山の餌付けから手を引き、比良山の「野生サル」の餌付けを試みる。やがて一平は「ボスサル」に承認される。米仏の研究者が来日し、サルをアメリカ合衆国の大学に連れて帰るといふ計画が持ち上がる。「動物園や、檻のなかに住む日本猿は、もう日本猿やない」と考える一平はこれを阻止しようとする。麻酔銃で撃たれた「ボスサル」は足を痛めて集団内の地位の安定を失う。大がかりなサル捕獲作戦が計画される。猟銃会、研究所のメンバーらが雪の比良山で麻酔銃を構える前に一平は立ちはだかる。「ぼ、ぼくがっ、つれていつてやる。もう人間の手の、と、とどかん場所に行こ」といいつつ、一平はサルたちを従えながら、雪山のなかに姿を消していった。……

#### 二 日本霊長類学の歴史と特徴

主人公一平のモデルになったのは、間直之助という霊長類学者であるが、彼について記す前に、日本の霊長類学の沿革について一瞥しておきたい。

太平洋戦争で敗北した三年後の一九四八年、今西錦司ら京都大学人文科学研究所が宮崎県幸島の野生ザル調査したのがわが国の霊長類学の出発点である。一九五〇年には大分県高崎山の野生ザルの調査が行われ、翌年には幸島の野生ザルに餌付けが開始された。一九五二年、京都大学動物学教室の生態学研究と今西らの動物社会学研究が合体して霊長類研究グループが結成された。一九五六年には日本モンキーセンターが設立された。これは国立大学内で新学問領域を作ることが困難だったため、民間で研究機関を発足させたのである。翌年にはバンコックで開催された汎太平洋学術会議で研究発表を行い、海外研究者に衝撃を与えた。ニホンザルの研究に一区切りをつけたため、一九五八年にはア



フリカでゴリラ研究を開始。一九六〇年には日印合同でラングール（尾長ザル）研究開始。一九六三年にはドイツにて国際霊長類学会が設立された。目標はサル研究による人類の解明であった。京都大学霊長類研究所が創設されたのは一九六七年のことである（1）。

第二次世界大戦後の世界の霊長類学は、日本から再出発したといつてよい。それは何故だろうか。日本霊長類学第一世代には、苛酷な戦争体験があり、人間とは何かを科学的に解明したいという強い問題意識があった。ヨーロッパ、北米、オーストラリアにサルは生息しないが、日本列島にはニホンザルが生息するという利点があった。彼らはアメリカ合衆国のように、大規模な予算を付けて短期間に成果をあげる方法は不可能な状況だったため、低予算ながらも時間をかけて調査をするという方法を採用し、むしろ短期間では調査不可能な研究成果をあげることに成功することができた。今西錦司が「今さらアメリカの真似ができるか。」と考えた結果の創意が画期的な成果をあげたのである。

後述するが、日本人研究者は、猿と人間との間に西洋人のような明確な区別をつけないため、独自の研究方法を開発することができた。それは次のようなものである、野生のニホンザルに時間をかけて根気よく餌付けをすることにより、研究者と研究対象動物の距離を縮め、何百匹もの集団の個体識別を可能とする。その上で、何世代という長期間の観察を行うことにより、群れの内部構造とその変化を明らかにするのである。これは理論的には、個体識別に立脚した社会学的手法と長期観察による歴史的手法の融合である。「人獣一如」「人猿一体」と言われるこの手法は、研究棟の狭い実験室で行われる実験的手法を広大な山野に適用したものであった。

こうした日本霊長類学独自の方法は、当初、諸外国の学者からは客観性担保の視点から強い批判に曝された。ヨーロッパの学者は、身を隠して野生動物の観察を行うのが当然であり、研究対象と研究者が直接的に関わることはタブーだったからである。しかし、従来の研究では解明できなかった群れの実態が解明されることにより、次第に評価されるようになっていったのである。

### 三 主人公のモデル間直之助

それでは、『彼の生きかた』の主人公のモデルになった間直之助（一八九九—一九八二）とは、いかなる人物だったのであろうか。

父親は、一八八九年に間組（はざまぐみ）を創業した土佐出身の間猛馬（一八五八—一九二七）である。熊本に生まれた直之助は、小学校に入学後、吃音者を真似て自らも吃音となり、人間よりも動物に親しむようになったという。一九二五年、東京帝国大学理学部で動物学を専攻したが、生きた動物を扱わぬことに失望した。アカデミズムの世界で野生動物の生活を扱うことはあり得なかったのである。卒業後に京都帝国大学文学部に入學して哲学を専攻し、西田幾多郎、田辺元、そして動物心理学創始者川村多実二に師事した。一九二七年に中退し、その後、父が興した間組に入社した。一九三七年監査役、一九三八年取締役となる。以上のように、彼の前半生は成功したホワイトカラーであった。

転機は敗戦後、今西錦司らが京都大学霊長類研究グループを結成した一九五一年頃に、このグループのメンバーとなったことである。すでに知命に達していた。ここから間は霊長類学者として本格的なスタートを切るのである。異色の経歴というべきであろう。自宅にサル小屋を作って「飼育サル」の観察を行うことから彼のニホンザル研究はスタートした。一九五四年七月から京都嵐山の「野生サル」調査のための餌付けを開始。同年、「飼育サル」研究の成果として『サルの愛情』（法政大学出版社）を出版した。一九五八年に比叡山ドライブウェイ開通したが、これは間組が開発を請け負った公共事業であった。一九五九年九月から比叡山のサルの餌付け開始した。

一九七二年、『サルになった男』（雷鳥社）を出版。一九七三年、山にニホンザルを返す運動である「比叡山のニホンザルを守る会」の指導者となった。この時期に遠藤周作を比叡山に案内したものと考えられる。一九七七年、遠藤周作『彼の生きかた』文庫版に解説を執筆。一九八二年死去した。比叡山頂に墓塔がある。

間のみならず、日本霊長類学者の特徴でもあるが、彼らの方法は、「人獣一体」——すなわち、研究者が研究対象の動物になりきるといふものであった。これは、研究対象である動物と物理的な距離を置き、動物集団への観察者側の関与を極力排除する西洋流霊長類学の立場とは異なるものであった。間の考えでは、高等哺乳類の場合、研究者即ち人間と研究対象即ち動物は「主従」ではなく、「対等」なのである。「高等哺乳類を研究する場合、研究者がかれらを観察するということは、研究者も対象から観察されているということである」(『猿の愛情』)と間は記している。

やがて間の立場は、「人獣一体」をさらに超えて、「獣主人従」——つまり、動物が主で人間が従というところまで行き着く。「人が動物の上に君臨してはならない」(廣瀬鎮)のである(2)。

#### 四 日本人の動物観

このような、間直之助を含む日本霊長類学の背後に、ヨーロッパや北米とは異なる独自の動物観が横たわっていることは疑いを入れない。それは、神仏、人間、動物とがトマス・カトリック的な固定的序列構造にあるのではなく、自由に行き交い、「神と人間、動物のそれぞれの世界が混とんとし、いわば水平に並んでいる」(河合雅雄)世界である。仏教に由来する伝統的な日本人の動物観は、人間も動物も、ともに「生類(しよるい)」「あるいは「有情(うじょう)」であり、輪廻転生により生まれ変わるといふものであった(3)。この思考は、無意識的な感情として現代日本人の心の底流に流れているものと考えられる。

河合雅雄は次のように記している。

…西洋では、神、人、動物(自然)が対立者としてあつかわれ、そのあいだに明確断絶があり、優劣の秩序がある。人は神になることはできない。天国はあっても、天国を支配するのはやはり神である。ところが、日本では人は神になれる。死ねば仏になって神の座に同列に参加できる。稲荷さんのお使いはキツネである。神、人、キツネのあいだの序列や関係はきわめてあいまいだ。というよりそういった縦の関係において成立していなくて、三者は横の関係でつながっている。(4)

河合はまた、別の論考において、「仏教以前のアニミズム、原始神道、こういうものの融合した世界での動物観、あるいは自然観」というものが、日本人が動物を大切にしてきた宗教的背景にあるとも記している(5)。そして、ヨーロッパでの動物裁判の例を引き、聖書に基づいた、人間による動物の支配が西洋の動物観の根底にあると指摘している。

#### 五 遠藤文学における「猿」

遠藤周作は、フランス留学時に、リヨン郊外の公園で、一匹の汚い猿との触れあいに孤独を慰めた一時期があった。その体験を元に、帰国後いくつかのエッセイと短編小説「男と猿と」を書いたが、その後、間直之助の『サルになった男』を通して日本の霊長類学と出会ったものと推測される。

遠藤には、間について書いたエッセイがいくつか存在するが、次の文章は、遠藤が間に惹かれた理由が記されていて興味をそそられる。両親の不和から満州の少年時代に犬を友とした遠藤は、やはり少年時代に犬を友とした間に強い共感を覚えている(6)。

私が存じあげていたサル学の研究家に間直之助先生という方がおられた。先生は少年の頃、発音が不自由な時期があったため、近所の子供と遊べず、仕方なく犬や猫を友だちにしたことから次第に動物に興味を抱かれた。東大の動物学科に進まれたのも更に京大の心理学科に入学されたのも、この少年時代の思い出が原点になっておられる。

私は先生の持つておられるそんなロマンチズムが好きで、後に先生に助けを頂きながら、サル

学の勉強をする男を主人公に『彼の生きかた』という小説を書いた。

遠藤は、取材のために間と比叡山に登ったときの驚きについても記している。

山に入っても私の眼には一匹の猿も見えない。だが突然立ちどまった先生が、「オー オー」とターザンのように谿に向けて叫ばれると、またたく間に猿の群れが林のなかや斜面の灌木の間から出現した。

「私が猿を飼おうと考えたのは、間先生の影響からである」と記す遠藤は、実際に渋谷の東横デパートからテナガザルを入手して、数日間過ごしたことすらあったようだ(7)。結局、家族の反対にあつてこの計画は頓挫した。「猿だけはどうしても飼わしてもらえないのです。猿というのは、下グセが悪くてね。喜怒哀楽のたびにタレ流すんですよ」(8)と遠藤は記している。

間について言及する同じ文章のなかで、遠藤はリヨン時代の猿との思い出を記している。遠藤にとって、少年時代に友であつた犬に匹敵する動物は、青年時代に孤独を慰めてくれた猿だったので。この点は、従来指摘されていないが、重要な事柄であると考えられる。そしてそこには、京大霊長類研究グループの「人猿一体」思想の背後にある、西洋キリスト教的認識とは異なる日本人の動物観がやはりあつたのである。

## 六 日本人の動物観とクリスチャンニズムの結合

このように、日本人の動物観を自身の中にも感じ取っていた遠藤だが、そうした動物観がキリスト教の信仰と結びついたとき、きわめて特異な思考が現れることとなる。

神のまなざしと動物のそれを置換可能と考えていたことを示す文章がある(9)。

私が中学校の時、雨の日に林のなかで首をつつた人がいた。警察がくるまで数人の人が騒いでいたが、林の入口に彼が飼っていた犬がじつと坐っていた。登校の途中、そこを通りかかった私は、前脚を首にのせて、主人の死んだ林を見ていた飼犬の眼を今でも忘れない。犬というのはそのようなものだ。

私が洗礼を受けたのは自分の意思ではなかつたが、その後、私にとってあの林にいた犬の眼が人間をみるイエスの眼に重なることがある。

小鳥だつてそうだ。私は十姉妹を飼つたことがあるが、その一羽が病気になる、私の手のなかで息を引きとつたことがあつた。うすい白い膜が彼の眼を覆いはじめる時——それは十字架で息を引きとつたイエスの眼を私に連想させた。

犬や小鳥はたんに犬や小鳥ではない。それは我々を包み、我々を遠くから見まもつていてくれるものの小さな投影なのだ。そう私は思うようになった。

動物のまなざしにイエスを重ねる思考は、代表作『侍』でも重要な場面で登場するが、このように、遠藤は、イエス(神)の眼が、犬(動物)の眼に宿つて人間を見るという思考を展開している。ここには、神—人間—動物、というヒエラルキー構造が存在していない。それどころか、イエスは人間の姿ではなく、犬や小鳥といった動物の姿をして人間の前に現れているのである。

## 七 人と猿、神と人

『彼の生きかた』のクライマックスは、大規模な猿の捕獲作戦が繰り広げられ、主人公が猿たちを率いて雪山に消えていく場面である(10)。

「ぼ、ぼくが、つ、つれていってやるさかい、ボスのかわりに、ぼ、ぼくが、つれていってやるさかい、も、もう人間の手の、とどかん場所に行こ。人間のよごれが、ち、近付かぬ場所に行こ」それから一平はまるでよろめいている男のように雪のなかを歩きだした。時折膝ちかくまで足の入る雪と闘いながら、彼が台地のむこうの森にむかって進むと、怯えながら、かたまっていた猿たちの群が急にちらばり、そのあとにつづいた。「……」

雪煙がまた炎のように舞のぼり、今。森のなかに入ろうとする一平と猿との姿を消した。その雪煙がおさまった時、もう彼等はどこにもみえず、ただ、まぶしいほどの純白の世界が皆の前に静かに拡がっているだけだった。「……」ひ とすじの足あとが森まで続いている。一平がよろめくようにして猿と共に歩いていった足あとである。

主人公一平（人間）は、サル（動物）とともに、銃口を背にして、よろめきながら歩いて行く。いわば、「人間」が「動物」になる。彼らが向かう世界は「善も悪もない」（河合雅雄）動物の世界。それはキリスト教的に申せばエデンの園である（11）。

ここでわれわれは『彼の生きかた』が新聞に連載される前年に刊行された長編小説『死海のほとり』のクライマックスを参照してみることにしよう。ゲルゼンの収容所に送り込まれた、かつて「ねずみ」と学生たちと呼ばれたポーランド人のキリスト教修道士が、ガス室に連行される場面である。語り手は、その光景を目撃した収容所の生還者のユダヤ人医師である。

行こうと言うと、彼は泣いて首をふりました。そして——私に——この私に彼の最後の日の食料になる筈だったコッペ・パンをくれたんです。

背広を着た独逸人が彼の左側に立って歩きだしました。うしろで私はじつとそれを見送っていました。コバルスキはよろめきながら温和しくついていきました。その時、私は一瞬——一瞬ですが、彼の右側にもう一人の誰かが、彼と同じようによろめき、足を曳きずつているのをこの眼で見たのです。その人はコバルスキと同じようにはじめな囚人の服装をして、コバルスキと同じように尿を地面にたれながら歩いていました……（12）

「同伴者イエス」（神）が、が囚人（人間）と一緒によろめきながら歩いて行く。この場面は、『彼の生きかた』の主人公と猿の姿と何と似ていることであろう。「神」は「人」となり、「人」は「猿」となる。

『彼の生きかた』では、キリスト教を思わせるものは表向きは全く語られていない。実利と虚栄を追い求める人間たちの、世俗の世界だけが語られている。登場する人物たちの造型は確かに類型的であるが、それぞれの人間的弱さが描き込まれているなど、登場人物たちの個性が描き分けられている。主人公は猿のことしか頭のない研究一筋の青年である。それだけに世俗の欲望から解放された青年として描かれはするが、自らも自覚する人間的弱さが露呈する場面を物語の大切な箇所周到に用意するなど、作者は無用な理想化は施していない。

だが、最後の場面で主人公は英雄的な行動に出る。それは神が人の同伴者となるがごとく、人が猿たちの「同伴者」となるということである。ここにおいて、遠藤は世俗的世界と宗教的世界とを重ね合わせてみせたのである。『彼の生きかた』の主人公一平は、猿の世界の救済者（イエス）の役割を担わされているのである。

## おわりに

『彼の生きかた』のクライマックスが『死海のほとり』のクライマックスの世俗的書き換えであるとは何を意味しているのだろうか。遠藤は、神に救済されるべき人間存在は、キリストに倣いて、隣

人のみならず、動物をも愛すべしと語っていると考えるのが自然であろう。『彼の生きかた』に宗教的道具立ては全く使われていないけれども、作者遠藤周作は、教条主義的ではないカトリック作家として、宗教的メッセージをこの作品に込めているのである。

- (1) 以下の諸文献に拠る。今西錦司「日本人による霊長類の野外研究―その二〇年間の回顧と将来への展望」(『増補版 今西錦司全集』第七巻、講談社、一九九四年、二二七―二三二頁)。河合雅雄・江原昭善「座談会霊長類学とは何か」(河合雅雄『進化の隣人 サルとの対話』毎日新聞社、一九九二年、二三〇―二三五頁)。藤原英司「解説」(『全集日本動物誌14』講談社、一九八三年、三四八―三六一頁)。
- (2) 以下の諸文献、サイトに拠る。間直之助「解説―一平のモデルよりひとこと」(遠藤周作『彼の生きかた』新潮文庫解説)。間直之助『サルになった男』(雷鳥社、一九七二年)。藤原英司「解説」(『全集日本動物誌14』講談社、一九八三年、三五八―三六一頁)。広瀬鎮『猿と日本人』(第一書房、一九八九年)二五一―二五五頁「比叡山の守護神―間直之助さん」。「安藤ハザマ」ホームページ。〈<http://www.ad-hzn.co.jp/corporate/history.html>〉 二〇一四年九月一六日確認。
- (3) 前節参照。
- (4) 河合雅雄『ニホンザルの生態』河出書房新社、一九八一年、三二七頁。
- (5) 河合雅雄『河合雅雄著作集10 学問の冒険』小学館、一九九七年、三九三頁。
- (6) 遠藤周作『わが最良の友 動物たち』グラフ社、二〇〇三年、一二四頁以下。
- (7) 同右、一三一―一四四頁。
- (8) 同右、一二七頁。
- (9) 遠藤周作『落第坊主の履歴書』文藝文庫、一九九三年、五二頁。
- (10) 遠藤周作『彼の生きかた』新潮文庫社、一九七七年、四七八頁。
- (11) 河合雅雄編『進化の隣人 サルとの対話』毎日新聞社、一九九二年年所収「座談会・霊長類学とは何か」での河合の発言。「……人間が作った人工的なものはすべて善と悪の両面を持つ、そこが人間という存在の不思議さだと思う。(原文改行) 自然が生み出す多彩な生命の糸を、進化という織り手がつむぎだす動物社会には、善も悪もない」。
- (12) SEZ3、二〇二頁。

## 第四節 『死海のほとり』(2)

### ——新約聖書学の衝撃から独自のイエス像へ

#### はじめに——近代聖書学とイエス研究の進展

遠藤の反ローマ的姿勢は、独自のイエス像である「同伴者イエス」が端的に示している。本節では、彼がいかにしてそのような独自のイエス像へと歩んでいったのかを辿ることとする。

はじめに、近代聖書学とイエス研究の展開について最低限の確認をしておくこととしたい。近代のイエス研究は、一八世紀ドイツの神学者ラーマイルスに始まる。英国理神論の影響を受けた彼の中には、歴史的イエスと原始キリスト教の不連続性といった考え方がすでに見られるのである。一九世紀半ば以降、教会の権威による狭義にとらわれず、聖書を科学的、実証主義的に研究しようという動きが高まる。この背景には、厳密な正文批判により、当時ようやく信頼に値する聖書テクストが確定されつつあったという事情もある。はじめに四福音書に書かれたイエスに関する「事実」を比較検討することにより、歴史の実在としてのイエスを復元することが企てられた。しかしこれは多くの解決不能な矛盾に直面した結果、科学的確定が不可能との結論に至った。次に各福音書の背後に多くの断片的な伝承群があると想定し、これらを類型として捉える方法が考え出された。一九二〇年前後にドイツで始まった様式史的研究がそれであり、プロテスタント神学者ブルトマンが有名である。様式史研究は、伝承類型の史の変遷を研究するが、各福音書記者がいかなる神学的傾向を持って伝承を叙述しているかという点に注意が払われない憾みがあった。そのため、一九五〇年代から、そうした弱点を克服する試みとして、福音書記者を編集者として捉える編集史的方法が提唱され、以後、聖書の歴史批評的研究方法の主流となった。

カトリック教会は近代聖書学の進展に深刻な脅威を覚え、一九〇七年に回勅を發布して教会内での批判的聖書研究に歯止めをかける。一九四三年の回勅で方向転換するまで、事実上近代的聖書研究は行われていない。カトリックの世界で様式史研究が採用され、プロテスタントの学者と同水準の研究が行われ始めたのは一九五〇年代に入ってからである。

日本においては、一九三〇年代から一九六〇年代終わりまで、内村鑑三に始まる無教会派の聖書学者が聖書の批判的研究を主導したとされる。塚本虎二など無教会派の学者が行う近代聖書学を用いたカトリック教会批判に対しては、司祭岩下壮一が教義学の立場から鋭い反論を行うが、太平洋戦争が始まる前に岩下は病没してしまう。そして、戦後は、ブルトマンらの業績が次々と本邦に紹介され、一九六〇年代には聖書学者による本格的なイエス研究が行われるようになる。一九七〇年代以降は、編集史的研究を用いた聖書学者により、世界的水準の聖書研究がなされるようになったのである(1)。

#### 一 新約聖書学が与えた衝撃

遠藤周作が聖書学者の書物を本格的に読み始めたのは、四〇代前半で『沈黙』(一九六六年)を書き終えた後からである。作家として一区切りつけた自覚のあった彼は、今後の針路を探るなかで、聖書の理解をより一層深めようと思ひ立ち、聖書学者の書物を手にした。具体的には、翻訳を通してブルトマンをはじめとする西洋の学者の書物を読んだのである。その結果、彼は聖書に関する理解を深めるどころか、自分の存在根拠が脅かされるような衝撃に襲われることとなった。何が起きたのか。

遠藤周作自身の言葉を引こう。

聖書学者たちによれば、イエスの死後、かなりの歳月の後に書かれた聖書はもはや現在には消滅したイエス語録を取り入れながらそこに原始基督教団の信仰から生まれた創作をまじえて執筆されたと言つてよいのである。したがつてイエスの本當の生涯は必ずしも聖書にそのまま記述されているのではなく、そこにイエス信仰から生まれたさまざまな創作場面が付加されている。

したがつてこれらの学者の代表者の一人、ブルトマンによれば史的イエス（事実のイエス）はさぐればさぐるほど困難になつてくるとも言えるのだ。つまり現在のイスラエルには真のイエスの足跡が地中深く埋められて、地上には伝承や裏づけのない巡礼費だけが散在しているように、聖書のなかにさえも、正確なイエスの生涯は原始基督教団の信仰から創られた付加物に覆われてしまつていると考へてもいいのである。

聖書学者たちがそれぞれの研究成果に基づいて書いたイエスの生涯を私は今日までかなり読んできた。悲しいことにはそれらの一つ一つはたがいに食い違ふ。この聖書に記述されている場面はたしかに本當のことだとある学者が言つているが他の学者はそれは後世の創作だと否定する。聖書学者ではない我々はその是非を判定する能力はないから、ただ戸惑うより仕方がないのである。（2）

要するに、聖書をキリスト・イエスについて調和的に書かれた書物として読むことができなくなつたのである。「戸惑うより仕方がない」と穏やかな表現をしているが、実際には深刻な衝撃を受けていた。遠藤周作は、少年時代からのカトリック信徒であり、聖書について、全体としては一つの統一的世界を構築しているものと捉えていたからである。聖書学が内包する爆弾のような衝撃力は、大学院で研究者として聖書を読み始めたときに「私の単純な信仰が少なくともそのままの形では学問研究の成果に耐ええないことを次第に思い知らされていった」と述懐していることから明らかであろう（3）。

もつとも、遠藤周作がカトリック教会の教義に全幅の信頼を抱いていたならば、問題はそれほど深刻ではなかつたと考えられる。岩下壮一の教義学よりする近代聖書学批判には、並々ならぬ説得力があるからである（4）。しかし「私にはカトリックの教義で納得のいかぬ点もあつたし、「……」現在の西洋のカトリック神学の大きな背景の一つになつて聖トマス思想と日本人の考えからの距離感をいつも抱きつづけてきた。」（5）と記すように、遠藤周作はカトリックの聖書解釈にも受け入れがたいものを感じていた。具体的には、処女降誕、奇跡行為、復活といった事柄を事実と見なすことと思われる。このような人間が、近代聖書学の緻密な論理に接したとき、大地が割れるような驚きを感じたとしても不思議はない。

椎名麟三に洗礼を授けたことでも知られるプロテスタント牧師赤岩栄は、カール・バルト神学から出発した人だが、やはりブルトマンの書物を読んだ結果、聖書の記述を従来のように調和的に読むことが不可能となり、その後の人生を大きく方向転換させた。彼は、自分の教会から日曜学校を廃止し、賛美歌を廃止し、祭壇を取り去る。そして最後に『キリスト教脱出記』（一九六四年）を書くに至るのである。頭脳明晰な人であつただけに、西洋的な論理的思考の呪縛から脱却すること、もしくはそれを相対化することが不可能であつたと思われる。ブルトマンを評して「講釈師見てきたような嘘を言い」と怒つたという椎名麟三は、赤岩栄の教会を去つていった（この言葉は後で引用する遠藤周作の日記中にある）。遠藤周作は赤岩栄と聖書学との関係に言及しつつ、「あの時期、私もそれに多生似た危機を自分のなかに感じはじめましたので、もう一度自分もじっくり聖書というものを読み返して再検討しようという考へになつていたんです。それで『イエスの生涯』を書きながら小説の『死海のほとり』をいつか心の中で準備したんじゃないかなとおもいます。」と回想している。（6）

## 二 新約聖書学への心理的反撥

生前に公開された一九六九年から翌年にかけての日記（全集第一五卷所収）を読むと、ホーダン、エレミアス、ブラーテン、シュタウファー、ボルンカムといった学者が登場する。遠藤周作は、個々の書物の内容以上に、彼らの学問的努力それ自体に強い心理的抵抗を覚えている。「哀しいことだが、こうした様式史批評の学者たちの書物をひもとくたびに私は自分の確信を強めるどころか、卑俗な好奇心を——聖書の内容を破壊しようとする現代人の卑俗な好奇心を満足させるだけである」（一九七〇年一月二〇日）、「彼等は自分たちの学問的追求が最も崇高だったものを卑俗化し、最も超自然だったものを日常的なものにし、最も劇的だったものを屑のような台本にしてしまうのだ。」「小説家としてこういう神学者の本を読む時、自分は彼等がこれらの本を書き終わって自分の裡の最も大切であった部分を失い、空虚感にぼんやりしている姿を想像してしまふ。」（同年一月二二日）、「様式歴史派の神学者は自分の尾を呑んでいく蛇に似ている。あるいは自分の足を食べる章魚に似ている。」（同年二月一四日）といった批判的言葉を書き付けているのである。

様式史研究が福音書研究に新局面を切り拓いたのは事実だが、学者ごとに個別的分析結果が相異なるのもまた事実である。また「様式史の研究者によってこのように分析されると、福音書記者は、ばらばらの伝承を集めて、たいして深く考えることなくそれをつぎはぎ細工しただけであって、福音書はいたところに「論理的飛躍」がある惨憺たる文書だというイメージが浮かび上がってくる」（7）と指摘されるように、福音書全体としての統治的世界像が毀損されてしまうというところも問題だ。

近代聖書学には反教権的意識が濃厚にあるが、その裏返しとして人間知性に対する信仰的といつてよいほどの信頼——すなわち精緻な分析を重ねれば真理に到達するという確信がある。そこから慎ましさに欠けた権威主義が顔を出す場合がある。それも「教会の外に救いなし」とした第二ヴァチカン公会議以前のカトリック教会の権威主義と等しく、遠藤周作に強い反撥を感じさせたことだろう。面白いことに、言語論理による徹底した明晰さの追求は、スコラ神学にも近代聖書学にも共通する。両者はともに、西洋文明の落とし子なのである。

聖書学者の仕事に強い反撥を感じてはいたのは事実だが、それを椎名麟三のごとく大胆に拒絶することが遠藤周作にはできなかった。「彼等の研究や労作は、私のように聖書をひもとく日本の小説家にも教えてくれることが余りにも大きいことを承知して」いたからである。（8）

### 三 独自のイエス像を求めて

聖書と聖書学の書物を熟読するうちに、日本人に実感をもって理解されるイエス像を書かねばならないという思いが次第に強くなっていく。こうした使命感は、他のカトリック作家には見られないものだ。遠藤周作自身が何よりもそれを必要としていたのである。彼は教義上のイエスにも聖書学上のイエスにも心底からの納得がいかなかったから、自分自身の手でイエス像を構築するしかなかったのである。特に、新約聖書学の圧倒的な研究成果は、牧師赤岩栄を呑み込んだように、作家遠藤周作を呑み込んでしまうエネルギーがあったと想像される。

遠藤周作は、取材のためにイスラエルにも何度か足を運んでいるが、そこでも聖書学者の書物から受けたような打撃を受けている。

エルサレムの旧市街の汚水と家畜の糞でよごれた狭い路には「ここで十字架を背負ったイエスが倒れ給うた」と書いた、いわゆる十字架の道ゆきの一つ一つの銅板が壁にはめこまれているが、これなどは全く嘘である。イエス時代のエルサレムはその後、徹底的に破壊され、その残骸は現在の市の五十メートルほど下の埋もれているからだ。

最初、それを教えられた時は言いようもない失望感と幻滅とを感じた。私は小説家としても、イ



エスが歩かれた路、イエスが坐られた場所をこの眼で見、この手で触れたかったのである。(9)

言いようもない失望感と幻滅——この言葉から、遠藤周作が大人になってからも少年のような純朴さを持つていたことがうかがわれよう。この文章の後に、最初に引用した聖書学者に関する件りが繋がるのだが、それに続けて「イスラエルをたびたび訪れた私はエルサレムの陽光きびしい街角で、あるいはガリラヤ湖の岸辺で、もう、そろそろ、その戸惑いから脱却せねばと思った。一体、本当のイエスの生涯はどんなものだったのか。それを私は私なりに掴んでみたいと思った。」と記している。この切実な思いが、やがて評伝『イエスの生涯』(一九七三年)と小説『死海のほとり』(一九七三年)に結実する。

#### 四 『イエスの生涯』と新約聖書学の研究成果

『イエスの生涯』は、そもそも『死海のほとり』の創作ノートとして書き出されたものだ。人間イエスを、歴史的研究を無視することなく文学として描こうとしている。その際、基本的資料については教会が正典とした四福音書に限定している。この点で、彼が描き出すイエス像は必ずしもカトリック教会的ではないが、思考のフレームはカトリック的である。グノーシス文書や古代キリスト教大衆文学を参照したならば、より多様なイエス像に接することができ、違ったイエス像が描き出された可能性がある。しかし、新約聖書外典がまとまって我が国知識層に紹介されたのは、彼が『イエスの生涯』を刊行した翌年に、講談社版『聖書の世界』別巻が出て以後のことであった。

先にも記したとおり、聖書学者の研究成果を踏まえた作品にしようとする著者は企てている。たとえば、処女降誕、奇跡行為、復活については、これらを物理的現実世界における歴史的事実ではないとしている。ただし、彼は聖書学者とは異なり、「事実」と「真実」を区別して、これらのことがらについて、「事実」ではないが、「真実」であるとしている。また、イエスと原始キリスト教との不連続性についてはこれを認めない。「私は最近の聖書学者たちの研究を無視しなかった。逆にこれらの研究は「私のイエス」を浮かびあがらせるのに補強の役割をしてくれたと思っている。」(『イエス・キリスト』あとがき)と遠藤は記している。これは自分を聖書学者よりも優位に見なす不遜の言ではない。聖書学の論理に自分が閉じ込められてしまわないため、作家として芸術創造というコンテクストに聖書学の成果も置かせてもらったと語っているのである(遠藤が参照した聖書学者の書物については、菅原とよ子の博士論文「遠藤周作論——『アデンまで』から『イエスの生涯』までにおける「同伴者イエス」追究の過程」九州大学、二〇一二年参照)。

著者の意図が人間イエスの探求にあったことは事実だが、この書物自体が最終的に語ろうとしているのが「同伴者イエス」という「イメージ」であることにわれわれは注目しなければならない。「同伴者イエス」は、遠藤周作のイエスであり、歴史的事実としてのイエスではない。したがって、学術的に正否を論じるべきものではないのだ(10)。

#### 五 『死海のほとり』に見られる聖書学者批判

『死海のほとり』は、作者を思わせる四〇代の小説家が主人公である。いささかの世間名はあるが、実はキリスト教の信仰者としては危機に陥っているという設定である。彼はイエスとの関係に「けりをつける」ためにイスラエルに赴き、現地で学生時代の友人である聖書学者と再会する。彼の案内で市内を見て歩くが、そこで主人公は、先のエッセイの言葉を借りれば「言いようのない失望感と幻滅」とを味わう。この聖書学者は、やはり先に引用した日記中の言葉を借りれば、自分の「学問的追求が最も崇高であったものを卑俗化し」「自分の裡の最も大切であった部分を失い、空虚感にぼんやりしている」人間として造型されている。彼はイエスを見失っているのである。この二人の現在の物語と、古代イスラエルを舞台としたイエスの物語とが、交互に語られていく。イエスは奇跡を行わず、ただ

そこにいるだけの、徹底的に無力な男として描かれている。そして小説の最後で、ナチスのガス室に連れて行かれる男の脇に同伴するイエスの幻が語られる。「同伴者イエス」である。このイエスの幻が主人公の魂を救済する予感を湛えて物語は閉じられる。

私の見るところでは、いかに単純素朴なものであったとしても、人々がそれぞれに大切にしてきた統一的イメージとしてのイエス像を見失わせることが、聖書学がもたらす最大の問題点であると、遠藤周作は考えていた。先に引用した佐藤泰正との対談で、彼は『死海のほとり』に言及し「作者としてはあれは大事な作品で、ひとつの礎石」であると語っている。生命力に満ちたイメージとしてのイエスこそが大切なのだという確信に遠藤周作が行き着いた、記念すべき作品だからであろう。しかし残念なことに、文壇的評価は芳しくなかった。迫害による信仰の危機を主題とした『沈黙』と違って、内部からの信仰の危機という主題を扱ったこの作品は、キリスト教と縁の薄い日本人読者には共感することが難しかったのではないだろうか。

### おわりに——歴史上のイエス、教義上のイエス、イメージとしてのイエス

その後、遠藤周作は『キリストの誕生』（一九七八年）を書き、『イエスの生涯』（一九七三年）と合本して『イエス・キリスト』（一九八三年）とする。遠藤周作独自のキリスト・イエス像がここに完成した。『沈黙』から一七年の歳月が経過していた。

やがて彼はスイスの深層心理学者ユングに傾斜していく。「教会の外にいる人々のための」ユング心理学は、またイメージの心理学でもある。理知的な人であっただけに、かえって、言語論理を超越し、多様な解釈を許容するイメージというものに惹かれていったものと考えられる。現実の母親とイメージの母親が違うように、歴史上のイエス、教義上のイエス、イメージとしてのイエスは、それぞれ異なるに違いない。しかし、人々の心のなかに生き、いきいきと働きかけるものは、おそらくはイメージとして体験されるイエスなのである。四〇代の頃、彼は西洋美術史上のイエス像の変遷について研究することを考えたこともある。イメージの大切さについてはすでに十分に認識していたのだ。

聖書学者が遠藤周作の著書『イエス・キリスト』を学問的に無価値だというのはもつともなことである。そもそも「イエス物」の小説や映画が商業的に成功する一般的傾向を聖書学者は歓迎していない。学術的に疑わしいイエス像が社会に拡がることを懸念するからである(11)。しかし「同伴者イエス」こそが本当のイエス像だと主張できないように、これは本当のイエス像ではないと断言することもできない。また生命を持つイメージを、死んだ標本のように概念的に捉えてはならないことも銘記すべきである。「同伴者イエス」が読者一人一人のなかでどのように生きるのかを一般化することはできない。

以上見てきたように、新約聖書学の衝撃は、遠藤周作が独自のイエス像を生み出すための跳躍台の役割を果たしたのである。

- (1) 本節の記述は、主に、大貫隆・佐藤研編『イエス研究史』第三章から第一〇章、加藤隆『新約聖書はなぜギリシア語で書かれたか』第二部第一〇章、田川建三『書物としての新約聖書』第四章に拠る。
- (2) KEZ 10、三九三―三九四頁。
- (3) 荒井献『イエス・キリスト』講談社、一九七九年、一二頁。
- (4) 岩下壮一『カトリックの信仰』講談社学術文庫、一九九四年、第八章及び第九章参照。
- (5) 遠藤周作「初心忘るべからず」『遠藤周作による遠藤周作』青銅社、一九八〇年、一三一頁。
- (6) 遠藤周作・佐藤泰正『人生の同伴者』新潮文庫、一六六頁。
- (7) 加藤隆、前掲書、一八三頁。
- (8) SEZ 11、二一七頁。
- (9) KEZ 10、三九二頁。
- (10) 新約聖書学者荒井献は「私は、遠藤が福音書のどの箇所から「同伴者」イエスというイメージを得たのか、具

体的には知らない。恐らくそれは、山上の垂訓などから感得されたイエスの像なのである」と述べてるとともに、ルカ伝一五・四の「あなたがたの中に百匹の羊を持つ人がいて、それらの中の一匹を失った。その人は九十九匹を荒野に放置し、いなくなった羊を見つけるまで、そのもとに歩いて行かないであろうか」という箇所が、「同伴者」というイメージに合致することを指摘した上で、「ルカのイエスが在任の悔改めを宣教し、マタイのイエスが罪の誘惑に陥りやすい者に対する牧会的配慮を教示しているとすれば、「弱者」の「同伴者」という遠藤のイエスは、比較的ルカやマタイのイエスに近いといえるであろう」と述べている（荒井献『「同伴者」イエス——小論・講演集』新地書房、一九八五年、二二頁）。

(11) 新約聖書学者田川建三は、『宗教とは何か』（大和書房、一九八四年）第四部で遠藤の『イエスの生涯』を採り上げ、徹底した学術的批判を加えている。新約聖書学者側が文学者によるイエス像をどのように見ていたかがよくわかる著作である。なお、『宗教とは何か（上）——宗教批判をめぐる「改訂増補版」』（洋泉社、二〇〇六年）では遠藤批判は第三部に該当する。

## 第十章 「帝国医療」との関わり

### 第一節 「ジュールダン病院」「雑木林の病棟」

#### ——伝染病・人体実験・西洋医学

#### はじめに

本章では、「帝国医療」という分析概念を用いて、遠藤と近代西洋医学との関わりを考察する。最初に、彼の作品に描かれた病院を考察することにより、帝国主義時代のヨーロッパの植民地政策と強く結びついた近代西洋医療とキリスト教との関係について浮かび上がらせる。対象とする作品は、「ジュールダン病院」(1)と「雑木林の病棟」(2)の二作である。次に、遠藤が一九八〇年代に展開した「心あたかな医療」キャンペーンを考察する。さらに、遠藤の非西洋的なイエス像が西洋世界に受け入れられていった時期と、アフリカ人の救済者と崇敬された医師シュヴァイツァーに対する批判が増大していった時期とが重なることに注目し、それがともにポストコロニアルの時代精神に拠るものであることを指摘する。

遠藤は、フランス留学時代に肺結核と診断されてパリの学生病院に入院したことがあった。帰国して一〇年後の一九六〇年には、肺結核が再発して東京大学伝染病研究所病院に二度入院し、その後、慶應義塾大学病院に転院している。そして一九六一年には肺結核の外科手術を三度にわたり受けている。六時間に及んだ最後の手術は成功したが、退院したのは一九六二年になってからのことであった。肺結核という感染症は、かつては罹患者が非常に多く、死亡率も高い病気であった。ストレプトマイシンやイソニアジドといった特效薬が医療現場で広く用いられるようになる以前、一九五〇年代は、胸郭整成術や肺切除といった外科的治療が主流だったのである。実生活上のこうした医療体験は、当然のことながら、遠藤の人間観と文学に大きな影響を与えている。実際、遠藤の小説には病院を舞台にしたものが少なくない。『海と毒薬』(一九五七年)前後からの短篇にその傾向が顕著である。「ジュールダン病院」(一九五六年)、「男と九官鳥」(一九五八年)、「その前日」(一九五八年)、「四十歳の男」(一九五九年)、「雑木林の病棟」(一九六三年)、「大部屋」(一九六五年)などが挙げられる。

#### 一 「ジュールダン病院」——伝染病・人体実験・キリスト教

「ジュールダン病院」は、肺結核の診断を受けた日本人男性主人公が、リヨンからパリに移り、学生病院に入院する物語である。一九五三年一二月という特定の時間を物語の現在としたこの作品が、遠藤の経歴を素材にしたものであることは明らかである。ジュールダン病院というタイトルは、実際に作者が入院した病院と同一である。もっとも、物語自体はいわゆる私小説ではなく、創作された虚構と考えるべきである。

当時の日本人留学生がフランス社会のなかで抱いた文化的違和感や人種差別体験、日本人留学生に対する葛藤などを描いたこの小説については、すでに先行研究がある(3)。しかし、ここで改めて照明を当てたいことは、主人公の内面ではなく、作品に描き込まれた、近代西洋医療とキリスト教との結びつきなのである。

主人公が入院した病室には、「五十すぎの老人」ジャンと「若い男」ジョルジュが左右のベッドに寝ている。いずれも白人のフランス人で、ジャンは学校の小吏、ジョルジュも師範学校事務員である。彼らもまた肺結核に罹患しているが、ジョルジュが比較的軽症なのに対して、ジャンは「手術をするには既に両肺が侵され、気胸を行うには肋膜が胸郭について」おり、死を待つのみ重症患者である。つまり、年齢的には、ジョルジュ、主人公、ジャンの順で高くなり、病理学的な進行状況もまた、ジョルジュと主人公が比較的軽症で、ジャンが末期という設定になっている。死を待つジャンは、肺結核が進行していった場合の、未来のジョルジュの姿にほかならない。

ジョルジュは、教育者を育成する学校の職員であるにもかかわらず、「マルセイユで日本の淫売婦と寝たことがある」と、日本人男性である主人公に平気で自慢するような、人種差別、女性差別に無自覚な人物である。主人公もまた、「日本人が南京やマニラや仏印で犯したこと」、「いわゆる「南京大虐殺」「マニラ大虐殺」を気に病んでいる。当時の日本は、きわめて残酷な国民というイメージがフランス社会で濃厚だったからである。彼はリヨン時代に、インドシナの捕虜収容所で日本兵に拷問されて片脚を悪くしたフランス人男性から投げかけられた「拷問されて殺された者は生きかえりはせん。この足だって、元には戻りはせん」という言葉と、憐れむような悲しげな微笑から逃れることができない。ジャンもまた、対独協力ヴィシー政権時代に子どもを亡くしており、いつでも「涙を眼にためて、なくなった子供の写真を眺めて」いる。要するに、三人ともに、何かしらの意味で、帝国主義時代の歴史の亡霊を黒々と引きずっているのである。

病院の日常は淡々としていて、規則正しい食事と安静にしていること、定期的な検査のくり返しである。重症患者には外科手術が行われているが、主人公もジョルジュもそこまで悪いわけではないし、ジャンは反対に重症過ぎて手術が行えず、「パス」(抗生物質。パラアミノサリチル酸)の静脈注射をする程度の治療しかできないのである。

別の階に、ポーランド人男性患者が入院している。彼はナチスによる人体実験の被験者だった(4)。主人公は、夜中の悲鳴のような呻き声で彼の存在を知ったのであった。「ダハウの収容所でな、独逸人の医者から細菌を注射されたのだとよ。まるでモルモットの代りじゃねえか。その男、十年も方々の病院をまわって、もう駄目らしいぜ」とジョルジュは主人公に説明する。彼はその後、容体が悪くなり、死亡する。雪の降るクリスマス午後に、彼の遺体が中庭から木箱に入れられ、幌付きトラックに積み込まれる光景を主人公は眺める。トラックのかたわらには司祭が立っている。

物語の最後は、その夜、図書室で行われたミサにカトリック信徒の主人公が足を運び、司祭に告解をしようとしてどうしても後の言葉が出てこないところで終わる。

日本人留学生の友との心理的葛藤や、病院図書館で日本語の個人教授をするフランス人女性とのさやかな交流などについては割愛したが、以上のように、この作品に点描される素材を眺めてみると、治療が容易でない結核という伝染病、ナチスによる細菌の人体実験、死を見守るカトリック司祭という三要素が重要な役割を果たしていることが理解される。

特效薬の開発が進んだ今日では、結核は、かつてのような「死の病」ではない。とはいえ、現在でも罹患者は世界各地に多く、決して侮ることができない病気であり、日本だけがその例外であるというわけではない(5)。とはいえ、結核に罹ることがきわめて珍しいこととなった現時点で読むと、主人公をはじめとする入院患者たちが胸に抱く死の恐怖を、読者がリアリティをもって受け止めることが難しくなっているのはやむを得ないことである。

伝染病の原因である病原菌が発見されたことで、近代西洋医学が、人類の生存を脅かす病の科学的克服に大きな飛躍をもたらしたことは人類的事実である。だが、「ジュールダン病院」で描かれる世界にあつては、伝染病たる結核は治癒の容易でない病であり続け、近代西洋医学は、輝かしい勝利を結

核に対して収めるには至っていない。それどころか、近代西洋医学は、科学の名の下に、病原菌を意図的に人体に入れることで、多くの人命を奪い、生存者にも回復し難い健康被害をもたらした、人類の拭い去ることのできない汚点と結びつけて描かれている。そして、死せる患者の亡骸の運搬に立ち会い、罪人たる人間から告解を受ける司祭、すなわちキリスト教もまた、ただ無力なのである。

## 二 「雑木林の病棟」——植民地主義・キリスト教・近代西洋医学

伝染病と近代西洋医学、そしてキリスト教の結びつきをさらに明確に描き出しているのが「雑木林の病棟」である。この作品では、結核よりもさらに怖ろしい病気であったハンセン病と、カトリック修道会が運営する富士山麓にある「癩病院」が扱われている。時代は一九六〇年である。知人のフォトグラファーが雑誌の取材でここを訪れると聞いた主人公が、同行を願い出たという設定である。彼は一九年前の学生時代に、この病院の院長だった日本人神父が創設した学生寮において、年に一度の病院慰問に行ったことがあったことから、再訪する気になったのである。この病院のモデルが、カトリック司祭岩下壮一（一八八九—一九四〇）の神山復生病院であり、作者遠藤が戦時中の一九四三年にここを慰問に訪れたことは、改めて確認するまでもないだろう。

名高い場面ではあるが、小説のなかで、主人公は青年時代に自分がここを訪れたときに、病気に感染することを恐怖して、患者たちとの親善野球の際に忘れられない体験をしたことが回想される。一墨手と二墨手に挟まれた自分に、追いかけてきた患者は、ただ静かに「お行き、なさい」と繰り返したのであった。「彼はぼくの体に球をふれなかった……」。感染を恐れて患者との身体的接触を極度に恐れる自分。その自分に対する深い嫌悪が、ここでは語られていた（6）。

新薬の開発発により、物語の現在において、入院患者の六割が無菌者であると中年の外国人修道女から主人公は教えられる。かつて患者たちと野球をした場所は、墓地になっていた。そこには「お行き、なさい」と自分に言った患者が眠っているのかもしれないと主人公は思う。そして、一緒に慰問に訪れた仲間たちの何人かもまた、ニューギニアの戦場で、あるいはアメリカ軍が投下した原子爆弾によってすでにこの世にいないことも考える。

案内してくれた外国人修道女が、ある患者の変形した手の指を一本ずつさすってやる場面がある。

困惑したまま、ぼくはまだ一本一本、松井さんの指をさすっている修道女の白人らしい大きな手を見ていた。おそらく彼女は今一種のヒロイズムを、ぼくに見せたかったのだろう。あたしたちは病気なんてこわくないのです。ごらんなさい。あたしはこうして患者の崩れた指を握り、さすっています。

これはたしかに偽善ではなかった。しかし偽善ではないにしろ、この修道女のような立派な女性でも捨てることのできぬ最後の虚栄心にちがいがなかった。でなければ、彼女は自分のみにくい指を他人に曝されて狼狽している松井さんの気持がわかる筈だ。（7）

この後、主人公は病院の図書室で同行したフォトグラファーが来るのを待つときに、グレアム・グリーンの小説を偶然見つける。手にとってぱらぱらと眺めるうちに、ある場面に目が止まった。

新薬、D・T・Tができた時、アフリカの癩院の修道女たちの間に、パニックが起きた。修道女たちの中には医師にこう訊ねた者もいた。

「すると、やがて、患者たちはいなくなるのですか」

「そうです。病院の必要もなくなる日もくるでしょう」

「すると、あたしたちが生涯、愛徳を実践する場所も機会もなくなるのですか」

修道女たちは、自分たちの愛を燃やす機会が新薬のたえに永遠に失われることに辛がったという。その箇所をよみながら、ぼくはさきほど松井さんの屈折した指をさすっていた白人修道女の掌と、

その挑むような眼を思いだした。(8)

ここに出てくる小説は、おそらくベルギー領コンゴのハンセン病施設を舞台としたグリーン『燃えつきた人間』(田中西二郎訳、早川書房、一九六一年)と思われるが、ここではもちろん、近代西洋植民地主義と結びついたキリスト教及び近代西洋医学へのイロニーが描き出されているのである(9)。改めていうまでもないが、カトリック教会関係者の愛徳の実践のためにアフリカのハンセン病施設が存在するわけではない。ここには目的と手段とが完全に倒錯した世界がある。

植民地経営の必要上、現地住民の衛生管理が必要となったヨーロッパが、熱帯地方の伝染病対策という課題解決のために近代西洋医学を導入した際、宣教の使命に燃えるキリスト教関係者たちもまたアフリカに渡っていったことは、周知の歴史的事実である。近代西洋医学は、輝かしい西洋文明を象徴するものであり、未開で野蛮な植民地世界に光をもたらす救世主のようなものであった。そしてそこには、本国から植民する人々とともに、カトリック司祭や修道女たちの存在もあつたのだ。

次節で用いる「帝国医療」という分析概念は、植民地主義とともに歩んだ近代西洋医療の歴史的出自を想起させるものであるが、遠藤は、カトリック修道女を主人公にした辻邦生の「北の岬」(一九六六年)ようには、第三世界におけるカトリック修道会の医療奉仕活動を、過度に理想視していなかったのである。

## おわりに

従来は、遠藤文学に表象された近代西洋医療については注目されてこなかった。それは主人公の内面に焦点をあてて読み解くことが文学研究の王道であるからにほかならない。しかし、本節で見えてきたように、近代西洋医療史というコンテクストに照らして改めて考察すると、遠藤のテクストには、伝染病と近代西洋医療、植民地主義、キリスト教の歴史的結合が、フランスと日本の病院を舞台に丁寧に描き込まれていたことがわかる。それは具体的には、結核やハンセン病といった感染症に対する人々の恐怖と、非ヨーロッパ世界を含む近代西洋医療の全域的普及、そしてそこに関わったカトリック関係者が持つ、きわめて人間的な虚栄心や、愛徳の実践をめぐる目的と手段との倒錯であり、輝かしい科学の勝利の裏面に黒々とはり付いている人体実験のごとき歴史の暗部である。

近代西洋医療は、それが今日ではあまりにも当然のことながらとして社会に存在しているがゆえに、歴史的出自を考えて見る機会に乏しい。けれど遠藤は、キリスト教徒であり、肺結核という伝染病罹患者であり、フランス留学を通じてヨーロッパ人のコロニアリタリティを体験していたがゆえに、それらの繋がりを見破ることが可能だったのである。

(1) 初出は『別冊文藝春秋』一九五九年二月号。『海と毒薬』(文藝春秋、一九五八年)に収録された。

(2) 初出は『世界』一九六三年一〇月号。『哀歌』(講談社、一九六五年)に収録された。この作品の契機となった御殿場の神山復生病院再訪については、「ハンセン氏病院院」『近代文学』一九六四年一月号(『春は馬車に乗って』文春文庫、一九九二年所収)参照。

(3) リチャード・ローガン「遠藤周作とパリ(英文)」『言語と文化』二四号、二〇二年、文教大学大学院言語文化研究科付属言語文化研究所。

(4) ナチスの人体実験については、以下の文献を参照。アレキサンダーミッチャーリッヒ、フレートミールケ『人間性なき医学―ナチスと人体実験』訳、ビイング・ネット・プレス、二〇〇一年)、小侯和一郎『検証・人体実験―731部隊・ナチ医学』(第三書館、二〇〇三年)。なお、遠藤周作のエッセイ「帰国まで」(全集14巻所収)によれば、遠藤が入院したジュルダン病院に、車椅子に乗せられた骸骨のような中年女性患者がおり、看護師からナチスの人体実験に使われたと教えられたという。「私はその時、なぜか、ナチだけではなく、ヨーロッパの悪の深さのようなものを感じた。／このヨーロッパは日本人の感覚ではついていけぬ何かがある」と遠藤は記している(『全集』14巻、二一九頁)。

(5) ハンセン病院慰問訪問の際のこの挿話は、「雑木林の病棟」の四年前に書かれた短篇「イヤな奴」(『新潮』一九五九年四月号)ですすでに描かれていた。

(6) 日本における結核とその治療の歴史については、青木正和『結核の歴史―日本社会との関わりその過去、現在、未来』(講談社、二〇〇三年)を、また文化史的考察は、福田真人『結核という文化―病の比較文化史』(中公新書、二〇〇一年)参照。

(7) SEZ6、一六四頁。この場面の下敷きとなった自身の体験を、遠藤は講演「本当の「私」を求めて」(紀伊國屋ホール、一九八六年七月一日)で語っている。小説に登場する「松井さん」は、講演では「山田さん」という老女である。「その時、ふと山田さんの顔を見ると、ものすごく苦痛の色を浮かべていた。アツと気づいたのですが、山田さんにとって、私のような院外の者の前で自分の曲がった手を晒されるなんて、とても恥ずかしくて辛いことなんですね。私はそういう心の動きがあるのを、恥ずかしながら知らなかった。修道女も知らないでいる。「原文改行」これは批判しているのではないのです。ただ、患者さんの手をさすっているという行為には、いたわる気持ちや優しさと同時に、自己顕示や自己満足や虚栄心みたいなものも混じっている。それは修道女自身だって気がついていない。「……」これは人間の業みたいなもので、仕方がないし、それでも素晴らしいことをやっているのに違いはないし、私は尊敬します。しかし問題は、その修道女が自分のエゴイズムに気づいていないという点です」(遠藤周作『人生の踏絵』新潮社、二〇一七年、一七八頁)。この講演では、このときの修道女が日本人なのか外国人なのか不明である。小説のなかで修道女を白人に設定しているのは、近代西洋が「自分のエゴイズムに気づいていない」との含意を暗示するためであろう。

(8) 同右、一六五頁。

(9) 『燃えつきた人間』第一章には、以下のような登場人物同士の会話がある。コラン博士が、院長の神父に「患者は、自分が愛されているのか、それとも愛されているのは自分の癩病だけなのか、いつでも探りだすことができますよ。私は癩病が愛されるのを望みません「……」」といった後に、次のように続けるのである。「あなたは修道女たちが経営していたジャングルの中の小さな癩院をおぼえておいででしょう。DDSで治療することが発見されたとき、あそこは間もなく五、六人の患者しかいなくなりました。修道女たちの一人がわたしに何を言ったとお思いですか? 『おそろしいことですね、先生。いまにここには癩者がひとりもいなくなるんですよね』あそこにはレプロフィールがたしかに一人はいたわけです」(田中西二郎訳、早川書房、一九六一年、二二頁)。「レプロフィール」とは「癩偏愛症」のことである。「そういう女たちは、福音書のなかの女のように、自分の髪で足を洗うのを、もつと防腐力のあるもので清潔にすることよりも好むようです」(同書二〇頁)。



## 第二節 「心あたたかな医療」キャンペーン ——植民地主義・近代西洋医学・キリスト教宣教

### はじめに

遠藤は、一九八二年から一九八五年にかけて、「心あたたかな医療」キャンペーンを行った。この社会的実践活動は、一九八〇年、五七歳のときに、お手伝いとして遠藤家に通っていた鈴木友子が、骨髄癌のため二五歳の若さで死去したことが強い動機となっている。余命二カ月の彼女が、病院で「検査漬け」になって苦しんでいたことから、「心あたたかな病院がほしいなア」（1）と考えたのである。

遠藤自身、一九六〇年から一九六二年にかけて、肺結核再発で東京大学病院に入院し、慶應義塾大学病院に転院して三度の外科手術を受けた経験を持っていた。また、一九八〇年には上顎癌の疑いで慶應義塾大学病院に入院、蓄膿症の手術を行っている。幸いなことに癌の疑いは晴れたものの、退院後も健康状態は優れず、糖尿病が悪化した。一九八一年も、高血圧、糖尿病、肝臓病が悪化して自宅療養に努めたが、自らの死を意識することがあった。このような経緯が、このキャンペーンの背景にはあったのである。

最初は、新聞社に原稿を持ち込んで、「患者からのささやかな願い」という文章を、『讀賣新聞』夕刊に六回にわたり発表した（一九八二年四月四日―四月九日）。この文章が大きな反響を呼び、二ヶ月間に三〇〇通の手紙が遠藤のもとに届いた。そのなかには、医療関係者からのものもあった。こうしたことから、遠藤は医療関係者との対話を『週刊読売』誌上で行うことになった。それらは同誌一九八二年八月二二日号から一月二一日号まで、七回に亘り連載された（2）。遠藤への手紙は、総計七〇〇通にのぼった。そこで遠藤は、『週刊読売』一九八三年九月一八日号から、一月二五日号まで、三ヶ月間にわたり、ふたたび医療関係者等との対話を連載した（3）。同時に『讀賣新聞』紙上でも同様の対話を一九八三年一月から一九八五年九月にかけて四回行った（4）。

二次にわたるこのような大規模なキャンペーンを行い、それらをまとめて『遠藤周作のあたたかな医療を考える』として、一九八六年に読売新聞社から刊行した。以上が、遠藤の「心あたたかな医療」キャンペーンの概略である。

このキャンペーンは、遠藤が社会的実践活動に本格的に取り組んだ、初めてで唯一となる行為であった。その意味で、遠藤周作という小説家を考える上で無視することができないはずだが、これまで学術的な研究対象とはされてこなかった。素人劇団「樹座」の活動が作家の遊びと見なされてきたように、この社会的実践活動もまた、作家の文学的業績とは直接関係がないがために、研究者から軽視されてきたのである。

しかし、遠藤がこれほどまでにエネルギーを注いだキャンペーン活動を、彼の文学的業績と切り離して考えることは、むしろ不自然な態度なのではないだろうか。少なくとも、一度は考察の対象としてみる必要があるであろう。そこで、本章では、帝国医療という分析概念を援用して、遠藤の「心あたたかな医療」キャンペーンを、彼の文学的業績を視野に収めつつ考察してみることにはしたい。

### 一 「心あたたかな医療キャンペーン」の内容

「心あたたかな医療」キャンペーンで遠藤が訴えたいと思ったことは、どのようなことだったので

あろうか。まずはそれを確認しておきたい。

遠藤は、「医療の現状を非難したり、現在では不可能なことを、正義の御旗をたてて弾劾するような考えは毛頭ありません」。「だから私がこれから書くことは、現在の医療制度の批判や医療の倫理を促すような大それたことではありません。かつて患者だった者の経験から、実現可能と思われるやさやかな願いを語りたいのです」と前置きをした上で、立派な病院の巨大な建物や完備した医療設備に感心しながらも、「何か欠けている」という気がすることがあると述べ、次のように話を進める。

それはここでは病気を治そうと試みているが、病気にかかった人の孤独感や苦しみを慰める点ではほとんど神経を使っていない。つまり医者や看護婦さんの努力や善意にかかわらず、日本の病院そのものは重症患者の孤独感や絶望感にはあまり心をくぐっていない気がするのです。(5)

『讀賣新聞』連載の第一回でこのように問題提起した遠藤は、第二回で、「病院はたとえ教会ではなくとも、肉体の治療のほかには心の慰めを必要とする場所ではないでしょうか」と述べるとともに、採尿した紙コップを若い女性患者が衆人のいる廊下を歩かされたり、診察のやりとりがカーテン越しに次の患者にも聞こえてしまうような、大病院の無神経さについて言及する。そこには患者への細やかな配慮がまったく欠如しているのである。第三回では、あと二ヶ月しか生きられない患者(遠藤家のお手伝い)に、なぜ辛い検査をさらに行うのか。おそらくは研究データを集めるためだろう。しかしそれは患者の立場から考えれば悲しいことであると述べ、「一人一人の医師の善意は承知していても、私には日本の医学界や病院にはまだ患者に苦痛や屈辱を平気で与えている傾向が残っていると、残念ながら思わざるをえません」と問題を一般化するとともに、「医学とは学問ですが、他の学問とは違うもの、人間が人間と交流する学問ではないのでしょうか」とも述べた。第四回では、医師が患者の心の悩みをくみ取ることができず、「わがままな患者」「わるい患者」というレッテルを貼りがちなことを指摘し、杓子定規な面会時間も融通を利かせることができぬものだろうか、また自分がかつて入院したフランスの病院のように、病院内に宗派を越えて祈ることができるようなチャペルがある大病院が日本に存在するだろうかと問いかけている。第四回までの間に、遠藤のもとには医師や看護師から手紙が届き始めていた。第五回で遠藤は、患者が悩んでいるように、医師は看護師もまた悩んでいることを知り、勇気づけられた。「あたたかい病院」が欲しいという願いが、患者だけのものではなく、「医者の夢でもあり、看護婦さんの夢にもなりうるような気が私にはしました」。

最終回で、遠藤は、五回の連載内容を整理している。

五回にわたって書きたかったことは結局、医学は科学ではあるが、同時に医者と患者とが苦しみや死を通して人間対人間として接せざるをえないゆえに、宗教や文学とおなじ人間学でもあるという事です。それなのに現代の医学や病院ではこの医学と人間学との歯車がかみあっていない。うまくかみあっていないどころか、時には「人間のための医学」であるべきものが「医学のための医学」になる傾向がますます強まっている。そこから日本の病院のなんとも言えぬあの荒涼として面が生じるのではないかと私には思われます。(6)

六回の連載を丁寧に読むと、現代日本の医療が持つ諸問題に一石を投じるために、遠藤が医学界や医療業界に配慮しながら、患者の側から、素朴な問題提起をすることから出発し、医療関係者や患者からの個人的な手紙の数々に勇気づけられながら、徐々に自分の自らの思いに強い確信を強めていったようすがわかれる。読者からの反応を手がかりにして、徐々に思考が整理されていくのである。

「自分が世話になった病院という世界を今よりもっとよい、もっと人間的なあたたかい場所にしてほしい」(7)。これが原点であった。『週刊読売』の連載第一回で、遠藤は問題提起を列挙している。

一、患者に無用な苦しみや恥ずかしさを与えぬよう病院側は配慮していただけでないか。

二、やむをえぬ事情で今までの病院から他の病院に変わる場合、今日までのレントゲンや検査表のコピーを向う側に貸してほしい。

三、夜勤看護婦さんの数をもっとふやせないでしょうか。

四、日本の病院での完全看護という形式はもう一度、議論しなおすべきではないでしょうか。

遠藤は、これらを議論のための出発点であると強調している。「お医者さまと看護婦さんと患者（一般市民と）っていいでしょう」が一緒になって考えていい問題のスタートラインなわけです」。

このキャンペーンの特徴は、メディアを通じて、遠藤がさまざまな医療関係者や読者との対話を重ねながら展開していったところである。キャンペーンを進めていくなかで、遠藤は「医師と一般市民とが本心に胸襟をひらいて話しあう場が今までなく、現在もないためにおたがいの気持ちや心理にうといということ」（8）を痛感した。そもそも患者の側から医療関係者に向けて書いたところから出発したのだが、患者の側も医療関係者の気持ち理解できていなかったことに気がついたのである。

私が注目すべきと考えるのは、「私は率直に言おうと、病院を新しいチャーチにすることが、日本の場合にできんかと考えておるんですよ」（8）という遠藤の言葉である。「新しいチャーチ」とは何であろうか。これは、「私は病院は原則として人間と人間との愛の場所であるべきだと思っています」（9）という『讀賣新聞』の連載第一回に登場した言葉と響き合うものである。キャンペーンに関する遠藤の文章のなかで、「愛」という言葉は、ただ一箇所、ここだけに出てきている。けれど、不用意に「愛」という語を用いて無用な誤解を招くことを危惧したからであろう。医師と患者との人間的関係については、多くの言及がある。

つまり直らない患者には医者も医者対患者の関係ではなく、人間対人間の関係になるのです。その時に、どうすべきかという教育を医学部では全くやってない。直せない患者に接したときに医者の人柄や本当の教養がはつきり出るでしょうね。（11）

お医者さんとの座談会で、脳死のことを論じあったことがあるんですよ。でも医者の発言は、脳死の判定をいかにするかということに限っておって、患者と医師の相互関係についてはほとんど語らないんですね。ほんとうはおれ、患者と医師の関係でもない、もつと根源的な、人間と人間の関係なんです。極端な言い方をすると、いま、医者の中には患者をあまり人間としてみていない人もいます。自分が直す病気の“保持者”としてみとる。（12）

キャンペーンは、二次に入ると、在宅介護、ターミナルケア、臓器移植、認知症問題など、医療全般に亘るものに拡大していく。これはおそらく、日本の医療の実態からかけ離れた机上の議論をすることなく、個別具体的な諸問題を現実即して現場から考えていこうとした意図によるものであったと考えられる。

ここで私は、考察の必要上、このキャンペーンの内容を抽象化して整理したい。遠藤が直面した医療の現場の諸問題とは、大別して以下の三要素に集約されよう。一、病院には、患者の心理に対する配慮に乏しく、無神経で屈辱的な扱いが少なからずある。二、患者は、病気を持った人間としてではなく、病気の保持者として扱われる傾向がある。三、医師や看護師の個人的な問題として捉えては解決できない問題である。

しかし、遠藤が課題とした究極の主題が何であったのかと問うならば、遠藤自身はこの言葉を用いていないけれども、「人間の尊厳」であったといふべきであろう。周知のように、カントは次のように述べ、人間を手段として用いることがあってはならないと考えていた。「汝の人格の中にも他のすべての人的人格の中にもある人間性を、汝がいつも同時に目的として用い、決して単に手段としてのみ用いない、というようなふうに行なせよ」（カント「人倫の形而上学の基礎づけ」野田又夫訳、『世界の名著32 カント』中央公論社、一九七二年、二七四頁。脇点は省略した）。信仰上、神の被造物

という人間観が遠藤にあったことは確かとしても、それは彼の根底にある思想であり、社会的実践活動としてキャンペーンが目指したものは、カント倫理学がいうところの「人間の尊厳」の最大限の尊重と見なしてよいと思われる。

## 二 柳澤桂子と重なる問題意識

遠藤のこのような問題意識は、一九九〇年代以降、生命科学者柳澤桂子（一九三八―）が著書を通して展開していった現代日本の医療問題に関する意識と大きく重なっていた。一九六九年に発病し、病院を転々とし、診断がつかず、医師からも見捨てられ、一九九九年にようやく病気がシャイ・ドレ―ガー症候群と診断されて奇跡的に回復した経験を、柳沢は『認められぬ病―現代医療への根源的問い』（山手書房新社、一九九二年）として刊行した。この本のあとがきのなかで、柳沢は、「十五年におよぶ闘病生活をふり返ってみると、病気そのものの苦しみよりも、医療から受けた苦しみのほうがずっと大きかったと告白せざるをえない」（13）と記した。次のような彼女の言葉は、そのまま遠藤の言葉と重なるものである。

医者だ患者だとそれぞれの権利を主張する前に、私たちは人間として信頼し合い、協力していかなければならないのである。「……」医師と患者が率直に話し合えるような医療を私は夢見ている（14）

私の長い闘病生活の中で感じたもうひとつの大きな問題は、医療という最も人間と深く関わる分野において、人間というものの理解が正しくなされていないのではないかということである。（15）

『認められぬ病―現代医療への根源的問い』は、批判された関係者に禍が及ぶことを避ける意味から、病院名、医師名を全て仮名にしたノンフィクション・ノベルになっているが、『患者の孤独―心の通う医師を求めて』（草思社、二〇〇三年）は、自身の体験を改めてエッセイの形で記したものである。この書物は、タイトルそのものが、遠藤も持っていた問題意識を表しているといっても過言ではない。こちらの書には、「現在の医学教育では、診断がつかなかったとき、治せないとき、患者が死んでいくときに医師はどうするべきかという教育はされていない」（16）という言葉も記されている。これもまた、先に引いた遠藤の「つまり直らない患者には医者も医者対患者の関係ではなく、人間対人間の関係になるのです。その時に、どうすべきかという教育を医学部では全くやってない」という言葉と呼応する。柳沢が究極の問題としている主題もまた「人間の尊厳」であることは疑いようがない。医師と患者が「人間として信頼し合い、協力していかなければならない」という柳沢の言葉は、人は「すべての他人に対して尊敬をばらう責務を負っている」というカントの言葉と響き合うものだからである。

科学者である柳沢が、健康上の理由からにせよ、執筆行為を通して、それもノンフィクション・ノベルという形までとって、世の中に「心あたたかな医療」を発信した事実と、小説家遠藤が、新聞社を巻き込んで、医療関係者との対話を通じてキャンペーンを行った事実とを、私は興味深く思う。診断が長年付かなかった難病を患った柳沢は、その「個人的な体験」を通して、現代日本の医療に潜む問題を、一般的な問題として世に知らしめることができた。これはきわめて文学者のな在りようといつてよい。そして、柳沢自身が、宗教的な世界へと惹かれていき、ボンヘッフアーの「神の前で神とともに神なしに生きる」という言葉に救いを見出したこともまた興味深いことである（17）。

ところが、柳沢について論じた諸家の文章に、遠藤の「心あたたかな医療」キャンペーンとの関連性を指摘したものが見当たらないのは不思議である。確かに、柳沢の問題意識は、科学信仰に陥った結果、患者が医師を絶対者のように見なして全面的に依存することで、病气や痛みを受容する能力を失っているところにもあったから、この点は遠藤の問題意識とは重ならない部分である。とはいえ、

見てきたように、重なり合う部分の方が大きいのである。

### 三 近代西洋医学それ自体が持つ問題点——帝国医療という視点

遠藤は日本の現代医療の現実に即して考えようと努力し、柳沢は科学者として自らの患者体験に即して語ろうとしている。両者ともに、主題とする諸問題が重なり合うことを確認したが、二人に共通するものは、それだけではない。医療即ち近代西洋医療を所与の現実として捉えているところも共通している。つまり、近代西洋医学が日本はもとより全世界に偏在し、「全域化」（中井久夫の言葉を借りれば「強制加入」）していることを自明視しているのである。したがって、二人は、自分たちが問題としている諸課題が、現場の医師や、教育も含めた医療制度、国家の政策などに由来すると考えており、「心あたったかな医療」（遠藤）「医師と患者が率直に話し合えるような医療」（柳沢）は、人間的努力を重ねていくことで実現するものとして思い描いているのである。要するに、そこには近代西洋医学そのものへの批判的まなざしが存在していない。二人が問題とした医療をめぐる「人間の尊厳」の問題が、近代西洋医学そのものに胚胎していたものではないかという疑問はうかがわれないのである。

しかし、遠藤や柳沢が指摘した問題点が、実は近代西洋医学それ自体に帰因していることは、東洋医学（漢方医学）を参照することで明らかになる。大塚恭男は、東洋医学について、次のように述べている。

漢方には現代医学におけるような意味での基礎医学はない。そこにあるものは、一医師対一患者というきわめて具体的、現実的な世界であり、どのようなばあいにとのどのような処置をあたえるべきかを追究することにその全エネルギーを傾倒してきたといつてよい。しかも医師对患者の關係として、たんなる施術者对被施術者以上の人格的結合の必要性が強調された。精神・身体を一丸とした全人的治療である。（18）

大塚はまた、現代医学（近代西洋医学）が「客観的に把握しがたい患者の愁訴にたいする医師の無理解」について指摘し、「検査の結果を楯にとつて患者の訴えをきしごけるといふならば、まさに本末転倒というべきであろう」と述べるとともに、「検査中心の医療がすすんでいくにつれて、医師と患者との対話はしだいに失われていった。臨床とは医師と患者が胸襟を開きあっておこなう共同作業でなければならぬ」と主張している。これはまさに柳沢が身を以て体験したことである。

もともと、西洋においても、一九世紀全般までは、東洋医学的な生体有機論であるところの「液体病理説」（四体液の平衡で健康が保たれるという説）が主流であったと、大塚は注意を促している（19）。したがって、問題は近代の西洋医学なのである。

ここでわれわれは、中国伝来の漢方医学を捨て去り、西洋医学を移入した近代日本の事情についても確認しておく必要があるが、関根透の研究に拠れば、近代日本に移植された西洋医学は、「病人を診る医療」である英国医学ではなく、「病人を診るより病気を診る」ドイツ医学であったという。その結果、日本医学の主流はドイツ医学の精神を受け継ぐことになった（20）。つまり、近代西洋医学と一口に言っても、そのなかには相対する医療観があったことがわかる。そもそも近代西洋医学は、患者から病気のみを取り出して見る姿勢があったが、臨床の現場において、「病人を診るより病気を診る」ドイツ医学を移入したことは、日本における近代西洋医学の本来の性質をさらに加速させることになったと考えるよからう。そこから、全人的治療をないがしろにする技術主義がはびこる下地が醸成された。

「たんなる施術者对被施術者以上の人格的結合の必要性が強調された」漢方医学が主流だった江戸時代には、柏原益軒（一六三〇—一七一四）をはじめ、新井白石（一六五七—一七二五）、太宰春台（一六八〇—一七四七）、三浦梅園（一七二三—一七八九年）らが、それぞれの著書のなかで、医を

「仁術」とする医療観を説いていた。安藤昌益の医療観は儒者とは少しく異なっていたものの、医を単なる技術とは考えていなかった(21)。これは当時の医療の実態が、全体としては仁術と遠かったからとも考えることができるが、前近代の日本において、医療に対するこのような倫理観が存在していたことを示すことは、忘れてはならない。遠藤がキャンペーンのなかで、「仁術」という言葉を、対談の席などで何度か用いていることから、この点は看過してはならない。また、近代に入ってから、富士川游(一八六五—一九四〇)のように、西洋医学摂取にのみ傾斜する日本医療に憂慮の念を抱いた人士もいたし、ドイツ医学の導入に重要な役割を果たしたドイツ人ベルツ自身でさえ、そのような日本医学の偏向を指摘していた(22)。

アジア太平洋戦争中、医療倫理は崩壊し、「言葉だけの「仁術報国」が叫ばれた(23)。そうしたなかで、九州帝国大学医学部でアメリカ軍捕虜の生体解剖事件が起こり、中国大陸では七三一部隊による人体実験が行われたのであった。もともと、戦時中に「日本的医療倫理」を唱えた東京帝国大学医学部教授橋田邦彦(一八八二—一九四五)がいたことは注目に値する。彼は医療倫理として、「人間を人間として見ることの重要性を指摘した」。「現代医学は非常に進歩したけれども、医が進歩したとはいえない。現代西洋流の医は、医学的知識の運用の対象たる人間を単なる材料として取り扱う傾向に偏り過ぎている。人の個性を尊重しない場合、人を物として取り扱うことになる」と指摘していた(24)。

このように、前近代から連綿として流れていた東洋的(漢方的)な医療倫理の上に、西洋医学が接ぎ木されたものが、現代日本における医療の歴史的経緯なのである。

近代西洋医学の導入に関するこのような歴史的経緯を踏まえた上で、私は、「帝国医療」という分析概念を用いて、考察を進めて行くこととしたい。

顕微鏡の発明とともに、伝染病が病原菌によるものであることがわかり、近代西洋医療が伝染病の克服に輝かしい勝利を収めたことは、柳沢が記述するとおりである(25)。柳沢は、そのあまりにも劇的な成功体験が、人々の科学信仰、科学崇拜を招くこととなり、癌や慢性病もいずれは科学が克服するであろうとの希望を、医師も一般の人々も手放すことができないと指摘する。現代の科学への全幅の信頼は宗教的信仰にも似ていて、科学者である医師は、かつての伝統社会における呪術師の役割を果たしているのだと柳沢は述べる。ここには科学者ならではの近代西洋医療に対する自覚的な見方があるが、ポストコロナアルの視座から遠藤周作について考察している本論文の視座からすると、この歴史的考察をより一層深めなければならない。

近代西洋医療が全世界に拡大していったのは、帝国主義、すなわち、近代西洋植民地主義の時代である。非西洋世界において、細菌学説と結びついた近代医療の導入は、ヨーロッパ列強の帝国主義的支配という政治的課題と強く結びついたものであった。開発原病という概念があるように、そもそも植民地化によって現地の病気が増大したこともあったのである(26)。それにもかかわらず、労働力確保のために現地人の衛生管理に力を注ぐ西洋列強は、自分たちの姿を、伝染病に苦しむ原住民に医療を施す救世主のように描き出すという欺瞞を行った。彼ら西洋人にとって、アフリカは、西洋の光輝く文明の恩恵を受ける、未開で野蛮な「暗黒大陸」でなければならなかったのである(27)。

それゆえに、「植民地各地で行われた医療は、ヨーロッパ生まれの近代医療の移植や応用ではない。むしろ植民地で行われるようになった医療こそが、今日の医療の源流であるという見方ができる(28)」。このようなことから、帝国医療という概念は、近代西洋医学の「起源」を想起させるものであるといつてよい。帝国医療という言葉を取用することで、恒日頃われわれが空気のように無色透明に受け止めている近代西洋医療から意識的に距離を置き、それを相対化して再検討することが可能となるのである。「有色の帝国」(小熊英二)として世界史に登場した近代日本もまた、歴史的な意味での帝国医療と無関係ではなかった。植民地台湾における帝国医療は一つのモデルとなり、他の植民地へと応用されていったのである(29)。

第一次世界大戦後にヨーロッパ各地に設立された熱帯医学学校について、ウィリアム・バイナムは、「こうした医学学校の目的は、医務官を訓練し、アジア、アフリカその他の熱帯で出会う疾病に対処で

きるようにすることだった。熱帯医学は、こうした地域をヨーロッパ人にとつて安全、支配下におく人々をキリスト教化し、文明化商業化する事業が実施できるようにした」と述べている(30)。もつとも彼は、「帝国支配下の医学および公衆衛生における事業がただ搾取的であると退けるのは歴史の歪曲である」と記してはいるが、それは植民地医療を全否定しようとする「一面的な糾弾の歴史学」(31)に対する牽制なのである。バイナムはまた、キリスト教伝道と結びついた医学を「熱帯医学」と区別している。「そこでは看護師と医者が、宗教とともに西洋の健康価値観の教えを広めようとしていた。伝道者たちは、世界中の多くの土地で診療所と病院を設立し、人を手配し、すでに確立している帝国の地理的広まりに概ね従う一方で、本国の支配地図によらない伝道活動も行った」と彼は述べている。

改めていうまでもなく、「帝国医療」とは、狭義には宗主国によつて植民地で実践された近代医療を指している。しかしそれは、「近代医療の特質を剔抉するために用意された概念であり、近代医療が抱える英雄主義や万能主義を中和し、グローバル化する近代医療のありようを照らし出すもの」なのである(32)。帝国医療という概念は、コロニアル時代のみならず、例えば、国家的か否かを問わず、国際医療協力などの事例を通して、ポストコロニアル時代をも射程に入れることができるものである。「帝国医療」という概念を持たないバイナムには、戦間期におけるロックフェラー財団の南米での西洋型医療機関設立がある種の帝国医療であることも、第二次大戦後にも現在進行形なことも、見えていない。

#### 四 「アデンまで」「海と毒薬」等における帝国医療批判

長編小説『砂の城』において、遠藤が登場人物の一人をインドの国際救癩施設で働いている設定としつつも、それが本当に美しい生き方なのかはわからないと、イロニーに満ちた留保を当該人物自身にさせていたことは、すでに見たとおりである。遠藤は、近代西洋医療が、英国のインド植民地支配と強く結びついていた歴史的経緯におそらく自覚的だったものと考えられる。近代西洋医療の英雄主義、万能主義を、遠藤は無条件で讚美することはなかった。この点は、辻邦生が、長編小説『光の大地』(一九九六年)において、主人公の父親を、中央アフリカで救世主のように活躍する崇高な生き方をする日本人医師として描いたことと対照的である。

すでに作家としての出発時に、遠藤は近代西洋医療に対して、イロニーに満ちた視線を投げかけていた。すなわち、「アデンまで」に登場する白人男性船医の描き方である。フランス本国から、おそらく帰郷するために乗船している黒人女性——病人(黄痘)である彼女の尊厳を、医師は平然と踏みにじる。彼女はほとんど人間扱いされておらず、積み込まれた荷物のような存在としか見なされていない。それゆえ、強制隔離された彼女は、死亡すると海洋に投棄されてしまうのである。安価な労働力としてフランス本国で利用された黒人が、労働力としての価値がなくなれば隔離されて廃棄されてしまうというこの展開は、先行研究がすでに明らかにしているように、近代西洋植民地主義に伴う人種差別を指弾していると言える。だが、この作品では、帝国主義と強い結び付きを持つ近代西洋医療もまた、人間の尊厳を脅かすものとして描かれていたのである。

『海と毒薬』(一九五七年)が、第二次世界大戦中に、九州帝国大学医学部で行われた米兵捕虜生体解剖事件をモチーフとした作品であった。キリスト教のような倫理を持たない集団主義的な日本人のメンタリテイの弱さを前景化させているとはいえず、医師たちによる大学病院を舞台とした人間の尊厳への冒瀆が扱われていたことは、改めて想起されるべきである。遠藤は、『海と毒薬』の続編である「悲しみの歌」(一九七七年)において、助手として事件に関与した医師の二〇年後を描いた。そこで作者は、主人公勝呂を自殺に追いやっている。彼は新宿でひっそりと診療所を営んでいる。貧しい老人に無料で治療を施すようなところがある反面、不本意な妊娠をした女性から望まれるままに人工妊娠中絶手術を施す自分を嫌悪している。そして、戦時中の生体解剖事件を引きずっている。彼が自殺に追い込まれるまで苦悩するのは、生体解剖の実験台にされた若いアメリカ軍捕虜たちを、単な

る実験材料としてではなく、「人間」として見ていたからである。医師と実験材料という関係ではなく、人間対人間として向き合っていたからである。

ところで、戦時中の捕虜生体解剖事件は、近代西洋医学の枠組から「逸脱」した事例だったのであろうか。細菌兵器開発に携わった七三一部隊もまた「逸脱」だったのであろうか。そうではなくて、近代西洋医学Ⅱ帝国医療の、負の極限的な発展形態だったのでないだろうか。細菌学は、北里柴三郎（一八五三—一九三一）や野口英世（一八七六—一九二八）で知られるように、近代日本の医学者が世界に貢献した得意分野であった。一九四二年、中国浙江省の村落でペストが爆発的に発生した際、関東軍の臨時防疫隊は、村民の治療には当たらず、情報を収集したのみであった。日本軍防疫隊は、死亡者のみならず、感染者の生体解剖も行ったとの証言がある（33）。男女を分けずに身体検査を行うおうとした防疫隊について、上田信は、「村人を検査対象としてしか見ておらず、人としての尊厳を認めていないことを示す」とし、日本軍防疫隊に所属する医学者たちにとって、「村の住民は患者ではなく、データ収集の対象としてか映らなかつたといえよう」と指摘している（34）。ここにおいて、近代西洋医学Ⅱ帝国医療は、その本質をデフォルメした形で示しているといえないだろうか。ここには人間対人間という関係は存在していないのである（35）。

## おわりに

以上、「帝国医療」という概念を手がかりに、遠藤の「心あたたかな医療」キャンペーンについて、彼の小説作品を視野に入れて考察してきた。ここまでで明らかにされたことは、第一に、キャンペーンの根底にあるものが、「人間の尊厳」を最大限に大切にするという思想であり、それは彼の文学作品にも貫かれていたものであったことを明確にした点である。これは、遠藤の文学的活動と社会的活動を別のものとしていた従来の研究姿勢からは見えてこないものである。第二に、遠藤の現代日本の医療への疑念が、国家による政策的な問題や、大病院の経営がビジネスモデルを採用していることにあるのでもなく、近代西洋医療そのものにその遠因を持つものであったと、東洋医学（漢方医学）との対比によって指摘した点である。そして第三に、「アデンまで』『海と毒薬』『悲しみの歌』などの諸作には、近代西洋植民地主義と結びついた近代西洋医療への批判も含まれていたことを、帝国医療という概念に照らすことによって浮き彫りにしたことである。これは、キリスト教という観点から作品を分析するだけでは見えてこない側面である。

最後に私は、医師の立場から「心あたたかな医療」の実践を試みた一人のフランス人について言及したい。フランツ・ファノンである（36）。遠藤が帰国のためにフランスを後にした一九五三年、ファノンはフランスの植民地アルジェリアのブリダ精神病院に赴任した（37）。そこで彼は「人間の解放」という思想から、患者の拘束衣を外させ、職員と患者の定期的なミーティングを行い、「お祭り」を企画し、週刊誌を創刊するなど、次々に病院改革を打ち出していった。それらのなかには成功したものもあつたし、失敗したものもあつた。患者たちはヨーロッパ系男女、現地人男女がそれぞれ別々に收容されていたが、アルジェリア人の文化的背景に注意を払わなかつたために、ヨーロッパ人患者たちにはうまくいったやりかたが、現地人患者たちにはうまくいかなかつたのである。アルジェリア人たちの西洋医学への不信は、植民地体制への拒否と結びついていた。そしてそもそもアルジェリアの精神疾患それ自身が、植民地体制に帰因するものと悟つたことから、ファノンはアルジェリア革命へとコミットしていったのである。

そうしたファノンの軌跡にはそれ自体興味深いものがあるが、ここでは彼が医師の立場から、他ならぬフランスの植民地の病院で——すなわち帝国医療の最前線で、患者のための「心あたたかな」医療を実践しようとした事実である。彼はそこで人種の壁を越えた「人間」を夢想して急進的な改革を試みて挫折した。周囲の医師たちとの関係も、必ずしも良好ではなかつたようである。だが、そこには、遠藤のキャンペーンと響き合う「人間の尊厳」への思いがあつた。「黒い皮膚・白い仮面」と『白い人・黄色い人』で出発した二人の有色の知識人の共通する問題意識は、近代西洋医療Ⅱ帝国医療と



いう領域においても、大きく重なり合うものがあつたのである。

- (1) 遠藤周作『遠藤周作のあたたかな医療を考える』読売新聞社、一九八六年、一一頁。
- (2) 『週刊読売』では以下の記事が掲載された。「みんなで考えよう親切医療」（八月二二日号）、「病院ボランティアとヘルパーのこと」日本看護協会会長大森文子との対談（九月一九号）、「当事者の倫理と傍観者の倫理」国立療養所東京病院外科医長村上国男との対談（一〇月三日号）、「医学の進歩は即医療の進歩ではない」NHK医療番組チーフディレクター行天良雄との対談（一〇月二四日号）、「病院でボランティア活動をした時は」元慶應病院看護婦長平松キツ子他ボランティア三名との座談（一〇月三一日号）、「病院の倫理・医の倫理を啓蒙したい」全国公私病院連盟会長・異本私立病院協会会長五十嵐正治との対談（一一月一四日号）、「もう一度、患者からのささやかな願い」（一一月二二日号）
- (3) 「心あたたかな病院のために」（九月一八日号）、「ターミナルケアには、まだ考える余地が」聖母病院教育婦長寺本松野との対談（九月二五日号）、「患者の権利章典についてうかがいます」国立療養所東京病院副院長芳賀敏彦との対談（一〇月二日号）、「明日はわが身・ボケ老人の生活の悲しみ」東京都養育附属病院ソーシャルワーカー奥川幸子及び仮名主婦一名との対話（一〇月九日号）、「どこにある？ ボケ老人の生活の場」東京都養育附属病院ソーシャルワーカー奥川幸子及び仮名主婦一名との対話（一〇月一六日号）、「医療者と患者の話し合いの場が必要」日大病院呼吸器科・日大医学部第一内科教授岡安大仁との対談（一一月六日号）、「いくつかの兆候があつてボケは始まる」家事評論家式田和子との対談（一一月一三日号）、「いい病院になるために学んでおくこと」日本在宅看護普及会代表後藤栄子との対談（一一月二七日号）、「ボケないためには感動と感謝、そして労働」京都・堀川病院顧問（元院長）早川一光との対談（一二月四日号）、「警備保障なみに看護補償を作ってみたら」元日赤医療センターICC看護婦守田美奈子との対談（一二月一日号）、「六年がかりで作った「良い医師」リスト」関西消費者連合会会長・八尾市消費者問題研究会会長・八尾市婦人団体連合会会長角田禮子との対談（一二月一八日号）、「再度、心あたたかな病院のために」（一二月二五日号）。なお、読者からの手紙が、『週刊読売』一九八二年九月五日号、九月二五日号、十一月七日号に掲載された。
- (4) 「看護婦から見ても、やはり患者は弱い」元日赤医療センター婦長・日赤中央女子短大講師村松静子との対談（『讀賣新聞』一九八三年八月一六日）、「患者の権利を尊重し責任を求める」精神衛生コ ンサルタント（株）ラポール取締役・東京女子大学、昭和大藤ヶ丘病院非常勤講師近藤裕との対談（『あけぼの』一九八三年一月月号）、「大病院と地域開業医のコネクションが大切」NHK医療番組チーフディレクター行天良雄との対談（『讀賣新聞』一九八三年一月三〇日）、「薬づけするほどもうかる保険の仕組み」行天良雄との対談（『讀賣新聞』一九八四年一月二七日）、「手術と検査以外はなるべく在宅看護を」白十字診療所所長佐藤智との対談（『讀賣新聞』一九八四年六月一九日）、「臓器移植をおしすすめる条件は何か」女優藤村志保との対談（『あけぼの』一九八五年一月月号）、「今こそ人間関係のルネッサンスを」東京・鈴木内科病院院長鈴木壮一との対談（『あけぼの』一九八五年一月月号）、「いのちと医療を考える——「生命と倫理報告書」を読んで」（『讀賣新聞（夕刊）』一九八五年九月二四—二七日）。
- (5) 遠藤周作『遠藤周作のあたたかな医療を考える』一一—一四頁。
- (6) 同右、二五頁。
- (7) 同右、三二頁。
- (8) 同右、九五頁。
- (9) 村上国男との対談における遠藤の言葉。『遠藤周作のあたたかな医療を考える』五八—五九頁。
- (10) 遠藤周作『遠藤周作のあたたかな医療を考える』三九頁。
- (11) 同右、三九頁。
- (13) 柳澤桂子『認められぬ病——現代医療への根源的問い』中公文庫、一九九八年、一二五頁。
- (14) 同右、二二八頁。
- (15) 同右、二三一頁。
- (16) 柳澤桂子『患者の孤独——心の通う医師を求めて』草思社、二〇〇三年、一七一頁。
- (17) 柳澤桂子『いのちの日記——神の前に、神とともに、神なしに生きる』小学館、二〇〇五年、八五—九一頁。

- (18) 大塚恭男『東洋医学』岩波新書、一九九六年、六頁。
- (19) 同右、六一七頁、一六一七頁。
- (20) 関根透『改訂版医療倫理の系譜——患者を思いやる先人の知恵』北樹出版、二〇〇八年、二一〇—二一一頁。もつとも、ドイツ医学というように、国別に捉える見方は一九世紀以後の帝国主義時代の思考であるとの指摘もある。小川鼎三『医学の歴史』（中公新書、一九六四年）一八七頁参照。
- (21) 同右、一四八—一五二頁。
- (22) 関根前掲書、二二二頁。
- (23) 同右、二三〇頁。
- (24) 同右、二三—二三二頁。
- (25) 柳澤桂子「病と科学」『文藝別冊柳澤桂子』河出書房新社、二〇〇一年、一六〇頁。もつとも、細菌理論については、医学の飛躍的進歩をもたらした「認識論的切断」として重視する立場（芥藤環「解説」ミシェル・フリー『臨床医学の誕生』神谷美恵子訳、みずず書房、二〇一一年、三五八頁）がある一方で、重要性があまりにも過大評価されているという修正主義的立場もあるという（ウイリアム・バイナム『医学の歴史』鈴木晃仁・鈴木実佳訳、丸善、二〇一五年、一三〇—一三一頁）。ここでは、集積主義的な立場が存在することのみ紹介するに止める。なお、人類の医療の歴史における近代西洋医学については、古くは小川鼎三『医学の歴史』（中公新書、一九六四年）、近くでは、ステイブ・パーカー『医療の歴史——穿孔開頭術から幹細胞治療までの1万2千年史』（千葉喜久枝訳、創元社、二〇一六年）参照。
- (26) 相川正道・永倉貞一は、「ペスト、コレラ、梅毒、インフルエンザなどの多くの感染症は、もともとはある限定された地域の病気（風土病）や動物との共通な病気（人畜共通感染症）でした。一七世紀からはじまった植民地主義防疫にとまなうヒトや物資の移動や交通手段の発達によって、病気が世界的にひろがり、その速度も加速されました」と述べている（相川正道・永倉貞一『現代の感染症』岩波新書、一九九七年、五頁）。
- (27) 見市雅俊他編『疾病・開発・帝国医療——アジアにおける病気と医療の歴史学』東京大学出版会、二〇〇一年、第一章、見市雅俊「病気と医療の世界史——開発原病と帝国医療をめぐって」参照。このような文明／野蛮という構図に、非西洋人である現代のわれわれも、いまだに眩惑されたままである。
- (28) 奥野克己『帝国医療と人類学』春風社、二〇〇六年、三頁。
- (29) 『疾病・開発・帝国医療——アジアにおける病気と医療の歴史学』第三章、飯島渉・脇村孝平「近代アジアにおける帝国主義と医療・公衆衛生」参照。
- (30) ウイリアム・バイナム『医学の歴史』鈴木晃仁・鈴木実佳訳、丸善、二〇一五年、一八三—一八四頁。
- (31) 鈴木晃仁・北中敦子『精神医学の歴史と人類学』東京大学出版会、二〇一六年、一〇頁。
- (32) 『帝国医療と人類学』六頁。
- (33) 上田信「細菌兵器と村落社会——中国浙江省義烏市崇山村の事例」『疾病・開発・帝国医療——アジアにおける病気と医療の歴史学』二九六頁。なお、七三一部隊に関する本稿の記述は同論文に拠る。
- (34) 『疾病・開発・帝国医療——アジアにおける病気と医療の歴史学』二九七頁。
- (35) 関根透は、一九四二年に「大日本医訓」が発令されたことについて「伝統的な日本医療精神を提唱したが、それは医師の不在と医薬品の不足の中で、言葉だけによる医の倫理の鼓舞であった。医療倫理の志気が強調される中で、倫理観が育つこともはなく、言葉だけの倫理とならざるをえなかった」と述べ、九州帝国大学医学部の事件及び満州における七三一部隊の非倫理的行為の理由を、戦時中という日本の歴史的な脈に求めているが、本稿ではより大きな医療史的コンテクストから考察しているのである。
- (36) ファノンと遠藤周作との関係については、拙稿『遠藤周作とフランツ・ファノンの比較文化的研究——フランス本国における夕食人差別体験を中心として』（放送大学大学院修士論文、二〇一四年）参照。ファノンのブリダ病院時代については、海老坂武『フランツ・ファノン』（講談社、一九八二年、II—c）' Macey, David. *Franz Fanon: A Biography* (2nd ed. London/NewYork, 2012) chapter6' Cherk, Alice. *Franz Fanon: A Portrait* (trs., Nadia Benabid, Ithaca & London, 2006) 参照。なお、鈴木晃仁・北中敦子は、「北アフリカのフランス植民地における精神医療の歴史を研究したR・C・ケラーは、フランスの植民地精神医学との拮抗の中からフランツ・ファノンのような新しい視点に立った精神医学者であり同時に思想家でもあるような人物が現れたこと」を示し、帝国主義の歴史研

究の枠組のなかで発展した精神医学史が、現在では「一面的な糾弾の歴史学」を克服した複雑さを包含したものとなっていると述べている（鈴木晃仁・北中敦子『精神医学の歴史と人類学』東京大学出版会、二〇一六年、一〇頁）。

(37) 中井久夫は、ヨーロッパが非西洋にとって「西欧を中心とする資本主義経済とその文明に全世界を強制加入させる強大な力であったし、今日なおありつづけている。〔……〕西欧精神医学は普遍的精神医学のごとく、ほとんど必然的なものとして、自他の眼に映じるのである」と述べている（中井久夫『西欧精神医学背景史』みすず書房、一九九九年、一五九頁）。つまり、ヨーロッパにおける精神障害のみを「普遍症候群」とみなし、非西洋世界におけるそれを「文化結合症候群」とみなす西欧精神医学もまた、近代西洋医学＝帝国医療そのものだったわけである。

### 第三節 非白人化された「神」と神格化された「白人」 ——「同伴者イエス」と表象のシュヴァイツァー——

#### はじめに

本節では、遠藤が描きだした奇蹟を行わぬ「無力なイエス」を考察するが、その際に、アフリカでの医療活動により神々しいイメージに彩られた医療伝道者アルベルト・シュヴァイツァーの表象を参照する。

なだいなだは、病気からの恢復という現世での救済と、来世における魂の救済が、古代宗教においては密着していたと指摘したことがある(1)。現代でも、医師に「全能の神の面影」が残っているのはそのためだといっているのである。イエス・キリストは、奇蹟を行うことで、絶望的な病気を癒やした。ところが、彼は地上の全ての病人を治療することをせず、十字架上で死んだ。「私は、キリストの一生のあいだに、魂の医者と肉体の医者との分離の過程を見る」。「それまで医療は神に属し、神官に属していたのだが、それから、地上の職業人である医者の方にゆだねられたのだ」と彼はいう(2)。「先生、どうかこの子を救ってやってください」と難病の子を持つ親が言うとき、彼らは医師のなかに、「治療者ではなく、救済者を見出そうとしているのだ」(3)。このように、「神」の代理人となった人間が、絶対者の面影をいくばくか分有することになることを、なだは医師としての自らの体験的事実として述べているわけである。

今道友信は、なだが述べた内容を哲学的考察の次元へと移し、「神の辞去」という言葉で、科学技術時代においては、かつて神が行っていたことを人間が行うようになることと述べている。医療行為を人間が行うようになれば、当然、「神」は魂の救済だけを行うようになるというわけである(4)。以上の指摘は、遠藤が描き出した独自のイエス像を考える上で、きわめて示唆に富むように思われる。遠藤のイエスは奇蹟を行わないからである。

#### 一 遠藤の無力なイエス像

遠藤は、『死海のほとり』の創作ノートの一部であった「聖書物語」(新潮社『波』一九六八年春季号—一九七三年六月号)を修訂して、『イエスの生涯』(一九七三年、新潮社)として出版した。二作は「表裏一体をなす」(『イエスの生涯』あとがき)と著者自らがいう作品である。著者はここで「日本人につかめるイエス像」を、日本に生きる一人の小説家として描き出そうとしている。

第四章のはじめに、遠藤は、ブルトマン以下の新約聖書学者たちの研究に触れつつ、福音書が「必ずしもイエスの生涯を事実通りに追っているわけではない」点に読者の注意を促している。

たしかに我々はイエスの生涯を正確にたどることはできぬ。事実の通りイエスの行動を記録することもできぬ。しかし聖書を読むたびに私たちが生き生きとしたイエスやそれを取りまく人間のイメージをそこから感じるのなぜだろう。それは事実のイエスではなくても真実のイエス像だからである。(5)

ここで「生き生きとしたイエスやそれを取りまく人間のイメージ」という言葉で彼が語っているのは「表象」という、生命を付与されたイメージのことにほかならない。福音書に語られた——すなわ

ち表象された——イエス、言語によって再現前化されたイエスについて、ここで遠藤は語っている。今ここにはいないイエスが、言語作用によってありありと再現前される。そのイメージは、実際のイエスの代行として、われわれの内的世界に働きかける能力を具えている(6)。要するに、新約聖書学者は、歴史的存在としてのイエスの学術的復元を目指す、遠藤は小説家として、「真実のイエス」、つまり生き生きとした表象のイエスについて語ろうとしているのである。

もともと、遠藤自身は、文字通りの意味における「真実のイエス」を、文学的想像力によって再現前しようとしていたわけであるが、その正否は実証困難であるし、本節での私の関心もそこにはない。この点を確認した上で、来世的救済と現世的救済という視点から『イエスの生涯』を見てみよう。

聖書のなかにはあまたイエスと見棄てられたこれらの人間(隣人や家族からも見離された病人や不具者など)との物語が出てくる。その形式は二つあって、一つはイエスが彼等の病気を奇蹟によって治されたという所謂「奇蹟物語」であり、もう一つは奇蹟を行うよりは彼等のみじめな苦しみを分ちあわれた「慰めの物語」である。(7)

現世的救済が「奇蹟物語」に、そして来世的救済は「慰めの物語」にそれぞれ対応していることは明らかであろう。遠藤は前者の物語よりも後者の物語の方がはるかにリアリティを持っていると述べ、その理由を次のように述べる。

「慰めの物語」が「奇蹟物語」よりリアリティをもって我々に迫るのは、「奇蹟物語」がガリラヤ地方に残っていたイエス伝説を集めて書かれているのに対し、前者はおそらく目撃者の弟子の記憶に生々しくあったものをそのまま使っているためではないだろうか。(8)

遠藤は、イエスの奇蹟を認めない。これは科学的実証精神に生きる近代人として、ある意味で誠実な態度といつてよい。イエスの「愛」は、「現実世界での効果とは直接には関係のない行為なのだ」と彼は述べる。「病人たちは結局は癒されることを、足なえは歩けることを、盲人は眼をひらくことを——現実的な効果を求める」が、イエスはそれに応えることができない。そのイエスの苦しみが生まれるというのである。「共観福音書やヨハネ福音書に記述されたおびただしいイエスの奇蹟物語は私たちに彼が奇蹟を行ったか、否かという通俗的な疑問よりも、群衆が求めるものが奇蹟だけだったという悲しい事実を思い起させるのである。そしてその背後に現実的な奇蹟しか要求しない群衆のなかでじつとつむいているイエスの姿がうかんでいるのだ」(9)。

「イエスは群衆の求める奇蹟を行えなかった」「奇蹟などはできなかった」と遠藤はいう(10)。「必要なのは「愛」であって病気を治す「奇蹟」ではなかった。人間は永遠の同伴者を必要としていることをイエスは知っておられた」。

名高いラザロの復活の奇蹟物語について、遠藤はこれを、「ラザロとは死者、つまりまだ「愛の神」を知らぬユダヤ人を象徴するとも考えていい。それは死者と同じようなものなのだ」とイエスは考える。その死者にひとしい彼等を「自分の死」によって眼ざめさせねばならぬのだ(11)。

もちろん、福音書記者たちが、イエスが数々の奇蹟を行ったと記していることを遠藤は充分に承知している。しかし、医療と宗教とを区別する近代人として、彼はイエスの言動を「慰めの物語」と「奇蹟物語」に区別して、後者を認めようとしないのである。

『死海のほとり』のなかで、一人の身体障害者が登場する場面がある。「治してくれ、憐れんでくれ」「あんたなら……この足を治せるだろう」と男は叫ぶ。しかしイエスは弱々しく首を振るばかりである(12)。「イエスはどんな村でも奇蹟を行ったことはなかった。死にかけて老人の枕元で一夜をあかし、子を失った母親のそばにじつと腰かけ、夕暮れ、眼の見えぬ老婆の手を握ってはいしたが、彼等を治したことはなかった」(13)。

『死海のほとり』のなかで、医師から見離された子供を持つアンドレアがイエスに訴える場面が

ある。

「子供を治してほしいのです」

「わたしは奇蹟などできぬ。わたしのすることは……」(14)

私はさきほど、「先生、どうかこの子を救ってやってください」と難病の子を持つ親が言うとき、彼らは医師のなかに、「治療者ではなく、救済者を見出そうとしているのだ」というのだいなだの言葉を引き出した。アンドレアはここで、治療者に見離されたがために、まさにイエスを救済者として求めているのであるが、しかしその救済とは病気を治癒させることにほかならず、ここにおいて治療と救済は融合しているのである。

五世紀のカルケドン公会議で確認されたように、イエスの「神性」と「人性」とは分かちがたく融合しているとされるが、奇蹟を起こすことができないイエスとは、限りなく人間化された「神」の姿であるといつてよい。遠藤のイエスは人間化された、「神」である。改めて確認しておきたいが、私はここで、神学的な視点から遠藤のイエスを論じる意図はない。これは宗教研究ではなく、文学研究であり、表象研究だからである。遠藤が描き出したイエス表象を分析の対象としているのである。

## 二 「密林の聖者」シュヴァイツァーの表象

ここで私は、限りなく神格化された人間の表象を参照することとしたい。それは「密林の聖者」と讃えられた医療伝道者アルベルト・シュヴァイツァー(一八六五—一九六五)である。白人でキリスト教徒で医師だった彼は、アフリカで病院を経営し、後半生を医療活動に捧げた。その献身的な生涯は、称賛に値するものである。本節で考察するのは、シュヴァイツァーその人そのものではなく、メディアにおける表象としての彼である。

彼の生涯はあまりにも有名なので詳述は控える。けれども、彼がカントの宗教哲学から出発し、アフリカ行きを決意した三〇歳の翌年に大著『イエス伝研究史』(一九〇六年、邦訳著作集第一七—一九卷)を著していることは注目に値する。また、彼の医学学位論文は、「イエス——精神医学的考察」(一九一三年、邦訳著作集第五卷)である。彼はキリスト教徒だったが、歴史的なイエスについては、これを「神」ではなく人間として理解していた人だったのである。フランス領ガボンのランバレネに最初に病院を建てたのは一九一四年のことである。第一次世界大戦で医療活動は一時頓挫したが、一九二四年に再度アフリカに赴き、病院を再建して活動を続け、第二次世界大戦中も、ガボンに留まった。彼の名声はすでに高まっており、ヴィシー側もド・ゴール側も、病院の中立性はこれを保証したという。一九五三年にはノーベル平和賞を受賞し、一九六五年にガボンで歿した。

日本でも、『水と原生林とのほざまにて——赤道亜弗利加の原生林における一医師の経験と観察』(野村實訳、向山堂書房)がすでに一九三二年に出版され、一九三九年には『わが生涯と思想より』(竹山道雄訳、白水社)が出版されている。一九五七年にオスロで核実験中止を訴える声明を五カ国語で放送したことも、原子爆弾を経験した日本人に強く訴えるところがあつたのだろうか、一九五八年には錚々たる訳者により『シュヴァイツァー著作集』全一九巻・別巻一(白水社、一九五八年)が刊行された。別巻はハーマン・ハーゲドーンの伝記である。一九六一年から翌年にかけては、新書版の『シュヴァイツァー選集』全八巻・別巻一も、白水社から刊行された。別巻は「シュヴァイツァー・アルバム」も収録されている。一九〇六〇年代に入ると、野村實『人間シュヴァイツァー』(岩波書店、一九六五年)、高橋功『シュヴァイツァー博士とともに』(白水社、一九六一年)などが出版されている。児童向けの偉人伝には必ず収録される人物である状況は、今日でも変わらない。「植民地アフリカにおけるわたしたちの仕事」(邦訳著作集第四巻)などを読むと、植民地主義を肯定する率直さに驚かされる。だがこれは、彼の個人的見解ではなく、「白人の責務」(キップリング)に象

徴される、近代西洋帝国主義の言説が、彼の筆を借りて語られていて受け止めるのが自然であろう。『アルベルト・シュヴァイツァーの世界』（エリカ・アンダーソン、野村實訳、白水社、一九五七年）は大判の写真集である。これを見ると、当時の先進諸国において、シュヴァイツァーがどのようなイメージとして拡散されていたかがよくわかる。彼は整った容貌に恵まれた白人男性であったが、フォトグラフアールによって、おそらく現実以上の威厳を付与された数々の写真は、崇高性をすら感じさせるものばかりである。それは例えば、さながらレンブラントの絵画を思わせるような、暗い手術場で横たわる黒人患者を見つめる厳粛な姿であり、（同書四七頁）、戸外でフランス語を学ぶハンセン病の少年たちを慈愛に満ちた微笑みとともに見守る姿であり（八九頁）、日曜日の朝に戸外でフランス語で説教する、帽子からシャツ、ズボンまで純白の、老賢者のごとき姿である（六一―六三頁）。あたかもフランチェスコの説教のように、戸外で彼が語るクリスマス祝辞を、現地人男女たちのみならず、二羽のペリカンまでもが恭しい態度で傾聴している光景もある（六七頁）。ハンセン病患者たちがイエス降誕劇をクリスマスに演じる写真もある（六六頁）。全て白黒写真であるために、シュヴァイツァーと現地人の肌の色の違いが余計に際立っている。これらの写真を見て、感銘を受けにくいことは難しいであろう。そこには確かに、一人の医療者という以上に、偉大な救済者の姿が刻印されているのである。遠藤が、意識的に自分を滑稽化する写真を数多くフォトグラフアールに撮らせたのとは、実に対照的であるといわねばならない。ここには近代西洋の記念碑化された、「偉大な」自画像がある。

加えて、帝国医療の道具立てが、ここには全て出揃っていることに驚かざるを得ない。すなわち、文明国フランスから、白人でキリスト教徒の男性医師が、野蛮な植民地ガボンの原住民に近代西洋医学の恩恵を施す姿である。この写真集に限らず、野村は自分が翻訳したシュヴァイツァーの著作では現地人をすべて「土人」と表記しているが、日本人の認識もまた、西洋を文明とし、アフリカを野蛮とする図式を鵜呑みにしている時代だったのである。

日本熱帯医学協合理事の医師海老沢功は一九二二年生まれなので、遠藤と同世代だが、旧制高等学校時代にシュヴァイツァーの著書『水と原生林のはざま』（野村實訳、岩波文庫）を読んで感銘を受けた人である。東京帝国大学医学部に進み、感染症と熱帯病を専門とするようになったのも、シュヴァイツァーの影響からであったという。野村實や高橋功のように、一九五〇年代にシュヴァイツァーの下で働いた日本人医師もいたし、世界中からやってくる現地訪問者のなかには、日本人も少なくなかった。「密林の聖者」の名声は、世界中にとどろいていたのである。

このように、先進国において神格化されたシュヴァイツァーに対する批判が現れるのは、アメリカ合衆国では一九六〇年代に入ってからであり、シュヴァイツァーが亡くなる前年の一九六四年に英国人ジャーナリストのジェラルド・マクナイトが出版した『シュヴァイツァーを告発する』（河合伸訳、すずさわ書店、一九七六年）は、そうした批判の一つの決算であったという（15）。同書の邦訳が一九七〇年代半ばと一二年遅れであったことも、それまではこのような書物は日本人に受け入れがたいものであったことを物語っている。訳者河合伸は、当時朝日新聞外報部次長だったが、後記を見ると、この書物が日本人にどのように受け止められるかを心配している。野村實が会長を務める日本シュヴァイツァー友の会もあつたし、シュヴァイツァー「信者」もたくさんいたからである。

同訳書の解説者楠原彰に拠れば、一九七二年に、ガーナ大学を訪れたとき、医学生たちがことごとくシュヴァイツァーに批判的であったという。その理由は以下の三点に要約される。

- 一、シュヴァイツァーはアフリカ人を愛したが、人間として愛したのではなかった。
- 二、アフリカ人の医師や技術者を育てようとはしなかった。
- 三、ランバレネの病院は全く時代おくれのしるもので、彼は頑固に改良を拒んだ。

楠原はまた、南アフリカ出身の詩人マジシ・クネーネの「シュヴァイツァーは、犬を愛するようにアフリカ人を愛した。彼の行為と思想は、アフリカ人を墮落させるためのものであった。……彼は一種の精神病患者で、自己偏執狂症であった」という激しい言葉も紹介している（17）。

アフリカ出身者によるシュヴァイツァー批判は、南アフリカ独立闘争の指導者エンダバニンギ・シ

トレ『アフリカの民族主義』（オクスフォード、一九五九年）が初めて、同書はガーナ独立の一九五七年に留学先のアメリカで書かれた。この書物は『アフリカの心』と題して、寺元光朗の手で訳され、一九六一年に岩波新書として邦訳されている。楠田は、アフリカの植民地が続々と独立を果たした時期にシュヴァイツァー批判が登場していることに注目している。

シトレはこの本のなかで、一三頁にわたってシュヴァイツァーを批判している（18）。

アフリカ人には、シュバイツァーの考え方はつぎのように展開されているように思われる。あふりか社会は無秩序状態にある。完全な人権は秩序だった社会でのみ適切に行使できる。結局、アフリカ社会はあまりに無秩序な状態なので、アフリカ人の人権は縮小されねばならない、と。（19）

シトレは、人権の縮小が、人間の基本的人権、すなわち人間の尊厳と権利の平等や、自決権を含むさまざまな自由の縮小を意味すると述べ、「はつきりいうと、アフリカ人の人権を縮小することはアフリカ人をヨーロッパ人の意のままにおくことである」と指摘する（20）。シトレはまた、シュヴァイツァーが、「わたしたちはきみたちの兄弟である。その通りだ。だが、きみたちの兄貴分である」という白人が定めた法則の賛同者であることにも異議を唱えている。

本節で私は表象のシュヴァイツァーを問題にしたいので、現実の人間シュヴァイツァーその人をこの場で批判する意図はない。彼自身が献身の人であった以上に「イメージ・メーカー」（ジェラルド・マクナイト）であったのか否かはここでは問題ではない。要するに、彼は帝国医療の象徴的なアイコンなのであって、それゆえに、楠原も、シュヴァイツァー批判、すなわち彼の「非神話化」は、「必然的に大航海時代と宗教改革の時代以降のヨーロッパの思想史・文化史の中枢に突きあたるはずだ。いうなれば、それは「近代」というものの再検討をうながさずにはおかないだろう」と述べているのである（19）。

医療者即救済者の現代的表象として、シュヴァイツァーほど相応しい人物はいない。それは西洋が脱植民地化の時代においても自らを旧植民地世界の救済者として自己同定するための、恰好の人物だった。彼を神格化することは、西洋白人世界を神格化することと同じであった。そこでは、植民地アフリカを舞台に、近代、西洋、医学という帝国医療の全ての要素が、一人の白人キリスト教徒男性に集約されて、演劇的に、輝かしく表象されていたのである。

血液学が専門の医学者加藤周一は、遠藤とほぼ同時期にフランス留学した人である。アフリカのシュヴァイツァー病院に赴任した白人女性の知り合いが彼にはいた。「人道の英雄」（『文藝』一九五五年九月号）は、彼女をモデルにした小説である（19）。「S博士」の下で二年間働いた北欧出身の女性ブリギットを通して、現地の実情が語られる。「すばらしい金髪と澄んだ空のような眼」の彼女は、現地からの手紙で「黒人から教わることの方が多い」と書く人であった。彼女は深く幻滅して帰国する。登場人物たちの台詞を通して、英雄主義と植民地主義に対する強い批判が語られている。

「人道の英雄」は、日本におけるシュヴァイツァー批判の先駆けであった。これを書いたために、加藤は旧制第一高等学校時代の恩師片山敏彦（一八九八―一九六一）の不興を買った。しかし、文学者として生きる自らの姿勢を定めるために、加藤は爆弾のようなこの小説を書かないわけにはいかなかったのである。この年に「白人」を書いた遠藤も、加藤の文章は読んでいたはずだ。シュヴァイツァー批判も、ヴィシー政権時代の対独協力フランス人も、当時は触れてはならぬタブーであった。

## おわりに

「日本人につかめるイエス像」とは、換言すれば、非白人である自分につかめるイエス像ということである。遠藤が、福音書のイエスの奇蹟行為を否定したことは、それが自分につかめるイエス像であったからにほかならない。彼のこだわりは、頭で理解した気になるのではなく、全身で掴むことだけを語ろうとしたことである。批評家として出発しただけに、彼はきわめて理論的な人であったが、



留学してからは、本当に自分が納得したことではなければ言葉にしないようになっていた。

奇蹟を起こさない無力なイエス、「同伴者イエス」を描き出した『イエスの生涯』は、一九七七年にイタリア語、一九七八年に英語、一九九六年にスペイン語にそれぞれ翻訳されている。同じ「同伴者イエス」を文学的に描き出した『死海のほとり』が、韓国語以外の西洋諸語に翻訳されていないのは対照的である。小説家としての本領を発揮した『死海のほとり』ではなく『イエスの生涯』の方が海外で紹介されているのは、やはり前者が現代イスラエルを舞台としているために、政治性を帯びたテキストとして読まれる可能性が忌避されているからではなからうか。

遠藤が国際的な著者となるに当たって、カトリック教会の大転換となった第二ヴァチカン公会議（一九六二—一九六五）の影響が大きかったことは事実である。しかし、そのみならず、一九六〇年代の、アフリカ諸国を初めとするヨーロッパ旧植民地が次々に独立したポストコロニアル時代という歴史的背景や、エドワード・サイード『オリエンタリズム』（一九七八年）の登場が、西洋中心主義を相対化する視点を決定的に打ち出したことと無関係ではなかったはずである。非白人化され、人格化されたイエスが西洋キリスト教圏の読者に受け入れられていった時代と、神格化された白人シュヴァイツァーの非神話化が行われるようになっていった時代が重なり合っていたのは、偶然ではあるまい。遠藤自身は、シュヴァイツァーを、「密林の聖者」としてではなく、イエス研究者として捉えていた。「密林の聖者」としてシュヴァイツァーを讃える文章を、遠藤は残していない（23）。彼はそこまでナイヴではなかった。おそらくそれは、「アフリカの體臭」から出発した遠藤が、アフリカで現地人のために献身する医師というイメージの背後に、帝国主義の残影を見ていたからであろう。

(1) なだいなだ『お医者さん——医者と医療のあいだ』中公新書、一九七〇年、三四頁。

(2) 同右、三五頁。

(3) 同右、四〇頁。

(4) 今道友信『超越への指標』ピケナス出版、二〇〇八年、第三章第三節「宗教の将来」参照。

(5) SEZ 11、一〇四頁。

(6) 表象概念については、以下を参照。渡邊守章・渡辺保・浅田彰『表象文化研究——文化と芸術表象』放送大学教育振興会、二〇〇二年、一三頁。渡辺保・小林康夫・石下英敬『新訂表象文化研究』放送大学教育振興会、二〇〇六年、九—一〇頁。

(7) SEZ 11、一一〇頁。

(8) 同右、一二四頁。

(9) 同右、一三〇頁。

(10) 同右、二四三頁。遠藤は講演「あの無力な男」（紀伊國屋ホール、一九七九年六月一日）のなかでも、次のように述べている。「私は聖書に出てくるような奇蹟などは、後から付け足した物語であるとまでは言いませんけれども、さほど価値を置いておりません。だいたい奇蹟なんていうのは宗教とはあまり関係がないことだと私は思っています。「……」むしろ、そんな奇蹟が起きなかったがゆえに、「紙も仏もあるものか」というところからこそ神の存在を考え始めるのが宗教だと私は思っているので、聖書にあるイエスの奇蹟物語などにも大して価値を置かないのです、たった一つ、復活というものを除いてね」（遠藤周作『人生の踏絵』新潮社、二〇一七年、一四四頁）。

(11) 同右、一四四頁。

(12) SEZ 3、二九頁。

(13) 同右、三〇頁。

(14) SEZ 3、三二頁。

(15) 楠原彰「シュヴァイツァー・その虚像と実像」ジェラルド・マクナイト『シュヴァイツァーを告発する』河合伸訳、一九七六年、三三三頁。

(16) 海老沢功『素顔のシュヴァイツァー——ノーベル平和賞の舞台裏』近代文芸社、二〇〇一年、一頁。

(17) 『シュヴァイツァーを告発する』三三二頁。同書では「数年前」と書かれているが、『アフリカ行動委員会ニユ

ース』15号（一九七三年五月、アフリカ行動委員会）二頁にある楠原の記述によれば、一九七二年とのことである。なお、同号は、第一特集がシュヴァイツァー批判だが、楠原はフランツ・ファンオンをアフリカ解放の思想的支柱として捉えている。

(18) エンダバニンギ・シトレ『アフリカの心』寺本光朗訳、岩波新書、一九六一年、一八五―一九二頁。

(19) 同右、一八六頁。

(20) 同右、一八九―一九二頁。

(21) 『素顔のシュヴァイツァー』ノーベル平和賞の舞台裏』三三五頁。

(22) 『加藤周一著作集13』平凡社、一九七九年所収。「私のバリの生活を記念する」のが小説『運命』とこの作品であると後記にいう。なお加藤も小説中で現地人をすべて「土人」と表記している。そういう時代だったのである。

(23) 遠藤には「シュヴァイツァー博士『平和か原子戦争か』を読んで」（『毎日新聞』一九五八年四月二五日）という文章がある。ここで遠藤は「博士の「核実験を停止せよ」という意見に私たちが賛成でないはずがない。それはよほどのヘソ曲がりでないかぎりすべての日本人が共通してもっている願いだからだ」と記しつつも、「この博士の訴えが掲載されている同じページに、米政府が日本外務省の核実験停止要請を拒否したというニュースが大きく載っていたのである。また近く核実験を行うというマクミラン英首相の声明も奉じられていたのである」ことを指摘し、「いかにシュバイツァー博士が高徳の人でもノーベル賞受賞者であっても、彼のこの訴えが無効果に終るのではないかというあきらめが私たちをはじめから支配している」ことを指摘している。この文章でも、遠藤はシュヴァイツァーその人への評価は記していないのである。

# 結 論

# 遠藤周作と近代西洋植民地主義

## ——人種主義と「他者」の文学的想像

### はじめに

ポストコロニアル的視座から、遠藤周作について考察を加えてきた。その際、従来省みられなかった中間小説をいくつか取り上げたほか、素人劇団「樹座」の活動や、医療を巡る社会キャンペーン活動まで、先行研究では取り上げられなかった活動も考察の対象としてきた。また、村松剛と辻邦生を必要に応じて参照した。緒論でも記したが、本研究は、三人の文学者の優劣を考察することが目的ではない。作家研究の形式を採ってはいるが、冷戦期知識人の異文化受容と対決の諸相について確認することが目的であり、著者性と同程度に主題性に力点が置かれているのである。

近代西洋植民地主義には、人種主義、性主義、民族主義など、さまざまな問題が複雑に絡み合っているが、本研究において中心的に主題化したものは、人種主義と、他国による占領である。それらとともに、人間の尊厳を深く傷つけるものだからである。

ヨーロッパにおけるユダヤ人差別が示すように、人種主義は、白人対有色人といった身体的特徴に基づくとは限らない。近代日本は、「有色の帝国」（小熊英二）として東アジア世界の覇者となったのであり、白人対有色人種という権力関係はここでは有色人種間のそれに転位している。人種主義は要するに人種間のヒエラルキーの永続的固定を目指す営みなのであり、歴史的状况により多様な様態を取り得るのである。アジア諸地域に対しては優越意識を抱きつつも、西洋白人世界に対しては劣等意識を持つという不安定な立場に日本人は置かれた。それゆえ、欧化主義と日本回帰の間を揺れ動きながら、日本人は西洋と向き合い、またアジア諸地域と向き合ってきた。したがって、ポストコロニアリズムが日本文学に適用される際に、大日本帝国時代の満州、台湾、朝鮮の日本語文学や、沖縄の文学に注目されることが多いのは、当然のことであった。

遠藤周作は、帝国日本の植民地満州で、支配者層に属する者として少年時代を送った人であった。それに加えてキリスト教Ⅱ西洋文化を身に帯びたフランス文学者であったことから、ポストコロニアルの視点から考察する対象として不適當ではないだろうか。そうではない。第二次世界大戦を挟んで、近代日本が東アジア世界における「有色の帝国」からアメリカ合衆国の「下請けの帝国」（酒井直樹）へと変容したというのは、議論の前提とした歴史的コンテクストであった。植民地満州で育った遠藤は、空間支配者たる日本人の子弟として生活していたものの、帰国後にキリスト教の洗礼を受けたことから、戦時中は一転して帝国日本から抑圧される側になった。そして戦後、日本がアメリカ合衆国の占領に置かれた時代にフランスに留学し、そこでさらに有色人差別を受けた。キリスト教徒の日本人であることが、遠藤を幾重にも複雑な立場に置いていたわけである。

自分が白人ではないという根源的事実と、キリスト教徒であることを痛烈に意識するところから、遠藤は小説家として出発を遂げている。『白い人・黄色い人』を刊行した一九五五年、彼はあるエッセイで「自分の肌は黄色であって決して白色ではない。ならば、この黄色を白き世界と混同せず対立させることからすべてははじまるとぼくは考えたのだ」と記している（1）。彼は西洋のキリスト教を、日本人の自分の身体に合わない洋服のメタファーで語り、それを体に馴染む和服に仕立て直そうとしたとしばしば語った。異文化の狭間で居心地の悪さを常に強いられた彼の根底には、差別／被差別に対する繊細な感受性があった。このようなことから、彼はポストコロニアル的視座から考察

することが相応しい文学者なのである。

修士論文「遠藤周作とフランツ・ファノンの比較文化的考察——フランス本国における有色人差別体験を中心に」で詳細に検討したが、フランスで受けた有色人差別を、近代西洋植民地主義の問題として理論的に受けとめる上で、サルトルの著作とともに、フランツ・ファノンの論文「黒人の生きられた体験」が強いインスピレーションを与えたと私は考えている。少年時代に満州で目にした日本人による現地人差別——それを遠藤が胸にありありと甦らせ、植民地主義の問題として理論的に再認識したのは、フランス留学で受けた人種差別に深く傷ついた後のことと考えるのが適当である。差別する側から差別される側への反転が、文学者遠藤にとっては大きな思想的出来事であったと考えられるのである。

本章においては、本論で主題ごとに論じた内容を解体し、可能な限り時系列に再構成して集約し、必要な補足を加えることで、研究全体の結びとする。

## 一 近代西洋の植民地主義

留学から帰国した遠藤が小説家として再出発したとき、留学前に書かれた評論「神々と神と」（一九四七年）で提示された比較文化的主題に加えて、近代西洋植民地主義に組み込まれた有色人差別が大きな主題であったことは、「アフリカの體臭」（一九五四年）や「アデンまで」（一九五四年）の考察を通して見てきたとおりである。ここでは弾劾されるものとして、有色人に対する白人の優越意識が描き出されていた。戦時中に「鬼畜米英」と蔑まれた西洋人は、敗戦とともに讃美すべき指導者となっていた。軍事力で日本を降伏させた西洋人の絶対的優位は、当時は否定し難い「事実」として存在していた。白人男性医師でキリスト信徒のシュヴァイツァーが、「密林の聖者」として、日本でも賞讃されていた。表象のシュヴァイツァーは、劣等な有色人を救済する崇高な西洋人を体現した象徴的人物だった。そのような時代であったがゆえに、「アデンまで」の日本人男性主人公は、フランス人女性との恋愛に挫折するしかないし、「月光のドミナ」（一九五七年）において、白人女性は日本人男性の手が届かぬ、神々しい美の化身として表象されていたのである。

ところが、一九六〇年代に入り、東京オリンピックに象徴される目覚ましい経済成長を日本が遂げ、敗戦の衝撃から日本人が自信を恢復し始めると、遠藤の作品のなかで、徐々に白人はその圧倒的な優位性を喪失していく。「変な外人たち」（一九六六年）では、西洋はすでに過去の栄光を誇る老残の白人男性の姿をとって描かれ、美しい中年白人女性は、崇敬の対象ではなく、共感すべき対等な存在として描かれる。さらに一九七〇年代になると、二次に亘る石油危機を経験して経済成長に打撃を受けつつも、物質的に豊かな生活を享受するようになった日本人は、白人世界に対して尊大になっていく。「ワルシャワの日本人」で描かれたように、慎ましい生活を余儀なくされている共産圏の白人女性を、日本人男性は傲慢にも完全に見下している。

このように、西洋の白人世界に対する権力関係は、徐々に変容していったのである。それは一九五〇年代から七〇年代にかけて書かれた「ポーラン・シリーズ」で、北アフリカ出身の黒人が、白人に対して卑屈から尊大に変貌していく過程が描かれていたことと表裏をなしている。かつて自分の出身国の方が、より近代化＝西洋化していると学生寮で誇示し合い、白人学生たちの「友情」を取り合おうとした黒人と日本人は、一九七〇年代の東京で再会して、互いが到達した社会的地位を示しあう。

一九六〇年代に作家活動を開始した辻邦生が、「北の岬」（一九六六年）、「洪水の終わり」（一九六七年）、「夜」（一九六八年）などの西洋を舞台とした小説のなかで、日本人男性と白人女性との恋愛を描き、遠藤が「アデンまで」で描いたような国際恋愛の挫折を描き出すことがなかったことは、遠藤文学において白人女性が徐々に普通の人間になっていったことと、並行的な現象であったと考えられる。本研究では二人のフランス留学での往路を比較して、東南アジア人やフランス人に対する態度の相違を確認したが、辻作品の詳細な分析は行っていない。ここでは、社会的な差別の問題を考える際に、辻の場合は、「人種」よりも「階級」の方が重要だったことを指摘しておきたい。

辻の世界認識の根底にはマルクス主義があり、経済学的な現実把握への努力を彼は行っている。『ある生涯の七つの場所』（一九七五—一九八八年）は、日本、アメリカ合衆国、そしてヨーロッパを舞台とし、二〇世紀という時代を捉えた壮大な連作短篇である。全部で一〇〇の短篇の集合体であるが、この作品には二人の社会学者が登場する。一人は農業経済学者（「私」）であり、もう一人はヨーロッパ社会思想学者宮部音吉である。作品中に登場する彼らの書簡やノートを通して、読者は辻がどのように二〇世紀という時代を眺めていたのかを知ることが出来る。また、『樹の声 海の声』（一九八二年）は、上流階級に生まれた一人の女性を主人公とすることで、明治・大正・昭和という時代を、一九世紀から二〇世紀にかけてのヨーロッパを中心として描こうとした長編小説である。ここでは、近代日本における階級構造が丹念に描き出されている。『フーシェ革命暦』（一九八九年、第三部は二〇〇五年に全集に収録）が、大革命前後のフランスの社会経済的状況の分析を何よりも重視し、当時の社会の疲弊を迫力あるリアリズムで描き出していることも忘れてはならない。こうした傾向は、『背教者ユリアヌス』（一九七二年）ではまださほど明らかではなかった。『ある生涯の七つの場所』と『春の戴冠』（一九七七年）からはつきりと目に見えるようになってきた傾向である。彼の長編小説はどれも骨格がしっかりしているが、それは小説技巧的な構力という以上に、社会を社会科学的に構造化して捉えようとする意識的な努力に支えられていたと考えるべきである。以上のことから、辻の人種主義に対する意識の薄さは、彼の階級へのこだわりと表裏の関係にあると考えられるのである。

われわれが見落としてならないのは、遠藤の場合、小説の世界は、ある程度抽象化されていて、現実世界の経済と結びついた階級の問題は、さほど重要ではないことである。ある歴史的状况にたまたま置かれた一個人が、政治的力学によって追い詰められる場合、当事者が社会階級的に下位にあるとは限らない。すなわち、徳川幕府と伊達藩の政治に嘲弄されて切腹する一地侍と、大革命でギロチン台上に上る王妃とは、遠藤の場合、置換可能な存在となる。小説『侍』（一九八〇年）と『王妃マリー・アントワネット』（一九七九—一九八〇年）が同時並行的に執筆されていた事実はその意味でも興味深いことといわねばならない。

## 二 近代日本の植民地主義

一方で遠藤は、「有色の帝国」たる近代日本のコロニアルメンタリテイが持つ暴力性や外国人差別についても、一九五〇年代に、「地なり」（一九五八年）や「夏の光」（一九五八年）などで描き出していた。日本による中国支配すなわち「五族協和」の美名の下での占領の実態を、「夏の光」は赤裸々に描き出している。これは『海と毒薬』（一九五八年）と同様、日本人の暗部を直視しようとする作品であり、遠藤が近代西洋植民地主義を、西洋だけの問題ではなく、近代日本の問題としても捉えていたことを証拠立てている。「夏の光」は、占領がもたらす人間性の歪みを描いた物語として捉えることができる。

村松剛には、占領期の連合国軍兵士らの傍若無人なふるまいに対する強い怒りがあるが、近代日本が行った、中国や朝鮮半島、仏領インドシナなどの占領に対する、胸に突き刺さる痛みは薄弱である。満州に育った遠藤と、東京で育った村松の相違であろうか。おそらくそうではない。なぜなら、植民地における日本人の暴力性の主題化は、大連で生まれ育った同世代の清岡卓行（一九二二—二〇〇六）が生産した多くの「大連もの」にもこれを見ることができないからである（現地人に対する日本人の差別的行為への言及が清岡のテクストに皆無ということではない）。おそらくは、帝国日本で生まれ育った日本人男性にとって、占領された側の人々の痛みを想像することが容易ではなかったということなのである。それは、西洋人が植民地の人々の苦痛に鈍感であったことと相似形である。そもそも、誰にとっても、他者を想像するということは困難なことなのである。偉大な文学の存在理由の一つは、文学的な想像力によって、われわれが日頃はその内面を知ることが困難な「他者」——異性、外国人、障害者、マイノリティたちの内面を——すなわち彼らの歎びや苦悩を、生き生きと描き出すことにある。

るだろう。

『海と毒薬』では、近代西洋医学の負の極北である生体実験が描かれていた。「神」を持たない日本人のメンタリテイという主題が前景化されてはいるが、近代の戦争・大学・医学という西洋が生み出した諸制度が道具立てとされていることを考えると、モチーフとなった戦慄すべき事件は、近代西洋文明からの逸脱ではなく、近代西洋文明そのものの本質を露呈させたものであったということができよう。この小説は、日本の暗部を抉るものと見なされており、それは正しい見方ではあるが、視点を変えれば、帝国主義を「複製」した日本を舞台に、近代西洋が生み出した帝国医療の暗部を暴き出した作品と見ることも可能である。ここでは人間の尊厳が冒されている。帝国医療に関するこうした問題意識は、やがて一九八〇年代の「心あたたかな医療キャンペーン」へと繋がっていく。

戦時中の日本の軍国主義を嫌悪した辻邦生は、レジスタンスの国、大革命の国フランスを愛した。だがそれは、現実のフランスを愛したというよりも、共和国が掲げた理想——とりわけ人権思想を愛したという方が正確であろう。現実のフランスは英国に次ぐ広大な植民地を所有した国であり、ポストコロニアル時代になっても、差別を含む種々の社会問題は存在していたからである。西洋を舞台とした虚構世界を通して、辻は差別に満ちた現実世界の再現ではなく、あり得べき社会、あり得べき人間関係を描こうと捉えることが可能であろう。本研究で遠藤の「鉛色の空」と比較した初期の短篇「影」は、アジア太平洋戦争中の軍隊で起きた人道に反する行為を描いた作品である。だが、その後、辻はこのような趣向の作品は書かなかった。

シリウスな政治的テーマを中間小説で扱うという遠藤の戦略的方法は、これまで批評家や研究者たちに充分には認識されてこなかった。『一、二、三！』（一九六四年）と『どっこいショ』（一九六七年）は、ヴェトナム戦争の時代を背景に、アジア太平洋戦争の記憶と戦後日本の安全保障を主題とした問題作であった。前者では、皇室と帝国日本の東南アジア侵攻との結びつきが語られ、後者では「下請けの帝国」となった日本について、かつて徴兵忌避を企てた父親と防衛大学校進学を考える息子を描くことで問題提起した作品であった。戦争を経験した「戦中派」と、戦後生まれの若者世代が登場する点が共通している。一九六〇年代は、日本は高度経済成長の時代であり、集合住宅が造られ、高速道路が建設され、都市の景観が変貌し、家庭には耐久消費財が普及するなど、物質的な豊かさを日本人が実感し始めた時代である。「戦争を知らない子どもたち」である若い世代には、政治意識を先鋭化させる傾向もあり、戦争体験世代との「断絶」が浮き彫りにされてきた時期であった。

アジア太平洋戦争で日本軍が侵攻した東南アジアを若者たちが訪れるという『一、二、三！』は、忘却されつつある近代日本のアジア植民地支配を読者に想像させる試みと見ることができよう。戦争で日本人が被った苦しみの責任を皇室が負い、罪障感を負うはずであるとの認識も、この小説では示されている。

『どっこいショ』では、防衛大学校に進学しようと考えている息子に、戦中派の父親は猛反対する。戦争の怖ろしさを身にしみて知っているからである。しかし、新聞で報道されるヴェトナム戦争については、現地の人々を気の毒だと感じつつも、自分の家庭のささやかな「平和」の方がはるかに大切である。ここではヴェトナム戦争は対岸の火事なのである。主人公を通して、遠藤は、「過去の戦争の時代」と「現代の平和な時代」という、日本国内に閉じこもった論理を示しているのである。

このような国内に閉じこもった硬直的思考が、国際的に開かれて、現在の「平和な時代」がそのまま「戦争の時代」であるという危機意識に転換したのが、遠藤の一九七〇年代であった。

### 三 現代シオニズム国家の植民地主義

一九七〇年代に入り、中東地域の植民国家イスラエルに遠藤が注目して『死海のほとり』（一九七三年）という問題作を書いた事実は注目すべきことであった。これは、近代西洋植民地主義に対する怒りをモチーフとして出発した遠藤が、現代の植民地主義に目を向けたという意味で、当然の思想的展開であったと考えることができる。第三次中東戦争後のエルサレムを舞台として描かれたこの作品

では、イスラエルのパレスチナ占領が描かれている。ナチスによるユダヤ人差別が前景化されているが、「アラブのユダヤ人」（高橋和夫）たるパレスチナ人へのイスラエルの抑圧が細部に周到に描き込まれていた。「自衛のため」という名目で武装を許された入植者が支配する空間での、貧しいパレスチナ人たち。彼らはイエスの時代の貧しいパレスチナの人々と重ねあわされている。ここでは、西欧対非西洋という支配／被支配関係が、シオニズム国家とアラブ世界という構図に転位している。

取材旅行のために、駐日イスラエル大使へ口添えの労をとった村松が、イスラエルによるパレスチナ占領を問題視していないことは興味深い。彼はイスラエルと日本を、東アジアと中東における、共産主義の防波堤と捉えていた。両国はともにアメリカ合衆国の世界戦略上の「下請けの帝国」（酒井直樹）なのだが、アメリカからの援助を受けつつも、核兵器まで伴う軍事力によって、自らの手で国を防衛しようとするイスラエルの姿勢に感服していた。要するに村松は、国際政治上の力学によってイスラエルという植民国家の占領を肯定しているのである。彼の思想的立場は政治学的リアリズムに立脚している。

村松の場合、日本国内においても国際社会においても、左右両派の政治的闘争のダイナミズムが世界認識の原理であった。共産主義思想とその現実化である共産党Ⅱ国家体制を否定することが彼にとつては至上命題であった。それは共産主義国家や左派政党を支持する言説が冷戦期の国内ジャーナリズムに多く見られたことへの対抗言説でもあったが、ソ連を徹底的に「悪魔化」して描き出す彼の文章には、一つの立場を選択した者が持つ旗幟鮮明さとともに、対立する政治的立場のなかにも存在するはずの多様意見の存在やせめぎ合いを一切顧慮しないという特徴も併せ持っていることが認められる。なお、ナチスの人種政策を連想させるアパルトヘイト体制国家であった南アフリカ共和国への村松の支持も、共産主義への砦として同国を見ていたからであった。

『死海のほとり』が日本人読者に受け入れられなかったことは、遠藤を落胆させた。当時の日本人の多くにとって、アラブ世界は政治的にも文化的にも、アフリカ同様「遠隔地」であり、パレスチナ人という他者を想像することは困難だったものと考えられる。遠藤は歴史小説に方向転換するが、これは作家という職業上、多分に戦略的なものであったと捉えることができる。彼の問題意識は全てが地球規模となった現代にあつたが、日本人の歴史好きを意識して、日本の歴史の中に国際化された現代を見出す方向へと向かったのである。『侍』（一九八〇年）はそのような作品であり、一七世紀の日本と世界を舞台としながら、スペイン人に軍事的に占領されたインディオたちの同化と抵抗を通して、近代西洋植民地主義の実態を生々しく描き出している。それは一九七〇年代半ばまで続いたポルトガルのアフリカ植民地支配を意識させるものであり、また、今日まで継続しているイスラエルのパレスチナ支配と重なり合うものであった。歴史小説を書くことで、植民地主義に苦しめられてきたラテンアメリカやアフリカ、パレスチナの人々を、尊厳ある人間として日本人が想像することができるような方法を選んだのである。

もう一つの戦略は、すでに一九六〇年代から試みられた、中間小説でシリアスな主題を追求するという方法である。『砂の城』（一九七六年）はそのような作品であった。ここではパレスチナ解放闘争が、島原の乱と結び付けて描かれており、「弱者」の絶望的な抵抗としてハイジャックが扱われている。村松が、パレスチナ解放人民戦線を国際テロ組織と見なしていたことと対照的である。

#### 四 近代西洋植民地主義とキリスト教

キリスト教徒だった遠藤は、地上の国家を移ろいゆくものと見ていた。いつの時代、どこの地域でも、虐げられる者は、裏切る者と同じように存在した。しかし同時に、地獄のような状況のなかでも、「人間」であり続けた者——アウシュビッツ収容所で他の囚人の身代わりになって死んだコルベ神父のような人がいた。それが信仰の人である遠藤には忘れてはならぬ真実だった。

周知のように、ユダヤ教徒憎悪の種子は、キリスト教の成立そのもののなかにある。フレドリクソンが説得的に論述した西洋の人種主義の歴史的整理に従えば、人種主義には二つの流れがあつた。一



つは、ヨーロッパ各地が帝政ローマによつて植民地化され、先住民族の土着宗教が習合されながらキリスト教化されていくなかで、ユダヤ人差別⇨反セム主義はヨーロッパに拡散されていったことである。また、これとは別に、大航海時代以後の西洋が、広大な非西洋地域を植民地支配するなかで自らの優越的立場を正当化するために生み出した、白人至上主義と有色人差別があった。これらが二〇世紀にナチスによるホロコースト、アメリカ合衆国の奴隷制、そして南アフリカ共和国のアパルトヘイト政策を生み出したとフレドリクソンは主張している。キリスト教それ自体に潜むユダヤ人憎悪、そして「異教」世界への宣教と近代西洋植民地主義の歴史的結びつきを、遠藤は熟知していた。代表作『沈黙』（一九六六年）の背景が、カトリック教会と結びついた近代西洋植民地主義と、それに対する徳川政権の命がけの抵抗であることは改めていうまでもない。

『沈黙』完成のあと、遠藤は新約聖書を改めて読み返すなかで、新約聖書学者たちの研究に向き合う。それまでのように調和的に聖書を読むことの困難に直面した遠藤は、『死海のほとり』で独自の「同伴者イエス」像を描き出した。この作品で、古代パレスチナの物語と現代パレスチナの物語が交互に語られるのは、まことに意味深長である。遠藤は古代のイエスの物語において、キリスト教に潜むユダヤ人憎悪の原点となった出来事を描き、イスラエルを舞台とした現代の物語において、ナチスによるユダヤ人殺戮の悲劇を回顧しながら、シオニズム国家によるパレスチナ人弾圧を暗示的に描いている。つまりここでは、キリスト教に由来するユダヤ人差別と、イスラエルの植民地主義に由来するパレスチナ人差別とが、ともに描かれているのである。

ナチスの絶滅収容所で連行される囚人に寄り添うイエスの幻影は、そのままイスラエル建国により「アラブのユダヤ人」となったパレスチナ人に寄り添うイエスでもあった。「同伴者イエス」は『侍』にも登場するが、スペインの軍事的占領に抵抗するインディオに同化した日本人が、カトリック教会の教えるイエスは自分が信ずる神ではないと主張する点は重要である。遠藤のキリスト・イエスは、常に弱者に寄り添うものであった。それは『沈黙』においては、ポルトガル人司祭に踏絵を踏むことさえ許す神であった。

遠藤は、「日本のグレアム・グリーン」と欧米で呼ばれてきた。カトリック作家であること、裏切りという主題が重要な意味を持つていたなどの共通点があるので、根拠のない評価ではない。遠藤がグリーンを尊敬し、グリーンが遠藤の『沈黙』を高く評価していたことも、二人を並べて論じる理由となっていたことは疑いない。しかし、グリーンは西洋で生まれた白人であり、遠藤はアジアで生まれた有色人であった。そこには、無視することのできない立場の違いが厳然と存在している。遠藤にあつてグリーンにないのは、非西洋人の立場から西洋を相対化する視線である。それゆえ、遠藤をグリーンと安易に重ね合わせるべきではない。遠藤を「日本のグリーン」と呼ぶことは、要するに、彼を白人化し、西洋世界に取り込む巧妙な操作だったと見ることが可能であり、それは、問題提起力に満ちた彼の文学の根底にあつた、作家自身の非白人性の自覚を見失わせてしまうものであつたとも言えるのである。

## 五 ポストコロニアル時代の文学と政治

一九五〇年代に、遠藤は政治に関する発言を最も多く行っている。第二次中東戦争停戦直後の一九五六年一月七日の新聞（掲載誌不詳）に発表された「スエズの悲劇に思う」は、ポストコロニアル的視座から遠藤を追跡してきたわれわれにとつて看過することのできないテクストである。「三年間の留学の間、私のつき当たった問題はやはり、「西欧と東洋との対立」ということである。この黄色い運河こそはその二つの世界のはざまに当る地点だった」と記す遠藤は、近代西洋植民地主義に関する次のような注目すべき見解を述べているのである。

ポートサイドからアデンまで、私は二つの事実にすぐ気がついた。一つはこの海峡の港々にはあまりに多くの異なつた民族が雑居していることだった。船をおりる。私はそこにアラビア人やアフ

リカの様々な人種がすべてみじめな姿で旅人に金を乞い、道ばたに寝ころんでいるのを不気味な気持でながめたのである。

だが、同じように金を乞い、同じように惨めな彼らの間にも民族的な偏見や宗教的な対立や、皮膚の色に対するひそかなコンプレックスがながれていることを残念ながら私は観察する暇を持たなかった。

それにしても私が傷つけられたのは、これらの有色人種が針金のようにやせこけた手足を持っていたことである。そして、濁った生気のない目で船からおりる旅人たちに手を差しのべてあわれみを乞うていたことである。「英国人や仏人は」私を案内してくれた黒人学生がいった。「われわれに長い間、充分塩を与えなかったのです。塩を与えられねば、体力も弱り、征服民族に対する抵抗の気力もなくなることを彼らは知っていたのですね。ごらんなさい。これらウツロな目を……。」と。

(3)

遠藤が「傷つけられた」のは、自分が「英国人や仏人」という「征服民族」には属さず、「針金のようにやせこけた手足を持つてい」る有色人種の側に属していることを強く意識したからにほかならない。彼は「西欧と東洋との対立」と記しているが、これは西洋対非西洋、白人対有色人種と言いつ換えることができる。ただし、西洋の植民地となることなく近代化に成功した日本は、東南アジアにおいては「征服民族」だったのであり、この点が、文学者としての彼の立場を微妙なものにしている。

一九五八年にソヴェエト連邦ウズベク共和国タシケントで開催されたアジア・アフリカ作家会議に野間宏、加藤周一らと出席した遠藤は、自分が西欧文学の知識は豊かだが、アジア・アフリカの文学には無知で、特にアフリカとなると「その国の文学や歴史はおろか、地名さえさだかでない」ことを痛感した。「もし自分が西欧文学者の大会に列席したならばこれほどの恥ずかしさを味わうことはない」と思い、ひどく考えさせられたのである(4)。カンボジアの作家と話した遠藤は、国民の識字率向上という教育政策が文学以前に課題としてあることに気づき、文学が反植民地運動や民族運動に直結するポストコロニアル時代の新興国の現実を再認識している。また、「すべての女性は文学をやる権利がある」というある分科会での決議については、少なくとも戦後の日本では考えられない問題提起なので、アジア・アフリカ諸国の文学が、いかに「政治や社会の革命にむすびついているかわかる」と述べている。ここで遠藤がアジア・アフリカの参加者に対して、優越感を覚えるどころか、彼らが生きる世界に関する自らの無知を恥じていることには注意が必要であろう。

アジア・アフリカの人々の強い愛国心について、遠藤は留学時代を回想して次のように記したことがある。東京オリンピックが終わった一九六五年のエッセイである。

一番、単純でもイキイキとした国家愛を持っていたのは黒人学生と東南アジア新興国の学生だった。彼らは共通して闘うべき対象をもっていったからその愛国心も強かった。黒人学生の場合人種差別を自分たちに加える白人たちを憎み、東南アジアの学生は自分たちの同胞を植民地化する支配階級を憎んでいた。彼らには敵があったのである。(5)

このように述べた遠藤は、日本の為政者が国民に愛国心を持たせようとするならば、外国への敵愾心を煽ればよいことになる。述べ、しかしその方法を採用することは無理であるという。「もちろん日本人の中にも熱烈な反共主義者や反米主義者は存在するが、大部分の者は米国にもソヴェエトにもそれほどふかい敵意を持っていないであろう。身近な中国やその他のアジア諸国には戦争で被害を与えたというコンプレックスが根をおろしている」。それゆえ「われわれは往年のように敵対意識のある国にもつことよって国民全体のエネルギーに方向を与えるわけにはいかない」と主張するのである。敗戦から二〇年、奇跡的な復興を遂げて東京オリンピックが終わったあと、権力がこれを契機にナシヨナリズムを国民に植え付けようとするに、遠藤は懸念を示していたのである。「大部分の者は米国にもソヴェエトにもそれほどふかい敵意を持っていないであろう」という言葉は、おそらく当時の

遠藤自身の認識を示している。沖縄はまだアメリカ合衆国の占領下にあった。これまで指摘されたことがないが、遠藤は、沖縄についての政治的関心は高くはなかった。

『どっこいしょ』（一九六八七）で防衛大学校を作品に登場させた遠藤は、一九七〇年に航空自衛隊と陸上自衛隊をそれぞれ一回ずつ見学している（6）。現場の隊員たちに直接取材しており、待遇に対する彼らの不満や、戦車が朝鮮戦争の頃の米軍の旧型で、しかも二〇年落ちのものである事実には驚いている。「だが自衛隊の根本問題の一つは結局、これを必死で軍隊とよぶまいとする政府の気持と事実との間に板ばさみになっている隊員の心理にある。日かげ者の意識は昔ほどではなくなったにせよ、しかしいろいろな形（予算・名称など）にもあらわれているのは事実だ。私はこれを非常に感じた」という遠藤は、二年ほどの準備をした上で、国民投票により自衛隊を軍隊にすべきか否か決定することを提案している。三島由紀夫が陸上自衛隊市ヶ谷駐屯地の東部方面総監部で憲法改正をアピールして割腹自決したのは、遠藤が自衛隊を見学したこの年の一月だった。

アジア太平洋戦争敗北後の日本が、アメリカ合衆国の軍事的・世界的な位置づけられ、「有色の帝国」から「下請けの帝国」になったことを、三島由紀夫と親しく政治的にも右派だった村松は鋭く見抜いていた。本土復帰前の沖縄も訪問した彼は、三島の死後、憲法改正と、形式上ではない実質的な日本の「独立」を説いて倦まなかった。

遠藤にも日本がアメリカ合衆国の準植民地状態に置かれているという認識があったことは、素人劇団「樹座」の演目『蝶々夫人』（一九八四年）での、政治的イロニーに満ちた演出からうかがえる。笑劇でありながら、それはひどく苦い笑いであった。樹座に協力した黛敏郎は、村松の盟友であり、当時の保守文化人は、こうしたセルフイロニーを受け入れる精神的余裕を持っていたことがわかる。また、政治的信条が同じではなかった遠藤と村松の管鮑の交わりは、二人がともに志操堅固な知識人であり、時の権力の僕として生きることを潔しとしなかったことから可能となっていたのである。

## おわりに

死の三年前に上梓された長編『深い河』（一九九三年）は、英国の植民地支配から第二次世界大戦後に独立した南アジアの大国インドを舞台としている。一九八四年一〇月が物語の現在である。ヒンズー教、イスラム教、シーク教などさまざまな宗教が共存する現代インドを舞台としたのは、カトリック教会の正統教義に長年違和感を抱いていた遠藤が、ジョン・ヒックの宗教多元主義に、理論的な共感を当時抱いていたこととおそらく無関係ではない。教会から異端児扱いされる日本人修道士を通して、キリスト教はこの作品のなかで相対化されているのである。

『死海のほとり』はイスラエルのパレスチナ占領という現在進行中の暴力を物語の背景としていたが、『深い河』は、インディラ・ガンディー首相暗殺という暴力をクライマックスに持ってきたことで、ポストコロニアル時代のあからさまな暴力を、読者の眼前に突きつけている。首相暗殺はインドの国内事件ではあるが、小説中でこの事件が果たす衝撃は、宗教的対立の暴力性のみならず、一九四七年に独立を果たすまでの英国の長い植民地支配と抵抗の歴史や、独立を果たした後も続くインド国民の苦難の足取りを読者に強く想起させるものである。

このように、本研究で、日本のカトリック作家遠藤周作の文学が、一九五四年の「アフリカの體臭」から一九九三年の『深い河』まで、近代植民地主義とそこに組み込まれた暴力への関心に貫かれていたことを確認することができた。とりわけ、彼が提出した「同伴者イエス」像が、イスラエルに占領されたパレスチナの人々という背景のなかで、アウシュビッツの記憶とともに描き出されたことは、きわめて意義深いものがある。

冷戦期の知識人として、遠藤は政治に関して積極的に発言する人ではなかった。しかし、一九六〇年代を通して、徐々にアジア太平洋戦争の記憶が風化し始めると、「戦中派」として過去を想像させる小説を書くとともに、一九七〇年代以降は、「過去の戦争の時代」と「現在の平和な時代」という日本国内に閉じた図式から、「現在の平和の時代」がそのまま「現在の戦争の時代」とあるという国

際的に開かれた認識へと転換し、現代の植民地主義をモチーフとする作品や、近代植民地主義を描く歴史小説を通して、現代の植民地主義を想像させるようになった。彼にとって創作活動は、そのまま政治的実践でもあったと考えてよいのである。

- (1) 遠藤周作「基督教と日本文学」『東京新聞』一九五五年四月一三日、一四日（『春は馬車に乗って』文春文庫、一九九二年、二二―二三頁）。
- (2) G・M・フレドリクソン『人種主義の歴史』李孝徳訳、みすず書房、二〇〇九年。
- (3) 遠藤周作『春は馬車に乗って』四三―四四頁。
- (4) 遠藤周作「アジアにおける文学の条件」『春は馬車に乗って』八〇頁。
- (5) 遠藤周作「汝の敵を作れ？ オリンピックのあとで」『日本』一九六五年一月号（『春は馬車に乗って』一五一頁）。
- (6) 遠藤周作「新聞連載コラム・晴雨計」『新潟日報』一九七〇年二月七日―七月二五日連載（「自衛隊を見て」「ふたたび自衛隊について」は、それぞれ『春は馬車に乗って』二七八―二七九頁、二九〇―二九一頁）。

## 参考文献

## 凡例

- 一 多岐にわたるため、以下に示す七部に分類して掲げた。特に断りがない場合は、刊行順に列叙している。
  - I 遠藤周作の著書（全集・単行本）
  - II 村松剛の著書（単行本）
  - III 辻邦生の著書（全集・単行本）
  - IV 遠藤周作関係（単行本・博士論文・定期刊行物）
  - V 村松 剛関係（単行本・同時代批評等）
  - VI 辻 邦生関係（単行本・博士論文・雑誌等）
  - VII 全般（単行本・論文・電子情報）
- 一 遠藤周作と辻邦生は、本研究で参照した全集未収録の文章が収録された書籍のみを単行本として掲げた。ただし、辻邦生の未刊行小説「我らの中の掲いた河」は初出誌を掲載した。また、村松剛は全集が編まれていないため、書誌的見地から、本文中で言及していない著書も、文庫版を含めて全て掲げた。
- 一 本文中の註で示した論文は、村松剛を除いて掲載していない。

## I 遠藤周作の著書

### 全集

- 『遠藤周作文庫』既刊五一冊、講談社、一九七四―一九七八年  
『遠藤周作文学全集』全一一巻、新潮社、一九七五年  
『遠藤周作文学全集』全一五巻、新潮社、一九九一―二〇〇〇年

### 単行本

- 遠藤周作『遠藤周作怪奇小説集』講談社、一九七〇年  
遠藤周作『黒ん坊』毎日新聞社、一九七一年  
遠藤周作『どっこいショ』中央公論社、一九六四年  
遠藤周作『一、二、三』講談社、一九六七年  
遠藤周作『ぐうたら人間学』講談社、一九七二年  
遠藤周作『ぐうたら好奇学』講談社、一九七四年  
遠藤周作『彼の生きかた』新潮社、一九七五年  
遠藤周作『ぼくたちの洋行』講談社、一九七五年  
遠藤周作『砂の城』新潮社、一九七六年  
遠藤周作『悲しみの歌』新潮社、一九七七年  
遠藤周作『王妃マリー・アントワネット』1 2 3、朝日新聞社、一九七九―一九八〇年  
遠藤周作『十一の色硝子』新潮社、一九七九年  
遠藤周作『異邦人の立場から』日本書籍、一九七九年  
遠藤周作『遠藤周作による遠藤周作』青銅社、一九八〇年  
遠藤周作『女の一生』朝日新聞社、一九八二年  
遠藤周作『心の夜想曲』文藝春秋、一九八六年  
遠藤周作『遠藤周作のあたたかな医療を考える』読売新聞社、一九八六年  
遠藤周作『落第坊主の履歴書』日本経済新聞社、一九八九年  
遠藤周作・佐藤泰正共著『人生の同伴者』春秋社、一九九一年

遠藤周作『春は馬車に乗って』文春文庫、一九九二年  
遠藤周作『心の砂時計』文藝春秋、一九九二年  
遠藤周作『「遠藤周作」と Shusaku Endo』春秋社、一九九四年  
遠藤周作『「深い河」をさぐる』文藝春秋、一九九四年  
遠藤周作『「深い河」 創作日記』講談社、一九九七年  
遠藤周作『心のふるさと』文藝春秋、一九九七年  
遠藤周作『ルーアンの丘』PHP研究所、一九九八年

## II 村松剛の著訳書

### 単行本

村松剛訳『モジリアニ肖像画』紀伊國屋書店、一九五七年  
村松剛訳『死はわが職業』ロベール・メルル著、大日本雄弁会講談社、一九五七年  
村松剛訳『二十世紀文学の決算』R・M・アルベレス著、紀伊國屋書店、一九五八年  
村松剛訳『芸術批評』アンドレ・リシャル著、白水社文庫クセジュ、一九五九年  
村松剛・橋本一明・清水徹共訳『民族社会主義革命ハンガリヤ十年の悲劇』フェレンツ・フェイト著、近代生活社、一九五九年  
村松剛『大量殺人の思想』文藝春秋新社、一九六一年  
村松剛『ナチズムとユダヤ人——アイヒマンの人間像』角川新書、一九六二年  
村松剛『アルジェリア戦線従軍記』中央公論社、一九六二年  
村松剛『文学と詩精神』南北社、一九六三年  
村松剛『女性的時代を排す』文藝春秋新社、一九六三年  
村松剛『ユダヤ人 迫害・放浪・建国』中公新書、一九六三年  
村松剛『古代の光を求めて——西洋の源流』角川新書、一九六四年  
村松剛訳『テレーズ・デスケイルウ』フランソワ・モーリアック著、角川文庫、一九六四年  
村松剛『教養としてのキリスト教』講談社現代新書、一九六五年  
村松剛『日本の回復』番町書房、一九六五年  
村松剛『ユダと美神』講談社、一九六六年  
村松剛『ド・ゴール——栄光の道をゆくなぞの英雄』講談社現代新書、一九六七年  
村松剛『ジャンヌ・ダルク 愛国心と信仰』中公新書、一九六七年  
村松剛『アメリカの憂鬱』読売新聞社、一九六七年  
村松剛『評伝ポール・ヴァレリー』筑摩書房、一九六八年  
村松剛『戦後の神話』日本教文社、一九六八年  
村松剛訳『キリストは死んだか』ジョー・ロブラウン編、タイムライフインターナショナル、一九六九年  
村松剛『歴史とエロス』新潮社、一九七〇年  
村松剛『動乱のヒーロー』日新報道、一九七一年  
村松剛『三島由紀夫 その生と死』文藝春秋、一九七一年  
村松剛『中東戦記』文藝春秋、一九七二年  
村松剛『三匹目の仔豚』日本交通公社、一九七二年  
村松剛『評伝アンドレ・マルロオ』新潮選書、一九七二年／中公文庫、一九八九年  
村松剛編『日本をみつめる』日本教文社、一九七三年  
村松剛『現代おんな大学』浪曼、一九七四年  
村松剛・高田好胤『渇愛の時代』読売新聞社、一九七四年／角川文庫、一九七八年  
村松剛訳『おおエルサレム！ アラブ・イスラエル紛争の源流』上下 ドミニク・ラピエール／ラリー・コリンズ著、

- 早川書房、一九七四年／ハヤカワ文庫、一九八〇年
- 村松剛『日本近代の詩人たち——象徴主義の系譜』サンリオ選書、一九七五年
- 村松剛『死の日本文学史』新潮社、一九七五年／角川文庫、一九八一年／中公文庫、一九九四年
- 村松剛『私の「正論」』日本教文社、一九七六年
- 村松剛『察しあいの世界』プレジデント社、一九七七年
- 村松剛編『元号いま問われているもの』日本教文社、一九七七年
- 村松剛『帝王後醍醐——「中世」の光と影』中央公論社、一九七八年／中公文庫、一九八一年
- 村松剛編『国際テロの時代』高木書房、一九七八年
- 村松剛『日本文化を考える 村松剛対談集』日本教文社、一九七九年
- 村松剛『歴史に学ぶ——激動期を生きた人々』日本教文社、一九八一年
- 村松剛『血と砂と祈り——中東の現代史』日本工業新聞社、一九八三年／中公文庫、一九八七年
- 村松剛『宰相の系譜 時代を刻んだ男たちの言行録』廣済堂出版、一九八三年
- 村松剛『アンドレ・マルロオとその時代』角川選書、一九八五年
- 村松剛『豊かな社会の相続人たち 自前の精神を先人の足跡に学ぶ』日本教文社、一九八五年
- 村松剛『勝田吉太郎』一つの時代の終りに 世界史のなかの近代日本』日本教文社、一九八六年
- 村松剛『醒めた炎——木戸孝允伝』上下、中央公論社、一九八七年／中公文庫全四巻、一九九一年
- 村松剛『日本人と天皇』PHP研究所、一九八九年
- 村松剛『三島由紀夫の世界』新潮社、一九九〇年／新潮文庫、一九九六年
- 村松剛『日本を国家と呼べるのか』PHP研究所、一九九一年
- 村松剛『保護領国家日本の運命——冷戦後の世界の中で』PHP研究所、一九九二年
- 村松剛『湾岸戦記——世界新動乱時代の幕開け』学習研究社、一九九三年／学研M文庫、二〇〇二年
- 村松剛『西欧との対決——漱石から三島、遠藤まで』新潮社、一九九四年
- 村松剛『世界史の中の日本——危機の指導者群像』PHP研究所、一九九五年

### Ⅲ 辻邦生の著訳書

#### 全集

- 『辻邦生作品 全六巻』河出書房新社、一九七二—一九七三年
- 『辻邦生全短篇』中央公論社、一九七八年
- 『辻邦生歴史小説集成』全一二巻、岩波書店、一九九二—一九九三年
- 『辻邦生全集』全二〇巻、新潮社、二〇〇四—二〇〇六年

#### 単行本

- 辻邦生『時の扉』毎日新聞社、一九七七年
- 辻邦生『樹の声 海の声』上中下、朝日新聞社、一九八二—一九八三年
- 辻邦生『雲の宴』上下、朝日新聞社、一九八七年
- 辻邦生『光の大地』毎日新聞社、一九九六年
- 辻邦生『小説への序章 神々の死の後に』河出書房新社、一九六八年
- 辻邦生『パリの手記』全五巻 河出書房新社、一九七三—一九七四年
- 辻邦生『海辺の墓地から 辻邦生第一エッセー集』一九六一—一九七〇』新潮社、一九七四年
- 辻邦生『北の森から 辻邦生第二エッセー集』一九七一—一九七二』新潮社、一九七四年
- 辻邦生『モンマルトル日記』一九六八—一九六九』集英社、一九七四年
- 辻邦生『詩への旅 詩からの旅』筑摩書房、一九七四年
- 辻邦生『霧の廃墟から 辻邦生第三エッセー集』一九七二—一九七三』新潮社、一九七六年



- 辻邦生『時の終りへの旅』筑摩書房、一九七七年
- 辻邦生『季節の宴から 辻邦生第四エッセー集 一九七四―一九七五年』新潮社、一九七九年
- 辻邦生『橄欖の小枝 芸術論集』中央公論社、一九八〇年
- 辻邦生『森有正 感覚のめざすもの』筑摩書房、一九八〇年
- 辻邦生『風塵の街から 辻邦生第五エッセー集 一九七六―一九七七』新潮社、一九八一年
- 辻邦生『夏の光満ちて \*パリの時』中央公論社、一九八二年
- 辻邦生『トーマス・マン』岩波書店、一九八三年
- 辻邦生『冬の霧立ちて\*パリの時』中央公論社、一九八三年
- 辻邦生『時の果実 現代のエッセイ』朝日新聞社、一九八四年
- 辻邦生『春の風駆けて \*\*パリの時』中央公論社、一九八六年
- 辻邦生『詩と永遠』岩波書店、一九八八年
- 辻邦生『私の映画手帖』文藝春秋、一九九八年
- 辻邦生『永遠の書架にたちて』新潮社、一九九〇年
- 辻邦生『時刻のなかの肖像』新潮社、一九九一年
- 辻邦生『遙かなる旅への追想』新潮社、一九九二年
- 辻邦生『美神との饗宴の森で』新潮社、一九九三年
- 辻邦生『美しい人生の階段 映画ノート'88~'92』文藝春秋、一九九三年
- 辻邦生『言葉が輝くとき』文藝春秋、一九九四年
- 辻邦生・堀内ゆかり共訳『安南・愛の王国』クリストフ・バタイユ著、集英社、一九九五年
- 辻邦生・堀内ゆかり共訳『アブサン・聖なる酒の幻』クリストフ・バタイユ著、集英社、一九九六年
- 辻邦生・堀内ゆかり共訳『時の主人』クリストフ・バタイユ著、集英社、一九九七年
- 辻邦生『薔薇の沈黙 リルケ論の試み』筑摩書房、二〇〇〇年
- 辻邦生『辻邦生が見た 20世紀末』信濃毎日新聞社、二〇〇〇年
- 辻邦生『言葉の箱 小説を書くということ』メタローグ、二〇〇〇年
- 辻邦生『海峡の霧』新潮社、二〇〇一年
- 辻邦生『微光の道』新潮社、二〇〇一年
- 辻邦生『情緒論の試み』岩波書店、二〇〇二年

#### 初出誌

辻邦生「我らの中の渴いた河」『エコノミスト』毎日新聞社、一九七二四月四日号―二月二六日号

#### IV 遠藤周作関係

##### 単行本

- 江藤淳『成熟と喪失 “母”の崩壊』河出書房新社、一九六七年
- 武田友寿『遠藤周作の世界』中央出版社、一九六九年
- 武田友寿『遠藤周作の文学』聖文社、一九七五年
- 玉置邦雄『現代日本文芸の成立と展開』桜楓社、一九七七年
- 遠藤正介氏追悼事業委員会編『遠藤正介 1921―1977』遠藤正介氏追悼事業委員会、一九七七年
- 泉秀樹『遠藤周作の研究』実業之日本社、一九七九年
- 戸田義雄編『日本カトリシズムと文学 井上洋治・遠藤周作・高橋たか子』大明堂、一九八二年
- 佐藤泰正編『鑑賞 日本現代文学第25巻 椎名麟三・遠藤周作』角川書店、一九八三年
- 小久保実『遠藤周作の世界』和泉書院、一九八三年

- 武田友寿『『沈黙』以後 遠藤周作の世界』女子パウロ会、一九八五年
- 菊田義孝『遠藤周作論 かれは、なにを書かなかったか』永田書房、一九八七年
- 笠井秋生『遠藤周作論』双文社出版、一九八七年
- 上総英郎『遠藤周作論』春秋社、一九八七年
- 今川憲次『カトリック小説考 グレアム・グリーンと遠藤周作を中心に』南雲堂、一九八八年
- ネラン、ジョルジュ『おバカさんの自叙伝半分——聖書片手にニッポン40年』講談社、一九八八年
- 佐古純一郎『椎名麟三と遠藤周作』朝文社、一九八九年
- 上総英郎『十字架を背負ったピエロ 狐狸庵先生と遠藤周作』主婦の友社、一九八〇年
- 田川建三『宗教とは何か』大和書房、一九八四年
- 荒井猷『「同伴者」イエス——小論・講演集』新地書房、一九八五年
- 文芸春秋編『遠藤周作のすべて』文春文庫、一九八九年
- 廣石康二『遠藤周作の縦糸——体験的作家論』朝文社、一九九一年
- 川島秀一『遠藤周作 愛の同伴者』和泉書院、一九九三年
- 三木サニア『遠藤・辻の作品世界 美と信と愛のドラマ』双文社出版、一九九三年
- 佐藤泰正『佐藤泰正著作集⑦遠藤周作と椎名麟三』翰林書房、一九九四年
- 遠藤周作他著『「遠藤周作」のShusaku Endo アメリカ「沈黙と声」遠藤文学研究学会報告』春秋社、一九九四年
- 渡邊一民『フランスの誘惑——近代日本精神史論』岩波書店、一九九五年
- 三浦朱門『わが友遠藤周作——ある日本のキリスト教徒の生涯』PHP研究所、一九九七年
- 遠藤周作他著『追悼保存版 遠藤周作の世界』朝日出版社、一九九七年
- 山形和美編『遠藤周作 その文学世界』国研出版、一九九七年
- 刊行委員会編『遠藤周作と「樹座」の素敵な仲間たち』きこ書房、一九九八年
- 遠藤順子『夫・遠藤周作を語る』文藝春秋、二〇〇〇年
- 笠井秋生・玉置邦雄編『作品論 遠藤周作』双文社出版、二〇〇〇年
- 川島秀一『遠藤周作 〈和解〉の物語』和泉書院、二〇〇〇年
- 山崎陽子『遠藤周作と世界一の素人劇団「樹座」——遠藤さんの原っぱで遊んだ日』小池書院、二〇〇〇年
- 石内徹編『遠藤周作『沈黙』作品論集』クレス出版、二〇〇二年
- 遠藤順子『ビルマ独立に命をかけた男たち』PHP研究所、二〇〇三年
- 佐藤泰正編『梅光女学院大学公開講座論集第52集 遠藤周作を読む』笠間書院、二〇〇四年
- 山根道公『遠藤周作 その人生と『沈黙』の真実』朝文社、二〇〇五年
- 上総英郎『遠藤周作へのワールド・トリップ』パピルスあい、二〇〇五年
- 廣石康二『遠藤周作のすべて——体験的作家論』朝文社、二〇〇六年
- 遠藤周作・佐藤泰正『人生の同伴者』講談社文芸文庫、二〇〇六年
- 加藤宗哉『遠藤周作』慶應義塾大学出版会、二〇〇六年
- 兼子盾夫『遠藤周作の世——シンボルとメタファー』教文館、二〇〇七年
- 柘植光彦編『遠藤周作 挑発する作家』至文堂、二〇〇八年
- 辛承姫『遠藤周作論——母なるイエス』専修大学出版局、二〇〇九年
- 水谷真人『暴力への時間 小説への力学——初期遠藤周作の方法について』試論社、二〇一〇年
- 山根道公『遠藤周作『深い河』を読む マザー・テレサ、宮沢賢治と響きあう世界』朝文社、二〇一〇年
- 小嶋洋輔『遠藤周作論——「救い」の位置』双文社出版、二〇一二年
- 今井真理『それでも神はいる——遠藤周作と悪』慶應義塾大学出版会、二〇一五年
- 遠藤周作文学館企画『遠藤周作と『沈黙』を語る』『沈黙』刊行50年記念国際シンポジウム全記録』長崎文献社、二〇一七年

Williams, Mark B. *Endo Shusaku: A Literature of Reconciliation* (Routledge, 1999)

Ascenso, Ascenso. *Transcultural Theodicy in the Fiction of Shusaku Endo* (Tesi Gregoriana: Teologia, 2009) [トシエン・アゼリ

- ノ『遠藤周作——その文学と神学の世界』川鍋襄・田村脩訳、教友社、二〇一三年]
- Johnny, Toma. *A Study of the Catholic Priest in Shusaku Endo's Novels* (LAP Lambert Academic Publishing, 2011)
- Dunoyer, Pierre. *Shusaku Endo 1923-1996* (Les Éditions du Cerf, 2014)
- Mark W, Dennis, Middleton, Darren J. N. (ed.), *Approaching Silence: New Perspectives on Shusaku Endo's Classic Novel* (Darren J. N. Middleton Bloomsbury Academic, 2015)
- Weronika Kasza, Justyna. *Hermeneutics of Evil in the Works of Endo Shusaku: Between Reading and Writing* (Peter Lang Pub Inc, 2016)
- Reardon, Patrick T, *Faith Stripped to Its Essence: A Discordant Pilgrimage Through Shusaku Endo's Silence* (ACTA Publications, 2016)

## 博士論文

- 李平春「遠藤周作文学の〈神〉像——〈父なる神〉から〈愛の神〉へ」白百合女子大学、二〇〇二年
- 小嶋洋輔「『遠藤周作』論——文学と救いの位置」(千葉大学、二〇〇五年)
- 田中葵「遠藤周作文学作品論——その文学的特質について」関西大学、二〇〇七年
- 辛承姫「遠藤周作論——母なるイエス」専修大学、二〇〇八年
- Narsimhan, Ranjana 「遠藤周作の『深い河』に見られる日本人の死生観の多角的研究」大阪大学、二〇〇八年
- 朴賢玉「遠藤周作文学研究——受容から照射される遠藤文学」名古屋大学、二〇〇八年
- 山田都与「キリスト者遠藤周作における文学技法」金城学院大学、二〇〇八年
- 李英和「日本文化における「母なるもの」と女性表象——遠藤周作の文学を中心に」城西国際大学、二〇〇六年
- 李英和「遠藤周作の文学とキリスト教——インカルチュレーションと預言者性」筑波大学、二〇〇八年
- 菅原とよ子「遠藤周作論——『アデンまで』から『イエスの生涯』までにおける「同伴者イエス」追究の過程」九州大学、二〇一二年
- 古浦(住友)修子「遠藤周作文芸の成立と展開——根源と普遍への探求」関西学院大学、二〇一四年
- 北田雄一「遠藤周作における留学——批評家から小説家へ」関西学院大学、二〇一六年

## 定期刊行物

- 『遠藤周作研究』遠藤周作学会、創刊号—八号
- 『キリスト教文学研究』第一六号(ミニシンポジウム 遠藤周作『深い河』)一九九九年五月
- 『キリスト教文学研究』第二四号(特集Ⅱ 遠藤周作『侍』をめぐって)二〇〇七年五月
- 『三田文學』第七六卷第四八号(追悼 遠藤周作)一九九七年二月
- 『三田文學』第七六卷第五一号(遠藤周作の晩年とその文学)一九九七年十一月
- 『三田文學』第八〇卷第六七号(特集 遠藤周作)二〇一〇年十一月
- 『三田文學』第八二卷第七四号(英国人から見た遠藤周作)二〇一三年八月
- 『三田文學』第八五卷第八四号(新鋭による遠藤周作論)二〇一六年二月
- 『三田文學』第八五卷第八七号(没後十年 遠藤周作 響きあう文学)二〇一六年十一月
- 『國文學 解釈と教材の研究』第一八卷第二号(特集 遠藤周作と北杜夫)一九七三年
- 『國文學 解釈と教材の研究』第三八卷第一〇号(特集 遠藤周作 グローバルな認識)一九九三年九月
- 『国文学 解釈と鑑賞』第四卷第七号(特集 遠藤周作の文学世界)一九七五年六月
- 『国文学 解釈と鑑賞』第五一巻第一〇号(特集 遠藤周作)一九八六年十月
- 『文藝別冊・遠藤周作(増補新版)』河出書房新社、二〇一六年三月

## その他

- 『開館一周年記念特別企画展 遠藤周作と Paul Endo 母なるものへの旅』町田市民文学館ことばらんど、二〇〇七年
- 久松健一監修『町田市民文学館蔵 遠藤周作蔵書目録(欧文篇)光の序曲』二〇〇七年
- 神奈川文学振興会編『遠藤周作展——二一世紀の生命のために』神奈川近代文学館、二〇一一年

『町田市民文学館 遠藤周作蔵書目録（和文篇）』（電子版）町田市民文学館ことばらんど、二〇一六年  
[https://www.city.machida.tokyo.jp/bunka/bunka\\_geijutsu/cul/cul08Literature/machidayukarinosakataashi\\_files/indowasyo.pdf#search=%E9%81%A0%E8%97%A4%E5%91%A8%E4%BD%9C%E8%94%B5%E6%9B%B8%E7%9B%AE%E9%8C%B2](https://www.city.machida.tokyo.jp/bunka/bunka_geijutsu/cul/cul08Literature/machidayukarinosakataashi_files/indowasyo.pdf#search=%E9%81%A0%E8%97%A4%E5%91%A8%E4%BD%9C%E8%94%B5%E6%9B%B8%E7%9B%AE%E9%8C%B2)

## V 村松剛関係

### 単行本

村松英子『私のたったひとつの望いに——女・詩・演劇』文化出版局、一九八五年  
村松英子『三島由紀夫 追想のうた——女優として育てられて』阪急コミュニケーションズ、二〇〇七年

### 同時代批評・論文

入江隆則「ニヒリズムを越えるもの 村松剛論」『新潮』一九八二年五月号、二二二—二五〇頁  
入江隆則「勁さと繊細さと 村松剛氏を悼む」『新潮』一九九四年七月号、三一八—三二五頁  
「村松剛先生略歴・著書目録（村松剛先生退官記念号）」『文学研究論集』九号、筑波大学比較理論文学会、一九九二年、i—iv頁  
和田正美「村松剛『西欧との対決』著者への追悼を兼ねて」『明星大学研究紀要』日本文化学部・言語文化学科、一九九五年、六一—六四頁  
李映子・小川亮彦・加藤百合「村松剛名誉教授追悼文」『文学研究論集』一二号、筑波大学比較理論文学会、一九九五年、一一九—一二八頁  
毛利順男「村松剛の批評の世界」『鶴見大学紀要 第一部 国語・国文学編』三五号、一九九八年、一二—一五五頁  
井上隆史「村松剛と三島由紀夫」松本徹・佐藤秀明・井上隆史編『三島由紀夫論集1 三島由紀夫の時代』勉誠出版、二〇〇一年、一九四—二〇五頁

## VI 辻邦生関係

### 単行本

小田島本有『語られる経験——夏目漱石・辻邦生をめぐる』近代文芸社、一九九四年  
辻佐保子『辻邦生のために』新潮社、二〇〇二年  
上坂信男『太虚へ——辻邦生歴史小説の世界』右文書院、二〇〇四年  
佐々木涇『辻邦生のバリ滞在』駿河台出版社、二〇〇六年  
『辻邦生全集』第二〇巻「アルバム・雑纂・年譜・書誌・辻邦生人と文学」新潮社、二〇〇六年  
辻佐保子『たえず書く人 辻邦生と暮らして』中央公論新社、二〇〇八年  
三木サニア『辻邦生 人と文学』勉誠出版、二〇〇九年

### 博士論文

岡崎昌宏「辻邦生初期歴史小説の研究」大阪大学、二〇〇九年

### 雑誌等

菅野昭正編『作家の世界 辻邦生』番町書房、一九七八年

## Ⅶ 全般

### 日本語文献（著者名五〇音順）

- 青山昌文『芸術史と芸術理論』放送大学教育振興会、二〇一〇年  
青山昌文『美学・芸術学研究』放送大学教育振興会、二〇一三年  
青山昌文『芸術は世界の力である』左右社、二〇一四年  
浅田豊子『植民地帝国日本の法的展開』信山社出版、二〇〇四年  
浅田豊子『帝国日本の植民地法制——法的統合と帝国秩序』名古屋大学出版会、二〇〇八年  
阿部良雄『若いヨーロッパ』中公文庫、一九七九年  
磯田光一『鹿鳴館の系譜——近代日本文芸史誌』講談社文芸文庫、一九九一年  
磯田光一『思想としての東京——近代文学史論ノート』講談社文芸文庫、一九九〇年  
板垣雄三編著『アラブの解放』平凡社、一九七四年  
板垣雄三『石の叫びに耳を澄ます——中東和平の探索』平凡社、一九九二年  
板垣雄三『イスラーム誤認——衝突から対話へ』岩波書店、二〇〇三年  
稲賀繁美『絵画の東方——オリエンタリズムからジャポニズムへ』名古屋大学出版会、一九九九年  
稲賀繁美編『異文化理解の倫理に向けて』名古屋大学出版会、二〇〇〇年  
今道友信『知の光を求めて——一哲学者の歩んだ道』中央公論新社、二〇〇〇年  
今道友信『美の存立と生成』ピナクス出版、二〇〇六年  
今道友信『美について考えるために』ピナクス出版、二〇一五年  
池端雪輔他編『岩波講座東南アジア史6 植民地経済の繁栄と凋落』岩波書店、二〇〇一年  
池端雪輔他編『岩波講座東南アジア史7 植民地抵抗運動とナショナリズムの展開』岩波書店、二〇〇二年  
飯倉章『黄禍論と日本人——欧米は何を嘲笑し、恐れたのか』中央公論社、二〇一三年  
飯倉章『イエロー・ペリルの神話——帝国日本と「黄禍」の逆説』彩流社、二〇〇四年  
伊藤真実子『明治日本と万国博覧会』吉川弘文館、二〇〇八年  
石崎晴己・澤田直編『サルトル——21世紀の思想家』思潮社、二〇〇七年  
石塚剛『植民地支配と日本語』三元社、一九九三年  
井上洋治『余白の旅——思索のあと』日本基督教団出版局、一九八〇年  
今橋映子『異都憧憬——日本人のパリ』柏書房、一九九三年  
今西一『文明開化と差別』吉川弘文館、二〇〇一年  
鶴飼哲他『レイシズム・スタディーズ序説』以文社、二〇一二年  
宇佐見久美子『アフリカ史の意味』山川出版社、一九九六年  
臼杵陽『世界化するパレスチナ／イスラエル紛争』岩波書店、二〇〇四年  
臼杵陽『イスラエル』岩波新書、二〇〇九年  
臼杵陽『世界史の中のパレスチナ問題』講談社現代新書、二〇一三年  
上村英明『先住民族の「近代史」——植民地主義を超えるために』平凡社、二〇〇一年  
江藤秀一編『帝国と文化——シェイクスピアからアントニオ・ネグリまで』春風社、二〇一六年  
海老坂武『戦後文学は生きている』講談社、二〇一二年  
海老坂武『フランツ・ファノン』講談社、一九八一年  
海老坂武『サルトル——「人間」の思想の可能性』岩波新書、二〇〇五年  
大江志及夫他編『岩波講座日本近代と植民地』全八巻 岩波書店、一九九二年  
大野英二郎『停滞の帝国——近代西洋における中国像の変遷』国書刊行会、二〇一一年  
大室幹雄『月瀬幻影——近代日本風景批評史』中央公論社、二〇〇二年  
岡真理『記憶／物語』岩波書店、二〇〇二年  
岡真理『棗椰子の木陰で——第三世界フェミニズムと文学の力』青土社、二〇〇六年  
岡真理『彼女の「正しい」名前とは何か——第三世界フェミニズムの思想』青土社、二〇〇九年

- 岡真理『アラブ、祈りとしての文学』みすず書房、二〇一五年
- 岡倉登志『二つの黒人帝国——アフリカ側から眺めた「分割期」』東京大学出版会、一九八七年
- 岡倉登志『「野蠻」の発見——近代西洋のみたアフリカ』講談社現代新書、一九九〇年
- 岡倉登志・北川勝彦『日本—アフリカ交流史——明治期から第二次世界大戦期まで』同文館、一九九三年
- 小川さくえ『オリエンタリズムとジェンダー——『蝶々夫人』の系譜』法政大学出版局、二〇〇七年
- 小木新造・前田愛編『明治大正図誌』第一卷（東京一）筑摩書房、一九七八年
- 奥野克巳『帝国医療と人類学』春風社、二〇〇六年
- 小熊英二『（日本人）の境界——沖繩・アイヌ・台湾・朝鮮 植民地支配から復帰運動まで』新曜社、一九九八年
- 長志珠絵『近代日本と国語ナシヨナリズム』吉川弘文館、一九九八年
- 加賀乙彦『加賀乙彦自伝』ホーム社、二〇一三年
- 片岡美智『人間——この複雑なもの』文藝春秋新社、一九五五年
- 加藤周一『サルトル』講談社、一九八四年
- 加藤周一『羊の歌』正統 岩波書店、一九六八年
- 加藤周一『抵抗の文学』岩波新書、一九五一年
- 加藤美雄『わたしのフランス物語』編集工房ノア、一九九二年
- 加藤美雄『続わたしのフランス物語——第二次大戦中の留学生活』編集工房ノア、一九九四年
- 亀井俊介『アメリカ文化と日本——「拝米」と「親米」を越えて』岩波書店、二〇〇〇年
- 神田由美子・高橋龍夫編『渡航する作家たち』翰林書房、二〇一二年
- 北小路健『写真集 さらば大連・旅順（第二版）』国書刊行会、一九九五年
- 川上勉『ヴィシー政府と「国民革命」——ドイツ占領下フランスのナシヨナル・アイデンティティ』藤原書店、二〇〇一年
- 川上肇『帝国主義と植民地主義』お茶の水書房、一九八三年
- 川崎洋『幻のオリエンピック』筑摩書房、一九九二年
- 川村湊『海を渡った日本語——植民地の「国語」の時間』青土社、二〇〇四年
- 川村湊『大衆オリエンタリズムとアジア認識』岩波講座近代日本と植民地8『アジアの冷戦と脱植民地化』岩波書店、一九九三年、一〇七一—一三六頁
- 川村湊『異郷の昭和文学——「満州」と近代日本』岩波書店、一九九〇年
- 姜尚中『オリエンタリズムの彼方へ』岩波書店、二〇〇四年
- 菅野賢治『フランス・ユダヤの歴史』上下 慶應義塾大学出版会、二〇一六年
- 北川勝彦・平田雅博編『帝国意識の解剖学』世界思想社、一九八七年
- 木村伊兵衛『木村伊兵衛のパリ——1954-1955』朝日新聞社、二〇〇六年
- 清岡卓行『清岡卓行大連小説全集』上下 日本文芸社、一九九二年
- 金文京『漢文と東アジア——訓読の文化圏』岩波書店、二〇一〇年
- 草光俊雄・北川勝彦『アフリカ世界の歴史と文化——ヨーロッパ世界との関わり』放送大学教育振興会、二〇一三年
- 工藤庸子『ヨーロッパ文明批判序説——植民地・共和国・オリエンタリズム』東京大学出版会、二〇〇三年
- 工藤庸子『宗教 vs 国家——フランスへ政教分離と市民の誕生』講談社現代新書、二〇〇七年
- 工藤庸子『異文化の交流と共存』放送大学教育振興会、二〇〇九年
- 工藤庸子『近代ヨーロッパ宗教文化論 姦通小説・ナポレオン法典・政教分離』東京大学出版会、二〇一三年
- 小島亮『ハンガリー事件と日本——一九五六年・思想的考察』中公新書、一九八七年
- 小島亮『ハンガリー知識史の風景』風媒社、二〇〇〇年
- 後藤乾一『東南アジアから見た近代日本』岩波書店、二〇一二年
- 駒込武『植民地帝国日本の文化統合』岩波書店、一九九六年
- 小林英夫『（満洲）の歴史』講談社、二〇〇八年
- 小林善彦『パリ日本館だより——フランス人ときあう法』中央公論社、一九七九年
- 近藤富枝『鹿鳴館貴婦人考』講談社、一九八〇年

- 酒井直樹『日本思想という問題——翻訳と主体』岩波書店、二〇一二年
- 酒井直樹『日本／映像／米国——共感の共同体と帝國的国民主義』青土社、二〇〇七年
- 酒井直樹『死産される日本語・日本人「日本」の歴史——地政的配置』講談社学術文庫、二〇一五年
- 坂野徹『帝国日本と人類学者 一八八四・一九五二年』勁草書房、二〇〇五年
- 佐々木隆『日本の近代14 メディアと権力』中央公論社、一九九九年
- 雀部幸隆『知と意味の位相——ウエーバー思想世界への序論』恒星社厚生閣、一九九三年
- 佐藤朔『フランス文学素描』青光社、一九四〇年
- 桜井哲夫『占領下パリの思想家たち——収容所と亡命の時代』平凡社新書、二〇〇七年
- 桜井哲夫『「戦間期」の思想家たち——レヴィ・ストロース・ブルトン・バタイユ』平凡社新書、二〇〇四年
- 島内裕子『美しい時間——シヨパン・ローランサン・吉田健一』書肆季節社、一九九〇年
- 島内裕子『日本文学の読み方』放送大学教育振興会、二〇〇九年
- 島内裕子『国文学研究法』放送大学教育振興会、二〇一五年
- 杉本淑彦『白色人種論とアラブ人——フランス植民地主義のまなざし』藤川隆男編『白人とは何か——ホワイトネス・スタディーズ入門』刀水書房、二〇〇五年、六〇—七〇頁
- 杉本淑彦『「人権の祖国」の植民地戦争』岩波講座世界歴史25『岩波書店、一九九七年、二二七—二四四頁
- 杉本淑彦『文明の帝国——ジュール・ヴェルヌとフランス植民地帝国主義文化』人文書院、一九九五年
- 鈴木晃仁・北中敦子編『精神医学の歴史と人類学』東京大学出版会、二〇一六年
- 高橋和夫『アラブとイスラエル』講談社現代新書、一九九二年
- 高橋和夫『アメリカとパレスチナ問題——アフガンの影で』角川書店、二〇〇一年
- 高橋和夫『アメリカのイラク戦略——中東情勢とクルド問題』角川書店、二〇〇三年
- 高橋和夫『イランとアメリカ——歴史から読む「愛と憎しみ」の構図』朝日新書、二〇一三年
- 高橋和夫『パレスチナ問題』放送大学教育振興会、二〇一六年
- 瀧澤敬一『パリ通信』岩波書店、一九三七年
- 竹内好『方法としてのアジア——わが戦前・戦中・戦後 1935—1976』創樹社、一九七八年
- 竹沢尚一郎『表象の植民地帝国——近代フランスと人文諸科学』世界思想社、二〇〇一年
- 竹沢泰子編『人種概念の普遍性を問う——西洋的パラダイムを超えて』人文書院、二〇〇五年
- 竹沢泰子編『人種の表象と社会的リアリティ』岩波書店、二〇〇九年
- 竹山昭子『戦争と放送——史料が語る戦時下情報操作とプロパガンダ』社会思想社、一九九四年
- 竹山昭子『ラジオの時代——ラジオは茶の間の主役だった』世界思想社、二〇〇二年
- 竹山昭子『史料が語る太平洋戦争下の放送』世界思想社、二〇〇五年
- 玉居子精宏『戦争小説家古山高麗雄』平凡社、二〇一五年
- 陳光興『脱帝国——方法としてのアジア』以文社、二〇一一年
- 塚瀬進『満州国「民族協和」の実像』吉川弘文館、一九九八年
- 坪井秀人『声の祝祭——日本近代詩と戦争』名古屋大学出版会、一九九七年
- 坪井秀人『戦争の記憶をさかのぼる』ちくま新書、二〇〇五年
- 坪井秀人『性が語る——20世紀日本文学の性と身体』名古屋大学出版会、二〇一二年
- 坪井秀人『越境者が読んだ近代日本文学——境界をつくるもの、こわすもの』新曜社、一九九九年
- 東田雅博『ジャポニズムと近代の日本』山川出版社、二〇一七年
- 富田仁『鹿鳴館——擬西洋化の世界』白水社、一九八四年
- 中井久夫『西欧精神医学背景史』みすず書房、一九九九年
- 永井均『フィリピンBC級戦犯裁判』講談社、二〇一三年
- 永野善子編『植民地近代性の国際比較——アジア・アフリカ・ラテンアメリカの歴史経験』お茶の水書房、二〇一三年
- 中村隆之『フランス語圏カリブ海文学小史——ネグリチュードからクレオール性まで』風響社、二〇一二年

- 中村桃子『〈性〉と日本語——ことばがつくる女と男』日本放送出版協会、二〇〇九年
- なだいなだ『ぼくだけのパリ』平凡社カラー新書、一九七六年
- 西川潤編『アフリカの独立』平凡社、一九七三年
- 西川長夫『日本の戦後小説—廃墟の光』岩波書店、一九九八年
- 西川長夫『国境の越え方—比較文化論序説』平凡社ライブラリー、二〇〇一年
- 西川長夫『〈新〉植民地論—グローバル化時代の植民地主義を問う』平凡社、二〇〇六年
- 西川長夫『パリ五月革命私論—転換点としての68年』平凡社新書、二〇一一年
- 西川長夫・原毅彦編『ラテンアメリカからの問いかけ—ラス・カサス・植民地支配からグローバルゼーションまで』人文書院、二〇〇〇年
- 西澤泰彦『凶説大連都市物語』河出書房新社、一九九九年
- 西澤泰彦『日本植民地建築論』名古屋大学出版会、二〇〇八年
- 西澤泰彦『日本の植民地建築』河出書房新社、二〇〇九年
- 西澤泰彦『植民地建築紀行』吉川弘文館、二〇一一年
- 西山俊彦『カトリック教会の戦争責任』サンパウロ、二〇〇〇年
- 西山俊彦『カトリック教会と奴隷貿易—現代資本主義の興隆に関連して』サンパウロ、二〇〇五年
- 日本郵船株式会社『七つの海で—世紀—日本郵船創業100周年記念 船舶写真集』日本郵船株式会社、一九八五年
- 日本郵船株式会社『航跡—日本郵船創業一二〇周年記念』日本郵船株式会社、二〇〇四年
- 日本郵船株式会社『日本郵船歴史博物館 常設展示解説書』日本郵船株式会社、二〇〇五年
- 芳賀徹・高階秀爾『一九五〇年代パリ 君と僕の青春』『大原美術館紀要』2 二〇〇五年、五—七三頁
- 萩谷由喜子『田中希代子—夜明けのピアニスト』シヨパン、二〇〇五年
- 橋谷弘『帝国日本と植民地都市』吉川弘文館、二〇〇四年
- 長谷川照子『愛しの貴婦人ヴィエトナム号』新風社、二〇〇三年
- 羽田美也子『ジャポニズム小説の世界—アメリカ編』彩流社、二〇〇五年
- 林瑞枝『フランスの異邦人—移民・難民・少数者の苦悩』中公新書、一九八四年
- 林博史『BC級戦犯裁判』岩波書店、二〇〇五年
- 原武史『昭和天皇』岩波新書、二〇〇八年
- 原武史『増補 可視化された帝国—近代日本の行幸啓』みずす書房、二〇一一年
- 原武史『昭和天皇実録』を讀む』岩波新書、二〇一五年
- 日高六郎・平井啓之他『サルトルとの対話』人文書院、一九六七年
- 日端康雄『都市計画の世界史』講談社、二〇〇八年
- 平川祐弘『ラフカディオ・ハーン—植民地化・キリスト教化・文明開化』ミネルヴァ書房、二〇〇四年
- 平川祐弘『日本語は生きのびるか—米中日の文化史的三角関係』河出書房新社、二〇一〇年
- 平川祐弘『和魂洋才の系譜—内と外からの明治日本』河出書房新社、一九七一年
- 平川祐弘『西洋の衝撃と日本』講談社学術文庫、一九八五年
- 平田祐博『竹山道雄と昭和の時代』藤原書店、二〇一三年
- 平田雅博『内なる帝国—在英黒人の歴史』晃洋書房、二〇〇〇年
- 平野千果子『フランス植民地主義の歴史—奴隷制廃止から植民地帝国の崩壊まで』人文書院、二〇〇二年
- 平野千果子『フランス植民地主義と歴史認識』岩波書店、二〇一四年
- 平野千果子『アフリカを活用する—フランス植民地からみた第一次世界大戦フランス植民地主義の歴史』人文書院、二〇一四年
- 藤田みどり『アフリカ「発見」—日本におけるアフリカ像の変遷』岩波書店、二〇〇五年
- 藤村信『西洋左翼のルネサンス—パリ通信』岩波書店、一九七七年
- 藤村信『パンと夢と三色旗と—フランス左翼の実験』岩波書店、一九八七年
- 藤村信『夜と霧の人間劇—バルビイ裁判のなかのフランス』岩波書店、一九八八年



- 藤村信『美し国フランス——現代史の裏面』岩波書店、一九九五年
- 藤原明雄他編『ディスクリールの帝国——明治三〇年代の文化研究』新曜社、二〇〇一年
- 藤永茂『『闇の奥』の奥——コンラッド・植民地主義・アフリカの重荷』三交社、二〇〇六年
- 福田和也『奇妙な廃墟——フランスにおける反近代主義の系譜とコラボラトゥール』筑摩学芸文庫、二〇〇二年
- 藤川隆男編『白人とは何か——ホワイトネス・スタディーズ入門』刀水書房、二〇〇五年
- 船田クラーセンさやか『モザンビーク解放闘争史——「統一」と「分裂」の起源を求めて』お茶の水書房、二〇〇七年
- 古沢常雄「一九世紀末—20世紀初頭における日本とベトナムとの『文明開化』の比較研究」『法政大学キャリアデザイン学部紀要』9、二〇一二年、一一—四五頁
- 眞嶋亜有『「肌色」の憂鬱——近代日本の人種体験』中央公論社、二〇一四年
- 松田京子『帝国の視線——博覧会と異文化表象』吉川弘文館、二〇〇三年
- 松浪信三郎『サルトル』勁草書房、一九九四年
- 松本佐保『パチカン近現代史』中公新書、二〇一三年
- 松沼美穂『帝国とプロパガンダ——ヴィシー政権期フランスと植民地』山川出版社、二〇〇七年
- 丸山昇『文化大革命に到る道——思想政策と知識人群像』岩波書店、二〇〇一年
- 見市雅俊・斉藤修・脇村孝平・飯島渉編『疾病・開発・帝国主義——アジアにおける病気と医療の歴史学』東京大学出版会、二〇〇一年
- 三浦信孝・粕谷啓介編『言語帝国主義とは何か』藤原書店、二〇〇〇年
- 三浦信孝編『普遍性か差異か——共和主義の臨界、フランス』藤原書店、二〇〇一年
- 三浦信孝・松本悠子編『グローバル化と文化の横断』中央大学出版部、二〇〇八年
- 三宅理一『パリのグランド・デザイン』中央公論社、二〇一〇年
- 宮下志朗・小野正嗣『世界文学への招待』放送大学教育振興会、二〇一六年
- 宮地一雄『アフリカ現代史V 北アフリカ』山川出版社、一九九四年
- 宮武公夫『海を渡ったアイヌ——先住民展示と二つの博覧会』岩波書店、二〇一〇年
- 森安朗『近代フランス民衆の〈個と共同性〉』平凡社、一九九四年
- 森川方達『増補普及版帝国ニッポン標語集——戦時国策スローガン・全記録』現代書館、一九九五年
- 矢野昌邦『加藤周一の思想・序説——雑種文化論・科学と文学・星董派論争』かもがわ出版、二〇〇五年
- 山路勝彦『近代日本の植民地博覧会』風響社、二〇〇八年
- 山路勝彦編著『日本の人類学——植民地主義、異文化研究、学術調査の歴史』関西学院大学出版会、二〇一一年
- 山口昌男『黒い大陸の栄光と悲惨』講談社、一九七七年
- 山田吉彦『モロッコ』岩波新書、一九五一年
- 柳澤桂子『認められぬ病——現代医療への根源的問い』中公文庫、一九九八年
- 柳澤桂子『患者の孤独——心の通う医師を求めて』草思社、二〇〇三年
- 柳澤桂子『いのちの日記——神の前に、神とともに、神なしに生きる』小学館、二〇〇五年
- 柳沢 通『日本人の植民地経験——大連日本人商工業者の歴史』青木書店、一九九九年
- 湯浅年子『パリ随想』弘文堂、一九五〇年
- 吉田元夫『ベトナムの世界史——中華世界から東南アジア世界へ』東京大学出版会、一九九五年
- 吉見俊哉『博覧会の政治学——まなざしの近代』中公新書、一九九二年
- 和田博文『海の上の世界地図——欧州航路紀行史』岩波書店、二〇一六年
- 渡辺一民『フランスの誘惑——近代日本精神史試論』岩波書店、一九九五年
- 渡邊一民『日本の知識人とフランス——戦前・戦中・戦後』石崎晴己・立花英裕編『21世紀の知識人』藤原書店、二〇〇九年、一九五—二〇〇頁
- 渡辺和行『ナチ占領下のフランス』講談社、一九九四年
- 渡辺和行『ホロコーストのフランス』人文書院、一九九八年

渡辺和行『エトランジェのフランス史——国民・移民・外国人』山川出版社、二〇〇三年  
渡辺和行『フランス人とスペイン内戦——不干渉と宥和』ミネルヴァ書房、二〇〇三年  
渡辺和行『フランス人民戦線 反ファシズム・反恐慌・文化革命』人文書院、二〇一三年  
渡邊守章他『表象文化研究——文化と芸術表象』放送大学教育振興会、二〇〇二年  
渡辺保他『表象文化研究』放送大学教育振興会、二〇〇六年  
渡邊啓貴『フランス現代史——英雄の時代から保革共存へ』中央公論社、一九九八年  
『新潮日本文学アルバム69 吉田健一』新潮社、一九九五年

### 翻訳文献(著者名五〇音順)

アッシュクロフト、ビル他『ポストコロニアルの文学』木村茂雄訳、青土社、一九九八年  
アーリ、ジョン『観光のまなざし——現代社会におけるレジャーと旅行』加太宏邦訳、法政大学出版局一九九五年  
アーリ、ジョン『場所を消費する』吉原直樹・大澤善信監訳、法政大学出版局、二〇〇三年  
アンリ、ミシェル『ヴィシー政権』長谷川公昭訳、白水社、一九七九年  
イ・ヨンスク『「国語」という思想——近代日本の言語認識』岩波書店、二〇一二年  
ヴィヴィオルカ、ミシェル『レイシズムの変貌』森千香子訳、明石書房、二〇〇七年  
ウイリアムズ、エリック『コロンプスからカストロまで——カリブ海域史 1492—1969』I・II 川北稔訳、岩波書店、一九七八年  
ウイアムズ、エリック『資本主義と奴隷制——経済史から見た黒人奴隷制の発生と崩壊』川北稔監訳、明石書房、二〇〇四年  
ウエーバー・マックス『ウエーバー社会学論集』濱島朗・徳永恂訳、青木書店、一九七一年  
ウエーバー・マックス『宗教社会学論選』大塚久雄・生松敬三訳、みすず書房、一九七二年  
ウエーバー・マックス『職業としての政治／職業としての学問』中山元訳、日経BP社、二〇〇九年  
ウオーラーステイン、イマニュエル『近代世界システム——農業資本主義と「ヨーロッパ世界経済」の成立』I・II 川北稔訳、岩波書店、一九八一年  
ウオーラーステイン、イマニュエル『新版・史的システムとしての資本主義』川北稔訳、岩波書店、一九九七年  
ウオーラーステイン、イマニュエル『人種・国民・階級——揺らぐアイデンティティ』若森章孝他訳、大村書店、一九九七年  
ウオーリン・リチャード『1968 パリに吹いた「東風」——フランス知識人と文化大革命』福岡愛子訳、岩波書店、二〇一四年  
ヴォルフガング、モムゼン編『帝国主義と国民統合』川鍋正敏・酒井昌美訳、未来社、二〇〇二年  
オルポート、ゴードン『偏見の心理』原谷達夫他訳、培風館、一九六一年  
ガリキオ、マーク『アメリカ黒人から見た日本、中国——ブラック・インターナショナルリズムの盛衰』伊藤裕子訳、岩波書店、二〇一三年  
カルベ、ルイ・ジャン『言語戦争と言語政策』砂野幸稔他訳、三才社、二〇一〇年  
カルベ、ルイ・ジャン『言語学と植民地主義——ことば喰い小論』砂野幸稔訳、三才社、二〇〇六年  
カルベ、ルイ・ジャン『言語政策とは何か』西山教行訳、白水社、二〇〇〇年  
キャナダイン、デヴィッド『虚飾の帝国』平田雅博・細川道久訳、日本経済評論社、二〇〇四年  
ギルバート・マーティン『イスラエル全史』上下 千本健一郎訳、朝日新聞社、二〇〇八、二〇〇九年  
キーン、ドナルド『日本人の戦争——作家の日記を読む』角地幸男訳、新潮社、二〇〇九年  
クリエジェル、アニー『ユーロコミュニズム——もう一つの共産主義か』野地孝一訳、岩波新書、一九七八年  
クリステヴァ、ジュリア『外国人——我々の内なるもの』池田和子訳、法政大学出版局、一九九〇年  
クリーマン、フェイ・阮『大日本帝国のクレオール——植民地期台湾の日本語文学』林ゆう子訳、慶應義塾大学出版会、二〇〇七年

グールド、ステイヴン『増補改訂版人間の測りまちがい——差別の科学史』鈴木善次・森脇靖子訳、河出書房新社、一九九八年  
 クルトワ、ステファヌ他『共産主義黒書（ソ連編）』外川継男訳、ちくま学芸文庫、二〇一六年  
 クルトワ、ステファヌ他『共産主義黒書（アジア編）』高橋武智訳、ちくま学芸文庫、二〇一六年  
 コンラッド、ジョセフ『闇の奥』藤永茂訳、三交社、二〇〇六年  
 サイード、エドワード『始まりの記憶』山形和美・小林昌夫訳、法政大学出版社、一九九二年  
 サイード、エドワード『世界・テキスト・批評家』山形和美訳、法政大学出版社、一九九五年  
 サルトル、ジャン＝ポール『シチュエーションⅢ』鈴木道彦他訳、人文書院、一九六四年  
 シトレ・エンダニンギ『アフリカの心』寺本光朗訳、岩波新書、一九六一年  
 シヤリアーティ、アリー『イスラーム再構築の思想——新たな社会へのまなざし』櫻井秀子訳、大村書店、一九九七年  
 ジャン、ミュラシオル『フランス・レジスタンス史』福本直行訳、白水社、二〇〇八年  
 シャンボン、アルベール『仏レジスタンスの真実——神話・伝説・タブーの終わり』福本啓二郎訳、河出書房新社、一九九七年  
 ショインカ、ウオレ『神話・文学・アフリカ世界』松田忠徳訳、彩流社、一九九二年  
 ショーター、エドワード『精神医学の歴史——隔離の時代から薬物治療の時代まで』木村定訳、青土社、一九九九年  
 ショダンソン、ロベール『クレオール語』粕谷啓介・田中克彦訳、白水社、二〇〇〇年  
 ジラール、ルネ『暴力と聖なるもの』古田幸男訳、法政大学出版社、一九八二年  
 シンガー、ピーター『動物の解放（改訂版）』戸田清訳、人文書院、二〇〇一年  
 スキャブランド、アール『犬の帝国——幕末ニッポンから現代まで』本橋哲也訳、岩波書店、二〇〇九年  
 ストラー、アン・ローラ『肉体の知識と帝国の権力——人種と植民地支配における親密なもの』永渕康之他訳、以文社、二〇一〇年  
 ストラ、パンジャマン『アルジェリアの歴史——フランス植民地支配・独立戦争・脱植民地化』小山田紀子・渡辺司訳、明石書店、二〇一一年  
 スピヴァック、ガヤトリ『文化としての他者』鈴木聡他訳、紀伊国屋書店、一九九〇年  
 スピヴァック、ガヤトリ『サバルタンは語るか？』上村忠男訳、みすず書房、一九九八年  
 セゼール、エメ『帰郷ノート／植民地主義論』砂野幸稔訳、平凡社、二〇〇四年  
 セゼール、エメ『ニグロとして生きる』立花英裕・中村隆之他訳、法政大学出版社、二〇一一年  
 ダビデー、デヴィッド『大英帝国の階級・人種・性』松村高夫他訳、同文社出版、一九九二年  
 ダワー、ジョン『増補版・敗北を抱きしめて』上下 三浦洋一・高杉忠明訳、岩波書店、二〇〇四年  
 テイオン、ジェルメーヌ『ジェルメーヌ・ティヨン——レジスタンス・強制収容所・アルジェリア戦争を生き延び』小野潮訳、法政大学出版社、二〇一二年  
 デフラーヌ、ジャン『対独協力の歴史』大久保敏彦・松本真一郎訳、白水社、一九九〇年  
 デフラーヌ、ジャン『ドイツ占領下のフランス』長谷川公昭訳、白水社、一九八八年  
 デュラス、マルグリット『太平洋の防波堤』田中倫郎訳、河出書房新社、一九九二年  
 デュラス、マルグリット『愛人』清水徹訳、河出書房新社、一九九二年  
 トドロフ、ツヴェタン『他者の記号学——アメリカ大陸の征服』及川馥他訳、法政大学出版社、一九八六年  
 ヌスバウム、マーサ他『国を愛すること——愛国主義の限界をめぐる論争』辰巳伸知訳、人文書院、二〇〇〇年  
 ヌスバウム、マーサ『正義のフロンティア——障害者・外国人・動物という境界を越えて』神島裕子訳、法政大学出版社、二〇一二年  
 ヌスバウム、マーサ『経済成長がすべてか？——デモクラシーが人文学を必要とする理由』小沢自然、小野正嗣訳、岩波書店、二〇一三年  
 ヌスバウム、マーサ他編『動物の権利』安部啓介・山本龍彦・大林啓吾訳、尚学社、二〇一三年  
 バイナム、ウイリアム『医学の歴史』鈴木晃仁・鈴木実佳訳、丸善、二〇一五年  
 ハージ、ガッサン『ホワイト・ネイション——ネオナショナリズム批判』保莉実他訳、平凡社、二〇〇三年

- ハーバーマス、ユルゲン』近代 未完のプロジェクト』岩波現代文庫、二〇〇〇年  
 バラグラフ、ジェフリ『現代史序説』中村英勝・中村妙子訳、岩波書店、一九七一年  
 バリバール、エティエンヌ』人種・国民・階級』若森章孝他訳、大村書店、一九九七年  
 バンセル、ニコラス他編『植民地共和国フランス』平野千果子・菊池恵介訳、岩波書店、二〇一一年  
 ビーティ、マーク』植民地——20世紀日本帝国50年の興亡』浅田豊子訳、慈学社出版、二〇一二年  
 ヒューム、ピエール』征服の修辞学』岩尾龍太郎他訳、法政大学出版局、一九九五年  
 フーコー、ミシェル』臨床医学の誕生』神谷美恵子訳、みすず書房、二〇一一年  
 ブラウン、ルバート』偏見の社会心理学』樋口捷人他訳、北大路書房、一九九九年  
 ブルデュ、ピエール』デスタルクシオン』1・2 石井洋二郎訳、藤原書店、一九九〇年  
 ブルマ、イアン／マルガリート、ブルマ』反西洋思想』新潮新書、二〇〇六年  
 ブレクソン、カルティエ』アンリ・カルティエ・ブレクソン写真集成』岩波書店、二〇〇四年  
 フレドリクソン、ジョージ』人種主義の歴史』李孝徳訳、みすず書房、二〇〇九年  
 ベイトソン、グレゴリー』精神の生態学〔改訂第二版〕』佐藤良明訳、新思索社、二〇〇〇年  
 ペルヴィエ、ギー』アルジェリア戦争——フランスの植民地支配と民族の解放』渡邊祥子訳、白水社、二〇一二年  
 ホブズボウム、エリック／レンジャー、テレンス』創られた伝統』前川啓治他訳、紀伊國屋書店、一九九二年  
 ポミアン、クシトフ』ヨーロッパとは何か——分裂と統合の1500年』平凡社、一九九三年  
 ホルクハイマー、マックス／アドルノ、テオドール』啓蒙の弁証法——哲学的断章』徳永恂訳、岩波書店、一九九〇年  
 ボーヴォワール、シモーヌ・ド』或る戦後』上下 朝吹登水子、二宮フサ訳、紀伊國屋書店、一九六五年  
 マルフエイト、アンヌ』人間観の歴史』思索社、一九八六年  
 メンミ、アルベール』人種差別』菊池昌実他訳、法政大学出版局、一九九六年  
 モリソン、トニ』白さと想像力——アメリカ文学の黒人像』大社淑子訳、朝日新聞社、一九九四年  
 モルトン、パトリシア』パリ植民地博覧会——オリエンタリズムの欲望と表象』長谷川章訳、ブリュッケ、二〇〇二年  
 ヤコノ、グザヴィエ』フランス植民地帝国の歴史』平野千果子訳、白水社、一九九八年  
 ラブキン、ヤコヴ』トラーの名において——シオニズムに対するユダヤ教の抵抗の歴史』菅野賢治訳、平凡社、二〇一〇年  
 ラブキン、ヤコヴ』イスラエルとは何か』菅野賢治訳、平凡社新書、二〇一二年  
 ルジャンドル、ピエール』西洋が西洋について見ないでいること——法・言語・イメージ』森元庸介訳、以文社、二〇〇四年  
 レイ・チョウ』プリミティブへの情熱——中国・女性・映画』本橋哲也・吉原ゆかり訳、青土社、一九九九年  
 レヴィ、ベルナル・アンリ』サルトルの世紀』石崎晴己監訳、藤原書店、二〇〇五年  
 ロワ、ジュール』アルジェリア戦争——私は証言する』鈴木道彦訳、岩波新書、一九六一年
- 外国語文献（著者名アルファベット順）**
- Anderson, Benedict. *Imagined Communities* (rev. ed. London, 2006) 〔『定本想像の共同体』白石隆・白石さや訳、書肆工房早川、二〇〇七年〕
- Arendt, Hannah. *Origins of Totalitarianism* (New York, 1973) 〔『全体主義の起源』I II III 大久保和郎・大島通義・大島かおり訳、みすず書房、一九七二—七四年〕
- Bhabha, Homi. *The Location of Culture* (New York, 2004) 〔『文化の場所——ポストコロニアリズムの位相』本橋哲也・正木恒夫・外岡尚美・阪元留美訳、法政大学出版局、二〇〇五年〕
- Blanchard, Pascal; Bancel, Nicolas; Boëtsch, Gilles (ed.). *Human Zoos: Scien and Spectacle in the Age of Colonial Empires* (rs., Tessa Brideman, Liverpool, 2008)
- Bourdieu, Pierre. *Picturing Algeria* (ed. Franz Schultheis, New York, 2012)

- Cherki, Alice. *Frantz Fanon: A portrait* (trs., Nadia Benahid, Ithaca & London, 2006)
- Dower, John. *Ways of Forgetting, Ways of remembering: Japan in The Modern World* (New York, 2012). [「忘却の仕方、記憶の仕方」外岡秀俊訳、岩波書店、二〇一三年]
- Dower, John. *War without Mercy: Pace & Power in the Pacific War* (New York, 1986) [『人種偏見——太平洋戦争における日米摩擦の底流』斎藤元訳、TBSブリタニカ、一九八七年]
- Fanon, Frantz. *Peau Noire, Masques Blancs* (Paris, 1952) [『黒い皮膚・白い仮面』海老坂武・加藤晴久訳、みすず書房、一九七〇年]
- Fanon, Frantz. *L'an V de la révolution algérienne* (Paris, 2011) [『革命の社会学』宮ヶ谷徳三・花輪莞爾・海老坂武訳、みすず書房、二〇〇八年]
- Fanon, Frantz. *Les damnés de la terre* (Paris, 2002) [『地に呪われた者』鈴木道彦・浦野衣子訳、みすず書房、一九九六年]
- Fanon, Frantz. *Pour la révolution africaine* (Paris, 2006) [『アフリカ革命に向けて』北山晴一訳、みすず書房、二〇〇八年]
- Gendzier, Irene. *Frantz Fanon: A Critical Study* (New York, 1973)
- Geismar, Peter. *Fanon* (New York, 1971)
- Gibson, Nigel (ed.), *Living Fanon: Global Perspectives* (New York, 2011)
- Gibson, Nigel (ed.), *Rethinking Fanon: The Continuing Dialogue* (New York, 1999)
- Gibson, Nigel. *Fanon: The Postcolonial Imagination* (Oxford, 2003)
- Hansen, Emmanuel. *Frantz Fanon: Social and Political Thought* (New York, 1977)
- MacIntock, Anne. *Imperial Leather: Race, Gender and Sexuality in the Colonial Contest* (New York, 1995)
- MacIntock, Anne. *Double Crossings: Madness, Sexuality and Imperialism* (Vancouver, 2001)
- Macey, David. *Frantz Fanon: A Biography* (2nd ed. London, 2012)
- Peabody, Sue ; Tovall, Tier (ed.). *The Color of Liberty: Histories of Race in France* (2nd ed. Durham, 2006)
- Prashad, Vijay. *The Darker Nations: A People's History of the Third World* (New York, 2007) [『褐色の世界史——第三世界とはなにか』栗飯原文子訳、水声社、二〇一三年]
- Read, Alan. (ed.), *The Fact of Blackness Frantz Fanon and Visual Representation* (London, 1996)
- Said, Edward. *Orientalism* (New York, 1979) [『オリエンタリズム』今沢紀子訳、平凡社、一九八六年]
- Said, Edward. *Culture and Imperialism* (New York, 1994). [『文化と帝国主義』1・2、大川洋一訳、みすず書房、一九九八、二〇〇一年]

## オンライン情報

- 遠藤周作学会 <http://endo-shusaku.com/>
- 遠藤周作文学館 <http://www.city.nagasaki.lg.jp/endo/>
- 周作クラブ <http://www.shusakuclub.com/>
- 国際交流基金「日本文学翻訳書誌検索」 [http://www.jpf.go.jp/JF\\_Contents/InformationSearchService](http://www.jpf.go.jp/JF_Contents/InformationSearchService)

## 初出一覧

### 緒論

#### 第三章 問題の所在

- 第一節 「遠藤周作研究の新方向——クリストファー・L・ヒル論文を巡って」『キリスト教文学研究』第  
三四号、二〇一七年五月

### 本論

#### 第一章 背景と前史 日本人のフランス留学——戦争・性差・人種・階級

- 第二節 「須賀敦子のパリ——一九五〇年代のフランス留学」『三田文学』第九三卷一一六号、二〇一四年  
二月

#### 第三章 アフリカー——黒人の表象

- 第一節 「遠藤周作とアフリカー——『アフリカの體臭』『アデンまで』を中心に」『二松學舎大学人文論叢』  
第九四輯、二〇一五年三月
- 第二節 「遠藤周作文学における黒人表象の変容——「コウリツジ館」から「黒い旧友」まで」『キリスト  
教と文化』一五号、二〇一七年三月

#### 第四章 ヨーロッパ——白人の表象

- 第一節 「遠藤周作『月光のドミナ』論」『キリスト教文学研究』第三三三号、二〇一六年五月

#### 第八章 ポストコロニアル時代の植民地主義

- 第一節 「遠藤周作とパレスチナー——『死海のほとり』新考」『キリスト教と文化』第一四号、二〇一六年  
三月

#### 第九章 キリスト教的階層秩序と近代西洋植民地主義——神・天使・人間・動物

- 第二節 「遠藤周作『男と猿と』論」『キリスト教と文化』第一二二号、二〇一四年三月
- 第三節 「遠藤周作『彼の生きかた』論」『キリスト教と文化』第一三三号、二〇一五年三月
- 第四節 「新約聖書学の衝撃」柘植光彦編『遠藤周作 挑発する作家』至文堂、二〇〇八年一〇月

(註) 原題と掲載誌を掲げた。ここに記載された以外は新稿である。なお、収録に際して必要な修正を加えた。

## 謝 辞

青山昌文先生のご指導の下で、私は修士論文「遠藤周作とフランツ・ファノンの比較文化論的考察——フランス本国における有色人差別体験を中心に」を書いた。博士後期課程でも青山先生から継続してご指導を頂けたことは幸運であった。迷うことなく論文執筆に没頭することができたのも、青山先生が、私という人間を良く理解して下さり、適切な時期に的確な助言を下さることを承知していたからである。本学は複数指導体制なので、副指導教員の島内裕子先生からは、国文学研究の立場から細やかなご助言をいただくことができたし、高橋和夫先生からはゼミの参加を許され、国際政治分野での闊達な議論から多くを学ぶことができた。

三年目からは、国際日本文化研究センターの特別共同利用研究員として、坪井秀人教授からご指導を頂いた。また、所属する関東学院大学キリスト教と文化研究所「日本の精神風土とキリスト教分科会」の先生方は、私の拙い発表に、いつも建設的な批判を下さった。

公開で行われた口頭試問では、主査の青山昌文教授、副査の島内裕子教授に加えて、佐藤良明教授と小野正嗣立教大教授が副査をして下さった。二時間の厳格な質疑は、学術の世界の厳しさを骨の髄まで思い知る機会となった。審査に当たられた先生方と、参加して下さった本学関係者及び一般の方々に、この場を借りて御礼を申しあげる。

本研究が成るに際しては、上記の先生方のご指導に加え、畏敬する先学諸氏の著書や論文から多大の学恩を被った。先行研究の上に立ち、従来の研究の欠を補い、若干の創見を示し得たとすれば、著者としての喜びこれに過ぎたるはない。また、かつて在籍した二つの大学でそれぞれご指導下さった、剣持武彦教授（故人）と谷寿美教授、そして大学という制度の外でお世話になった饗庭孝男教授（故人）のお名前も、ここに記して感謝の意を表したい。

一般財団法人生涯学習開発財団からは、博士号取得支援事業の助成を受けた。松田妙子理事長、選考委員長の張競明治大教授から頂戴した励ましは忘れられない。

各種文献調査に当たっては、本学附属図書館をはじめ、国立国会図書館、慶應義塾大学メディアセンター、和光大学附属梅根記念図書・情報館、横浜市立中央図書館、国文学研究資料館、日本近代文学館のお世話になった。記して御礼を申し述べる。

真理を愛し、言語を愛する人文学者として生きることが、改めてここで誓いたい。

平成二九年盛夏 横浜にて

神谷光信